千葉市東寺山戸張作遺跡

昭和52年

財団法人　千葉県文化財センター

千葉市東寺山戸張作遺跡

昭和52年

財団法人　千葉県文化財センター

戸張作（第三次調査）検出　石製模造品

第５号住居址検出　赤色顔料塗布の土師器

序　　文

首都圏としての本県の発展はめざましいものがある一方、全国屈指の埋蔵文化財保有県として、地域開発と文化財保護との調和が緊急かつ重要な課題となっております。

近年発掘調査による記録保存が多くなされておりますが、埋蔵文化財の保護・保存措置にあたっては、各行政機関と連携を保ち、事業者の理解を求め、調整のための十分な協議を実施しております。止むを得ず発掘調査を行うにあたっては、現地調査・遺物等の整理・報告書作成までの作業を一貫して行うよう指導しております。

御承知のように埋蔵文化財の発掘調査においては記録保存という形で調査を実施した場合、先人が残した貴重な遺跡・遺物は二度と元の姿に復原することは困難なことであります。従って、その記録保存はより周到な準備と慎重な手順が必要となります。記録保存の成果品である調査報告書は記述をとおして、文化財に生命を与え、その背後にひそむ生きた歴史を語らせるものでなければなりません。

今回、こゝに上梓された「東寺山戸張作遺跡調査報告書」は、昭和49年に、県教育委員会が派遣した専門職員を中心として発足した財団法人千葉県文化財センターのはじめての調査報告書であります。この調査は古墳及び塚の調査（第一次調査）、その古墳下の住居址の調査（第二次調査）、更に周辺の新発見された住居址の調査（第三次調査）、と同一遺跡に対して極めて徹底した調査を実施いたしました。その成果は必ずや記録保存に値するものであり、学術・教育資料は言うに及ばず、文化財保護資料としても広く活用されるものと信じております。

本遺跡の調査・報告書の刊行にあたり御協力をいただいた建設省、日本道路公団並びに地元関係者、また旱暑・酷寒をいとわず調査活動に専念された調査関係者各位に厚くお礼申し上げます。

昭和52年3月31日

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　今　井　　正

発刊のことば

本書に収録された遺跡は、昭和49年11月、当財団設立初の発掘調査を実施した千葉市・東寺山第一古墳群（東寺山戸張作遺跡第一次調査）と、古墳群調査中に古墳下から発見された遺構に基づき第二次調査として実施した東寺山古墳下遺跡（東寺山戸張作遺跡第二次調査）及び、該当区域に新発見された住居跡等（東寺山戸張作遺跡第三次調査）であります。

本遺跡の調査は、首都東京都から本県京葉工業地帯に通ずる幹線である京葉道路（第四期）及び一般国道16号線の延長工事区域に所在する遺跡で、昭和49年12月16日及び昭和50年４月１日に建設省関東地方建設局及び日本道路公団東京第一建設局と財団法人千葉県文化財センターが契約を締結し実施したものであります。

報告書の発刊については、委託者の了解を得て、第一次～第三次調査の終了後、一括収録することとし、本調査着手以来２年３ヶ月を経過いたしましたが、ここに調査報告書の上梓を見ることができ、関係者各位に心から御礼申し上げる次第であります。

今回の調査、特に古墳群の調査に当っては、文化財保護の立場はもとより、人の心情からも、先人が埋葬された聖域であり、調査後破壊されることについては誠に忍び得ないものがあります。ここに改めて先人の冥福を祈るものであります。それがためにも発掘調査時はもとより、整理作業においても、当財団において、為し得る限りの精査をするとともに細心の配慮のもとにまとめたものであります。

その他の遺跡につきましても、終始千葉県教育委員会の御指導を得ながら調査の万全を期した次第であります。

ついては、本書が学術、研究の資料として広く活用されると共に、文化財保護思想の涵養に役立つことを願うものであります。

最後に、本書の刊行に当り、終始御協力を賜わりました建設省及び日本道路公団関係者各位ならびに関係諸学の方々に対して厚く御礼を申し上げると共に、発掘調査以来参加をいただきました調査補助員及び地元有志の方々に対しましても、深く謝意を表する次第であります。

昭和52年３月31日

財団法人千葉県文化財センター
常務理事　植松　震

目　　次

序文……理事長　今井　正
発刊のことば……常務理事　植松　震

第1次・2次調査

第一章　調査諸説
第一節　調査に至る経偉……1
第二節　第一次調査の経過……3
第三節　第二次調査の経過……4
第四節　遺跡の環境
位置及び地理的環境……7
歴史的環境……10
第二章　遺構及び遺物
第一節　塚の概観と調査方法……12
第二節　発掘調査した塚7基の遺構及び遺物……12
(1)　第1号塚……12
(2)　第2号塚……15
(3)　第3号塚……15
(4)　第4号塚……17
(5)　第5号塚……17
(6)　第6号塚……20
(7)　第7号塚……22
第三節　古墳の概観と調査方法……25
第四節　古墳7基の遺構及び遺物……25
(1)　第8号墳……25
(2)　第9号墳……36
(3)　第10号墳……48
(4)　第11号墳……55
(5)　第12号墳……67
(6)　第13号墳……72

(7)　第14号墳…… 82
第五節　第二次調査の概観と調査方法…… 97
第六節　住居址遺構及び遺物…… 98
(1)　００１号住居址…… 98
(2)　００１号住居址遺物…… 104
第七節　土壙及び土壙墓…… 112
(1)　第１号土壙…… 112
(2)　第２号土壙…… 112
(3)　第３号土壙…… 116
(4)　第４号土壙…… 120
(5)　第５号土壙…… 120
(6)　第６号土壙…… 125
(7)　第７号土壙…… 127
(8)　第８号土壙…… 129
(9)　第９号土壙…… 131
第八節　その他の遺構…… 133
(1)　溝状遺構Ａ…… 133
(2)　溝状遺構Ｂ…… 139
(3)　溝状遺構Ｃ…… 152
(4)　溝状遺構Ｄ…… 154
(5)　溝状遺構Ｅ…… 157
第九節　グリッド検出遺構及び遺物…… 158
(1)　第10・11号遺構…… 158
(2)　第12号遺構…… 162
(3)　第13号遺構…… 166
(4)　10・20―Ｌ・Ｍ・Ｎグリッドにおける遺物出土状況…… 166
(5)　11号墳及びその周辺グリッド土器出土状況…… 173
(6)　グリッド出土石器類 …… 184
第三章　小　結
第一節　塚について…… 186

第二節　古墳について…… 187
第三節　住居址及びグリッド出土遺物について…… 193
第四節　土壙について…… 198
第五節　溝状遺構…… 200

第3次調査

第一章　調査諸説
第一節　遺跡の環境…… 205
第二節　発掘調査の概要…… 211
第二章　遺構及び遺物
第一節　第1号塚（第1次調査第7号塚）…… 216
第二節　住居址遺構及び遺物…… 221
(1)　第1号住居址…… 221
(2)　第2号住居址…… 224
(3)　第3号住居址…… 224
(4)　第4号住居址…… 229
(5)　第5号住居址…… 247
(6)　第6号住居址…… 247
(7)　第7号住居址…… 253
(8)　第8号住居址…… 253
(9)　第10号住居址…… 255
第三節　グリット検出遺物…… 264
(1)　先土器時代の遺物…… 264
(2)　縄文・弥生時代の遺構及び遺物…… 269
(3)　東寺山戸張作(海老)出土遺物一覧表…… 274
第三章　小　　結
第一節　出土遺物について…… 304
第二節　古墳時代における石製模造品の石質について…… 308
第三節　遺物の分析結果…… 312

挿　図　目　次

第１次・２次調査

第 1 図　東寺山・戸張作遺跡群とその周辺遺跡
第 2 図　東寺山・戸張作遺跡第２次調査全測図
第 3 図　1号塚平面・土層断面図
第 4 図　2号塚平面・土層断面図
策 5 図　3号塚出土土器・古銭拓影図
第 6 図　3号塚平面・土層断面図
第 7 図　4号塚出土土器拓影図
第 8 図　4号塚平面・土層断面図
第 9 図　5号塚平面・土層断面図
第 10 図　5号塚出土土器拓影図
第 11 図　6号塚平面・断面図
第 12 図　7号塚墳丘測量図
第 13 図　7号塚土層断面図
第 14 図　8号墳墳丘測量図
第 15 図　8号墳周溝平面図
第 16 図　8号墳周溝土層断面図
第 17 図　8号墳周溝土層断面図
第 18 図　8号墳主体部平面・断面図遺物出土状況図
第 19 図　8号墳主体部外坑平面・断面図
第 20 図　8号墳主体部出土遺物実測図Ⅰ
第 21 図　8号墳主体部出土遺物実測図Ⅱ
第 22 図　8号墳出土土器拓影図
第 23 図　8号墳墳丘内軽石
第 24 図　9号墳墳丘測量図
第 25 図　9号墳周溝平面図
第 26 図　9号墳土層断面図
第 27 図　9号墳周溝土層断面図
第 28 図　9号墳主体部平面・断面図
第 29 図　9号墳主体部出土遺物実測図
第 30 図　9号墳出土遺物実測図（周溝内）
第 31 図　9号墳出土土器拓影図Ⅰ
第 32 図　9号墳出土土器拓影図Ⅱ
第 33 図　10号墳墳丘測量図
第 34 図　10号墳及び溝状遺構A・B平面・断面図
第 35 図　10号墳土層断面図(Ⅰ)
第 36 図　10号墳土層断面図(Ⅱ)
第 37 図　10号墳出土土器拓影図
第 38 図　11号墳墳丘測量図
第 39 図　11号墳周溝平面図
第 40 図　11号墳土層断面図
第 41 図　11号墳周溝土層断面図
第 42 図　11号墳埋葬施設平面・断面図
第 43 図　11号墳埋葬施設出土遺物実測図(Ⅰ)
第 44 図　11号墳埋葬施設出土遺物実測図(Ⅱ)
第 45 図　11号墳周溝内出土土器実測図
第 46 図　11号墳出土土器拓影図
第 47 図　12号墳墳丘測量図

第 48 図　12号墳平面・断面図
第 49 図　12号墳土層断面図
第 50 図　12号墳出土遺物実測図
出土土器拓影図
第 51 図　13号墳墳丘測量図
第 52 図　13号墳周溝実測図
第 53 図　13号墳土層断面図
第 54 図　13号墳周溝土層断面図)
第 55 図　13号墳周溝土層断面図(前方部)
第 56 図　13号墳埋葬施設平面・断面図
第 57 図　13号墳主体部出土遺物実測図
第 58 図　13号墳主体部出土遺物
管玉臼玉実測図
第 59 図　13号墳周溝内出土土器実測図・
出土土器拓影図
第 60 図　14号墳墳丘測量図
第 61 図　14号墳周溝実測図
第 62 図　14号墳土層断面図
第 63 図　14号墳墳丘土層断面図
第 64 図　14号墳埋葬施設平面・断面図・
遺物出土状況
第 65 図　14号墳埋葬施設平面・断面図
第 66 図　14号墳埋葬施設出土遺物
実測図Ⅰ
第 67 図　14号墳主体部出土遺物
実測図Ⅱ
第 68 図　14号墳主体部出土遺物
実測図Ⅲ
第 69 図　14号墳出土遺物実測図
第 70 図　14号墳出土土器拓影図(I)
封土中及び旧表土下
第 71 図　14号墳出土遺物実測図
第 72 図　14号墳出土土器拓影図(II)
封土中及び旧表土下
第 73 図　001号住居址平面・断面図
第 74 図　001号住居址カマド
平面・断面図
第 75 図　001号住居址遺物平面図
第 76 図　001号住居址出土土器
実測図(I)
第 77 図　001号住居址出土土器
実測図(II)
第 78 図　第 1 号土坑平面・断面図
第 79 図　第 2 号土坑土層断面・
木炭出土状況
第 80 図　第 2 号土坑平面・断面図
第 81 図　第 3 号土坑平面・断面図
第 82 図　第 4 号土坑平面・断面図
第 83 図　第 4 号土坑遺物出土状況及び
出土土器実測図
第 84 図　第 5 号土坑平面・断面図
第 85 図　第 5 号土坑遺物出土状況
第 86 図　第 5 号土坑出土土器実測図
第 87 図　第 5 号土坑出土遺物（石）
第 88 図　第 6 号土坑平面・断面図
第 89 図　第 7 号土坑平面・断面図
第 90 図　第 7 号土坑土層断面図
第 91 図　第 8 号土坑平面・断面図
第 92 図　有舌尖頭器（10M06グリッド）
第 93 図　第 9 号土坑平面・断面図
第 94 図　溝状遺構Ａ平面・断面図
（70―Ｃグリッド）
第 95 図　溝状遺構Ａ平面・断面図
（60―Ｃグリッド）

第 96 図　溝状遺構Ａ平面・断面図
（50—Ｃグリッド）
第 97 図　溝状遺構Ａ平面・断面図
（10･20—Ｃグリッド）
第 98 図　溝状遺構Ａ平面・断面図
（20･30—Ｃグリッド）
第 99 図　溝状遺構Ａ土層断面図
（20･30—Ｃグリッド）
第 100 図　８号墳南西側拡張部８号墳周溝
溝状遺構平面･断面図
第 101 図　８号墳南西側拡張部土層断面図
第 102 図　８号墳南西側拡張部
出土土器実測図
第 103 図　溝状遺構Ｂ平面・断面図
（Ｅグリッド）
第 104 図　溝状遺構Ｂ平面・断面図
（Ｄグリッド）
第 105 図　溝状遺構Ｂ平面・断面図
（30—Ｂグリッド）
第 106 図　溝状遺構Ｂ平面・断面図
（20･30—Ａ・Ｊグリッド）
第 107 図　溝状遺構Ｂ平面・断面図
（20･30—Ｊグリッド）
第 108 図　溝状遺構Ｂ平面・断面図
（20･30—Ｋグリッド）
第 109 図　溝状遺構Ｂ平面・断面図
（20･30—Ｌグリッド）
第 110 図　溝状遺構Ｂ平面・断面図
（20･30—Ｍグリッド）
第 111 図　溝状遺構Ｃ平面･断面図
第 112 図　溝状遺構Ｄ平面・断面図
（60･70—Ｆグリッド）
第 113 図　溝状遺構Ｄ平面・断面図
（50—Ｆグリッド）
第 114 図　第10・11号遺構平面図
第 115 図　第10・11号遺構土層断面図
第 116 図　第10・11号址出土遺物
拓影図・実測図
第 117 図　第12号遺構平面･断面図
第 118 図　第13号遺構平面･土層断面図
第 119 図　10･20Ｍ・Ｎグリッド遺物出土
平面・断面図
第 120 図　10･20—Ｍ・Ｎグリッド
出土土器実測図
第 121 図　10･20—Ｌ～Ｎグリッド
出土土器拓影図（土師器･
坏形土器底部Ｉ）
第 122 図　10･20—Ｍ・Ｎグリッド
出土土器拓影図（土師器･
坏形土器底部II）
第 123 図　11号墳及びその周辺グリッド
土器出土状況
第 124 図　11号墳周辺グリッド出土土器
実測図(70—Ａ・Ｊグリッド)
第 125 図　Ａグリッド出土土器拓影図
第 126 図　Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆグリッド
出土土器拓影図
第 127 図　Ｈ・Ｊ・Ｋグリッド出土土器
拓影図
第 128 図　Ｌ・Ｍ・Ｎグリッド
出土土器拓影図
第 129 図　グリッド出土石器等実測図
第 130 図　グリッド出土土器実測図

第３次調査

第 1 図　東寺出戸張作遺跡および周辺遺跡
第 2 図　東寺山戸張作第一次・第二次・第三次調査全測図
第 3 図　東寺山戸張作第三次調査全測図
第 4 図　東寺山戸張作第三次調査グリッド配置図
第 5 図　１号塚平面・土層断面図・遺物出土状況図
第 6 図　１号塚出土遺物実測図・瓦拓影図
第 7 図　１号塚出土銭拓影図
第 8 図　２号塚平面図
第 9 図　３号塚平面図（古墳）
第 10 図　001号住居址平面・断面図
第 11 図　001号住居址遺物出土状況図
第 12 図　001号住居址出土遺物実測図
第 13 図　002号・007号住居址平面・断面図
第 14 図　002号・007号住居址遺物出土状況図
第15図-Ⅰ　002号住居址出土遺物実測図
第16図-Ⅱ　002号住居址出土遺物実測図
第 17 図　003号住居址平面・断面図
第 18 図　003号住居址遺物出土状況図
第 19 図　003号住居址出土遺物実測図
第 20 図　003号住居址出土石製遺物実測図
第 21 図　004号住居址平面・断面図
第 22 図　004号住居址遺物出土状況図
第 23 図　004号住居址石製遺物出土状況図
第24図-Ⅰ　004号住居址石製遺物出土状況図
第25図-Ⅱ　004号住居址石製遺物出土状況図
第26図-Ⅲ　004号住居址出土遺物実測図
第 27 図　004号住居址出土石製遺物実測図
第 28 図　004号住居址出土石・鉄製品実測図
第 29 図　004号住居址出土臼玉実測図
第30図-Ⅰ　004号住居址出土臼玉実測図
第 31 図　004号住居址出土臼玉実測図
第 32 図　004号住居址出土石製遺物・石鏃実測図
第 33 図　005号住居址平面・断面図
第 34 図　005号住居址出土石製遺物実測図
第 35 図　006号住居址平面・断面図
第 36 図　005号・006号住居址遺物出土状況図
第 37 図　005号住居址出土遺物実測図
第 38 図　005号住居址出土石製遺物実測図
第 39 図　006号住居址出土遺物実測図
第 40 図　007号住居址出土遺物実測図
第 41 図　008号住居址平面・断面図
第 42 図　008号住居址遺物出土状況図
第 43 図　008号住居址出土遺物実測図
第 44 図　008号住居址出土石製遺物実測図
第 45 図　010号住居址平面・断面図
第 46 図　010号住居址遺物出土状況図
第 47 図　010号住居址出土遺物実測図
第 48 図　010号住居址出土石製遺物実測図
第 49 図　Ｃグリッド出土遺物実測図
第 50 図　Ｅ21グリッド，先土器時代石器出土状況図
第 51 図　Ｅ21グリッド，先土器時代石器実測図

第 52 図　グリッド土層断面図
第 53 図　C グリッド遺物出土状況図
第 54 図　C グリッド出土石製遺物実測図
第 55 図　C グリッド出土臼玉実測図
第 56 図　A 地区及び各グリッド出土遺物拓影図（縄文時代）
第 57 図　A 地区及び各グリッド出土遺物拓影図（弥生時代）

図 版 目 次

第１次・２次調査

PL.1 (1)遺跡附近
(2)遺跡全景
PL.2 (1)塚群（１，２，３，４号）
(2)塚群（５，６号）
(3)古墳群（８，９号）
PL.3 (1)１号塚全景（調査前）
(2) 〃 （調査後）
(3)２号塚全景（調査前）
(4) 〃 （調査後）
PL.4 (1)３号塚全景（調査前）
(2) 〃 （調査後）
(3)４号塚全景（調査前）
(4) 〃 （調査後）
PL.5 (1)５号塚全景（調査前）
(2) 〃 （調査後）
(3)６号塚全景（調査前）
(4) 〃 （調査後）
PL.6 (1)７号塚全景（調査前）
(2) 〃 （調査後）
(3)８号墳全景（調査前）
PL.7 (1)８号墳埋葬施設遺物出土状況
(2) 〃 確認状況
PL.8 (1)８号墳埋葬施設粘土出土状況
(2)８号墳周溝土層断面
PL.9 (1)９号墳全景（調査前）
(2) 〃 墳丘断面図状況
（西側Ｄトレンチ）
PL.10 (1)９号墳埋葬施設確認状況
(2) 〃 遺物出土状況
(3)９号墳埋葬施設（調査後）
PL.11 (1)９号墳周溝内遺物出土状況
(2) 〃
(3) 〃
PL.12 (1)９号墳周溝土層断面
(2) 〃 全景（調査後）
PL.13 (1)10号墳全景（調査前）
(2)10号墳前遺物出土状況
PL.14 (1)10号墳遺物出土状況
(2) 〃 全景と溝Ａ，Ｂとの切り合い状況
PL.15 (1)11号墳全景（調査前）
(2) 〃 埋葬施設確認状況
PL.16 (1)11号墳埋葬施設遺物出土状況（南側）
(2) 〃 （北側）
(3)11号墳周溝内遺物出土状況
PL.17 (1)11号墳周溝内遺物出土状況
(2)11号墳全景（調査後）
PL.18 (1)12号墳全影（調査前）
(2)12号墳周溝内遺物出土状況
(3)12号墳全景（調査後）
PL.19 (1)13号墳全景
(2) 〃 埋葬施設（外側プランは掘り方）
PL.20 (1)13号墳埋葬施設遺物出土状況
(2) 〃 周溝内遺物出土状況
(3) 〃
PL.21 (1)13号墳周溝内遺物出土状況と土層断面
(2)13号墳全景（調査後）

PL.22 (1)14号墳全景（調査前）
(2) 〃 （調査後）
PL.23 (1)14号墳埋葬施設遺物出土状況
(2) 〃
(3)14号墳埋葬施設（調査後）
PL.24 (1)001号住居址全景（調査後）
(2) 〃 遺物出土状況
PL.25 (1)001号住居址遺物出土状況
(2) 〃
(3)001号住居址カマド前遺物出土状況
PL.26 (1)001号住居址カマド
(2) 〃 内遺物出土状況
(3) 〃 支脚出土状況
PL.27 (1)001号住居址カマド（調査後）
(2)溝状遺構A（70C区）
(3) 〃 （60C区）
PL.28 (1)溝状遺構A（50，10，20C区）
(2) 〃 B（30E，D区）
(3) 〃 （ 〃 ）
PL.29 (1)溝状遺構B（30B区）
(2) 〃 （30L，M区）
PL.30 (1)溝状遺構D（70，60F区）
(2) 〃 （60，50F区）
(3)溝状遺構C（50M，N区）
PL.31 (1)土坑1（調査後）
(2)土坑2（炭化物出土状況）
(3) 〃 （調査後）
PL.32 (1)土坑3（調査後）
(2)土坑4（溝状遺構Aとの関係及び遺物出土状況）
(3) 〃 （調査後）
PL.33 (1)土坑5（調査後）
(2)土坑6（ 〃 ）
(3)土坑7（調査後）
PL.34 (1)土坑8（調査後）
(2)土坑9（炭化物出土状況）
(3) 〃 （調査後）
PL.35 (1)010，011遺構全景
(2)010遺構支脚出土状況
(3)011遺構
PL.36 8号墳主体部出土遺物—①
PL.37 〃 —②
PL.38 9号墳埋葬施設出土遺物
PL.39 11号墳 〃 —①
PL.40 11号墳埋葬施設出土遺物—②
PL.41 13号墳(1)，14号墳(2～4)主体部出土遺物
PL.42 14号墳 〃
PL.43 9号墳，13号墳 出土遺物（玉類）
PL.44 土坑4出土遺物（土製小玉）
PL.45 9号墳(1～6)，11号(7～10)，12号墳(11)周溝内出土遺物
PL.46 13号墳(1～4)，14号墳(5)周溝内出土遺物
PL.47 001号住居址出土遺物—①
PL.48 〃 —②
PL.49 各遺構，グリッド出土遺物
PL.50 塚及びグリッド出土遺物
PL.51 10号墳出土遺物（須恵器片）
PL.52 グリッド出土遺物
PL.53 〃
PL.54 9号墳出土遺物（縄文土器）
PL.55 11，12，13，14号出土遺物（縄文土器）
PL.56 グリッド出土遺物（縄文土器）
PL.57 土器底部

第 3 次調査

PL. 1　(1)東寺山戸張作遺跡（海老）
全影写真
PL. 2　(1)遺跡地近影
(2)遺跡地全影と工事
PL. 3　(1)東側調査区域
（C，D，E，グリッド）
PL. 4　(2)西側調査区域
（堅穴住居址・俺体壕全影）
PL. 5　(1)第 1 号塚調査前影
(2)第 1 号塚土層断面影
(3)第 1 号塚マウンド切断影
PL. 6　(1)第 1 号住居址全影
(2)第 1 号住居址覆土断面影
PL. 7　(1)第 2 号・ 7 号住居址全影
(2)第 2 号址遺物出土状況影
PL. 8　(1)第 3 号住居址全影
(2)第 2 号址切断俺体壕影
PL. 9　(1)第 4 号址全影（工房址）
(2)石片分布状況影（石製品他）
PL.10　(1)第 4 号址貯蔵穴
（工作用ピット）—A影
(2)第 4 号址貯蔵穴
（工作用ピット）—B影
(3)第 4 号址貯蔵穴—B影
PL.11　(1)第 4 号址石製品等出土状況影
（原石材他）
(2)第 4 号址鎌身・高坏脚部
出土状況影
(3)第 4 号址勾玉・石製模造品等
出土状況影
PL.12　(1)第 5 号住居址全影
(2)第 5 号住居址カマド内遺物
出土状況影
PL.13　(1)第 6 号住居址全影
(2)第 6 号住居址遺物出土状況影
PL.14　(1)第 8 号・10号住居址全影
（住居址確認面影）
(2)第 8 号・10号住居址全影
PL.15　(1)第 5 号住居址貯蔵穴・カメ
出土状況影
(2)第10号住居址須恵器坏
出土状況影

土製品

PL.16　(1)第 1 号住居址出土遺物
PL.17　(1)第 2 号住居址出土遺物
PL.18　(1)第 3 号住居址出土遺物
PL.19　(1)第 4 号址出土遺物——（工房址）
PL.20　(1)第 5 号住居址出土遺物
PL.21　(1)第 6 号住居址出土遺物
PL.22　(1)第 7 号住居址出土遺物
PL.23　(1)第 8 号住居址出土遺物
PL.24　(1)第10号住居址出土遺物
PL.25　(1)第10号住居址出土遺物
（須恵器他）
PL.26　(1)グリッド出土遺物

石製品（工房址）

PL.27　(1)第 4 号址出土石材（緑泥石）
PL.28　(1)第 4 号址出土石製模造品･勾玉他
PL.29　(1)第 4 号址出土石製品拡大
PL.30　(1)第 4 号址出土石製模造品
（双孔円板他）
PL.31　(1)第 4 号址出土石製品（未成品）

PL.32 (1)第４号址出土臼玉（完･未成品）
PL.33 (1)第４号址出土臼玉（完･未成品）
PL.34 (1)第４号址出土臼玉（未成品）
PL.35 (1)第４号址出土臼玉（完･未成品）
PL.36 (1)無土器時代石器他
グリッド出土遺物
PL.37 (1)グリッド出土縄文時代土器片
及び土器片錘
PL.38 (1)グリッド出土弥生時代土器片
金属製品他
PL.39 (1)第１号塚（007号塚）
出土銅銭他
PL.40 (1)第４号址出土鉄製品（鎌･鋸他）
PL.41 (1)各グリッド出土遺物
（双孔円板他）
PL.42 (1)グリッド出土石製品（臼玉他）
PL.43 (1)第３号・４号住居址出土遺物
(2)第４号住居址出土臼玉未成品
PL.44 (1)各住居址出土石製品等
（２，４，５，８，10号址）
自然遺物
PL.45 (1)D－72グリッド出土犬骨
PL.46 (1)第２号・７号住居址検出貝類
参照付編
PL.47 (1)（工房址）４号址出土遺物
（緑泥片岩他）
PL.48 (1)（工房址）４号址出土遺物
（緑泥片岩他）
PL.49 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.50 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.51 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.52 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.53 (1)((工房址）４号址出土遺物
PL.54 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.55 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.56 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.57 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.58 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.59 (1)（工房址）４号址出土遺物
PL.60 (1)（工房址）４号址出土遺物

例　　言

1．本報告書は，京葉道路出口附近にあたる千葉市東寺山に於ける，国道16号線・京葉道路（四期工事）関係の路線範囲を発掘した第一次・第二次・第三次の調査結果を収録した報告である。

2．本書の遺跡地名称は，所在地の小字名は異るが，三調査地ともに，同一小台地上に存することから，総称「千葉市東寺山・戸張作遺跡」として標記してある。又収録した各遺跡の発掘調査報告は，年次の経過にしたがい，順を追って配列してあるので，文化史年代とは前後するところもある。

3．遺跡地，発掘調査に関しては，千葉県教育庁文化課の指導を経て，建設省関東地方建設局及び，日本道路公団東京支社との委託業務にもとずき，昭和49年12月から（財）千葉県文化財センターが，調査実務を２年１ヶ月間断続的に実施した調査である。

4．各遺跡地の調査は，年次ごとに期間及び担当者が異るので下記に示す。

(1) 第一次調査・東寺山戸張作は，昭和49年12月６日現地着手から，50年３月31日まで，担当者は，千葉県文化財センター調査部長中村恵次，調査員は，鈴木定明，高田博の２名である。

(2) 第二次調査は，昭和50年５月27日着手，昭和50年10月16日まで，担当調査員，矢戸三男，鈴木定明，高田　博，鈴木若雄である。

(3) 第三次東寺山海老（かいろう）の調査は，昭和51年４月19日着手，昭和51年８月５日までの間，当センター調査部長，中村恵次の指導のもとに，岡川宏道が担当した。

5．本書の執筆，出土品の整理及び掲載，写真の撮影，実測図の作製は，各遺跡調査担当者が分担したので，報文の文末には文責名を記した。担当者を下記に示す。

(1) 第一次調査，古墳７基，塚７基，整理期間　50年４月１日から51年３月31日まで
鈴木定明　高田　博　矢戸三男

(2) 第二次調査，住居址１軒，土壙，溝状遺構，他，整理期間　50年10月17日から51年３月31日まで　矢戸三男　鈴木定明　高田　博　鈴木若雄

(3) 第三次調査，工房址，住居址，塚，他　整理期間　51年８月16日から51年12月27日まで　岡川宏道　鈴木若雄

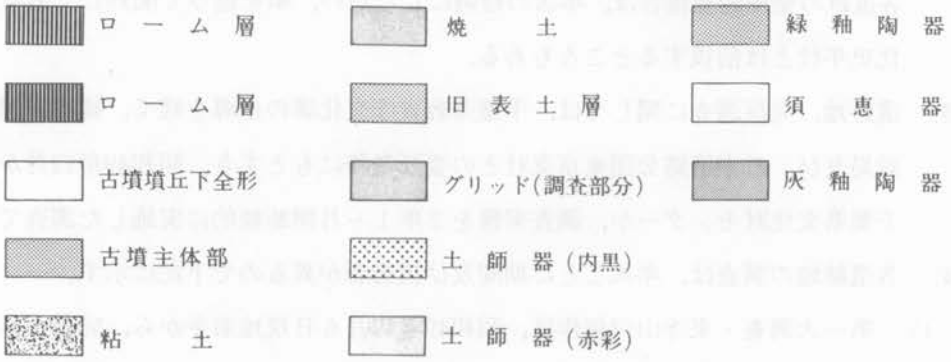
なお，報文全体の校閲は調査部長，中村恵次が，編集は岡川宏道が行った

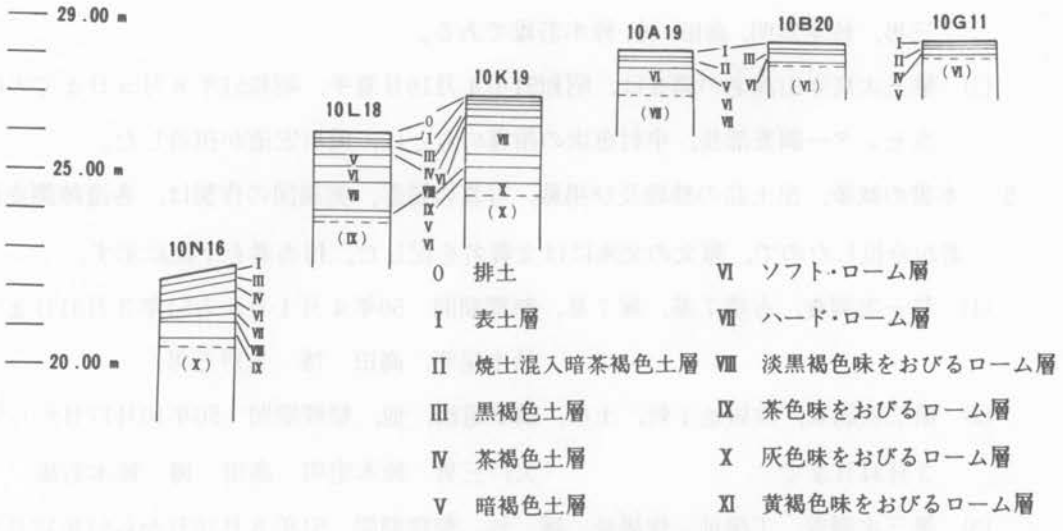
6．岩石の鑑定及び産地比定には，肉眼鑑定法，蛍光Ｘ線分析法を活用した。岩石等の分

析には，加藤昭先生・大西英輔氏にも協力をたまわった。

7．発掘調査の実施，報告書の刊行に伴い，千葉県教育委員会，教育庁文化課，東京大学，国立科学博物館等の公的機関の他，東京大学名誉教授鈴木　尚，国立科学博物館　地学第２研究室長加藤　昭，人類第２研究室長山口　敏，金属試験所大西英輔，川崎製鉄　柳沢　高義氏等に，ご指導，協力をたまわった。

8．挿図の凡例





東寺山・戸張作遺跡土層柱状図

東寺山戸張作遺跡

第１・２次調査

第一章　調　査　諸　説

第一節　発掘調査に至る経過

別冊『東寺山石神遺跡』でも触れたとおり，一般国道16号線ならびに京葉道路（四期）の計画路線上には，県選定重要遺跡「荒屋敷貝塚」を含め11遺跡の所在が確認されている。このうち荒屋敷貝塚を除く10遺跡については，文化庁・県教育委員会・建設省・日本道路公団等関係機関による協議の結果，記録保存の措置をとることとなり，昭和46年４月１日より県教育委員会の指導によって,(財）千葉県都市公社が発掘調査を実施している。しかし，所在する10遺跡のうち，東寺山地区（当時の呼称による東寺山第１古墳群・東寺山遺跡）の２遺跡は，用地買収が難航したことから調査が不可能となり，このため48年度以降調査は中断している。

この間，懸案の荒屋敷貝塚については，前記４者間の協議が重ねられており，文化庁・県教育委員会の指導の下で，現状保存に必要な基礎資料の収集を目的とした２回に及ぶ確認調査が実施されている。第１次については（財）千葉県都市公社文化財調査事務所，第２次は（財）千葉県文化財センターがそれぞれ調査を担当し，成果報告書『千葉市荒屋敷貝塚―遺構確認調査報告書―（1974)』『千葉市荒屋敷貝塚―貝塚外縁部遺構確認調査報告―（1976）』を刊行している。

一方，東寺山地区については、48年度に入り用地買収の問題も解決をみ，建設省・日本道路公団から，49年11月，新たに県教育委員会の外郭組織として設立された（財）千葉県文化財センターに調査実施の要請が県教育委員会を通じて行なわれた。当時、(財）千葉県都市公社文化財調査事務所は年度内の残存業務のため，職員組織を新組織である文化財センターに移行することが不可能の状況であった。このため，文化財センター初の調査事業としては，東寺山地区２遺跡のうち，東寺山第１古墳群（古墳７基・塚７基）のみ調査を実施することとなった。調査については，49年12月16日，建設省・日本道路公団との契約締結と同時に現地調査に着手，翌50年３月31日に終了をみた。

調査の経過と成果については後述するとおりであるが,この結果、当該地点には古墳・塚の他に住居跡・土壙等の遺構の存在が確認され，県教育委員会を含めた４者間の協議が行なわれ，新たに包含地（道路敷部分）9,800m²について調査を実施することになつた。調査は，東寺山第１古墳群の整理作業を一時中断して50年５月27日に着手，10月16日に終了をみている。その間に隣接する東寺山遺跡の現地調査も併行して実施されている。(『東寺山

石神遺跡』参照）

その後，道路の建設工事は着々と進行していたが，従前より遺跡の所在が推定視されていた市道都賀線を挾んだ台地北側の地点で，工事中に住居跡の断面が数ヶ所露呈された。このため当該地点（道路敷1,000㎡）の工事は県教育委員会によって中止され，第３次の調査が実施されることとなつた。調査は，51年度事業の一つとして組込まれ，諸手続の完了をまって，51年４月19日から現地調査に着手，８月15日に終了した。調査の経過ならびに成果は後述するとおりである。

なお，調査遺跡名については、昭和49年３月刊行の『千葉市史―原始古代中世篇』記載の遺跡名と，センター独自の地籍調査を考慮し，遺跡名の混乱を避けるため，事業名とは別に下記のように改称した。われわれは，今後この名称で記録を後世に遺したいと思う。関係各位のご協力を仰ぐ次第である。東寺山遺跡―東寺山石神遺跡。同所在円墳―石神古墳群２号墳。**「東寺山第１古墳群―東寺山戸張作古墳群。東寺山古墳下遺跡―東寺山戸張作遺跡。東寺山戸張作遺跡―東寺山海老遺跡。」**

（上記３遺跡を東寺山戸張作遺跡と総称。）　　（中村恵次）

第二節　第一次調査の経過

調査は、昭和49年12月16日～昭和50年３月31日まで行った。調査対象は古墳７基、塚７基の計14基である。調査にあたって各遺構の番号は、通し番号とした。従って１～７号が塚で８～14号が古墳となる。

12月16日から現地入りし伐採等の環境整備を行なった後、塚７基（１～７号）について調査を開始した。写真撮影、墳丘測量後十字トレンチを設定し発掘した。その結果、塚の形状は円墳状を呈した。(但し７号塚は第３次調査の結果、方形を呈することが判明）各塚とも出土遺物は少なく３号塚から寛永通宝１枚、４号、５号塚盛土からは土器片が若干出土したのみである。

12月28日で本年の調査を中止し年末年始休暇に入り翌50年１月７日から現地調査を再開した。

１月７日　調査再開、本年は古墳７基（８～14号）の調査を行なった。１月の段階で８号、９号、10号を調査した。８号、９号墳は、写真撮影、墳丘測量後十文字トレンチと墳頂部に４区グリッドを設定し発掘した。８号墳は、墳丘西側から南側にかけての周溝が円周しないことや墳頂部に埋葬施設が検出されず西側裾部付近に検出されたことから前方後円墳と判明した。埋葬施設出土遺物は、直刀、鉄鏃であった。なお墳丘南側裾部で墳丘を切って溝が検出された。（第２次調査の結果、溝状遺構Ｂと判明）　９号墳は、周溝が円周していることから円墳と判明。埋葬施設は墳頂直下に検出され、直刀、刀子、玉類等が出土した。10号墳は、調査前の形状が方形を呈していたが、古墳かどうか疑問であった。調査の結果、明確な周溝および埋葬施設は検出できなかったが、墳丘東側で須恵器片20点ほど出土した。

２月の段階で11号、12号墳を調査した。写真撮影、墳丘測量後十字トレンチを設定し発掘した。11号墳は、周溝が円周していることから円墳と判明。埋葬施設は、墳頂直下に検出されたが遺存状態が悪く明確には検出できなかった。埋葬施設出土遺物は、直刀、鉄鏃であった。12号墳は調査前から墳丘がほとんどなく古墳かどうか疑問であった。調査の結果、かろうじて周溝を検出したが墳丘は残っていなかった。出土遺物は、周溝内から土師器坏形土器が出土。

３月の段階で13号、14号墳を調査した。写真撮影、墳丘測量後トレンチを設定し発掘した。両古墳とも墳丘コンターと周溝の検出状態から前方後円墳と判明。従って埋葬施設もクビレ部から検出された。埋葬施設出土遺物は、13号墳からは刀子、玉類が検出され、14

号墳からは，直刀，鉄鏃が検出された。たお，14号墳南側周溝内から住居址（国分期）が1件検出された。（この住居址については第2次調査で行なうことが決定された）

以上，古墳および塚の調査をすべて終え，最後に航空写真撮影を行なって昭和50年3月31日をもって第1次調査を終了した。

（鈴木）

第三節　第二次調査の経過

本調査は、第一次調査において古墳墳丘下及び周溝内より新たな遺構が検出されたことにより本遺跡内にさらに他の遺構の存在が推測され別途調査することとなり行なわれたものである。

調査は、昭和50年5月27日より10月16日に亘って行ない、後章で記述するように土壙・土壙墓・溝状遺構・住居址等を検出した。第二次調査は、グリッドによる発掘方法を用いた。

グリッドの設定は、道路センター杭を基準軸として10ｍ×10ｍの大グリッドを設定しこの大グリッドを2ｍ×2ｍの小グリッドに細分することとした。グリッドの名称については大グリッドを縦列を基準杭より北西側に向ってＡ～Ｉ、南東側に向ってＪ～Ｎとし、横列を基準杭より南西側に向って10～40、北東側に向って50～70とした。小グリッドの名称は、Ａ～Ｉの各グリッドについては全て北西側（縦位に）01～25・Ｊ～Ｎの各グリッドについても全て南東側から北西側（縦位に）01～25と番号を付し、小グリッド番号の01は常に縦位基準軸に近い部分に用いることとした。

発掘は、排土を考慮し、基準軸ラインを残すこととし、各グリッドについては、一列おきに且つ一つおきに調査することとした。

発掘調査は、5月27日よりＡグリッドから順次行なった。この結果、グリッドからの遺物の出土は少なく無遺物のグリッドも少なくなかった。各グリッドは、順次ソフト・ローム面まで掘下げていったが、ローム両までの深さは50cm～80cm前後を測り、その層序は概ね、表土層―焼土混入暗茶褐色土層―黒褐色土層―茶褐色土層―暗褐色土層（乃至は黒褐色土層）―ソフト・ローム層を示す。この中で、焼土混入暗茶褐色土層は極めて特色のある層で、ほぼ遺跡全面に分布していた。しかし、遺構との関連は把えられず、この層の時期を決定し得る遺物の出土も皆無であった。

Ａ～Ｉグリッドの調査は、比軸的順調に進展し、10―Ｂグリッド内で土壙（第5号土壙）

・60—Ｂグリッド内で土壙（第３号土壙）・Ｃ列グリッド内で溝状遺構（溝Ａ）を検出した。この中で60—Ｃグリッド内では、溝Ａに切断された土壙墓（第４号土壙）を検出した。また、20及び30—Ｃグリッド内では、溝Ａと直角に交差する溝状遺構（溝Ｂ）を検出し、溝Ａと溝Ｂとの先後関係を追求したが溝Ａから溝Ｂにかけて上部に黒色砂が堆積しており土層観察によっても重複は認められず、同一時期の構築と考えられた。なお、溝Ａの南東側は、北西側より一段高くしかも盛土がなされていたのではと思われ、表土層下に若干のローム・ブロック層が遺存している部分或いは、旧表土層と思われる黒色土層が検出された。この他、20—Ｃグリッド内では土壙（第６号土壙）・20—Ｄ・Ｅグリッドにかけて土壙（第１号土壙）・20—Ｅグリッド内で土壙（第２号土壙）・10・20—Ｆグリッドにかけて土壙（第９号土壙）・Ｆ列グリッドで溝状遺構（溝Ｄ）を検出した。溝Ｄは、９号墳墳丘内においてもその一部が検出され、さらに８号墳と９号墳の中間において溝Ｅとした溝状の遺構に連なるものと思われた。しかし、８号墳墳丘内或いは、溝Ｂとの関係は不明である。Ｈグリッド及びＩグリッドは、調査時点で既に迂回道路設置のために極く一部の調査に終ったが、この範囲内では遺構の検出はなく、遺物も数点のみであった。Ａ～Ｉグリッド調査時において、70—Ｄ～Ｆグリッドの９号墳北東側際より少量ながら土師器が出土し、70—Ａグリッド内の11号墳南西際からは完形の土師器・坏形土器を含むやや多量の土器が出土した。これら等の土器はいずれも古墳時代後期のもので、出土位置からして９号墳、11号墳等の関連が強いように思われたが、直接関連づける証左は得られなかった。また、溝Ｂは、８号墳を切断しており且つ溝の南西側には土塁状の盛土を伴っていたことから、一部が調査区域外にかかるが、この部分の調査を行なうべく、地主との交渉を続け、９月下旬より調査開始した。その結果、土塁状の盛土は８号墳周溝の上部になされており、溝Ｂとの先後関係は認られず寧ろ同一時期のものと考えられた。土塁南西側は、表土層下が直ちにハード・ローム層となっており、削平・整形がなされていることが判明した。

溝Ｂについては、排土の都合上、直ち調査することが出来ずやや遅れたが、10号墳との関係を重点におき調査した。その結果、10号墳は本来円墳であったものと思われるが、或時期（恐らく溝築時と思われるが）に長方形に変形されたものと判明した。なお、１０号墳より南東側の溝Ｂは，２条に分岐し、この間に低平ながらも土塁状の盛土がなされたことが明らかとなった。

Ａ～Ｉグリッドの発掘が概ね完了した時点で、第一次調査の際検出されていた住居址（００１号址）の調査を開始する一方、Ｊ～Ｎグリッドの発掘を行なう。

これ等のグリッドに就いては、溝Bの追求及び住居址の有無を重点におき開始した。溝Bについては、30—Jグリッド内で2条の溝を確認し得たが、K～Nグリッドでは木の根等により2条のうち北東側の溝しか追求し得なかった。北東側の溝は、その走行状態から谷へ落込むものと思われた。住居址については001号址の他には検出され得ず、10—M・Nグリッド内で土壙（第8号土壙），50－Nグリッド内で土壙（第7号土壙），50・60－Nグリッド内で溝状遺構（溝C）を検出した。溝Cは、Mグリッド内には検出されず、北側へは延びないものと思われ寧ろ谷へ落込むものと考えられた。溝Cの覆土上層に黒色砂が堆積していることは、注意される。この他，10・20—Lグリッドの調査が進むにつれ，M・Nグリッドを中心に多量の土師器が出土した。その全てが細片でしかも表土層或いは黒褐色土，茶褐色土に包含されていた。また，10・20—L・Mグリッドにかけて近接して二つの粘土塊が検出され、調査の結果北西側粘土塊（10号遺構）に接して若干の掘込が認められ、南東側粘土塊（11号遺構）はカマドと考えられる点から住居址として把えられた。しかし、そのプラン・規模は、掘込みが浅いことと、斜面であるため明らかにすることは出来得なかった。この住居址と土師器出土範囲は一部重複するものの一致せず、土師器出土範囲が広く層位的にも上層に位置するものであった。

各グリッドの調査が終了するに従って、8・9・13・14号墳の墳丘下の遺構の有無を確認するため墳丘削平にかかった。特に13，14号墳では、第一次調査の際旧表土層下で焼土が検出されており、この遺構調査と併行しつつ進めた。13号墳では、主体部掘り形東壁に検出されていた12号遺構が、調査の結果西側には広がらず東側へ延びていることが判明した。しかし、焼土は不整形なピット内に或いはその上面に散在しており、この他に遺構を伴なうものではなかった。ただ、焼土と同一レベルで一部分ながら硬質面が検出されたことは注意されるが、掘込み及びそのプランは不明である。14号墳については（13号遺構）、概ね13号墳のものと同様な様相を示し、一部に硬質面を認めたが、掘込み・プランについては不明であった。遺物は、13号遺構内及びその周辺で数点の縄文式土器が出土したのみであった。

8・9号墳からは、遺構は検出されなかった。以上の結果をもって本遺跡の発掘調査を完了し、図面の補足及び航空写真撮影を行ない、8号墳南西側調査区域外部分の埋戻しを行った後現地調査を完了した。　　（10月16日）

第四節　遺 跡 の 環 境

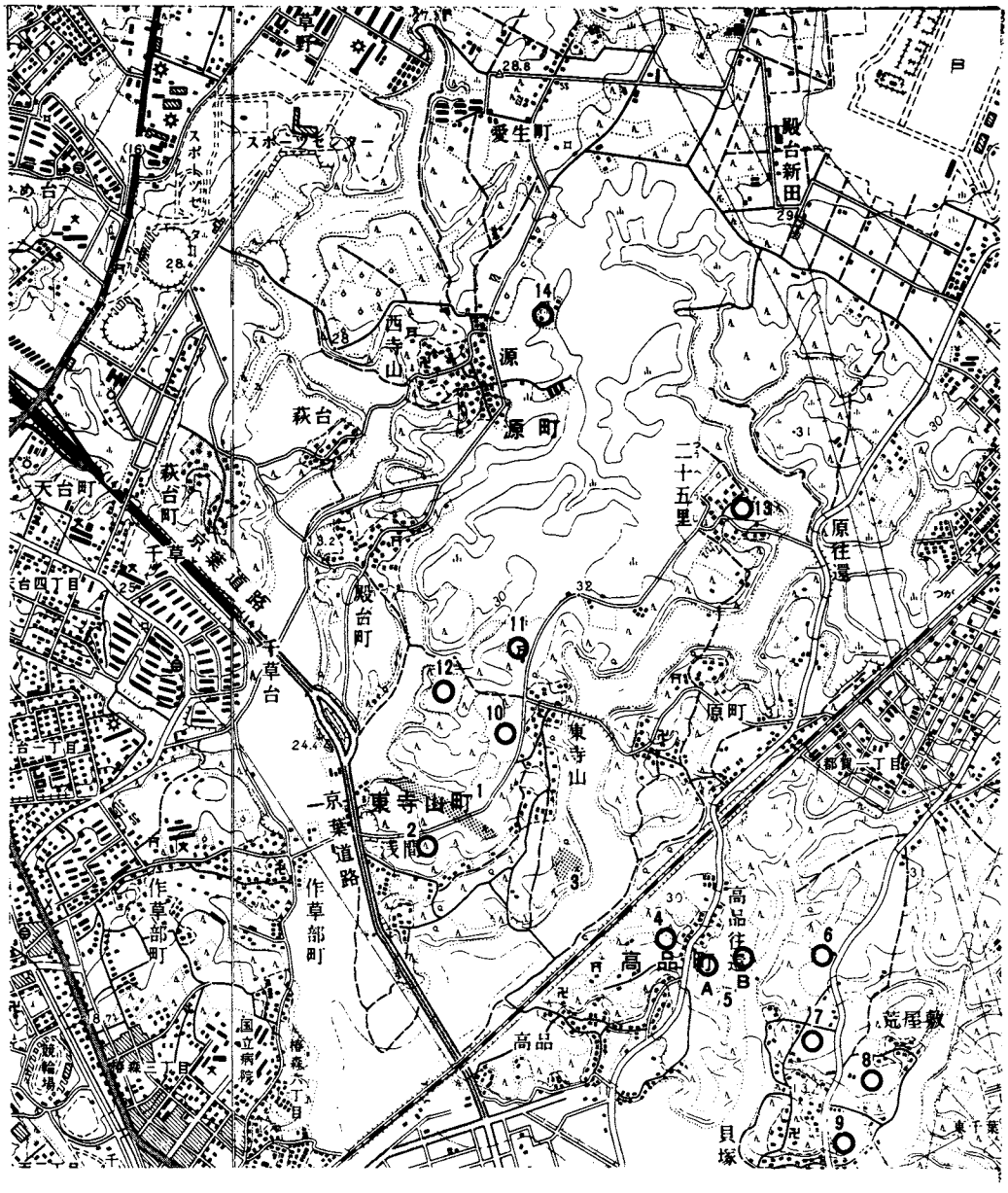
（1）　位置及び地理的環境

戸張作遺跡は，千葉市街地の北東約２kmの台地上に位置し，現在千葉県千葉市東寺山町454番地～464 番地の地籍に所在する。本遺跡の名称は，第一次・二次調査地点が旧字名「戸張作」と称されていたことによるものである。第三次調査地点は，これとは異なる字名が存在するが，調査地区が一部重複すること等から『戸張作遺跡』に含めることとした。また，東寺山町地域内には多数の遺跡があり，それ等遺跡との関連・相異を考慮し『東寺山・戸張作遺跡』と称することとする。

本遺跡の所在する台地は南西方向に延びている台地であるが，巨視的にみれば三つの支台に分岐している。まず北側にあって殿台町等が所在している支台・中央にあって本遺跡等が所在する支台・南側にあって石神古墳・石神遺跡が所在する支台である。この各支台はそれぞれ小支谷によって幾つもの樹枝状台地が形成されている。本遺跡もそのうちの一つに位置するもので，第一次・二次調査地区は南東方向に延びる舌状台地に，第三次調査地区は第一次・二次調査地区とは反対側にあって北西方向に延びる台地上に位置している。

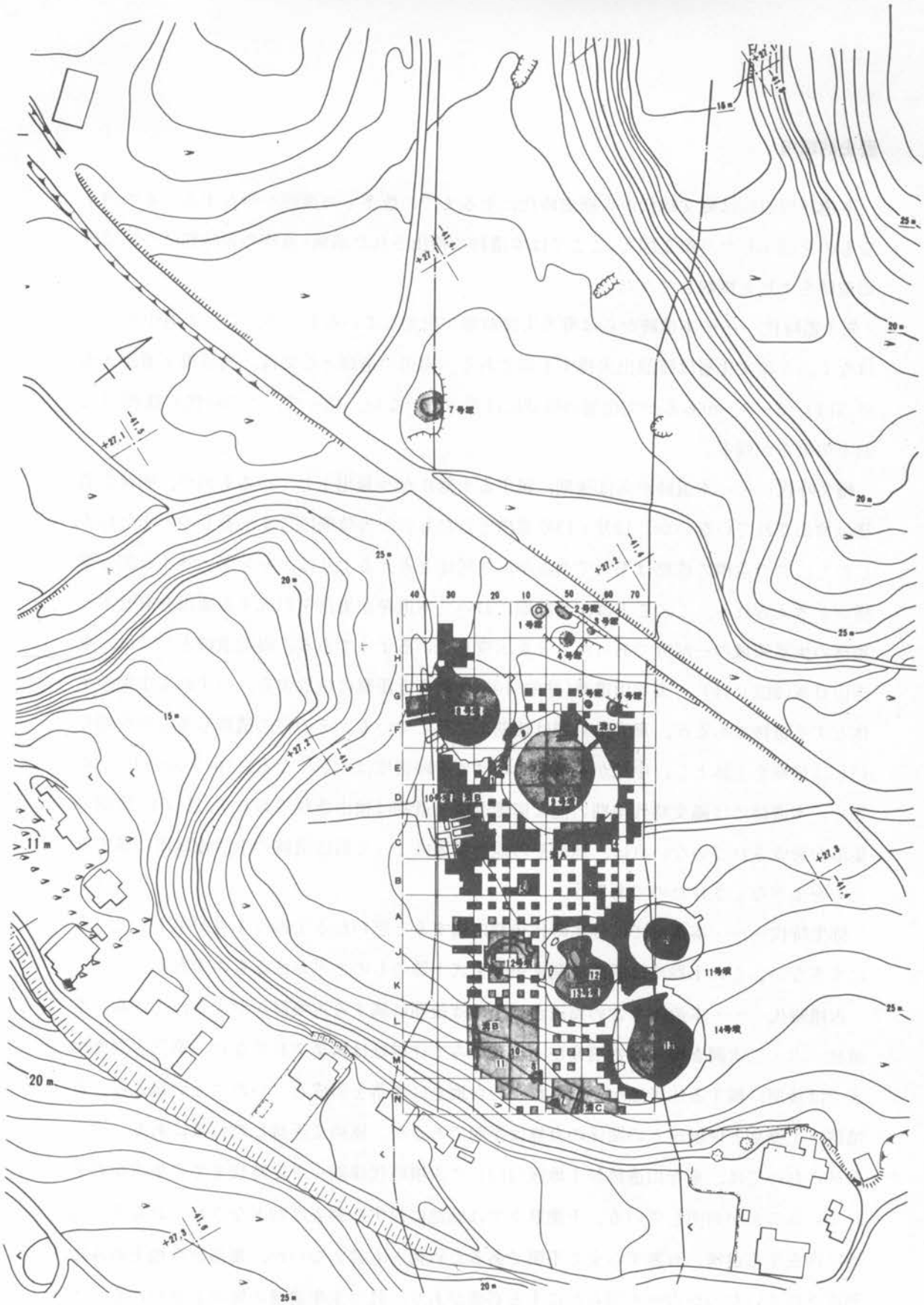
第一次・二次調査地区の台地は，最高位標高約28ｍを測りこれより標高約25ｍまでは緩かに傾斜し，これ以後急激に谷に落込む地形を呈する。谷底面との比高差は，約８ｍ前後を測る。従って本台地においては，平坦面は極めて少なく，斜面立地の遺跡と言える。第三次調査地区は，最高位標高28ｍを測り標高25ｍ前後からは急激に谷へ落込む。この間の比高差２～３ｍは斜面を呈すると言えるものではなく，視覚的にはほぼ平坦と見做し得るものである。

このような地形を呈する本遺跡は，現在山林となっている。第一次・二次調査地区における層序は第２図に示した通りであるが，第II層とした焼土を混入する暗茶褐色土層が特異的である。この層は，遺跡調査区内の全てのグリッドにおいて見出せるものではないが，ほぼ全域に検出されている。また，古墳周溝覆土上部及び塚盛土中に検出されているところから，この層の大体の上限と下限を推察し得るが，時期を決定出来得る有効な遺物は出土していない。さらにこの層は，第三次調査地区においても検出されておりかなり広範囲な分布を示す。しかしながら，この層の生成原因が単なる山火事等によるものか或いは何か別の要因にもるものかは不明である。



1 東寺山・戸張作遺跡
2 駒形古墳群
3 東寺山・石神遺跡
4 宮ノ腰遺跡
5 高品第2遺跡(A地点・B地点)
6 草刈場貝塚
7 荒屋敷西貝塚
8 荒屋敷貝塚
9 台門貝塚
10 東寺山遺跡
11 東寺山貝塚
12 東寺山・稲城遺跡
13 二十五里貝塚
14 西寺山貝塚

第1図　東寺山・戸張作遺跡群とその周辺遺跡



第2図　東寺山・戸張作遺跡第二調査全測図

0　50 m

歴史的環境

本遺跡周辺には縄文時代から歴史時代に至るまでの数多くの遺跡が所在する。その内主なものを図示した（第１図)。ここでは本遺跡で検出された遺構･遺物の各時期について周辺遺跡をまじえ概観してみたい。

先土器時代……本遺跡からは有舌尖頭器等が出土しているものの，ローム層中からではなく，その文化層は確認出来得ず不明である。周辺の遺跡としては，高品第２遺跡Ａ地点(註1)（5－A）があるが文化層の確認には至っていない。従って，この時代の様相はなお不明瞭さが残る。

縄文時代……本遺跡からは後期に属する土器片が少量出土しているものの，明確な遺構は検出されていないが，12号・13号遺構としたものが当該期に含まれるものと思われる。しかし，この遺構の性格は不明であるが，住居址と考えるよりはキャンプ・サイト的な遺構かと考えられる。このことは，当該期において本遺跡が集落を形成する要因を有せず，集落の生活領域の一部分であったことを示唆しているようである。周辺遺跡としては，東寺山貝塚(註2)(11）・東寺山遺跡(註3)(10）が最も近距離に位置する。いずれも中期を主体とする遺跡であるが，東寺山貝塚は後期まで及んでいる。その他の遺跡も多くが中期ないしは後期を主体とし，中期から後期にかけて遺跡密度は大きくなる。(6･7･8･9･13・14等）。本遺跡では縄文時代後期の他は何等遺構・遺物は検出されておらず,且つ中･後期の集落が形成されていない点は，地形その他の要因によって周辺遺跡の生活領域内に属することをよぎなくされたのであろう。

弥生時代……本遺跡では弥生時代後期に属すると思われる土器片１点が出土しているにすぎない。この土器片は所謂北関東系弥生式土器のものと思われるものである。

古墳時代……本遺跡を含め周辺台地上には後期に属する古墳群が形成されている。本遺跡一次・二次調査地域は古墳及び土壙墓のみで住居址は構築されてない。第三次調査地点では後期に属する住居址が検出されこの台地上に集落を形成していたことが窺える。古墳群・土壙墓と住居址との関係の有無は不明であるが，極めて近接した位置にある。周辺遺跡においては，東寺山遺跡群Ｉ地区(註2）で古墳時代後期～平安時代までの集落が形成れていることが判明している。千葉県下では低地に対する調査は殆どなされておらず，低地に内在する遺構の有無すら全く不明であるため何とも言えないが，集落が台地上のみに形成されていたのか否かを明らかにする必要があり，且つ生産遺構の解明も急がれる。こ

のような調査結果を総合すれば古墳・集落・生産の関係はより鮮明になるものと思われる。現状では，これ等古墳群を形成した集落は，本遺跡よりも東側台地上に求めざるを得ない。

歴史時代……本遺跡では平安時代に属する住居址1址・住居址と考えられるもの1址が検出されているにすぎず，集落を形成するまでには至らないものである。当該期の集落を求めれば，台地北東側に所在する東寺山遺跡・東寺山遺跡群Ⅰ地点がある。南東側では高品第2遺跡(註4) 等がありかなりの密度が窺える。

この他，本遺跡では土塁と溝状遺構が検出されている。時期は不明であるが少なくとも古墳時代よりは新しい。南西側に浅間館址(註5) があり，これとの関連を考慮する必要もあろう。

以上のように，本遺跡は先土器時代・縄文時代後期・古墳時代後期・歴史時代の遺構・遺物が検出されているが，先土器時代は不明としても，古墳時代後期の外はいずれも主体的存在ではなく周辺遺跡との関連に左右されるものであった。これは，第一・二次調査地点においては多分にその地形的要因が考えられるが，第三次調査地点においては必ずしも地形的要因とは考えられないものと思われ，当時の採集・生産・植生等も考慮する必要があろう。

註)

1.「高品第2遺跡」　『京葉』所収（財）千葉県都市公社　昭48・3

2.「千葉市東寺山遺跡群発掘調査報告書」東寺山遺跡群発掘調査会　昭45・12

3.「東寺山遺跡発掘調査概報」東寺山遺跡調査団　昭50・8

4. 1,に同じ

5.「千葉県中近世遺跡調査目録」千葉県教育委員会　昭47・3

第二章　遺構及び遺物

第一節　塚の概観と調査方法

本遺跡に所在する塚は，計７基でいずれも遺跡北部を横断している道路を挟んで南側に（１～６号），北側に１基（７号）がある。1～４号は，ほぼ道路際に群をなし，５号，６号は道路から南へ16ｍの所に２基並んで位置する。調査前の塚の形状は，１～６号が小円墳状を呈し，７号は，本遺跡最大の規模を有する塚で，円墳状を呈し墳頂部に平坦面を残しやや凹状になっていた。

調査方法は，各塚とも支障のない限り墳丘中心部で直交するトレンチを磁北を基準として十字に設定し発掘することとした。調査は，塚の構築状態の観察，遺物の検出等を目的として行ない，さらに墳丘下の土層セクションを観察するためにトレンチは，ローム面まで下げることとした。

第二節　発掘調査した塚７基の遺構及び遺物

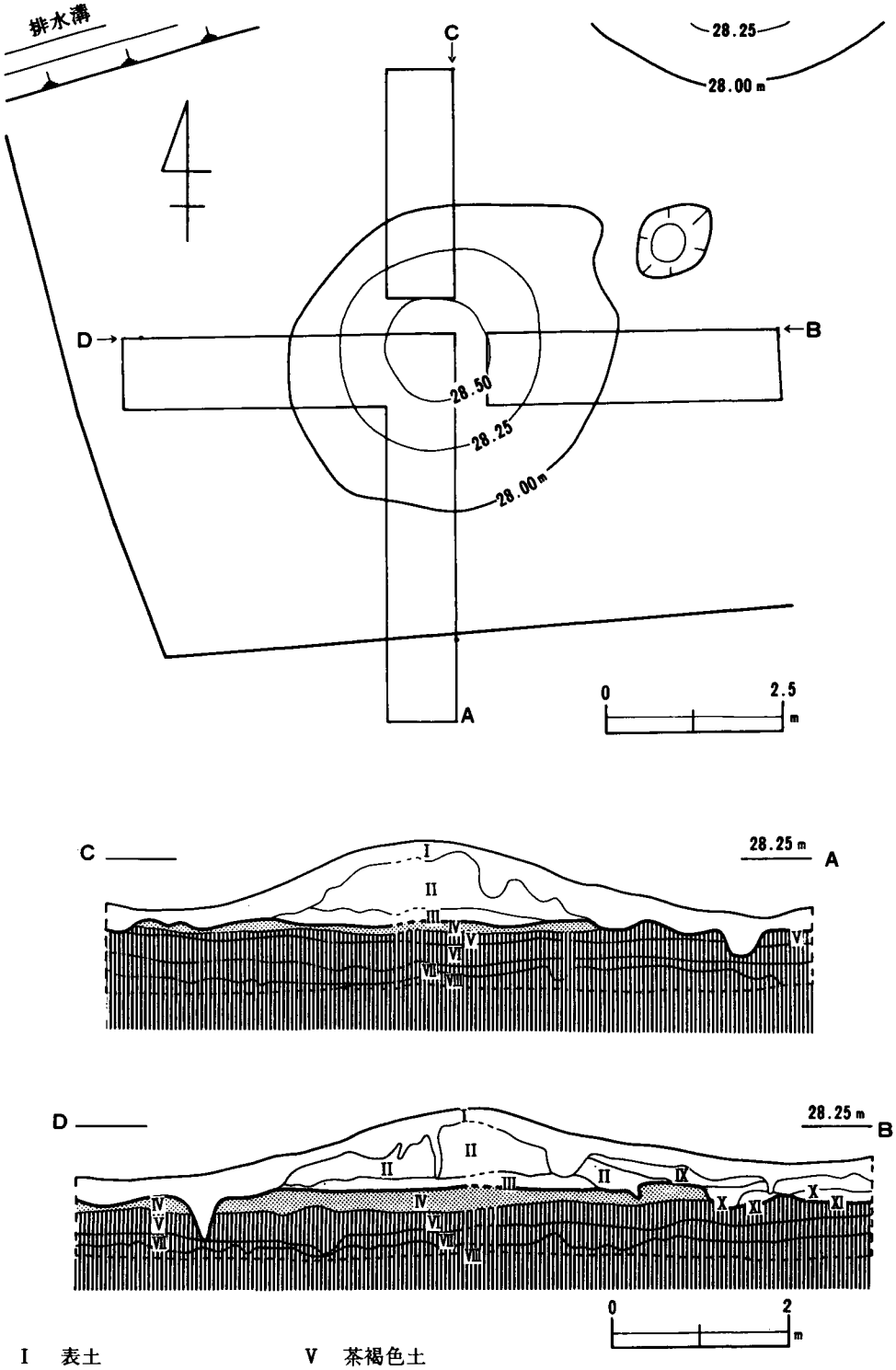
（１）**第１号塚**（挿図３図，ＰＬ３－①②）

本塚は，道路際より南へ約６ｍ入った所に位置しており，北東方向の道路際には２号塚がある。調査前の状況は，墳丘一面雑草に被われ，小円墳状を呈していた。供養塔その他の供献物は，みられなかった。

調査は，磁北を基準として十字トレンチを設定して行なった。その結果，塚の大きさは，東西６ｍ，南北５ｍのほぼ円形を呈する塚で，旧表土から墳頂部までの高さは1.1ｍであった。

塚の構築状態は，旧表土である黒色土を基盤として盛土しているが，全体的に軟弱で土を叩いて固めている状態ではなかった。墳丘土層セクションで観察すると，まず旧表土の上に焼土の混入した暗褐色土を積み，その上に茶褐色土を半円状に積み上げている。旧表土以下の自然堆積層は，茶褐色土，暗褐色土，漸移層，ソフトロームの順で推積している。

なお，本塚からの出土遺物は，皆無であった。



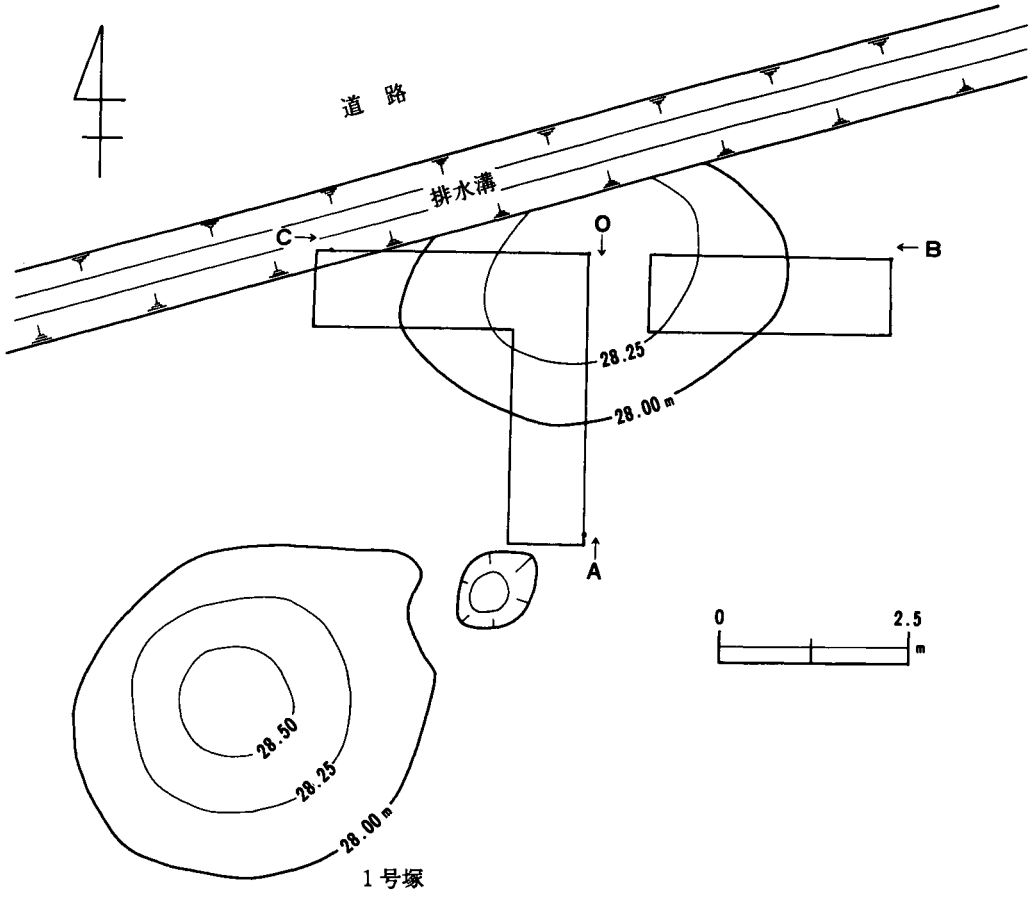
Ⅰ　表土　　Ⅴ　茶褐色土

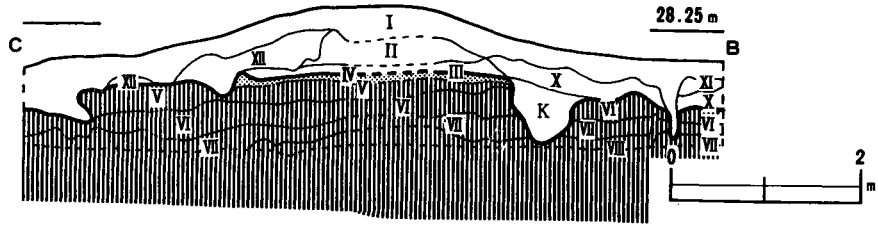
Ⅱ　茶褐色土　　Ⅵ　暗褐色土　　Ⅸ　暗褐色土(ローム粒混入)

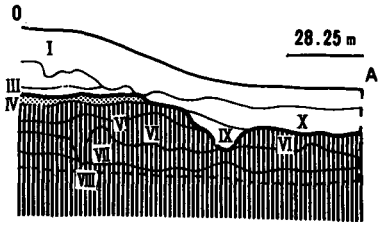
Ⅲ　暗褐色土(焼土混入)　　Ⅶ　漸移層　　Ⅹ　褐色土

Ⅳ　黒色土(旧表土)　　Ⅷ　ソフトローム　　Ⅺ　暗褐色土(黄色土混入)

第3図　1号塚　平面・土層断面図







I 表土
II 茶褐色土
III 暗褐色土(焼土混入)
IV 黒色土(旧表土)
V 茶褐色土
VI 暗褐色土
VII 漸移層
VIII ソフトローム
IX 黒褐色土
X 茶褐色土(黄色土混入)
XI 茶褐色土(黒色土混入)
XII 暗茶褐色土
K 攪乱

第4図　2号塚 平面・土層断面図

（2）第2号塚（挿図4図，ＰＬ３－③④）

本塚は，１号塚から北東へ約６ｍ離れた道路際に位置しており，南東方向へ約７ｍの所に４号塚，道路際東方向へ約９ｍの所に３号塚がある。調査前の状況は，一面雑草に被われ，小円墳状を呈していた。また墳丘北側は道路に付設している側溝によって削られていた。

調査は１号塚と同方法でトレンチを設定し発掘した。（但し，墳丘北側のトレンチは，側溝で削られているので設定しなかった）。その結果，塚の大きさは，東西3.5m，南北３ｍ（推定）のほぼ円形を呈する塚で，旧表土から墳頂部までの高さは62cmであった。

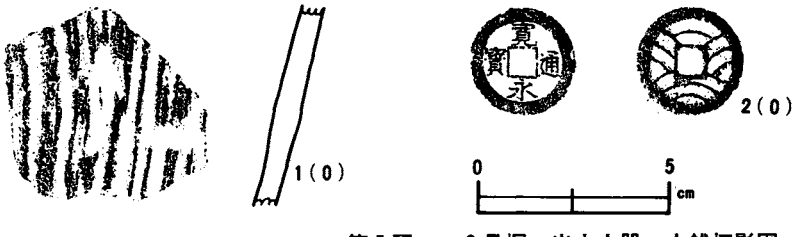
塚の構築状態は，旧表土（黒色土）を基盤として盛土をしているが，１号塚と同様に全体的に軟弱で叩いて固めている様子はみられなかった。墳丘土層セクションで観察すると，旧表土の上に焼土の混入した暗褐色土を水平に積み，さらに茶褐色土を積み上げている。旧表土以下の自然堆積層は，若干の攪乱を除いて１号塚と同様のノーマルな堆積を示していた。

なお本塚からの出土遺物は，皆無であった。

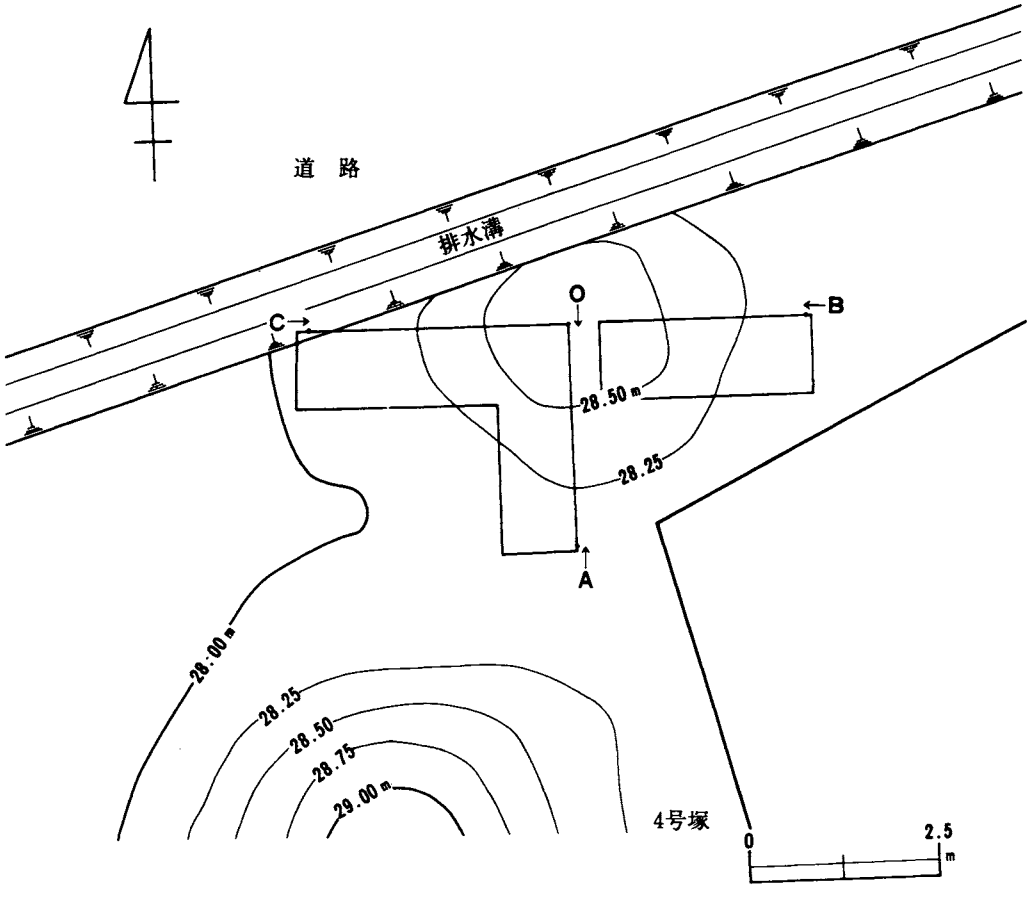
（3）3号塚（挿図５，６図　ＰＬ４－①②.）

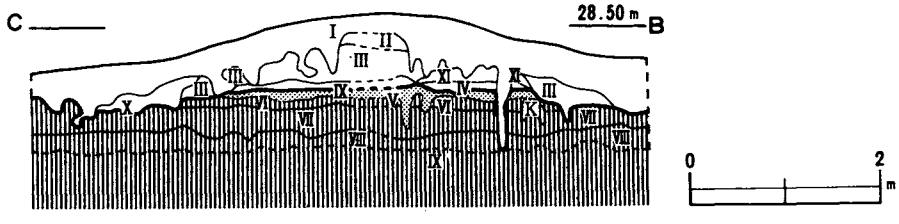
本塚は，２号塚から東へ約９ｍの道路際に位置している。本塚から南へ約８ｍの所に４号塚がある。調査前の状況は，２号塚と同様に墳丘北側を道路付設の側溝によって削られていた。

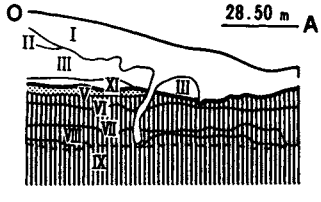
調査は，２号塚と同様に北側を除３本のトレンチを設定し発掘した。その結果，塚の大きさは，東西3.4m，南北2.8m（推定）のほぼ円形を呈する塚で，旧表土から墳頂部までの高さは76cmであった。本塚群中最小規模のものである。



第５図　　３号塚　出土土器・古銭拓影図







Ⅰ	表土	Ⅶ	暗褐色土
Ⅱ	暗褐色土	Ⅷ	漸移層
Ⅲ	暗茶褐色土	Ⅸ	ソフトローム
Ⅳ	暗褐色土(焼土混入)	Ⅹ	茶褐色土(黒色混入)
Ⅴ	黒色土(旧表土)	Ⅺ	暗褐色土(黄色土混入)
Ⅵ	茶褐色土	K	攪乱

第6図　3号塚　平面土層断面図

塚の構築状態は，旧表土（黒色土）を基盤として盛土をしているが，全体的に軟弱で叩いて固めている様子はみられなかった。墳丘土層セクションで観察すると，旧表土の上に焼土の混入した暗褐色土を水平に積み，次に暗茶褐色土を水平に，さらに暗褐色土を積み上げている。旧表土以下の自然堆積層は，若干の攪乱を除いて１号塚と同様にノーマルな堆積を示していた。

なお本塚からの出土遺物は，墳丘上部の表土層から古銭（寛永通宝）１枚と土器片１片であった。

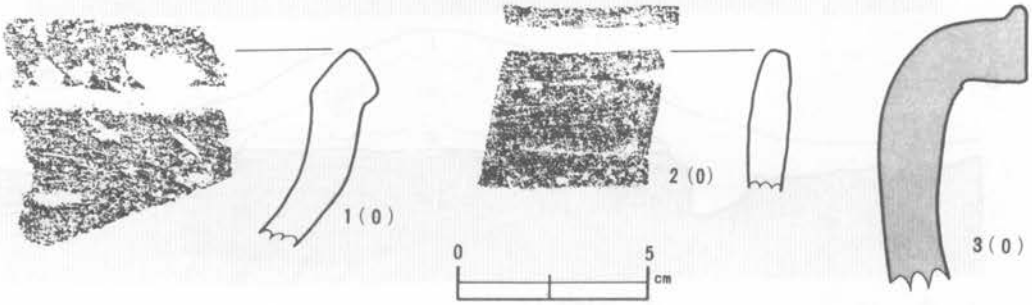
（４）４号塚（挿図７，８図　PL４－③④，）

本塚は，３号塚から南へ約８ｍの所に位置している。調査前の状況は，１～３号に比べると現地表から墳頂部までの比高が高い。

調査は，１号塚と同様に磁北を基準とした十字トレンチを設定して発掘した。その結果，塚の大きさは，東西　６　ｍ，南北　６　ｍのほぼ円形を呈する塚で，旧表土から墳頂部までの高さは1.25ｍ であった。

塚の構築状態は，旧表土（黒色土）を基盤として盛土をしているが，全体的に軟弱であった。墳丘土層セクションで観察すると旧表土の上に焼土の混入した暗褐色土を水平に積み，その上にほぼ半円状に暗褐色土を積んでいる。旧表土以下の自然堆積層は，１号塚と同様にノーマルな堆積を示していた。

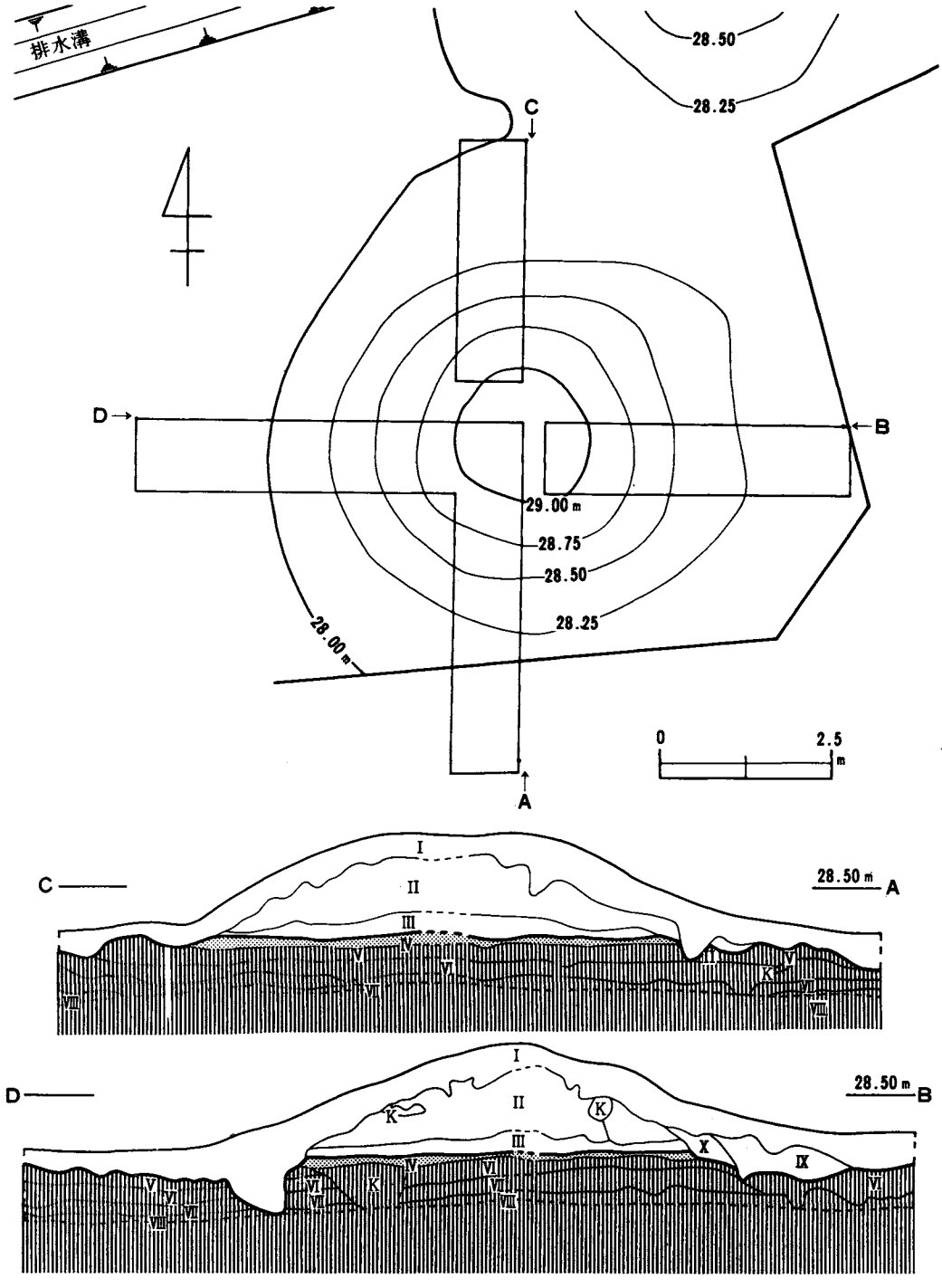
なを本塚からの出土遺物は，封土内上部から土器片が３片であった。



第７図　　４号塚　出土土器拓影図

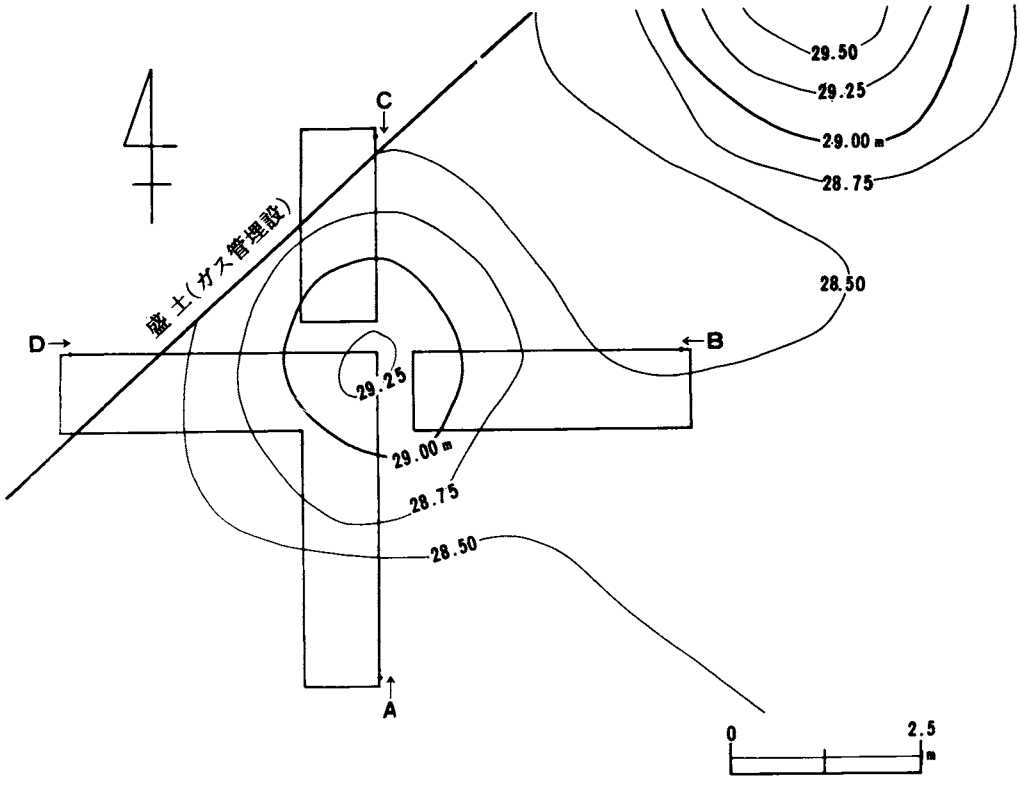
（５）５号塚（挿図９，10図･PL５－①②，）

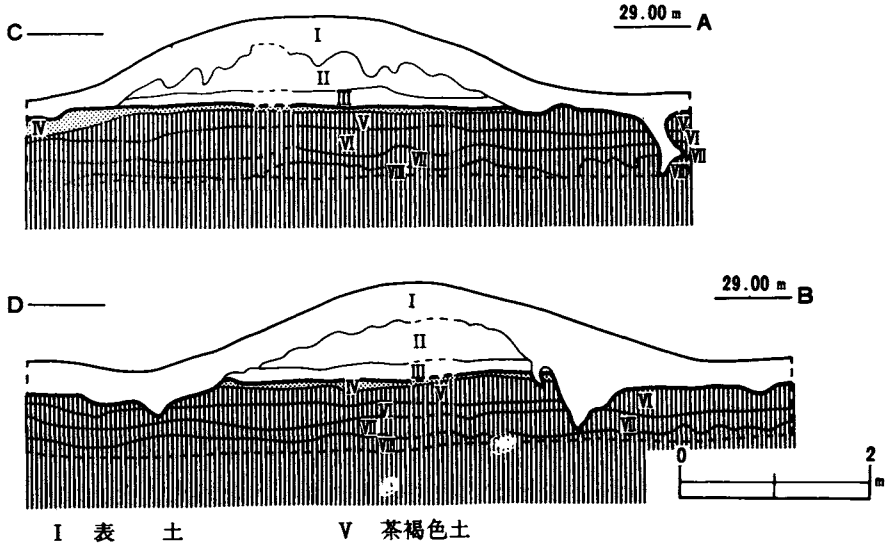
本塚は，１～３号とは，離れており４号から南東へ約18ｍの所に位置しており，北東へ



I 表　土
II 暗褐色土
III 暗褐色土(焼土混入)
IV 黒 色 土(旧表土)
V 茶褐色土
VI 暗褐色土
VII 漸移層
VIII ソフトローム
IX 暗褐色土(黄色土混入)
X 黄褐色土
XI 褐色土(黒色土混入)
K 攪　乱

第8図　4号塚 平面・土層断面図





I	表　土	V	茶褐色土
II	茶褐色土	VI	暗褐色土
III	暗褐色土(焼土混入)	VII	漸 移 層
IV	黒 色 土(旧表土)	VIII	ソフトローム

第9図　5号塚 平面・土層断面図

約７ｍの所に６号塚がある。本塚と６号塚は，道路から南へ約18ｍの地点に２基並んで位置している。

調査は，磁北を基準に十字トレンチを設定し発掘した。その結果，塚の大きさは，東西3.6ｍ，南北4.2ｍのほぼ円形を呈する塚で，旧表土から墳頂部までの高さは，１ｍであった。

塚の構築状態は，旧表土（黒色土）を基盤として盛土をしており全体的に軟弱であった。墳丘土層セクションで観察すると旧表土の上に焼土の混入した暗褐色土を水平に積み，さらに茶褐色土をほぼ半円状に積みあげている。旧表土以下の自然堆積層は，１号塚と同様のノーマルな堆積を示していた。

なお本塚からの出土遺物は，墳丘上部表土内より土器片２片であった。

第10図　５号塚 出 土 土 器 拓 影 図

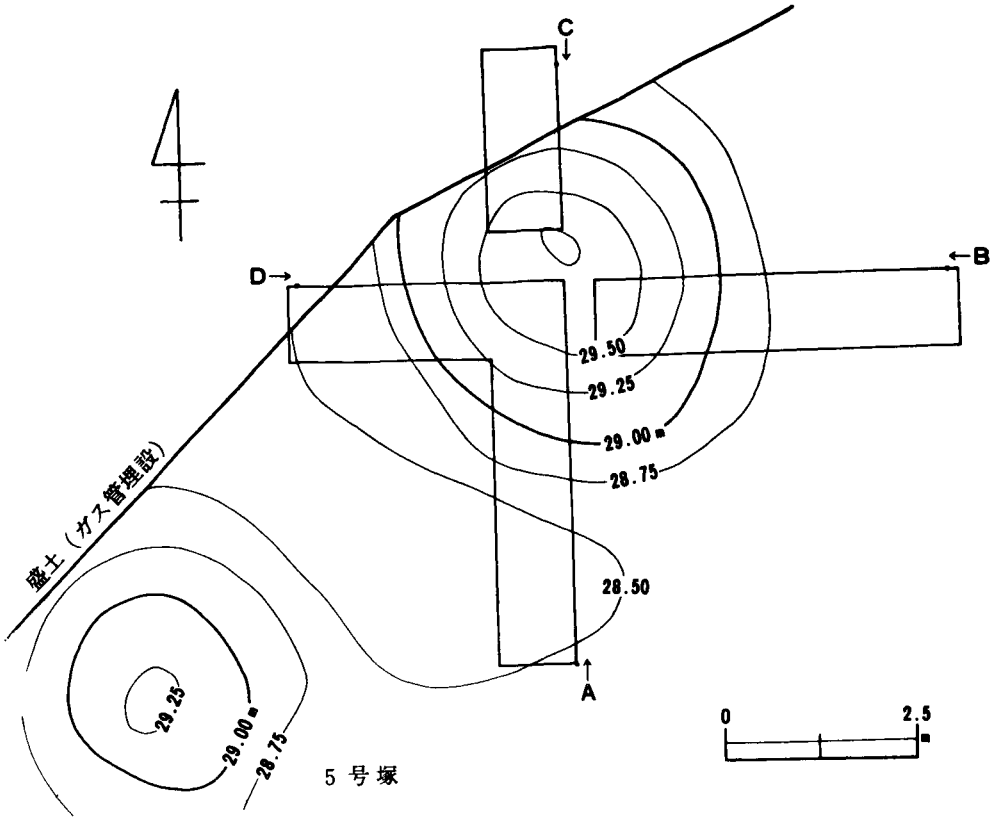
（６）**６号塚**（挿図11図　ＰＬ５－③④，）

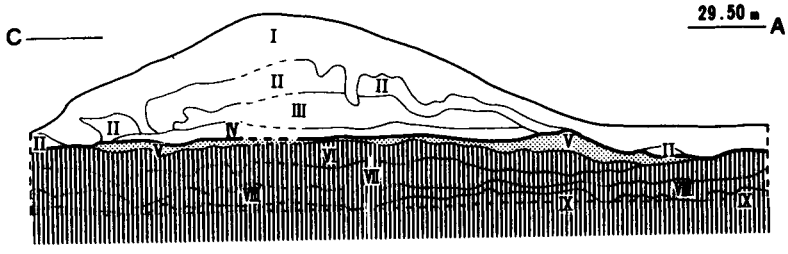
本塚は，５号塚から北東へ約７ｍの所に位置しており，道路際からは南へ約14ｍの所である。調査前の状況は，一面雑草に被われた小円状を呈していた。

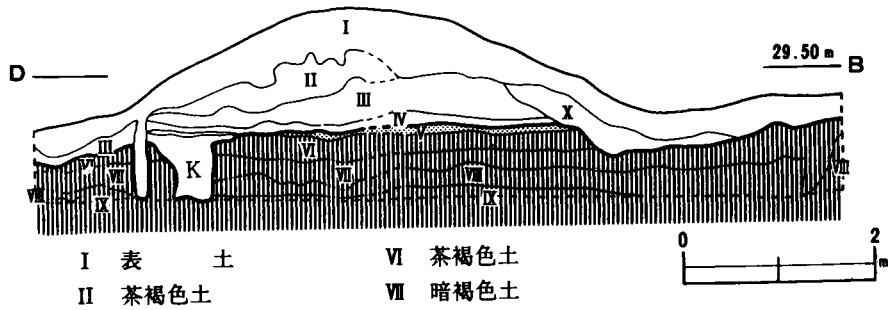
調査は，磁北を基準として十字トレンチを設定し発掘した。その結果，塚の大きさは，東西５ｍ，南北５ｍの円形を呈する塚で，旧表土から墳頂部までの高さは，1.3ｍであった。

塚の構築状態は,旧表土(黒色土)を基盤として盛土をしており全体的に軟弱であった。墳丘土層セクションで観察すると旧表土の上に焼土の混入した暗褐色土を水平に積み，さらに暗褐色土，茶褐色土を順に積み上げている。旧表土以下の自然堆積層は，１号塚と同様のノーマルな堆積を示していた。

なお本塚からの出土遺物は，皆無であった。







I 表　　土
II 茶褐色土
III 暗褐色土
IV 暗褐色土(焼土混入)
V 黒 色 土(旧表土)
VI 茶褐色土
VII 暗褐色土
VIII 漸 移 層
IX ソフトローム
X 暗褐色土(黄色混入)
K 攪　　乱

第11図　6号塚 平 面 ・ 断 面 図

（7）**7号塚**（挿図12,13図　PL6－①②,）

本塚は，道路の北側約14mの所に位置し，1号塚からは西へ約60m離れており，調査区域内では1基だけ単独に所在していた。

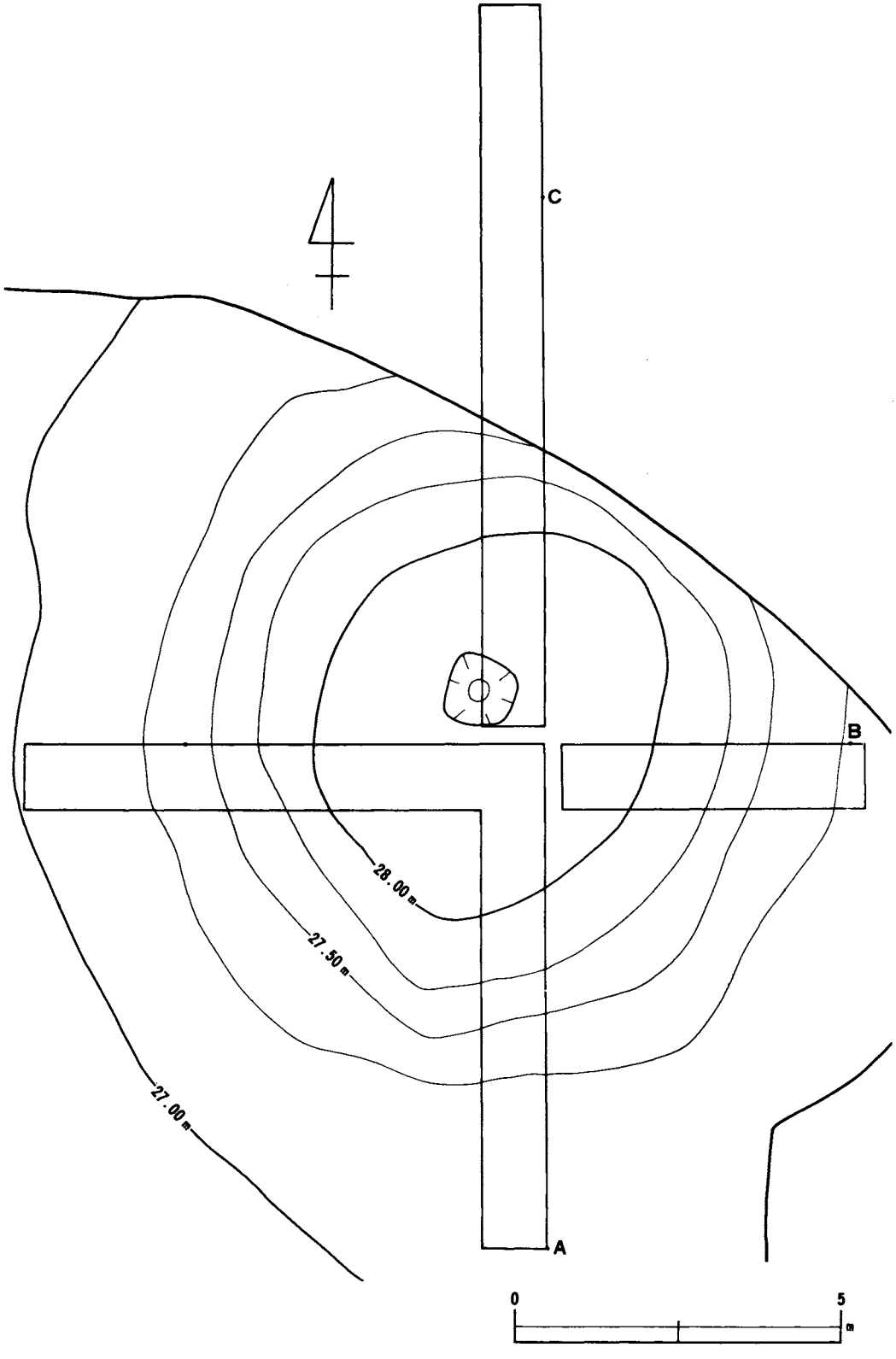
調査前の状況は一面雑草に被われ，松や雑木が墳丘にはえていた。形状は一見して，墳頂部に平坦面を広くもつ円墳状を呈する大きな塚であったが，大きさの割に墳頂部までの比高は低い。

調査は，墳丘上の松の木が伐採不可能のため，それを避けたかたちで十字トレンチを設定し発掘した。その結果,塚の大きさは,径が約東西5.8m,南北7.6mを呈する塚で,旧表土から墳頂部までの高さは1.1mであった。また本塚は墳頂部が平坦面になっており，そのほぼ中央には，凹状のなだらかな浅い窪みがみられ，かっては供養塔その他の石造物が建っていた可能性もある。

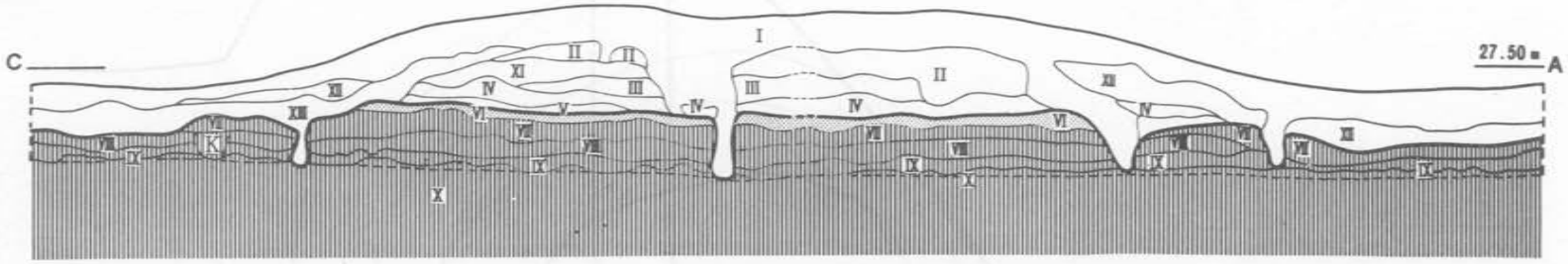
塚の構築状態は，旧表土（黒色土）を基盤として，焼土の混入した暗褐色土が半分ぐらいとその上および残りの部分に淡暗褐色土が積まれ，さらに黒色土混入暗褐色土と暗褐色土が順に積み上げられていたことが墳丘土層セクションでわかる。旧表土以下の自然堆積層は，他の塚と同様にノーマルな堆積を示していた。

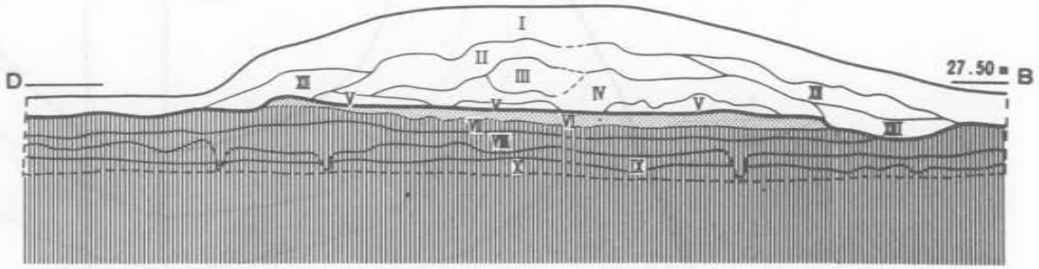
なお本塚からの出土遺物は皆無であった。

（鈴木）



第12図　7号塚 墳 丘 測 量 図





Ⅰ　表　　土
Ⅱ　茶褐色土
Ⅲ　暗褐色土（黒色土を混入）
Ⅳ　淡暗褐色土
Ⅴ　暗褐色土（焼土を混入）
Ⅵ　黒 色 土（旧表土層）
Ⅶ　茶褐色土
Ⅷ　暗褐色土
Ⅸ（漸 移 層）
Ⅹ　ソフト・ローム
Ⅺ　暗褐色土（黄色土を混入）
Ⅻ　褐 色 土
XIII　暗茶褐色土

第13図　　7号塚 土 層 断 面 図

第三節　古墳の概観と調査方法

昭和49年12月の踏査時には区域内はすでに伐採されており，地膨れ十数ヶ所が確認された。径２ｍ程の小規模のものから，径20ｍ，高さ３ｍ程の規模のものまでが点在したが，北からそれぞれに名称を付してゆき順次発掘調査を行なった。その結果古墳は８号から14号の７基となり，そのうち前方後円墳３基を含むことが判明した。当初は平坦面上の円墳２基と斜面に位置する小円墳数基であろうと考えており，調査方法は磁北を基準として墳頂部で直交する十字トレンチの設定，周溝の全掘，及び関東地方東部の後期古墳一般に認められる埋葬施設の偏在性を考慮し，墳丘はできるだけ精査することを目的とした。各古墳の調査方法の差異はそれぞれの項で示しているとうりである。

第四節　古墳７基の遺構及び遺物

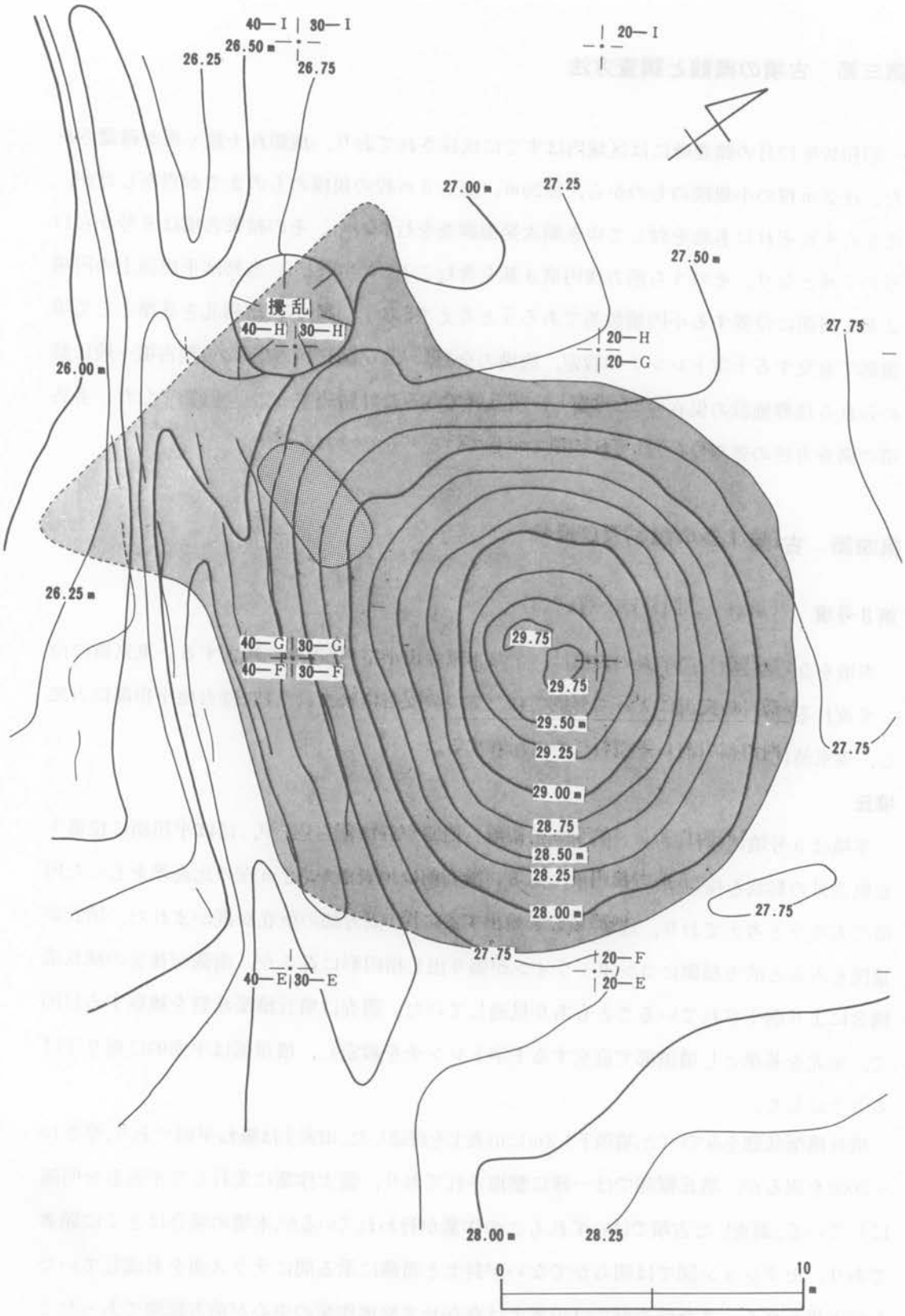
第８号墳　（第14～23図ＰＬ6－③,7.8）

本墳を含む調査した７査の古墳は，千葉市東寺山小字戸張作を地籍とする。東京湾に沿って流れる都川の支流によって形成された２つの支谷に狭まれた枝状様台地平担部に占地し，東京湾内湾都川河口を望む位置に所在する。

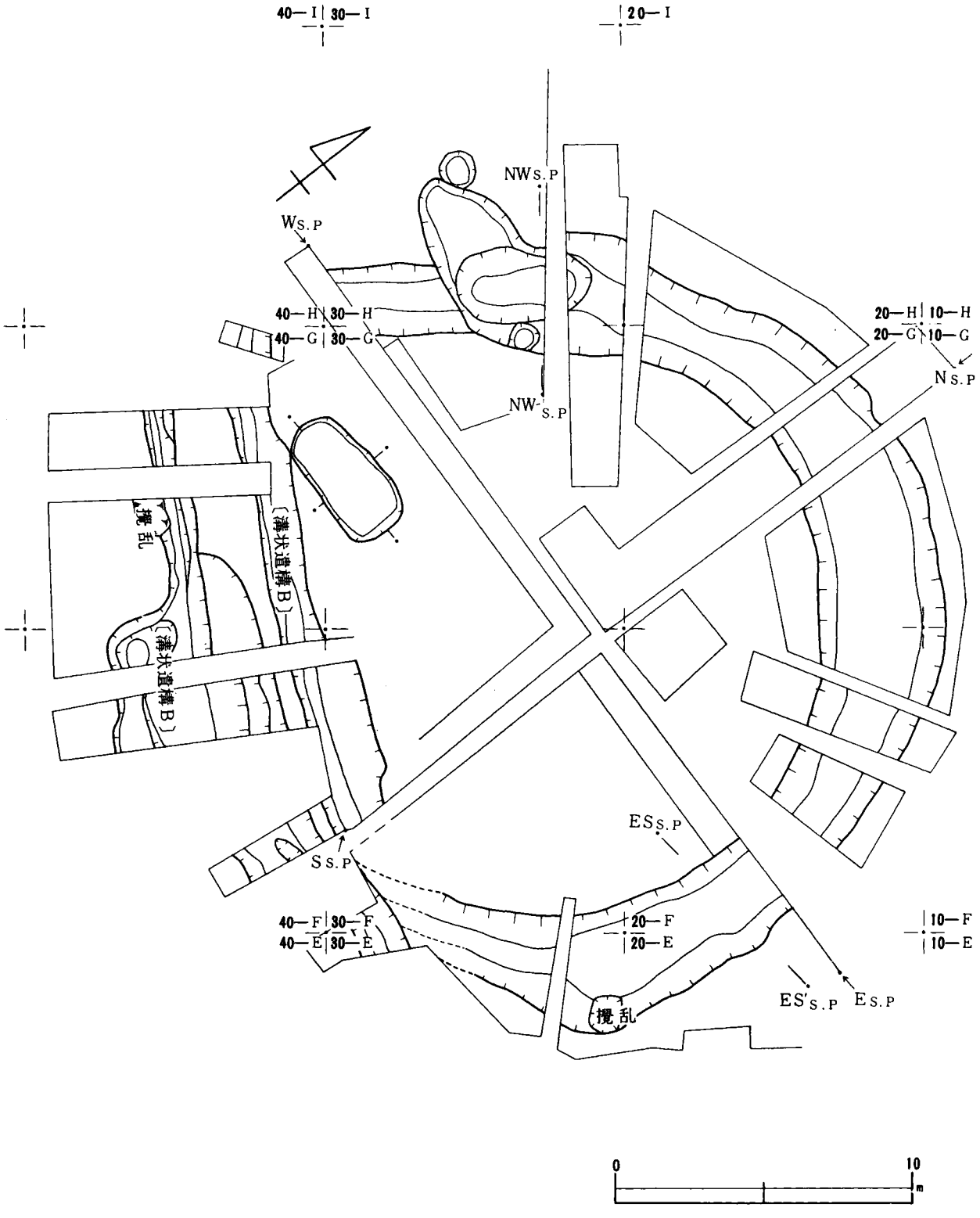
墳丘

本墳は９号墳の西約30ｍ（墳頂間の距離）西側が谷に落ち込むが，ほぼ平担面に位置する帆立貝の形状を採る前方後円墳である。調査前は地表面から２ｍ程の比高差をもった円墳であろうと考えており，埋葬施設を検出するに至り前方部の所在が握かまれた。墳丘測量図をみると前方部側にコンターラインが張り出し楕円形に巡るが，南側が後世の構状遺構Ｂにより削平されていることもあり見過していた。調査は墳丘構築状態を観察する目的で，磁北を基準とし墳頂部で直交する十字トレンチを設定し，墳頂部は平面的に掘り下げることにした。

墳丘構築状態をみていくと,墳頂下3.2ｍに旧表土を確認した。旧表土は概ね平坦であり,厚さ10～20cmを測るが，墳丘裾部では一様に整地されており，盛土作業に先行して平面形を明確にしている。調査した古墳ではいずれもこの作業が行われているが,本墳の場合はとくに顕著であり，セクション図では明らかでないが封土と周溝に至る間にテラス面を形成していたものと思われる。また前方部では旧表土は存在せず整地作業の中心が前方部側であったこ



第14図　8号墳 墳 丘 測 量 図

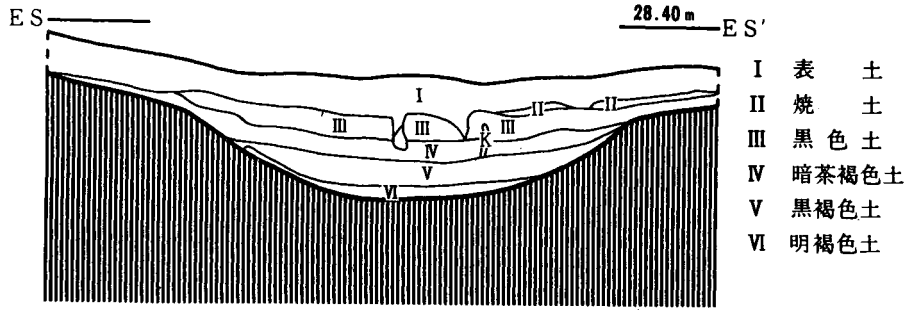


第15図　8号墳 周 溝 平 面 図

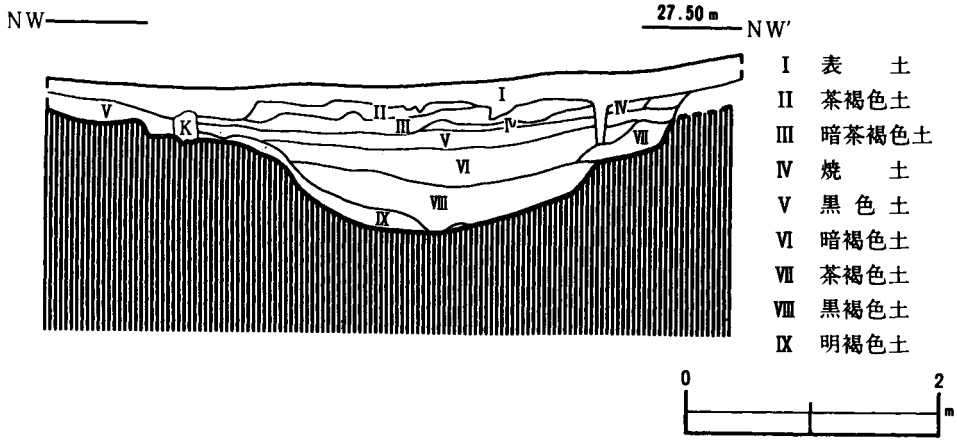
とが窺われる。また後円部端の整地部で土師器高坏片が出土したことが指摘される。

封土は最初墳丘裾部から中心に向い摺鉢状に積土されており，ソフトローム質の褐色土及び腐植土を主体としていることから，周溝上部か墳丘裾部の土量を積土したものと思われる。墳丘の上方でも同様に摺鉢状に積土されていくが，ハードロームの使用が多く，この土量は周溝開鑿のものであることは明らかである。なお，後円部封土内では埋葬施設は未検出であった。墳頂部から掘り下げていった時に土層の違いがみられたが，摺鉢状に積土されていったためである。他の墳頂部に埋葬施設を有する古墳のように墓壙の水平な基盤面がみられないことからも明らかである。

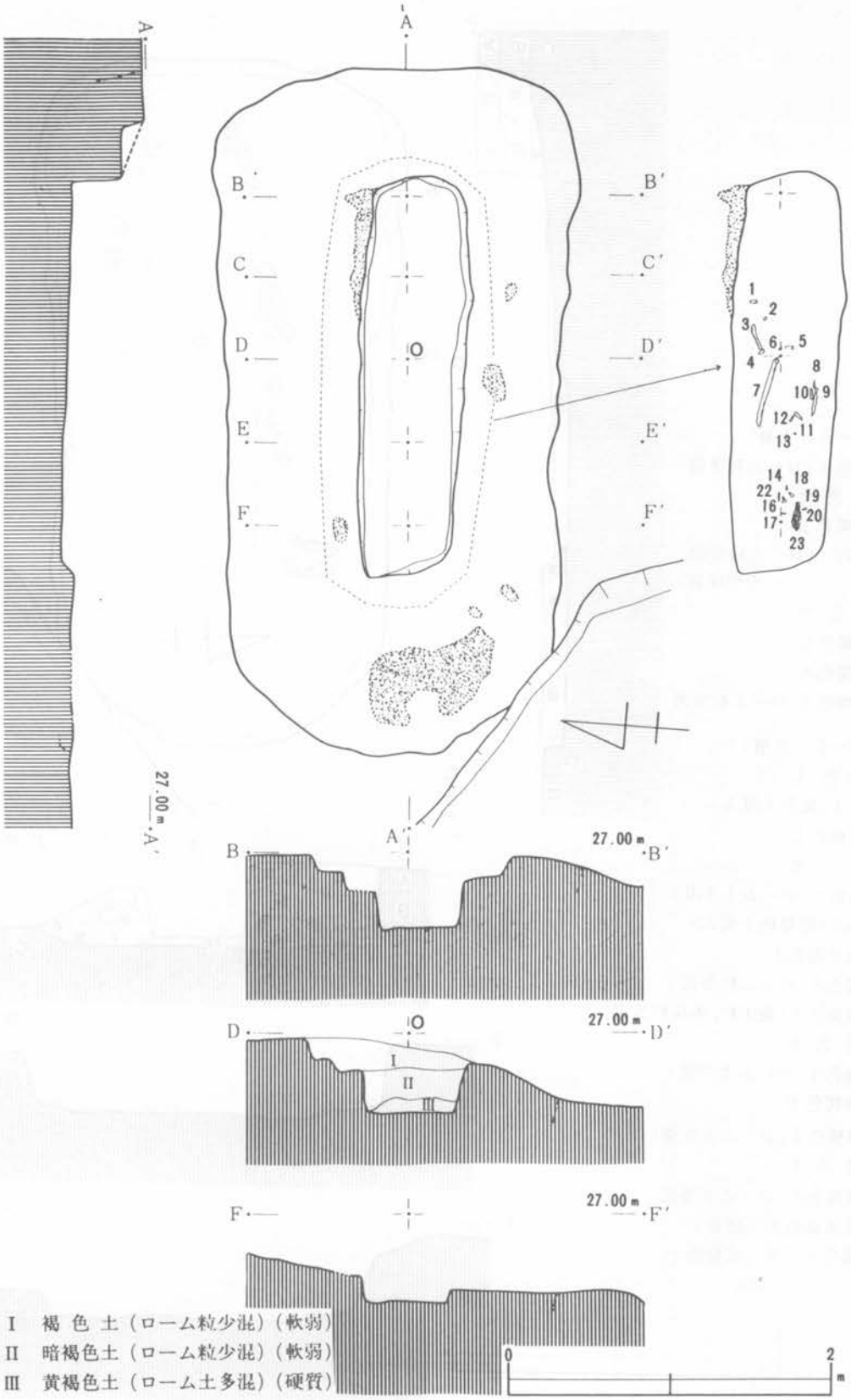
古墳の平面形は，周溝の全掘により明らかになった。周溝内縁が比較的明確に認められたが，西側が溝状遺構により削平され，さらに前方部端は浅い周溝であり検出されていないため，正確な数値は窺い知れない。大略を述べると，主軸長23.5m，後円部径19.5m，前方部長4.0m，前方部幅15.0mを測り，N—102°—Wの方向を向く前方後円墳である。



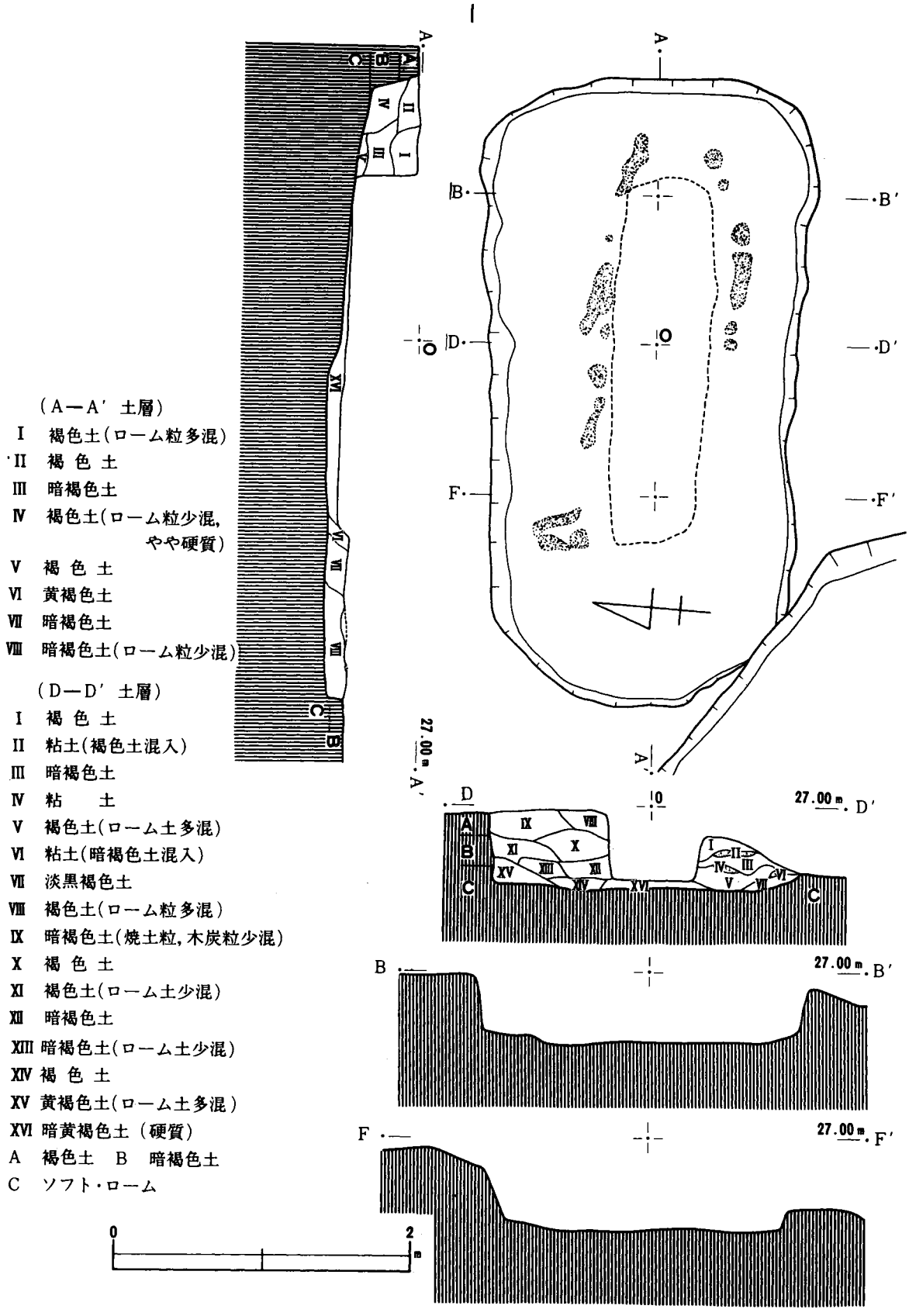
第16図　8号墳　周溝土層断面図



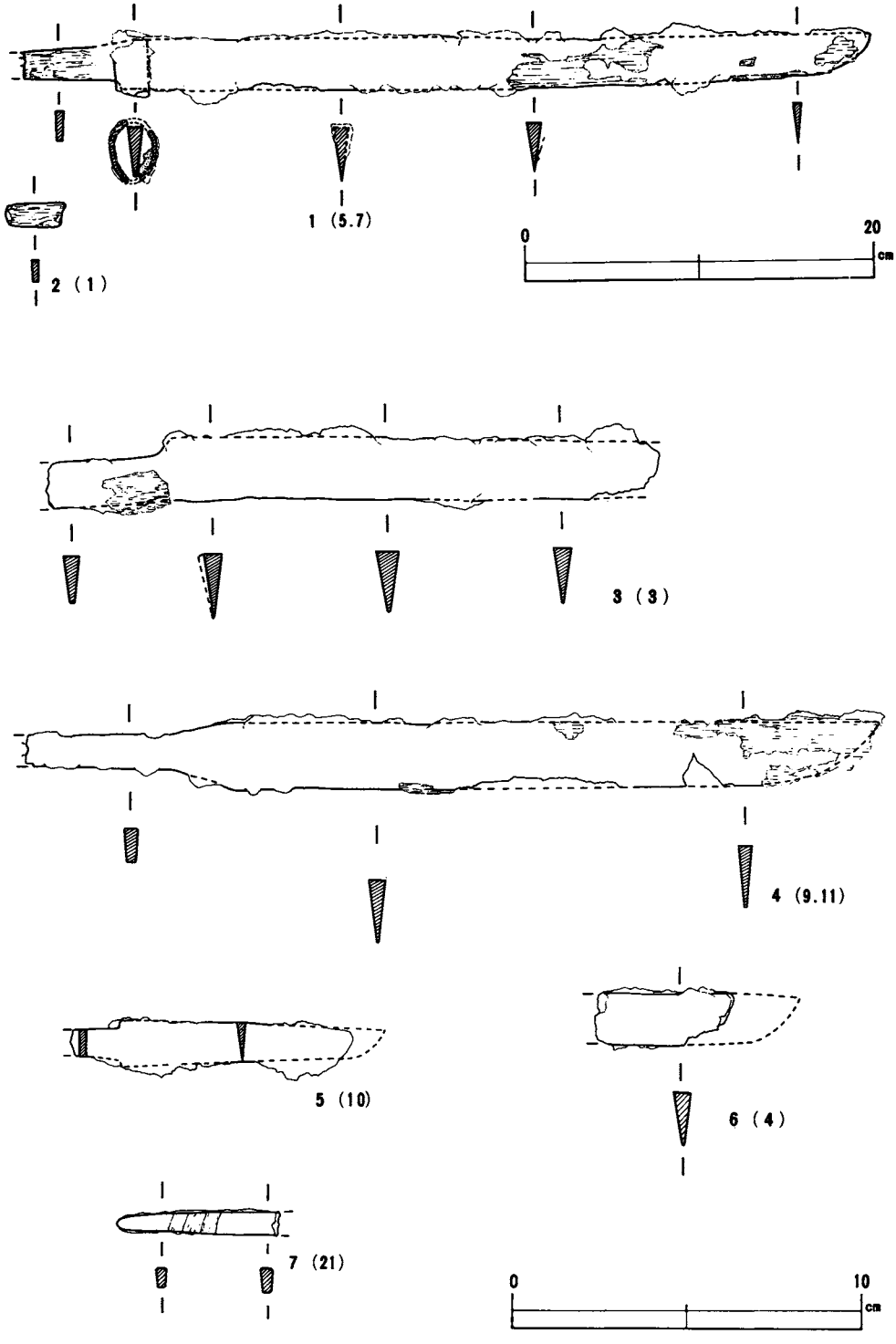
第17図　8号墳　周溝土層断面図



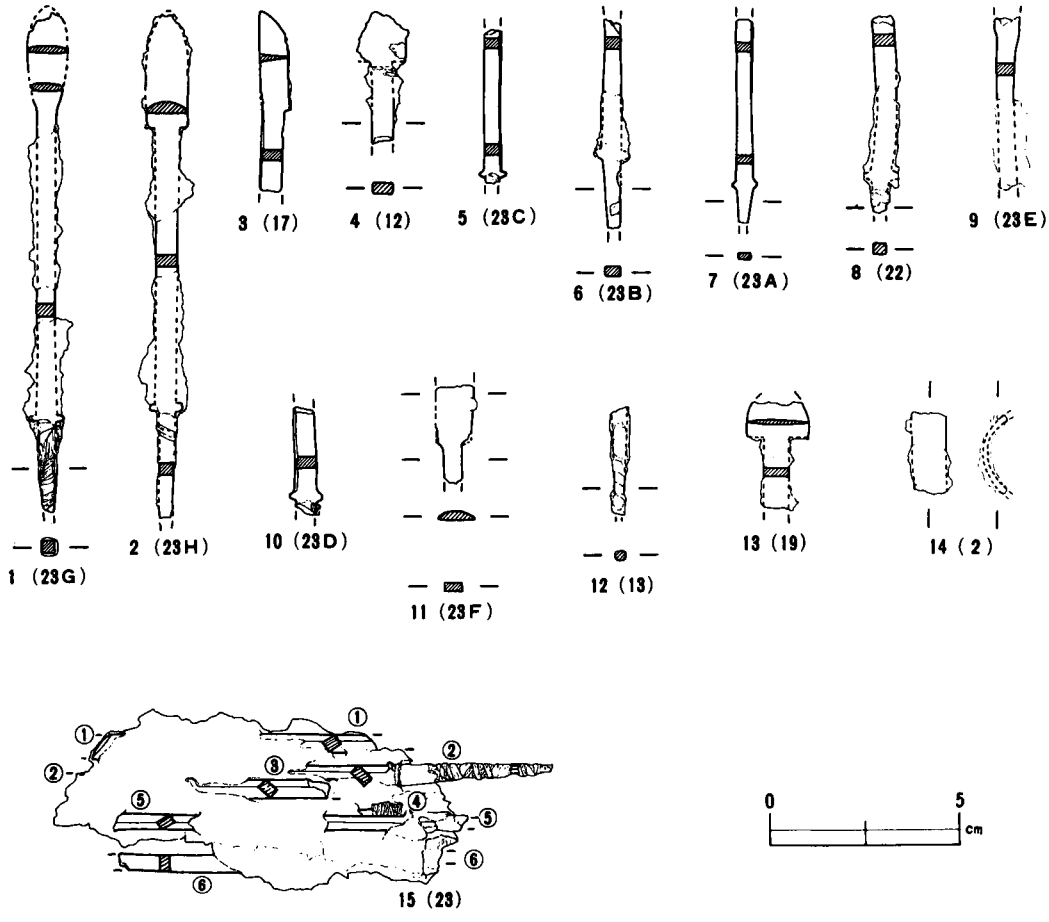
第18図　8号墳　埋葬施設平面・断面図・遺物出土状況図



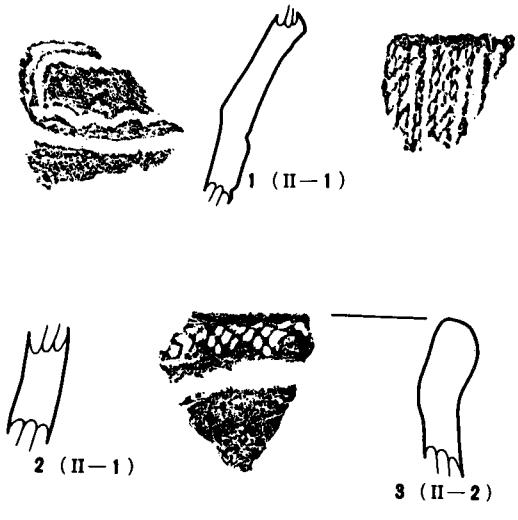
第19図　8号墳　埋葬施設外拡平面・断面図



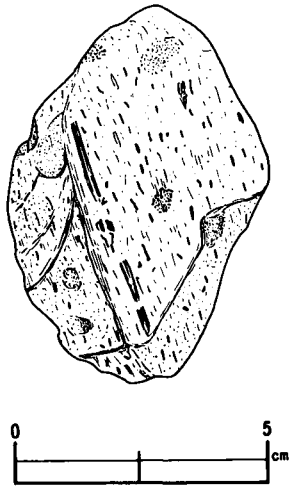
第20図　8号墳　埋葬施設出土遺物実測図　I



第21図　8号墳　埋葬施設出土遺物実測図　II



第22図　8号墳　出土土器拓影図



第23図　8号墳　墳丘内出土軽石

周溝

調査は最初十字トレンチで確認した後に数本のセクションベルトを残し，全掘を目的とした。断面図にみられるように，内外壁面ともに緩かな傾斜で開鑿されているが，本墳がもっとも明確に検出されている。周構の外側が旧表土のレベルよりも低いレベルであることは，各墳に共通していることであるが，墳丘構築に先立ち周辺部が大幅に整地されたことを示している。内壁は一様に開鑿されているが，外壁は同心円状に形成されず，上縁間の幅は2.5mから4.0m程を測る。溝底は平坦に掘られハードローム層に達している。周溝内の土層堆積状態はほぼ水平に埋っていたことが窺われる。前方部周溝は攪乱もあり明確に捉えられなかったが，ハードローム層の掘鑿はなされておらず，ソフトロームをやや穿った浅い周溝であったと思われる。また周溝内からの遺物は一点も出土していない。

（高田）

埋葬施設　（第18・19図）

後円部墳丘調査過程において埋葬施設が検出されなかったことから，前方部～くびれ部にその存在を追求した。その結果，くびれ部において溝状遺構（Ｂ）の東壁に粘土と鉄鏃破片が検出され所在が明らかとなった。

埋葬施設は，地山を穿って墓壙を築いたものである。墓壙は長さ4.17m・幅2.06m・深さ約0.45mを測る。墓壙底面は中央部より西側が一段低くなるが，棺を埋置するにあたってこの段差をならすように硬質の暗黄褐色土が敷かれている。棺と墓壙との間は，褐色土・暗褐色土を主体とした土層によって充塡されているが，棺周辺には，検出面上（第17図）と中位付近（第18図）に粘土ブロックが棺をとりまくように散在している。

棺は木棺と思われ既に腐蝕しており，土壙状を呈している。この土壙内には，褐色土・暗褐色土・黄褐色土の土層が堆積していたが，最下層に堆積している黄褐色土は硬質である。土壙の規模は長さ2.43m・幅0.65m・深さ約0.4mを測り，棺も近似した規模を有していたものと思われる。

棺内からの出土遺物は，直刀・刀子・鉄鏃がある。直刀は，棺内の中央部で鋒を西側に刃部を北側に向けやや斜めの状態で出土した。刀子は，中央部北側より２口，東側より２口出土しているが，いずれも破損した状態で出土している。鉄鏃は，南西側において鋒を西側に向け約14本が一括した状態で出土しているが，この他にも破片の状態で５本が出土している。

埋葬施設出土遺物（第20・21図）

直刀（１・２）……三つに破損した状態で出土。(2)は(1)の茎尻と思われるが直接接合しない。身長43cmと短かく部分的に木質の遺存が認められる。茎は(1)の部分で5.5cm・(2)が34cmであり，接合はしないものの茎長は１０cm前後のものであろうと思われる。従って全長は約53cm前後となる。鋒はふくらを有する。棟は幅0.9cmを測り平棟造りである。関は両関である。この部分に鎺があり，幅1.8cm・厚さ0.02cm・推定長径3.8cm・推定短径2.6cmを測る倒卵形を呈する。鎺内側には一部ながら木質部の遺存が認められる。茎は幅1.7cm・厚さ0.5cmを測る。茎全体に木質が薄く遺存する。目釘孔は，(1)の破損部に僅少に見出せる。(2)の部分では見出すことが出来ず一孔のみであったものと思われる。

刀子（３～７）……(3)は鋒と茎の大半を欠損する。現存身長14.0cm・身幅1.8cm・棟幅0.7cmを測り平棟造りである。関は片関と思われ，刃関はない。茎は現存長3.4cm・幅1.3cm・厚さ0.45cmを測る一部ながら木質が遺存する。

(4)は茎の一部を欠損する。身長19.0cm・身幅1.9cm・棟幅0.5cmを測る。鋒は木質が薄く遺存するが，ふくらを有するものと思われる。関は両関であるが，明確な段差をもたず漸次細くなるものである。茎現存長は5.3cm・幅0.95cm・厚さ0.4cmを測る。茎破損部において目釘孔が僅少に遺存する。

(5)は鋒と茎の大半を欠損する。現存身長6.7cm・身幅1.3cmを測るが，身幅は鋒に向って漸次細くなるものである。棟幅0.25cmを測り，平棟造りである。関は両関である。茎現存長1.9cm・幅0.75cm・厚さ0.2cmを測る。

(6)は鋒付近の破片である，現存長4.0cm・幅1.45cm・棟幅0.5cmを測り，平棟造りである。

(7)は茎の破片である。刀子であるか明確ではないが，鉄鏃にしては太すぎるため一応刀子としておきたい。現存長4.6cm・幅0.65cm・厚さ0.35cmを測る。茎尻は丸味を有する。一部分ながら樹皮状のもので巻付けた痕跡が認められる。

鉄鏃（第22図）（1～13・15）……(1)・(2)・(5)～(7)・(9)～(11)は(15)と共に一括状態で出土。

(1)は鋒の一部と茎尻を欠損する。現存長12.95cm・茎長2.3cmを測る。鋒は両丸造と思われる。関は明確な段差をもたないが両関である。棘箆被鑿箭式に属する。茎に木質の遺存が認められる。木質部下には樹皮状のものが巻かれている。

(2)は鋒の一部と茎尻を欠損する。現存長13.05cm・茎長2.7cmを測る。鋒は片丸造りで両関である。棘箆被鑿箭式に属する。茎には樹皮状のものの巻付け痕が一部認められる。

(3)は箆被部下半を欠損する。現存長4.7cmを測る。鋒は片刃のもので，片関である。

(4)は鋒付近のものであるが鋒は大半が欠損する。現存長3.4cmを測る。鋒は片丸造か両

丸造か不明であるが広鋒のものと思われる。

(5)～(8)・(10)・(12)はいずれも箆被から茎にかけてのものである。(12)は茎部分のみであり，現存長 2.8 cmを測る。木質が遺存し木質部下には樹皮状のものが巻き付けられている。この他はいずれも棘箆被のものである。現存長は，(5)—4.05cm　(6)—5.45cm　(7)— 5.3 cm　(8)—5.15cm　(10)— 2.7 cmを測る。

(9)は箆被から鋒にかけてのもので，関は僅少ながら認められ両関と思われる。現存長4.5 cmを測る。

(11)は鋒の大半と箆被の大半を欠損する。鋒は片丸造りで両関である。現存長 2.5 cmを測る。

(13)は鋒の一部と箆被の大半を欠損する。鋒は両丸造で広鋒であり，両関である。現存長 2.7 cmを測る。

(15)は 6 本が一括となっているもので，これは(1)・(2)等にも見出せるが，黒色滑沢質のものが融着している。従って個々のものについては不明である。この黒色滑沢質のものが何であるかは不明である。

鎬（14）……刀子の鎬と思われる。幅0.9 cm・厚さ0.15cm現存長2.05cmを測り弧状を呈する。

旧表土下出土遺物（第22図・第23図）

いずれも後円部旧表土層下より出土したものである。1～3は縄文式土器で中期～後期に属するものである。

(1)は半截竹管状工具による沈線文によって文様が構成される。

(2)は撚糸文が施される。

(3)は口縁部被片で，口縁部に単節縄文が施される。

第14図に図示したものは浮石である。

9号墳　（第24図～32図ＰＬ9～12）

墳丘は，一面雑草，木根で覆われていたが一見して円墳状を呈していることが窺われた。墳丘の規模は周構の内径で約23 m，高さが旧表土から約 2.6 m を測る円墳であった。墳頂部には僅かながら平坦な面がみられる。

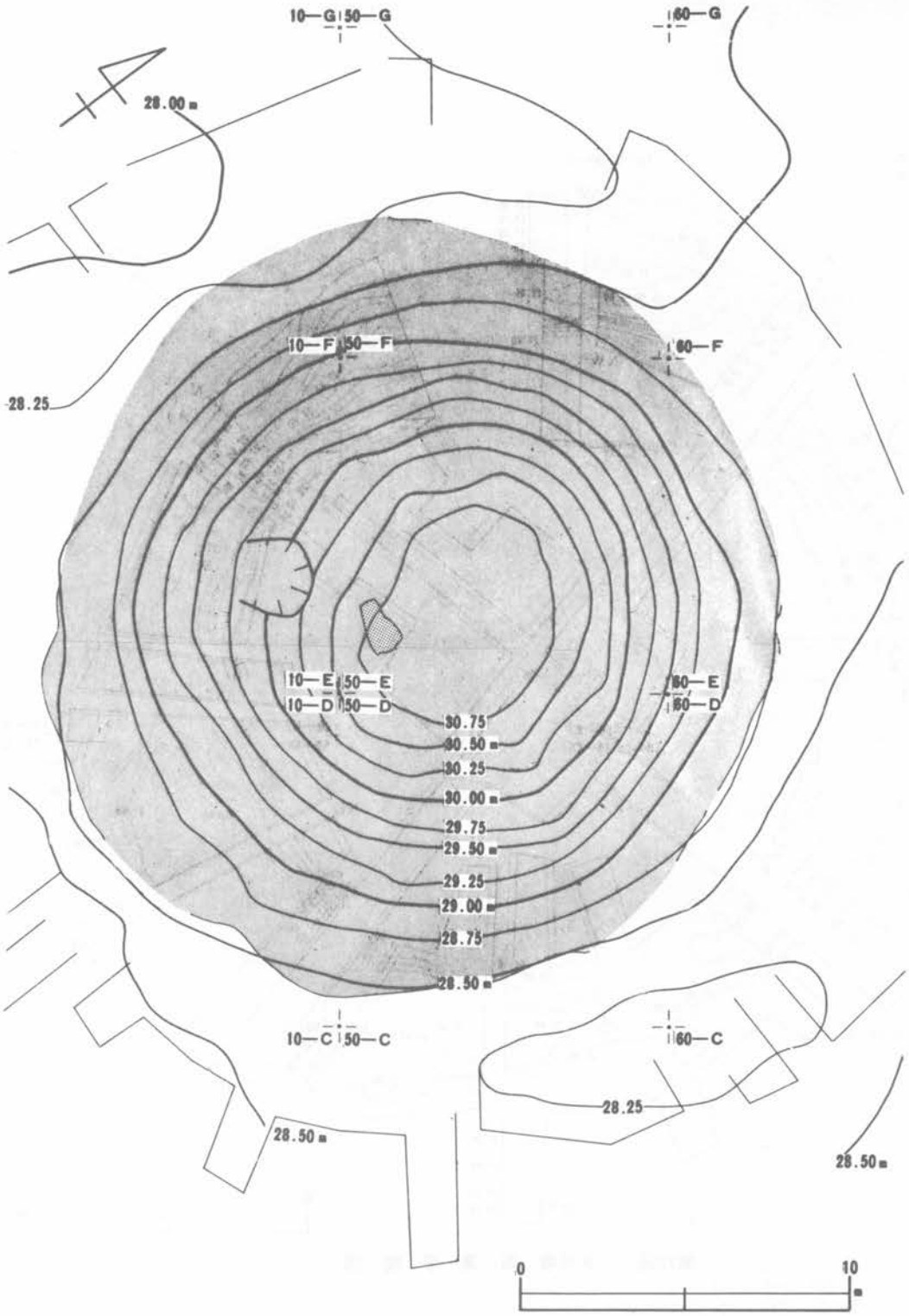
調査は，墳丘構築状態を観察するために磁北を基準として十字にトレンチを入れ，以下南から右廻りにA·B·C·Dとトレンチ名を付号した。さらに墳頂部には埋葬施設確認のため，グリットを 4 区設定し平面的に掘り下げることにした。その結果，墳丘構築状態は，古墳

構築当時の地表面（旧表土）を墳頂部から約2.6ｍ下に確認した。旧表土下の自然堆積層は、茶褐色土，暗褐色土，漸移層，ソフトロームへと達している。封土については，旧表土を基盤として，ローム粒混入茶褐色土，淡暗褐色土，暗茶褐色土を積み，その上にロームブロック混入土と腐植土を中心部に向けてほぼ摺鉢状に積み上げて，墳頂部ではロームブロック混入土をほぼ水平に積み上げている。A—Cトレンチ土層セクションで，このことは比較的明瞭に確認できる。

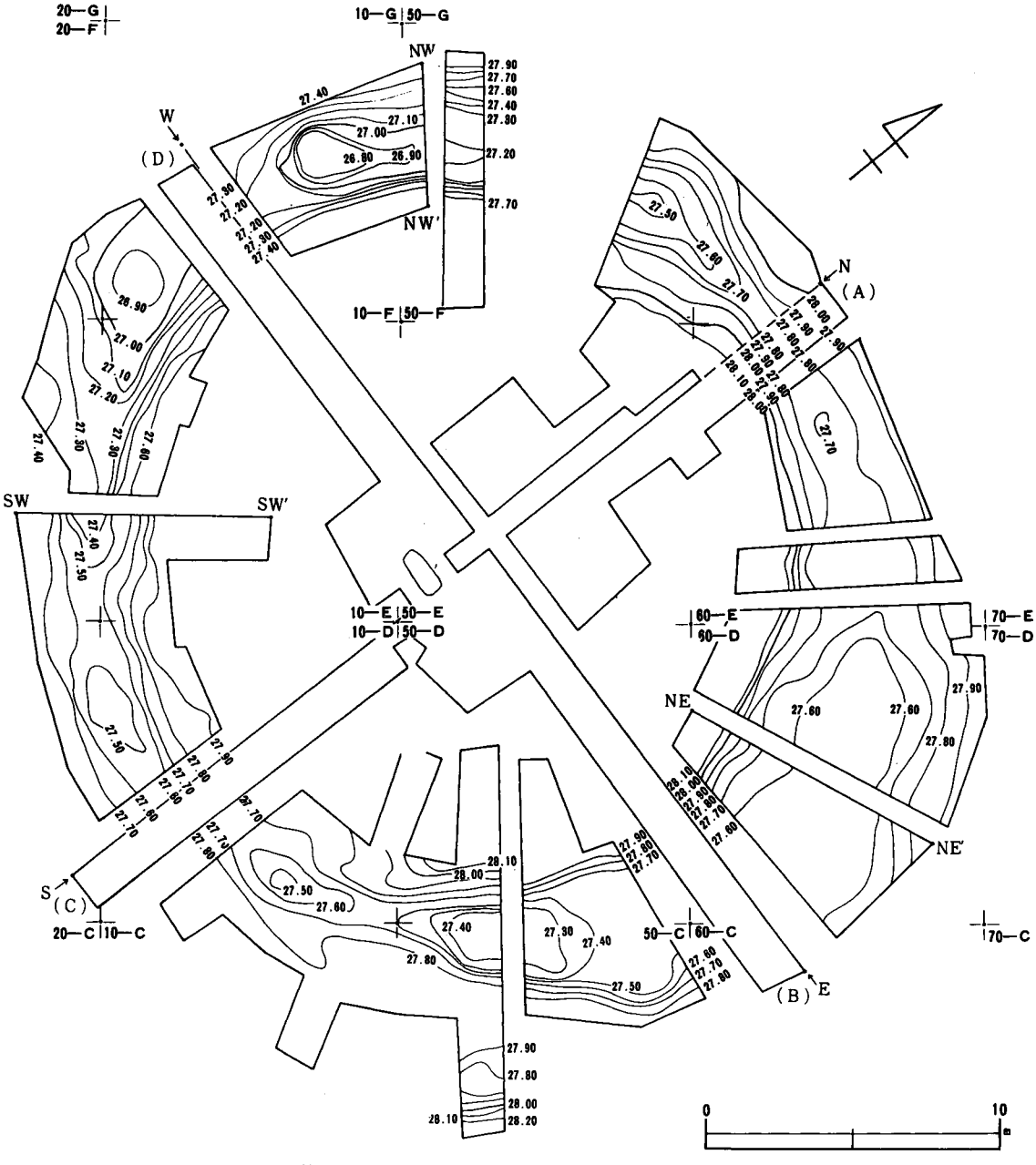
なお，墳丘内出土遺物としては，墳丘構築の際に混入したと思われる縄文土器片が12点出土した。

周溝

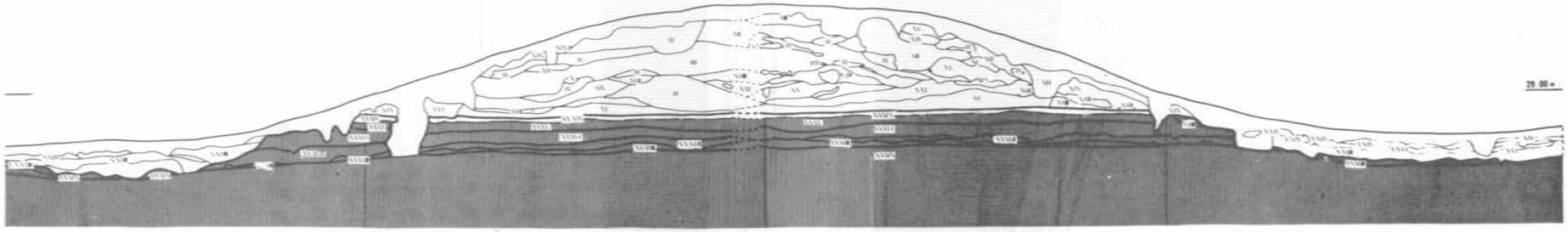
周溝は，古墳の形状，墳丘の規模を明らかにするために全掘に近い調査を目標とした。その結果，周溝はほぼ円周していることが判明した。断面は，ごく浅いU字形を呈していたと思われるが明瞭ではない。とくに北東側においては，内側の立ち上がりは比較的明瞭であったが，外側は立ち上がりがはっきりせず，なだらかな傾斜で外方へ移行している。

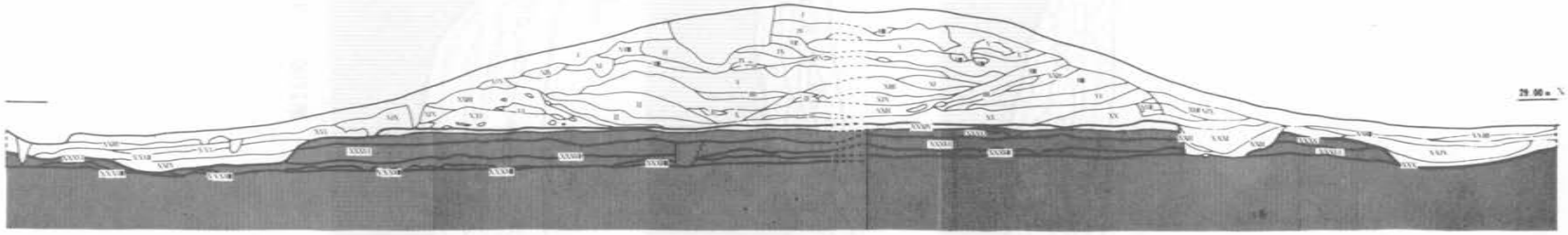


第24図　9号墳 墳 丘 測 量 図



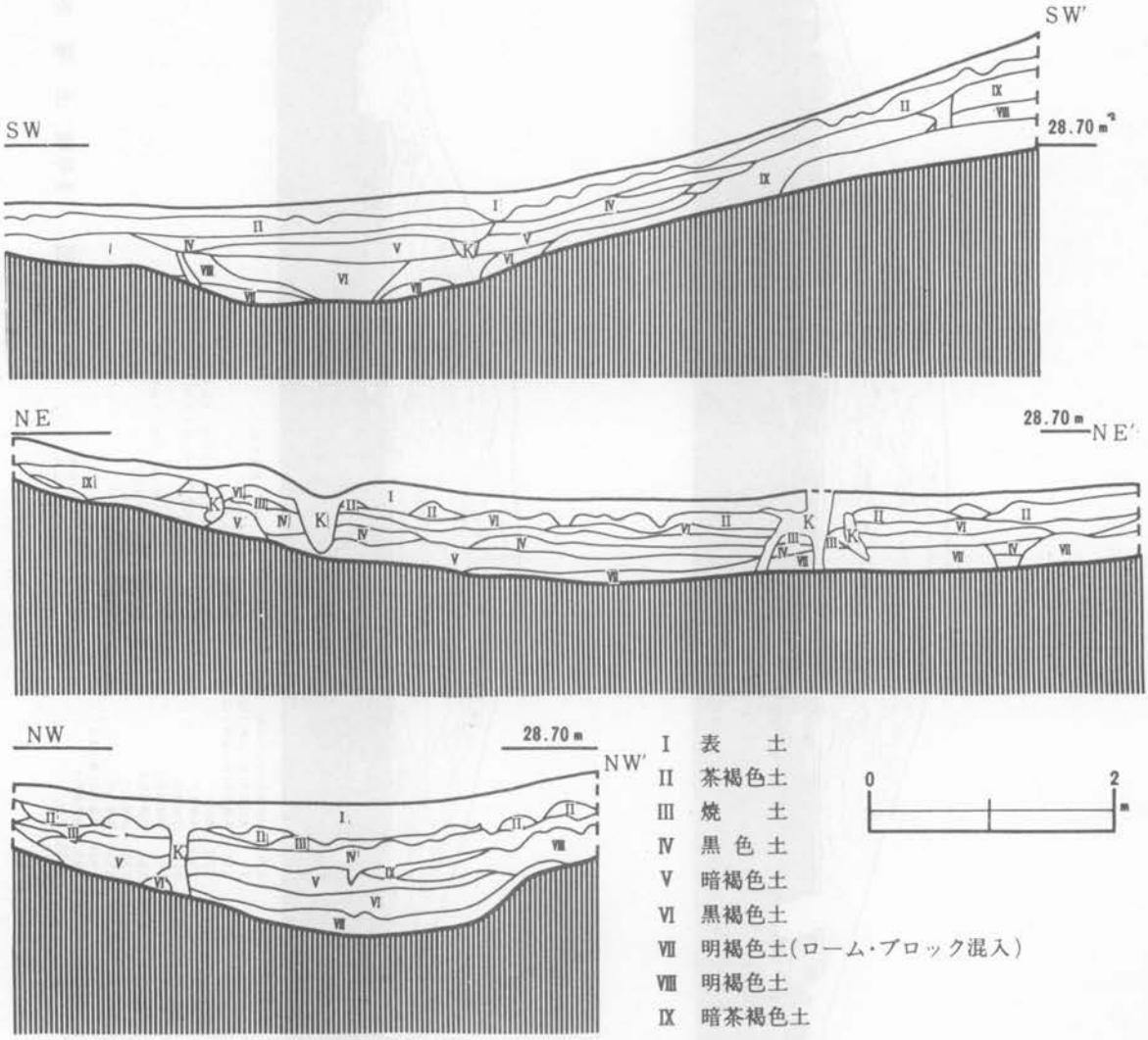
第25図　9号墳 周 溝 平 面 図



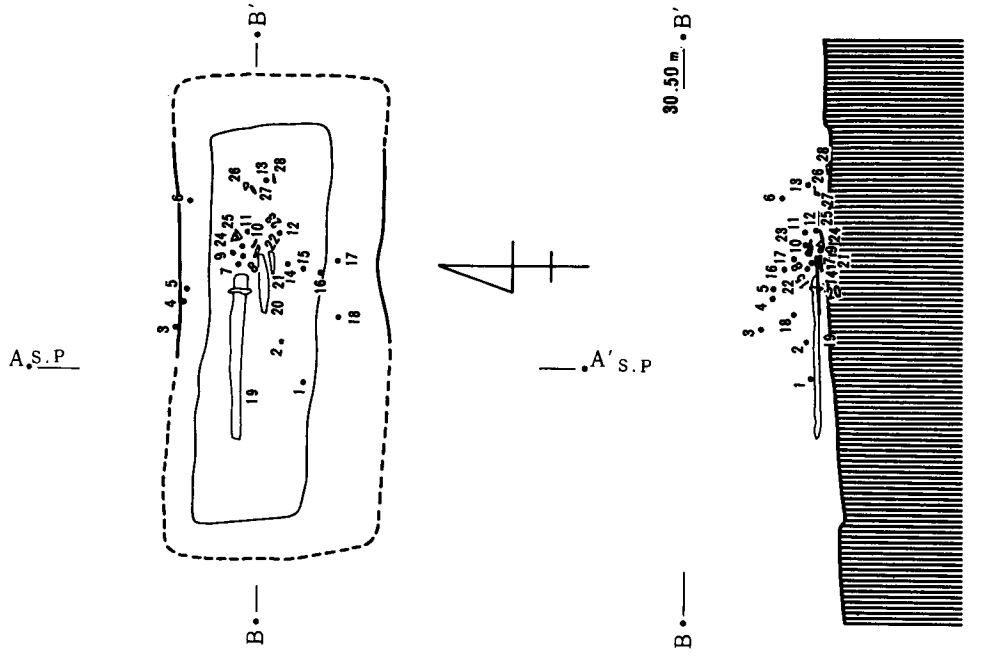


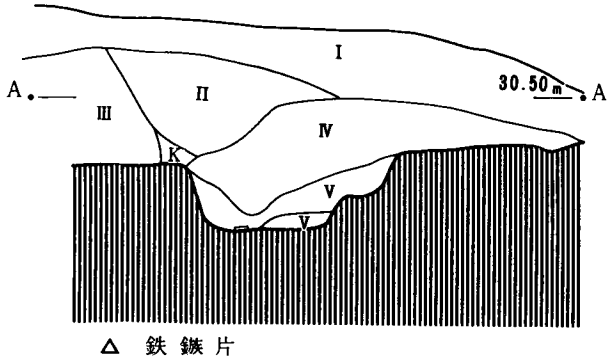
I　表　土
II　褐色土(ローム・ブロック層)
III　褐色土(大塊ローム・ブロック)
IV　褐色土(小塊ローム・ブロック)
V　褐色土(ローム・ブロック多量混入)
VI　褐色土(ローム・ブロック混入)
VII　茶褐色土(ローム・ブロック混入)
VIII　暗褐色土(ローム・ブロック混入)
IX　淡茶褐色土(ローム・ブロック混入)
X　黒褐色土(ローム・ブロック混入)
XI　暗茶褐色土(ローム・ブロック混入)
XII　茶褐色土(ローム・ブロック少量混入)
XIII　暗褐色土(ローム・ブロック少量混入)
XIV　暗茶褐色土(ローム粒子混入)
XV　茶褐色土(ローム粒子混入)
XVI　茶褐色土(ローム粒子混入)
XVII　褐色土
XVIII　茶褐色土
XIX　黒褐色土
XX　淡暗褐色土
XXI　暗茶褐色土
XXII　淡褐色土
XXIII　茶褐色土
XXIV　茶褐色土(焼土まじり)
XXV　淡黒褐色土
XXVI　黒色土
XXVII　黒色土まじり茶褐色土
XXVIII　黒褐色土
XXIX　暗褐色土
XXX　暗褐色土(ローム・ブロック混入)
XXXI　暗茶褐色土(ローム・粒子混入)
XXXII　暗褐色土
XXXIII　黒褐色土(ローム・ブロック混入)
XXXIV　黒色土(旧表土)
XXXV　茶褐色土
XXXVI　暗褐色土
XXXVII　廃棄層
XXXVIII　ソフト・ローム層
XXXIX　ハード・ローム層

第26図　9号墳 土 層 断 面 図

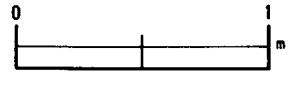


第27図　9号墳 周溝土層断面図



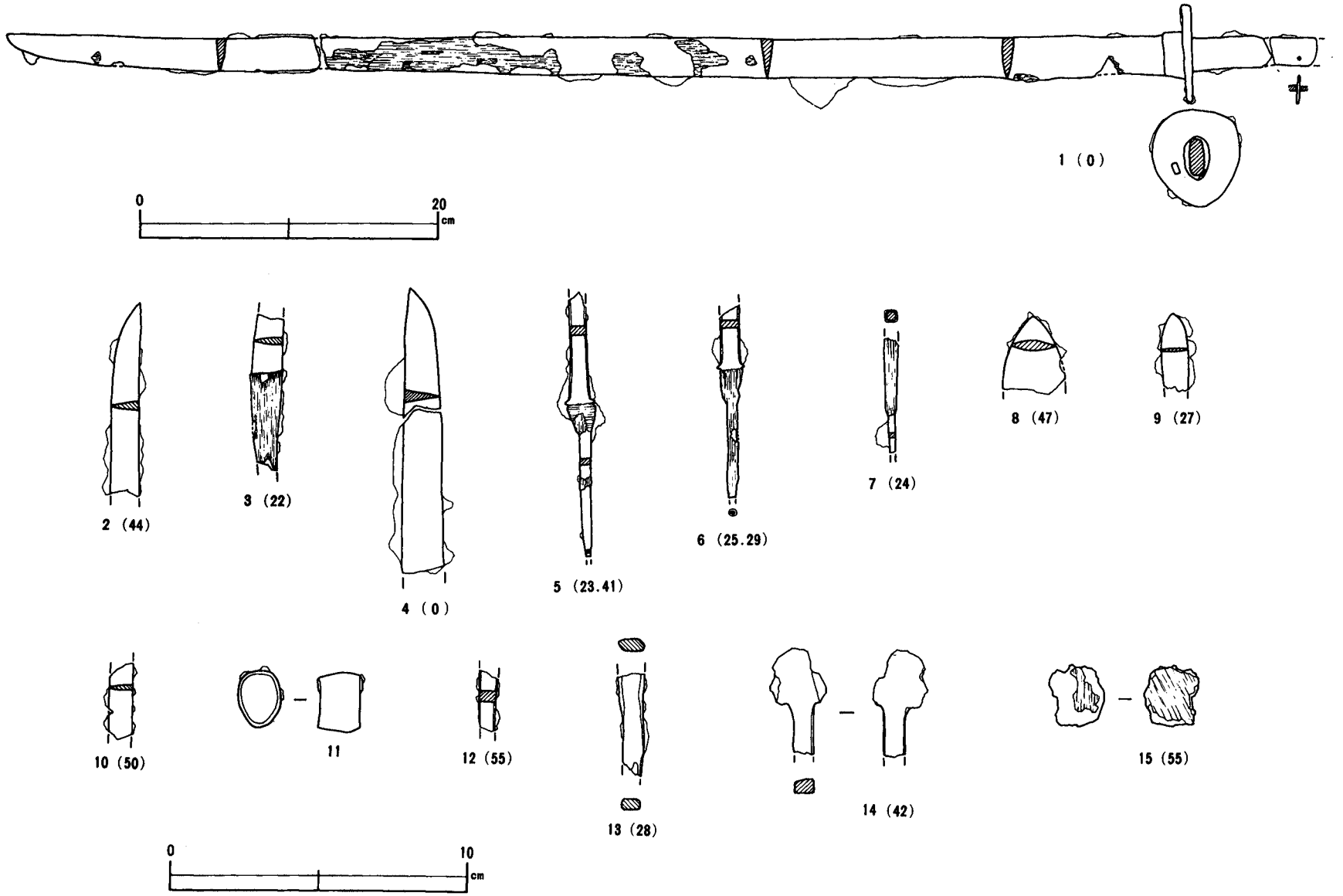


I 表　土
II 黒色土
III 明褐色土(ローム・ブロック混入)
IV 茶褐色土
V 茶褐色土(ローム・ブロック混入)



△ 鉄鏃片
● 小　玉

第28図　9号墳　埋葬施設平面・断面図



第29図　　9号墳　埋葬施設出土遺物実測図

Dトレンチでの計測値は幅約6.8m，深さ約70cm，Cトレンチでは幅約5.7m，深さ70cmで，比較的南東および南西側の周溝は，内，外とも立ち上がりが明瞭であった。

また，本古墳の墳丘と周溝の関係は，墳丘土層セクションで観察する限りにおいては，墳丘構築の際に旧表土を削り墳丘の周囲にテラスを設け，その外側から周溝を掘り込んでいることがうかがわれた。

周溝内出土遺物としては，Cトレンチ西側より土師器坏2個が正位に紡錘車を狭むような状態で同レベルから出土した。また，Bトレンチ南側より須恵器坏が，Bトレンチ南側より土師器埦形土器が出土した。さらにAトレンチ西側より土師器坏形土器2個体同レベルから出土した。これらの周溝内出土遺物は，すべて周溝底面から若干浮いていた。

埋葬施設

本古墳の埋葬施設は，墳頂部にグリットを4区設け平面的に下げたが，平面プランを明確に確認することができず，墳頂から約80cm掘り下げた段階で，Cトレンチ西側セクション(墳丘中心部より南へ約22cm)断面際に直刀の先端に近い部分(鋒が失なわれている)が検出された。セクションを精査したところ直刀出土レベルより約23cm上に埋葬施設の落ち込みらしきものを確認した。埋葬施設の向きは，直刀の位置から考えて主軸が東西を向いていると思われる。セクション計測後，セクションベルトをはずし埋葬施設精査にかかった。その結果，セクションベルトに残っていた部分の埋葬施設の上端，下端の幅は，それぞれ80cm，45cm，深さ30cmである。棺の主軸長は下端部位で175cmを測る。

埋葬施設出土遺物としては，直刀が鋒を西に刃を北に向いて埋葬施設中央やや西側，北壁より13cm南側に出土した。また，欠損していた直刀の鋒は，前者の5cm南側の柄部付近から，鋒を西に向けて出土した。その南側1.5cmのところに鋒と平行に刀子1本が出土した。玉類は，そのほとんどが直刀茎部の上面に集中して出土した。その他埋葬施設側壁部分からも出土している。さらに，埋葬施設内覆土を再精査したところ刀子片2点，鉄鏃片5点が検出された。

埋葬施設出土遺物

直刀（挿図29－1，PL－38）

現存長88cmで刀身の長さ80cm，茎部の長さ8cm，身幅は元幅で2.8cm，棟幅0.7cm（先端部付近0.6cm)。身について観察すると銹の付着も割合少なく遺存状態は良い。刀身には鎬がなく刃部断面は二等辺三角形を呈し，背角から漸次刃となる平造りである。刀身中央部付近から鋒方向にかけて鞘木が残存している。また，鋒付近には，僅かながら布目痕が残

存している。元重ね部分には鏃が残っている。関は両関造りで，茎部には目釘孔が１ヶ所ある。鍔は長径6.5cm,短径６cm，厚さ６mmの倒卵形で透孔が１ヶ所あいている。

刀子（挿図29—２，３，４，ＰＬ—38）

２は，現存長6.5cmで刃部のみ残っている。身幅９mm，棟幅３mmで刃部断面は二等辺三角形を呈している。

３は，現存長5.3cmで刃部元重ね付近から柄部にかけて残っている。身幅１cm,棟幅２mmで刃部断面は，両側面が多少ふくらんだ二等辺三角形を呈している。

４は，現存長9.7cmで刃部のみ残っている。身幅1.3cm，棟幅４mmで刃部断面は二等辺三角形を呈している。

鉄鏃（挿図29図—５，６，７，８，９,ＰＬ—38）

５は，現存長9.1cmで身の部分が欠損しているので，身の造りは不明。棘箆被である。

６は，現存長6.5cmで５と同様に身の部分の欠損により造りは不明。棘箆被である。

７は，現存長3.9cmで茎部末端のみ残存しており，身の造りおよび棘箆被であるか否かは不明。

８は，現存長2.6cmで身の部分のみ残存しており，造りは広鋒両丸造りと思われる。棘および箆被の有無は不明。

９は，８と同様に身の部分のみ残存しており，現存長は2.5cmで狭鋒両丸造りと思われる。棘および箆被の有無は不明。

その他（挿図29—10，11，12，13，14，15，ＰＬ—37）

10は，現存長2.5cmで断面は，二等辺三角形に近い形を呈しており，恐らく刀子の刀身の一部と思われる。

11は，刀子の鏃と思われるが，10で記した刀子片に伴うものかどうか不明。縦２cm，横1.8cm,長径1.9cm，短径1.3cmを測る。

12は，現存長2.1cmで鉄鏃の茎部の一部と思われるが判然としない。

13は，現存長3.2cmで断面は，上部が楕円形に近く，下部はほぼ隅丸長方形に近い形である。性格は不明。

14は，現存長3.6cmで下部の茎状部分の断面は長方形を呈しているが，上部は，錆の付着で判然としない。性格は不明。

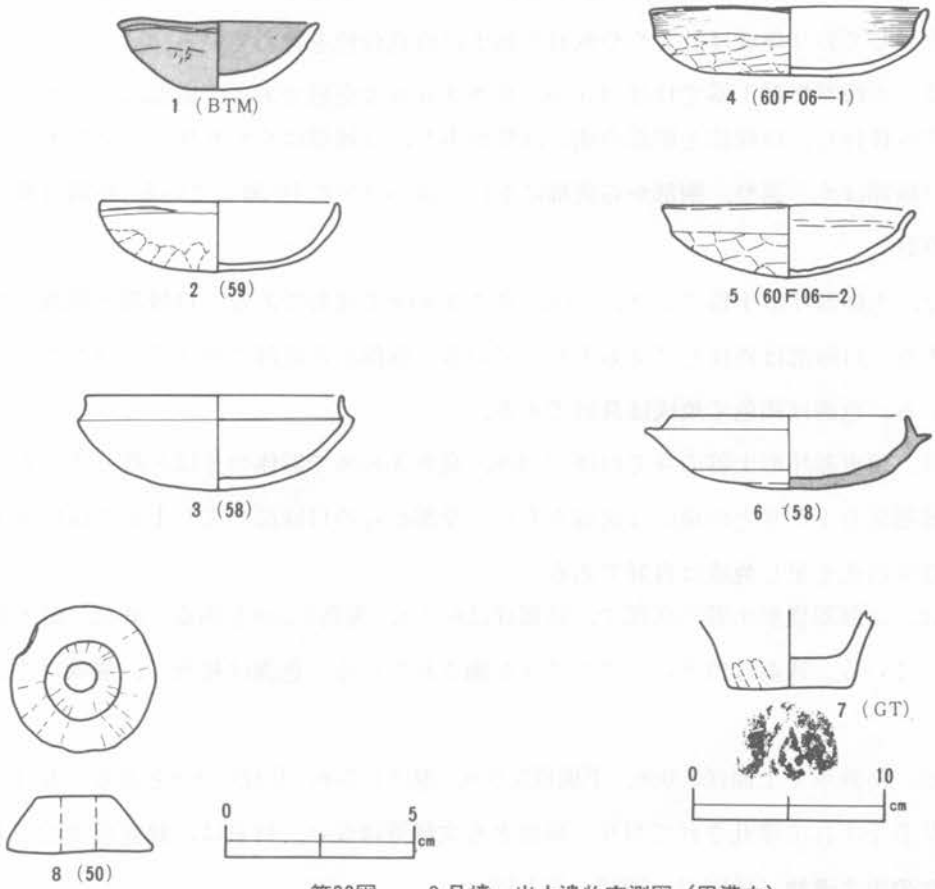
15は，薄い鉄版状のもので両面に木質が付着している。性格は不明。

玉類（ＰＬ—44）

玉は，全部で42個検出された。すべて小玉類で管玉，臼玉等は出土しなかった。大きさは，直径6㎜前後が多く，最大は8.4㎜，最小は3㎜を測る。色はコバルトがほとんどで，他にコバルトブルー，緑色が若干混じっている。材質は,ガラス製である。

周溝内出土遺物（挿図30図　ＰＬ46）

1は，土師器坏形土器で口径10.4cm，高さ3.5㎝を測り口縁部を一部欠損している。底部は厚く全体に歪んでいる。内面はナデ調整，胴部はヘラケズり，底部はヘラミガキを施



第30図　　9号墳　出土遺物実測図（周溝内）

している。胴部中位には輪積痕がみられる。内外面ともに赤色顔料が塗られ口縁部は部分的に黒色を呈している。

2は，土師器坏形土器で口径12.2cm，高さ3.6cmを測り口縁部を一部欠損するがほぼ完形に近い。口縁部と胴部の境に稜があり，口縁部は垂直に立ち上がっている。口縁部はナデ調整，底部はヘラケズリを施している。坏の内外面は黒色を呈している部分もあるが全体の色調は褐色で焼成は良好である。

3は，土師器坏形土器で口径13.4cm，高さ4.9cmを測り，口縁部の$\frac{1}{2}$ほどが欠損している。胴部は球形状を呈し口縁部は，ほぼ垂直に立ち上り，胴部との境には稜がみられる。口縁部内面はナデ調整，胴部および底部はヘラケズリを施している。内外面ともに$\frac{1}{2}$ほど黒色を呈しており焼成は甘くやや軟質で胎土に白色砂粒を含んでいる。

4は，土師器坏形土器で口径14.6cm，高さ3.6cmで完形である。底部は平坦でゆるやかに胴部へ移行し，口縁部と胴部の間には稜があり，口縁部はやや外反して立ち上がっている。口縁部はナデ調整，胴部から底部にかけてはヘラケズリを施している。色調は褐色で焼成は良好。

5は，土師器坏形土器で口径13.2cm，高さ3.8cmで完形である。口縁部と胴部の境には稜があり，口縁部は外反して立ち上がっている。胴部から底部にかけてヘラケズリが施されている。色調は褐色で焼成は良好である。

6は，須恵器坏形土器の身で口径12.3cm，高さ3.8cmで器体の$\frac{2}{3}$ほど残っている。受部と口縁部立ち上がりとの境には沈線を有し，受部からの口縁部の立ち上がりは内反する。色調は灰白色を呈し焼成は良好である。

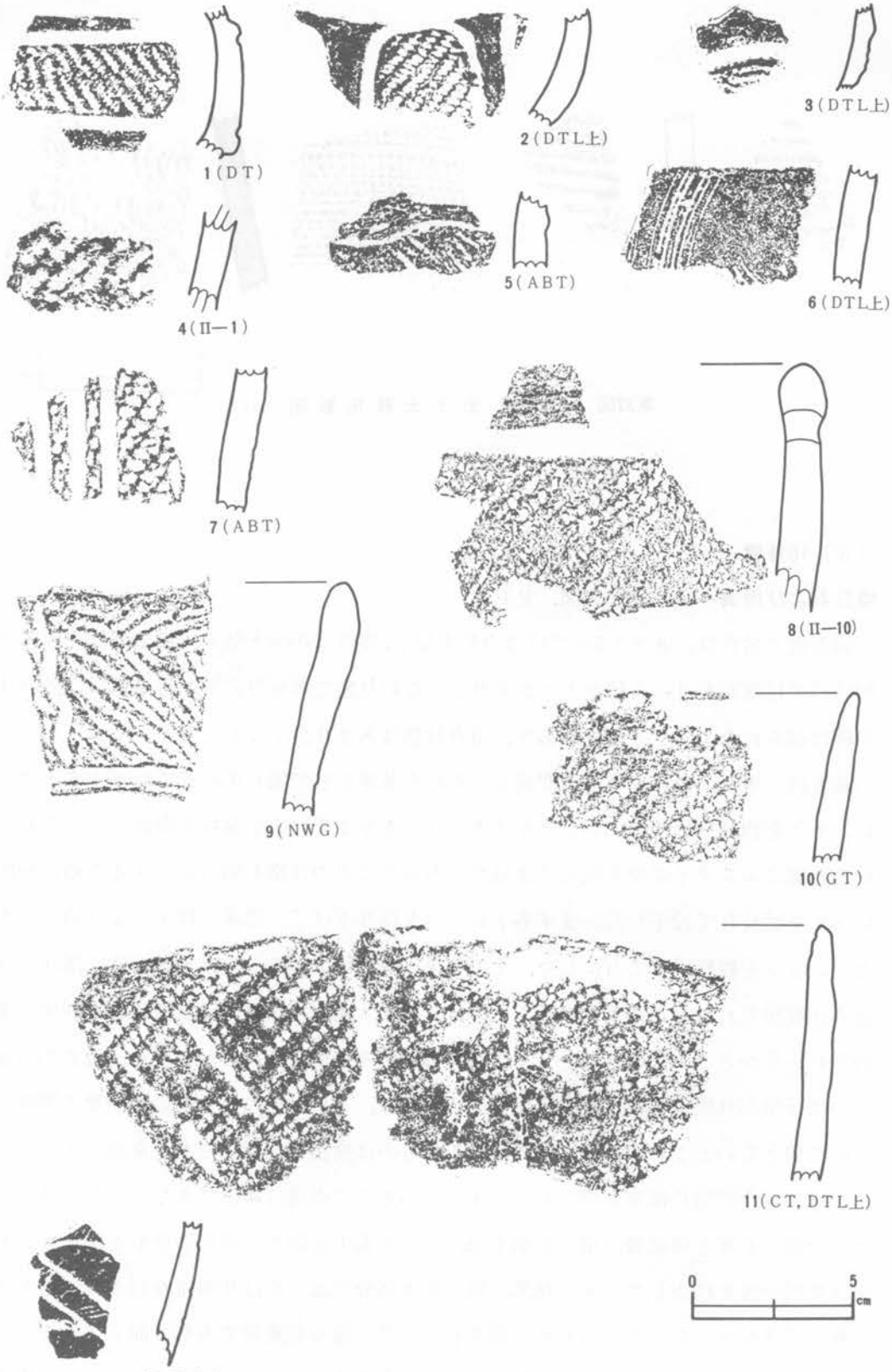
7は，土師器甕形土器の底部で，底部径は6.2cm，現高3.5cmを測る。底部には木葉痕が残っている。底部は付近にヘラケズリが施されている。色調は褐色で，焼成は不良である。

8は，紡錘車で上面径2.0cm，下面径3.8cm，厚さ1.5cm，孔径0.9cmを測る。孔は中心部より若干ずれて穿孔されており，両面とも文様等はない。材質は，緑泥色片岩である。

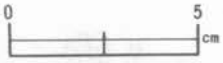
その他の出土遺物（挿図31，32図　ＰＬ55）

本古墳墳丘内から出土した縄文土器は，縄文時代中期（加曾利ＥⅠ～ＥⅢ）および後期（堀之内）が主なものである。その中に1点だけ土器片を転用した土錘（7）がある。この土錘は，土器の胴部片を利用したもので重量は27・9gを測る。

（鈴木）



第31図　9号墳 出土土器拓影図（I）



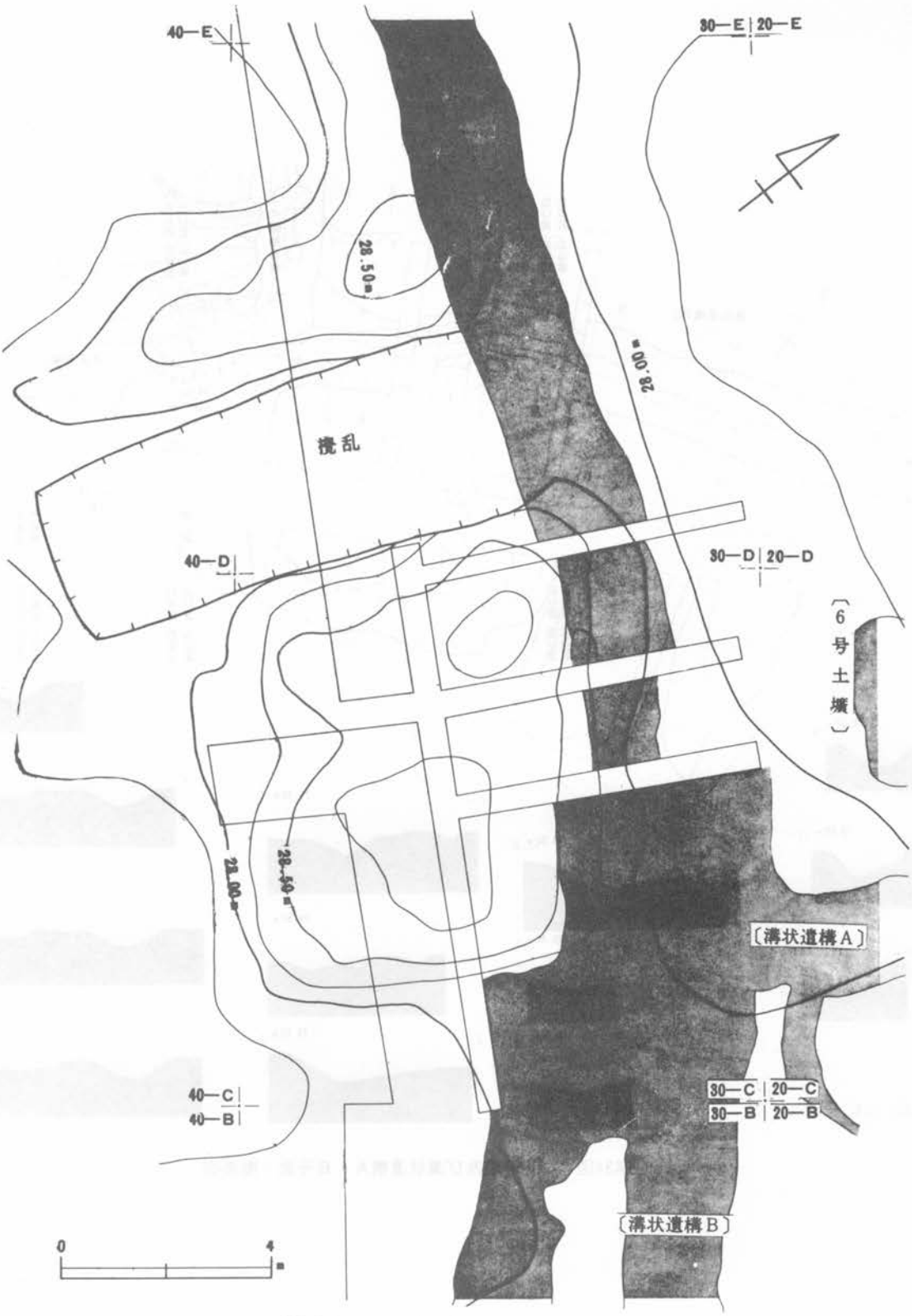
第32図　9号墳 出土土器拓影図（II）

（3）10号墳

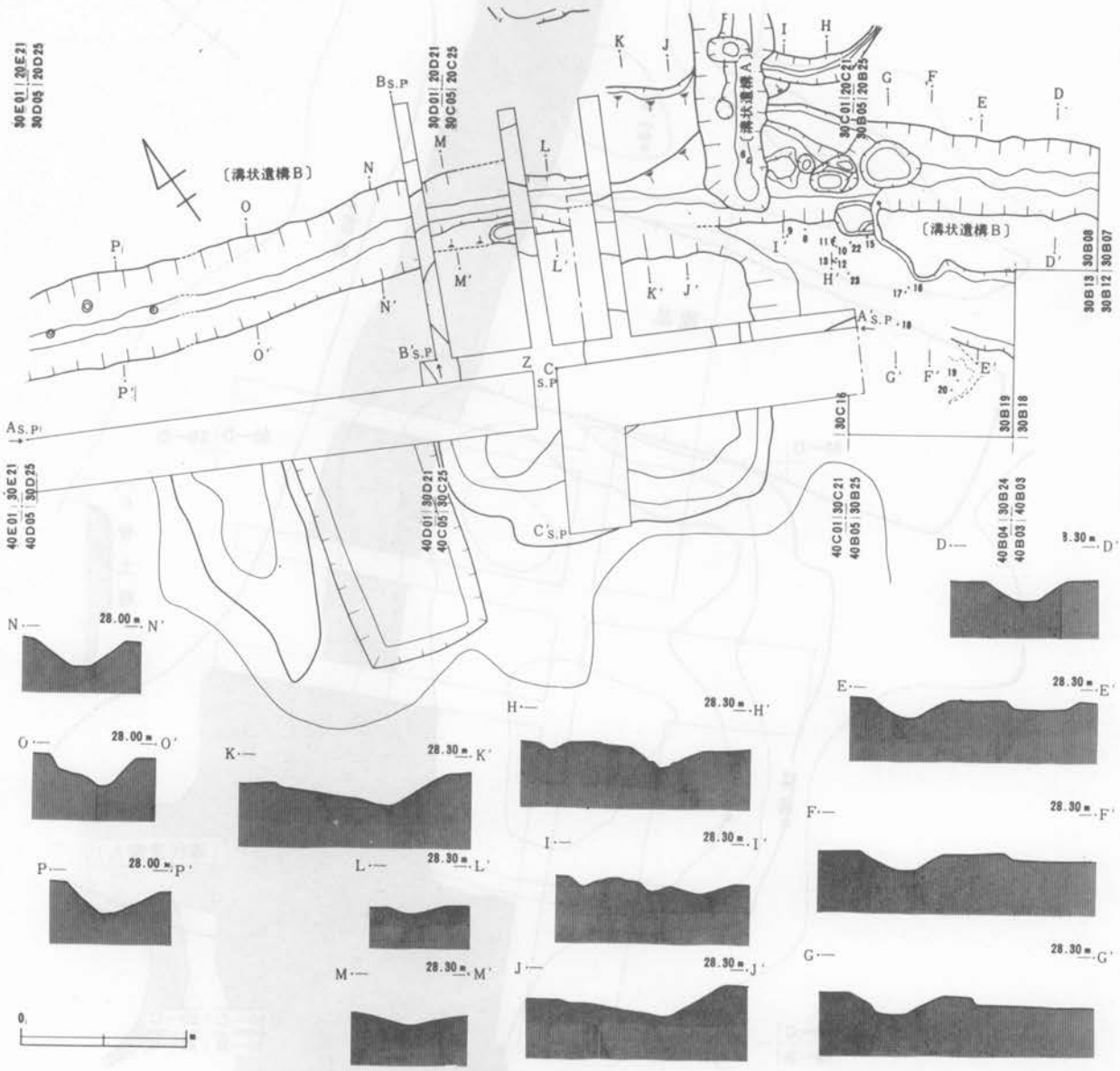
墳丘および周溝（挿図33～36図，ＰＬ14～15）

調査前の墳丘は，８×3.5ｍでほぼ方形を呈し，高さは70cmと低く，墳頂部は一面に方形状の平坦面があり，古墳かどうか判然としない状態であった。しかも東側には，今次大戦の際に掘られたエンタイゴウがあり，遺存状態はあまり良くなかった。

調査は，墳丘の形状を方形と想定し，それを基準として墳丘中心部で交差する十字トレンチと北西部分にサブトレンチを１本の計５本をまず設定し発掘を開始した。なお，墳丘の西側にエンタイゴウを狭んで土盛りがあるのでその性格も明らかにするために西側トレンチを延長して設定した。まず各トレンチを掘り下げて，周溝の検出および墳丘の土層セクションを観察することにした。その結果，北側の２本のトレンチからは，溝状の落ち込みが検出された（この溝状の落ち込みは，第２次調査の結果，溝状遺構Ｂと判明）。東側のトレンチからは，はっきりとした周溝の落ち込みは検出されなかったが，数点の須恵器片が墳丘裾部外側から出土した。南側トレンチは，トレンチの長さが道路境界の関係で短いので何ともいえないが，やはり周溝らしきものは検出されなかった。東側のトレンチもエンタイゴウで墳丘裾部が掘られてしまっているので周溝は検出できなかった。各トレンチで周溝の有無を確認後，墳丘北側半分について表土を剥ぎ，墳丘の原形を出すとともに墳丘裾部一帯を精査した。その結果，墳丘北東部分では，やはり明確な周溝状の落ち込みは検出できなかった。ただ墳丘が，調査前のプラン通り北東側で方形に曲っていることが判明し，また，墳丘北東側から東側にかけて須恵器片が約20点出土した。これは，東側ト



第33図　10号墳 墳 丘 測 量 図

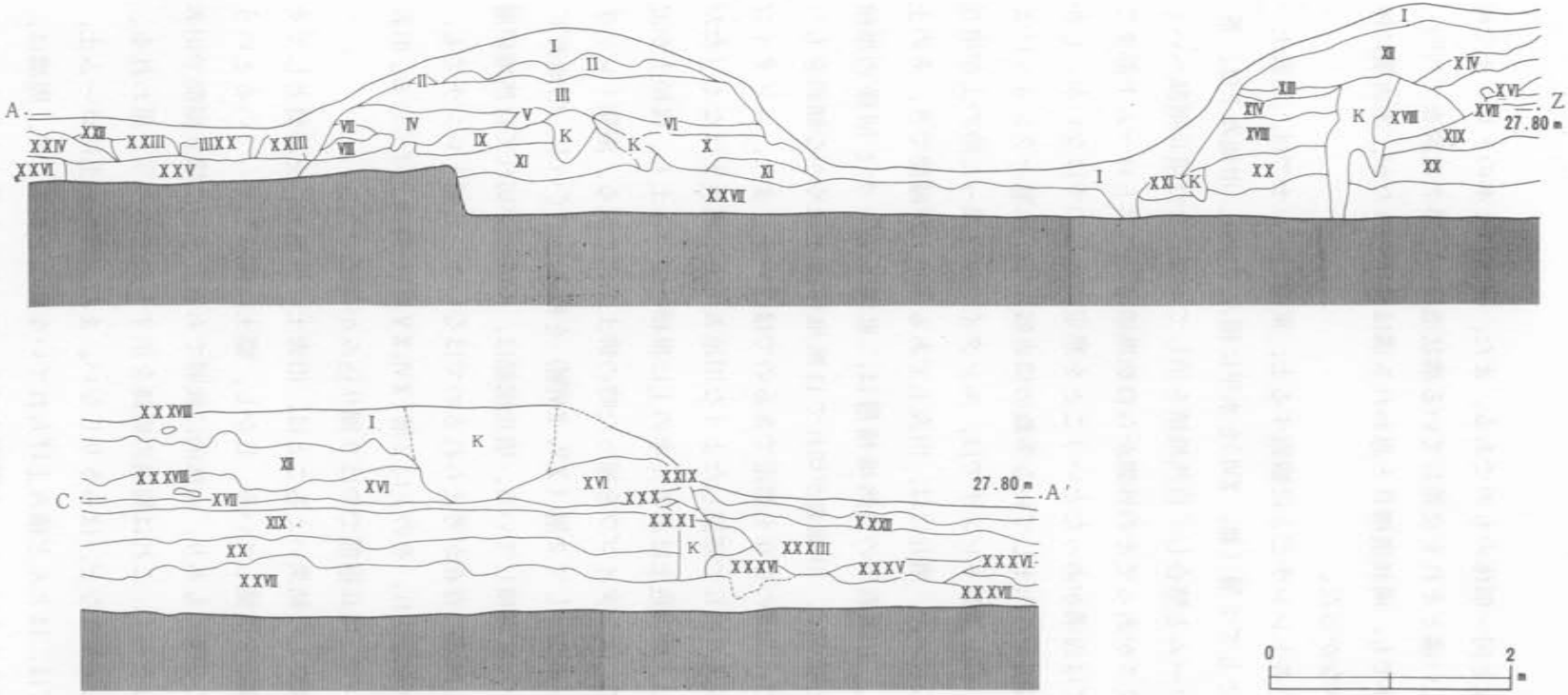


第34図　10号墳及び溝状遺構A・B平面・断面図

レンチから出土した須恵器片と同一個体のものである。また，北側の２本のトレンチで検出した溝状遺構Ｂの延長らしい溝とそれを交差している溝状遺構Ａ（第２次調査で判明）が検出された。墳丘北西部分でも，溝状遺構Ｂと思われる溝は検出されたが，本古墳に伴う周溝らしきものは確認できなかった。

次に墳丘土層セクションを各トレンチごとに観察すると，東側トレンチでは，旧表土（XVII）である黒色土を基盤として２層（XII，XVI)を水平に積んでいる。旧地表下は，茶褐色土，明褐色土，ソフトロームと整合して自然堆積を示している。ただ墳丘裾部へいくと旧地表が切れ，若干のテラスがあってその外側から自然堆積層をソフトローム上部まで掘っている。これは，かっては周溝があったということを想定できるのではないか。しかも，トレンチ及び北東側拡張部から出土している多数の須恵器片は，土層セクションによるとXXXIII層から出土じている。西側トレンチでは，エンタイゴウを掘った時の土が墳丘から裾部にかけて被っているものの，墳丘には，旧表土である黒色土が確認でき，その上に盛土（XVI層)がみられる。旧地表下の自然堆積層は，東側トレンチと同様の堆積を示している。また，墳丘裾部は，旧地表が切れて自然堆積層が緩やかな傾斜をもって掘り込まれている。ここでも周溝の存在を想定できるのではないか。また，エンタイゴウを挟んだ西側の盛土は，本来の墳丘で確認したような旧地表である黒色土はなく（ただし，褐色土が混入した黒色土，黒褐色土はある)，その上に堆積している土も，腐植土が混入した淡褐色土，暗褐色土で，エンタイゴウを掘った時の排土と思われる。南側トレンチでは，旧表土である黒色土を基盤として２層（XV，XVI層）を積み上げている。旧地表下の自然堆積層は，ほぼノーマルに堆積している。墳丘裾部は，旧表土が切れて自然堆積層を掘り込んでいる。ここでも周溝の存在が考えられるのではないか。北側トレンチでも，旧表土である黒色土(XVII層)が確認され，その上に２層(XVI,XV層)を積み上げている。旧表土下の自然堆積層はノーマルで，墳丘裾部でやはり掘り込みが確認できる。

以上，土層セクションを観察した結果いえることは，旧表土（黒色土）を基盤としてその上に２層土を積み上げて墳丘を構築している。しかし，盛土は固くしまっているという状態ではなく，木根などによる攪乱もあり，全体的に軟弱である。さらに墳丘裾部で旧表土以下を掘り込んでいる。おそらく，これは周溝の痕跡を示すものであろうと思われる。しかし，いずれも外側の立ち上がりなど，はっきりしない。また，墳丘盛土にローム土，ハードロームブロック土などは，ほとんど積み上げられていないことからして，周溝は，たとえあったとしてもその掘り込みは，ローム層内まで入っていないと考えられる。した



第35図　10号墳　土層断面図（I）

I　表　土
II　暗褐色土（腐植土でひげ根多し）
III　淡褐色土（小ロームブロック・腐植土混入）
IV　暗黒褐色土
V　黒色土（褐色土少量混入）
VI　黒色土（褐色土少量混入）
VII　暗茶褐色土（腐植土混入）
VIII　茶褐色土
IX　茶褐色土
X　茶褐色土（黒褐色土・褐色ブロック混入）
XI　暗褐色土
XII　茶褐色土（小ブロック混入・根が多く土質はぼろぼろ）
XIII　淡褐色土（黒色・腐植土混入）
XIV　褐色土（黒褐色土混入）
XV　茶褐色土
XVI　淡褐色土（黄色ブロック混入）
XVII　黒色土（旧表土）
XVIII　褐色土＋暗褐色＋腐植土若干
XIX　茶褐色土
XX　暗褐色土
XXI　淡褐色土（黄色ブロック混入）
XXII　茶褐色土
XXIII　明茶褐色土
XXIV　明茶褐色土
XXV　暗黒褐色土
XXVI　黄褐色土
XXVII　ソフトローム
XXVIII　ソフトローム
XXIX　暗褐色土（黄色土粒少混入）
XXX　暗褐色土
XXXI　黒色土（暗褐色土混入）
XXXII　黒褐色＋淡褐色土（焼土混入）
XXXIII　黒褐色土（粒子状でさくさくで，土層下面に黄色土小ブロック少量混入）
XXXIV　黄混色土＋黒褐色土
XXXV　茶褐色土＋暗褐色＋黄色ブロック
XXXVI　黒褐色土
XXXVII　黒褐色＋茶褐色土
XXXVIII　黒色土

がって，明確な周溝の検出はできなかった。

埋葬施設

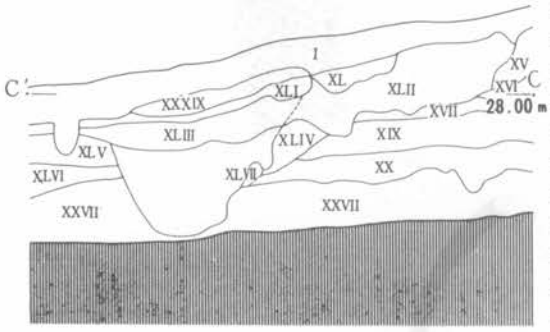
各トレンチと墳丘調査の際に埋葬施設検出につとめたが，結果として検出できなかった。

周溝内出土遺物（挿図37図,PL52）

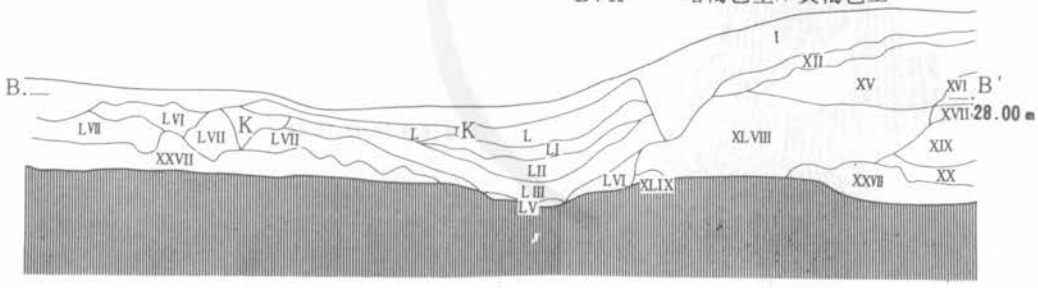
1，2，は須恵器の横瓮片である。須恵器片は20片検出されたが，すべて同一個体である。大きく3部位に接合したが，他の部位が未検出であるので当初から欠損していた状態で埋設されたものと考えられる。1は底部片，2は胴部片で端部の孔を円盤で接合した痕がみられる。

外面は平行たたき目が上下に走っているが底部に移ると横方向へと変化してゆく。また約3cm幅に数条のかき目がたたき目を施した後に施されている。内面は，ロクロ水引き痕が認められ，器面はナデにより仕上げられている。胎土は，緻密であるが若干砂粒を含み，焼成は良好で灰褐色を呈するが，内面には黒色の班点がみられる。

（鈴木）

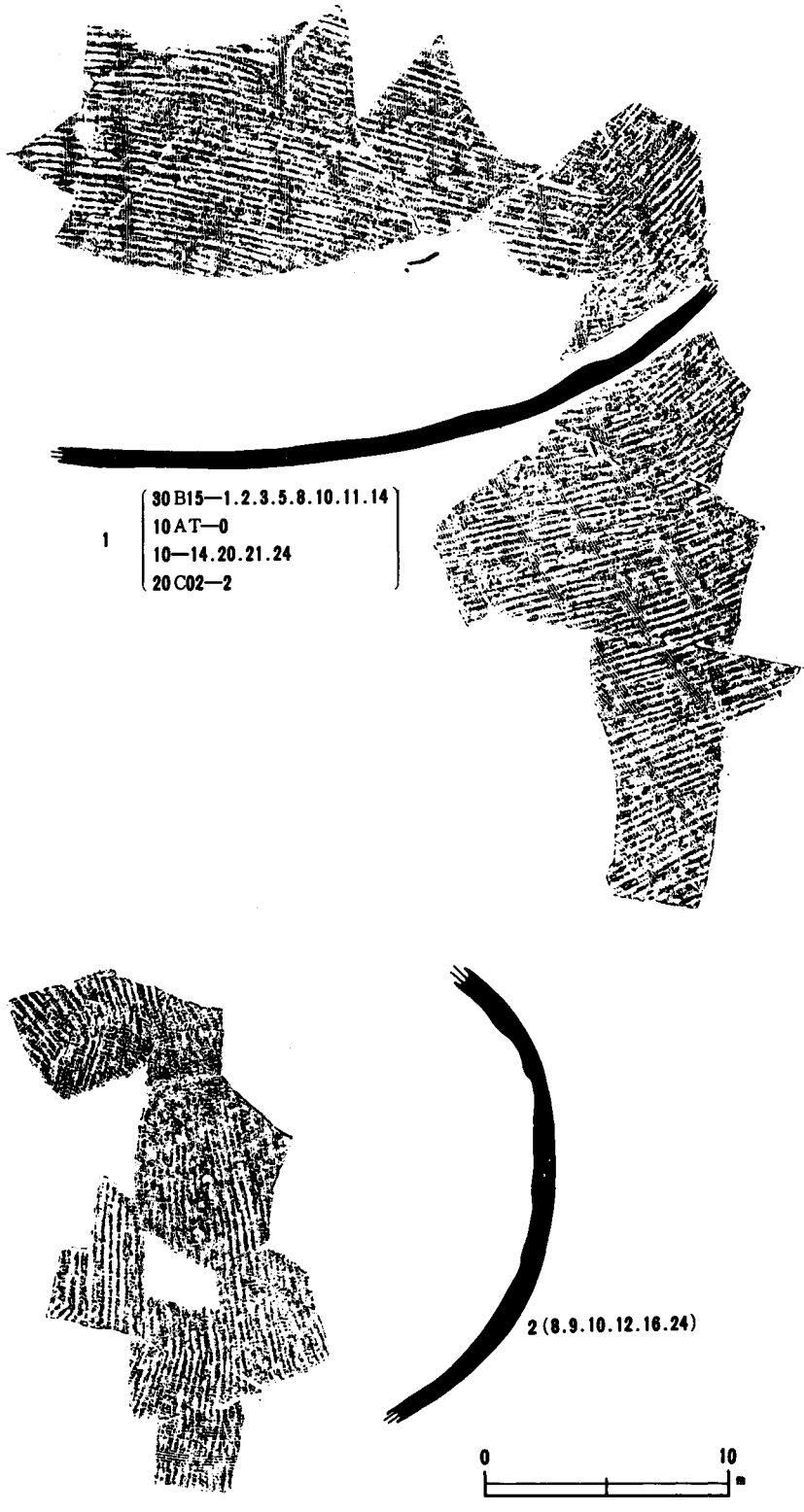


XXXIX	黒暗褐色
XL	淡褐色で腐植土混入(固くしまっている)
XLI	黒褐色土＋小ローム・ブロック
XLII	褐色土＋黄色土＋腐植土(土はさくさくで軟い)
XLIII	褐色土＋黄色土＋腐植土(土はさくさくで軟い)
XLIV	暗茶褐色
XLV	黒褐色(さらさら)
XLVI	黒褐色＋褐色ブロック(固い)
XLVII	ソフト・ローム(下方にハード不整合)
XLVIII	暗茶褐色で褐色ローム・ブロック(小)少量混入
XLIX	ソフト・ローム
L	暗褐色土(褐色土ブロック状混入)
LI	黒褐色土(黄色ブロック混入)黒砂混入
LII	黒褐色土＋淡褐色土
LIII	暗黒褐色土
LIV	黒褐色土で小ローム・ブロック混入
LV	ローム粒主体で黒褐色土混入
LVI	黒褐色(腐植)土＋褐色土
LVII	暗褐色土＋黄褐色土



第36図　10号墳　土層断面図（II）

0　2 m

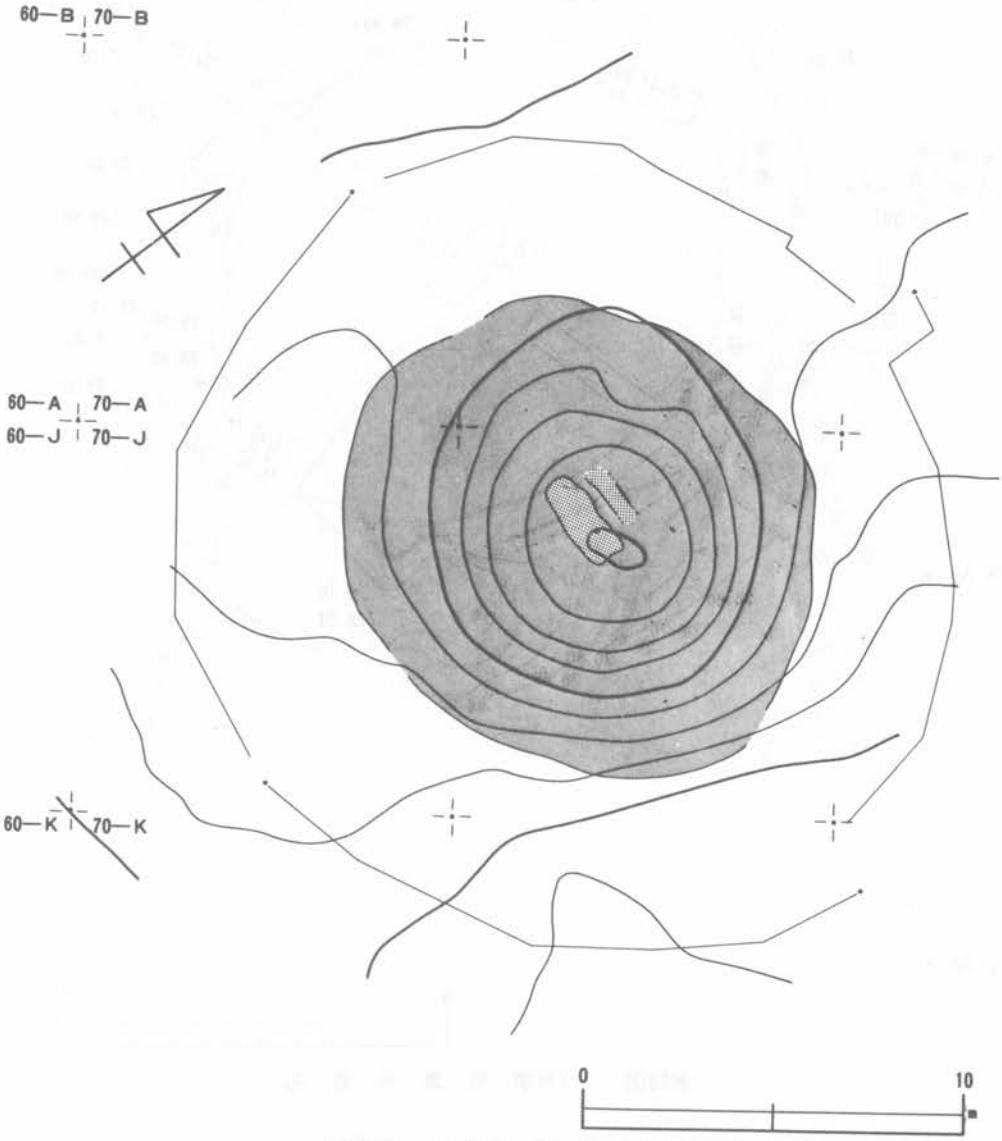


第37図　10号墳 出土土器拓影図

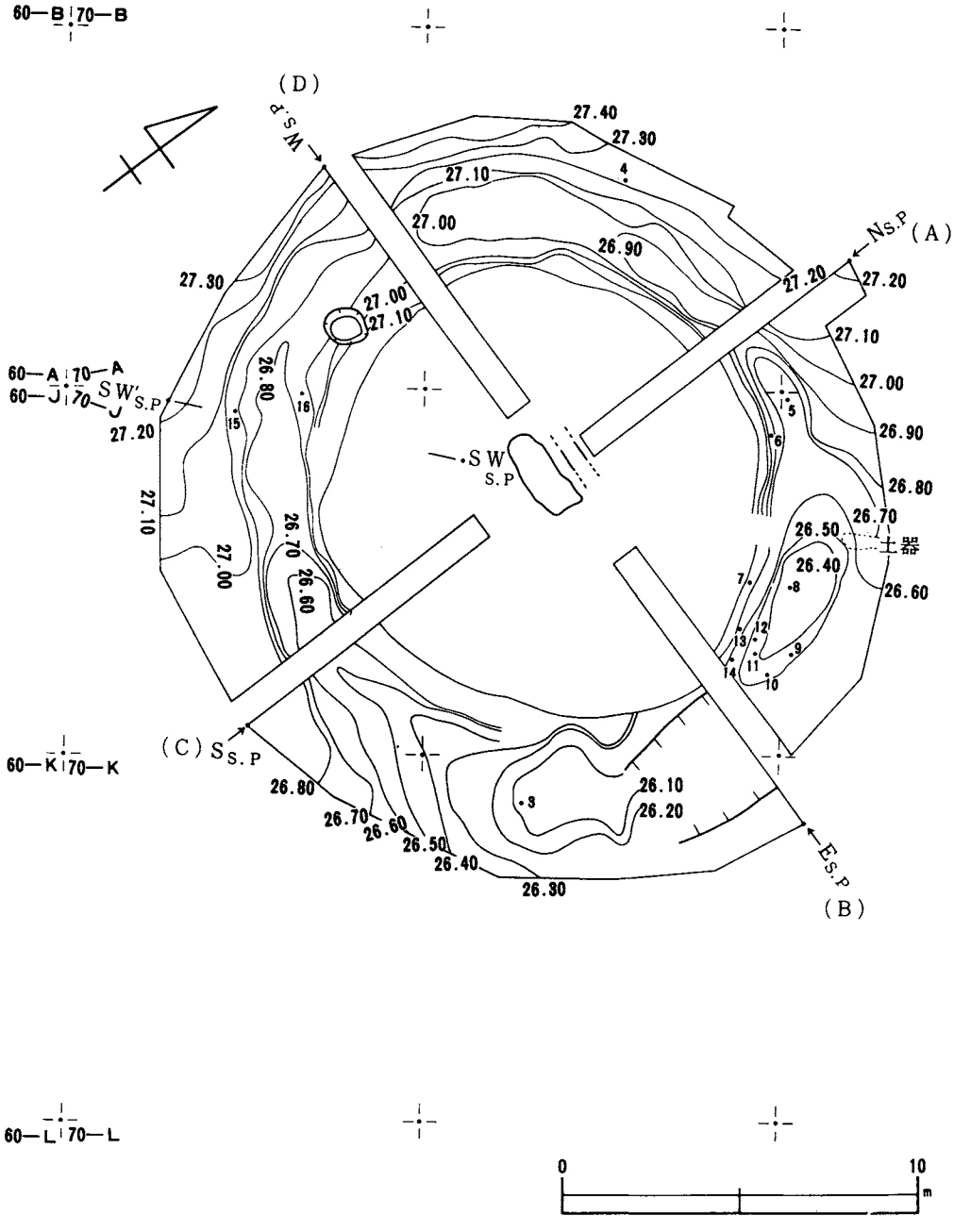
(4)　11号墳（挿図38～46図, PL15～17）

墳丘

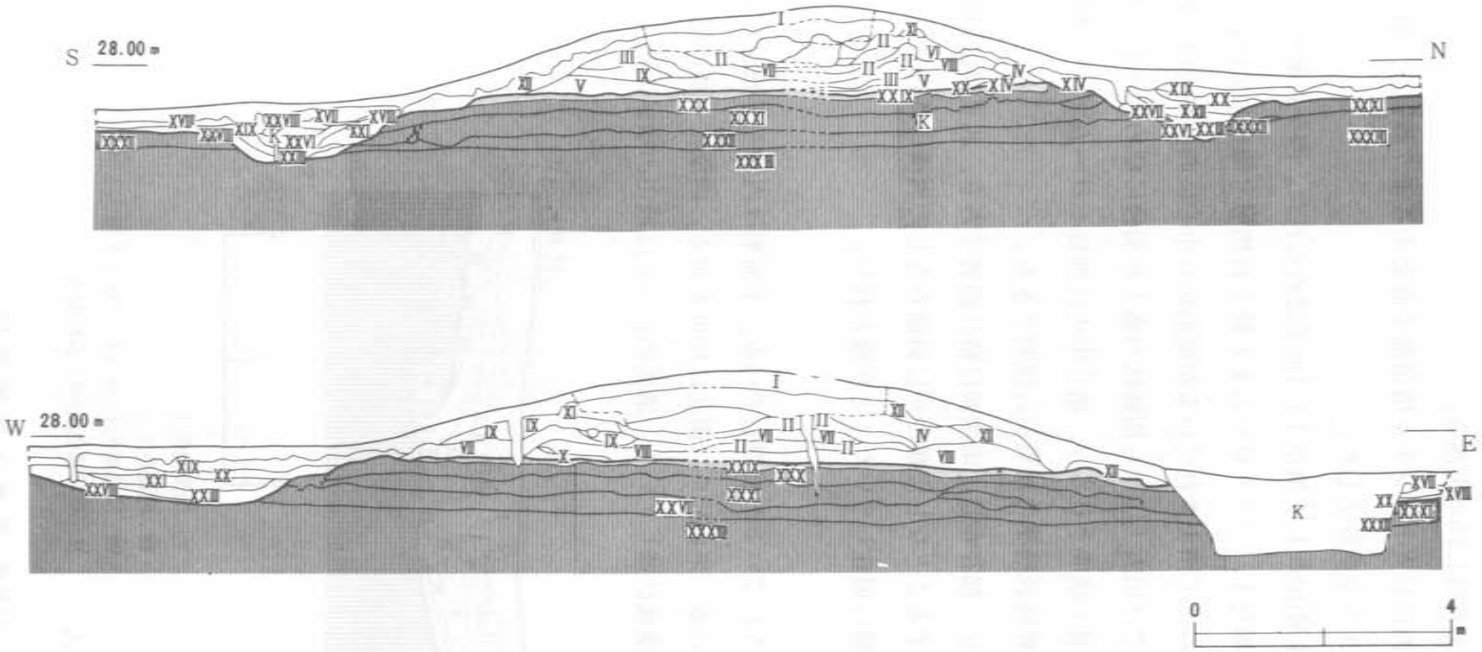
本墳は13号墳の東方約25m，台地平坦面から緩斜面にかかる地点に位置する。墳丘は雑木・雑草に覆われており遺存状態はよく，小円墳状の起伏が認められた。墳丘測量図から古墳の形状をみると，墳頂部は緩やかな平坦面を形成し，25cm幅のコンターラインが4本同心円状に巡り，北東側において多少楕円形を呈している。以下3本のコンターが孤を描くが一周していないことと，南東側がコンターが北東側に較べて急なことは，本墳が西か



第38図　11号墳 墳 丘 測 量 図



第39図　11号墳 周 溝 平 面 図



I	表　土	XII	暗茶褐色土	XXIII	黒褐色土(ローム粒子混入)
II	褐色土(ローム・ブロック)	XIII	黒色土	XXIV	褐色土
III	褐色土(ローム・ブロック多量混入)	XIV	淡暗褐色土	XXV	褐色土(ローム・ブロック混入)
IV	褐色土(小塊ローム・ブロック)	XV	明褐色土混じり黒色土	XXVI	淡褐色土混入暗褐色土
V	明褐色土(ローム・ブロック混入)	XVI	黒色土混じり褐色土	XXVII	暗褐色土(ローム・ブロック混入)
VI	淡褐色土(ローム・ブロック混入)	XVII	茶褐色土	XXVIII	黄色土混入褐色土
VII	暗褐色土(ローム・ブロック混入)	XVIII	焼　土	XXIX	黒色土(旧表土)
VIII	黒褐色土(ローム・ブロック少量混入)	XIX	茶褐色土(焼土混じり)	XXX	茶褐色土
IX	褐色土(ローム粒子混入)	XX	黒褐色土	XXXI	暗褐色土
X	黒褐色土(ローム粒子混入)	XXI	暗褐色土	XXXII	ソフト・ローム層
XI	褐色土	XXII	暗褐色土(ローム粒子混入)	XXXIII	ハード・ローム層

第40図　11号墳 土 層 断 面 図

ら東にかけて１ｍ程の比高差をもった斜面上に位置しているからである。径は12m，高さは北側の平坦面から１ｍ，南東側からは1.75ｍを測る。

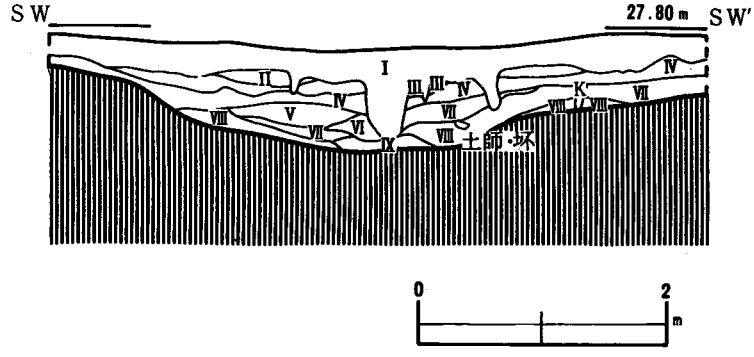
調査は南北にＳＮトレンチ，東西にＥＷトレンチを墳頂部で直交するよう設定し，墳丘の構築状態を観察し，その後に表土を全面除去した。

その結果，当時の，基盤である黒色土層(旧表土)が墳頂下1.4ｍで認められた。西から東へ0.7ｍ程傾斜しており，茶褐色土，暗褐色土，ソフトローム土と続く自然層も傾斜している。封土はＦＷトレンチでは旧表土に沿って積土されているが裾部から中心に向い斜方向の積土も若干認められ，ＳＮトレンチでは旧表土上から摺鉢状の盛土が明確に認められる。各層は褐色土とロームブロック混入層で構成されるが，墳丘中央は細長くロームブロック層が築き固められている。これは埋葬施設構築の結果から説明できる。

墳丘裾部は周構に至るテラス面が一部存在し，南西側に特に顕著である。北東側は旧表土が削平された面がテラスを形成することなしに緩やかに斜面をなし，周溝に移行している。墳丘は周溝の内縁よりも北東側に偏在していたことが窺われた。

周溝

周溝は東側が溝底まで深く攪乱されているが全周している。平面形は内縁の形状からみると，東西に稍長い円形を呈している。東西13m，南北に10ｍを測る。内壁は一様に掘り込まれ，南西，南東側は緩やかに溝底に達している。溝底のレベルは地山の傾斜に沿って



Ⅰ　表　　土
Ⅱ　黒褐色土
Ⅲ　焼　　土
Ⅳ　黒色土(黄褐色土混入)
Ⅴ　淡茶褐色土
Ⅵ　淡黒褐色土
Ⅶ　暗褐色土
Ⅷ　淡暗褐色土(ローム・ブロック混入)
Ⅸ　淡暗褐色土(ローム粒混入)

第41図　11号墳 周溝土層断面図

西側が高く東側に低い。西側での周溝断面は緩やかなU字形を呈すが，北側はV字形を呈し斜向してゆき，北東側は摺鉢状に深く掘り窪められている。周溝外側は全面整地されており墳丘下の旧表土層より低い面を形成している。そのため外縁は緩やかに立ち上り明確さに欠けている。

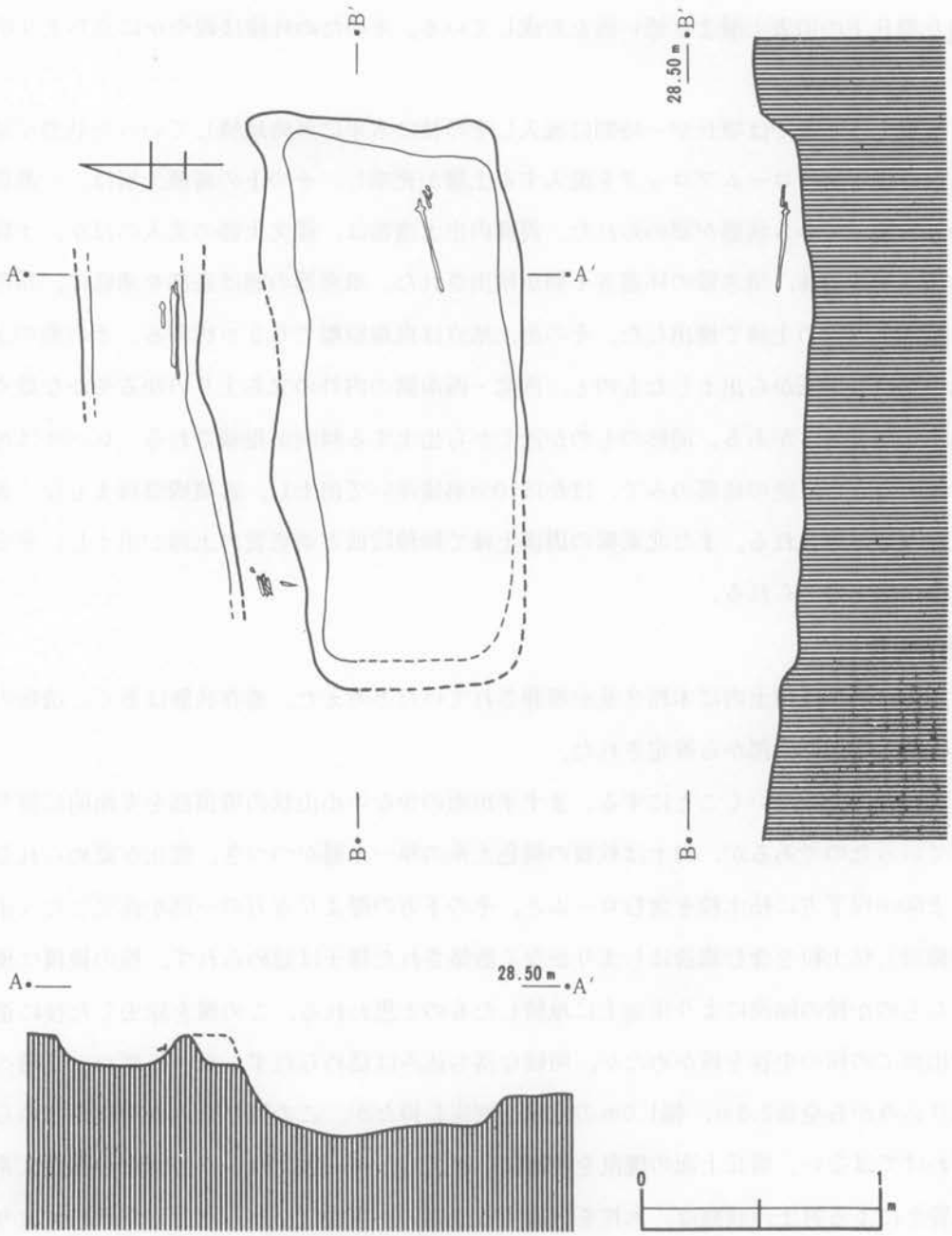
堆積土は北側では墳丘が一時期に流入しその後に水平に漸時堆積していった状態が認められる最下層はロームブロックを混入する土層が充塡し，その上の腐植土層は，一部周溝の外へ続いている状態が認められた。周溝内出土遺物は，縄文土器の流入のほか，土師器の坏と埦８個体，須恵器の坏蓋各１個が検出された。須恵器の甕は底部を溝底に，頸部，口縁部を周溝の上縁で検出した。その出土地点は直線距離で6.5ｍ程ある。その他の土器出土地点は溝底から出土したものと，西北・西南側の内外の立ち上りのゆるやかな地点で出土したものとがある。同形のものが近くから出土する傾向が指摘される。レベルは地山に接するものは甕の底部のみで，ほかは10cm前後浮いて出土し，古墳構築後まもなく置かれたものと思われる。また北東側の周溝上縁で緑釉段皿と須恵質の土器が出土し，平安時代の所産と考えられる。

埋葬施設

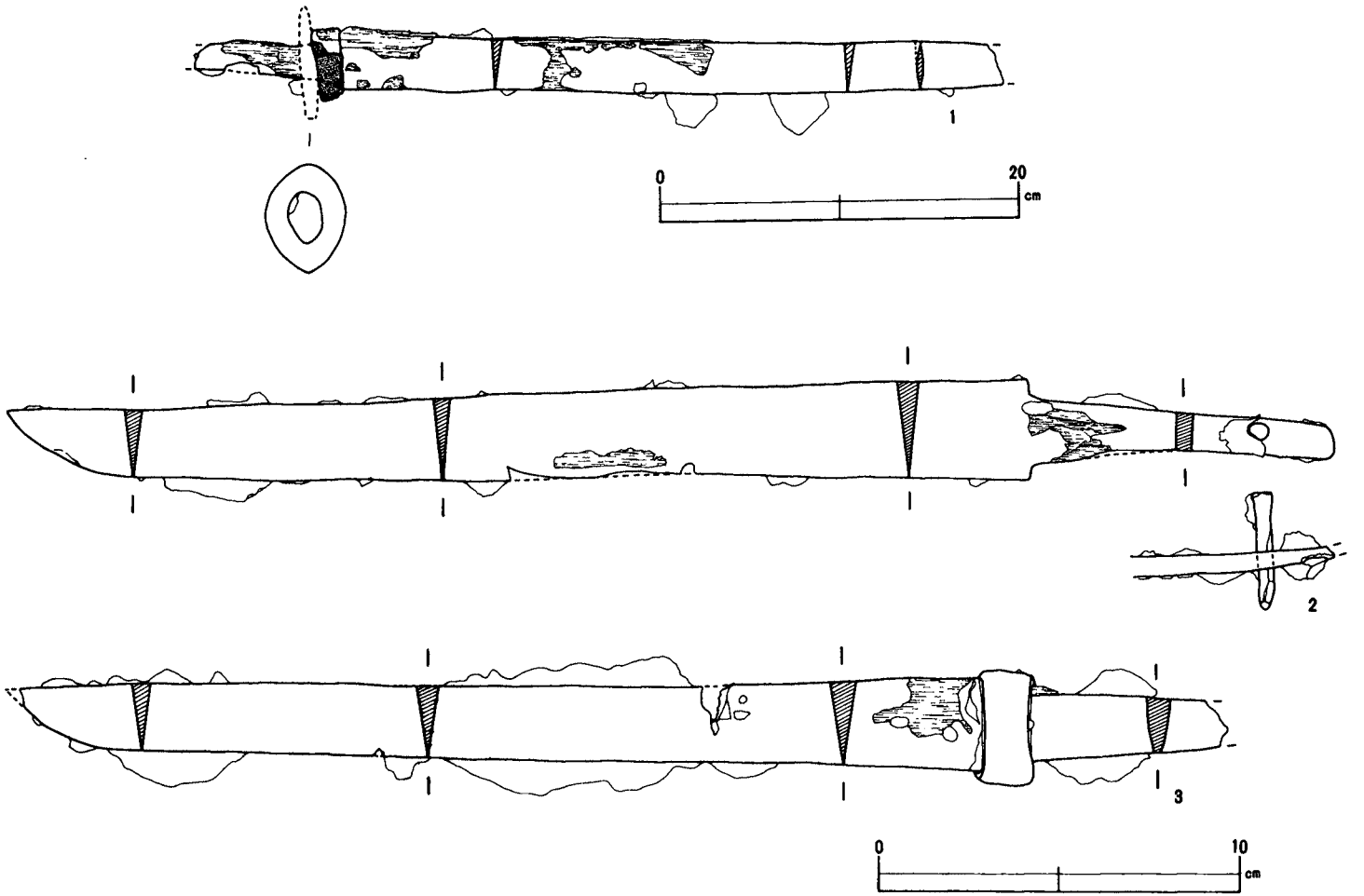
本墳は墳頂部封土内に木棺２基が埋葬されていたと考えた。遺存状態は悪く，遺物の出土状態と床面の一部から推定された。

調査経過をみていくことにする。まず平坦面の少ない小山状の墳頂部を平面的に掘り下げていったのであるが，封土は軟質の褐色土系の単一土層がつづき，変化が認められないまま50cm程下方に粘土粒を含むロームと，その下方の際より直刀の一部が露呈した（南埋葬施設)。粘土粒を含む施設はしまりがなく版築された様子は認められず，棺の被覆に使用したものが棺の陥没により床面上に堆積したものと思われる。この塊を除去した後に遺物検出面での棺の全容を確かめたが，明確な落ち込みは認められず，ロームブロック層への掘り込みから全長2.3ｍ，幅1.0ｍの規模を測定し得たが，この掘り込みも明確に認められたわけではない。墳丘上面の攪乱を考慮にいれても，ロームブロックの少ない褐色土系の軟質土による封土の状態は，木棺を包蔵する諸施設が存在しなかったことを示しており，ロームブロック層への若干の掘り込みの後に木棺を直葬したものと思われる。

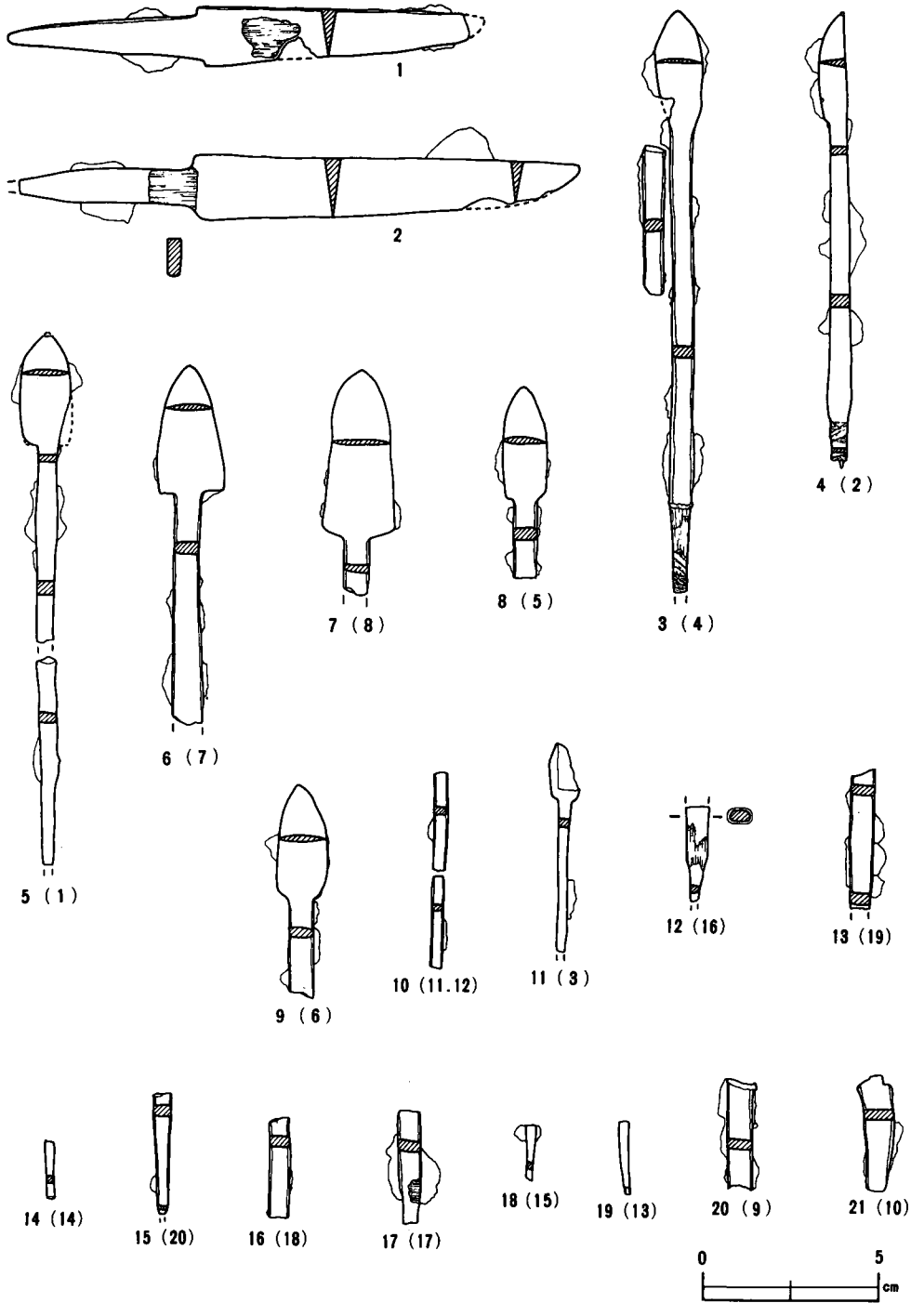
この埋葬施設の全容を知るために墳頂部に残るセクションベルトを取りはずし平面を拡張した時点に，直刀のレベルより５cm上方にさらに別の直刀が検出され，幅55cm，厚さ10cmにわたり粘土粒を含む褐色土が充塡している状態が窺われた（北埋葬施設)。すでにセク



第42図　11号墳　埋葬施設・断面図



第43図　11号墳　埋葬施設出土遺物実測図（Ⅰ）



第44図　11号墳　埋葬施設出土遺物実測図（II）

ションベルト以外の封土は削平してしまい，全容はわからず壁面と思われる明茶褐色土がWトレンチにかけ僅かに認められたのみであった。また南埋葬施設との切り合い関係も不明確であった。

さらにセクションベルトの削平時点に鉄鏃が一括出土した。出土地点は両埋葬施設のどちらともに属さないが，レベルおよび鋒の方向は北埋葬施設と同じであった。

さて埋葬施設と墳丘の関係をみると，高さ1.4ｍの墳頂部封土中，旧表土面から50cm方とやや墳丘の下部（構築当初の墳丘の高さを考えても）に床面が位置する。床面下の封土はロームブロック層が細長く版築された平面的にひろがり，埋葬施設の基盤面としていたことが窺われる。北埋葬施設は若干レベルが高く床面は褐色土中であることは，後に構築されたものとして捉えられるのではないだろうか。

埋葬施設内出土遺物

11号墳埋葬施設内出土遺物は、直刀３・刀子２・鉄鏃７・鉄鏃残欠がある。

直刀(1)は南埋葬施設の南際よりに刃をやや下方に鋒を西に向け水平位に出土した。現存長44.0cmを測り，刃部に銹膨れ数ヶ所があるが，鉄芯の残りはよく，刀身・茎に鞘木痕・柄木痕を残し，鎺と鍔の一部に繊維が附着する。刀身は平棟平造りであるが鋒に近い５cmは両刃を呈すようにみられる。鍔は長径６cm，短径4.4cmの倒卵形を呈し窓は不明。茎の現存先端に目釘孔が$\frac{1}{3}$程残っている。

直刀(2)は北埋葬施設の南壁に接して鋒を西に刃を上に向け，ほぼ水平で直刀(3)と一部重なった状態で出土した。全長36.7cm，刀身長28.1cmを測り，全体に銹膨れが著しく，刀身中央からやや鋒よりで屈曲している。両関造りで茎は8.4cmを測り目釘一本が遺存する。

直刀(3)は直刀(2)に接し，刃を南・鋒を西に向けほぼ水平の状態で出土した。現存長33.3cmを測り，鎺を有する。全体に銹膨れが著しいが，刀身部に鞘木痕を有する。鋒は僅かに膨む。

刀子(1)は鋒を欠き，現存長13.0cmを測り、刀身に木質が残存する。茎は刀身に比べ長く5.2cmを測る。

刀子(2)は直刀(1)の茎と平行に位置し，南側の刀子(1)とともに鋒を西に向け出土した。現存長15.8cm，刀身長8.0cmを測る。両関造りで茎に木質が残存している。

鉄鏃は箆被の発達した細根式の一群と，北埋葬施設に直刀とともに出土した平根鏃とがある。

6(7)は，北埋葬施設の直刀(2)(3)から約10cm北に鋒を東に向け，直刀とほぼ同レベルで出

土した。関が直角にはいり三角形式に近い。

7(8)は直刀(2)の下方より出土した。平造りで刀身4.6cmを測る。6，7ともに茎を欠いている。

4(2)は一括出土した鏃中にあり片刃箭式鏃である。刃長3.1cm,箆被長10.0cmを測る。鋭利な鏃である。

5(1)・8(5)・9(6)は両丸造鑿箭式に属する。3(4)は関がなく，他は直角に近い関を有す。銹化が著しくまた細分して出土したが一括出土した鏃は，総数は5本である。

周溝内出土遺物

(1)は須恵器の坏蓋である。口径13.7cm，高さ3.9cmを測る。口縁部の一部を欠損するがほぼ完形品である。セットになる坏身が出土していないことと，天井部を下に出土したことより，坏身に転用されたものであろう。天井外面は稜まで回転ヘラケズリが施され，口縁部はナデ調整で仕上げられる。内面はロクロミズヒキによる整形痕により凹が著しいが，表面は平滑に仕上げられている。焼成良好，堅緻で，灰青色を呈す。胎土はやや粗雑で小礫，砂粒を含む。

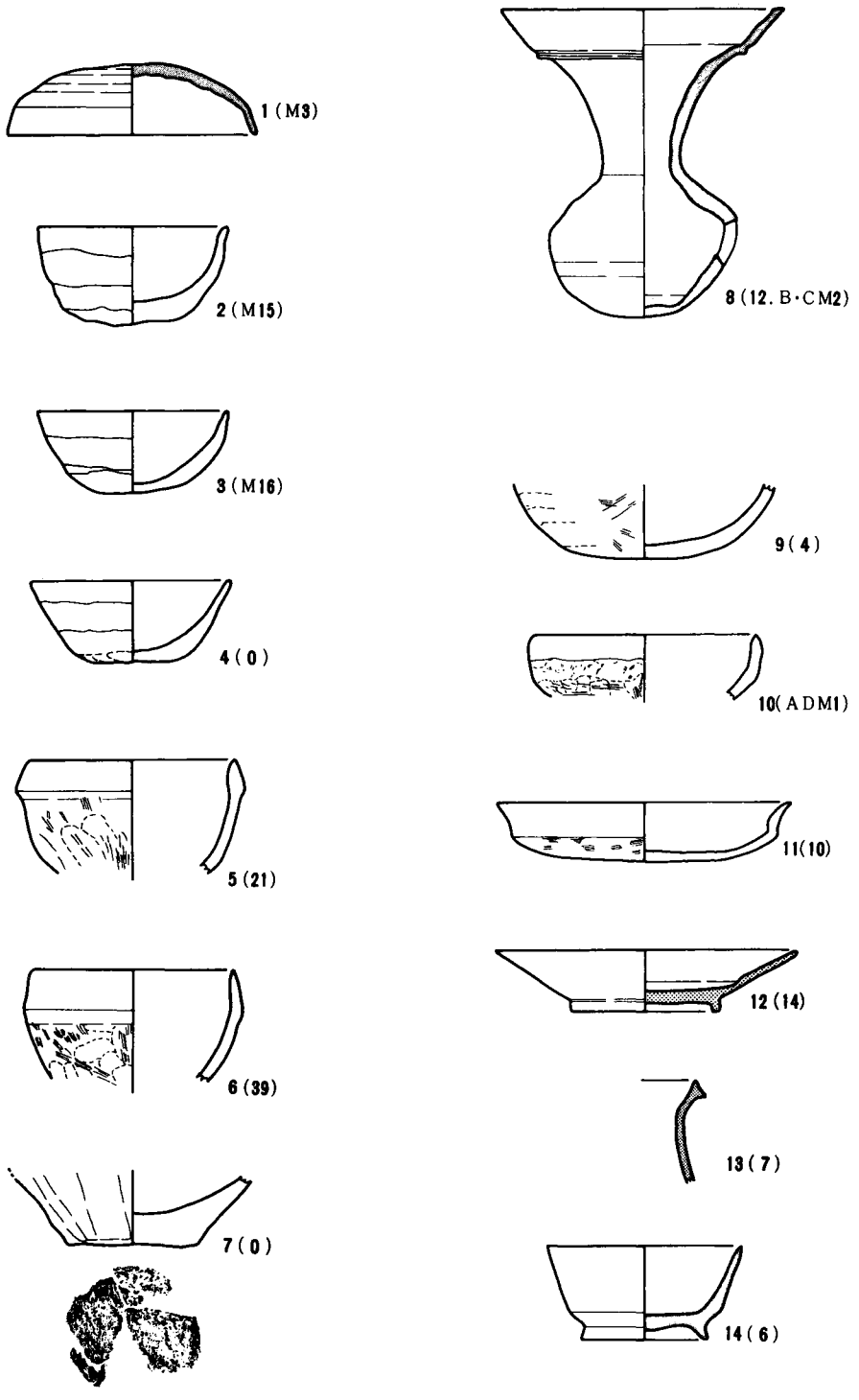
(2)・(3)・(4)はともに土師器の埦である。相接近して出土した。(2)は口径10.4cm，高さ5.4cmを測る。完形品である。(3)，(4)同様に外面に輪積痕を残し，重量感のある土器である。口縁部はやや外反するが，器体は丸味をなし底部に近づくほど厚味を増す。器面は内面及び口縁部にナデ調整を施し，一部輪積痕が消されているところがある。底部外面は粗いヘラケズリのままで，全体に凹凸のある粗製の土器である。

(3)は口径10.4cm，高さ4.4cmを測る。口縁部の一部を欠損するがほぼ完形品である。内面底部は摺鉢状を呈す。

(4)は$\frac{1}{8}$より復元した。口径10.7cm，高さ4.6cmを測る。底部は(2)(3)よりは平らで，器面も平滑である。焼成はともに良好であり褐色を呈すが一部口縁外面が黒色化し，胎土は小礫砂粒を含む。

(5)(6)は土師器埦である。ともに底部を欠く。最大径が口縁部と腹部の境い目であり，胴部は張りがあり丸味を有し，口縁部は厚くなる。器面はヘラケズリの後，口縁部はヨコナデ，以下不整方向のナデ調整を施す。ヘラ状工具による沈線を残している。(5)は口径11.2cm，胴径12.4cm，(6)は口径11.0cm，胴径12.0cmを測る。

(7)は土師器の甕底部である。底部径7.0cmを測る。外面は縦のヘラケズリ，内面は不定方向のヘラケズリを施す。外面に煤が附着する。



第45図　11号墳　周溝内出土土器実測図

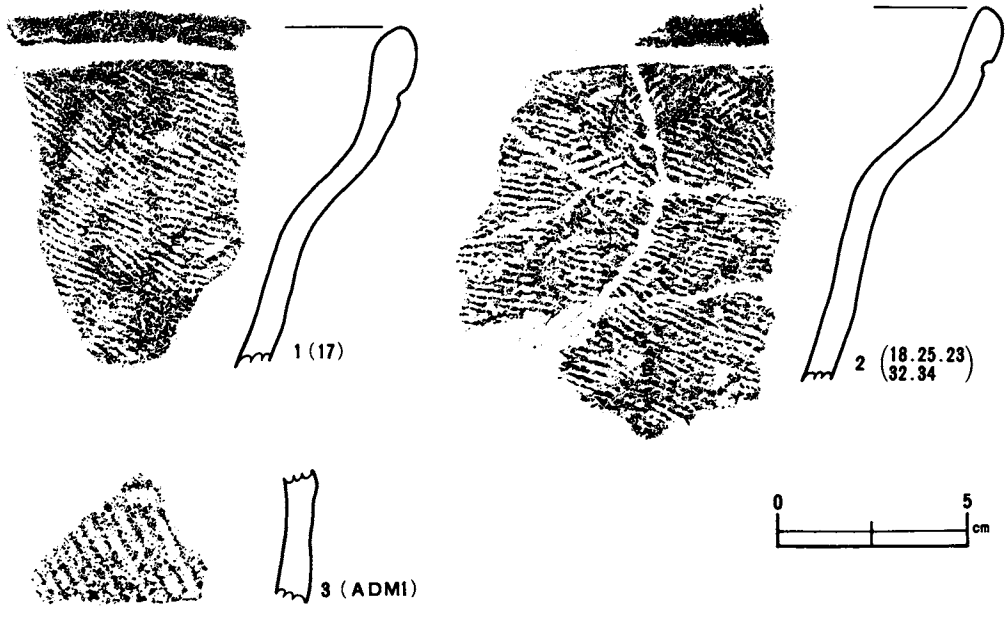
(8)は須恵器の甕である。器体の$\frac{4}{5}$が遺存している。底部は周溝底，頸部，口縁部は墳丘裾部より出土した。口径15.4cm,高さ16.7cm，頸部径5.3cm,胴径10.1cmを測る。胴部は円孔上端に最大径があり球状を呈す。胴接合部から口縁下の沈線まで外反し，口縁部は直線上に延びる。口唇部は平坦である。ロクロミズヒキにより成形され，内面底部は回転ヘラ削り，そのほかはロクロ回転によるナデ調整で仕上げられる。円孔はヘラで面取りされている。焼成は良好，灰白色を呈す。胴部は径7mmの小礫が埋り，胎土に小礫，砂粒の混在が著しい。

(9)は土師器の坏底部である。丸底を呈し，外面は横方向のヘラケズリ，内面はヘラミガキで仕上げている。焼成良好，褐色を呈し一部内外面が黒色化する。胎土に砂粒を含む。

(10)は土師器の坏である。器体の$\frac{1}{5}$が遺存する。口径12.0を測る。口縁部は内反し，器高の低い坏である。器面は口縁部はナデ調整，体部は粗いヘラケズリのままであり，器面に凹凸がある。焼成良好。口縁部の一部が黒色化する。胎土に砂粒を含む。

(11)は土師器の坏である。器体の$\frac{1}{3}$が遺存する。口径16.0cm，高さ4.3cmを測る。口縁部，胴部間の稜より大きく外反し，扁平な土器である。口縁部はナデ調整，体部は粗いヘラケズリ，焼成は甘く，胎土に砂粒を含む。

(12)は緑紬段皿である。器体の$\frac{1}{5}$が遺存する。口径16.6cm，底部径8.0cm,高さ3.3cmを測る。



第46図　11号墳　出土土器拓影図

胎土は密で白色を呈す。釉のかかり具合，整形ともに仕上りはよい。製作地は愛知県嶋海窯であり，10世紀中頃の所産である。

⑬は甕口縁である。濃緑色の釉がかかり，胎土は灰白色を呈し，緻密。灰釉陶器と思われる。

⑭は須恵器の高台付坏である。胴部は直に延びてゆき内外面ともに平滑である。高台の外側に胴部と底部との境を有し，底部はやや膨む。胎土は粗い砂粒で構成される。口径10.5cm，高さ5.1cmを測る。

（高田）

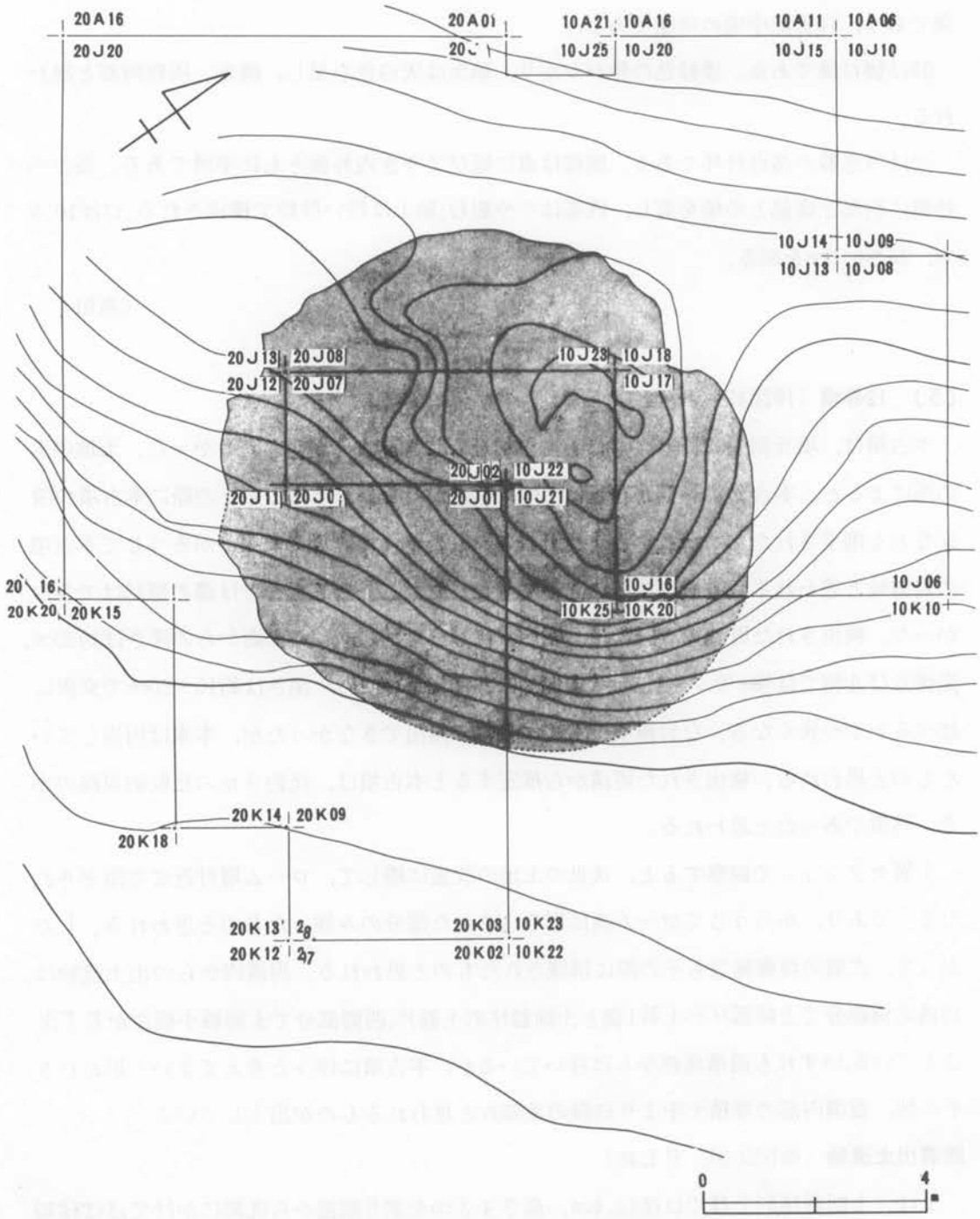
（5） 12号墳（挿図47～49図，ＰＬ19）

本古墳は，墳丘測量に際してもほとんど墳丘らしき高まりが見られなかった。土地の人の話によると，本台地の一部が後世に土地の改変が行なわれたらしくその際に本古墳の墳丘なども削平されたのではないかと思われる。したがって調査の結果，かろうじて本古墳の周溝址と思われる溝を検出することができた。ただし，南東部分では溝の確認はできなかった。検出された周溝の規模は，幅が東側部分で約1.6m，確認面からの深さは約30cm，南側及び北側では幅が0.7～1.3m（南側），0.7～0.9m（北側），深さは約10～20cmで東側に比べるとやや狭くなる。なお南東部分での周溝が検出できなかったが，本来は円周していたものと思われる。検出された周溝から推定すると本古墳は，径約９ｍの比較的規模の小さい円墳であったと思われる。

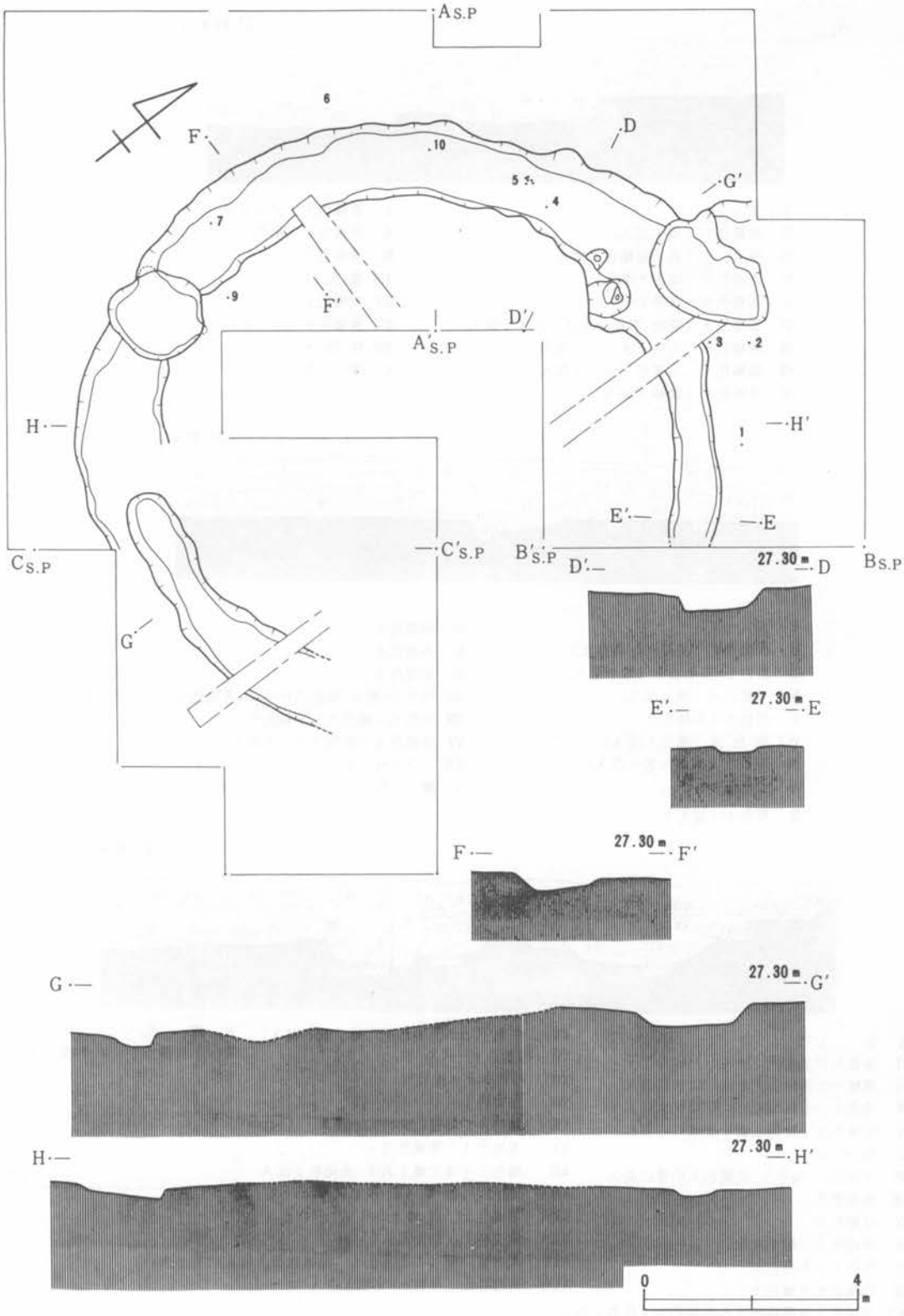
土層セクションで観察すると，後世の土地の改変に際して，ローム層付近まで削平されたようであり，かろうじてローム面に掘り込まれた部分のみ残ったものと思われる。したがって，古墳の埋葬施設もその際に損壊されたものと思われる。周溝内からの出土遺物は，周溝北側部分で土師器坏形土器1個と土師器坏形土器片，西側部分で土師器小破片が若干出土している。いずれも周溝底部からは浮いているが，本古墳に伴うと考えてよいと思われる。その他，周溝内部の堆積土中より鉄鏃の茎部片と思われるものが出土している。

周溝出土遺物（挿図50図，ＰＬ46）

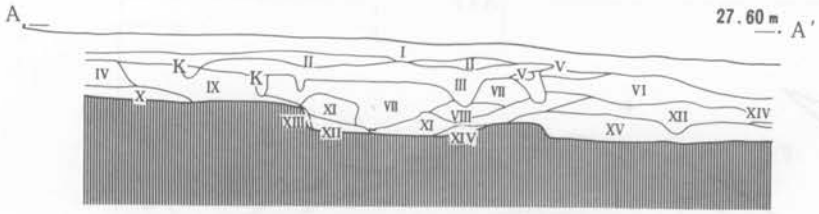
１は，土師器坏形土器で口径12.4cm，高さ4.3cmを測り胴部から底部にかけてほぼ球胴形を呈し，口縁部と胴部との境にわずかな稜がみられ口縁部は内反しながら立ち上がっている。胴部から底部にかけてはヘラケズリが施され，口縁部および内面にはナデ調整を施している。器体は若干歪みをもっている。色調は褐色で焼成は良好である。



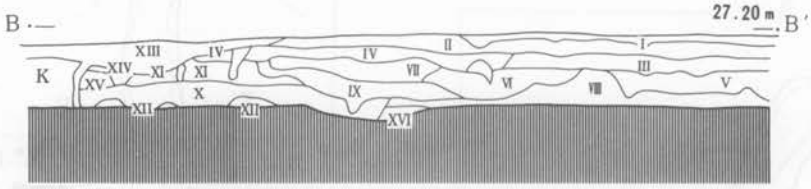
第47図　12号墳 墳 丘 測 量 図



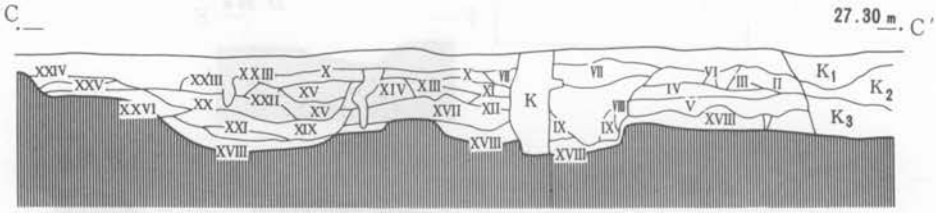
第48図　12号墳 平 面 ・ 断 面 図



I 表　土
II 黒褐色土（焼土混入）
III 黒 色 土（若干暗褐色土混入）
IV 黒褐色土（褐色土混入）
V 茶褐色土（腐植土混入）
VI 茶褐色土（黄色・黒色土まばらに多少混入）
VII 暗褐色土（黒色土まばらに混入）
VIII 暗褐色土（小黄色ブロック混入）
IX 黒褐色土（腐植土混入）
X 黄褐色土（ソフトローム）
XI 黒褐色土（褐色ブロック混入）
XII 淡褐色土
XIII 黄 色 土
XIV 黄褐色土
XV 黄褐色土（ソフトローム）
XVI 褐 色 土
K 攪　乱



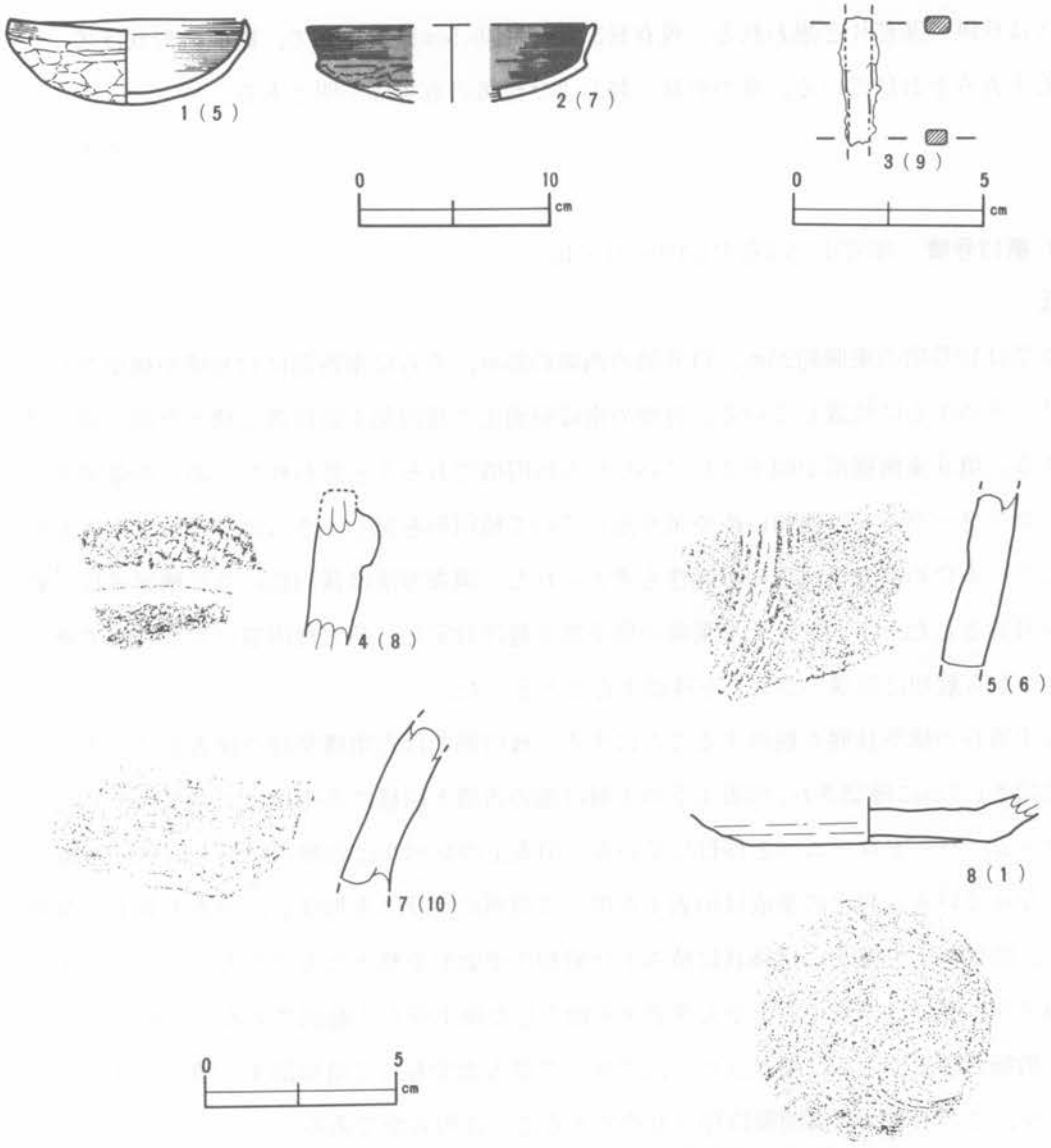
I 表　土
II 茶褐色土（まだらに褐色土）
III 黒色土・黒褐色土（焼土混入）
IV 黒褐色土（焼土混入）
V 黒色土＋茶褐色土
VI 黒 色 土（褐色土混入）
VII 黒色土（褐色土若干混入）
VIII 暗褐色土
IX 黒色土＋褐色土
X 暗褐色土
XI 茶褐色土
XII 黄褐色土
XIII 黒色土・焼土・褐色ブロック・黒褐色土など乱入（固い）
XIV 黒色土＋褐色土＋茶褐色土
XV 茶褐色土（黄色ブロック混入）
XVI ソフトローム
K 攪　乱



I 表　土
II 茶褐色が全体的に混入した暗褐色土
III 黒褐色に茶褐色土まばらに少量混入
IV 褐色土が主体で所々に暗褐色土混入
V 暗褐色土（褐色土若干まばらに混入）
VI 褐 色 土
VII 茶褐色土・褐色土・暗褐色土均等に混入
VIII 茶褐色土
IX 淡褐色土
X 黒褐色土（焼土混入）
XI 黒色土＋茶褐色土
XII 黒褐色土＋褐色土
XIII 黒褐色土＋茶褐色土＋茶褐色土（炭若干混入）
XIV 淡暗褐色（しまっている）＋黒褐色土（やわらかい）
XV 暗 褐 色 土・黒褐色土（焼土若干混入）
XVI 暗褐色土
XVII 暗褐色土＋褐色土
XVIII 黄褐色土（ソフトローム）
XIX 黒褐色で茶褐色まばらに混入
XX 茶褐色土で黒褐色混入
XXI 褐色土主体で焼土若干・黒褐色土混入
XXII 黒色土（炭・褐色土・焼土混入）
XXIII 黒褐色土（炭・焼土混入）
XXIV 黒褐色土（焼土混入）
XXV 炭多量に混入の暗褐色土（暗褐色土より炭の方が多い）
XXVI 茶褐色土（黒色土・腐植土混入）
K 攪　乱
K_1 1次調査トレンチ埋土
K_2 〃
K_3 〃

0　2 m

第49図　12号墳 土 層 断 面 図



第50図　12号墳　出土遺物実測図・出土土器拓影図

2は，土師器坏形土器片で，口縁部にかけて残存する。推定口径は，15.2cm，高さは4cmで，口縁部と胴部との間には稜があり，口縁部は外反しながら立ち上がっている。器体の外面にはヘラケズリが行なわれ，口縁部および内面にはナデ調整が施している。色調は褐色で焼成は良好である。

その他

3は鉄鏃の茎部片と思われる。現存長3.2cm，幅6.5cm厚さ4mmで，断面の形状は隈が若干丸みをおびている。身の形状，棘および箆被の有無は不明である。

（鈴木）

(6) 第13号墳（挿図51～59図，PL19～21・46）

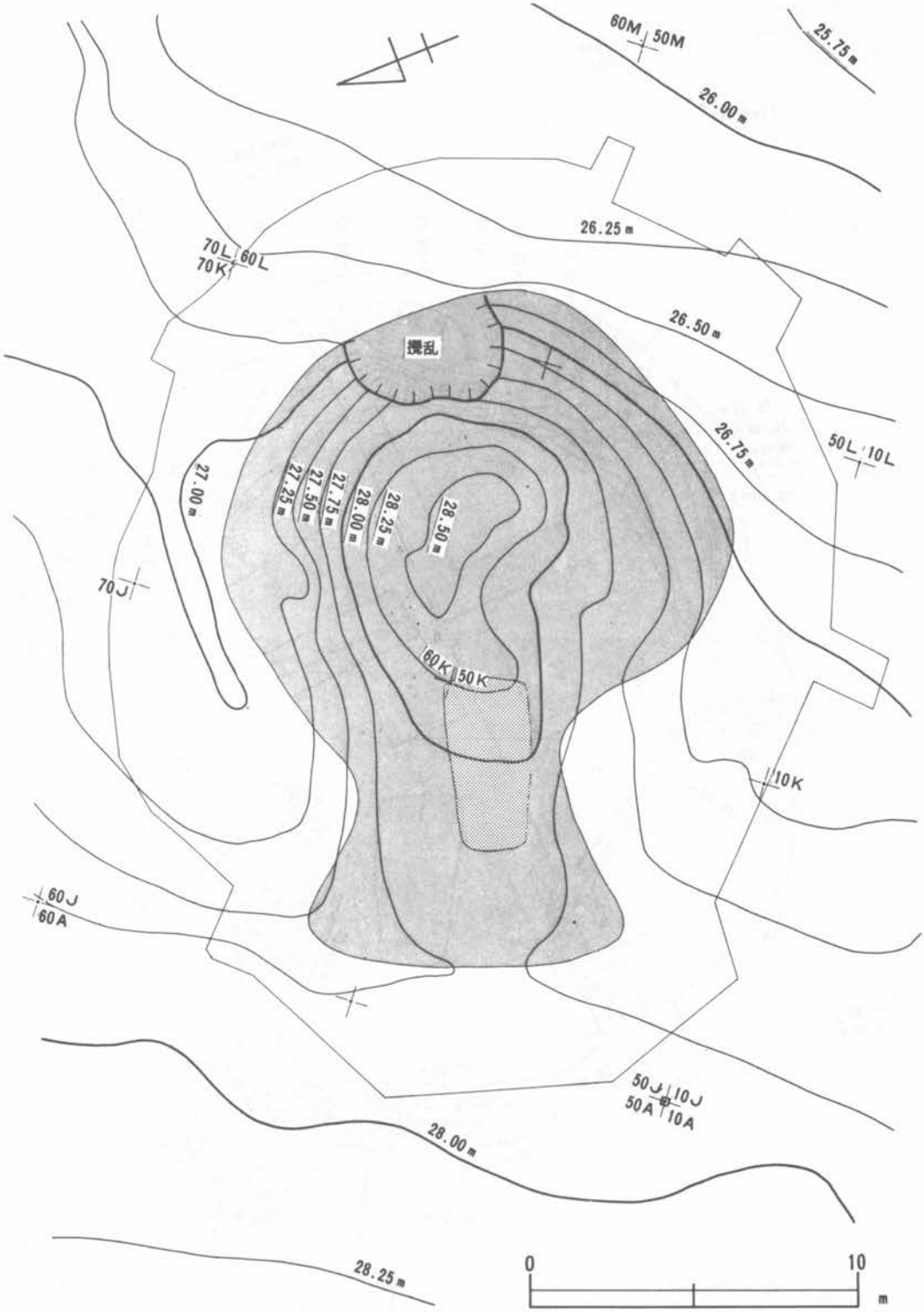
墳丘

本墳は12号墳の東側約20m，11号墳の西側約25m，さらに南西部に14号墳が構築されており，その中心に位置している。台地の南緩斜面上で後円部を低位置に構えた前方後円墳である。墳丘東側裾部が削平されていたが当初円墳であろうと思われた。墳丘測量図をみるとコンターラインは西側にやや張り出していて楕円形を呈し，さらにフラットな面を形成しているため前方後円墳の可能性も考えられた。調査方法は後円部に墳丘構築過程の観察を目的とした十字トレンチを東側の削平部を避け設定し，前方後円墳の可能性も考慮に入れながら最初に周溝のかたちを確認することとした。

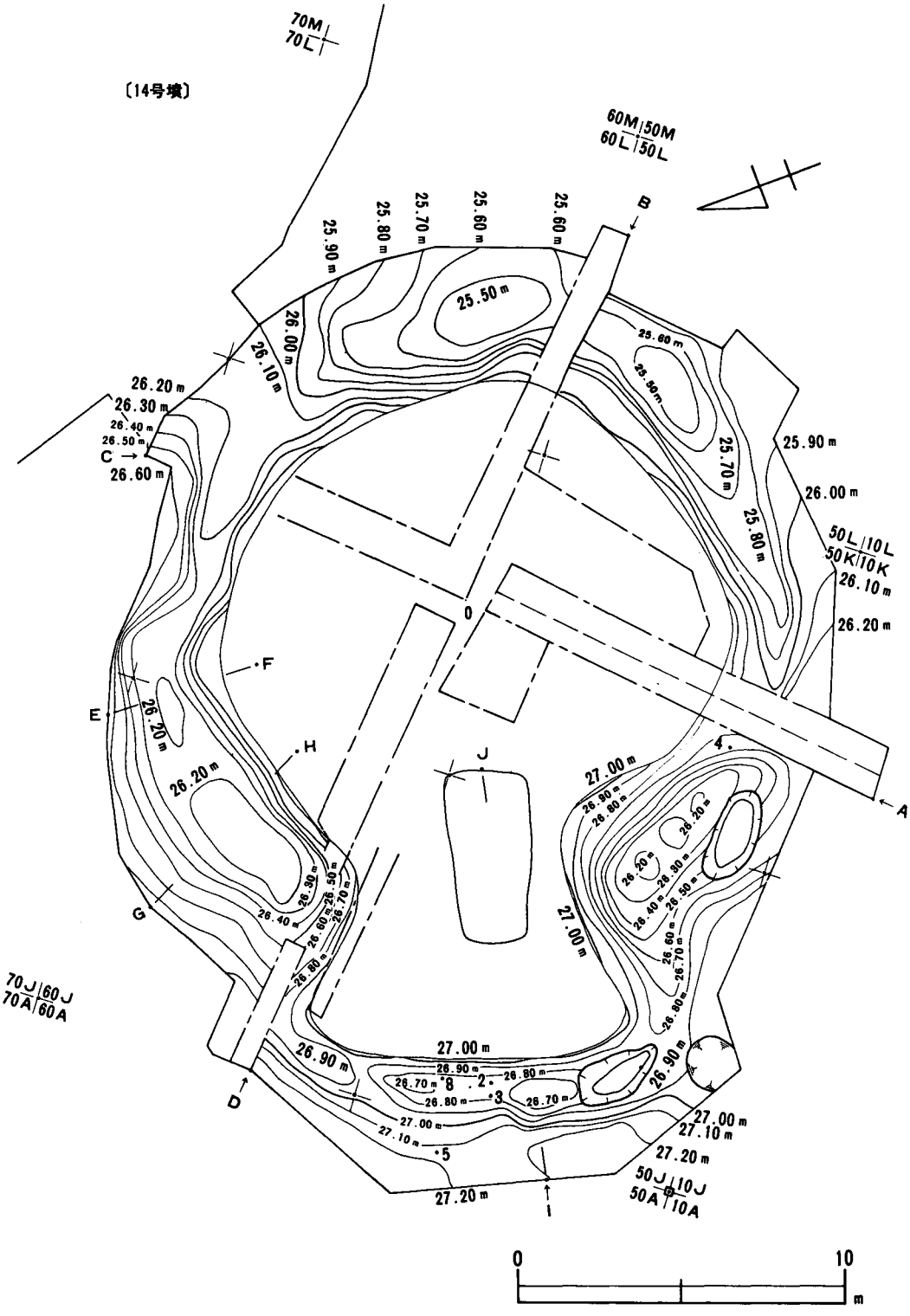
まず墳丘の構築状態を観察することにする。後円部では古墳構築時の地表面（旧表土）が墳頂下1.7mに確認され，旧表土下の土層は他の古墳と同様に茶褐色土，暗褐色土，ソフトローム，ハードロームへと移行している。旧表土のレベルは台地の傾斜と同様に西側が高くなっている。封土の築成は旧表土を削って周囲にテラスを形成し，旧表土直下の茶褐色土，暗褐色土を僅かに摺鉢状に積み上げ最初の平面形を整えたものと考えられる。また南西グリッドでは旧表土直上から黒色土を地とした焼土帯が小範囲であるが認められたことが指摘される。さらに墳丘はロームブロック混入土でもって墳頂部まで積み上げられているが，この土層は周溝開鑿に伴うものであることは明らかである。

前方部については後述する埋葬施設との関連で説明することにするが，旧表土下を削平することなく，周溝の区画のみで形づくったか，あるいは僅かな周溝開鑿の土量を積み上げたかの程度であり，地形図から復元してみてもさほどの高さは考えられない。

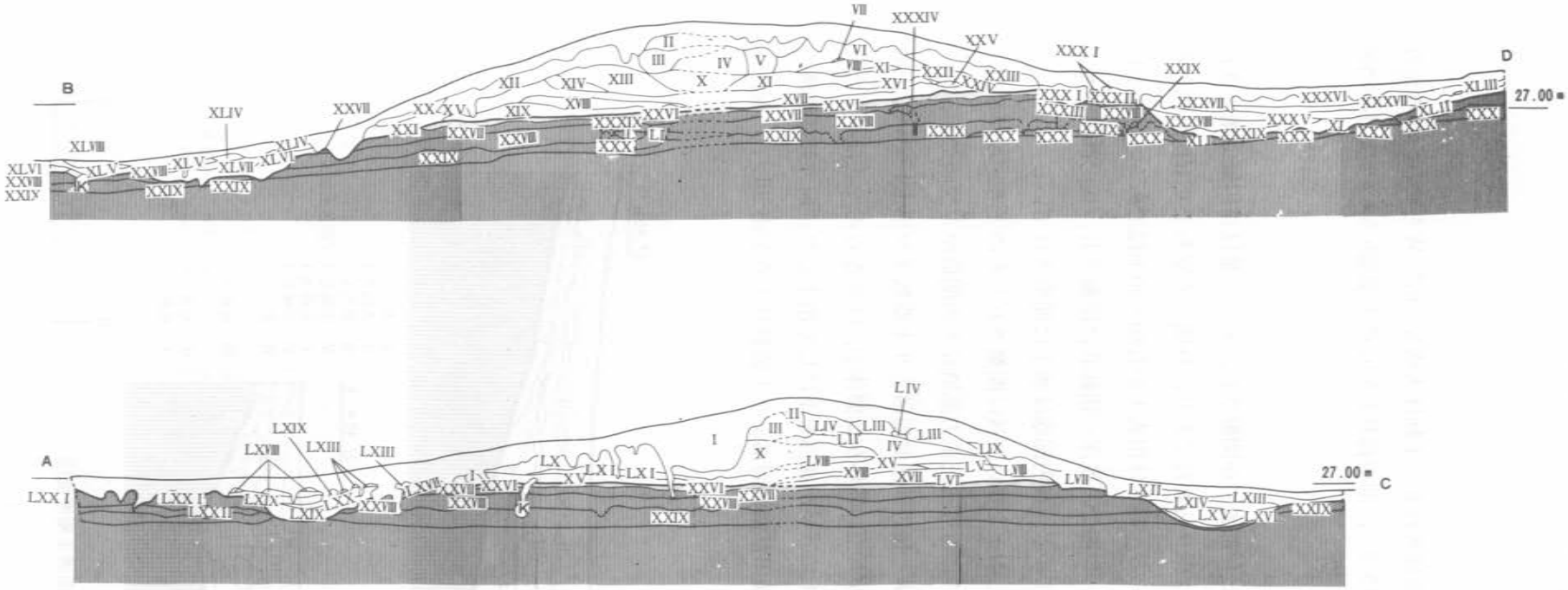
墳丘の平面形をみると，周溝の内壁が比較的明確に巡っているが，厳密な企画性は認め



第51図　13号墳 墳 丘 実 測 図



第52図　13号墳 周 溝 実 測 図



I 表土
II 茶褐色土
III 褐色土（ローム・ブロック多量に混入）
IV 淡褐色土（ローム・ブロック少量混入）
V 明褐色土（ロームブロック多量に混入）
VI 明褐色土
VII 黒色土
VIII 明褐色土（ローム・ブロック少量，黄褐色土混入）
IX 暗茶褐色土（ローム・ブロック中混入）
X 淡褐色土（ローム・ブロック，黄褐色土混入）
XI 暗褐色土（ローム・ブロック，黄褐色土混入）
XII 暗茶褐色土
XIII 明褐色土（ローム粒混入）
XIV 明褐色土
XV 淡褐色土（黄褐色土混入）
XVI 黒色土（暗褐色土混入）
XVII 暗褐色土（褐色土混入）
XVIII 明褐色土
XIX 褐色土（ローム・ブロック少量混入）
XX 淡褐色土
XXI 褐色土（黒色土混入）
XXII 淡褐色土（暗褐色土混入）
XXIII 暗茶褐色土
XXIV 黒褐色土
XXV 黒色土 （明褐色土混入）
XXVI 黒色土（旧表土）
XXVII 茶褐色土
XXVIII 暗褐色土
XXIX ソフト・ローム
XXX ハード・ローム
XXXI 茶褐色土（黒褐色土混入）
XXXII 黒色土
XXXIII 明褐色土
XXXIV 茶褐色土（焼土混入）
XXXV 暗茶褐色土
XXXVI 茶褐色土
XXXVII 暗褐色土
XXXVIII 黒褐色土
XXXIX 暗褐色土（黄褐色土少量混入）
XL 暗褐色土（黄色粒混入）
XLI ハード・ローム（暗黒褐色がしみこんでいる）
XLII 暗褐色土（黄褐色土少量混入）
XLIII 焼土
XLIV 暗茶褐色土
XLV 茶褐色土
XLVI 黒褐色土
XLVII 暗褐色土
XLVIII 茶褐色土
XLIX 明茶褐色土
L 暗褐色土
LI 暗褐色土＋黄褐色土
LII 褐色土（ローム・ブロック少量混入）
LIII 明茶褐色土
LIV ローム・ブロック
LV 茶褐色土
LVI 黒色土
LVII 黒褐色土
LVIII 黒褐色土（茶褐色土混入）
LIX 明黒褐色土
LX 暗茶褐色土
LXI 褐色土（黒色，黄色土混入）
LXII 茶褐色土
LXIII 黒色土
LXIV 暗褐色土
LXV 黒褐色土
LXVI 黄褐色土
LXVII 暗茶褐色土
LXVIII 淡褐色土（黒色土混入）
LXIX 黒褐色土
LXX 淡褐色土
LXXI 暗褐色土
LXXII 漸移層

0 4 m

第53図　13号墳 土 層 断 面 図

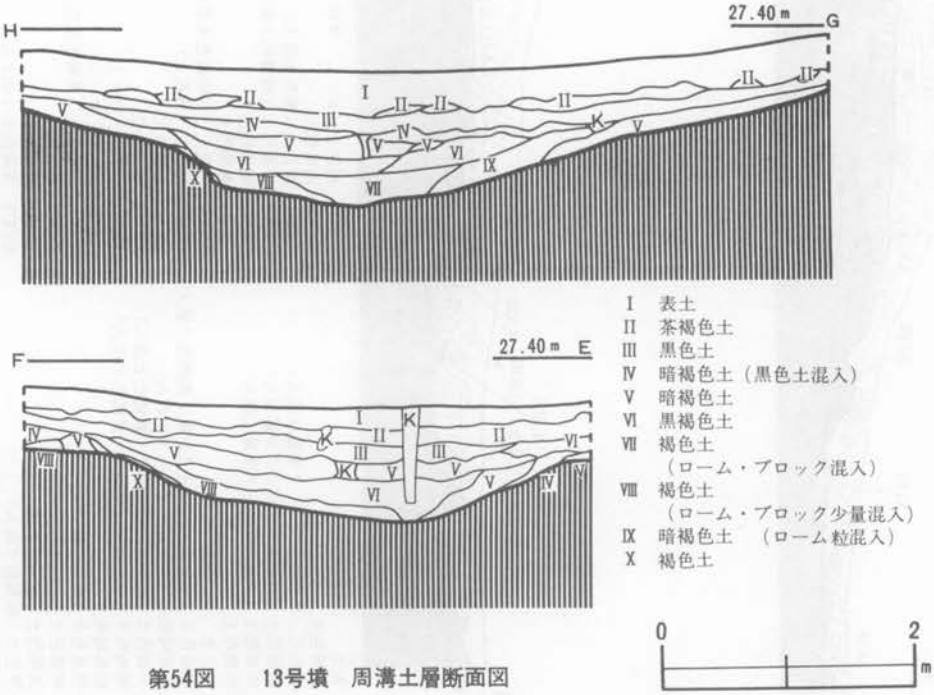
られず主軸に対象していないことが指摘される。主軸は大略N—67°—Wを測る。各墳丘の数値は，主軸長約20m，後円部径約15.5m，前方部長4.5m，前方部幅9.5mを測る小型の前方後円墳である。

周溝

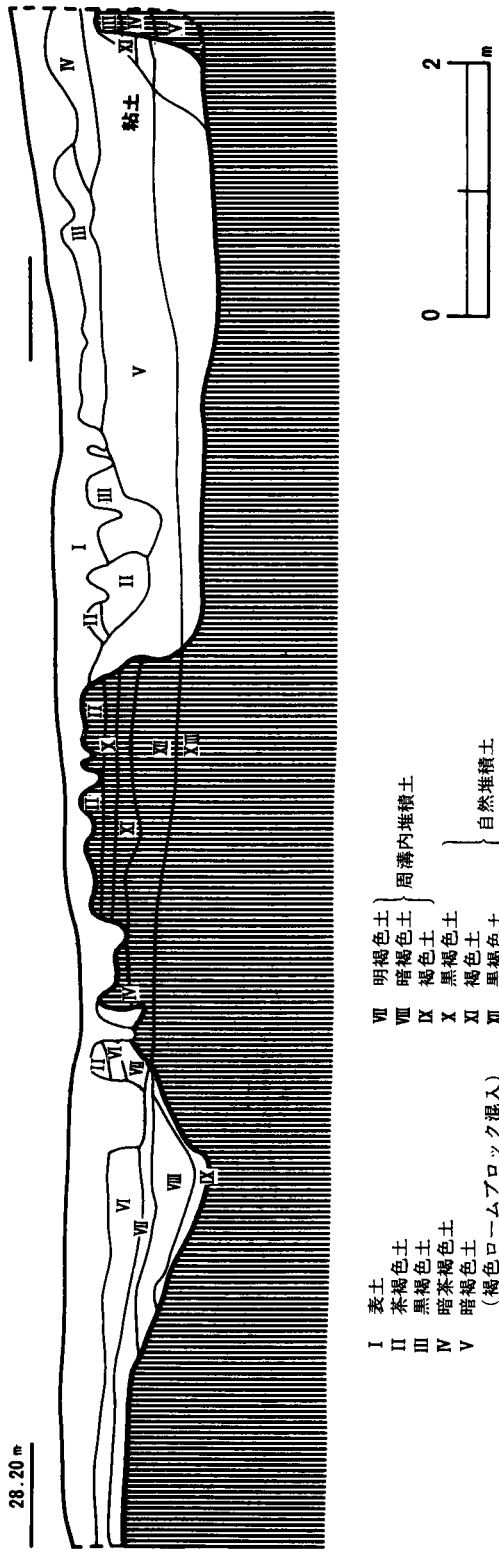
周溝は最初後円部を中心としてクビレ部までが開鑿され，その土量は後円部に積土されたと思われる。墳丘テラスから緩かに掘り込まれており，外側への立ち上りも緩かであるが周溝底はハードローム層を穿っている。深さは旧表土から80～90cm程である。斜面上に位置する14号墳と同様であるが，クビレ部で一度深く摺鉢状に開鑿され，後円部西側面では地山の傾斜に沿いレベルは下降してゆき，後円部端は水平に開鑿されている。

前方部周溝は後円部の周溝を開鑿し封土を築いた後に開鑿されたものと考えられるが，溝底ソフトローム層であることは，先にも述べた前方部墳丘との関係から説明できる。

周溝内遺物出土状況は，前方部周溝と後円部南側周溝より土器数点が出土している。前方部端では須恵器坏底部(8)その右側から土師器坏が2個体(2)，(3)がならんで底部を下にし出土している。前方部南側周溝から土師器坏が底部を下にして出土した。前方部端周溝の外縁付近に土師器坏(5)が出土した。後円部南側周溝より土師器坏1点が出土している。い



第54図　13号墳　周溝土層断面図



第55図　13号墳　周溝土層断面図（前方部）

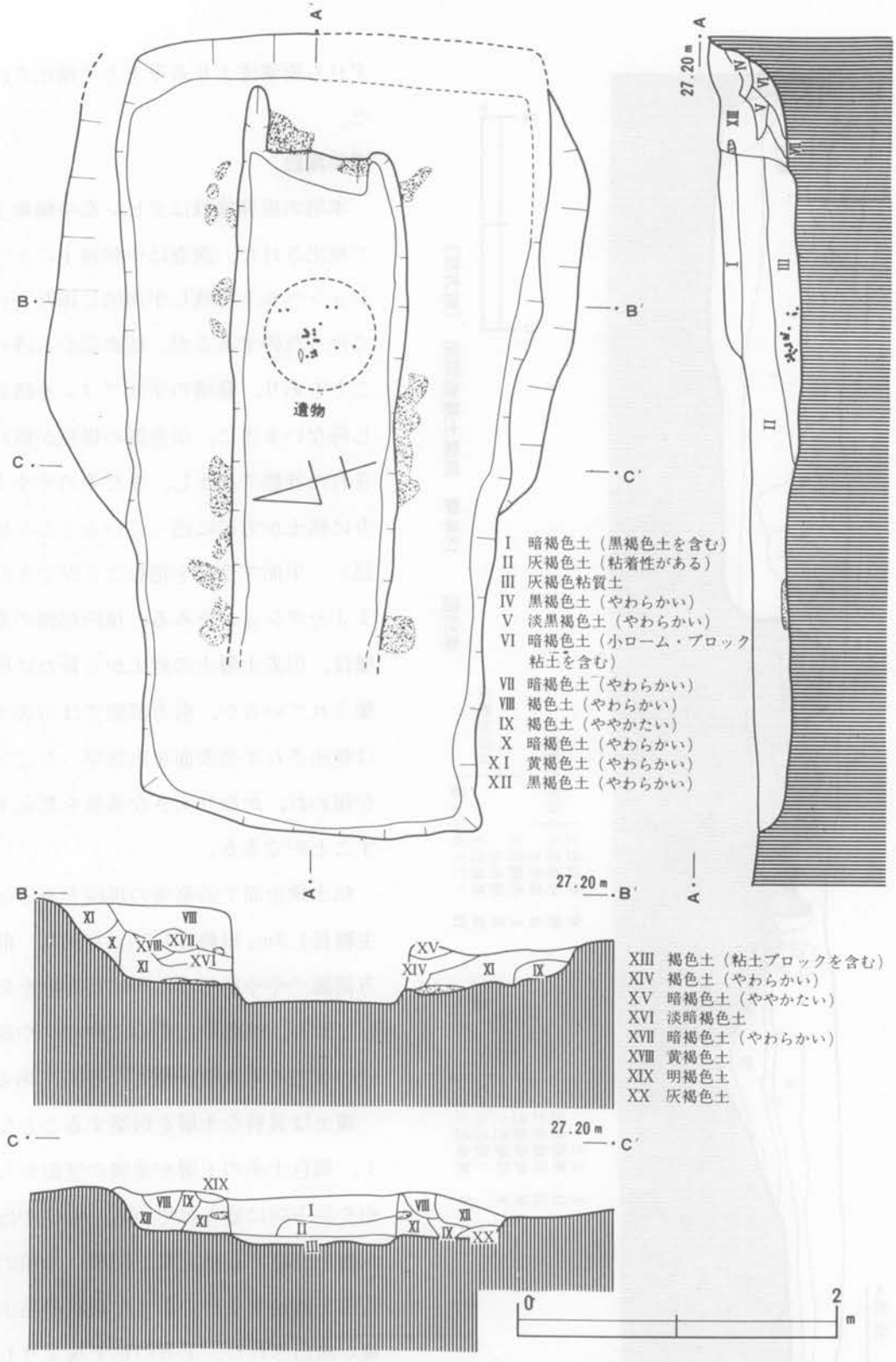
ずれも周溝底より若干上方で検出された。

埋葬施設

本墳の埋葬施設はクビレ部中軸線上で検出された。調査は中軸線上にセクションベルトを残し平面的に掘り下げていったのであるが，地表面から浅いこともあり，墓壙の平面プランを確認し得ないままに，須恵器の提瓶が破砕された状態で出土し，またそのやや下方に粘土が方形に巡っていることを確認し，平面プランを把むことができた。ＩＪセクションをみると後円部側の墓壙は，旧表土層上の封土から新たに掘鑿されているが，前方部側では旧表土は検出されず地表面を直接穿ったことが窺われ，かなり大きな墓壙を想定すすことができる。

粘土検出面での墓壙の規模をみると，主軸長4.9m，短軸長2.25mを測り，前方部側でやや狭くなるが略長方形を呈しており，壙底では中心に向いやや落込むところもあるが概して平らである。

覆土は異質な土層を版築することなく，褐色土系の土層が墓壙の壁面からやや斜方向に盛られている。壙底では木棺を囲繞する粘土塊と同様に木棺の基部を固定するかのような板状の粘土塊が検出された。上方の粘土塊よりも使用量は少ない。なお粘土検出面より



第56図　13号墳　埋葬施設平面・断面図

上方はロームブロックが多少混入する褐色土が充塡している。

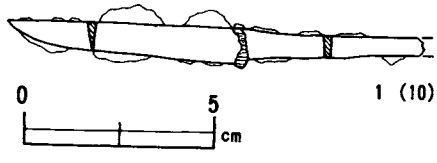
木棺内は黒褐色土が充塡しており，墓壙の裏込め土とは明確に区別できた。壁面が重直に立ち上り，長方形の箱形を呈している。主軸長約3.3m，幅1.1mを測る。後円部側の小口部をみると長手部が長さ40cm，幅15cm，深さ約20cmにわたり箝入されており，棺床レベルでは達していないが，組合せ式木棺様のものが埋置されていたことを示唆している。しかし前方部側では攪乱を受けたようで明確な立ち上りは確認されていない。また上蓋部は上方の粘土塊が囲繞していたレベルと考えてよく，棺床部までの深さ約30cmを測る。

木棺内から出土した遺物は，最下層からの出土はなく，上方の粘着性のある灰褐色土中から出土しており，棺の中央から後円部側に集中して，管玉５個，臼玉１個，小玉12個，刀子１本が検出された。おそらく被葬者の胸部附近と考えてよい。直刀，鉄鏃等の鉄製品の出土はなかった。

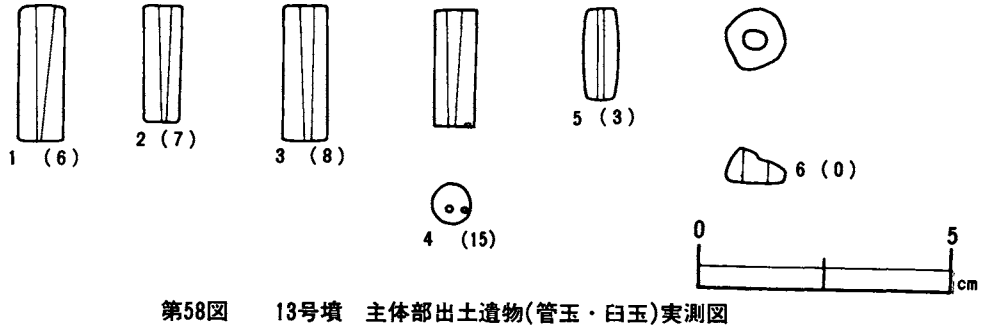
埋葬施設内出土遺物

本古墳の埋葬施設内から出土した遺物は刀子１本と玉類である。

刀子(1)は茎部先端を欠損するが現存長10.9cm，刃部長6.2cmを測る。全体に銹膨れが著し



第57図　13号墳　主体部出土遺物実測図



第58図　13号墳　主体部出土遺物(管玉・臼玉)実測図

いが関部に木質が残存する。鋭利な製品である。

管玉は全部で5個検出された。平均して直径0.8cm，長さ2.3cm程である。(1)から(4)は濃緑色を呈しており，片側から穿孔されたことが窺われる。材質は，碧玉製である。(5)は土製である。

臼玉(6)は直径1.24cm，長さ0.43～0.75cmを測る。一部欠損したものと思われるが，磨滅しており不明である。内径0.41cmで綺麗に穿孔されている。色調は灰白色である。

小玉は12個検出された。平均して直径0.5cm，長さ0.38cmを測る。黒褐～褐色を呈し，材質は土製である。最大が直径0.26cm，長さ0.46cm，最小が直径0.46cm，長さ0.35cmを測る。

周溝内出土遺物

坏形土器(1)は口径12.8cm，高さ4.5cmを測る。口縁部の一部を欠損するがほぼ完形である。口縁部と胴部の間に鋭い稜を有し，器体は厚みがあり，口縁部は外反しながら薄くなる。口縁部内外はナデ調整，体部はヘラケズリ，内面はヘラナデ調整で仕上げられる。焼成は良好で胎土は砂粒を含む。褐色を呈すが一部黒色を帯びる。

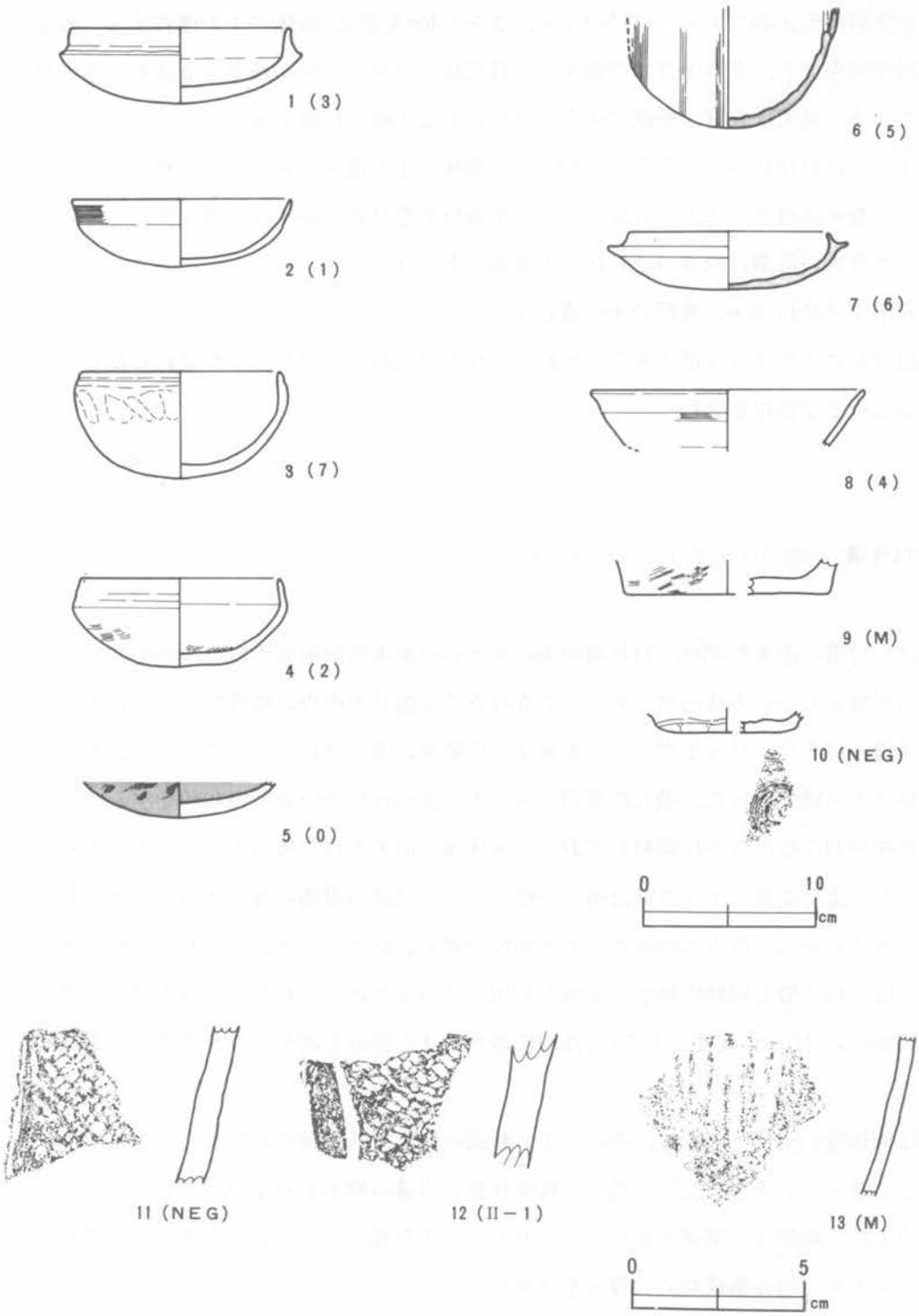
坏形土器(2)は口径12.8cm，高さ4.0cmを測る。器体の$\frac{4}{5}$が遺存する。器壁は薄く，口縁部と胴部の間に弱い稜を有する。口縁は稜線から垂直に立ち上がり口縁部端は丸味をもつ。口縁部内面はナデ調整，体部はヘラナデ調整が認められる。焼成は良好で明褐色を呈す。

埦形土器(3)は口径11.6cm，高さ6.2cmを測る。体部は球形を呈し口縁部は内弯する。口縁部はナデ調整，体部はヘラケズリの後ヘラナデで平滑に仕上げられている。内面はヘラミガキされている。焼成は良好。口縁部内外面は赤色顔料が塗彩され，外面の一部は黒色を帯びる。

埦形土器(4)は口径11.6cm，高さ5.1cmを測る。器体の$\frac{4}{5}$が遺存する。口縁部と体部の間に丸味を帯びた稜を有し，底部は厚く胴部にかけて緩かに屈曲し，口縁部は内傾する。口縁部はナデ調整，体部はヘラケズリ，内面は口縁部をナデ調整，以下はヘラケズリの後不整方向へナデ調整。焼成は甘く軟い。外面は褐色を呈すが，外面の一部および内面は黒色を帯び，胎土は小礫，砂粒を含む。

(5)は埦の底部で丸底を呈しヘラナデの後，内外面は赤色顔料が塗彩される。

(6)は須恵器の提瓶である。「フラスコ」状の長頸瓶とも考えられるが胴部が球形でなく一方がやや扁平であるので提瓶と考えた。埋葬施設直上に供献された土器であるが，胴部下半のみが破砕された状態で検出され，ほかの部分は未検出である。現存高7.0cm，胴径は約13cmほどでやや小型である。外面はヘラケズリ痕を全面に残すが平滑に仕上げられており，内



第59図　13号墳　周溝内出土土器実測図・出土土器拓影図

面はロクロミズビキ痕が著しい。また胴部接合部が$\frac{1}{2}$ほど残存し，丁寧に仕上げられている。

(7)は須恵器坏形土器である。口径11.6cm，高さ3.4cmを測る。器体の$\frac{1}{4}$が遺存する。器高は低く扁平味を有し，立ち上りは内傾する。底部はヘラケズリ痕が残るが全体を丁寧に整形されている。焼成は良好，堅緻で灰色を呈し胎土は小礫・砂粒を含む。

坏形土器(8)は口径15.8cm，高さ3.2cmを測り，器体の$\frac{1}{4}$が遺存する。ロクロ整形されたと思われる。焼成は良好であるが外面の一部は黒褐色を帯びる。胎土は小礫・砂粒を含む。国分期のやや古い時期に位置づけられる土師器であろう。

(9)は底部で径は11.8cm。底部の$\frac{1}{4}$が遺存する。

(10)は国分期の坏形土器底部である。回転糸切りと周辺部のヘラケズリが認められる。黄褐色を呈し胎土は砂粒を含む。

（鈴木）

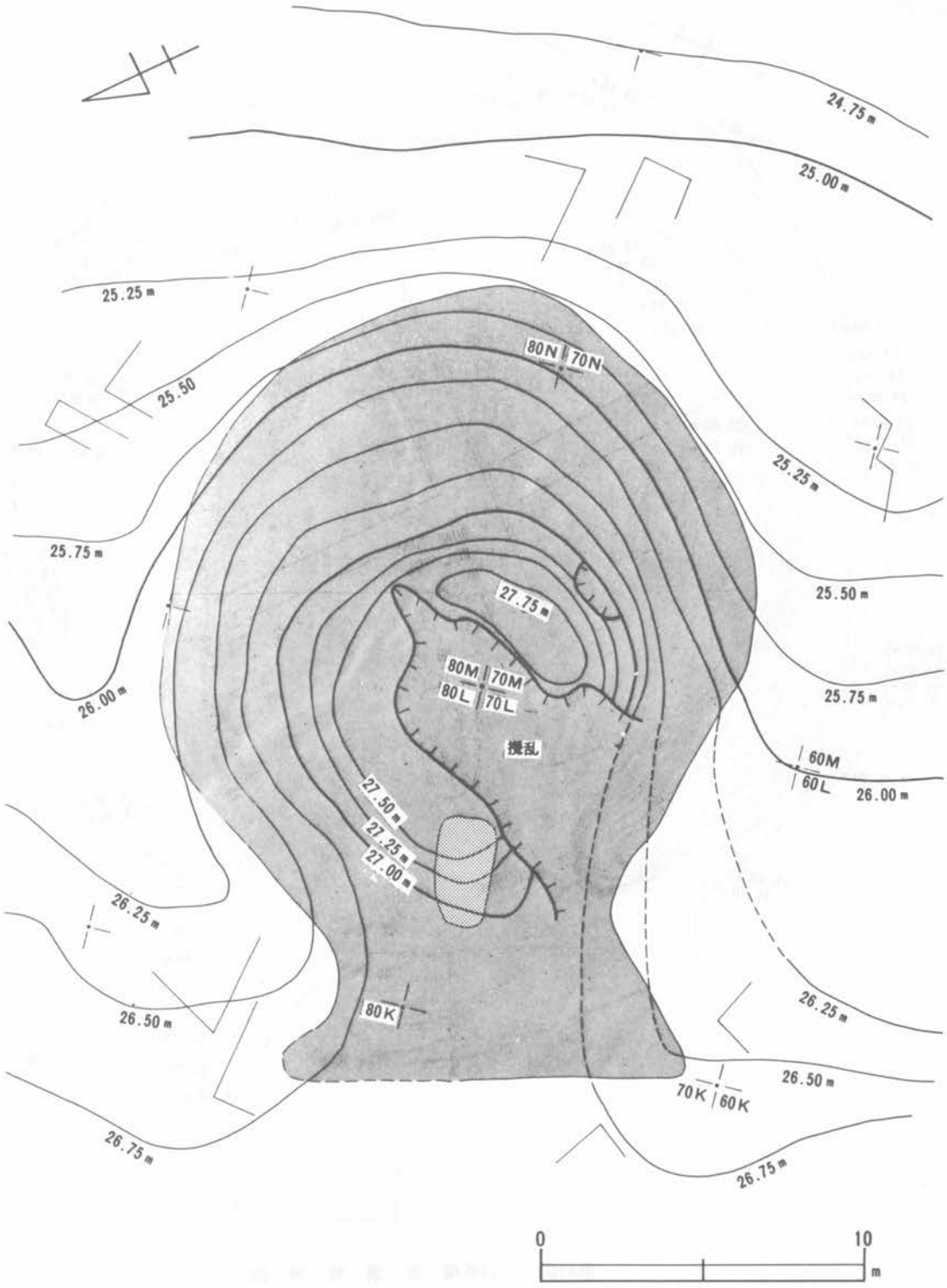
(7) 第14号墳 （挿図60～72，ＰＬ22～23・46）

墳丘

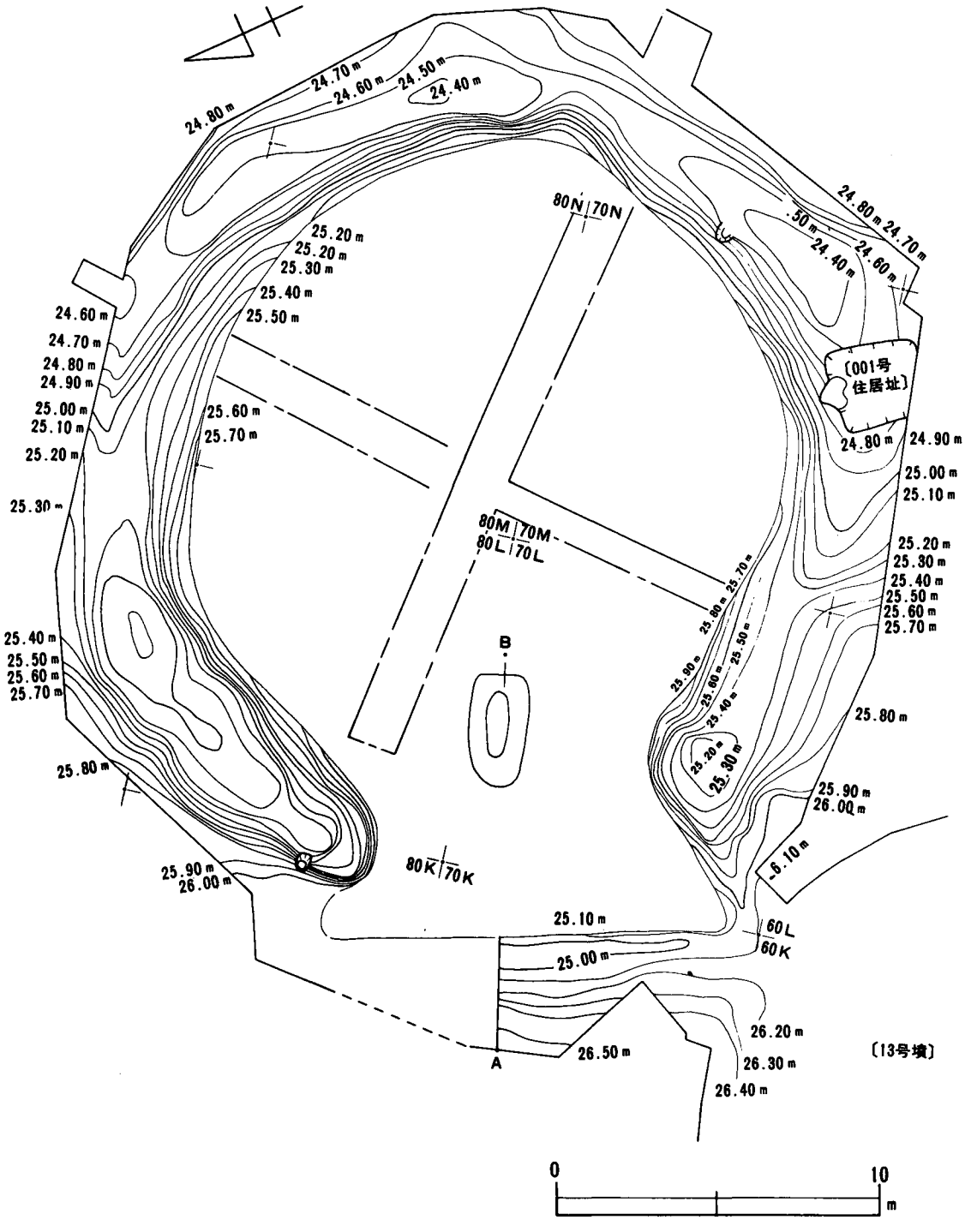
本墳は13号墳の南東約25ｍ，11号墳の南約26ｍの台地南側緩斜面の縁辺に築造された「帆立貝」の形態をもつ前方後円墳である。調査時点では墳丘の中央に戦時中開鑿されたという「俺体壕」があり，13号墳寄りの地表面まで広範囲に削平されていて遺存状況は悪く，その形状は不明確であった。墳丘測量図をみると，径15ｍ程の円墳状の起伏を呈しているが，南側緩斜面はなだらかに傾斜しており，俺体壕で削平された墳頂部へ円の中心を外れていること。また北側のテラス面は墳丘両側，とくに北側の周溝の落ち込みが大きく張り出していることから，前方部の所在する可能性が考えられた。前方部の盛り上りが認められないのは，13号墳と同様に斜面の上面を利用しているためと思われた。高さは前方部側のテラス面からは0.5ｍ程度であるが，後円部端からは2.25ｍを測り，みかけの墳丘を高くしている。

調査は俺体壕の清掃とともに，その一辺の断面を切り，延長線のＢＤトレンチとそれに直交するＡＣトレンチを設定し，墳丘の構築状態と周溝の検出を行ない，それとは別に後円部と前方部の構築上の関連を知る目的でABトレンチを設定した。また周溝全掘後墳丘の表土面を除去し，墳丘築成時点の復元を試みた。

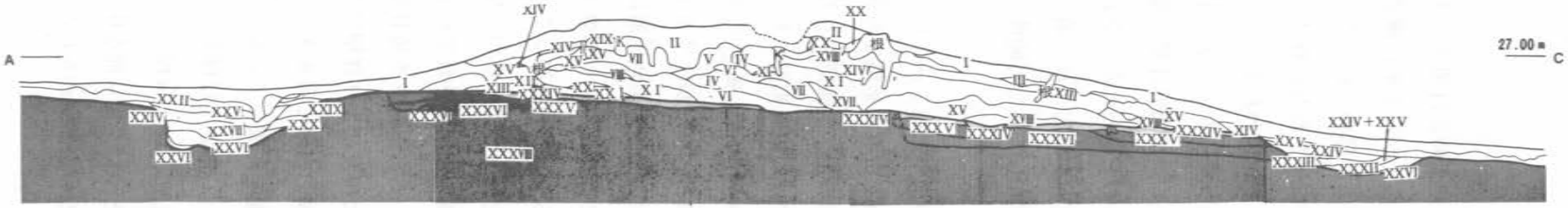
まず墳丘表面をみると，俺体壕に伴う排土が堆積しており，ＢＣトレンチでは墳丘中央に幅8.4ｍ，最大の厚さ0.4ｍ程，ＡＣトレンチでは幅12ｍにわたって堆積していた。この堆

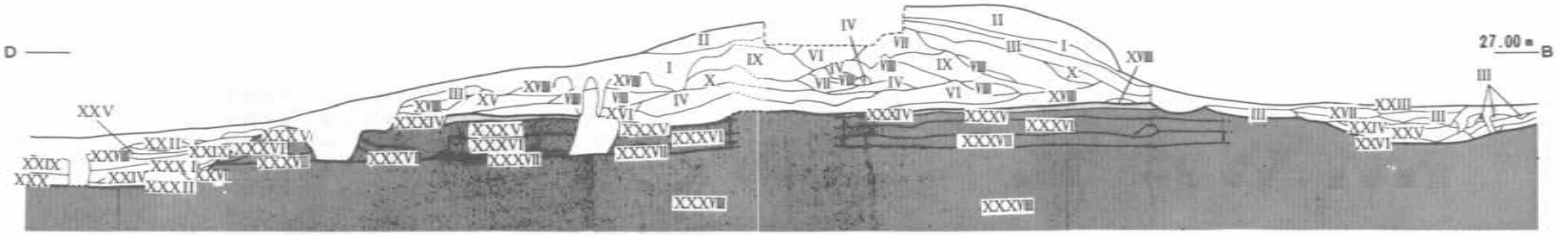


第60図　14号墳 墳 丘 測 量 図



第61図　14号墳 周 溝 実 測 図

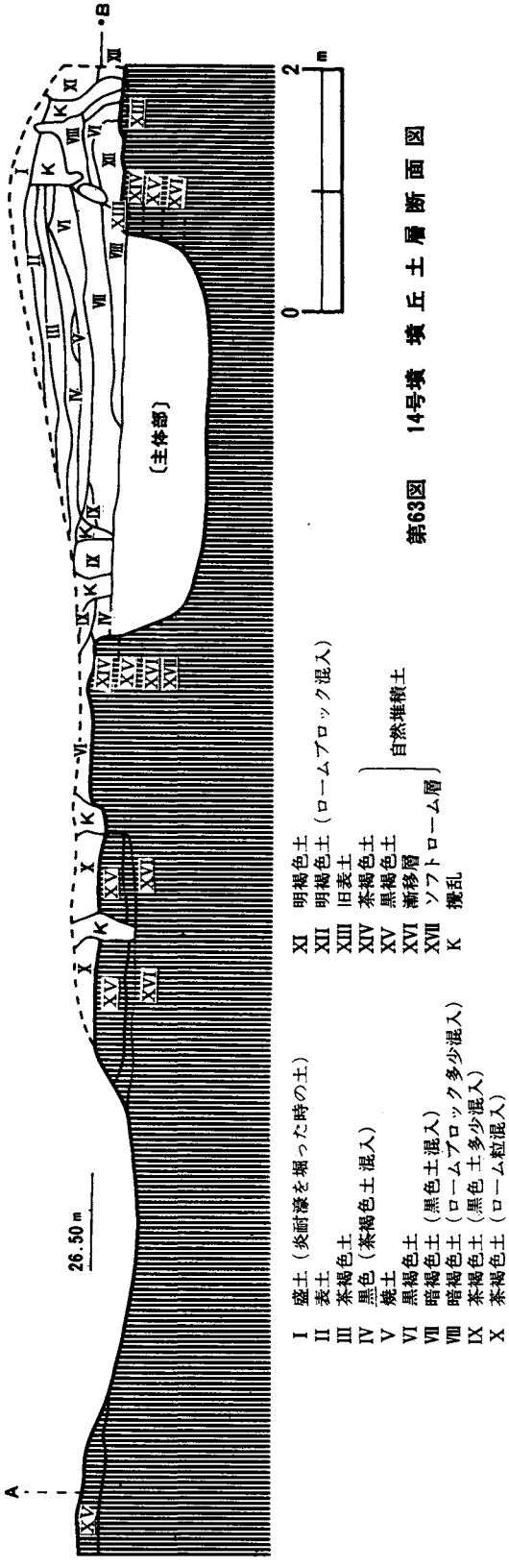




I 表土
II ローム・ブロック（後世の盛土）
III 茶褐色土
IV 褐色土（ローム・ブロック）
V 褐色土（大塊ローム・ブロック）
VI 褐色土（小塊ロームブロック）
VII 淡褐色土（小塊ローム・ブロック）
VIII 暗褐色土（ローム・ブロック混入）
IX 褐色土（ローム・ブロック，ローム粒子混入）
X 淡褐色土（ローム・ブロック，ローム粒子混入）
XI 褐色土（ローム粒子混入）
XII 暗褐色土（ローム粒子混入）
XIII 黒褐色土（ローム粒子混入）
XIV 褐色土
XV 明褐色土
XVI 茶褐色土
XVII 暗褐色土
XVIII 黒褐色土
XIX 淡褐色土
XX 黒褐色土＋褐色土
XXI 黒褐色土＋褐色土（焼土混じり）
XXII 焼土
XXIII 黒色土
XXIV 明褐色土
XXV 黒褐色土
XXVI 明褐色土（ローム粒子混入）
XXVII 暗褐色土
XXVIII 淡黒褐色土
XXIX 淡暗褐色土
XXX 淡暗褐色土（ロームブロック混入）
XXXI 暗黒褐色土
XXXII 暗茶褐色土
XXXIII 暗褐色土（ローム・ブロック混入）
XXXIV 黒色土（旧表土）
XXXV 茶褐色土
XXXVI 暗褐色土
XXXVII 漸移層
XXXVIII ソフトローム

0 4 m

第62図　14号墳　土　層　断　面　図



第63図　14号墳　墳丘土層断面図

堆積土は表土除去時には墳丘の大半に流出していることが平面的に確認された。しかし排土が認められることにより，掩体壕で削平された以外は旧状を留めていたことが窺われる。したがって27.5mのコンターラインから上方がさほど高くなく，墳頂部は平坦面を形成していたものと思われる。なおこの排土中から直刀が検出され，墳頂部に埋葬施設が存在していた可能性が考えられた。

次に墳丘の構築過程をみていくと，墳頂下1.3mで古墳の基盤である黒色の腐植土（旧表土）が確認された。ACトレンチでは両墳丘裾部において旧表土面の高さが0.9m程異なり，BCトレンチでは西から東にかけて若干傾斜している。旧表土面の黒色土層は本墳では普遍的に存在せず，一部焼土が認められている。墳丘の構築はこの土層の上に封土を積土しているが，墳丘裾部は一部基盤面が削平されている状態が窺われる。BCトレンチ墳丘裾部をみるとともに攪乱により詳細は不明であるが，周溝の内縁に至るまで旧表土を整地した面を形成している。ACトレンチのクビレ部側では傾斜している地山を整地して，幅2m程のテラス面を形成し，とくにクビレ部を中心に封土が存在しない面が認められた。後円

部端側では地山整形されることなく旧表土上に封土が築かれている。墳丘裾部の整地は墳丘構築に先立ち平面企画がなされた結果として捉えられるが,後述するように前方部では表土面が全面的に整地されており，前方部側に整地の重点がおかれていたものと思われる。

次に封土について断面を観察すると，BDトレンチでは旧表土の上に粘着性のある黒褐色土で中央から墳丘裾部に向い斜方向の基礎固めを行ない，その上にロームブロックとそれに褐色土を混入した土層を中央では旧表土に沿って積み，墳丘斜面では裾部に向い斜方向に盛土して墳丘を形づくっている。Dトレンチでは Bトレンチのように旧表土上に基礎固めすることなしに，ロームブロック混入土を地山に沿って積み，Bトレンチ側から盛土を行なっていった傾向が指摘される。Aトレンチではロームブロック混入土を主体とし中心に向い斜方向に盛土し，Cトレンチに移ると旧表土面に沿い幅30～50cmの腐植土属を一層ごとに築き，低い墳丘を形成している。

前方部テラス面にかかるＡＢトレンチをみると後円部と異なった構築状態がみられる。後円部の一部では旧表土上にロームブロックを主体とする盛土が認められるが，この盛土はクビレ部に位置する埋葬施設の構築で垂直にちかく切られており，旧表土のレベルを基準とした整地が認められる。この整地は表土を剝いだ程度のもので前方部端まで続くが，レベルは地山の傾斜に伴い若干高くなっていく。整地が終了した時点で墓壙が開鑿され，小粘土塊を含む褐色土で充塡される。封土は墓壙の直上のみソフトローム質の褐色土で覆われ，被覆を兼ねていることが認められるが，上方は後円部から斜方向に一層ごとに異質な腐植土が盛られており，前方部側の墓壙の縁は低い封土が築かれているにすぎない。前方部に移ると盛土は中央部ではほとんど認められず，端部ではロームブロック混入土が若干盛られていることが認められる。墳丘構築時にも地表面から高く盛られず，浅く旦つ狭い周溝の区画で僅かの盛土を前方部端に積んだものと思われる。

次に墳丘の平面形態をみると，周構の全掘により前方後円墳であることが確認された。しかし前方部北側は攪乱により検出されず，また両クビレ部が主軸に対象していないことから主軸方向も明確でないが，大略N—75°—Wの方向を向く。後円部をみると主軸方向にやや長い円形を呈しているが，このことは後円部端の封土が簡単に盛られていることも一因していると思われる。各数値を延べると主軸長23m，後円部径19～18m，前方部幅12.5mを測り，端部幅がやや広いが，前方部長の短い所謂帆立貝式前方後円墳であると考えられる。

周溝

周溝は全掘を目的に調査を進めた。その結果，いわゆる墳丘相似形に巡っていることが判明した。前方部端の周溝は幅30cm，深さ0.4ｍとソフトローム層をやや穿った程度で，狭く旦つ浅い周溝であり，北側半分は溝底まで攪乱され検出できなかった。クビレ部周溝は大きく開鑿され，北側で最大幅4.6m，深さはハードローム層を穿ち1.2mを測り，意識的に両者を分けていることが特徴である。この相違は墳丘の盛土状態が後円部からクビレ部にわたる周溝開鑿時の土層で後円部を形成し，その後埋葬施設の構築を兼ねて低い前方部が形成されたため，前方部周溝から得る土量をさほど必要としなかったことによると思われる。古墳の企画当初より意図されたものであろう。

周溝各部をみていくと，前方部周溝はクビレ部周溝の中位に溝底があり，コーナ部まで徐々に浅くなり端部はほぼ同レベルに掘り込まれている。断面は緩やかなＵ字形を呈する。

後円部周溝をみると溝底は両クビレ部が摺鉢状に掘り窪められ，両側面で一度急傾斜に穿たれた後，端部に近づくと平坦に掘られている。周溝外壁は内壁に較べ浅く明確に巡っていない。クビレ部から側面部の斜面は周溝の外側が削平されており，後円部端は地山の傾斜に沿い浅くなる。堆積土は最下層にロームブロックを含む土層が堆積し，その上方の腐植土層は一部周溝の外側まで続いていることが窺われる。

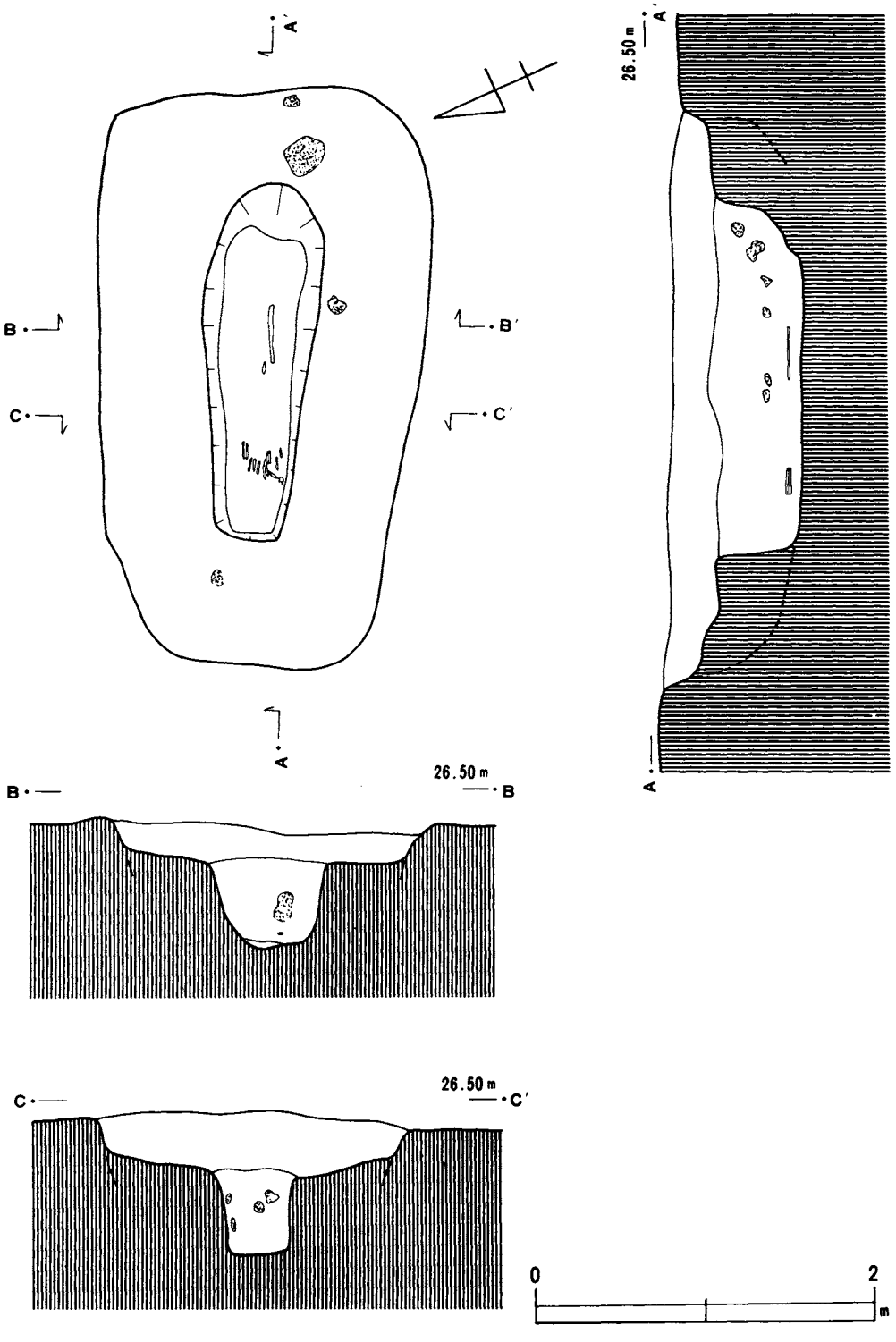
周溝からの出土遺物は，縄文土器片の流入のほか，北西側クビレ部の溝底より，切株排徐の際，須恵器の短頸壺が出土した。この須恵器は本墳に伴うものと思われる。また周溝堆積土を切り込んで国分期の住居址１基が検出された。

埋葬施設

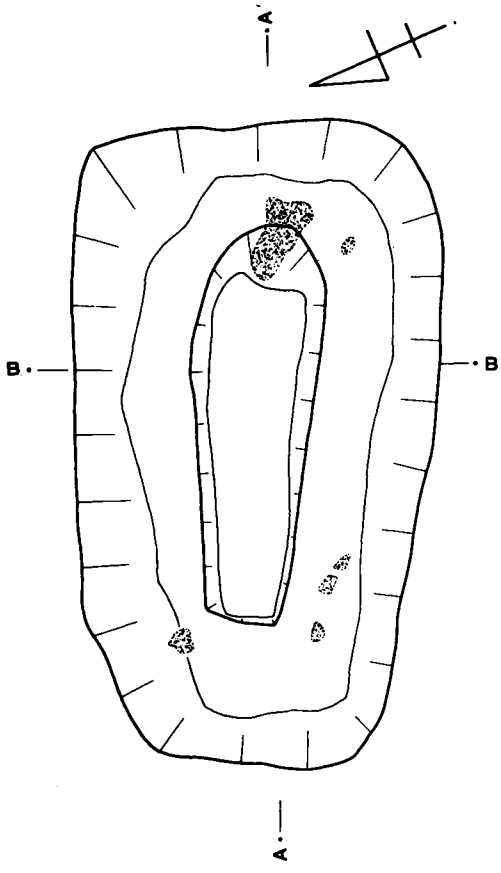
クビレ部主軸線上に位置し，主軸は墳丘の中心を向く。方位は墳丘の主軸からやや北側に振れＳ—66°—Ｅ（遺骸埋葬の推定頭位を基準とする）地山下の墓壙内に築かれた木棺１基である。

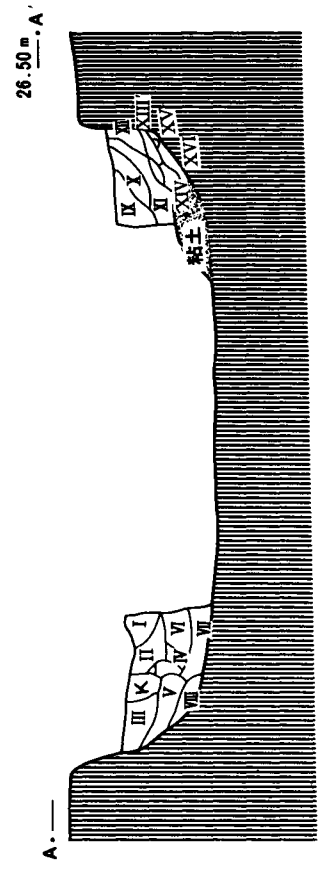
調査はＡＢトレンチの後円部寄りのところで旧表土が切られ，粘土小塊を含む落ち込みが認められたことによりプランの全域を追求した。しかし，掘り込み面である地山は前方部端ほど高くなり，さらに整地されているため軟質な茶褐色の地山と覆土の相違が不明瞭であった。そこで中心部を10数cm程下げたところ，拳大の白色粘土塊が認められ，その面を追求し墓壙の全貌を摑むことができた。

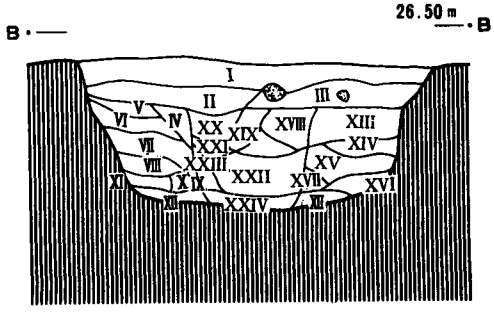
その結果墓壙の上端は隅丸長方形を呈し，長さ3.4m，幅1.8m～1.7mを測定した。壁はやや急角度に掘り込まれ，壙底はソフトロームに達して，Ｕ字形に窪んでいることが認められた。壙底の数値は長さ2.8m，幅1.35m～0.85mを測り，深さは中央で0.75mと深い。



第64図　14号墳　埋葬施設平面・断面図・遺物出土状況







I　ロームブロック，ローム粒子混入茶褐色土
II　暗褐色土
III　ハードロームブロック混入暗褐色土
IV　ローム土を多量に含む褐色土
V　ローム土を少量含む褐色土
VI　ローム土黒色土を少量含む褐色土
VII　ローム土・ローム粒子，黒色土を少量含む褐色土
VIII　ローム土多量，黒色土ごく少量含む褐色土
IX　ローム土多量に含み硬質の褐色土
X　多量の粘土、少量のローム土を含む褐色土
XI　ごく少量のローム土を含む褐色土
XII　ローム土，ローム粒を少量含む褐色土

XIII　多量のローム土，少量の黒色土を含む褐色土
XIII　粘土を多量に含む褐色土
XIV　ローム土、黒色土を少量含む褐色土
XV　ローム土を多量に含む褐色土
XVI　多量のローム土、少量の黒色土を含みやや硬質の褐色土
XVII　多量のローム土を含み硬質の褐色土
XVIII　黒褐色土

XIX　黒褐色土
XX　ロームブロック混入暗褐色
XXI　黒褐色
XXII　黒褐色土
XXIII　暗黒褐色土
XXIV　褐色土

0　2 m

第65図　14号墳　埋葬施設平面・断面図

木棺はこの土壙の内部に収められている。棺床は壙底の中央の平らなソフトローム層であり，レベルはほぼ水平で，後円部側は広く前方部側が狭い。主軸長1.72m，幅0.49～0.35mを測る。後円部側の小口部は床面から裏込めにかけ，粘土塊が認められ，小口部閉塞に使用されたものと思われる。しかし前方部側小口部では認められていない。床面のプランは隅丸方形を呈しているが，壁は白色粘土が所々に認められ直角に近く立ち上る。このことから，木棺材はすでに消失しているが箱形の木棺が推定される。また棺内の覆土として暗褐色土が充塡していた。

木棺の上端は被覆土である粘土塊混入層直下である。棺の陥没により粘土塊はやや下方まで流入しているが，裏込土が旧表土から25cm下にほぼ同レベルに巡っているので，上端はこのレベルとしてよい。したがって木棺の深さは約50cmを測る。

裏込土はローム土と黒色土の混合土とを水平か，木棺に向いやや斜方向でほぼ等間隔に築かれており，所々に白色粘土の散布が認められる。

遺物の出土状態は，木棺の中央に鋒を北に向けた直刀１口，刀子１口，前方部側に鉄鏃29本が一括出土した。直刀は刀身中央で二つに折れ，鍔を欠く。鏃は３段程に相重なり，上方はやや原位置を動いているが，胡籙等に納められていたものと思われる。また広鋒の鏃１本が一括出土の鏃とは鋒を逆方向にして出土した。レベルは直刀，鏃ともほぼ同一である。

なお，被葬者は南枕（後円部側）であったことが木棺の形態，出土遺物の配列より推定される。

前方部内部施設内出土遺物　（第66―68図）

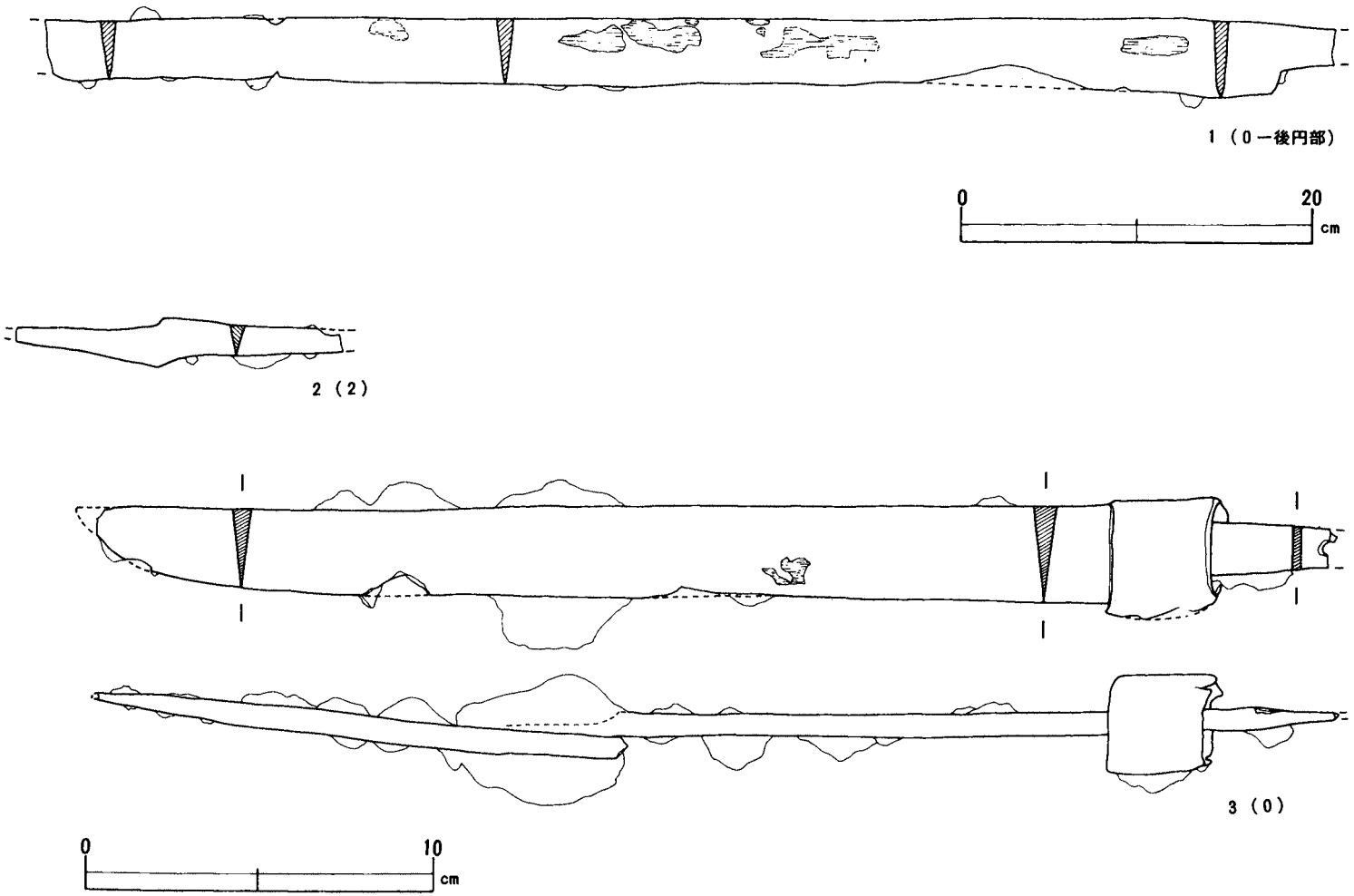
直刀１，刀子，鉄鏃30，鉄鏃残欠がある。

直刀(3)は棺の中央に鋒を西に向けほぼ水平に出土した。刀身が中央で折れ重なった様にみられるが不明確である。鋒を欠き茎は目釘孔の所から折れ，現存長35.5cmを測る。鏥が銹着しているが関は両関造りである。

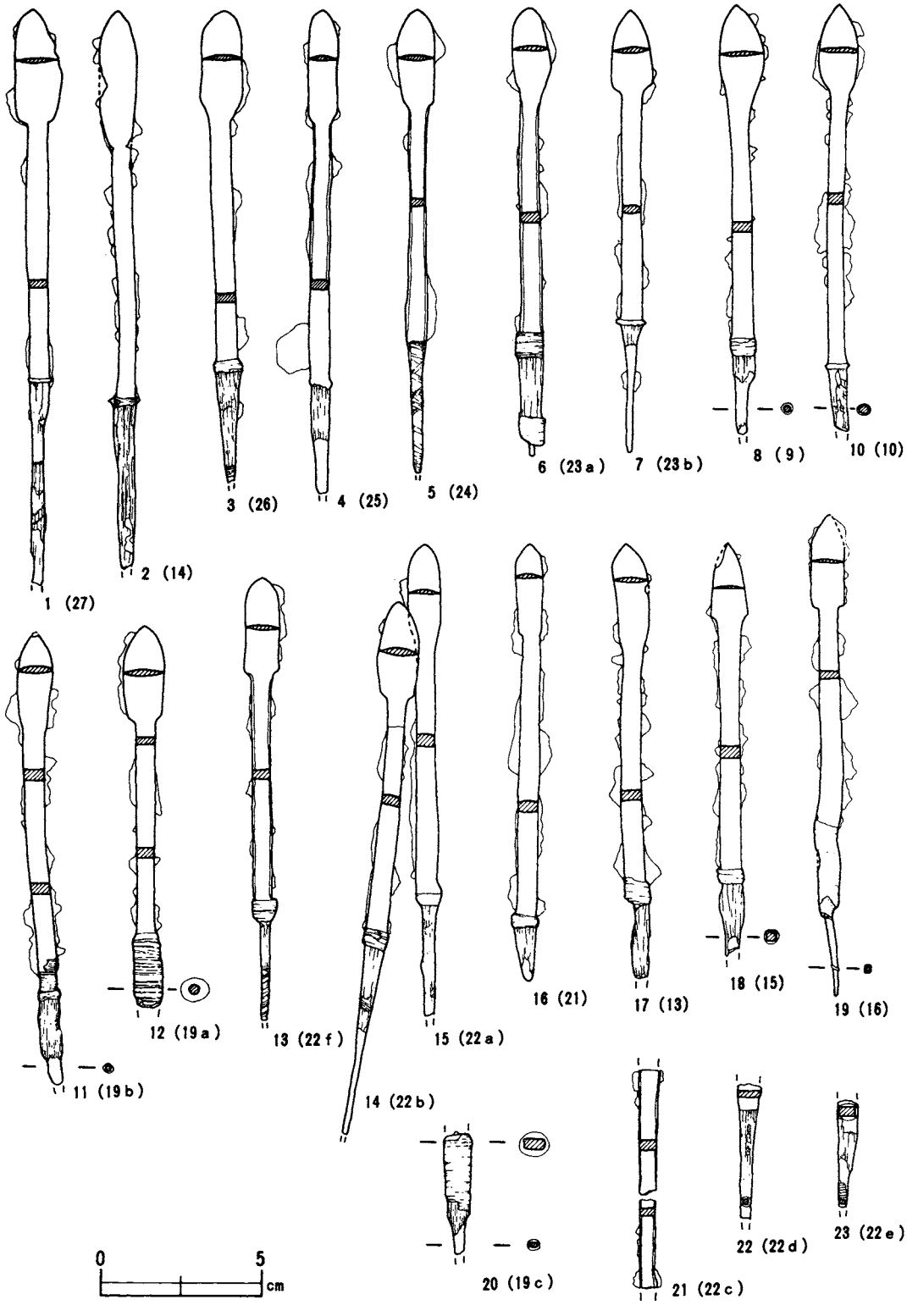
刀子(2)は直刀の鋒に近く平行して出土した。鋒，茎を欠き現存長9.3cmを測る。刃部が内曲するように見られるが銹化が著しい。柄木が残存している。

鏃は(3)(4)の平根鏃を除き，すべて箆被の発達した細根鏃である。

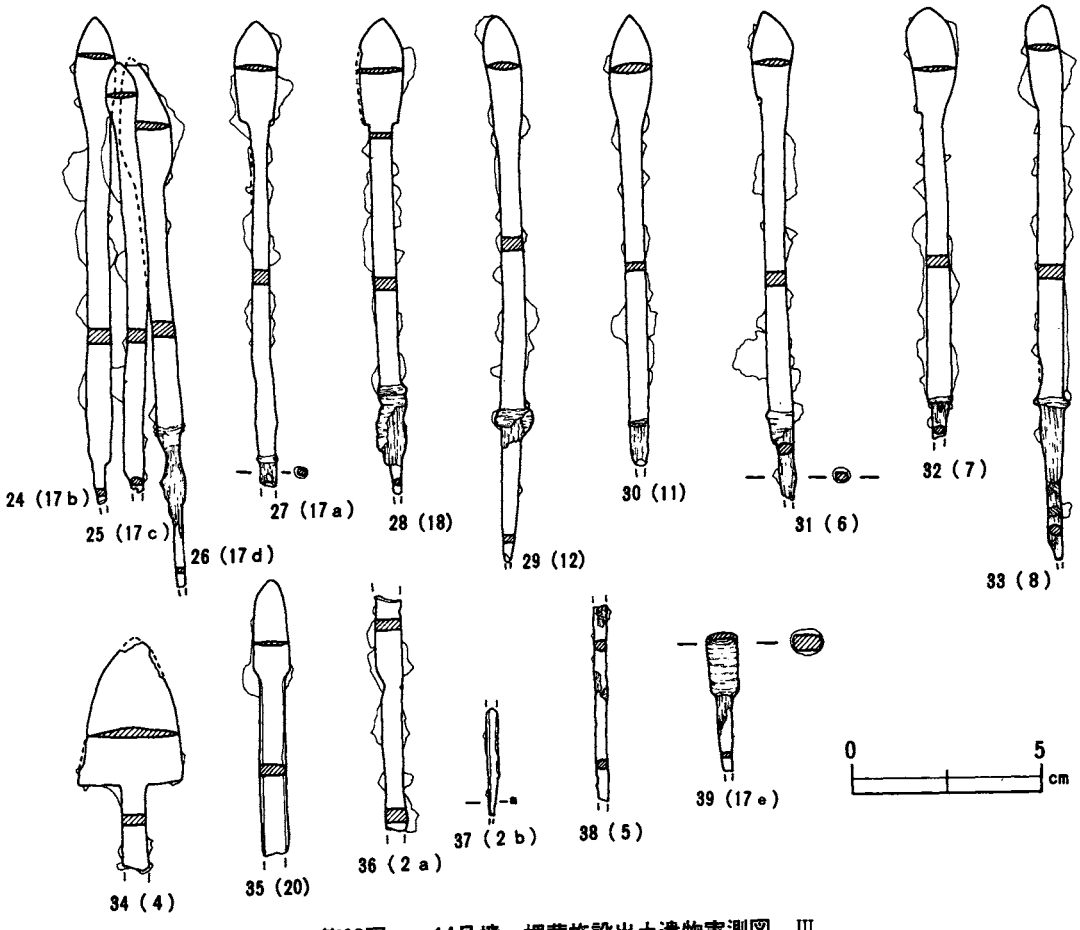
(3)(4)は棺の南壁部に接し出土した。刀身が東向きであり，他の細根鏃と逆方向を向く。原位置を保っとすれば箆被以下が欠損した状態で副葬されたことになる。また刀身，茎にかけ繊維痕が僅かに附着している。刀身は薄く片丸造りである。



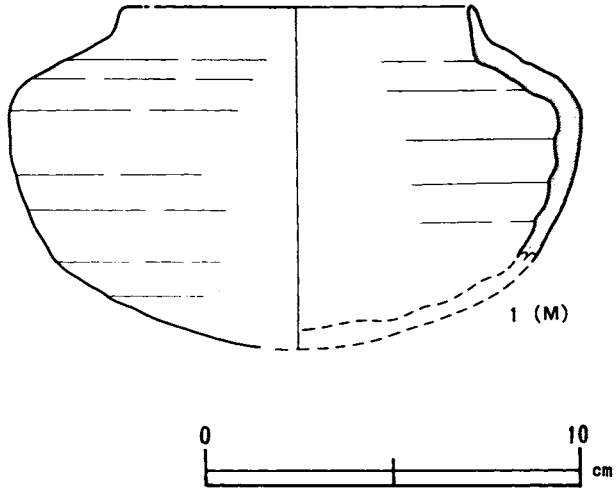
第66図　14号墳　埋葬施設出土遺物実測図　I



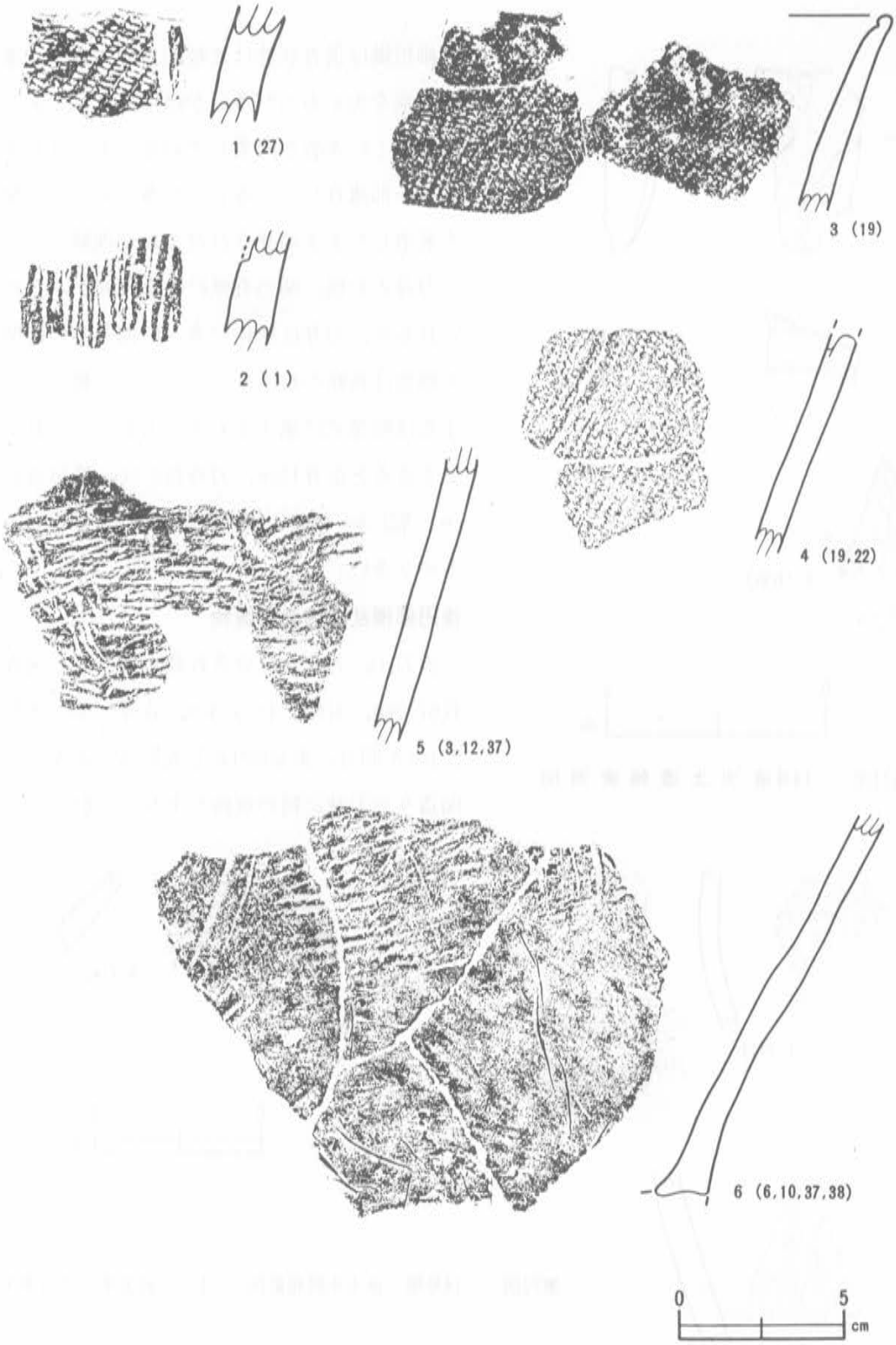
第67図　14号墳　埋葬施設出土遺物実測図 II



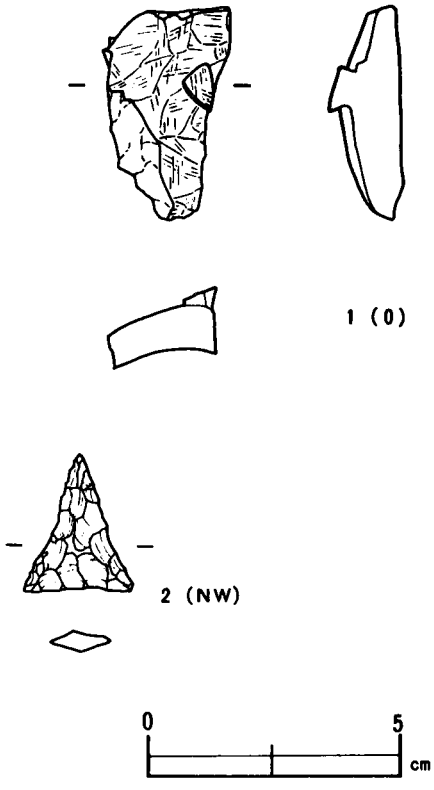
第68図　14号墳　埋葬施設出土遺物実測図 III



第69図　14号墳　出土遺物実測図



第70図　14号墳　出土土器拓影図（Ⅰ）　封土中及び旧表土下



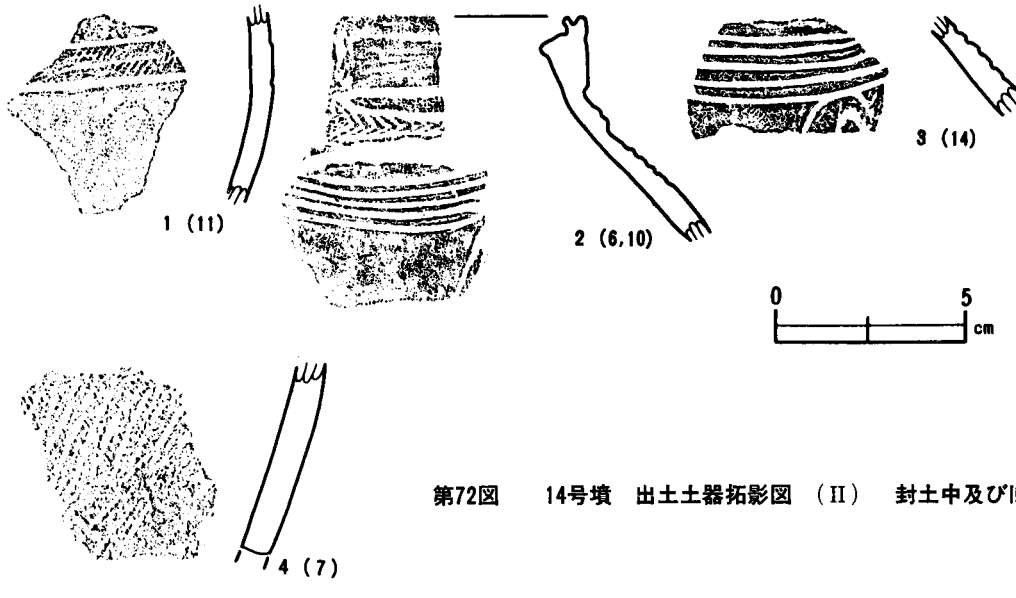
第71図　14号墳 出土遺物実測図

細根鏃は遺存状態は比較的良好であり，茎の先端を欠くものが多いがほぼ完形品であり，茎の多くに木質が附着している。そのうち矢柄の一部遺存しているものが多くあり，矢柄を装着したまま副葬されたことが理解できる。

刀身の形態，関の有無による相違がみとめられるが，刀身は銹化が多く断面あるいは関の細別は判断がむずかしい。しかし鑿箭式，または柳葉式に属するものである。(15)の計測値をみると全身15cm，刀身長3.5cm，箆被長8.2cm，茎3.3cmを測る。重量は10～12gくらいのものが多い。

後円部攪乱土内出土遺物

直刀(1)，刀身が二分され鋒を欠くが，現存長67.7cm，刃幅4.4～3.3cm，背厚0.9cm，茎長2.1cmを測り，重量890gと大形品である。刃関造りで刀身に鞘の痕跡があり，刃部の一部



第72図　14号墳　出土土器拓影図（II）　封土中及び旧表土下

を欠くが鉄芯の残存はよい。

周溝内出土遺物

須恵器の短頸壺である。底部を欠き器体の$\frac{1}{2}$ほど遺存する。口径9.0cm，高さ8.9cm，胴径15.0cmを測る。ロクロ整形されており，底部はヘラケズリの痕跡を残すが，全体に平滑に仕上げられている。焼成は良好，灰色を呈し胎土に砂粒子を含む。

（高田）

第五節　第二次調査の概観と調査方法

本調査は，第一次調査，塚及び古墳群の発掘調査中，墳丘裾部又はマウンド周辺に新たに発見された遺構について調査したものである。

昭和50年５月27日現地着手の第二次調査遺構のうち，竪穴住居址一軒は第14号墳南側テラス部から周溝にかけて露出し，当時はプランのみ確認されていたもので，周溝発掘時に表土は除去されて，カマドの位置は北側に設けられ，方形を呈することは判明していた遺構である。

溝状遺構は，第８号墳，第10号墳の周溝と重複し，墳丘の裾部を切断しており，東西方向に延びる可能性が予知されたので，延長上のグリットにトレンチを施した。又，第10号墳は，すでに昭和の遺産である俺体壕で破壊されてはいたが，当該溝状遺構の発掘調査の結果，今次の成果の一例であるが，10号墳の墳形は円形を呈するものの一基と判断された。

調査方法，発掘にあたっては，古墳群が占地する台地に道路予定センター杭を基準軸として，路巾にしたがい140ｍ×70ｍ東西に長いグリット配置を行い，方眼に10ｍ×10ｍの大グリットを設定し，更に大グリットを２ｍ×２ｍの小グリットに細分した。各々のグリットの名称は，北西側からアルファベット（ＡＢＣ……）を用い，今次は，第一次発見関連遺構の分布及び残存の有無を明確にするためにも，前調査の墳丘及びマウンド封土及び盛土をも排除し，調査を行なった。

第六節　住居址遺構及び遺物

(1) 001号住居址

調査区東側の緩斜面に位置する住居址である。この住居址の占地する付近は現在の地形で標高26m内外にあり，これより25mにかけて比較的緩かな傾斜を呈している。台地頂部平坦面からの比高差は約２m余りを測り，本住居址より南東側は若干の緩斜面を形成し，以後急激に支谷に落ち込む。現在の地形では，支谷底面からの比高差は約８m余りを測る。

本住居址は，14号墳後円部南東側周溝を掘込んで構築されているが，その掘込み面を明らかにすることはできなかった。

調査時に残存していた覆土は，最下部に相当する部分のみにすぎず，上部は古墳調査の際に削除されている。覆土最下層は暗褐色土層であるが，住居址中央部においてはこの土層の上部に僅少ながら黒色土の堆積が認められた。

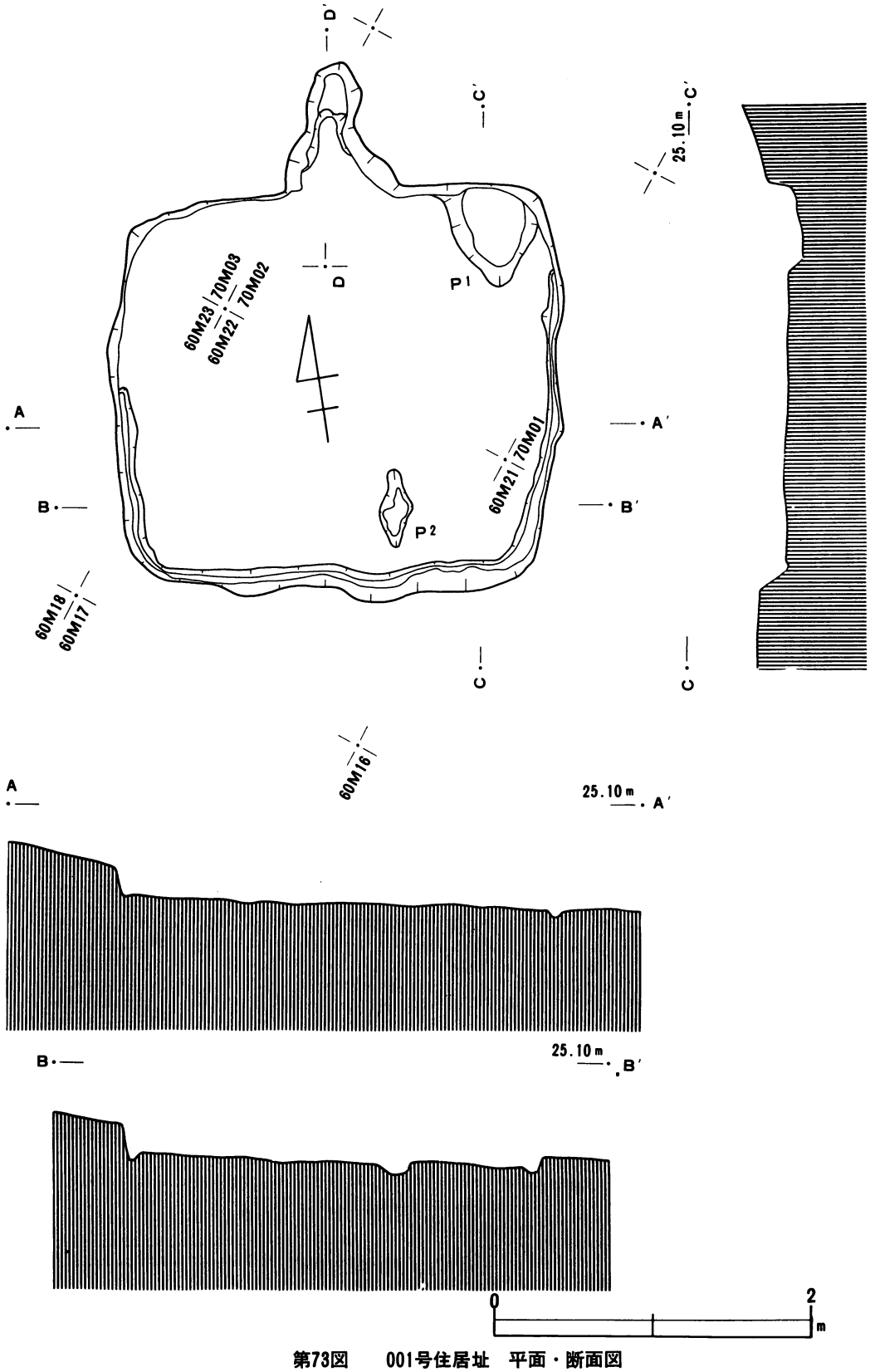
住居址は，主軸方位がN－9°－Eを示し，N－S2.52m・E—W2.80mを測り，隅丸方形を呈する。各壁の壁掘込みラインは緩やかな凹凸を有するが，掘込みはほぼ垂直であり，壁面は比較的堅緻である。

壁溝は，東壁北側から南壁及び西壁の中央部まで巡っており，幅・深さとも一定しないが，幅約５～13cm・深さ約４～６cmを測る。

現存する壁の高さは，西壁が約17cm前後・東壁が２～５cm前後・北壁が約16cm前後・南壁が約９cm前後を測る。東壁側壁高が低いのは，14号墳周溝が東側に向って深くなっているためである。

床面は，ほぼ全面に踏固められて堅緻であるが緩やかな凹凸があり，西側から東側へと傾斜している。その比高差は，約９cm前後を測る。床面上には，西壁際と南壁際及び中央部付近に若干の焼土が検出されたが，床面が火熱によって焼けているような状態は見出せなかった。また，北壁側カマド前面の床面上には，白色砂質粘土が付着した状態で検出された。これは，カマドに使用された粘土が流出したものと思われる。

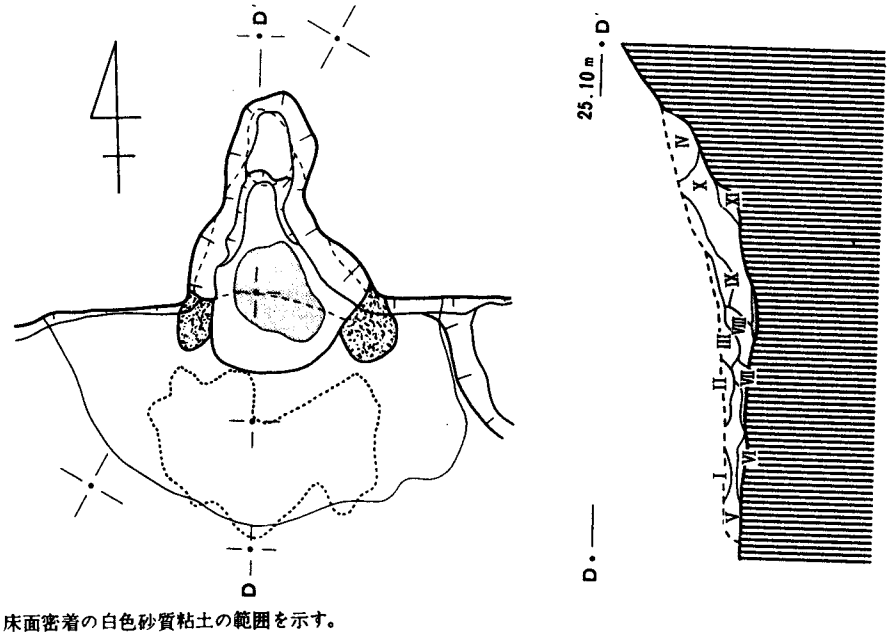
本住居址において，柱穴と見做し得るピットは，住居址内あるいは壁外からも検出されなかった。その他のピットとしては，北東コーナー寄りに不整円形を呈するP_1が，南壁近くには不整長円形を呈するP_2が検出された。P_1は，N－S62cm・E－W56cm・深さ15cmを測るもので底面は緩やかな凹凸を呈する。このピット内からは，比較的多くの土器が落込んだ状態で出土している。P_2は，N－S48cm・E－W21cm・深さ約６cmを測るが，その機



第73図　001号住居址　平面・断面図

能・性格は不明である。

カマド（第74図）は，北壁中央に構築されているが，その大部分は崩壊もしくは破壊されている。カマドの構築に際して北壁中央部を，長さ約82cm・幅約65cmの三角形状に掘込んでおり，この掘込み部をカマドの主体としている。カマド袖部は，北壁に接して掘込み部の内側に構築されているが大きく崩壊しており，原形の規模は明らかでない。袖部は，白色粘土をもって構築，カマド焚口部は僅かながら床面を掘り窪めており，全体に燃焼部に向って緩やかに傾斜している。燃焼部は三角形状の掘込み部と北壁ラインとの中間に位置するもので，燃焼部底面は床面より約6cm前後低いレベルにある。燃焼部底面に堆積した焼土は，約55cm×35cm・厚さ約2cmを測る。また燃焼部壁面は，三角形状の掘込み部壁面をそのまま使用したものかと考えられ，掘込部壁面は赤く固く焼けている。煙出し部は，長さ約60cm・幅約30cmの規模を有する。燃焼部から煙道部への移行は，平面的には，その境付近より強くくびれ，断面からみれば燃焼部底面より約30cm北側まではほぼ平坦であるが，これより10cm程立ち上った後緩やかに外方へ延びる。天井部は，完全に崩壊していてその構築状態は不明であるが，砂質粘土でもって構築されていたものと思われる。カマド



点線は、床面密着の白色砂質粘土の範囲を示す。

I　黒色土
II　褐色土（砂質粘土，ロームブロック含）
III　暗褐色土
IV　褐色土（焼砂質粘土少混）
V　褐色土（黒色土少混）
VI　焼砂質粘土
VII　暗褐色土（木炭粒若干含）
VIII　焼砂質粘土
IX　暗褐色土（砂質粘土，焼砂質粘土多混）
X　焼砂質粘土（焼土含）
XI　褐色土（ローム土含）
XII　焼土

第74図　001号住居址　カマド平面・断面図

焚口部前面の床面に砂質粘土が付着した状態で検出されている（第74図中点線）ことは，天井部あるいは袖部の粘土が崩壊・流出したことを示すものであろう。またカマド内からは，燃焼部北側から小さな円柱状土製品の上に高台付坏形土器と平底坏形土器が交互に重ねられた状態で出土している。この出土状態からして「支脚」として使用されていたことが窺える。

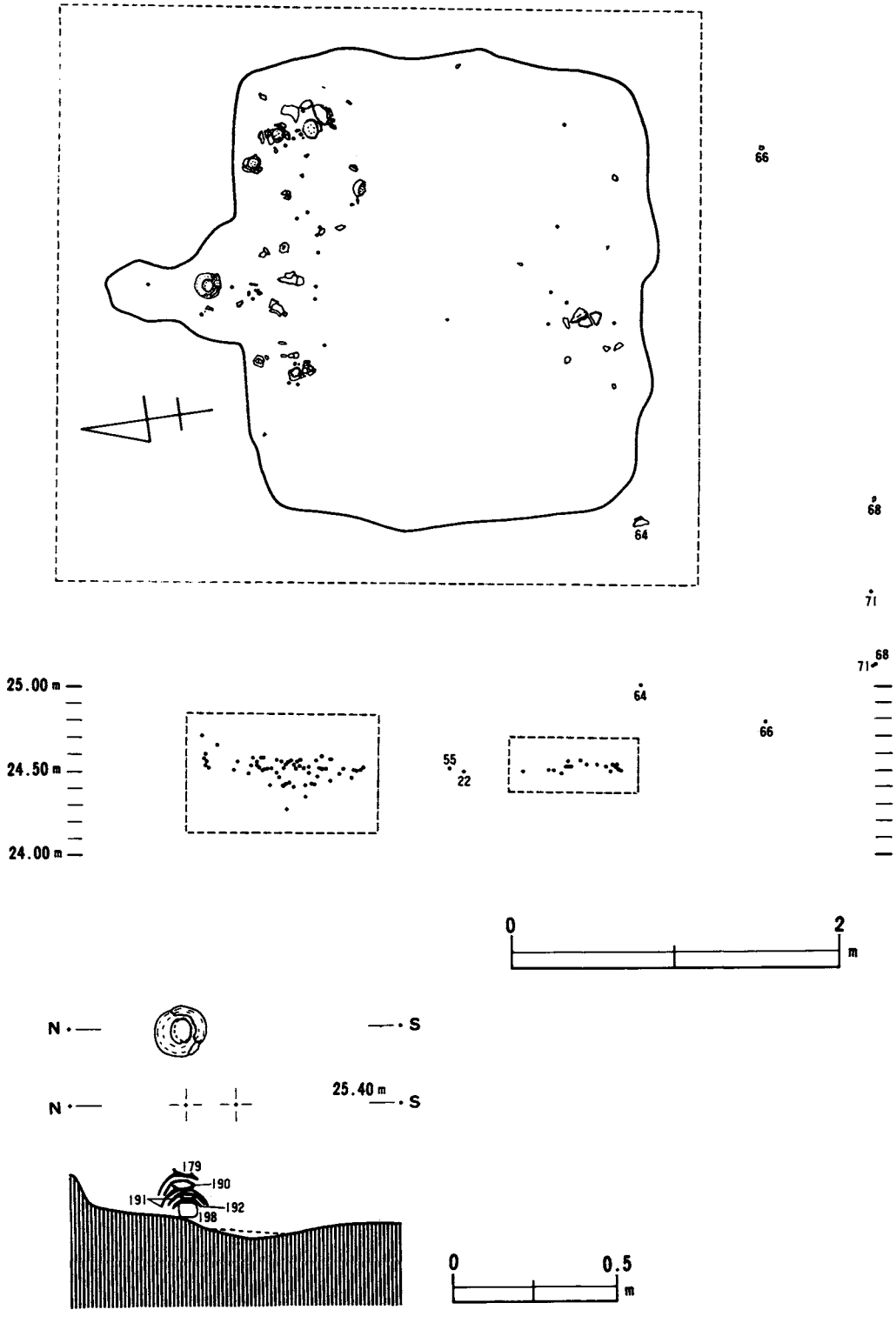
(2) 遺物　001号址遺物出土状況（第75図）

本住居址からの出土遺物は，土師器（坏形土器，甕形土器），須恵器（短頸壺形土器），及び若干の鉄滓がある。しかし須恵器破片は14号墳周溝内出土のものと接合し本住居址に伴うものとは考えられない。したがって本住居址からは須恵器が全く出土していないこととなる。

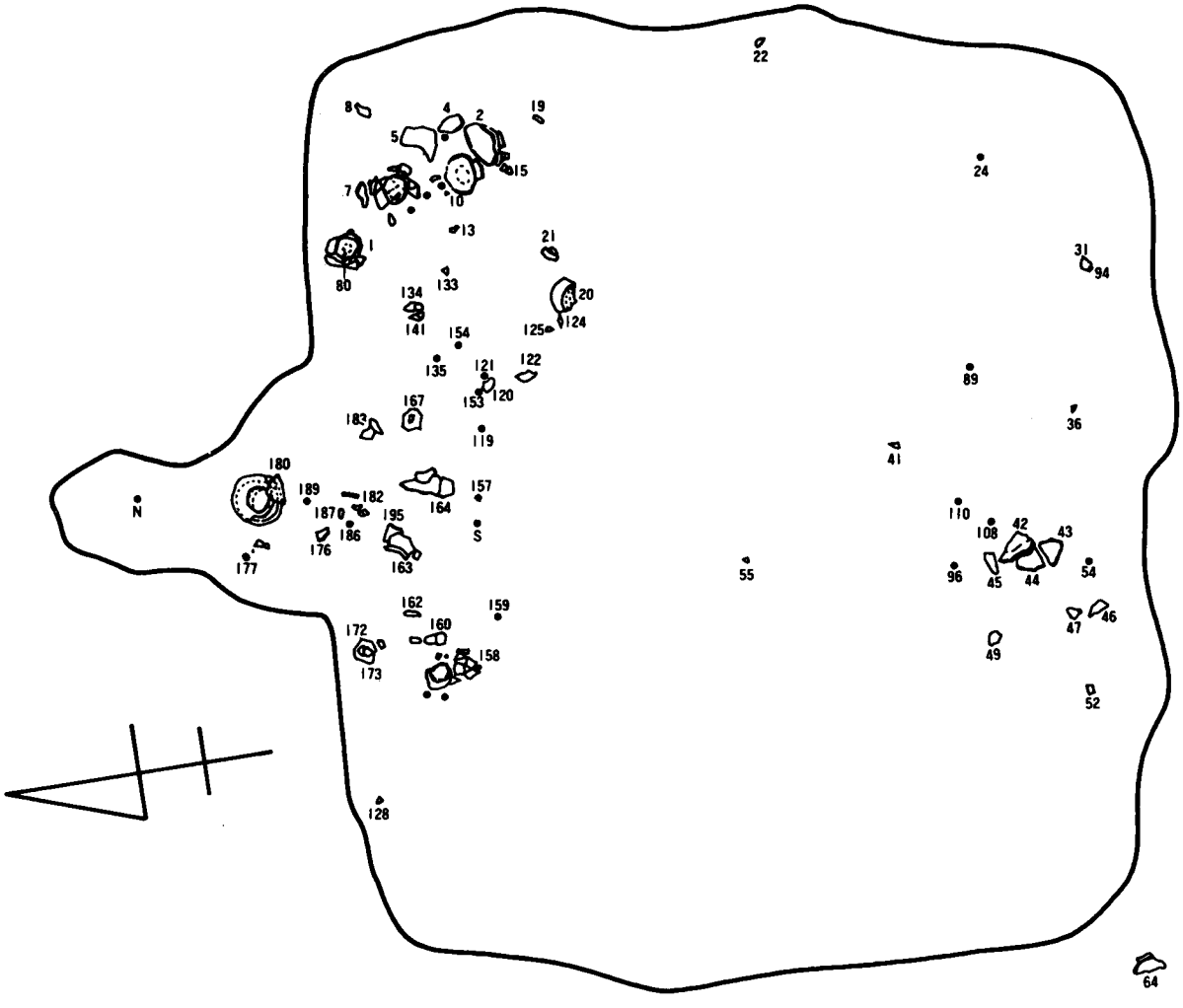
土師器は，カマド周辺から北壁東側に位置するP_1付近と南壁周辺とに比較的まとまって出土しており，特にP_1内からは落込んだ状態でかたまって出土している。器種としては坏形土器が多いことが注目される。

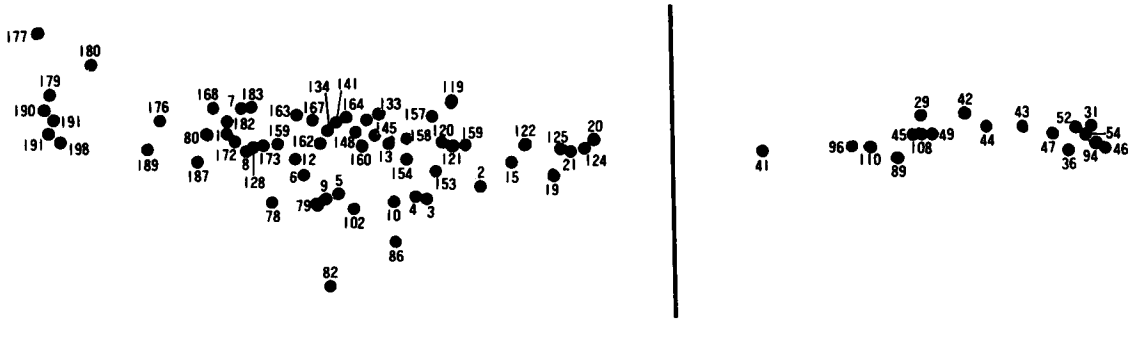
出土した遺物は，住居址の上部が削平されていたこともあり，その殆どが，床もしくは床面に近いレベルでの出土であった。また，住居址外の周囲からも少量の遺物が出土しているが，これらの遺物の中には，住居址内出土のものと接合するものもあった，ここで，(ア)～(ウ)の３点の接合資料についてその接合関係をみてみると下記のとおりである。

(ア)住居址内南壁寄り出土の小型甕形土器（第76図２）は，住居址外出土の破片（No.68）と10M25・20M04グリット出土の破片と接合したものである。住居址内出土の破片と住居址外出土の破片とは約２ｍの距離を測り，グリット出土の破片とは約30ｍの距離を測る。この小型甕形土器は17点の破片が接合し，住居址内出土の遺物は４点で床着状態の出土であり，住居址外出土の遺物は１点でローム面直上で出土している。10M25，20M04グリット出土の遺物は12点であるが，その殆どは攪乱層中出土のものである。しかし10M25，20M04グリットは後述する10号遺構11号遺構とした東西に位置する粘土遺構の中間に位置し10，11号遺構が同一遺構内に存在していたであろうと思われることから，このグリット出土遺物は，10，11号遺構と密接な関連を有するものであろうと考えられる。いずれにしても，このような接合状態を示すことは，破砕分離後いずれか一方での再使用は考えられず，「廃棄」されたものと見做すことができよう。しかし「廃棄」されたものとしても両者がどのような理由によって，こうした距離を隔てた遺構内或いはその近くに廃棄されていたか



第75図　001号住居址　遺物平面図





前頁点線部分の拡大図

不明である。

次に(イ)カマド内出土の坏形土器（第77図２）破片（187）は，住居址西壁外より出土した土器片（64）と接合した。両者の接合によっても完形となるには至らない。

さらに(ウ)坏形土器（第76図―３）は，東壁際で出土した破片（22）と，住居趾南壁外より出土した土器片（66）と接合した。両者の距離は約1.9ｍを測る。東壁際出土の破片は床面直上の出土で，南西壁外出土の破片はローム面直上の出土である。この両者の接合によっても完形となるには至らないものである。この(ア)～(ウ)の接合資料は，いずれも遺構廃絶時における遺物の「廃棄」という行為の結果に起因するものであろう。しかし，(ア)～(ウ)例は単に「廃棄」行為に基くものとしても，時間的にはかなりの幅をもち，かつ(ア)～(ウ)に見出される壁外出土遺物との接合関係は，住居址の家屋構造あるいは竪穴住居址構築に際して当時の地表面からの掘込状態等の点に関する問題点を含むものと考えられる。一般に関東地方では，いわゆるローム層に穿たれた竪穴住居址の規模をもって住居のおおよその規模とするが，本遺跡例のように竪穴自体極めて小規模なものである点，この小竪穴内において果して生活が営み得たものか疑問である。

(3) 001号址遺物

甕形土器（第76図1,2）

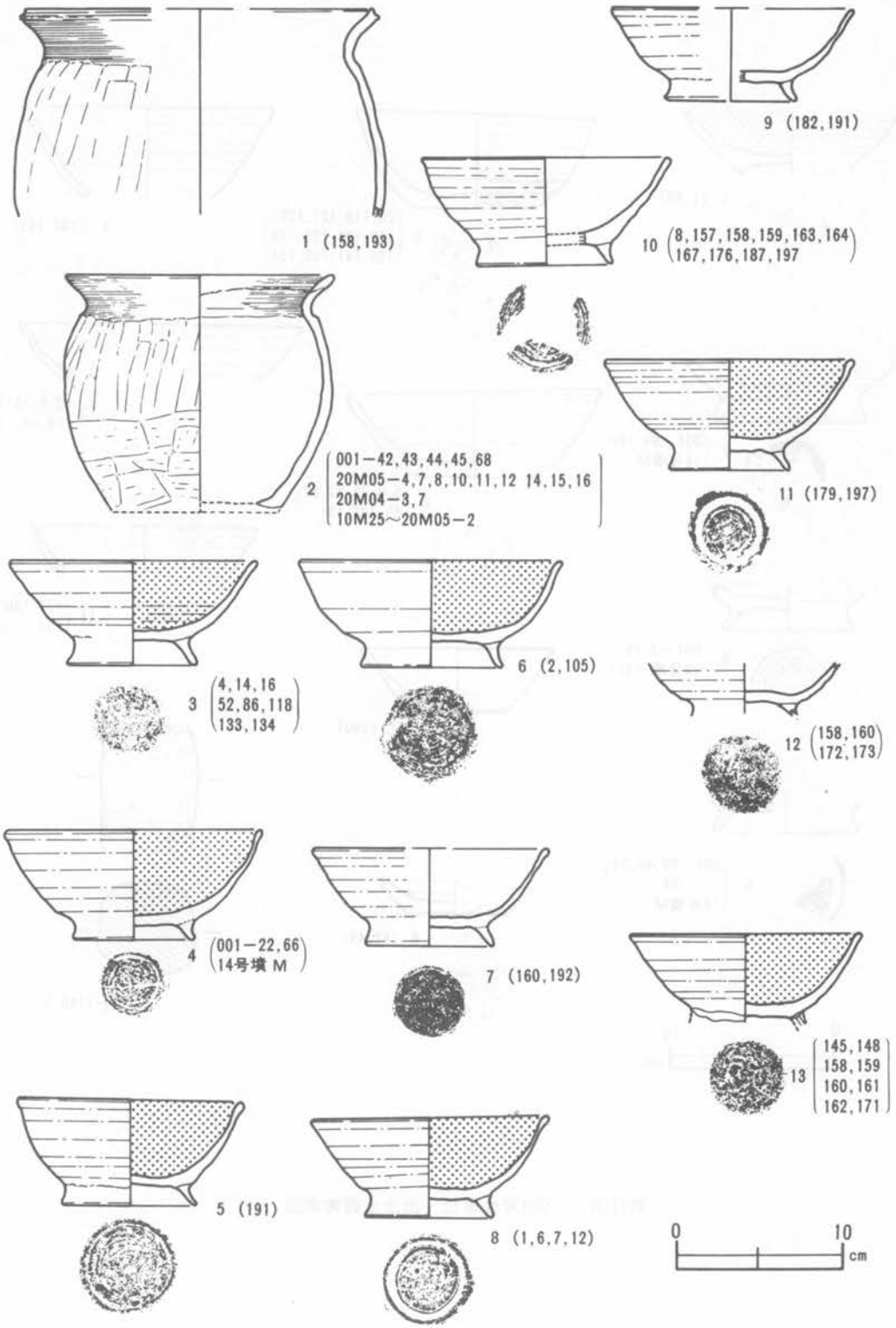
本住居址出土の甕形土器はこの２点にすぎず，完形品は無くいずれも破片の状態である。

1，　破片によって胴部中位から口縁部が窺い得るものである。口唇部は平坦であるが，内側が僅かに立ち上る。口縁部は外方に直線的に開き，頸部は緩かに丸く「く」の字状を呈し胴部に至る。胴部は僅かに膨らみをもち，長胴の器形を呈するものと思われる。推定口径20.8cm・現器高12・４cmを測る。胎土は若干砂質で，色調は内外面とも赤味をおびた褐色を呈する。

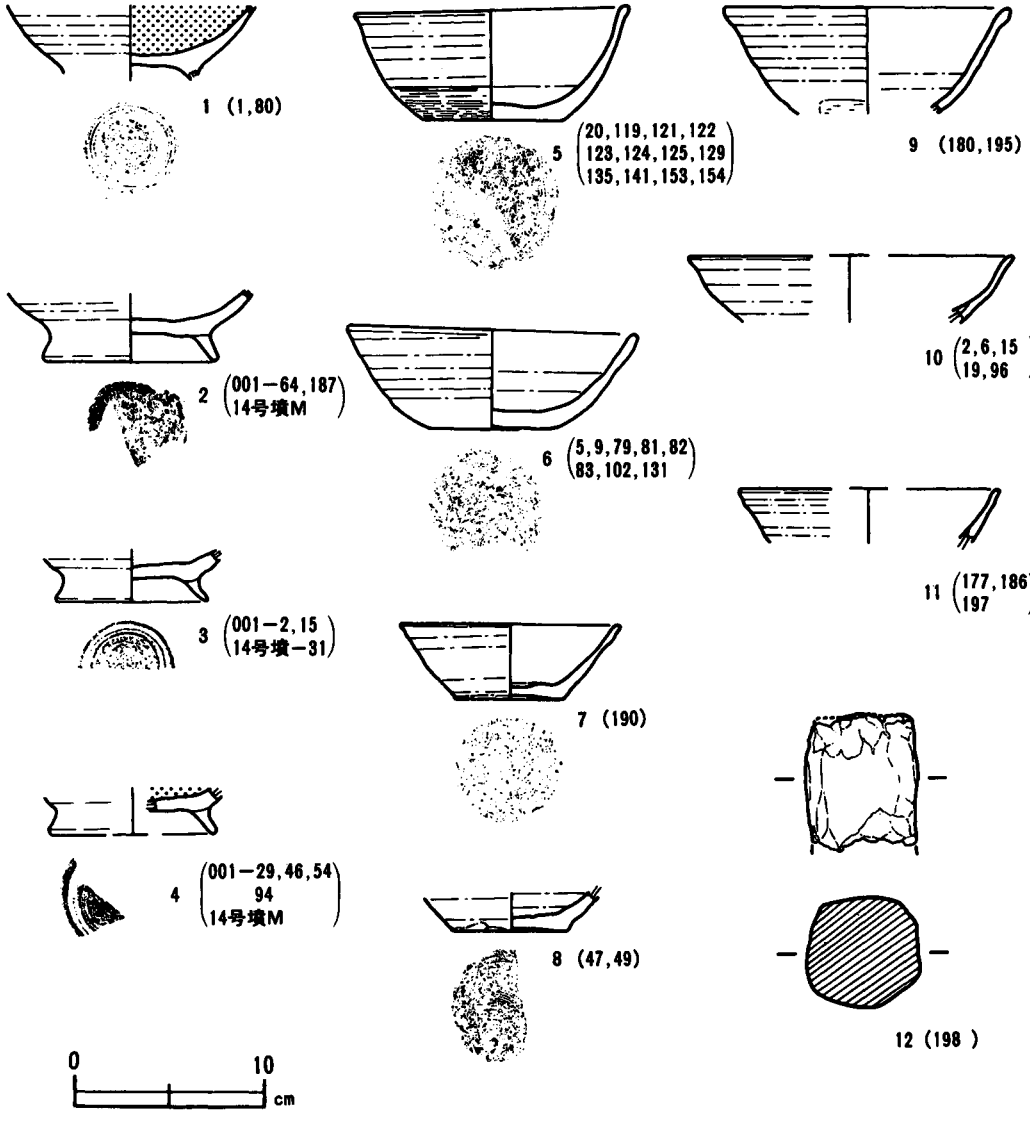
整形は，外面口頸部が横ナデ，胴部は，縦位のヘラ削りが施される。ヘラ痕は胴部上方では明瞭に看取されるが，中部付近では不明瞭となる。内面は，口縁部から頸部下方まで横ナデ，胴部は全体に横位のナデが施される。

2，　小型甕であり，住居址外及びグリット出土の破片と接合しほぼ全形を窺い得るものとなったが，底部破片は検出できなかった。

口縁部は僅かな丸味をもって外方へ開き，頸部は丸味のある「く」の字状を呈し，胴部は強く膨まずやや丸味をもって底部に至る，胴部最大径は中位付近にあり，口縁部径より僅かながら大きい。底部は破片すら見出せなかったが，底の広い安定した平底を呈するもの



第76図　001号住居址　出土土器実測図（Ⅰ）



第77図　001号住居址　出土土器実測図（II）

と思われる。口径15.8cm・現器高13.6cm，胴部最大径16.2cmを測る。胎土はやや砂質で，色調は褐色を呈する。

整形は外面口頸部が横ナデ，胴部は最大径のやや下方までは縦位のヘラ削り，下半は幅の広い横位のヘラ削りが施される。このヘラ状工具は鋭利なものと思われ，また胴部下半の横位のヘラ削りは回転を利用したものと考えられる。内面は　頸部が横ナデ，胴部から底部は横位のナデが施されるが，この横位のナデは土器整形の際のロクロによる整形痕かと思われる。

坏形土器（第76図3～13・77図1～11）

坏形土器として含めたものの中にはむしろ埦形土器に含めるべきかと思うものもあるが，ここでは坏形土器の類として記述する。図示し得たものは総計22個体であるが，これは出土遺物の中で主体を占めるものである。これら坏形土器は高台を付するものが大半であることが特徴であり，しかもその殆どは坏部内面をヘラ磨きしている点が注意される。形態としては，体部あるいは口唇部等に各々差異が認められるが，分類はしなかった。

Ⅰ－3，高台付のものである。高台は「ハ」の字に開く，坏体部は底部付近がやや丸く膨らむ他は直線的に開き，口縁部は僅少に外方に開く。

口径14.9cm・器高6.2cm・高台径7.6cm・高台高1.5cmを測る。胎土は密で，色調は内面に黒色化処理が施され外面は褐色を呈す。整形はロクロ整形が施されるが，その後坏部内面は横位のヘラ磨きが施される。坏部の底部切離しは，糸切と思われる。外面に高台貼付痕が認められる。

Ⅰ－4，高台付のもので高台はやや短く「ハ」の字状に開く，坏体部は底部より僅かに内弯しつつ外方に開きながら立ち上る。口径15.4cm・器高6.5cm・高台径7.0cm・高台高0,8cmを測る。胎土はやや砂質で，色調は内面に黒色化処理が施され，外面は明褐色または淡黒褐色を呈する。

整形はロクロ整形が施されるが，その後坏部内面は横位のヘラ磨きが施される。高台は貼付によるものでロクロ整形による。このため，坏部外面近部では僅少な段差が生じている。坏部の底部切離しは糸切りによるものである。

Ⅰ－5，高台付のもので高台は「ハ」の字状に開く，坏体部は僅少に内弯しつつ立ち上る。口径13.4cm・器高6.1cm～6.4cm・高台径8.0cm・高台高1.2cmを測る。胎土は密で，色調は内面が明褐色～黒褐色，外面は明褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後横位のヘラ磨きが施される。高

台は貼付によるもので，ロクロ整形が施される。坏部の底部切離しは糸切りによるものである。

Ⅰ－6，高台付のもので，高台は「ハ」の字状に開く。 坏 体部は底部付近で大きな丸味をもち以後僅かに内弯しつつ外方へ開き，口縁部は若干外反する。口径15.8cm・器高6.3cm・高台径8.5cm・高台高1.5cmを測る。胎土はやや砂質で，内面に黒色化処理が施され，外面は明褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施されるが，坏部外面底部近くは回転ヘラ削り，内面は横位のヘラ磨きが施される，高台は貼付によるもので，ロクロにより整形が施される。底部切離しは糸切りによると思われるが，その後回転ヘラ削り整形が施される。

Ⅰ－7，高台付のもので，高台は「ハ」の字状に開く， 坏 体部は底部付近がやや丸味をもつが，以後直線的に外方へ開く。口縁部は僅かに外反する。推定口径14.0cm・器高5.8cm・高台径7.6cm・高台高1.1cmを測る。胎土はやや砂質で，色調は内外面とも淡赤褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後，横位のヘラ磨きが施される。高台は貼付によるものである。坏部の底部切離しはさほど明瞭ではないが糸切りによるものと思われる。

Ⅰ－8，高台付のもので高台はやや大きく「ハ」の字状に開く。 坏 体部は内弯しつつ外方に開き，口縁部は僅かに外反する。口径14.4cm・器高5.7cm～6.1cm・高台径7.9cm・高台高1.0cmを測る。胎土は密で，色調は内面には黒色化処理が施され，外面は明褐色を呈する。

整形は全面にロクロ整形が施されるが，内面はその後横位のヘラ磨きがなされる。高台は貼付によるもので，ロクロにより整形が施される。坏部切離しは糸切りによるものと思われる。

Ⅰ－9，高台付のもので約½強を遺存する。高台はやや厚く「ハ」の字状に開く。 坏 体部は底部付近が丸味をもち僅かに内弯しつつ外方に開く。推定口径14.0cm・器高5.6cm・推定高台径7.9cm・高台高1.1cmを測る。胎土は密で，色調は内面淡黒褐色または明褐色，外面は明褐色を呈する。

整形は全面にロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後横位のヘラ磨きが施されている。また坏部外面底部付近は回転ヘラ削りが施される。坏部切離しはヘラ切りによるものかと思われる。

Ⅰ－10，高台付のもので約½を遺存する。高台はやや厚く「ハ」の字状に開き，坏 体部は僅かに内弯しつつ外方に開く。推定口径14.7cm・器高6.3cm～6.6cm・高台径8.0 cm・高台高1.2 cmを測る。胎土はやや砂質。色調は外面が褐色，内面は明褐色～黒褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後横位のヘラ磨きがなされる。高台は貼付によるものでロクロ整形が施される。坏部切離しは不明瞭だがヘラ切りかとも考えられる。

Ⅰ－11．高台付のもので約½強を遺存する，高台は「ハ」の字状に開く。坏 体部は内弯しつつ立ち上り外方に開く。推定口径14.6cm・器高6.5cm・高台径7.0cm・高台高1.2 cmを測る。胎土はやや砂質，色調は外面が明褐色，内面は黒色化処理が施される。

整形は全面ロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後横位のヘラ磨きが施される。高台は貼付によるもので，ロクロ整形が施される。坏部切離しは糸切りによるものである。

Ⅰ－12，高台付のものであるが，高台基部から 坏 体部中位付近までが遺存するにすぎない。高台は「ハ」の字状に開くものと思われ 坏 体部は僅かに内弯しつつ立ち上る。現器高3.0 cmを測る。胎土はやや砂質で，色調は内外面とも明褐色を呈する。

整形は内外面とも全面ロクロ整形が施される。高台ば貼付によるもので，ロクロ整形が施される。坏部切離しは糸切りによるものである。

Ⅰ－13，高台付のものであるが，高台は欠損している。坏部は底部よりやや内弯しつつ立ち上り外方へ開く。口径13.9cm・現器高5.3 cmを測る。胎土は密。色調は内面が黒色または赤褐色，外面は褐色～淡赤褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施されるが，坏部内面は横位のヘラ磨きが施される。高台は貼付によるものと思われる。坏部切離しは，器体口縁部付近を除き器面の荒れが著しく不明である。

Ⅱ－1，高台付のものであるが，高台部下半と坏部・口縁部を欠損している。坏 体部は僅少に内弯しつつ立ち上り外方へ開く。現器高3.6 cmを測る。胎土は密，色調は外面が褐色，内面は黒色化処理が施される。

整形は全面にロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後横位のヘラ磨きが施される。坏底部切離しは糸切りである。高台は貼付によるものでロクロ整形が施される。

Ⅱ－2，高台付のものであるが，高台部と坏部底部付近が遺存するにすぎない。高台は，やや長く「ハ」の字状に開く，坏部下半は，内弯ぎみに立ち上る。現器高3.5 cm・高台径8.8cm・高台高1.4cmを測る。胎土はやや砂質で，色調は内外面とも淡黄褐色を呈する。

整形は全面にロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後横位のヘラ磨きが施される。高台は貼付によるものでロクロ整形が施される。坏部切離しは糸切りである。

II－3，高台付のものであるが，坏底部と高台部が遺存するにすぎない。高台は，「ハ」の字状に大きく開く。現器高2.2cm，高台径7.8cm，高台高1.3cmを測る。胎土は密で，色調は内外面とも明褐色を呈する。

整形は，高台部・坏部ともロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後横位のヘラ磨きが施される。高台は貼付による。坏部切離しは，糸切りによるものと思われる。

II－4，高台付のものであるが，坏底部と高台部が約½弱遺存するにすぎない。高台は，「ハ」の字状に開く。現器高1.9cm・推定高台径8.6cm・高台高1.2cmを測る。胎土は密，色調は外面が明褐色，内面は黒色化処理が施される。

整形は，全面ロクロ整形が施されるが，坏部内面はその後横位のヘラ磨きが施される。高台は貼付により，後ロクロ整形が施される。坏部切離しは明確ではないが，ヘラ削り痕が認められる。

II－5，平底を呈し，体部はやや外方に開きながら内弯しつつ立ち上る。口縁部は僅かに外反する。器高5.5cm～6.0cm・口径14.6cm・底径7.3cmを測る。胎土は密で，色調は内外面とも明褐色を呈する。

整形は，全面ロクロ整形が施されるが，その後外面底部付近は，幅約1.8cmにわたって回転ヘラ削りが施される。この時の土器の回転方向は逆時計廻りである。内面は横位のヘラ磨きが施される。底部切離しは，不明であるが，現状では回転ヘラ削痕が認められる。この場合の土器回転方向は逆時計廻りである。このことは，底部に見出せるヘラ削り痕は坏切離し痕ではなく整形痕であろう。

II－6，僅かに上げ底気味の平底をもち，体部はやや直線気味に外方へ開く。器高4.9cm～5.3cm・口径15.4cm・底径6.1cmを測る。胎土はやや砂質で，色調は黒褐色または淡褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施される。外面底部付近は，明瞭ではないがヘラ削り整形が施されたものと思われる。底部切離しは糸切りによるものである。

II－7，僅かに上げ底を呈する平底のもので，体部は直線的に外方へ開く。器高3.9cm・口径11.7cm・底径5.6cmを測る。胎土は若干砂質で，色調は淡褐色～赤褐色を呈する。

整形は，全面ロクロ整形が施される。底部切離しは糸切りによる。底部外面には，植物質の圧痕が見出せる。

II－8，僅かに上げ底を呈する平底のもので，体部中位以上を欠損する。現状では体部は直線的に外方へ開く。現器高1.7cm・底径5.9cmを測る。胎土は密で，色調は褐色～淡褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施される。底部切離しは，糸切りによるものである。底部外面には植物質の圧痕が僅少ながら見出せる。

II－9，底部を欠損するものである。体部は，僅かに内弯しつつ外方へ開く口縁部は丸く肥厚する。現器高5.5cm・推定口径15.0cmを測る。胎土は若干砂質で色調は褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施されるが，外面底部付近はヘラ削り痕が認められ，ヘラ削り整形が行なわれたものと思われる。

II－10，底部を欠損するもので，体部は約⅓が遺存する。体部は，若干内弯しつつ外方に開き口縁部はやや外反する。現器高3.4cm・推定口径17.0cmを測る。胎土は緻密で，色調は内外面とも明褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施されるが，その後内面は横位のヘラ磨きが施される。体部下方に粘土接合痕が見出せる。

II－11，底部を欠損するもので，体部は約⅓が遺存する。体部は直線的に外方へ開く。現器高2.8cm・推定口径13.6cmを測る。胎土はやや砂質で，色調は内外面とも赤褐色を呈する。

整形は全面ロクロ整形が施される。体部下方に粘土接合痕が見出せる。

II－12，土製支脚と思われる。一端を欠損しており全体の形態を窺い得ないが，円柱状を呈するものであろう。現存長7.1cm・径約5.8cmを測る。胎土はやや砂質で色調は赤褐色を呈する。

整形は，全面ナデ整形が施されており，比較的なめらかな面を呈する。

（矢戸）

第七節　土壙及び土壙墓

(1) 第1号土壙

20D15・20及び20E11・16グリットにおいて検出された土壙状遺構である。

本遺構は褐色土層面より掘込まれており，平面形はやや不整ではあるが概ね長方形を呈する。遺構長軸はN－88°－Wを示す。長軸長2.78m・短軸長1.25m深さ約72cmを測り，横位断面は「U」字形ないし逆梯形状を呈する。遺構底面は緩やかな凹凸があるものの比較的平坦であり，硬質な面をもつ。

本遺構の覆土は図示したとおりであるが，Ⅵ層・Ⅷ層・Ⅹ層のようなザラ目質の土層が堆積している点が特徴であり，遺構埋没過程の特色を示すものであろう。ちなみに，このようなザラ目質の土層を覆土としている例として，第6号土壙がある。

覆土の状態からみて，比較的自然な流入堆積を示しているので本遺構が人為的な埋没過程を経たものではないものと考えられる。

本遺構からは，その底面あるいは覆土中からも何ら遺物は出土しなかった。したがって，本遺構の構築時期・性格は不明とせざるを得ない。

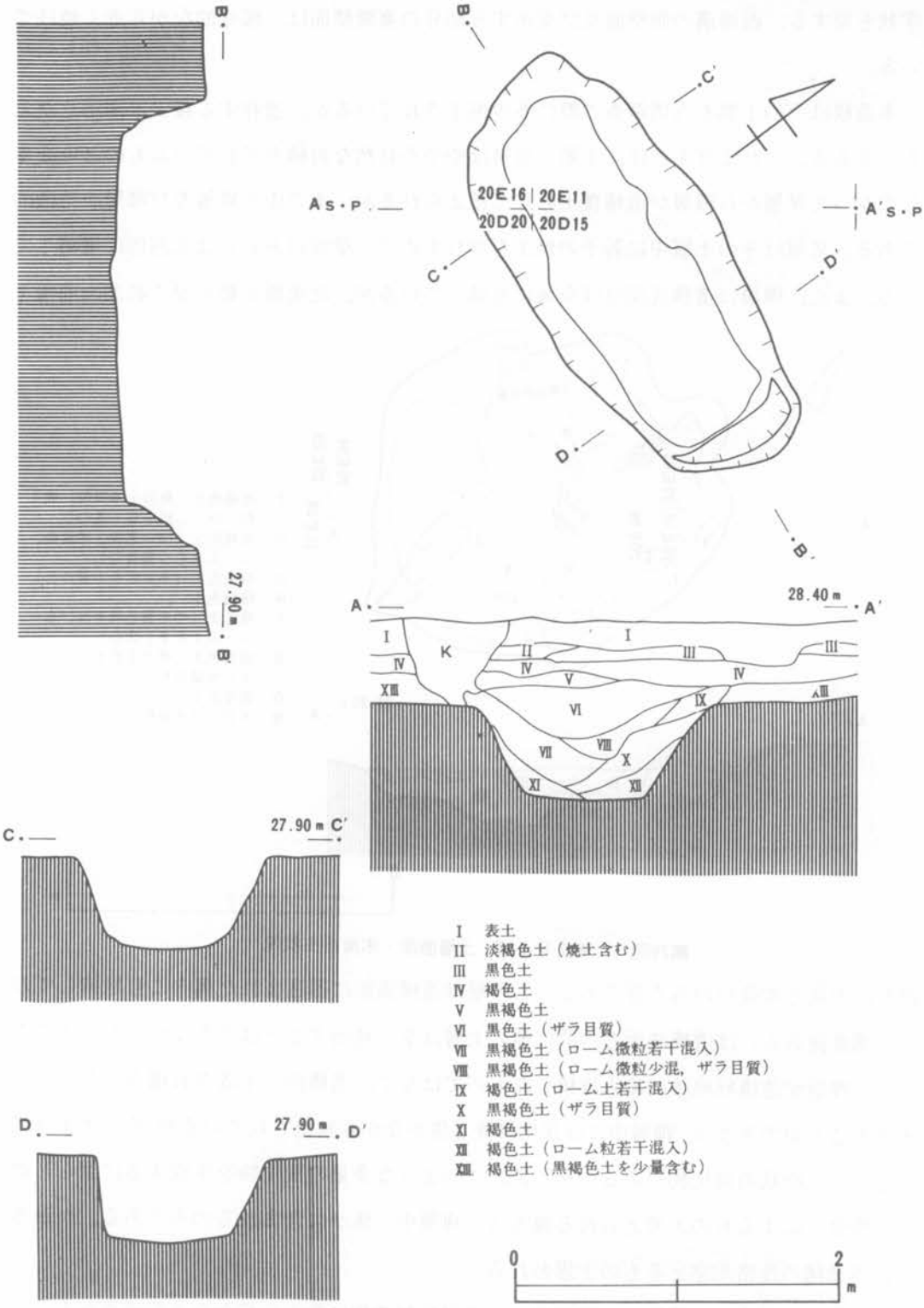
(2) 第2号土壙

20E04・05及び20E09・10グリット内において検出された土壙状遺構である。

本遺構は8号墳と9号墳との間に位置しており，古墳調査の際，上部を削平されているために掘込み面を明らかにすることはできなかった。平面形は不整な隅丸方形を呈するが，北側壁中央部・西壁中央部・南壁中央部がそれぞれ多少突出している。東壁部は他の3辺のように中央部は突出していないが南側は北側よりも全体的に突出気味である。

遺構長軸は，N－26°－Wを示す。長軸長2.06m・短軸長2.00m・深さ約29cmを測る。各壁中央部の突出部の長さは，北壁側が約25cm・南壁側が約16cm・西壁側が約11cm程張出・しているが，これらの突出部分は後述するように遺構底面に穿たれた溝の立ち上り部に相当している。

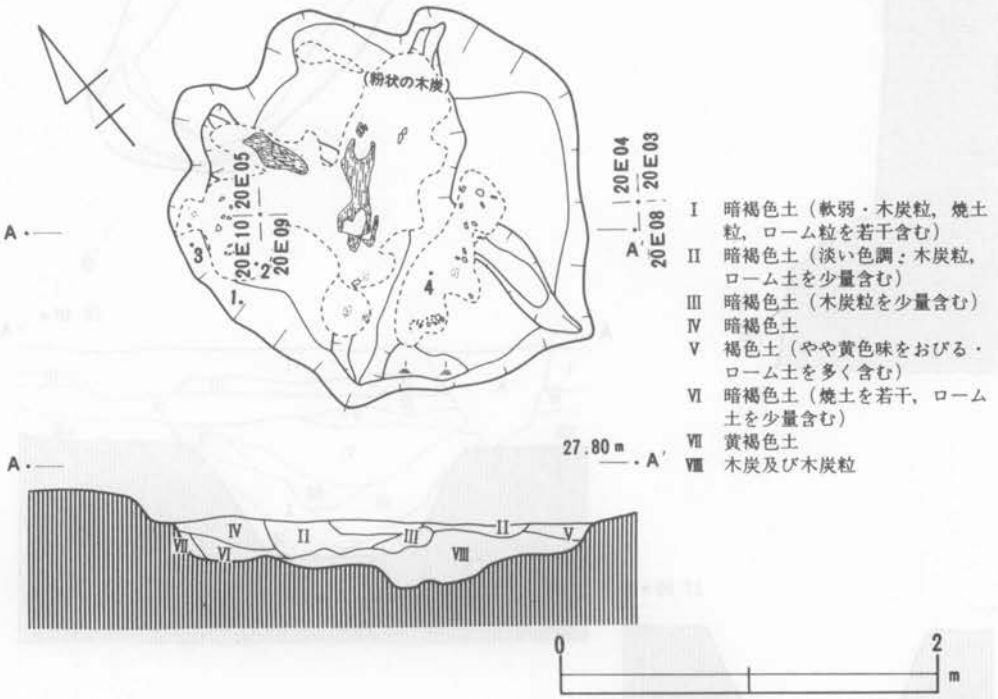
遺構底面は，多少の凹凸があるものの比較的平坦であり，かつ比較的硬質である。また，底面には「十」字形を呈する溝状の掘込みが施されている。この溝状の掘込みは，各壁中央の突出部を起点として底面中央部でそれぞれ交差する。溝の幅は一定していないが，約20cm～30cmを測り，深さは約10cm～13cm前後を測る。横位断面は，逆梯形状ないし「U」



第78図　第1号土壙 平面・断面図

字状を呈する。西側溝の側壁面及び交差する部分の東側壁面は，部分的ながら赤く焼けている。

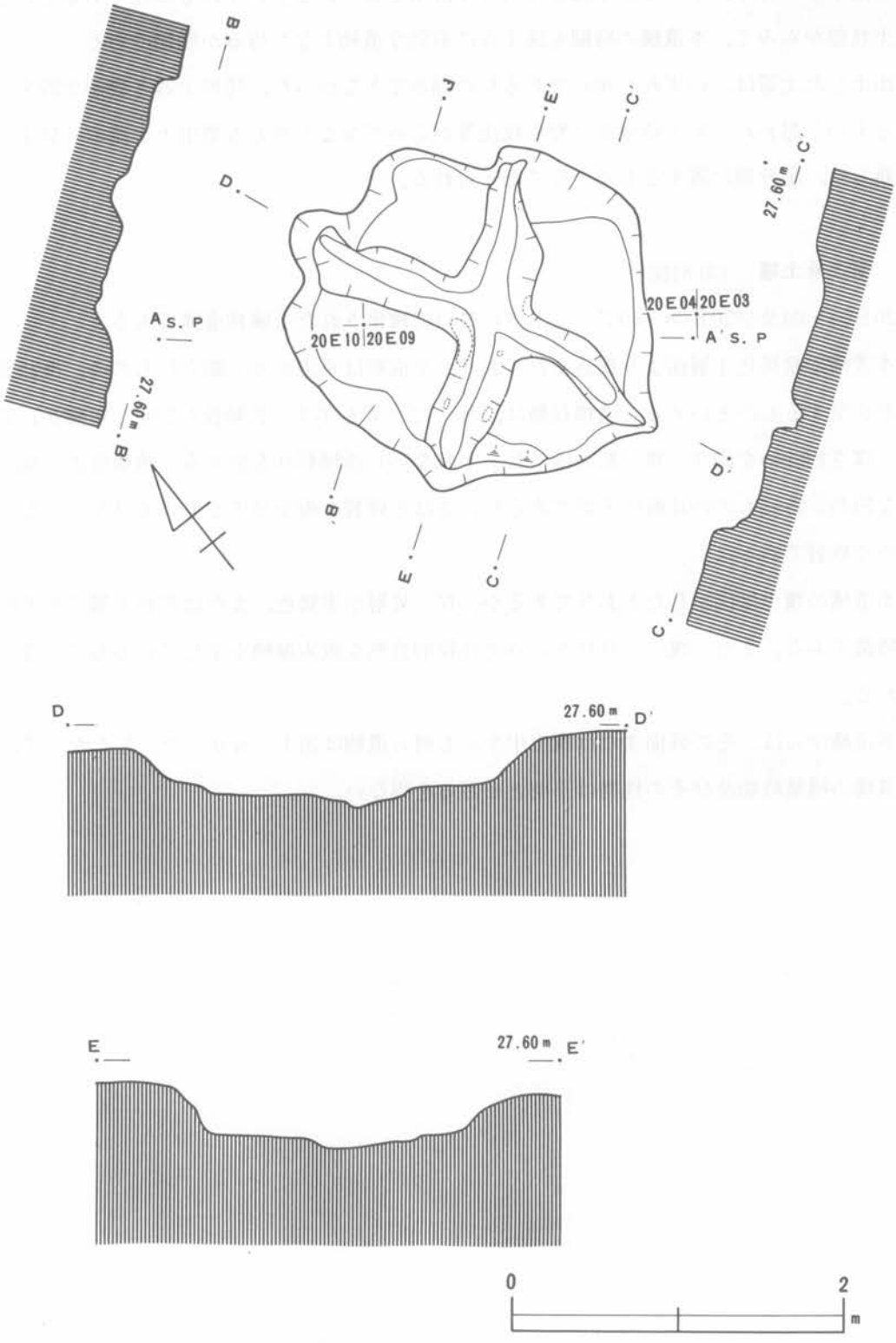
本遺構はその上部を古墳調査の際に多少削平されているが，遺存する覆土は図示したとおりである。これよりすれば，Ⅰ層～Ⅲ層はやや不自然な封積を示しているものといえる。したがってⅣ層からⅧ層が遺構覆土として把えられるが，その中でⅥ層及びⅧ層が特徴的である。Ⅵ層はその土層中に若干の焼土を含むもので，壁周辺あるいは北西側に堆積している。また，Ⅷ層は遺構底面ほぼ全域に堆積しているが，北東側が最も厚く約25cm前後を



第79図　第２号土壙　土層断面・木炭出土状況

測り，木炭と木炭粒のみの層である。この層は遺構底面に掘込まれた溝内にも堆積しており，溝底面あるいは遺構底面との間に他の土層は全く見出すことはできなかった。このことは，Ⅷ層が遺構廃絶後に流入堆積したものではなく，遺構内で生成され遺存したものと考えることができよう。Ⅷ層中には炭化材等も僅かながら検出されているが，その大半は細片もしくは紛状の炭化物である。そして，このような多量の炭化物を生成するに至らしめた「作業」によるものと考えられる焼土は，Ⅶ層中に僅かに含まれるのみである。かかる点に本遺構の性格が穿えるものと思われる。

本遺構より出土した遺物は，Ⅷ層中出土の炭化材の他に数点の細かな土器破片がある。炭化材は加工の施されない自然木のものである。土器は僅か４点にすぎず，全て覆土上層



第80図　第2号土壙 平面・断面図

より出土しており，1～3が土師器であり4は須恵器である。いずれも細片であることと出土状態からみて，本遺構の時期を決するに有効な遺物となり得るか問題である。

出土した土器は，いずれも細片であるため図示できなかった，坏形土器と甕形土器を呈するものと思われ，胎土焼成及び整形枝法等からみて少なくとも古墳出土土器の一群よりは新しく，国分期に属するものとして把えられる。

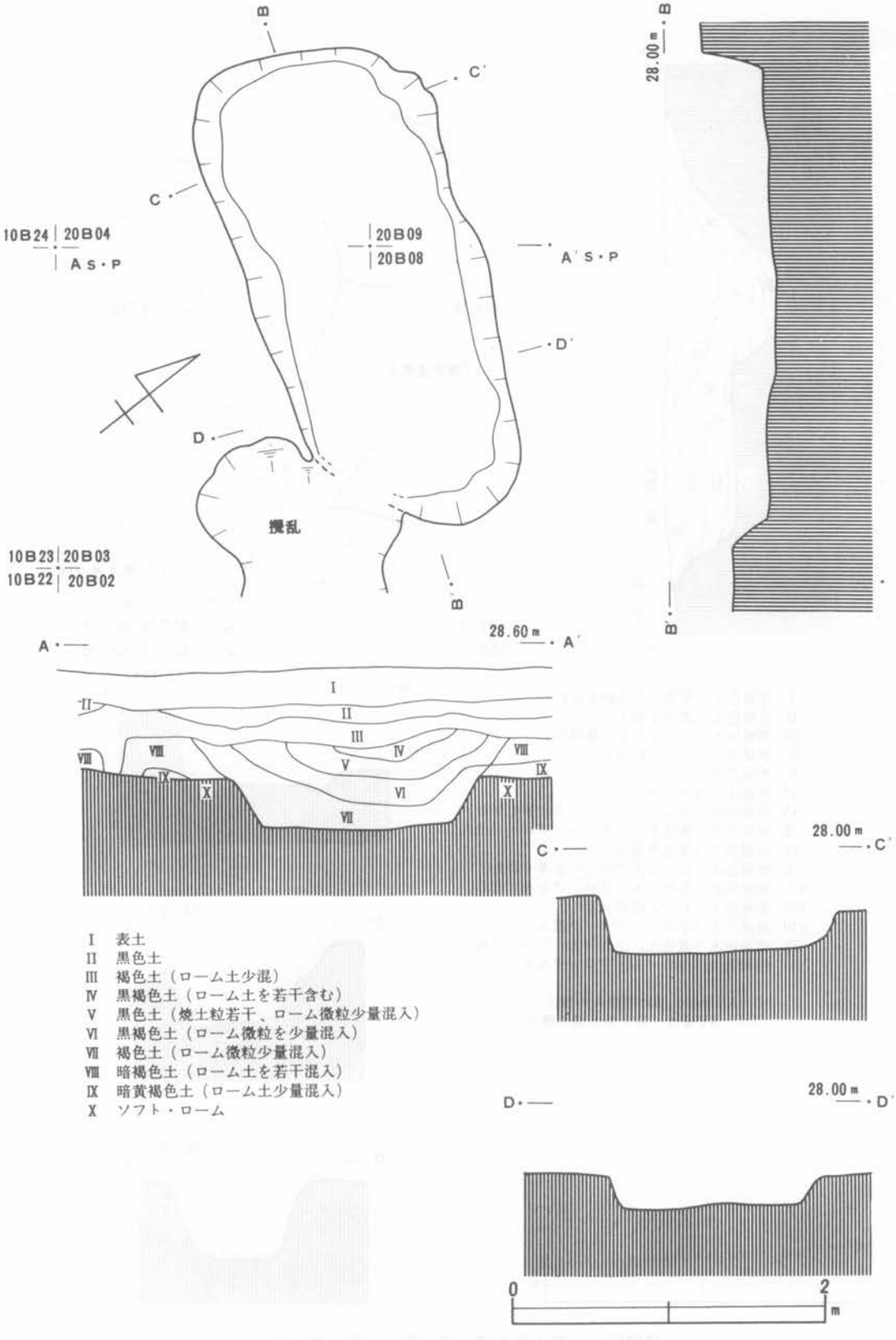
(3) 第3号土壙 （第81図）

20B03・04及び20B08・09グリット内に於いて検出された土壙状遺構である。

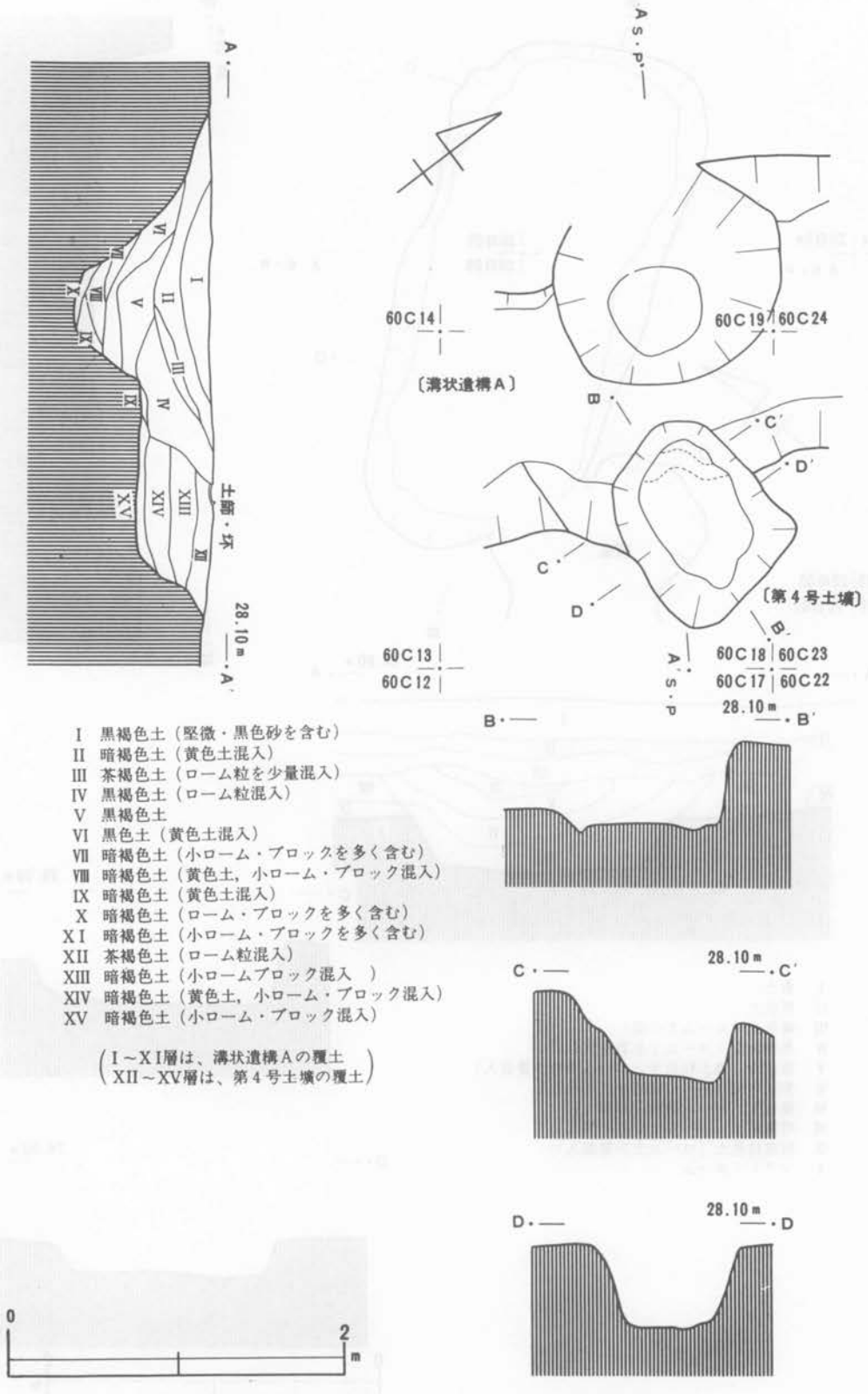
本遺構は暗褐色土層面より掘込まれており，平面形は東辺が丸く膨らむものの，概ね長方形を呈するものといえる。遺構長軸は，N－72°－Wを示す。長軸長3.20m・短軸長1.53m・深さ約58cmを測り，横位断面は「U」字状ないし逆梯形状を呈する。遺構底面は緩やかな凹凸があるものの比較的平坦であるが，さほど硬質な面を呈するものではなく，むしろやや軟質であった。

本遺構の覆土は図示したとおりであるが，Ⅳ～Ⅵ層が黒褐色，または黒色土層である点が特徴である。また，覆土の状態からみて比較的自然な流入堆積を示しているものと考えられる。

本遺構からは，その底面または覆土中からも何ら遺物は出土しなかった。したがって，本遺構の構築時期及びその性格は不明とせざるを得ない。



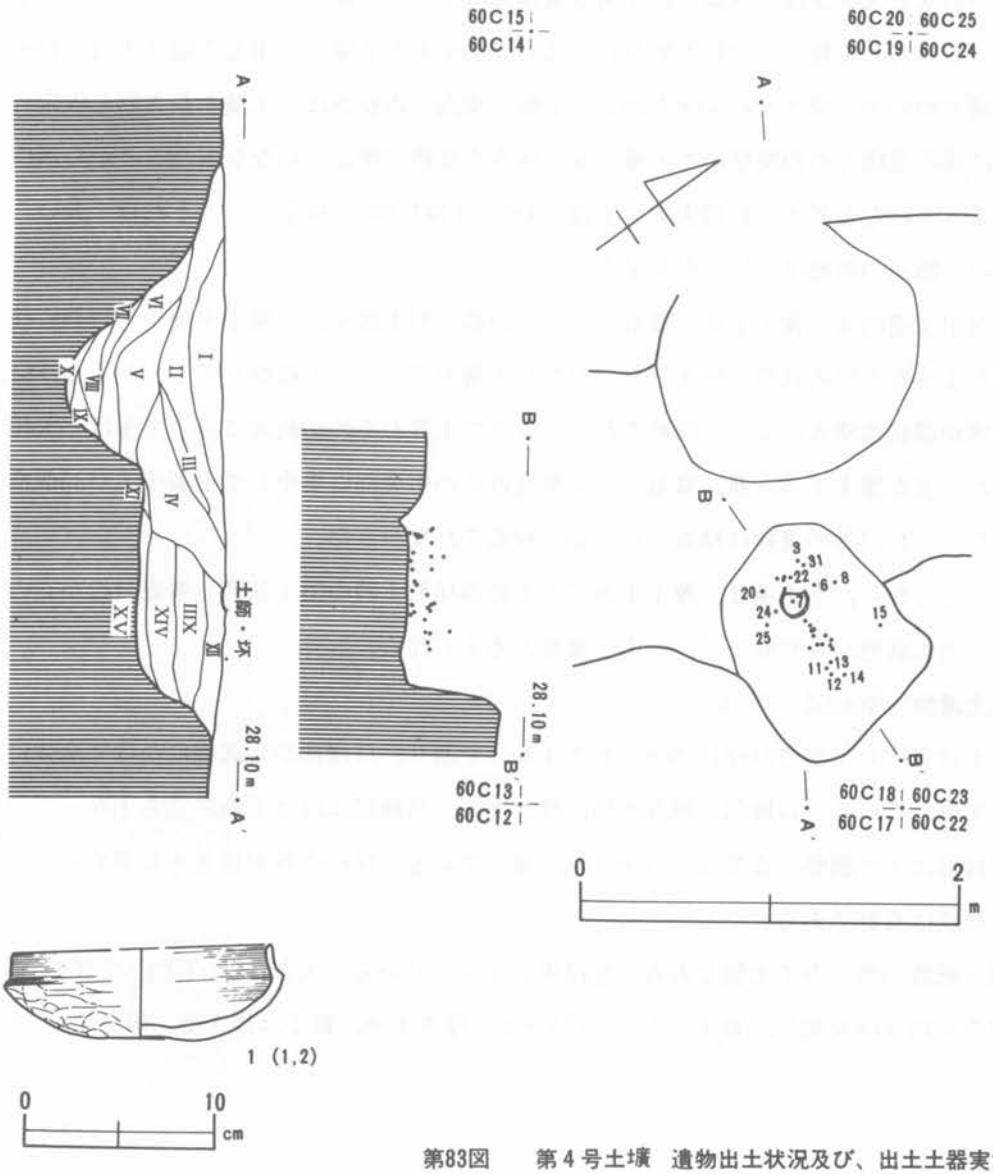
第81図　第3号土壙 平 面 ・ 断 面 図



I 黒褐色土（堅微・黒色砂を含む）
II 暗褐色土（黄色土混入）
III 茶褐色土（ローム粒を少量混入）
IV 黒褐色土（ローム粒混入）
V 黒褐色土
VI 黒色土（黄色土混入）
VII 暗褐色土（小ローム・ブロックを多く含む）
VIII 暗褐色土（黄色土，小ローム・ブロック混入）
IX 暗褐色土（黄色土混入）
X 暗褐色土（ローム・ブロックを多く含む）
XI 暗褐色土（小ローム・ブロックを多く含む）
XII 茶褐色土（ローム粒混入）
XIII 暗褐色土（小ロームブロック混入　）
XIV 暗褐色土（黄色土，小ローム・ブロック混入）
XV 暗褐色土（小ローム・ブロック混入）

（I～XI層は、溝状遺構Aの覆土
XII～XV層は、第4号土壙の覆土）

第82図　第4号土壙 平 面 ・ 断 面 図



第83図　第４号土壙　遺物出土状況及び、出土土器実測図

(4) 第4号土壙（第82・83図　PL33－(2)(3)）

本土壙は，遺跡中央部やや北東寄りの60C区で検出された。ただ土壙自体は，台地を横位に走行する溝状遺構Aによって西側部分が切られていた。

土壙の形状と大きさは，西側壁面が溝状遺構Aによって切断されていたので判然としないがW－E方向を主軸とした長方形ないしは方形を呈する土壙で，南北の幅は上端が約90cm，下端が約55cm，深さが約50cmを測る。主軸（東西）の長さは，土壙を長方形と仮定した場合に溝状遺構Aの西側壁に本土壙の掘り込みの痕跡が検出されなかったことから溝内におさまっていたと考えられ最大でも上端2.3m，下端1.9m（推定）で，それ以上長いことはない。断面の形態は，U字形を呈する。

土壙内出土遺物は，覆土上部（Ⅻ層）から土師器坏形土器が，土壙中央部から埋葬直後供献したような正位の状態で出土した。ただし土層セクションを観察してもわかるように，後に土壙が溝状遺構Aによって切断されているので土器もその切断面に沿って$\frac{1}{3}$ほど欠損していた。また覆土下部（Ⅻ，Ⅻ層）の土壙底近くの中央部に集中して土製小玉が33個検出された。それ以外の遺物は精査したが全く検出されなかった。

以上のことから，本土壙は，覆土上面での土師器坏形土器の出土状態や壙底付近からの製小玉の出土状態から判断して，一応土壙墓と考えられる。

土壙出土遺物（第84図　PL45）

1は土師器坏形土器で口径13.5cm，高さ4.6cmを測り，口縁部から底部にかけて全体に$\frac{1}{3}$ほど欠損している。口縁部と胴部の境に稜があり，口縁部はほぼ垂直に立ち上がっている。口縁部はナデ調整，底部はヘラケズリを施している。坏の内外面はともに黒色を呈しており焼成は良好である。

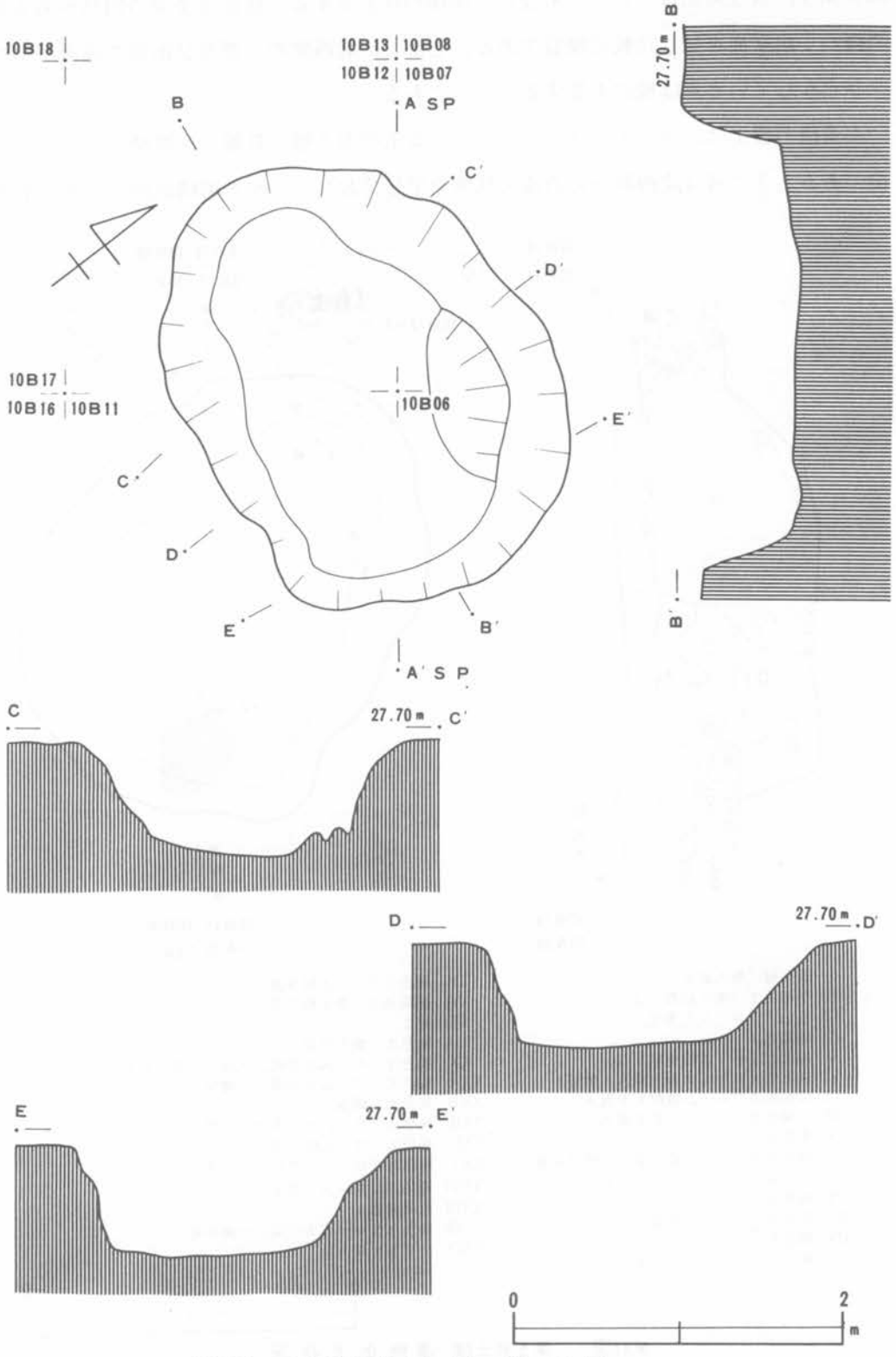
玉類－総数33個で全て土製である。色は黒色を呈している。大きさは，平均して径約1.5cm，厚さが約9mmを測り，最大のもので径1.6cm，厚さ1cm，最小は径1cm，厚さ7mmを測る。

（鈴木）

(5) 第5号土壙（第84・85図）

10B06・07及び10B11・12グリット内において検出された土壙状遺構である。

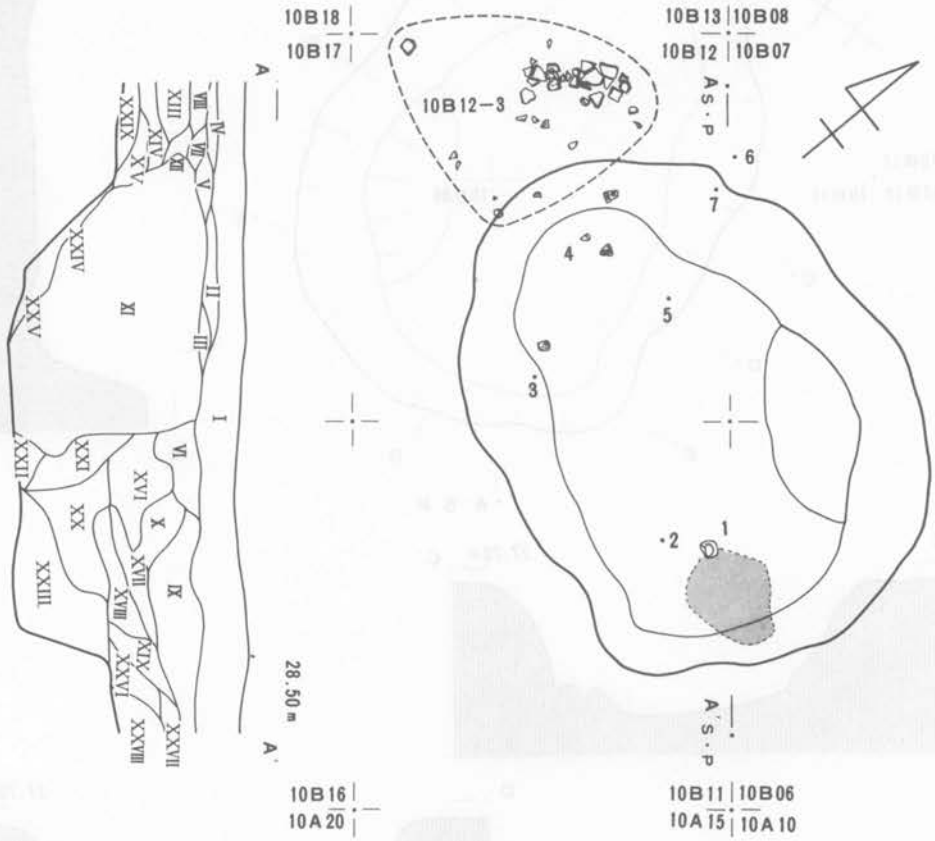
本遺構は褐色土層面より掘込まれており，平面形は全体に凹凸の著しい不整形は長円形を呈する。遺構長軸はN－89°－Wを示す。長軸長2.82m・短軸最大幅2.20m・深さ約88



第84図　第5号土壙 平 面・断 面 図

cmを測り，横位断面は「U」字形ないし逆梯形状を呈する。底面は多少の凹凸があるものの概ね平坦な面を呈し比較的硬質である。しかし，北西側の一部及び南側の底面がブロック状をなしている点は検討を要するところである。

本遺構の覆土は，ローム・ブロックとローム土の混土層（XI層）が堆積している点が特徴である。この層は北西側からの流入状態を呈しており，しかも遺構底面から表土層下ま



I 表土層（焼土混入）
II 暗褐色土（焼土粒若干含む）
III 褐色土（ローム土多混）
IV 暗褐色土
V 褐色土（ローム粒多混）
VI 褐色土（ローム土若干混入・軟弱）
VII 暗褐色土（ローム微粒若干混入）
VIII 暗褐色土（ローム土若干混入）
IX 黒色土
X 褐色土（ローム土若干混入・ザラ目質）
XI ローム・ブロック＋ローム土
XII 褐色土
XIII 褐色土（ローム土多混）
XIV 褐色土
XV 褐色土（ローム土やや多混）
XVI 褐色土（ローム粒少混）
XVII 黒褐色土（焼土粒少混）
XVIII 焼土
XIX 褐色土（焼土少混）
XX 褐色土（ローム土少混，黒色土・焼土粒若干）
XXI 褐色土（ローム土少混）（硬質）
XXII 褐色土（硬質）
XXIII 褐色土（ローム土・黒色土少混）
XXIV 褐色土（ローム粒少混）
XXV 褐色土（ローム・ブロック少混）
XXVI 褐色土（ローム土若干）
XXVII 淡黒褐色土
XXVIII 褐色土（ローム土少混）—漸移層
XXIX ソフト・ローム

0 2 m

第85図　第5号土壙　遺物出土状況

でかなりの厚さをもつ。この他の土層の堆積状態を見ても，およそ自然的な流入堆積過程を経たものとは考えられず，むしろ人為的な（あるいは自然的な堆積過程以外の）堆積を窺わせるものである。

また，南東側上部に52cm×42cmの範囲にわたって焼土層が検出されている。この焼土層は不整円形を呈し，厚さ約10cm前後を測るが，焼土層下面は焼けた状態を示していない。焼土もザラ目質状のもので自然的な堆積を示しているものとは思われず，他の土層と同様な過程によって堆積したものと考えられる。

本遺構からは，西側覆土上層から縄文式土器破片が，東側XX層中より石一点が出土してる。また遺構の西側約50cmの地点で縄文式土器が褐色土層中まとまって出土しており，この破片と遺構内覆土上層出土の土層片とが接合した。遺構内出土土層はXI層上面に位置しており，明らかに流入したものと思われる。したがってこれら遺物が本遺構構築時期を決するに有効な遺物であるとは考えがたいが，ここでは一応遺構内出土遺物として図示しておく。なお遺構外西側で出土した土器は本遺構とは別個の遺構に伴っていたものか否かであるが，周辺精査の結果遺構は検出されなかったので，むしろ包含層内出土として考えられる。

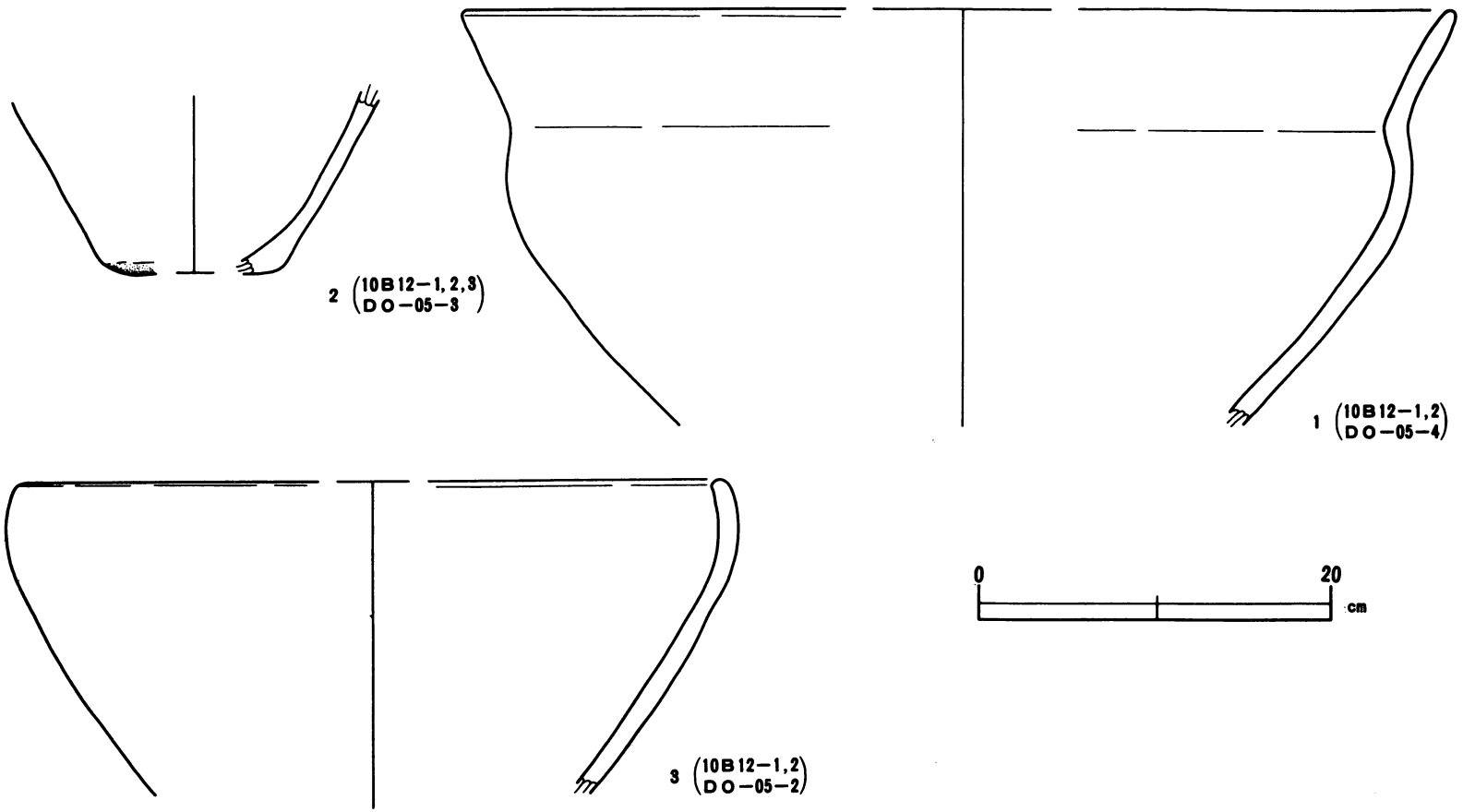
第5号土壙出土遺物

〔土器〕　（第86図）

(1)浅鉢形土器である。全体の約¼が遺存しているもので，底部を欠損している。推定口径約55.4cm・現存器高23.7cm・器厚は1.1cm前後を測る。口縁部は直線的に外方へ開き，最大径は口縁部に位置する。頸部で段を有する外面では口縁部から胴部へとゆるやかな曲線を描くが，内面では明瞭な段差を呈する。胴部は上方で僅少ながら丸味を有するが以後直線的に底部へとぼまってゆく。

文様は全く施されず，外面は口縁部から胴部上半までは横位のヘラ磨きが，胴部上半以下は縦位のヘラ磨きが施されている。胎土なやや砂質である。色調は，内外面とも褐色を呈する。

(2)・(3)浅鉢形土器で，胎土・焼成・色調・整形技法等の点からみて同一個体と考えられるが，直接は接合しない。(2)は約¼が遺存している。推定口径約39.0cm・現存器高17.9cm・器厚1.0cm前後を測る。口縁部は内弯しつつ立ち上り，口唇部下約4cmの部分は最大径を有する。胴部は，ほぼ直線的に底部へ向ってつぼまってゆく。



第86図　第5号土壙 出土土器実測図

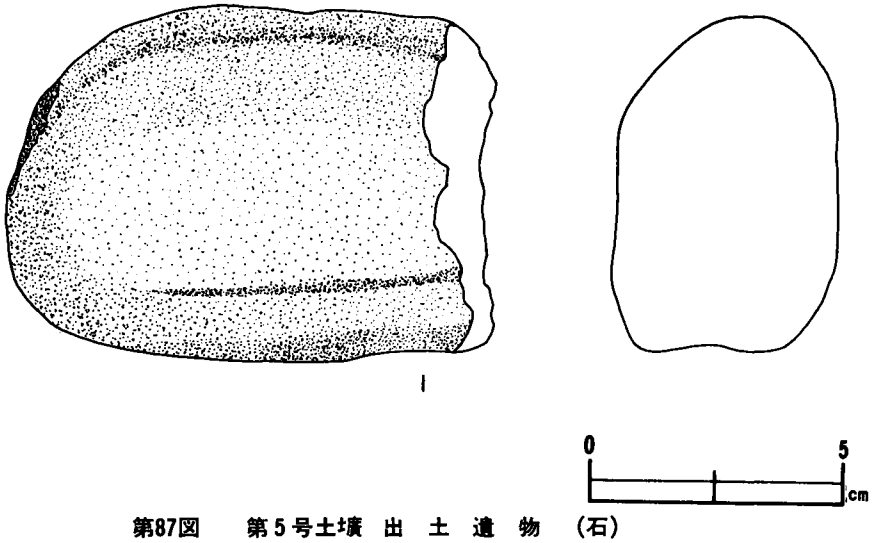
本土器も全く文様が施されず，外面は最大径下方までが横位を主体としながらも若干斜位のヘラ磨きが施される。内面は口唇部下約5cmの前後の位置までが横位の，それ以下は縦位のナデ整形が施される。胎土はやや砂質である。色調は，外面が赤褐色・内面は褐色～黒褐色を呈する。

(3)は胴部下半から底部が遺存する。推定底径7.8cm・現存器高9.8cm・器厚0.9cm前後を測る。胴部下半は，直線的に底部へつぼまる。底部は平底を呈するが，外面の器面が著しく荒れており胴部と底部との境は丸く磨耗している。

胴部下半は文様が施されず，内外面とも縦位のヘラ磨きが施されている。胎土はやや砂質であり，色調は外面が赤褐色・内面は黒褐色を呈する。

石器（第87図）

長さ9.6m・幅6.9m・厚さ4.4cm・長円形を呈するものであるが一端を欠損している。他端には打撃による磨耗痕かと考えられる部分が見出せる。この他には使用痕を認めることは出来ない。恐らく敲打的用途に使用したものと考えられる。

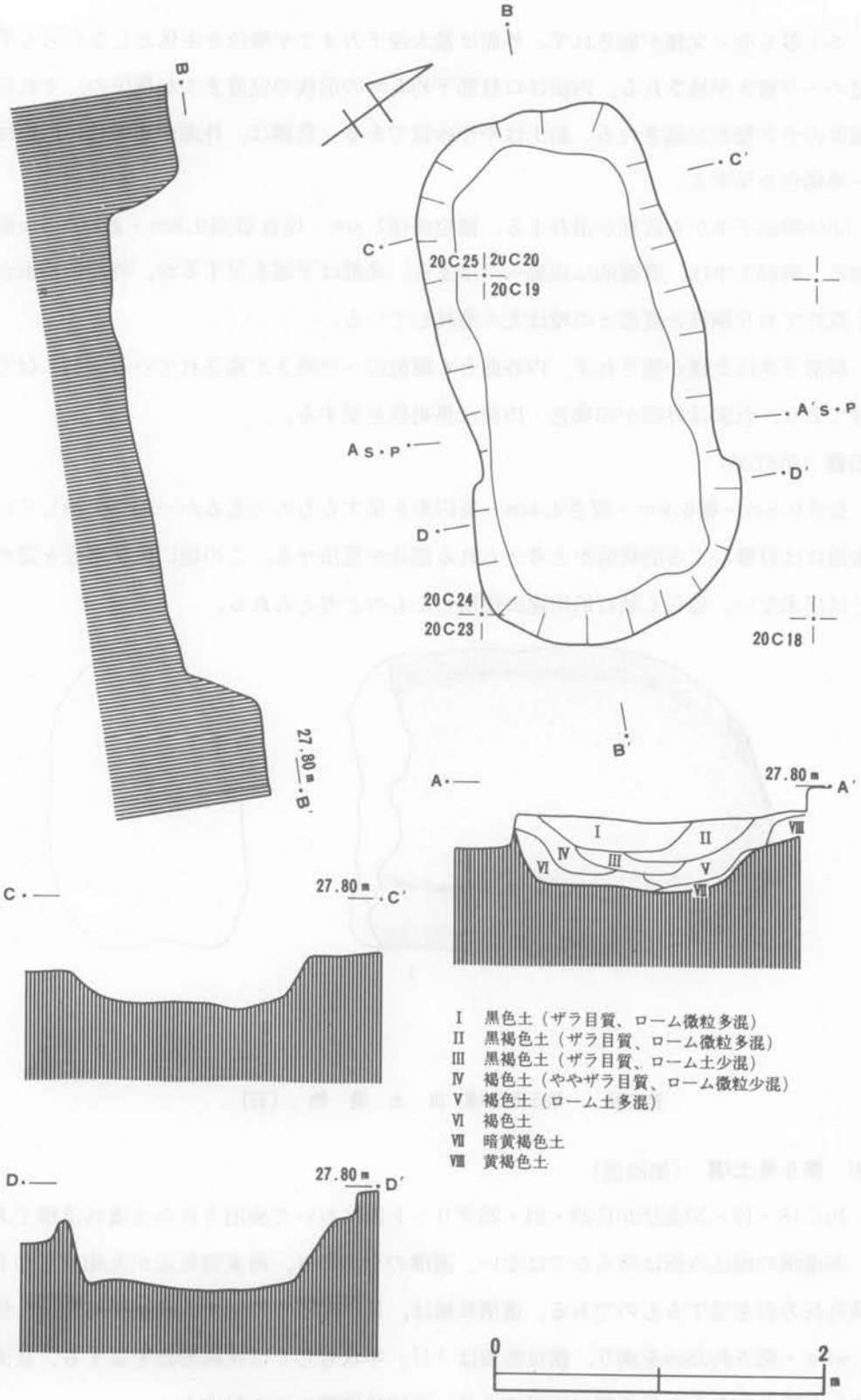


第87図　第5号土壙　出　土　遺　物　（石）

(6)　第6号土壙　（第88図）

20C18・19・20及び20C23・24・25グリット内において検出された土壙状遺構である。

本遺構の掘込み面は明らかではない。遺構の平面形は，南東側短辺が丸味をもつものの隅丸長方形を呈するものである。遺構長軸は，N－68°－Wを示す。長軸長3.20m・短軸長1.64m・深さ約38cmを測り，横位断面は「U」字状もしくは逆梯形状を呈する。底面は緩やかな凹凸があるものの概ね平坦であり，比較的硬質な面を呈する。



第88図　第6号土壙 平 面・断 面 図

本遺構の覆土は，図示したようにⅠ～Ⅶ層に分けられる。Ⅰ～Ⅲは，黒色もしくは黒褐色を呈しザラ目質の土層であり，本遺構覆土の特徴である。このようなザラ目質土を覆土としているものに第１号土壙があり，本遺構とは北西側約10ｍの距離を隔ている。

覆土の状態からみて，比較的自然な流入堆積を示しているものと考えられ，少なくとも人為的な埋土は行なわれていないものと思われる。

本遺構からは，覆土中あるいは遺構底面においても何の遺物も出土していない。したがって，本遺構の構築年代ならびにその目的・性格等は，不明とせざるを得ない。

(7) 第７号土壙 （第89・90図）

調査区域南東側の斜面に位置しており，本遺構より南東側は若干の緩斜面を残し以後急傾斜となって支谷に落込んでいる。したがって換言するならば，舌状台地縁辺の地形変換線付近に位置しているものといえる。

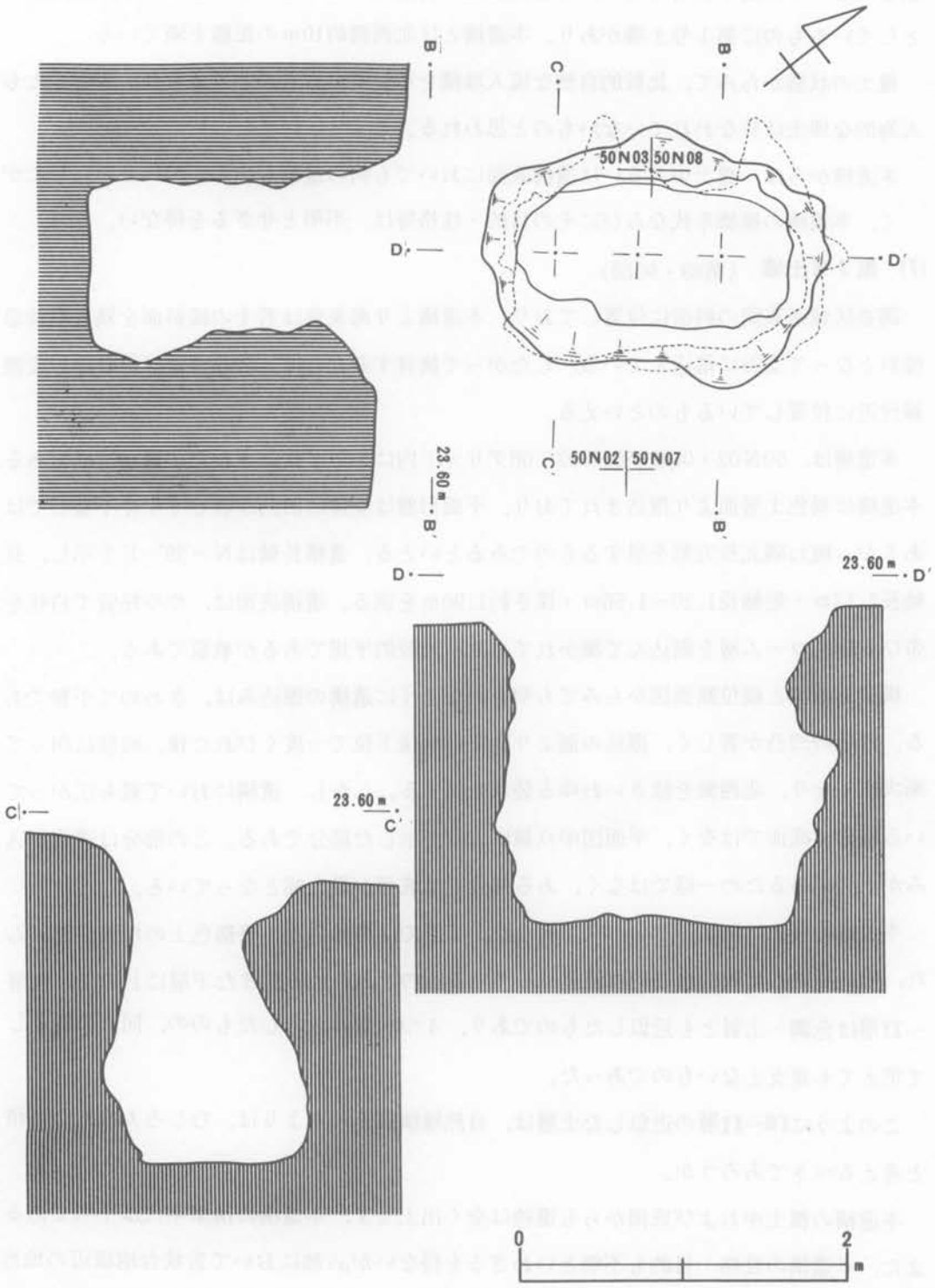
本遺構は，50Ｎ02・03及び50Ｎ07・08グリット内において検出された土壙状遺構である。本遺構は褐色土層面より掘込まれており，平面形態は全体に凹凸が著しくやや不整形ではあるが，概ね隅丸長方形を呈するものであるといえる。遺構長軸はＮ－39°－Ｅを示し，長軸長2.12ｍ・短軸長1.20～1.56ｍ・深さ約1.90ｍを測る。遺構底面は，やや粘質で白味を帯びる褐色ローム層を掘込んで築かれており，比較的平坦であるが軟質である。

横位断面図と縦位断面図からみても明らかなように遺構の掘込みは，きわめて不整である。側壁の凹凸が著しく，掘込み面より約１ｍ前後下位で一度くびれた後，底部に向って漸次広くなり，北西側を除きいわゆる袋状を呈する。しかし，遺構において最も広がっている部分は底面ではなく，平面図中点線によって示した部分である。この部分は遺構掘込みが不整であるため一様ではなく，ある部分では底面が最大幅となっている。

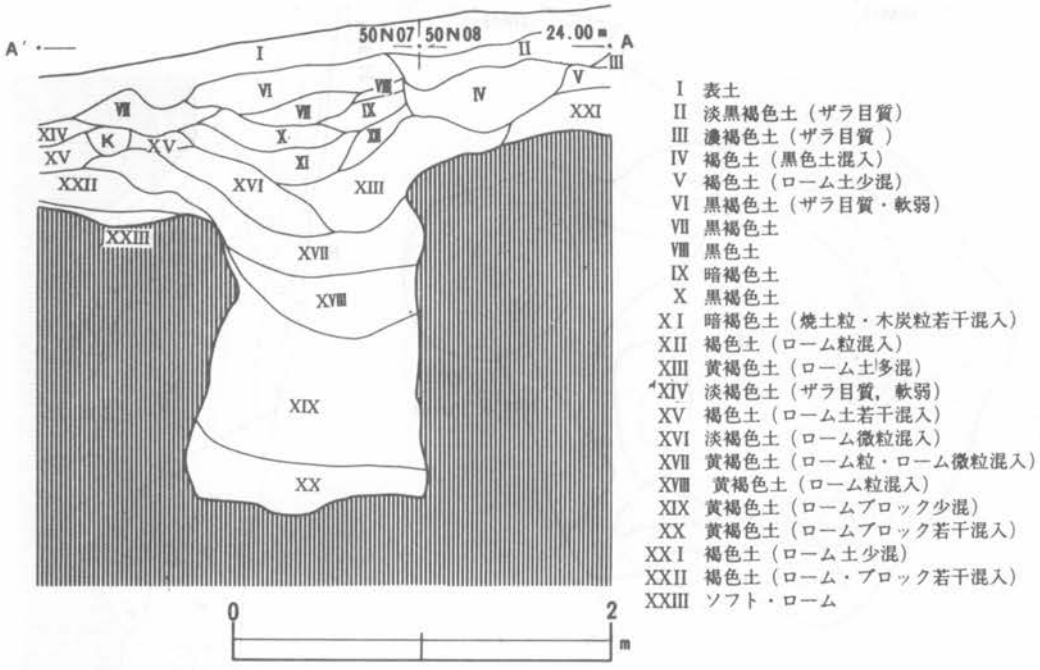
本遺構の覆土は図示したとおりであるが，上層では黒褐色土・暗褐色土の堆積が認められ，その状態も比較的自然的堆積を示しているものと思われる。また下層において，XⅦ層～XX層は色調・土質とも近似したものであり，４つの層に区分したものの，同一の層として把えても差支えないものであった。

このようにXⅦ～XX層の近似した土層は，自然堆積層とみるよりは，むしろ人為的な堆積と考えるべきであろうか。

本遺構の覆土中および底面からも遺物は全く出土せず，本遺構の構築年代は不明である。また，本遺構の性格・目的も不明といわざるを得ないが,占地において舌状台地縁辺の地形変換線近くに位置する点，しかも深い掘込みを有している点は，重視する必要があろう。そしてこの２点は，本遺構の性格・目的をある程度示唆しているものと思われる。



第89図　第7号土壙 平 面 ・ 断 面 図



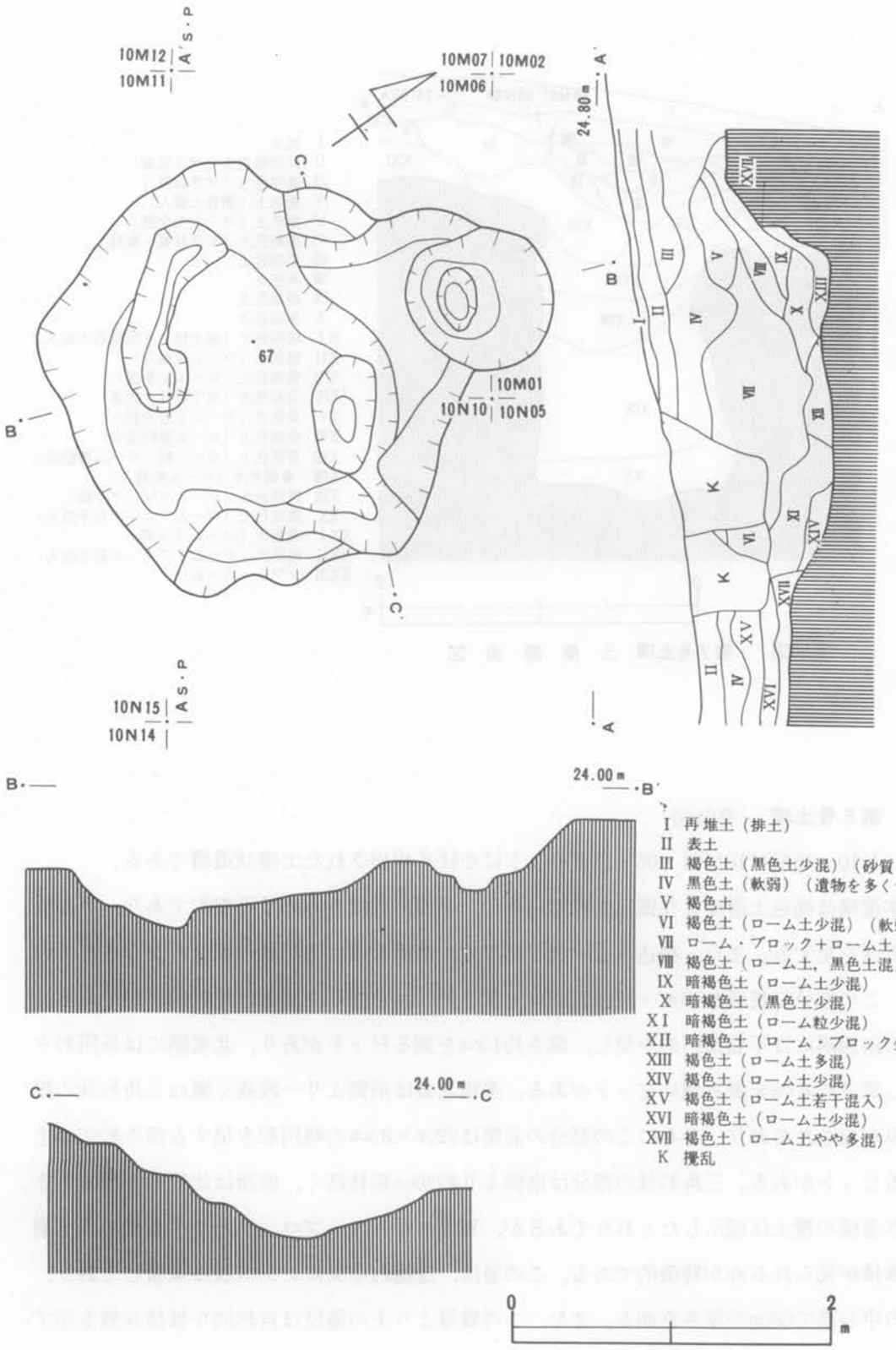
第90図　第7号土壙 土 層 断 面 図

(8) 第8号土壙 （第91図）

10N10・15及び10M01・06・11グリットにかけて検出された土壙状遺構である。

本遺構は褐色土層面より掘込まれているが，平面形態はきわめて不整形であり，概ね五角形状を呈する。また，掘込みも一様ではなく，遺構南側は方形状の掘込みがなされている。この部分は長径2.70m・短径1.95m・深さ約50cmを側り，底面は比較的平坦である。底の南西隅には不整長円形を呈し，深さ約13cmを測るピットがあり，北東隅には長円形を呈し深さ約6cmを測る浅いピットがある。遺構北側は南側より一段高く概ね三角形状の掘込みがなされており，さらにこの部分の北側は92cm×89cmの略円形を呈する深さ約20cmを測るピットがある。三角形状の部分は南側より約20cm前後高く，底面は比較的平坦である。

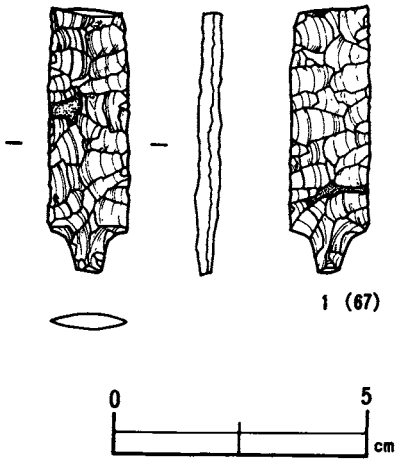
本遺構の覆土は図示したとおりであるが，VII層のローム・ブロックとローム土の混土層の堆積が見られる点が特徴的である。この層は，遺構内中央にレンズ状に堆積しており，その中心部で68cmの厚さを測る。また，このVII層より上の層位は自然的な堆積状態を示す



第91図　第8号土壙 平 面・断 面 図

が，下の層位な自然的な流入堆積状態を示しているとは考え難い点もある。

本遺構の他に覆土中にローム・ブロックとローム土の混土層を有するものとして，第5号土壙がある。堆積状態は，自然的な流入過程を示しているものとは考え難く検討を要するところである。



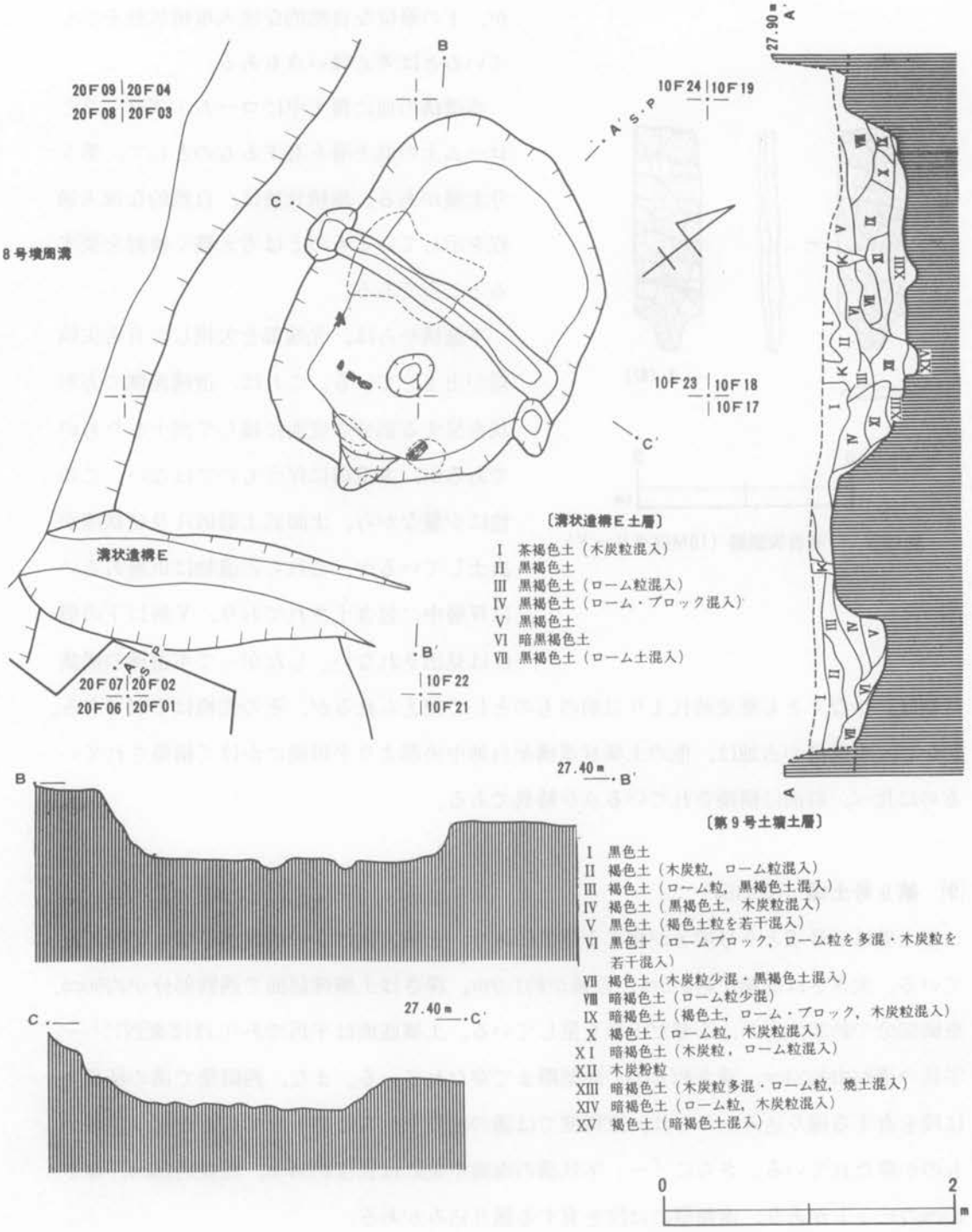
第92図　有舌尖頭器（10M06グリッド）

本遺構からは，先端部を欠損した有舌尖頭器が出土している。これは，遺構南側の方形状を呈する部分の底面に接して出土したものであるが，本遺構に伴うものではない。この他に少量ながら，土師式土器破片及び鉄滓が出土しているが，これらの遺物はⅢ層あるいはⅣ層中に包含土されており，Ⅴ層以下の層には見出されない。したがって本遺構の構築時期は，少なくとも歴史時代より以前のものとして把えられるが，その性格は不明である。しかし，本遺構の占地は，他の土壙状遺構が台地中央部より平坦面にかけて構築されているのに比べ，斜面に構築されている点が特異である。

(9) 第9号土壙（第93図）

本土壙は8号墳と9号墳とが接する位置にあり，土壙自体は9号墳周溝を切って作られている。大きさは長軸が約2.5m，短軸が約1.9m，深さは土壙確認面で西側部分が約50cm，東側部分で約30cmあり，不整だ円形を呈している。土壙底面は平坦であり,ほぼ東西に「一」字状の溝が巾約24cm，深さ約6cmで両壁際まで穿たれている。また，西側壁で溝の延長上に段を有する掘り込みがみられ，東側壁では溝の延長上からは若干はずれるがピット状のものが穿たれている。さらに「一」字状溝の南側中央には長径約34cm，短径約26cm，深さ10cmのピットがあり，南側壁には段を有する掘り込みがある。

さらに本土壙内には,「一」字状溝を中心として西側に木炭粒および焼土の濃密な分布がみられ溝中にも堆積していた。また，南側部分にも木炭が，南壁際には木炭，木炭粒，焼土が固まって認められた。本土壙を土層セクションで観察すると土壙内覆土のほとんどが



第93図　第9号土壙　平面・断面図

木炭粒や焼土を混入した土で成層されていることがわかる。

なお，土壙内よりも土器等の出土は，まったく検出されなかった。

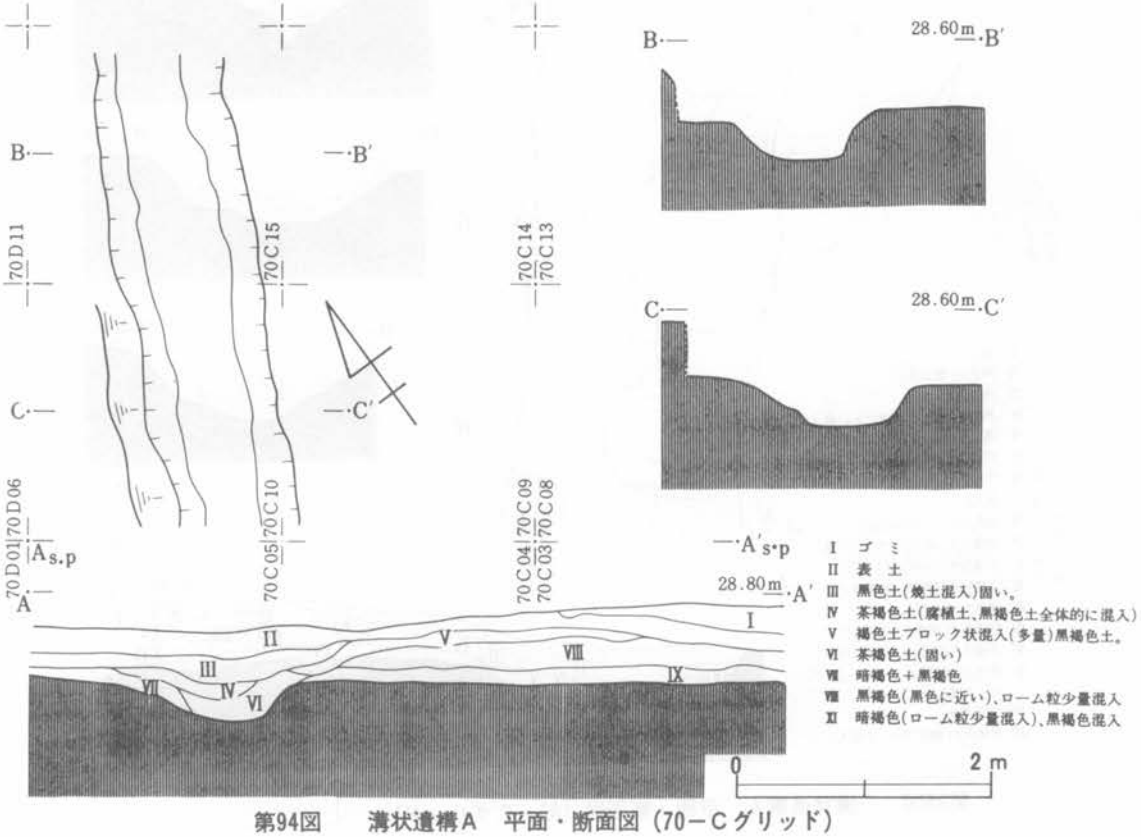
（鈴木）

第八節　その他の遺構

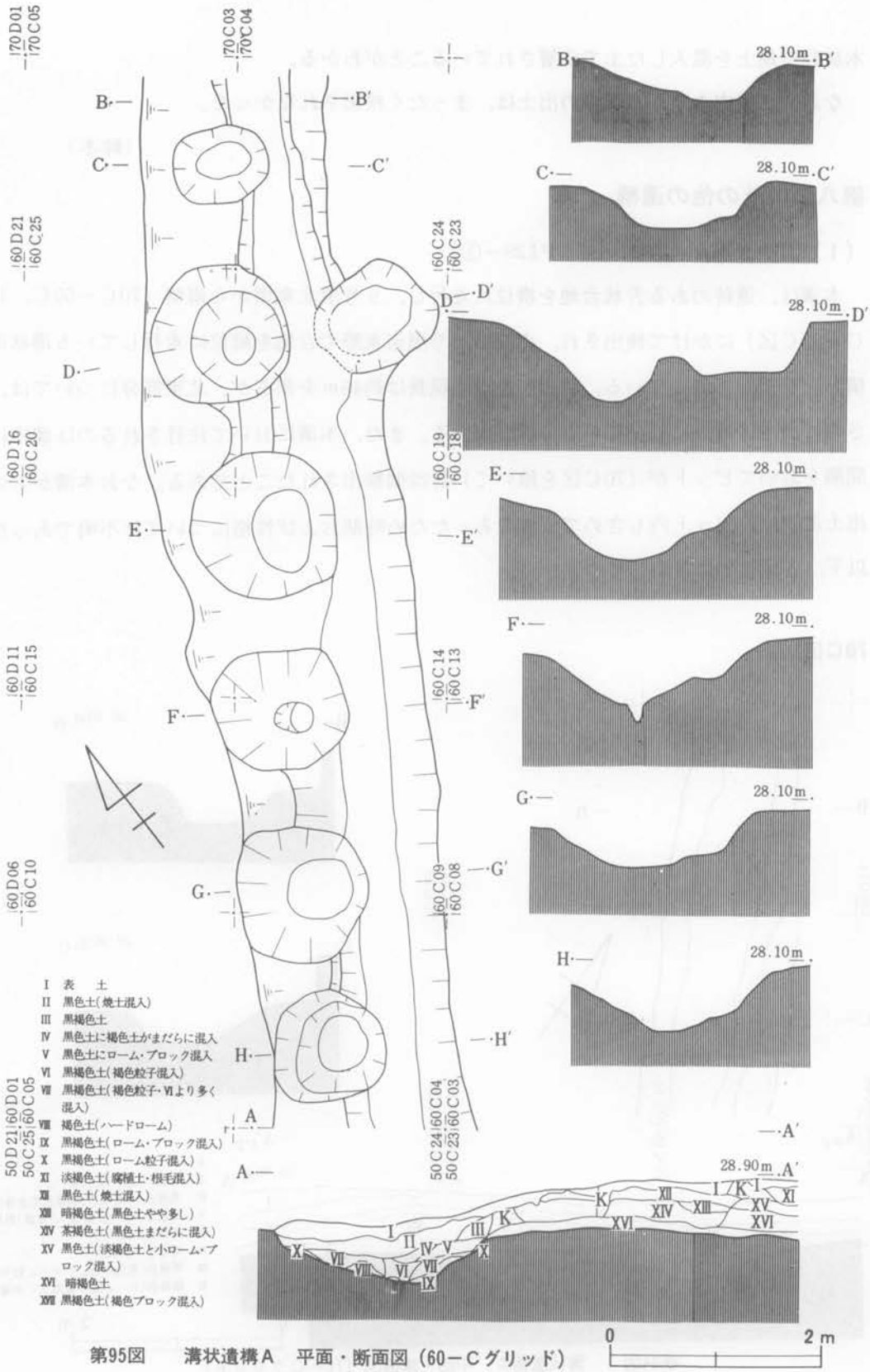
（1）溝状遺構A（第95－100，PL29－①）

本溝は，遺跡のある舌状台地を横位に走行し，9号墳北東側から南側（70C～50C，10C～30C区）にかけて検出され，南端は10号墳南東際で台地を縦位に走行している溝状遺構Bと交差して終っている。検出した溝の現長は約46mを測るが，北東部分については，さらに調査区域外に延びている可能性がある。また，本溝において注目されるのは溝中に間隔をおいてピットが（70C区を除いて）計22個検出されたことである。なお本溝からの出土遺物は，ピット内も含めて皆無であったため時期および性格については不明であった。以下，各区ごとに説明してゆきたい。

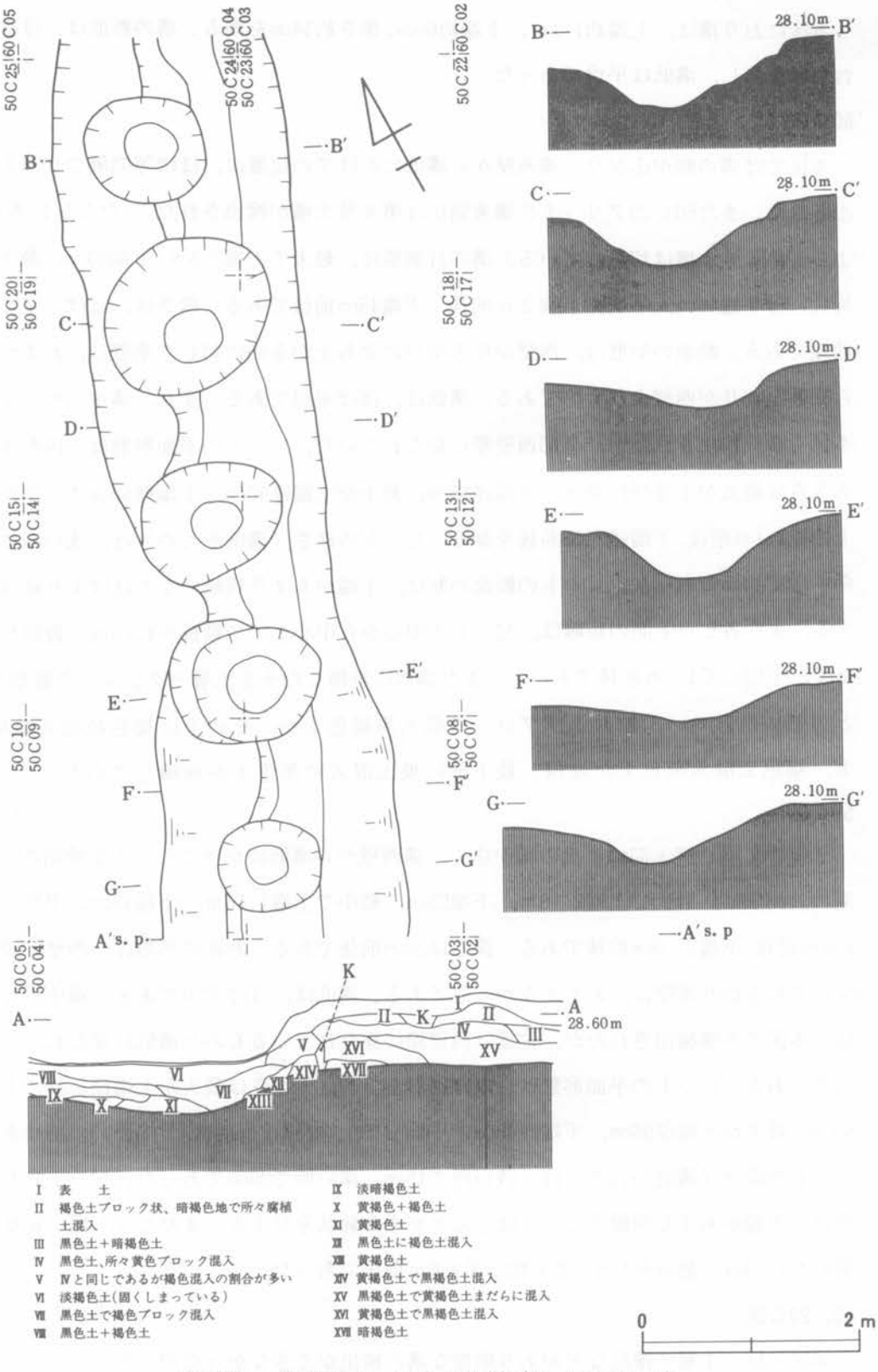
70C区



第94図　溝状遺構A　平面・断面図（70－Cグリッド）



第95図　溝状遺構A　平面・断面図（60－Cグリッド）



I 表　土
II 褐色土ブロック状、暗褐色地で所々腐植土混入
III 黒色土＋暗褐色土
IV 黒色土、所々黄色ブロック混入
V IVと同じであるが褐色混入の割合が多い
VI 淡褐色土(固くしまっている)
VII 黒色土で褐色ブロック混入
VIII 黒色土＋褐色土
IX 淡暗褐色土
X 黄褐色＋褐色土
XI 黄褐色土
XII 黒色土に褐色土混入
XIII 黄褐色土
XIV 黄褐色土で黒褐色土混入
XV 黒褐色土で黄褐色土まだらに混入
XVI 黄褐色土で黒褐色土混入
XVII 暗褐色土

第96図　溝状遺構A　平面・断面図（50－Cグリッド）

本区におり溝は，上端約1.1m，下端約60cm,深さ約34cmを測る。溝の断面は，ほぼ逆台形状を呈し，溝低は平坦であった。

60C区

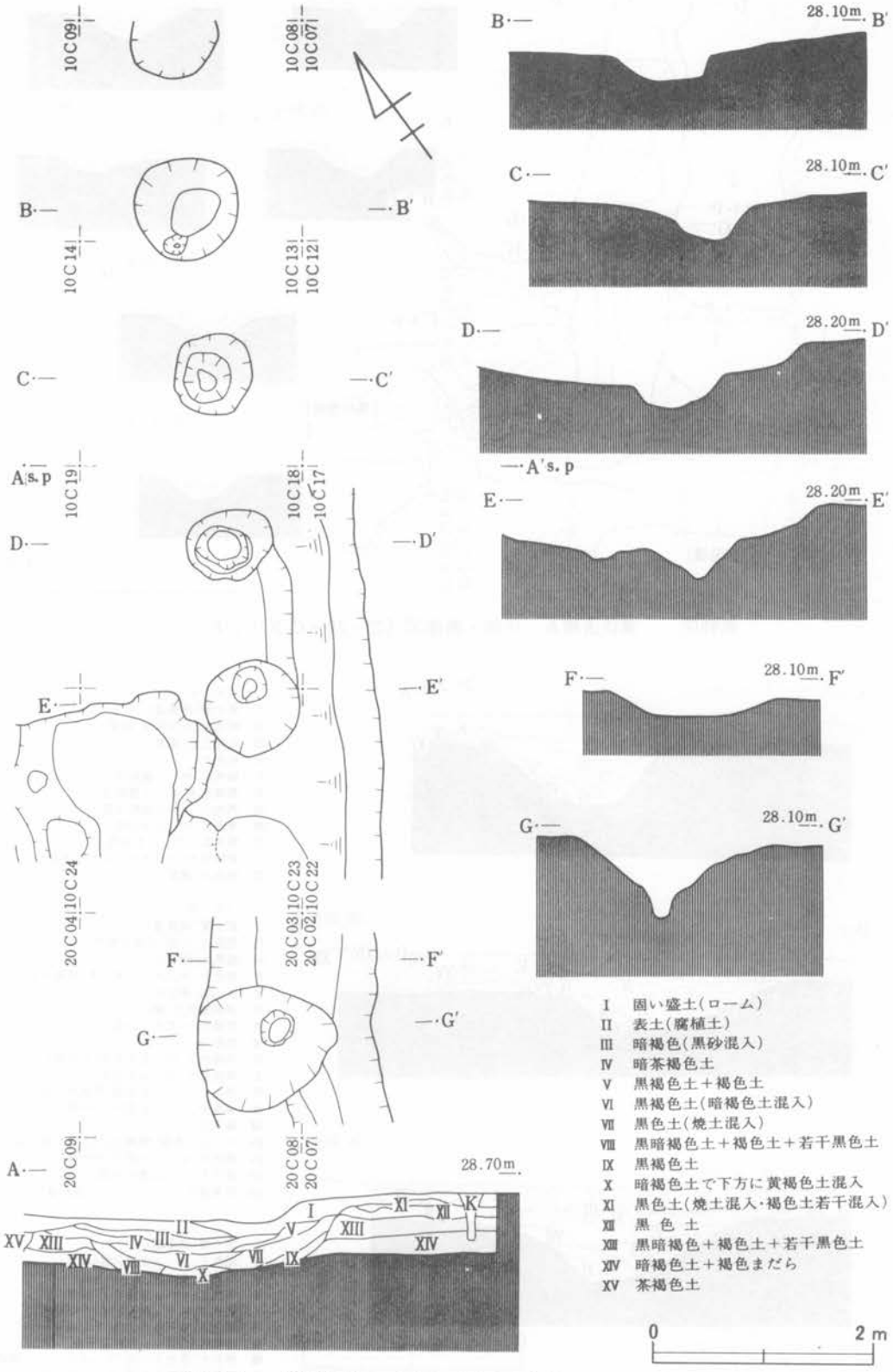
本区では溝の幅が広がり，溝西壁から溝低にかけての位置に，ほぼ等間隔でピットが検出された。また60C20グリットの溝東側には第4号土壙が検出された。(ただしし本溝によって第4号土壙は切られている）溝の計測値は，最大で上端2.3m,下端50cm，最小で上端1.7m,下端40cm，平均で上端2m前後，下端45cm前後である。深さは，ほぼ一定で40cm前後である。断面の形態は，西壁がゆるやかに立ち上がるのに対して東壁は，わずかながら立ち上がりが西壁よりも急である。溝低は，ほぼ平坦である。また，溝中のピットは，本区で6個検出されたが，全部西壁際に穿たれていた。ピットの平面形態は，円形を呈し，大きさは最大が上端径1.38m，下端径55cm，最小が上端径90cm，下端径50cmで，平均して上端径1.1m前後,下端径70cm前後を測る。ピットの深さ（溝低からの）は，浅い所で10cm,深い所で40cmであった。ピットの断面形態は，下端があまり明瞭でなくほぼすり鉢状を呈する，また各ピット間の距離は，ピットの中心から中心までで最長が1.75m，最短が1.4mで，平均して1.6m前後であった。また溝内に堆積した土を土層セクションで観察すると溝低には，ローム粒およびブロック混入黒褐色土が，その上に褐色粒混入暗褐色土，褐色土混入黒色土が堆積し最上部に焼土混入の黒色土が堆積していた。

50C区

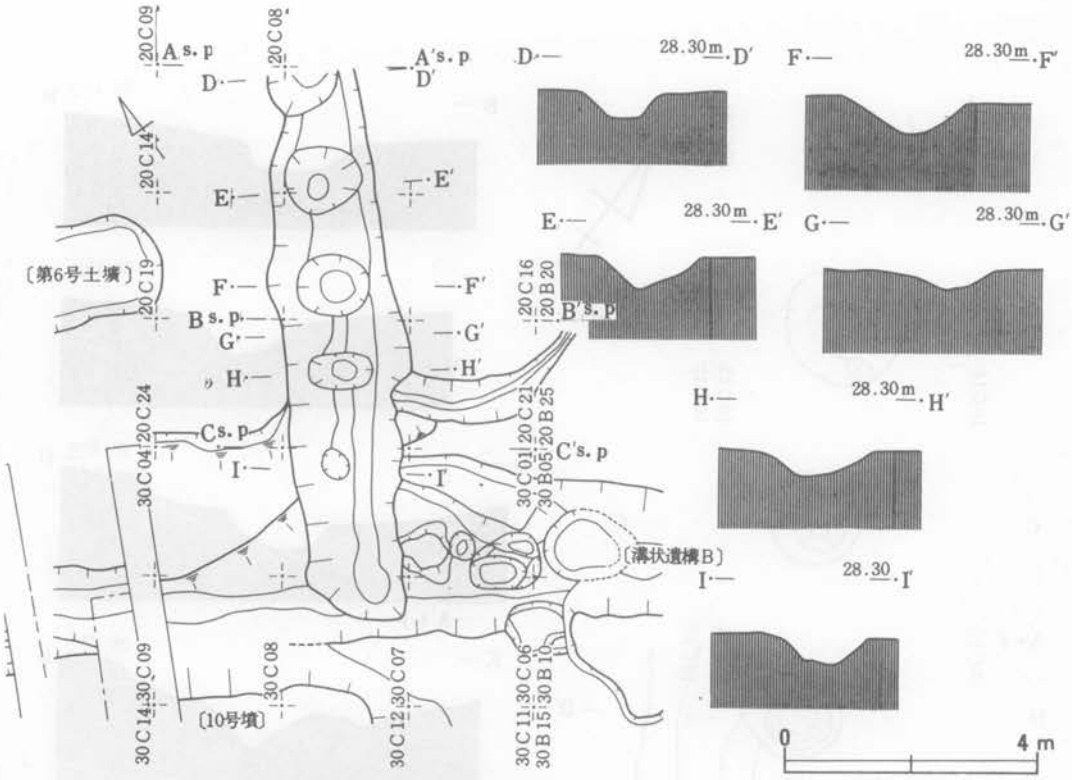
本区でも60C区と同様に溝の幅が広く，溝西壁から溝低にかけてピットが検出された。溝の計測値は，最大で上端2.16m，下端55cm，最小で上端1.16m，下端45cm，平均で上端1.6m前後,下端5　0cm前後である。深さは30cm前後である。断面の形態は，西壁がゆるやかに立ち上がり東壁は，わずかながら急である。溝低は，ほぼ平坦である。溝中のピットは，本区で5個検出されたが，位置は西壁際に穿たれているものと溝低に穿たれているものとがある。ピットの平面形態は，ほぼ円形を呈し，大きさは最大が上端径1.5m,下端径50cm，最小が上端径95cm，下端径45cmで平均して上端径1.3m前後,下端径45cm前後を測る。ピットの深さ（溝低からの）は，浅い所で15cm，深い所で20cmであった。ピットの断面形態は，下端があまり明瞭でなく，ほとんどがすり鉢状を呈する。またピット間の距離は，最長が1.75m，最短が1.5mで平均して1.6m前後であった。

10，20C区

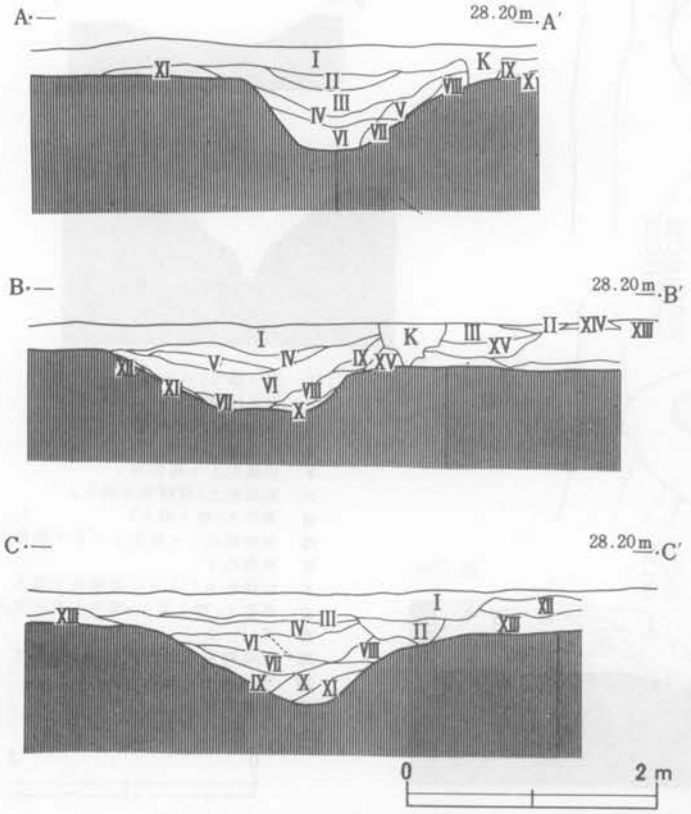
本区では，土層の攪乱などがあり明瞭な溝の検出ができなかったが，かろうじてピット



第97図　溝状遺構A　平面・断面図（（10・20－Cグリッド）



第98図　溝状遺構A　平面・断面図（20・30－Cグリッド）



〔A－A′〕
Ⅰ　表土層（現農道）
Ⅱ　褐色土、火山灰含、砂質、
Ⅲ　灰褐色土（硬質）
Ⅳ　褐色土、
Ⅴ　褐色土、ローム微粒若干、ローム土若干、
Ⅵ　黒褐色土、ローム微粒若干、
Ⅶ　黒色土、ローム微粒少混、
Ⅷ　黒色土、ローム土少混、
Ⅸ　褐色土、（ローム土少混）、
Ⅹ　黄褐色土（ソフトロームやや多混）
Ⅺ　褐色土（硬質）

〔B－B′〕
Ⅰ　表土層（現農道）
Ⅱ　黒色土（土塁、旧表土層か）
Ⅲ　褐色土（硬質）
Ⅳ　褐色土、火山灰やや多く含、淡褐色土を少量含む。
Ⅴ　火山灰（黒色砂）
Ⅵ　淡灰褐色土（硬）
Ⅶ　黒褐色土（黒色土少混）
Ⅷ　黒色土
Ⅸ　黒褐色土、ローム土若干（下方含む）
Ⅹ　黒褐色土（ローム土若干）
Ⅺ　褐色土（ローム土少混、黒色土少混）
Ⅻ　褐色土、ローム土若干（やや硬）
XIII　褐色土
XIV　ローム土多混、暗褐色土（土塁旧表土層）
XV　褐色土、ローム土若干（やや硬）
XVI　褐色土、ローム微粒少混、ローム土少混、
XVII　暗黄褐色土（ソフトローム漸移層）

〔C－C′〕
Ⅰ　表土層（現農道）
Ⅱ　褐色土、ローム土粒少混（硬質）
Ⅲ　褐色土、火山灰（黒色砂多混）
Ⅳ　褐色土、ローム微粒若干（硬質）
Ⅴ　褐色土、ローム微粒若干（やや硬質）
Ⅵ　褐色土、ローム土少混（やや硬質）
Ⅶ　濃褐色土、ローム微粒若干混
Ⅷ　褐色土、黒色土少混、ローム土、ローム微粒若干混
Ⅸ　褐色土、黒色土少混、ローム土少混、ローム微粒若干混
Ⅹ　黒色土、淡褐色土若干混
Ⅺ　褐色土、ローム微粒若干混
Ⅻ　黒色土（土塁旧表土）
XIII　褐色土、ローム土少混 ― ソフトローム漸移層

第99図　溝状遺構A　土層断面図（20・30－Cグリッド）

だけは，検出できた。10C08，13グリッドでは溝のプランは確認できずピットのみ検出した。10C17，18，10C22，23グリットでは，溝の東壁は確認できたが西壁は攪乱をうけており，明瞭には確認できなかった。20C02，03グリットでは完全な状態で溝およびピットを検出した。20C02，03グリッドでの溝の計測値は，上端1.5m，下端75cm，深さ20cmを測り，50，60C区に比べてやや平坦である。また溝中のピットは，本区で7個検出されたが，20C02，03グリッド検出のものを除いては，攪乱により上部は削られている可能性がある。20C02，03グリッドのピットの計測値は，上端1.25m，最短が1.3mで平均して1.5m前後であった。

20，30C区

本区では，再び溝の幅が広がり，溝低からはやはりピットが検出された。溝の計測値は，最大で上端1.98m，下端70cm，最小で上端1.4m，下端30cm，平均で上端1.6m前後，下端50cm前後である。深さは，30cm～40cmである。断面形態は，面壁よもゆるやかに立ち上がっている。溝低は，ほぼ平坦である。なお本区において溝は，10号墳前で台地を縦位に走行している溝状遺構Bと交差して終っている。溝中のピットは4個検出されたが，いづれも溝低に穿たれていた。ピットの平面形態は，ほぼ円形を呈し，大きさは，最大が上端径1.2m，下端径40cm，最小が上端径1m，下端径38cmで平均して上端径1.1m前後，下端径38cm前後を測る。ピットの深さ（溝低からの）は，35cm前後であった。ピットの断面形は，ほぼすり鉢状を呈する。またピット間の距離は，最長が1.7cm，最短が1.4mで平均して1.5m前後であった。

（鈴木）

（2）溝状遺構B（第103－110，ＰＬ29―(2)(3)～ＰＬ30）

本溝は，遺跡の所在する舌状台地を縦位に走行し，8号墳南側（40G区）から台地先端部（20，30L区）にかけて検出され，途中10号墳北東側裾部付近で台地を横位に走行する溝状遺構Aと交差している。検出された溝の全長は約100mを測る。なお本溝内からの出土遺物は皆無であったので時期および性格については不明である。以下，各区ごとに説明してゆきたい。

８号墳の形態を明らかにすることと，また土塁の性格の把握を目的として，道路境界外側の山林にトレンチを設定し調査したものである。まず，８号墳主体部南東側に１トレンチ（幅1.5m～2.0m，長さ8.7m）同じく南西側に２トレンチ（幅1.8m～1.9m，長さ7.3m）を設定し，その後１トレンチ側に幅0.9m～1.0m２トレンチ側に幅1.1mの土層断面観察のため土手を残しその内側を拡張した。

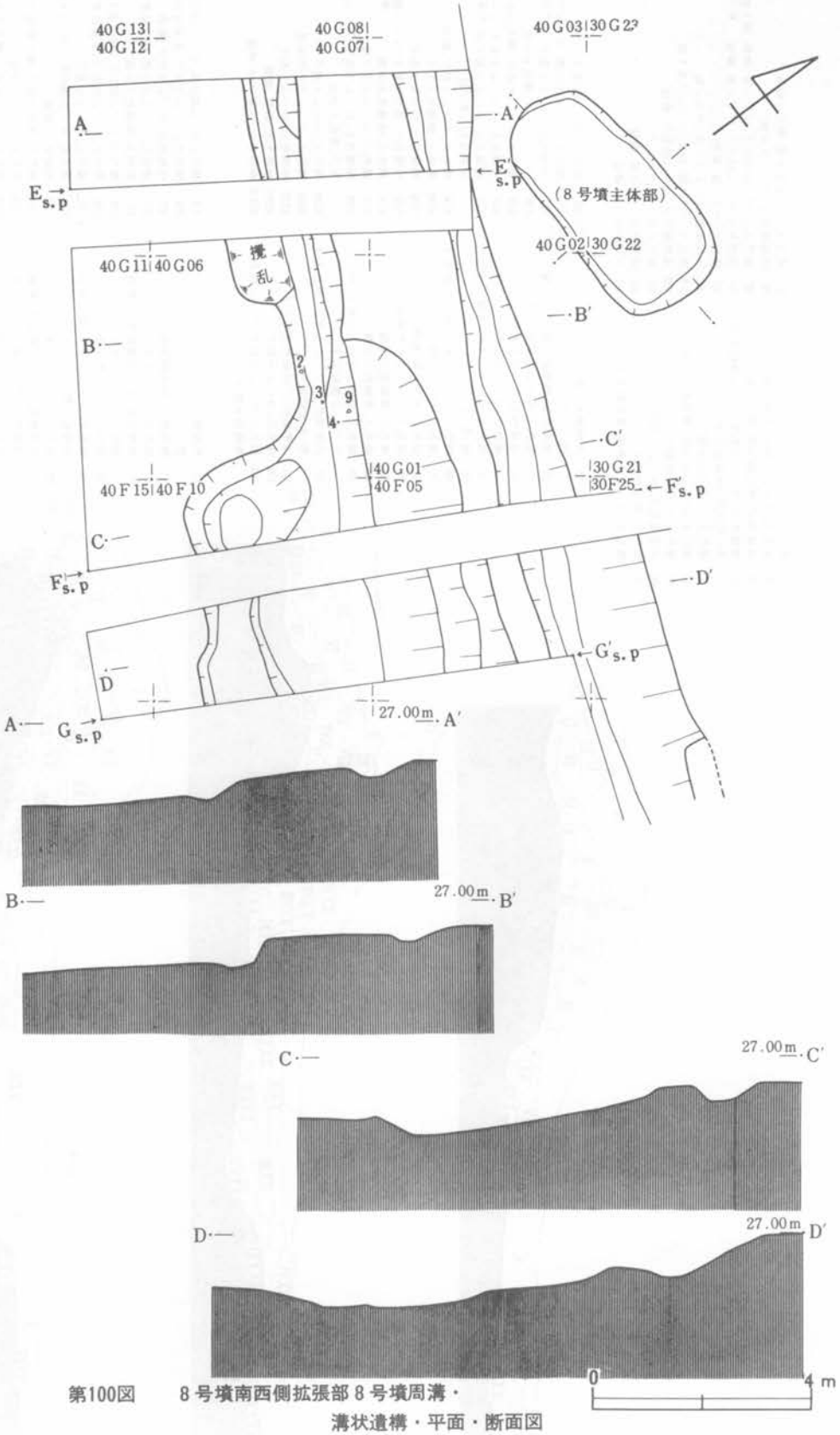
これらトレンチ及び拡張部から検出された遺構は，８号墳周溝の土塁及び土塁の内側と外側に検出された溝状遺構（B）である。

８号墳周構は，１トレンチ及び，１～２トレンチ間の拡張部に検出されたものであるが，土塁南側の溝状遺構によって切断されており，かつ地山整形によって南側立上りは不明である。北側（墳丘側）落込みラインをみると，周構は，くびれ部の部分で切断されており，８号墳前方部の規模を知るてがかりを得ることはできなかった。

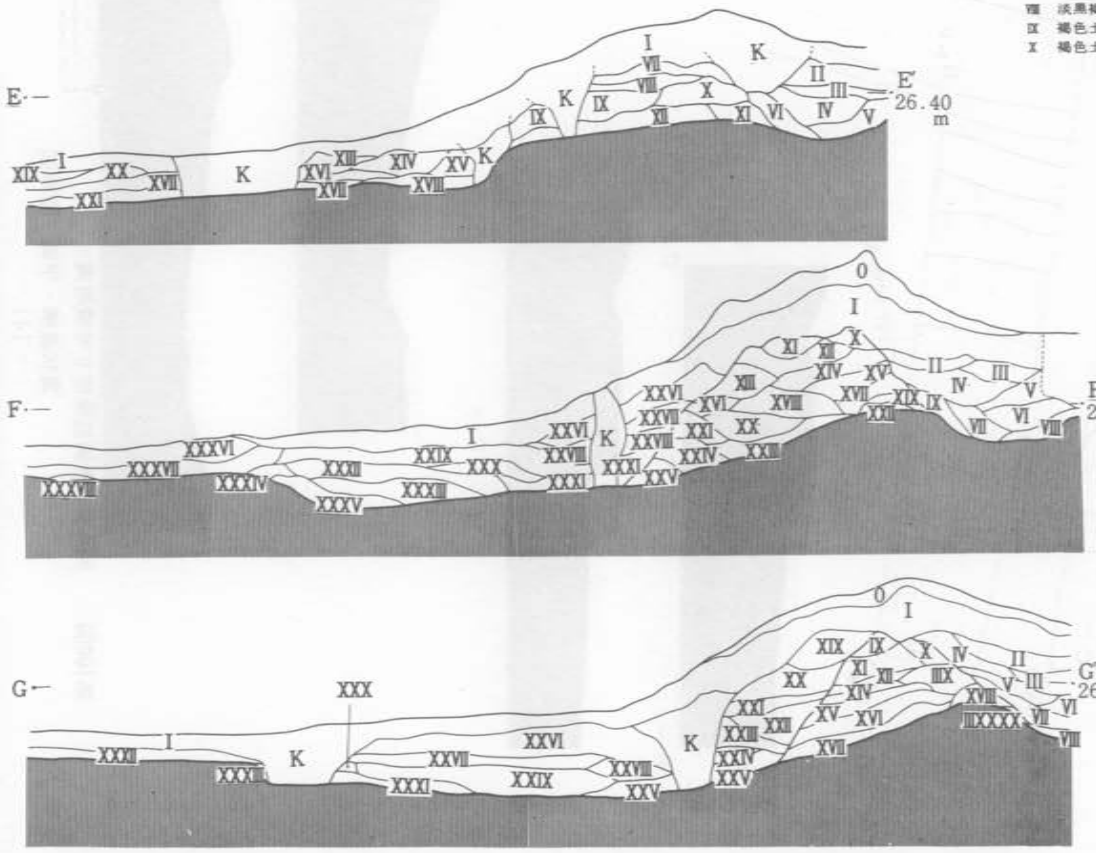
検出された周溝の深さは，１トレンチ，２トレンチとも約40cm前後を測る。周溝内堆積は，１トレンチにおいては，XVI，XVII層を墳丘側よりの流入土と考えられるが，１トレンチ～２トレンチ間拡張部においては，流入堆積と考えるにはやや不自然さが認められる。周溝内からの遺物の出土は皆無であった。

８号墳墳丘南裾を北西―南方向に走行するが土塁は，調査区域内では良好な状態をとどめる。箇所がなく本拡張部において調査した。調査前において土塁とみなされるものは現地表面との比高差が約30cm前後のきわめて低平なものであった。調査の結果，基底部2.0m～2.5mを測り，約50～65cmの高さまで盛土されていた。したがって土塁構築当初は，１m以上の高さを有していたものと考えられる。土塁は，８号墳墳丘を切断して構築されているが，土塁構築に際して２トレンチ側では８号墳墳丘を利用したとは考えられず，むしろその周囲を削平，整形し，盛土したものと考えられる。１トレンチ～２トレンチ間拡張部では，墳丘から周溝にかけて土塁が構築されているが，周溝にかかる部分では周溝内堆積土をも除去し盛土したものかと考えられ，自然的な流入堆積土と考えるにはやや疑問がある。１トレンチ側では，ほとんどが周溝に構築されるが，他の部分とは盛土方法が異なる点が注意され，XVI，XVII層等は周溝内堆積土かとも考えられる。

土塁構築は，褐色土を主体として盛土しており，ローム土あるいはロームブロックを多量に含む土層は使用していない。盛土は２トレンチ側では，水平的な盛土方法がなされ，１トレンチ～２トレンチ間拡張部では中心に向って交互に積み重ね，上部で水平になるよう盛土される。１トレンチ側では，北側から南側に傾斜しつつ積み重ね上部に向って，そ



第100図　8号墳南西側拡張部8号墳周溝・溝状遺構・平面・断面図



I 表　土
II 褐色土、ローム土若干、ザラメ質
III 暗褐色土、黒色砂少混、ザラメ質
IV 濃褐色土、ローム土若干、ローム微粒若干
焼土粒若干、木炭粒若干
V 褐色土、ローム土少混
VI 褐色土、ローム土若干、黒褐色土少混
VII 褐色土、ローム土若干
VIII 淡黒褐色土、ローム土若干
IX 褐色土、焼土粒若干
X 褐色土、ローム土多混、焼土粒若干
XI 褐色土、ローム土少混、黒色土粒若干
XII 淡暗褐色土、ローム土少混
XIII 褐色土、ローム粒若干、ザラメ質、軟弱、焼土粒若干
XIV 淡褐色土、ローム粒若干、ザラメ質、硬質
XV 褐色土、ザラメ質、軟弱
XVI 淡暗褐色、ローム土少混、ザラメ質
XVII 褐色土、ザラメ質、砂質、ローム土若干混
XVIII 淡黒褐色土、ローム粒若干、軟弱
XIX 表土＋ローム・ブロック
XX 淡褐色土、ザラメ質、硬質
XXI ソフトローム、硬質

O 再堆積土－排土
I 表　土
II 暗褐色土、黒色砂少混、ザラメ質
III 褐色土、ローム土少混
IV 暗褐色土、ローム土若干
V 褐色土、ローム土少混
VI 褐色土、ローム土少混、V層に近似
VII 褐色土
VIII 褐色土、ローム土若干、ローム粒若干
IX 褐色土、ローム土若干
X 褐色土、ザラメ質、軟弱
XI 褐色土、ローム土やや多混
XII 褐色土、黒褐色土少混
XIII 褐色土、黒褐色土少混
XIV 褐色土、ロームブロック若干、ローム土、ローム微粒若干
XV 淡黒褐色土、ローム土若干、黒色土少混、木炭粒若干
XVI 淡黒褐色土、淡褐色土若干
XVII 褐色土、ローム土若干
XVIII 褐色土、ローム土若干、ローム粒若干
黒褐色土若干
XIX 褐色土、ローム土若干
XX 褐色土、ローム土少混、ロームブロック若干
XXI 淡褐色土、ローム土若干
XXII ソフトローム、褐色土少混
XXIII 褐色土、ローム土若干、黒色土少混
XXIV 淡黒褐色土、ローム土若干、ローム粒若干
XXV 暗褐色土、ローム土若干混
淡黒褐色土若干混
XXVI 褐色土、ローム土若干、軟弱
XXVII 黒色土、暗褐色土若干
XXVIII 暗褐色土、ローム土若干
XXIX 暗褐色土、黒色土若干、ローム微粒若干
XXX 黒色土、暗褐色土少混
XXXI 褐色土、ローム土若干混
XXXII 暗褐色土、ローム土若干、ローム粒若干、黒色土少混
XXXIII 黒色土、ローム土若干
XXXIV 褐色土、ローム土やや多混
XXXV 暗褐色土、ローム土若干
XXXVI 暗褐色土、砂質、硬質
XXXVII 暗褐色土、砂質、やや硬質

O 再堆積土
I 表　土
II 暗褐色土、黒色砂少混
III 褐色土、ローム土若干
IV 暗褐色土、ローム微粒若干、軟弱
V 褐色土 ローム土若干
VI 褐色土、ローム土少混
VII 褐色土、ローム土若干、焼土粒若干、暗褐色土若干
VIII 褐色土、ローム土少混
IX 淡暗褐色土、ローム粒若干、軟弱
X 暗褐色土、ザラメ質、ローム土若干
XI 褐色土、ローム土少混
XII 黒色土、褐色土少混、ローム微粒若干
XIII 褐色土、黒褐色土少混、ローム土若干
XIV 褐色土、ローム土若干
XV 黒色土、褐色土少混、ローム微粒少混
XVI 褐色土、ローム土少混
XVII 褐色土、ローム粒少混、ローム土若干
XVIII 褐色土、ローム土若干、木炭粒若干
XIX 暗褐色土、ローム土若干、軟弱
XX 褐色土、ローム土少混、焼土粒若干
XXI 黒色土、暗褐色土少混
XXII 褐色土、ローム粒若干、黒色土若干混
XXIII 黒色土、ローム粒若干、木炭粒若干
XXIV 褐色土、ローム土若干
XXV 褐色土、ローム微粒若干、ローム土若干
XXVI 暗褐色土、軟弱
XXVII 褐色土、黒色土若干、焼土粒若干
XXVIII 褐色土、ローム土少混
XXIX 黒色土、ローム粒若干、褐色土少混
XXX 褐　色　土
XXXI 褐色土、ロームブロック若干含む
XXXII 暗褐色土、ローム土若干、砂質、軟弱
XXXIII ソフトローム

0　2 m

第101図　8号墳南西側拡張部土層断面図

の傾斜度を弱めながら水平になるよう盛土される。これらの盛土方法をみると，土塁構築にあたって普遍的な方法は用いられてないようであり，盛土も比較的軟質なものが多く，さほど堅固な土塁ではなかったものであろう。

また，土塁両側には，浅い溝状遺構が配されており，土塁構築時に開鑿されたものと考えられる。この溝状遺構は，調査区域内で検出された溝状遺構Ｂと呼称したものと同一の遺構であるが，土塁南側のそれは調査区域内まで延びているものか不明である。

土塁北側の溝状遺構は，１トレンチ側でほぼ原状を窺い知ることができ，幅約2.1m，深さ約40cmを測り，横断面は，「U」字状ないしは逆梯形状を呈する。底面，あるいは側壁は軟弱である。この溝状遺構に伴う施設は何ら検出されなかった。

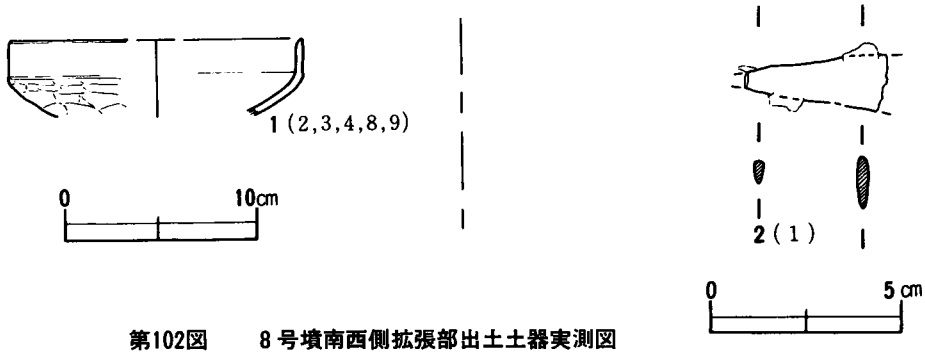
土塁南側の溝状遺構は，１トレンチ～２トレンチ間拡張部中央付近から１トレンチに向って大きく広がり3.4m前後を測る。２トレンチ側では，幅約0.8m前後を測る。深さは，２トレンチ及び１トレンチ～２トレンチ間拡張部西寄では40cm～50cm，同東寄から１トレンチ側では，70cm～80cmを測る。しかし，この計測値は，土塁基底面を基準としたもので，溝状遺構南側は，地山整形が施されており，土塁基底面より20cm～50cm程低くなっているため南側からみれば浅いものとなる。この溝状遺構に伴う施設は何ら検出されなかった。

土塁南側の溝状遺構の１トレンチ～２トレンチ間拡張部における覆土中より，土師器，坏形土器が，また表土中より鉄製品が出土している。土師器，坏形土器は，土塁あるいは溝状遺構に伴うとは考えられず，むしろ８号墳に伴うものと考えられる。

出土遺物（１，２）（第102図）

１　土師器，坏形土器である。現存器高4.0cm推定口径15.2cmを測る。底部を欠損するが，丸底を呈するものと思われ，体部は若干内湾気味に立ち上る。口縁部はほぼ直立し，体部

８号墳南西側拡張部検出遺構　（第101.102図）



第102図　８号墳南西側拡張部出土土器実測図

との境に僅かながら稜を形成する。口唇部内面は内傾している。胎土は若干砂質で色調は褐色を呈する。整形は，外面体部が横位のへら削りを施す。このへら削りは，底部に近づくにつれ粗く，口縁部側では細くなる。口縁部はへら磨きが施される。

2　用途不明の鉄製品で，刀子様の形態を窺わせる。

現存長3.7cm，最大幅1.5cm，最小幅0.4cmを測る。最大幅より最小幅まで漸次せばまり，関等は見出せず，現状では明確な刃部等も見出せない。断面は，最大幅寄りが楕円形を呈し，下端がやや鋭くなっており，あるいは刃部に近いものかとも思われる。最小幅では，三角形状に近く，上面はやや平坦となっている。土塁，溝状遺構，あるいは古墳に伴うものかどうか不明である。

（矢戸）

40G区（8号墳墳丘南側裾部）

本区では，8号墳墳丘の南側裾部を切って検出された。溝の幅は狭く最大で上端1.4m，下端56cm，最小で上端68cm，下端32cm，深さ約30cmを測る。溝底は平坦で断面の形態は逆台形に近い状態を呈している。

30E区

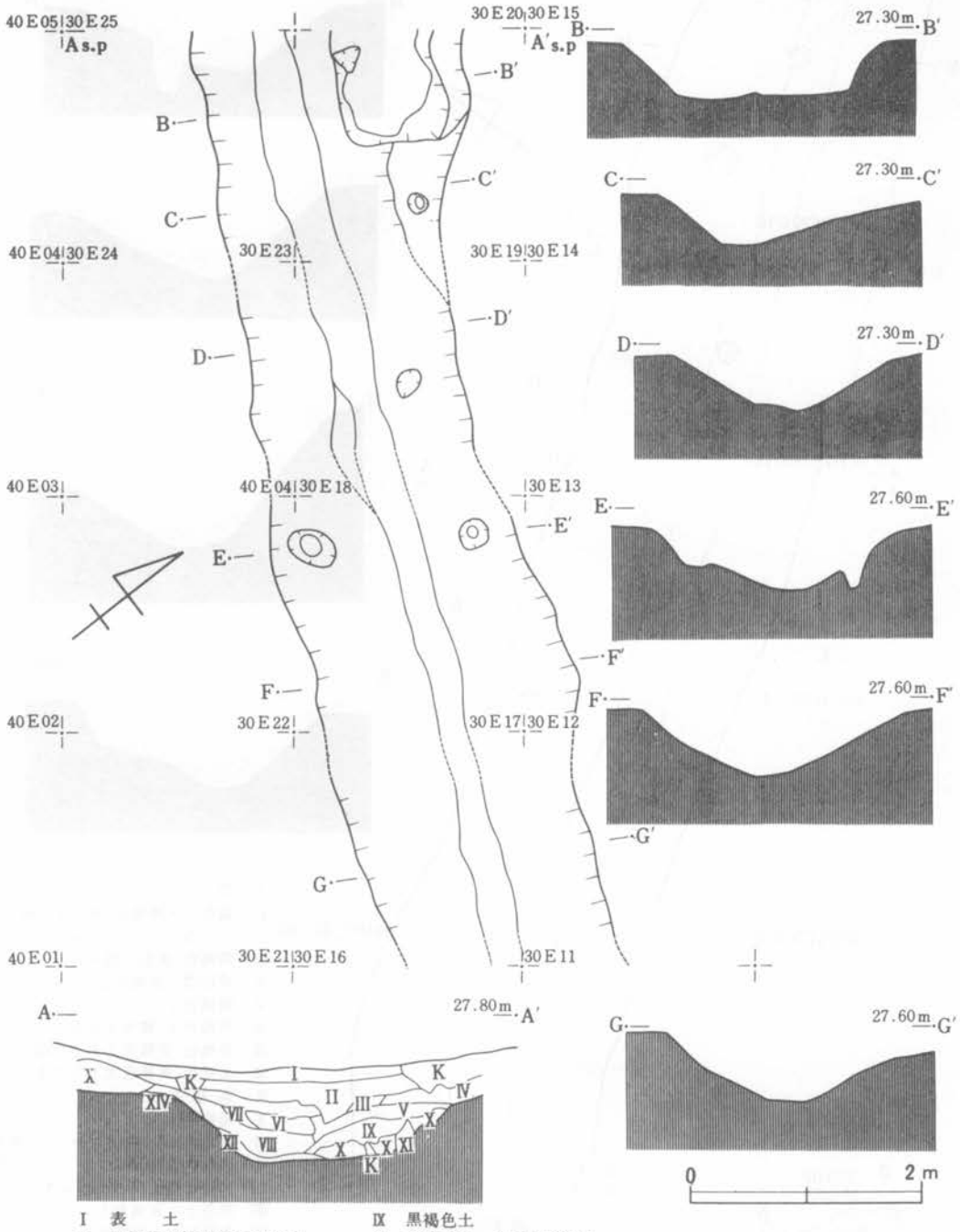
本区において溝は，やや幅が広がり最大で上端2.25m，下端30cm，最小で上端1.8m，下端30cmで，平均して上端1.8m前後，下端30cm前後である。深さは42～50cmである。溝底は，ほぼ平坦で断面の形態は両壁ともゆるやかな立ち上がりを示している。

30D区（10号墳墳丘北東側裾部）

本区と30C区は，10号墳墳丘北東側裾部を切って走行している。溝の幅は，30E区とほぼ同じくらいの規模で，最大で上端2.2m，下端46cm，最小で上端1.9m，下端42mで，平均して上端2m前後，下端40cm前後である。深さは50～70cmとやや深くなる。溝底は，明瞭な平坦面がなくなり，すり鉢状に近い状態を呈し，南壁に比べて北壁の方がややゆるやかな立ち上がりを示していた。

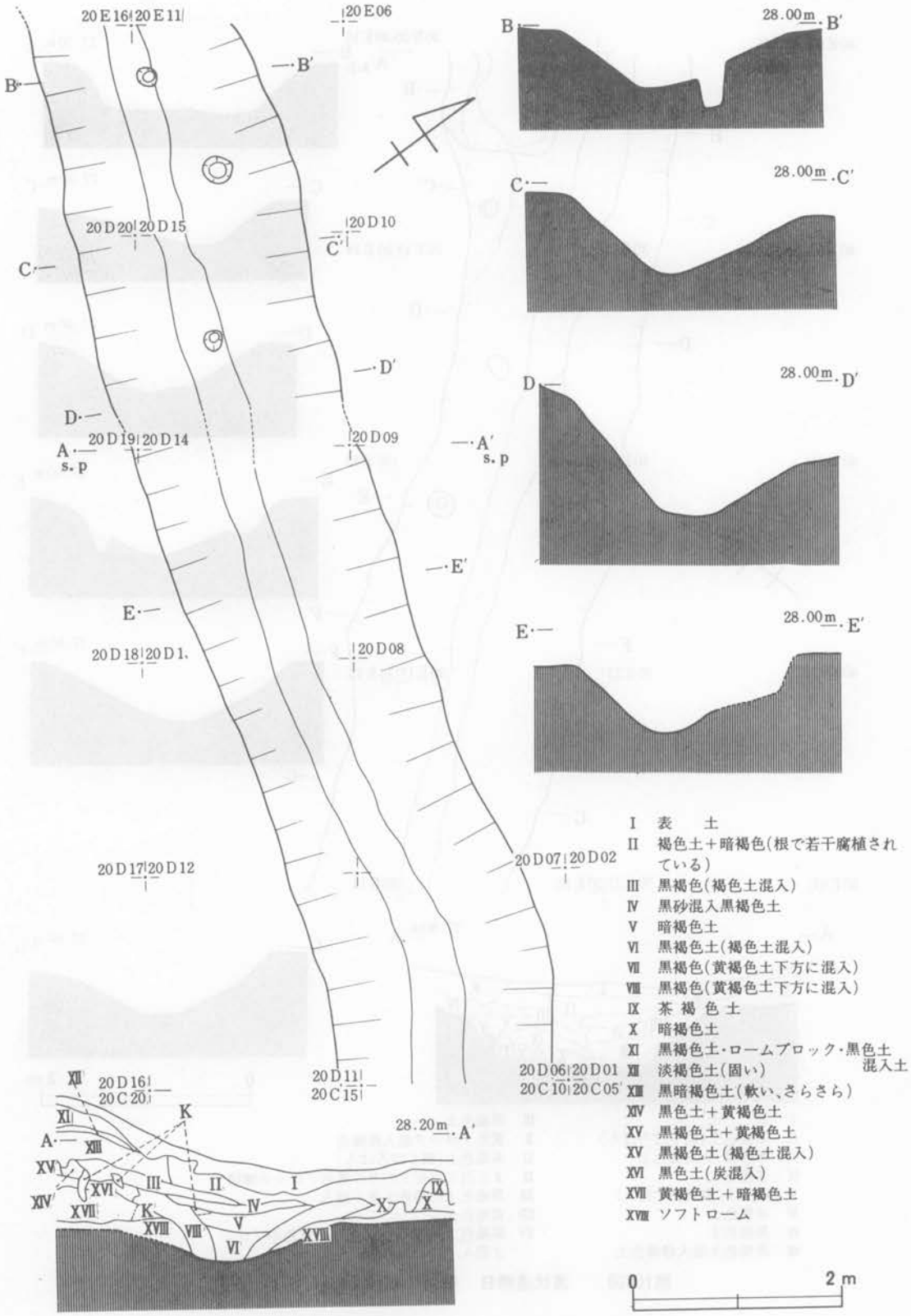
30C区（10号墳墳丘北東側裾部）

本区で溝は，台地を横位に走行している溝状遺構Aと交差している。交差部分付近の溝の北壁は外側に大きく広がり，また溝状遺構Aが本溝を切って構築されている。溝底は，凹凸がはげしく明瞭ではなかった。30C06グリットでの溝の上端は約2.6mを測る。



I　表　土
II　茶褐色土(固くぼろぼろ)
III　黒砂混入、黒褐色土
IV　茶褐色土
V　褐色土(黒褐色土混入)
VI　淡褐色土
VII　黒褐色土
VIII　黒褐色土混入暗褐色土
IX　黒褐色土
X　黄色ブロック混入暗褐色
XI　茶褐色土(固くぼろぼろ)
XII　Xと同じだが下の方に黄色ブロック堆積
XIII　黒褐色土に褐色土多く混入
XIV　黄褐色土
XV　黒褐色土+褐色土(まだら)、黄色小ブロック混入

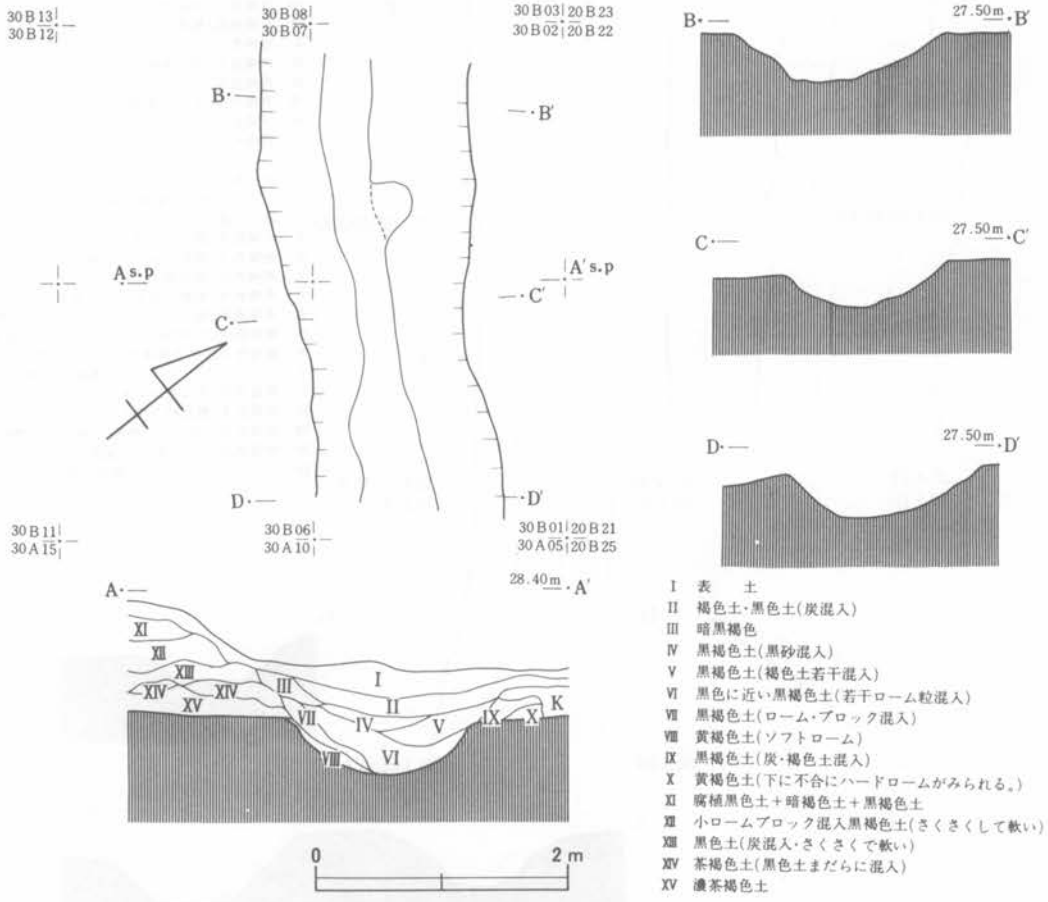
第103図　溝状遺構B　平面・断面図　(Eグリッド)



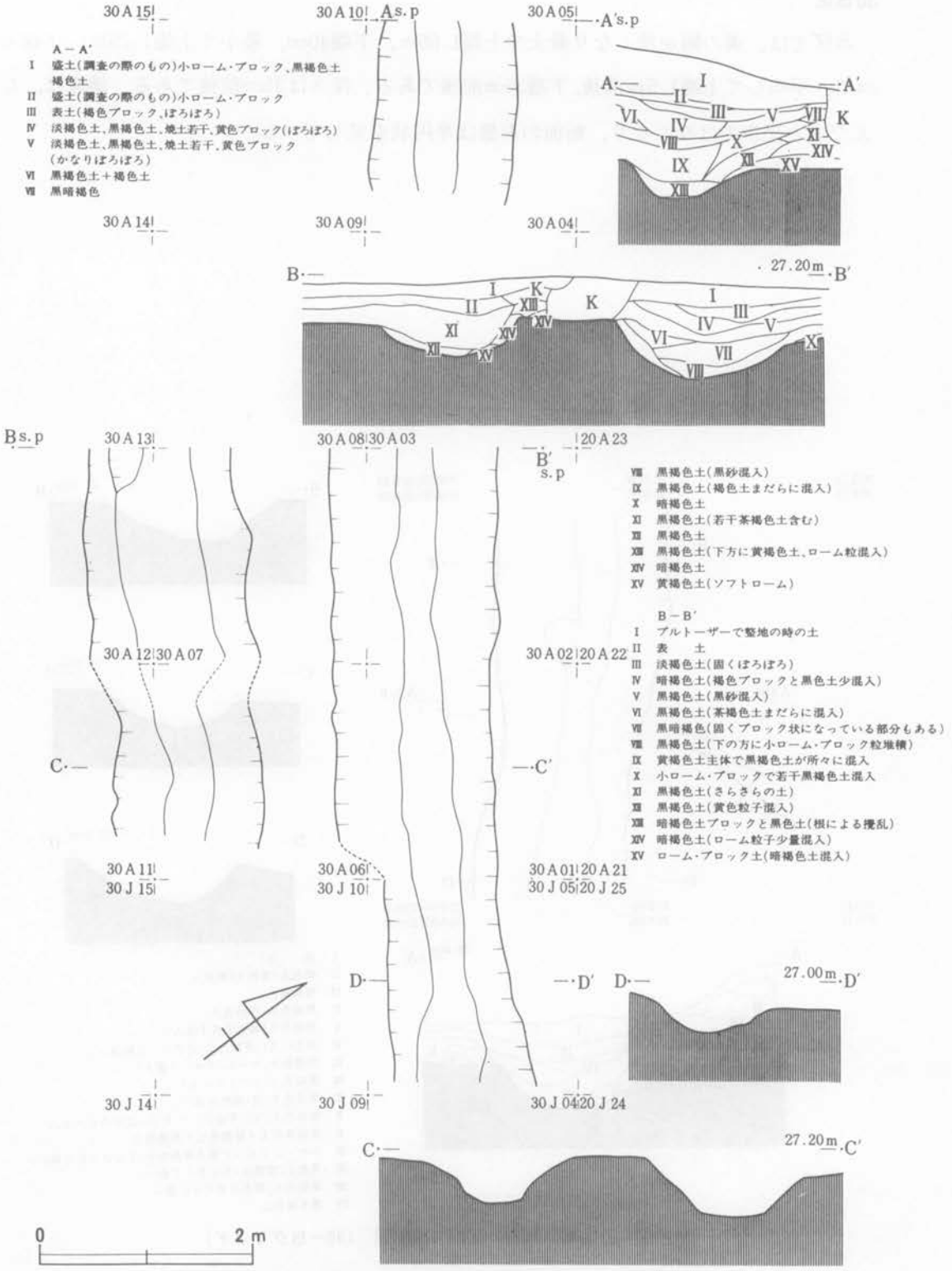
第104図　溝状遺構B　平面・断面図（Dグリッド）

30B区

本区では，溝の幅が狭くなり最大で上端1.65m，下端40cm，最小で上端1.25m，下端30cmで，平均して上端1.5m前後，下端35cm前後である。深さは35cm前後である。溝底は，だんだんと平坦ではなくなり，断面の形態は半円状を呈している。



第105図　溝状遺構B　平面・断面図（30－Bグリッド）



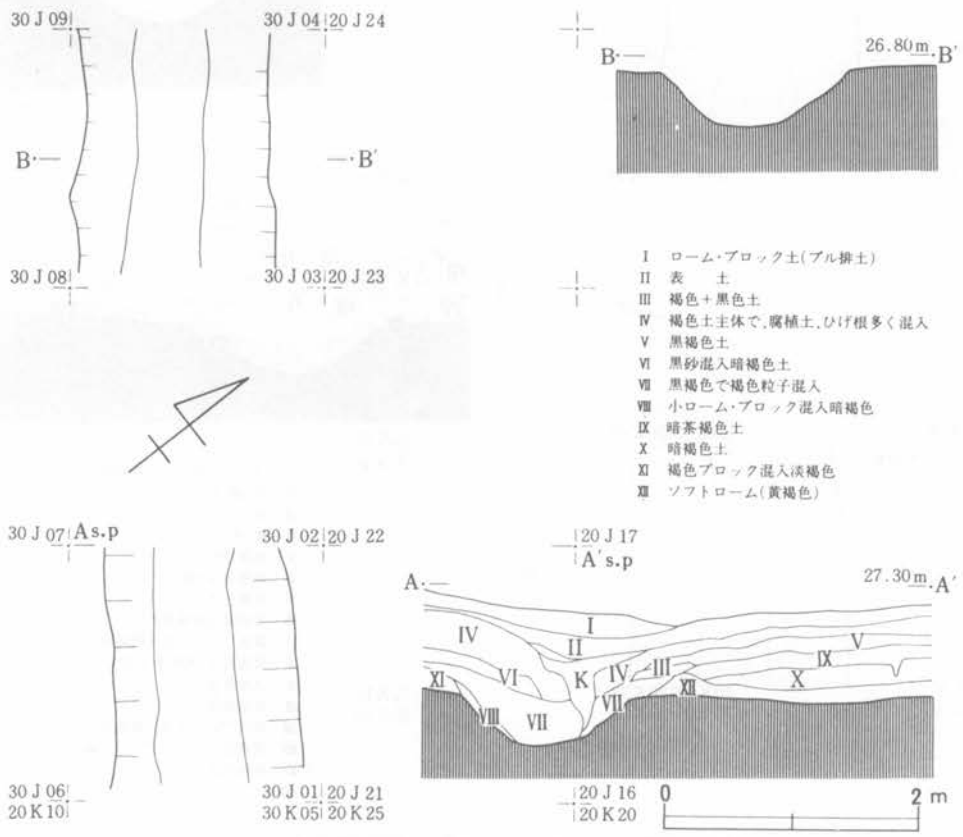
第106図　溝状遺構B　平面・断面図（20・30－A・Jグリッド）

30A区

本区では溝は，幅がさらに狭くなり，最大で上端1.56m，下端35cm，最小で1.33m，下端40cmで，平均して上端1.5cm前後，下端35cm前後である。深さは30～45cmである。溝底は一定せず平坦な部分と断面が半円状を呈する部分とがあり，両壁の立ち上がりはゆるやかである。また30A07，12，30A06，11グリットで本溝の南側に平行してもう1本溝が検出されている。この溝は30B区でも本溝から分岐するような状態で検出されておりその延長の溝と考えられる。溝内からの出土遺物が皆無なので時期，性格は不明である。なお溝の幅は上端1.5m前後，下端40～80cmである。

20，30J区

30J05グリッドでは，溝の南側に攪乱部分があり検出面が低く，溝の上端が狭くなっているが下端35cm前後で30A区とほぼ同じなので，本来上端も30A区と同じぐらいあったと思われる。断面の形態は，ほぼ半円状を呈している。



第107図　溝状遺構B　平面・断面図（20・30－Jグリッド）

30Ｊ01グリッドでは，溝の幅は上端1.5ｍ，下端60cmとほぼ一定で，深さは40cmである。断面の形態は，半円状を呈している。

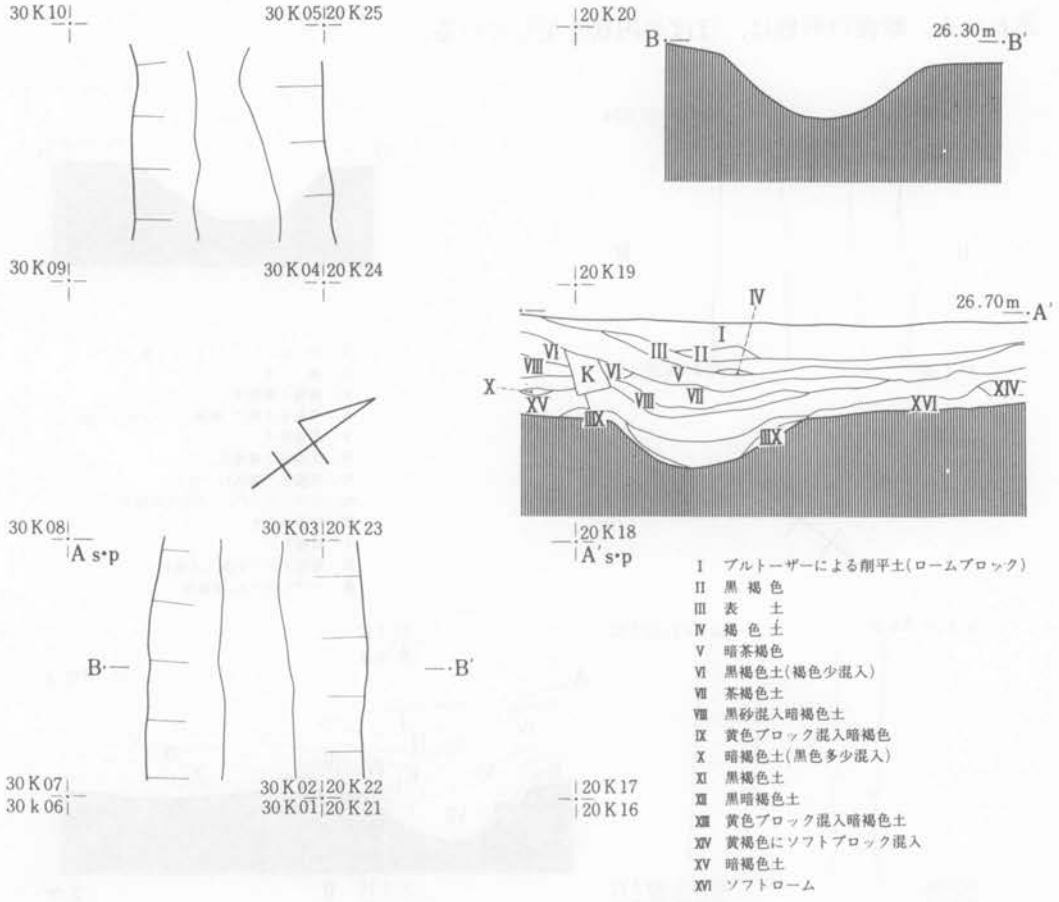
20，30Ｋ区

20Ｋ24，30Ｋ04グリッドでは，溝の幅は上端1.5ｍ，下端35～70cmで，深さは40cmである。断面の形態は，半円状を呈している。

20Ｋ22，30Ｋ02グリッドでは，溝の幅は上端1.7ｍ，下端50cmでやや広くなり，深さは35～45cmである。断面の形態は，半円状を呈し，両壁の立ち上がりもさらにゆるやかになる。

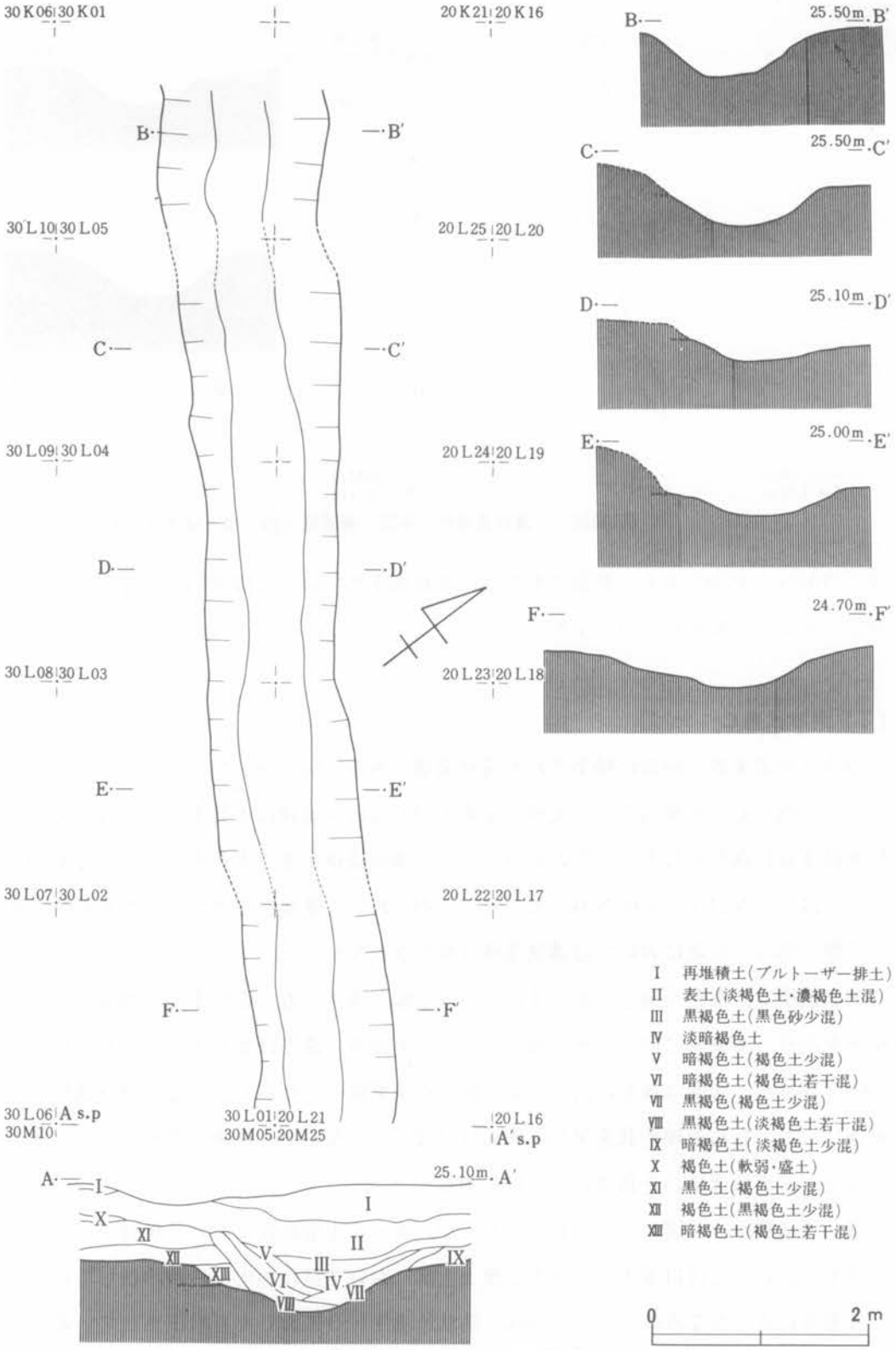
20，30Ｌ区

本区で検出した溝は，台地先端部傾斜面に位置している。溝の幅は，最大で上端1.5ｍ，下端50cm，最小で上端1.15ｍ，下部50cmで，平均して上端1.3ｍ前後，下端50cm前後である。

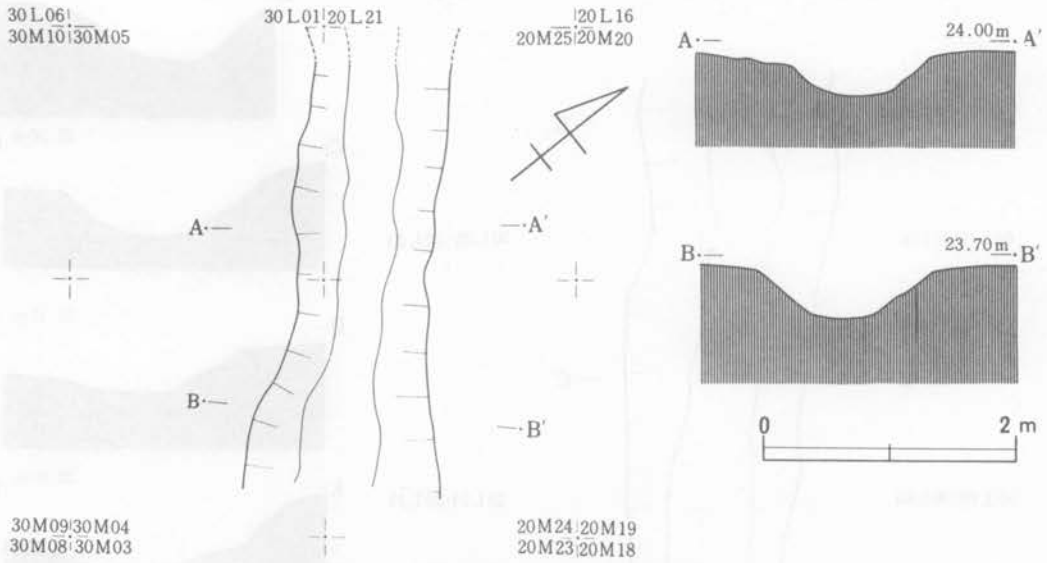


第108図　溝状遺構Ｂ　平面・断面図（20・30－Ｋグリッド）

0　2ｍ



第109図　溝状遺構B　平面・断面図（20・30－Lグリッド）



第110図　溝状遺構B　平面・断面図（20・30－Mグリッド）

深さは35cm～45cmである。断面の形態は，傾斜面上部では，ほぼ半円状を呈し，下部では両壁ともごくゆるやかに立ち上がっている。

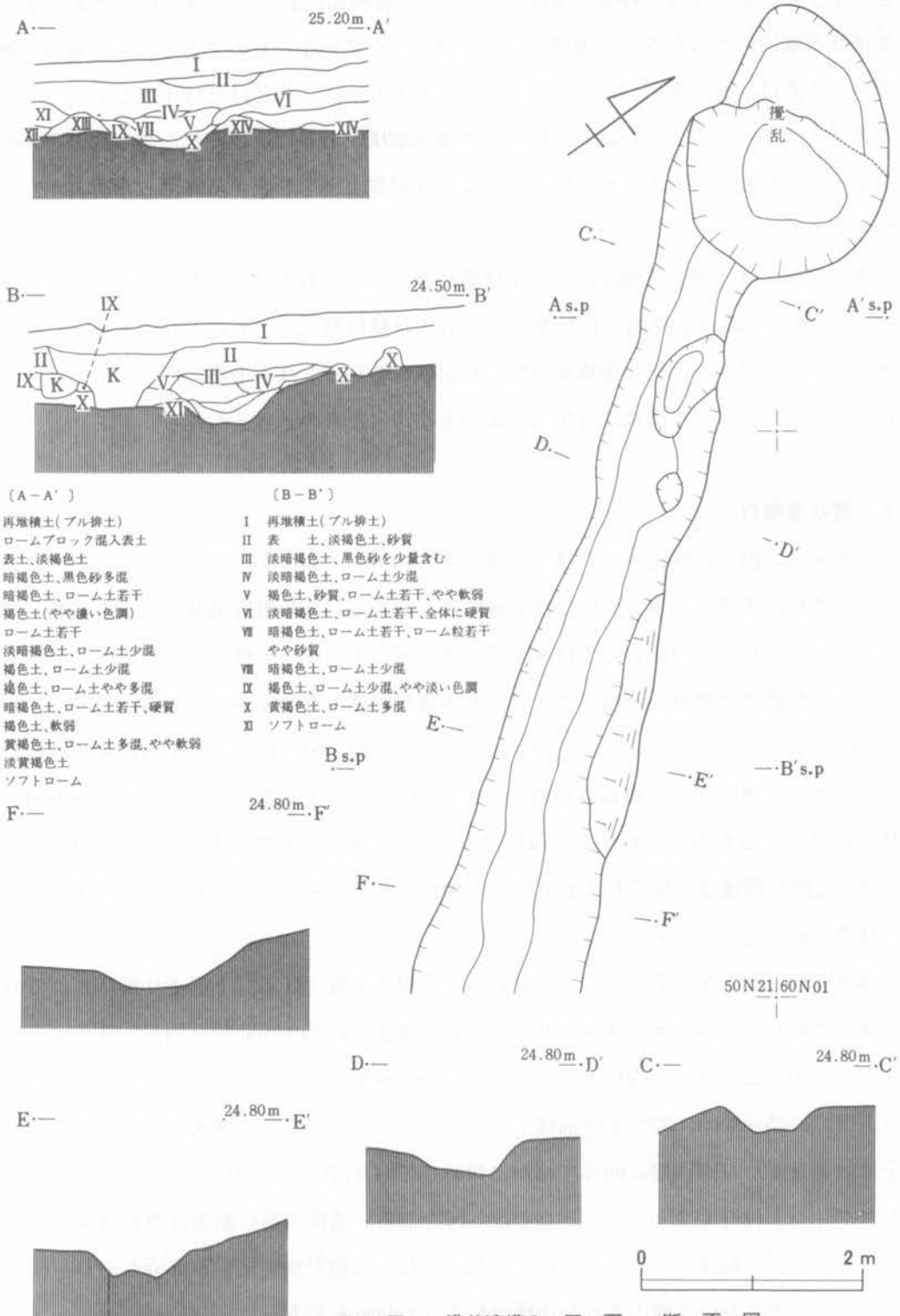
（鈴木）

（3）溝状遺構C

調査区域南東側の斜面に構築された溝状遺構である。50N16・17・21～25・60N04・05グリッド内において検出され，北西―南東方向にほぼ一直線に走行する。50Nグリッド以南は支谷に落ち込むものと思われるが，この溝状遺構がどこを起点としているものかについては，50N24・25・60N04，05グリッド内において攪乱を受けているため不明である。この攪乱部分の以北においては溝状遺構は検出されなかった。

溝状遺構は，褐色土層より掘込まれているが幅・深さとも一定せず，以西側で幅が狭く82cmを測り，南東側に向って漸次幅広く152cmを測る。深さはまちまちであり，約17cm～30cmを測るが，底面は地形に沿って北西側から南東側へと傾斜している。溝状遺構の横断面は，おおむね逆梯形状を呈し，底面はほぼ平坦となるが，中央がやや高くなる個所も見出せる。溝状遺構の全長は約6.83mを測る。

溝状遺構覆土は，図示したとおりであるが，A―A'土層断面においてⅣ層中に，B―B'土層断面においてはⅢ層中に，ともに覆土上部において黒色の火山砂が堆積していることが注意される。ちなみにこの火山砂は，溝状遺構A・Bにおいても検出されている。また，A―A土層断面におけるⅩ層は，かなり硬質でありあたかも踏み固められたかのような状



〔A－A′〕

Ⅰ 再堆積土(ブル排土)
Ⅱ ロームブロック混入表土
Ⅲ 表土、淡褐色土
Ⅳ 暗褐色土、黒色砂多混
Ⅴ 暗褐色土、ローム土若干
Ⅵ 褐色土(やや濃い色調)
ローム土若干
Ⅶ 淡暗褐色土、ローム土少混
Ⅷ 褐色土、ローム土少混
Ⅸ 褐色土、ローム土やや多混
Ⅹ 暗褐色土、ローム土若干、硬質
Ⅺ 褐色土、軟弱
Ⅻ 黄褐色土、ローム土多混、やや軟弱
XIII 淡黄褐色土
XIV ソフトローム

〔B－B′〕

Ⅰ 再堆積土(ブル排土)
Ⅱ 表　土、淡褐色土、砂質
Ⅲ 淡暗褐色土、黒色砂を少量含む
Ⅳ 淡暗褐色土、ローム土少混
Ⅴ 褐色土、砂質、ローム土若干、やや軟弱
Ⅵ 淡暗褐色土、ローム土若干、全体に硬質
Ⅶ 暗褐色土、ローム土若干、ローム粒若干
やや砂質
Ⅷ 暗褐色土、ローム土少混
Ⅸ 褐色土、ローム土少混、やや淡い色調
Ⅹ 黄褐色土、ローム土多混
Ⅺ ソフトローム

第111図　溝状遺構C　平　面・断　面　図

態を呈する。このような硬質土層は，B－B′土層断面においてⅥ層に見出されており，本溝状遺構内にのみ存在し，遺構内にまでは広がっていないものである。この硬質土層面のレベル差は，A－A′・B－B′間で約26cmを測るが，この差はほぼ平坦なものと見做して差支えのないものと思われる。即ち，本溝状遺構がある程度埋没した時期（若干の傾斜をなしていたものであろうが）に，このような硬質土層を形状するに至った行為がなされたものであろう。

本遺構からは，何ら遺物は出土せず構築時期は不明であるが，少なくともA－A′・B－B′土層断面において見出された黒色火山砂の堆積時期以前のものとしてとらえられる。また，50N23グリット内の遺構東壁側に検出されたピットは本遺構に伴うものとは考えられない。したがって本遺構には何らの施設もなかったものと考えられる。

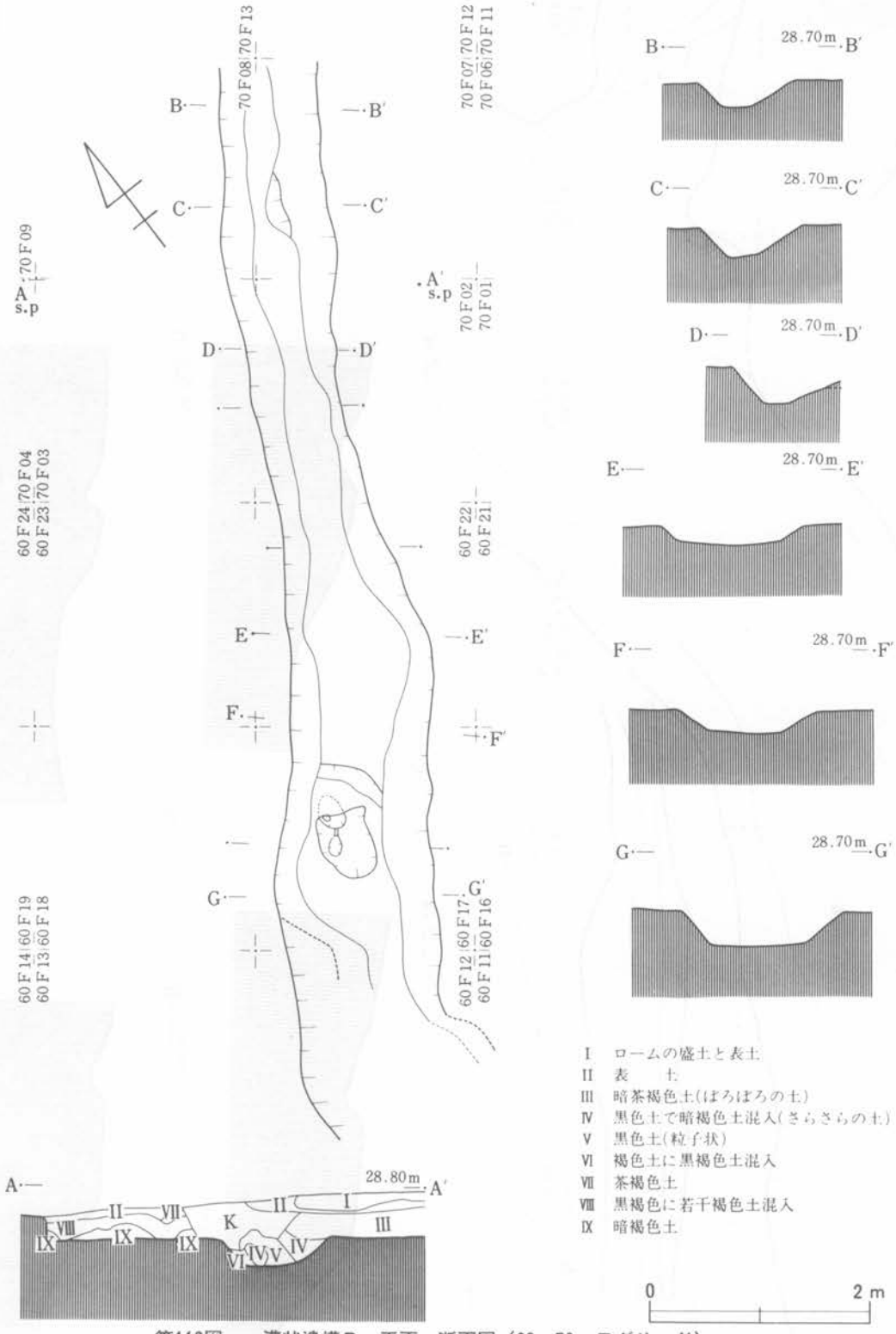
(4) 溝状遺構D

調査区域北西側に検出された溝状遺構である10・20・50・60・70－Fグリット内において検出され，南西－北東方向にほぼ直線的に走行する。9号墳周溝及び墳丘を切断しており，20－Fグリット内においては8号墳と9号墳の中間に一部検出し得たが，8号墳墳丘内では古墳調査の際墳丘が削平されており本溝状遺溝の有無は不明である。

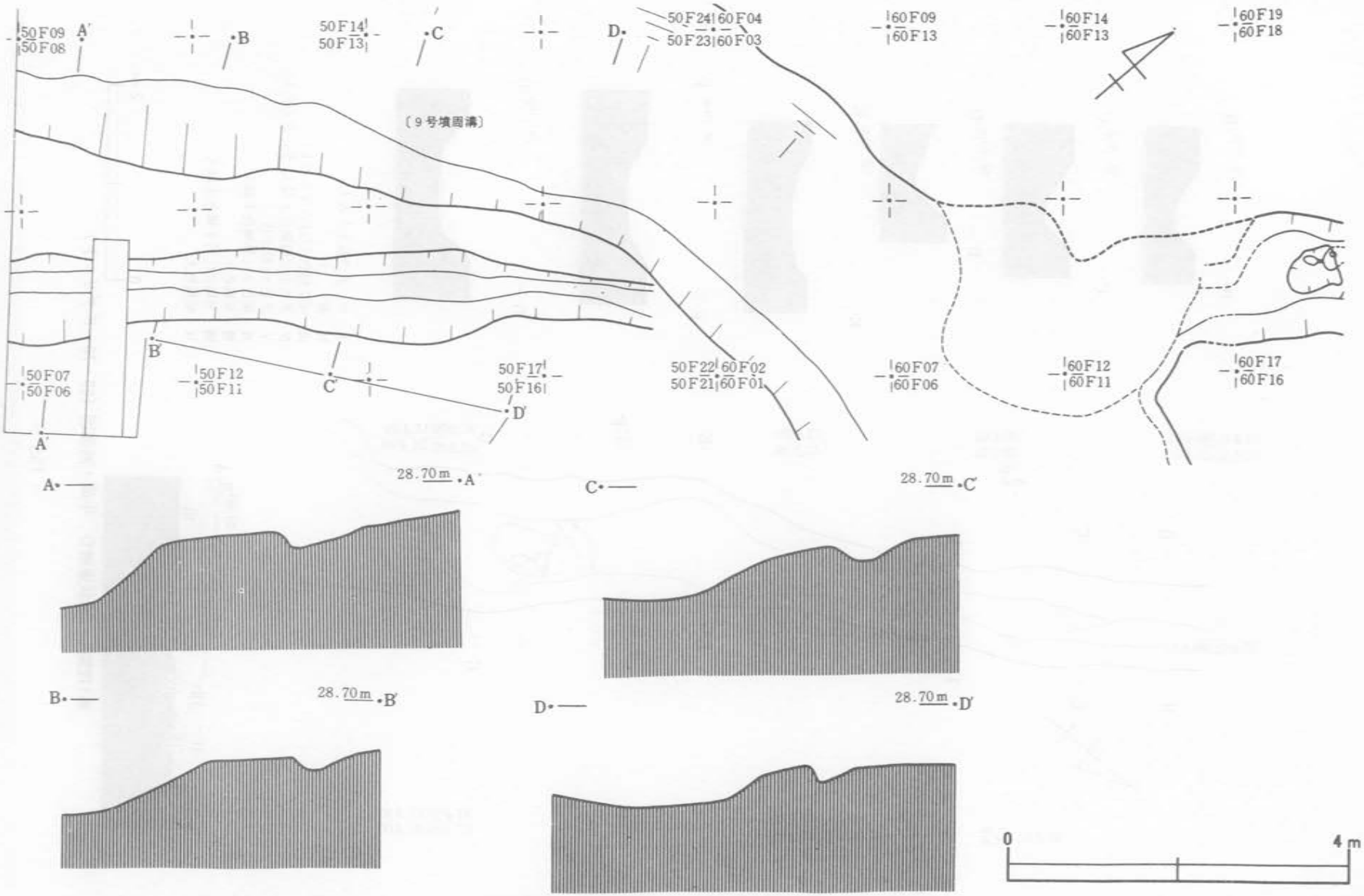
60・70Fグリットにおいては，60F12，17，22，70F02，12グリット内に検出された部・分は緩やかに屈曲するが概ね直線的といえる70Fグリット以北は，さらに調査区域外の山林へ延びているものと思われる。60F12グリット以南は9号墳周溝にかかるが9号墳調査によって既に周溝は完掘されており墳丘で検出されていることからおそらく周溝を切断して構築されたものと思われる。

溝状遺構は60・70－Fグリット内において暗褐色土層（Ⅸ層）上面より掘込まれており北東側で幅が狭く約87cm前後を測り，南西側で狭広く約140cm前後を測る。深さは一定ではなく，60F22グリット内付近でやや浅く約180mを測るが，70F07あるいは60F17グリット内では25～30cm，22～32cm前後を測るものである。しかし，溝底面の標高差をみると全体に北東側から南西側に向って緩かに傾斜しており，70F07グリット付近(28.14m)と60F17グリット付近(27.86)mの比高差は28cmを測る。遺構の横位断面は概ね逆梯形状を呈するが，底面の幅は一定してなく幅広い部ではむしろ箱形状を呈する部分もある。60，70Fグリット内において検出された遺構の長さは9.42mを測る。

本遺構の堆積土は，図示したとおりであるが攪乱が著く良好なものとはいえない。しか



第112図　溝状遺構D　平面・断面図（60・70－Fグリッド）



第113図　溝状遺構D　平面・断面図（50－Fグリッド）

し堆積土中に黒色土の混入する点ならびに暗褐色土を主体とする点が特徴的である。堆積土中のいずれの部分にも黒色火山砂は見出せなかった。また，60F17グリット内の遺構底面にピットが検出されたが遺構に伴うものではなく，木根によるものと考えられる。したがって本遺構には何らの施設もないものと思われる。60，70Fグリット内の遺構からは何の遺物も出土していない。

50Fグリット内で検出した部分は長さ約7.34mを測るが，さらに南西方向へ延びるものであろう。遺構は，幅を増減しつつほぼ直線的北東－北西方向に走行する。50F17グリット付近では，9号墳墳丘裾部分に位置するため検出された溝状遺構の幅は狭く約50cm前後を測るが，その他の部分ではやや幅広く72cm～180cmである。深さは50F17グリット付近でもっとも浅く18cmを測り，他の部分では20cm～26cmを測る。溝底面の標高差は，50F17グリット付近でもっとも低くなり27.82mを測り，以後漸次高くなって50F02グリット北東側でもっとも高く28.06mを測り，また同グリット南西側でやや低くなり27.94mを測る。60Fグリット側と50F17グリット側との溝底面の比高差は，約4cm程50F17グリット側が低くなる。このように，溝状遺構の底面は50Fグリット内では北東側に向って，60F側では南西側に向って傾斜している。遺構の横位断面は逆梯形状を呈する。

50Fグリット内における溝状遺構の堆積土は，比較的単純な様相を呈し，上層に黒色土もしくは黒褐色土が，下層に暗褐色土が堆積している。堆積土中からは何らの遺物も出土していない。

(5) 溝状遺構E（第93図）

8号墳と9号墳との間に検出された溝状の遺構であるが，検出範囲は極めて狭い。8号墳側へはさらに延びているものと思われるが古墳調査によって墳丘が削平されているため不明である，また9号墳側へ墳丘を切断して構築されており，さらに北東側へ延びている。本遺構は先に構状遺構Dとしたものと同一のものかと思われる。

検出し得た長さは2.4mを測る。幅約80cm，深さ約50cmを測り，横位断面は迷梯形状もしくは「U」字状を呈する。遺構底面の標高は27.03mを測り，50F・60Fグリット内で検出された遺構底面と比べ約90～80cm低くなる。溝状遺構内の堆積土は黒褐色土を主体としており，少量ながらロームブロックの混入が認められる。堆積土内からは何ら遺物も出土しなかった。

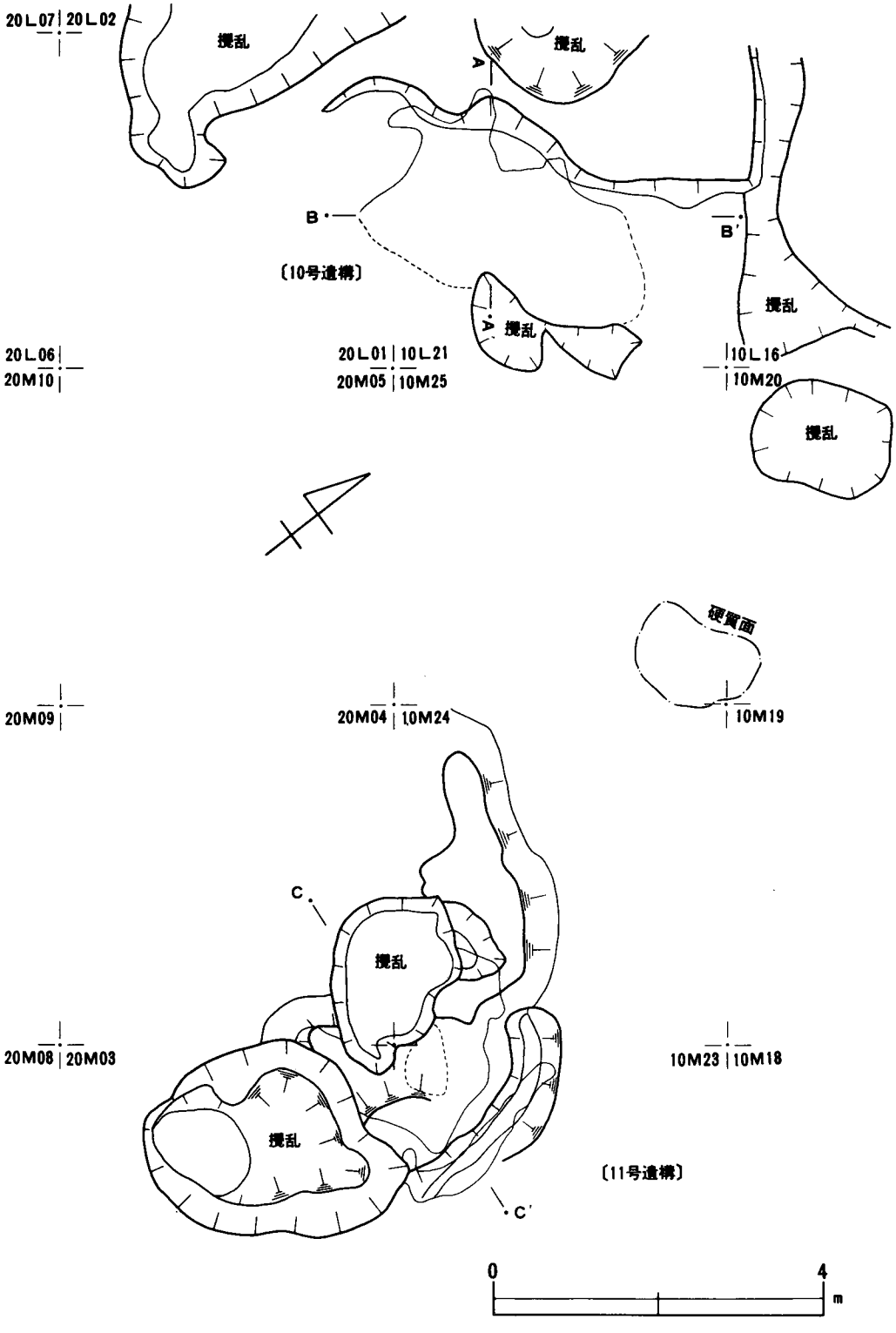
第九節　グリッド検出遺構及び遺物

(1) 第10・11号遺構 （第114・115図）

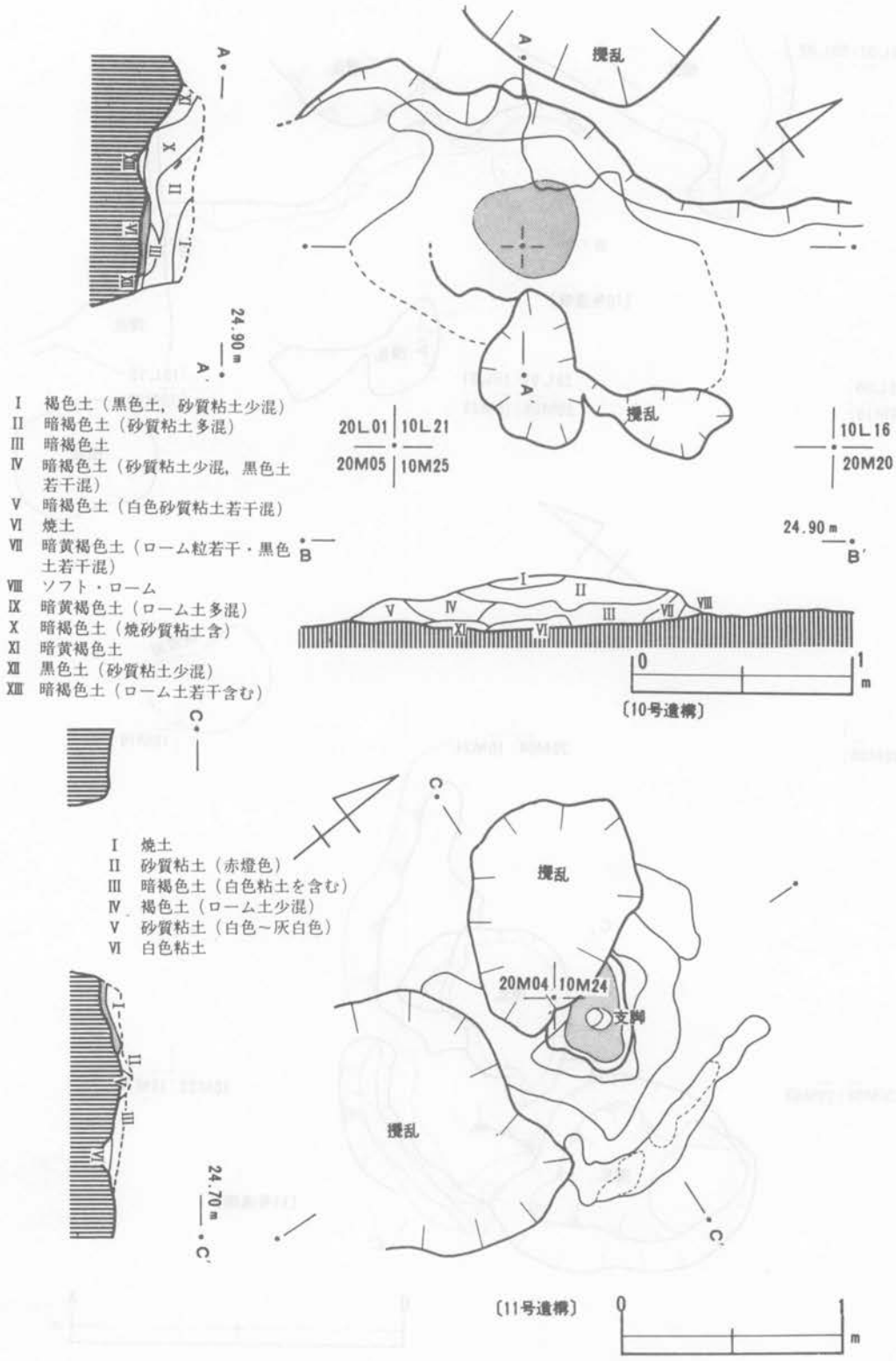
第10号遺構は10L21・20・L01グリットにおいて，第11号遺構は10M23・24・20M03・04グリットにおいてそれぞれ検出された遺構である。第10・11号遺構とも支谷側付近にあり比較的傾斜の強い地形に占地する。

第10号遺構は，前記グリット内の表土層下において砂質粘土が検出され，遺構の存在が判明したものであるが，調査の結果この粘土の広がりは不整形を呈し，遺構としてまとまりは見出せなかった。土層断面による観察からは，底面に薄く焼土層が存在することから恐らくカマド様の遺構かと考えられる。また，この粘土北西側ではローム層への掘込みが検出され，粘土の一部はローム層掘込み外側へ延びていた。このローム層への掘込みは深さ約15cm前後を測り，南北方向へ約2.6ｍ程延びるがその先は掘込みが浅くなり，かつ攪乱壙等により検出され得なかった。したがって，この掘込のプランは不明である。第10号遺構はこの掘込み内部に築かれていたものであり，その後破壊されたものと考えられる。第10号遺構がカマドであるとするならば，焚口は南東方向に，煙道部は北西方向に位置するものであろう。

第11号遺構は，前記グリット内において表土層下及び攪乱土層中に砂質粘土が検出されてその存在が判明したものであり，第10号遺構の南東側約5.0ｍの位置に構築されている。調査の結果，遺構の下部がかろうじて遺存しているカマドであることが明らかとなったが，第10号遺構北西側に見出されたような壁状の掘込みは検出されなかった。このことは，第11号遺構が住居址等に見出せるような壁を掘込んで，または壁に接して構築されたものとはやや様相を異にする点が注目される。すなわち第11号遺構は，その西側と南側に攪乱壙があり破壊されているものの，他の部分についてはその概要を知ることができ，燃焼部は長さは攪乱により不明であるが現状では約35cm，幅約35cm，深さ約10cmでローム層を掘込んで設けられており，この内部からは土製支脚が直立した状態で出土している。燃焼部を取り巻くように砂質粘土が築かれており，これがカマド基部をなすものと考えられるが，煙道部は遺存していない。しかし，燃焼部の形状または火熱により赤橙色を呈する砂質粘土の広がりからすれば，煙道部は，南～南東方向に延びていて，焚口部は西～北西側に位置していたものと思われる。また，カマド基部と考えられる砂質粘土の南東側には，約10～15ｍ程離れた位置に白色粘土がこれと併行するようにして検出された。この白色粘土が



第114図　第10・11号遺構　平　面　図



第115図　第10・11号遺構　土層断面図

当初より意図的に設置されていたものか，あるいはカマドに使用されたものが流出したかさだかではない。いずれにしても，壁に接しまたは壁を掘込んで構築されていたものではないものと思われる。現状でのカマドの規模は，幅約95cm・長さ約60cmを測る。カマド前面の床面は堅く踏み固められており，また北側約3.0ｍ離れた個所にも堅く踏み固められた面が検出されている。なお，このカマド付近において柱穴と見做し得るピットは検出されなかった。

第10・11号遺構は，約5.0ｍの隔たりを有するが，異なった遺構に構築されたものではなくむしろ同一遺構内に構築されたものと考えられる。しかし両遺構を包括すると考えられる遺構のプランは，第10号遺構北西側にその掘込みの一部を検出し得たにすぎず，柱穴と考えられるピットも全く検出されなかった。床面も部分的に硬質な面がみられる他はきわめて軟弱である。以上の諸点からみて，本遺構を住居址とするには，やや積極性に欠けるように思われ，何らかの作業場的な要素の濃い遺構と考えられる。出土遺物は，土師器，鉄滓・鉄製品等が出土しているが，明確に本遺構に伴うと考えられるものはきわめて僅少であり，その他の殆どのものは表土層～褐色土層に含まれるものである。また，第10・11号遺構の所在する10・20－Ｍ・Ｎグリットでは多くの土器・鉄滓が出土しているが，このグリット出土土器における接合関係は，後述するように比較的広範囲な接合関係を有するものと，狭い範囲での接合関係を有するものの２種が認められる。しかも出土遺物の殆どは時期的な差を認め難く，比較的短い期間内で廃棄されたものと見做すことができる。

出土遺物（第116図）

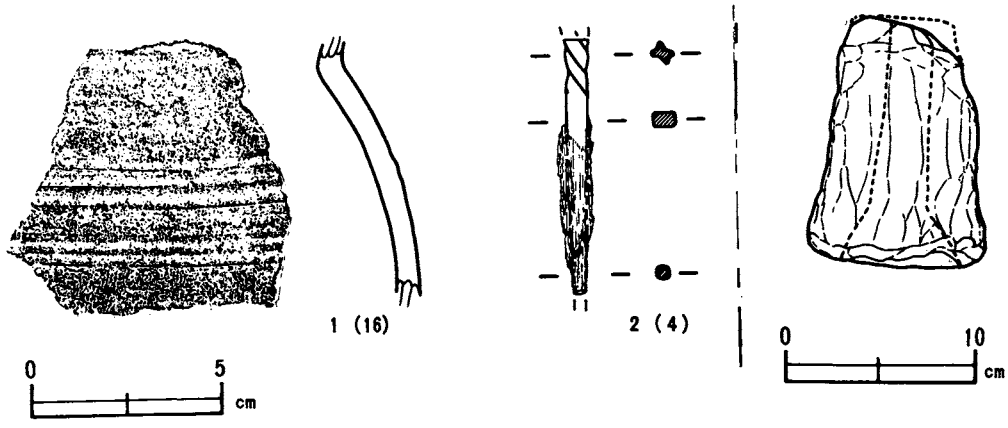
第10・11号遺構に伴うと考えられる出土遺物は図示したとおりである。

第10号遺構出土の遺物は，１が粘土を含む堆積土中出土のもので土師器甕形土器の胴部上方の破片である。胴部はさほど強く張るものとは考えられず，器形も比較的小型のものと思われる。色調は内外面とも淡赤褐色を呈し，焼成は良好である。内外面ともロクロ整形が施されている。

２は粘土を含む堆積土の東側で底面に接して出土した鉄器である。身部の大半と柄部の端を欠損するが，身部は時計廻の方向にねじられている。柄部は多少の木質が遺存しており，身基部より漸次細くなるものである。柄部断面は長方形(基部寄り)，方形（端部）を呈する。現存する部分の計測値は長さ6.6cm，身長2.0cmを測る。遺存する形態よりみて，錐状の工具と考えられる。

第11号遺構出土遺物は，燃焼部内より直立した状態で出土した土製支脚のみである。支

脚上面は僅かに欠損するが，高さ12.8cm・上面径6.4cm・底面径9.4cmを測り底面がやや広がる截頭円錐形を呈するものである。この支脚は，中実ではなく底面から上面に向ってロート状の孔が穿たれている。この穿孔は焼成前に施されたもので底面孔径6.4cmを測り，底面より約3cm内部で孔径3.0cmとつぼまり上面孔径は2.3cmを測る。支脚外面は，全面に縦位の指頭による粗いナデが施される。孔内面は底面近くが横位のナデが施され，他は穿孔時の状態が残る。色調は全体に赤褐色味をおびる。胎土は砂質であり，火熱によるためかきわめて脆く器体表面がざらついている。



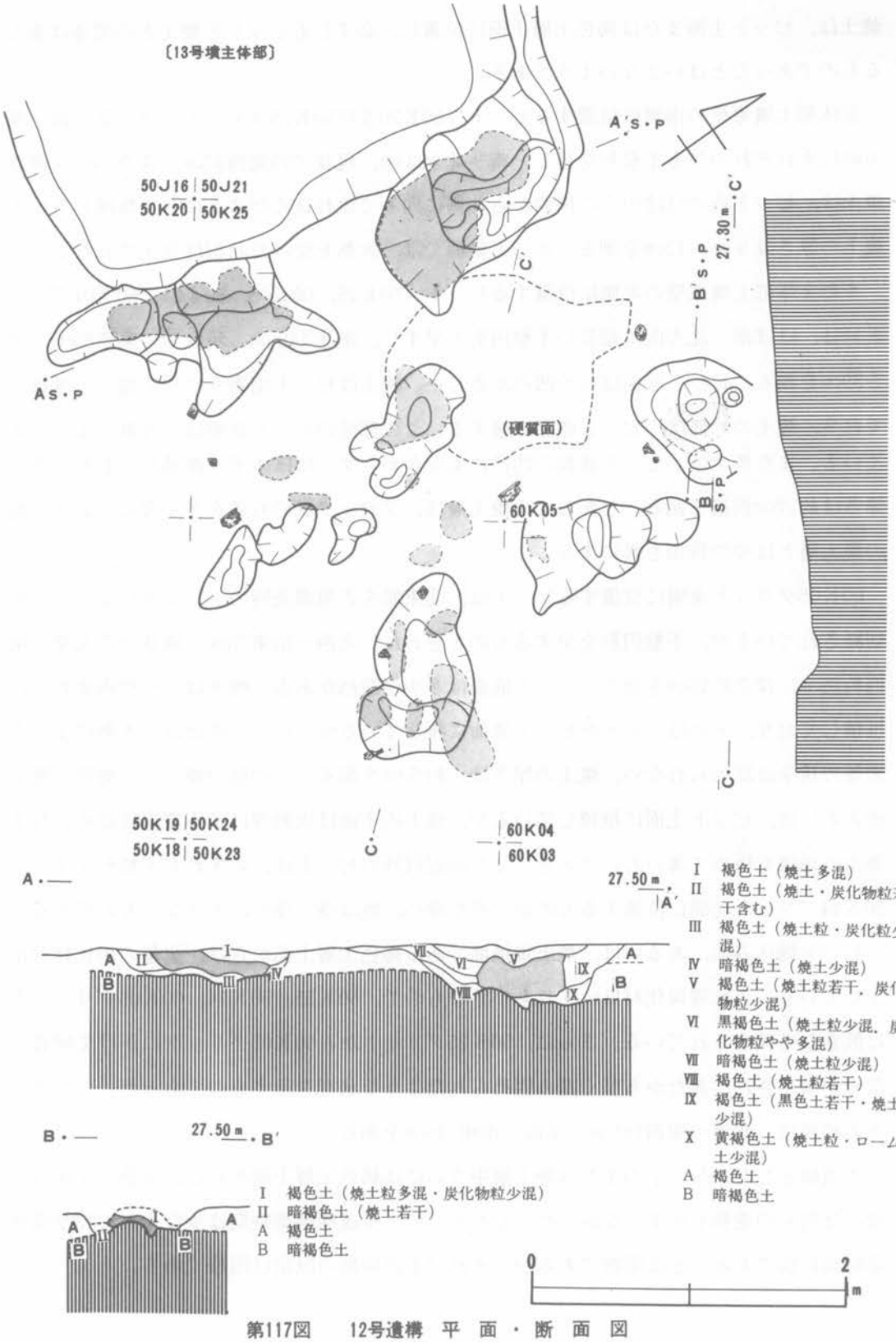
第116図　10・11号遺構　出土遺物拓影図・実測図

(2) 第12号遺構　（第117図）

第一次調査時において13号墳主体部の墓壙東壁に焼土が検出され，古墳構築時期以前の遺構の存在が明らかとなった。このため，第二次調査において調査したものである。

本遺構は，13号墳主体部の墓壙の東側に位置するもので50K20・24・25，50J21，60K04・05，60J01グリットの範囲に広がっているが，この他に古墳前方部あるいは後円部内には検出されなかった。したがって広範囲に散在するものではなく，比較的小範囲に集中するものといえる。

遺構は，古墳のいわゆる旧表土層下において検出されたもので，焼土または，ピット内褐色土層を掘込みあるいは褐色土層上面にある。上記グリット内に，大小16の焼土が散在しており，9個の不整形のピットが穿たれている。また焼土の中で，13号墳主体部土壙東壁の北側（50K25，50J21，60J01）と南側（50K20，50K25）に位置するもの及び60K05グリット内に位置するものは，褐色土層より穿たれたピット内に存在するが，この他の



第117図　12号遺構 平 面 ・ 断 面 図

焼土は，ピット上面または褐色土層上面に位置し，必ずしもピットと焼土との関連は密なるものであったとはいえないようである。

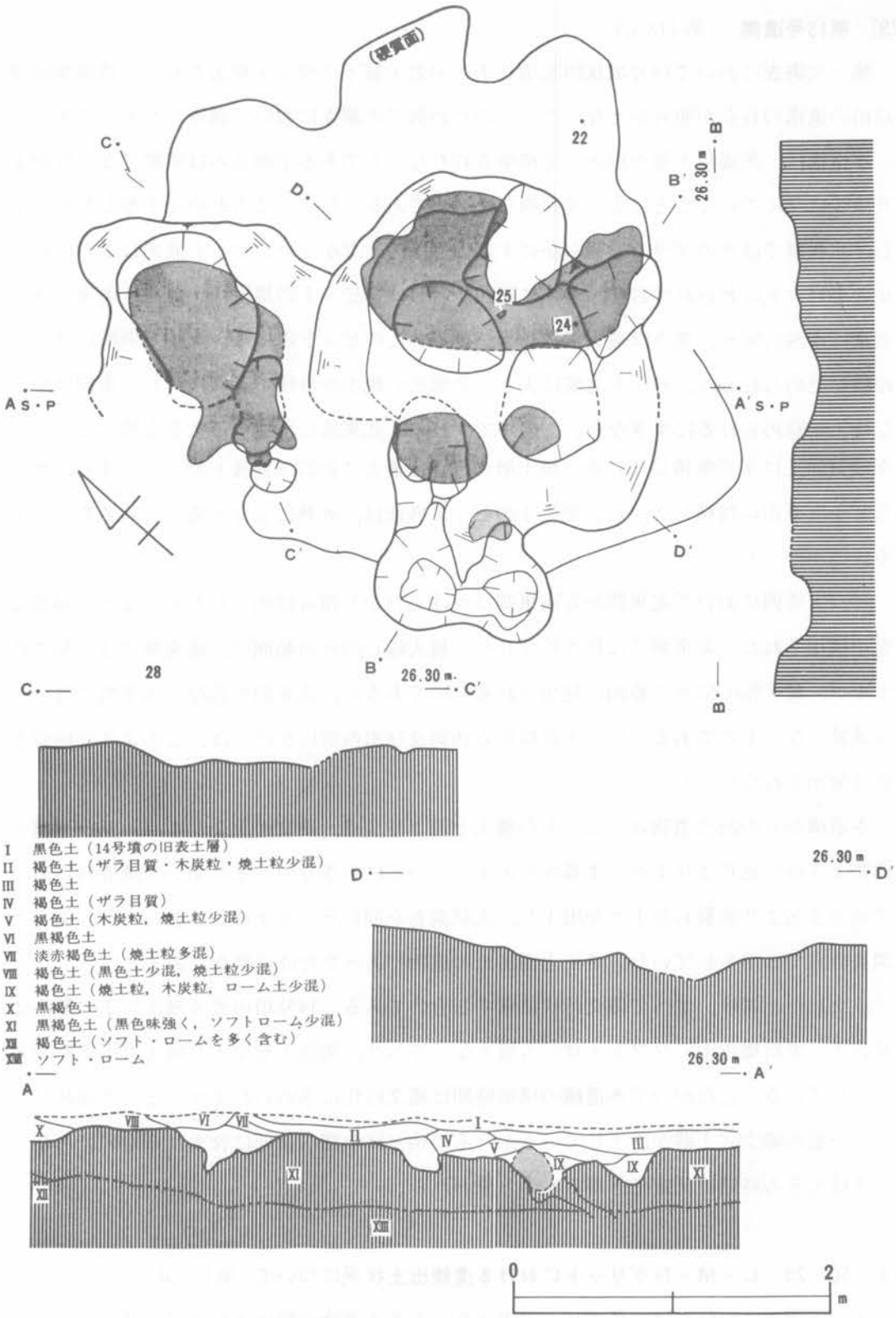
主体部土壙東壁の南側に位置するピット（50K20及び50K25グリット）は，北，南，東方向にそれぞれのびる不整形を呈し，南－北183㎝，現状での東西97㎝，深さ23㎝を測る。焼土は，ピット内のほぼ中心に南側から北側に向って流れ込んだようにして堆積している。焼土の厚さは9㎝～12㎝を測る。ピット底面では，火熱を受けた状況は見出されなかった。

また主体部土壙東壁の北側に位置するピット（50K25，60K05，50J21，60J01グリット）は，ほぼ南－北方向に細長い不整円形を呈すし，南北146㎝，現状での東西85㎝，深さ39㎝を測る。ピット底面はやや凹凸が著しい。焼土はピット南寄りにやや偏って堆積しており，焼土の一部は，ピット底面に接する。この部分のピット底面は，火熱により赤変ている。また焼土は，ピット底面の凹凸にもかかわらず，ほぼ水平に堆積しており，その厚さは約27㎝前後を測る。しかしこの焼土層は，ブロック状のものを多く含んでおり，他の焼土層とはやや様相を異にする。

60K05グリット東側に位置するピットは，北東側を古墳調査時のトレンチによって一部切断されているが，不整円形を呈するものと思われ，北西－南東78㎝，現状での北東－南西約75㎝，深さ約15㎝を測り，ピット底面は多少の凹凸がある。焼土は，やや南東寄りに堆積しており，そのほとんどがピット底面に接しているが，ピット底面は，火熱による赤変等の現象は認められない。焼土の厚さは，約5㎝を測る。この他の焼土は，褐色土層上面あるいは，ピット上面に堆積しているが，焼土の下面は火熱等による変化は認められず焼土の堆積も極めて薄いものである。また前記以外のピットは，いずれも不整形を呈し，50K24グリット北側に位置するものが，やや深い，他は浅く窪むにすぎないものである。

ピット掘込み面，あるいは，焼土堆積面である褐色土層上面からは，少量の炭化材が出土している。これ等炭化材はいずれも小さなもので，50K25，50K24，60K05グリット内に散在して検出されている。さらに，50K25グリットから60K05グリットにかけて硬質な部分が検出され，あたかも堅く踏み固められたような状況を示すものであった。この硬質面の範囲は，北東－南西165㎝，北西－南東118㎝を測る。

本遺構とした，ピット内または焼土層中さらには褐色土層上面からは，少量の炭化材の他には何らの遺物も出土しなかった。したがって，本遺構構築時期は少なくとも13号墳構築時期以前であることは明瞭であるが，それ以上の時期の限定は困難である。



第118図　第13号遺構　平面土層断面図

(3) 第13号遺構 （第118図）

第一次調査において14号墳後円部墳丘下の旧表土層下に焼土が検出され，古墳構築時期以前の遺構の存在が明らかとなった。このため第二次調査において調査したものである。

本遺構は，黒褐色土層を掘込んで構築されたピットであるが掘込みは明瞭でなく周囲より僅少に窪んでいることによって判明したものである。ピットはきわめて不整な形想を呈し，北西側ではそのプランを明らかにすることはできなかった。ピット底面はさらに幾つかの小ピットにわかれており，全体に凹凸が著しい。ピットの規模は，北西－南東3.58m北東－南西2.90m，深さは最大で約40cmを測る。このピット内には，大小5個所に焼土の堆積が認められるが，ピット北側に大きく2個所の焼土が堆積するのに対し，南側は小さな焼土が認められるにすぎない。この中で，ピット北東側に堆積する大きな焼土は，一部が硬質面上にまで堆積している。焼土層の厚さは最大で約27cm前後を測り，いずれの焼土もピット底面に堆積している。焼土下のピット底面は，火熱により赤変している部分もある。

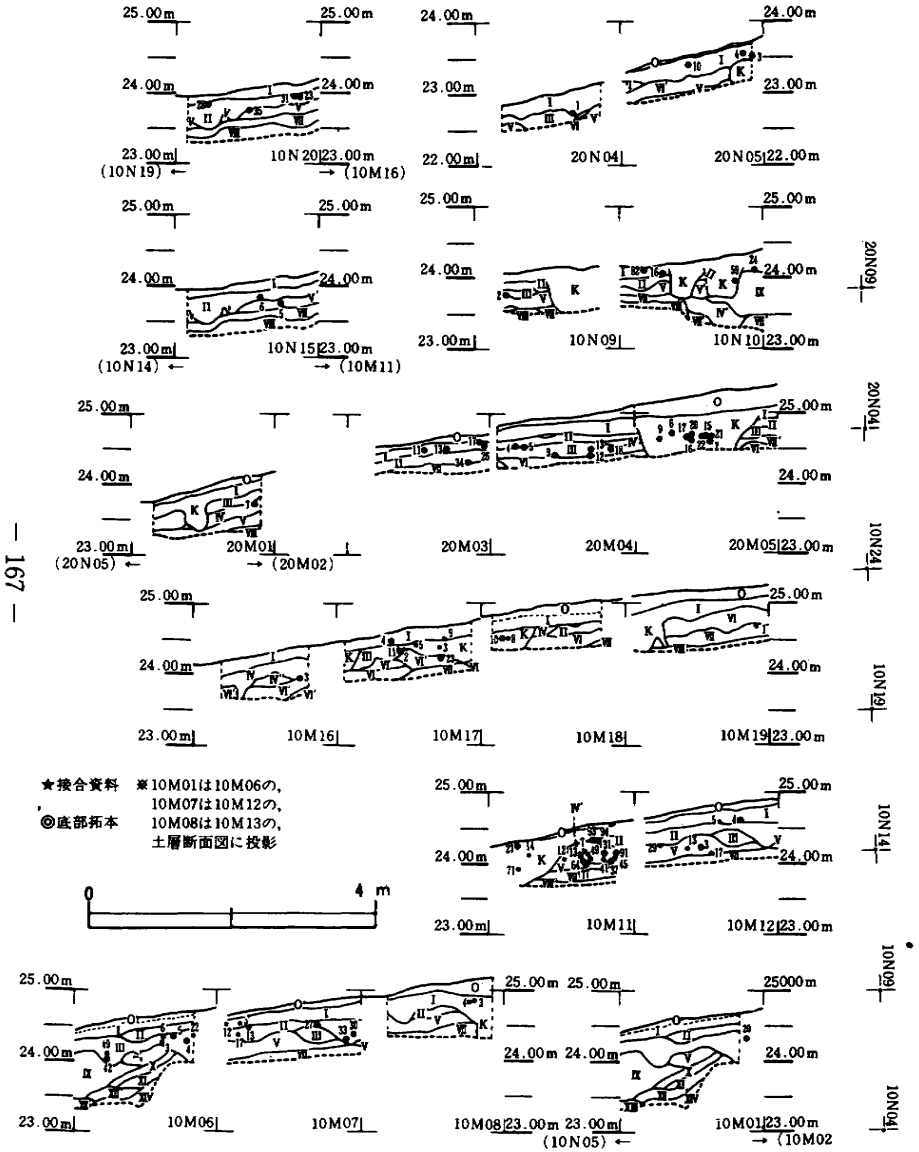
ピット周囲において北東側から南東側にかけあたかも踏み固められたかのような硬質な面が検出された。北東側では長さ約3.0m，最大幅1.05mの範囲に，南東側では，長さ約1.4m，最大幅0.55mの範囲に見出されるものであるが，北東側の部分と南東側の部分とは連続しないものである。ピット北側から西側及び南西側にかけては，このような硬質な面は検出されなかった。

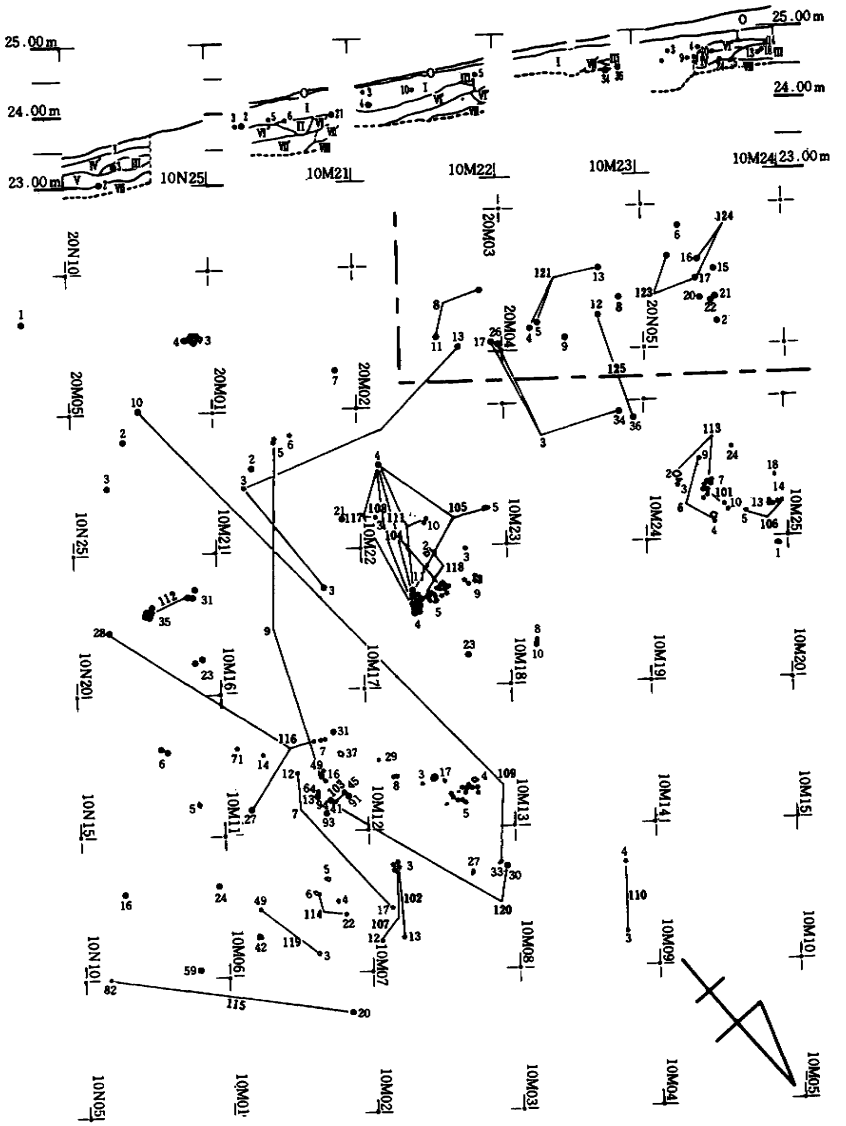
本遺構からの出土遺物は，ピット内覆土上部より2点，硬質面上より1点，及び遺構の西側1.3mの地点より1点の土器片が出土しているにすぎない。また第一次調査時において焼土上面より磨製石斧1点が出土し，次期調査を期しそのままにしておいたが，第二次調査時点では消失していた。焼土上面出土の遺物であっただけに残念である。

出土した土器は，すべて縄文時代に属するものである。14号墳旧表土層から下の層序は，褐色土－黒暗褐色土－ソフト・ローム層となっており，褐色土層中より縄文式土器が少量出土している。したがって本遺構の構築時期は縄文時代に求められよう。また本遺跡からは，少量の縄文式土器が出土しているが，その殆どは中期～後期に含まれるものであり，本遺構もその時期に比定でき得るものと思われる。

(4) 10・20－L・M・Nグリットにおける遺物出土状況について（第119図）

第二次調査においては，各グリット内より出土する遺物の量はきわめて少量といえるも





第119図　10・20M・Nグリッド遺物出土平面・断面図

のであったが，調査区域南西側斜面に設定した10・20－L・M・Nグリットからは，比較的多量の遺物が出土した。

出土した遺物は，土師器，須恵器，鉄滓等であるが，量的には土師器が最も多く，須恵器は僅か2点を数えるにすぎず，鉄滓も少量であった。また遺物は，10・20－L・M・Nの各グリット全てから出土しているものではなく，10－Mグリットを中心とした約20×20m前後の範囲に集中する。調査区東側斜面に設定した50・60－L・M・Nグリットからはきわめて少量の遺物しか出土しておらず，10・20－L・M・Nグリット内の遺物出土は特異的といえよう。

10・20－L・M・Nグリットより出土した遺物の層位及び接合関係は，図示したとおりである。0…排土・Ⅰ…表土層，Ⅱ…褐色土層（焼土混入）・Ⅲ…黒色土層・Ⅳ…黒褐色土層・Ⅵ'…黒褐色土層（軟弱）Ⅴ…褐色土層（ローム土混入）・Ⅵ…褐色土層(木炭粒混入）・Ⅵ'…褐色土層（軟弱）・Ⅶ…暗褐色土層・Ⅶ'…暗褐色土層（軟弱）・Ⅶ'…暗褐色土層（硬質）・Ⅷ…ソフト・ローム層。

出土遺物の層位としては，大半のものが，ⅡまたⅢさらにはⅤ層中に含まれており，最も深くてもⅦ層より出土するものがないことが窺える。また，ある層中に一様に出土するものではなく上下隔りなく出土していることも指摘できる。

遺物の接合関係では，比較的近距離間での接合資料が多いものの，中には数グリットを隔てたものが接合するなど一定ではない。特に前章で記述したように20M05グリット内出土の小型甕形土器破片は，約30m前後離れた001号址床直上出土の破片と接合しており，自然的な遺物の移動とは考えられない動きが認められる。また，ある一つのグリットにおいてまとまって出土した破片でも相互に接合するものも極めて僅かである点も注意される。

10・20－L・M・Nグリット内には，010・011号址とした遺構が存在する。この両遺構は，同一遺構内のものとして把えられるが，遺構に伴うと考えられる遺物はきわめて少なく，グリット出土の遺物との層位的な差を認めることができなかった。したがって010・011号址は，グリット出土の遺物が散布する以前のものとして考えられるが，時間的な隔りはさほどないものと思われ，10・20－L・M・Nグリット出土の遺物は，何らかの遺構に伴っていたと考えるよりは，むしろ廃棄されたものとして考えられる。

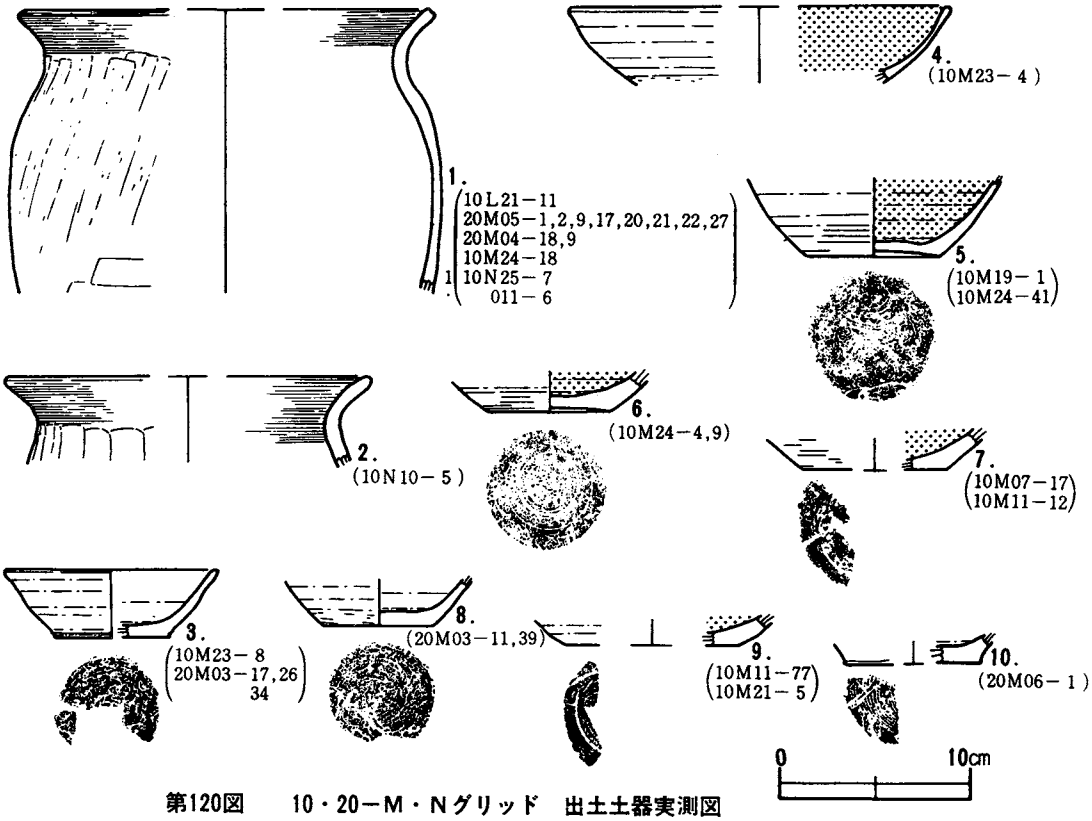
これらグリット出土遺物の整理過程においても，接合するものが比較的少なく，器形全体を窺い得るものは全くないことなどは，斜面という地形による遺物の散逸もさることながら，殆どの遺物が破片の状態で廃棄されたのではないかと思われる。

出土遺物（第120図１～10）

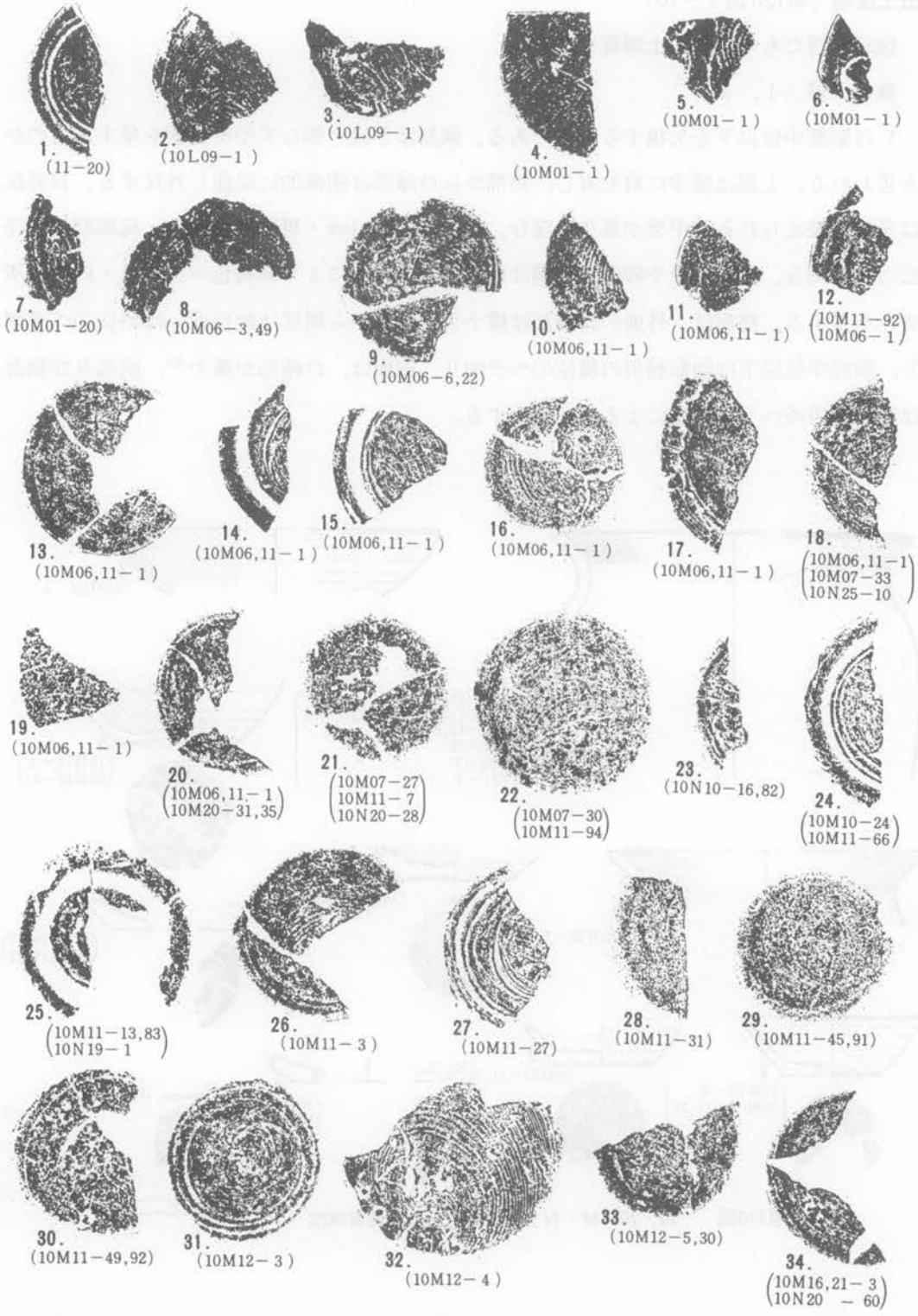
図示し得たものは全て土師器である。

甕形土器（１，２）

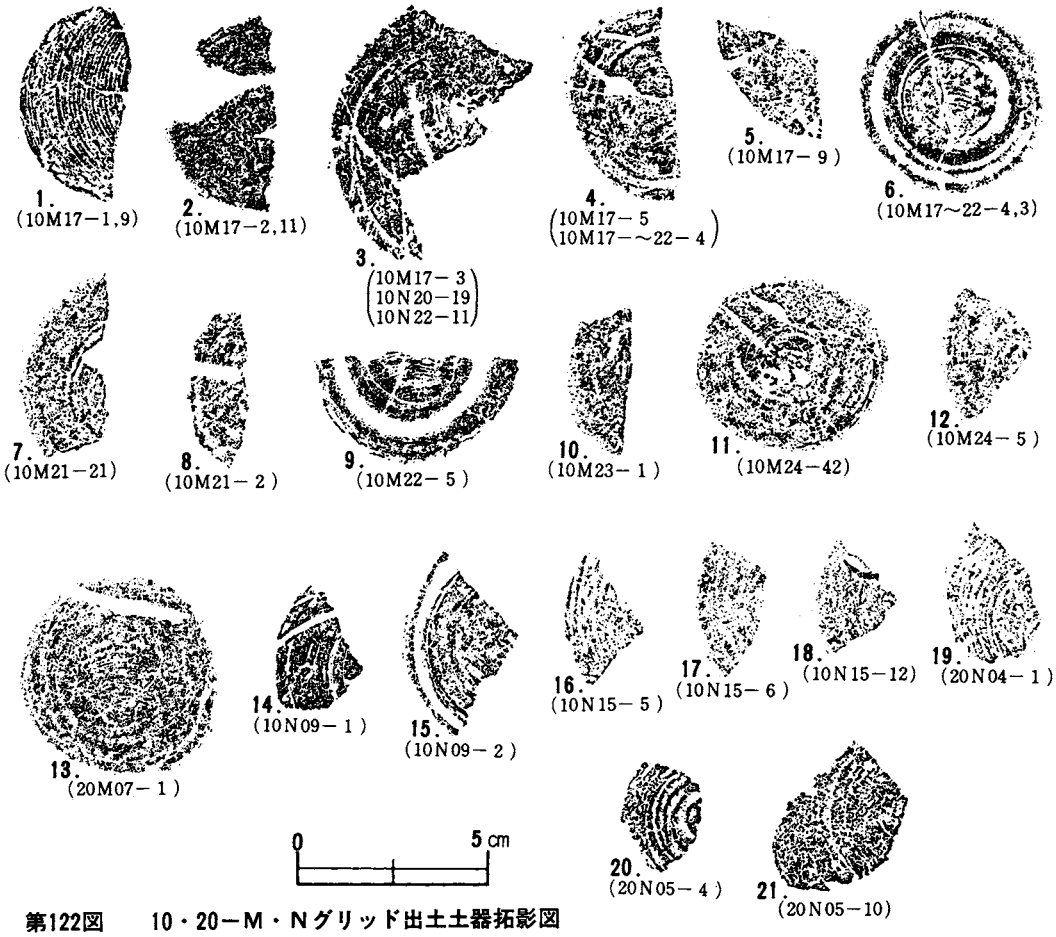
1.は胴部中位以下を欠損するものである。胴部はさほど張らずやや長胴を呈するものかと思われる。上部は僅少に肩を有し，頸部から口縁部は曲線的に屈曲し外反する。口唇部は平坦に整えられるが中央が僅少に窪む。推定口径21.1cm・現器高14.5cm・現胴部最大径22.7cmを測る。胎土はやや砂質で色調は外面が二次火熱により赤褐色－灰褐色・内面は灰青色を呈する。整形は，外面の口縁部は横ナデ，頸部から胴部は縦位或いは斜位のヘラ削り，胴部中位以下は回転利用の横位のヘラ削り，内面は，口縁部が横ナデ，頭部及び胴部は回転利用のヘラ状工具によるナデを施する。



第120図　10・20－M・Nグリッド　出土土器実測図



第121図　10・20−L〜N出土土器拓影図
（土師器・坏形土器底部Ⅰ）



第122図　10・20−M・Nグリッド出土土器拓影図

(土師器・坏形土器底部II)

2.は口頸部破片である。口縁部は外反する。推定口径18.8cm・現在高4.4cmを測る。胎土はやや砂質で色調は外面とも明褐色，整形は外面の口縁部は横ナデ，胴部は縦位のヘラ削り，内面は口縁部～頸部が横ナデ，胴部は横位のヘラナデを施す。

坏形土器（3～10）

4を除き全て平底のものであるが，5，6はやや上げ底となる。

3.は底部を欠損する。体部はほぼ直線的に開く。推定口径11.0cm・器高3.5cm・推定底径5.8cmを測る。胎土はやや砂質で色調は内外面とも明褐色を呈する。整形は，内外面ともロクロ整形，底部切離しは回転ヘラ切りによるものと思われる。

4.底部を欠損する。体部はやや内弯ぎみに立ち上る。口唇部がやや肥厚する。

推定口径19.6cm・現器高3.9cmを測る。胎土は若干砂質で色調は外面が黄褐色～黒色・内面は黒色を呈する。整形は内外面ともロクロ整形を施すが，その後外面底部近くは回転ヘラ削りを，内面はヘラ磨き後黒色化処理が施される。

5.口縁部付近を欠損する。体部は僅少に内弯ぎみに立ち上る。現器高3.9cm・底径6.9cmを測る。胎土は若干砂質で色調は外面が褐色・内面は黒色を呈する。整形は内外面ともロクロ整形を施すがその後，外面底部近くは幅2.2cmに亘る回転ヘラ削り，内面はヘラ磨き後黒色化処理が施される。底部切離しは，糸切によるが，その後ほぼ全面にわたって回転ヘラ削り調整を施す。

6.底部付近が遺存している。現器高1.5cm・底径6.3cmを測る。

胎土は若干砂質で，色調は外面が褐色～黒色・内面は黒色を呈する。

整形は，内外面ともロクロ整形を施すがその後，底部付近は回転ヘラ削り，内面はヘラ磨き後黒色化処理が施される。底部切離しは，回転ヘラ切りかと思われる。

7.底部の破片である。現器高1.5cm・推定底径7.4cmを測る。胎土はやや砂質で色調は外面が明褐色・内面は黒色を呈する。

整形は内外面ともロクロ整形を施すがその後，外面の底部付近は回転ヘラ削り，内面はヘラ磨き後黒色化処理を施す。底部切離しは回転ヘラ切りかとも考えられる。

8.口縁部を欠損する。体部はほぼ直線的に外方へ開く。

現器高2.3cm・底径5.8cmを測る。胎土はやや砂質で色調は外面が淡褐色・内面は明褐色を呈する。整形は内外面ともロクロ整形を施すが，外面底部付近はその後回転ヘラ削が施される。底部切離は回転ヘラ切りと思われる。

9.底部破片である。現器高1.2cm・推定底径8.8cmを測る。

胎土は若干砂質で色調は外面が褐色～黒色・内面は黒色を呈する。

整形は内外面ともロクロ整形を施すがその後底部付近は回転ヘラ削り，内面はヘラ磨き後黒色化処理が施される。底部切離しは回転ヘラ切りかとも思われる。

10底部破片である。現器高1.1cm・推定底径7.0cmを測る。

胎土はやや砂質で色調は内外面とも明褐色を呈する。整形は内外面ともロクロ整形が施される。底部切離しは糸切による。

(5) 11号墳及びその周辺グリット土器出土状況について（123図）

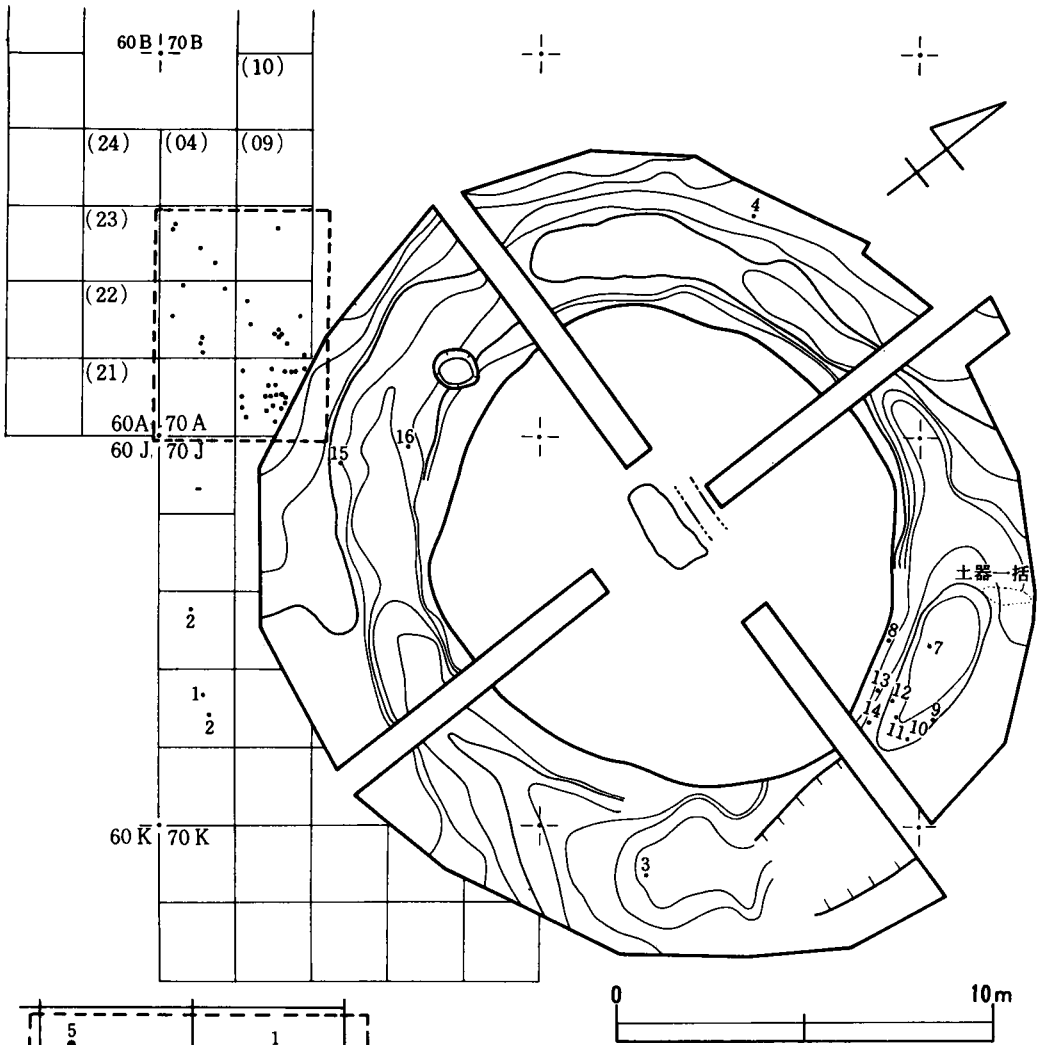
第二次調査において各グリットの調査が進行するうち，11号墳西側に近接するグリット内より比較的多くの土師器が出土した。土器は，70A02，03，06，07，08グリットから出土しているが，70A06，07グリットにおいて密集度が高い。そして，11号墳から遠ざかるにつれ少なくなる点が注意される。

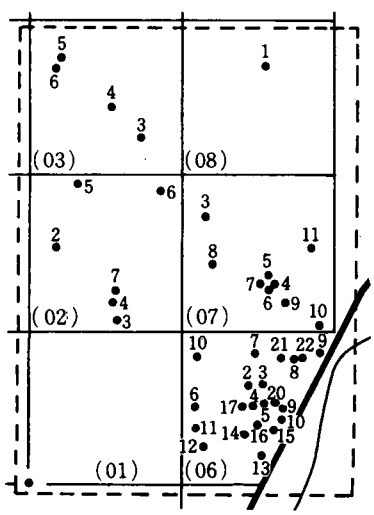
この70A02，03，06～08グリット付近の層序は，表土－褐色土－暗褐色土（ないしは黒褐色土）－ソフトローム層を示すが，出土した遺物は，全て褐色土層中に含まれている。これらの層序は人為的な堆積を示すものではなく或いは遺構内に堆積したものとは考えられず，いずれも自然的なものといえる。また褐色土層中或いは褐色土層－暗褐色土層間において，遺構として把え得る面とその状況は見出すことはできなかった。

出土した遺物は，全て土師器である。器種としては，坏形土器がその殆どを占めるが，他に甕形土器が少量出土している。土器は完形のものは少なく，大半が破片の状態で出土していて遺物整理過程でも完形となり得るもはなかった。しかし，これらグリット内より出土した遺物のうち，11号墳周溝内出土遺物と接合するものがあった。11号墳周溝内出土遺物が周溝のどの位置より出土したものかは不明であるが，注意されるものといえよう。

11号墳からは，主として周溝内より土師器・須恵器・縁釉段皿等が出土している。これらの出土遺物のうち，縁釉段皿を除く土師器・須恵器は，全て古墳に供献されたものと見做されている。また，11号墳だけではなく，9・13・14号墳等にも部分的ながら周溝外側の掘込みラインを明確に確認できなかった部分があり，この部分はいわゆるローム面への掘込みが明瞭ではなく周溝底面より外側へ漸次的に立ち上りやがてローム面と同一になるためによるものであった。この点に留意するならば，11号墳において周溝外縁をどこに求めるかが問題となろう。

それは70A02，03，06～08グリット内より出土した土師器は，本遺跡内に当該期の住居址等の生活，生産的な遺構が検出されておらず，古墳もしくは土壙墓に限られていること





左図は上の図の点線に
囲まれた部分の拡大図

第123図　11号墳及びその周辺グリッド
土器出土状況

からみてむしろこれに伴うべきものと考えられる。したがって，これらグリット内からの出土土器が，11号古墳周溝内に含まれるものか，あるいは周溝外の近接した地点における何らかの墓前祭的祭祀行為による所産のものかが問題となるが，遺物の出土状況からすればむしろ後者の可能性が考えられる。

(出土遺物)(第124図１～５)

坏形土器（１～４）

1.は底部が僅かに平坦ぎみとなるもので，体部は内弯しつつ立ち上り，口縁部はやや外方へ開く。口縁部は体部より薄く成形される。推定口径14.4cm・器高4.9cmを測り，胎土は若干砂質で，色調は内外面とも褐色を呈する。外面は口縁部を横ナデした後ヘラナデを施し，体部は全面横位のヘラ削り，底部は水平方向のヘラ削りを施す。内面は口縁部を横ナデした後底面から口縁部まで全面的にヘラナデを施す。体部にはヘラ痕が放射状に残る。

2.は，丸底のもので体部は内弯しつつ立上る。口唇部は内斜する。体部，口縁部とも器肉は厚い。口径11.6cm・器高4.4cmを測る。胎土は若干砂質で，色調は内外面とも褐色を呈する。整形は，外面が口縁部は横ナデ，体部は横位のヘラ削りだが一部斜位のヘラ削りも認められる。底面は水平方向のヘラ削りを施す。内面は，口縁部，体部ともナデ，底面近くには多数のヘラ痕が認められ，ヘラナデが施されていると思われる。口縁部の横ナデの幅が広く，また粘土継目痕が認められる。

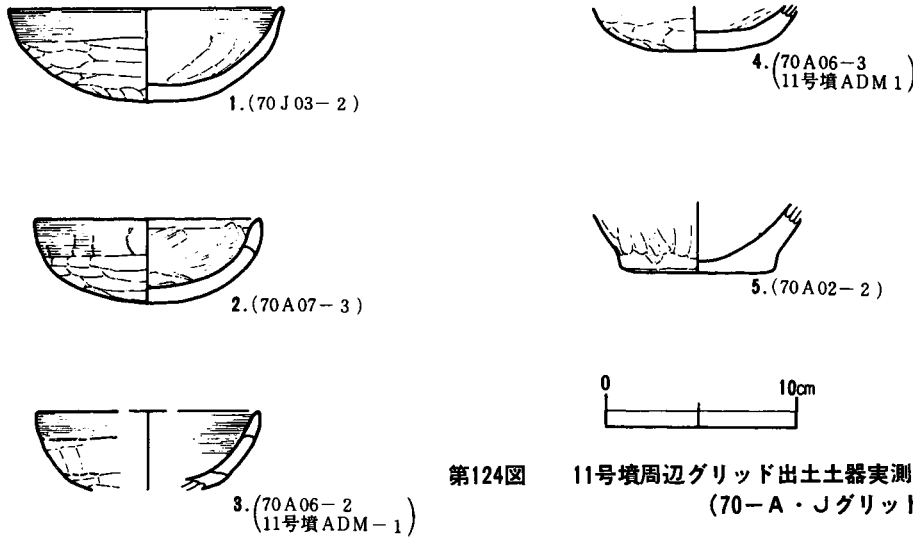
3.は，底部を欠損するもので，11号墳周溝内出土のものと接合した。

内部は内弯しつつ立ち上る。推定口径11.6cm，現器高4.1cmを測る。胎土はやや砂質で，色調は外面褐色・内面黒色～褐色を呈する。整形は，外面わ口縁部は横ナデ，体部はやや粗いナデ，底部付近は横位のヘラ削りを施す。内面は，口縁部～体部中位付近まで横ナデ以下は縦位あるいは横位のナデを施す。外面口縁部近くと体部下方に粘土継目痕が認められる。

4.は，底部付近を遺存するにすぎないが，11号墳周溝内出土のものと接合した。底部はやや平坦となるもので，体部は内弯ぎみに立上るものと思われる。底面の外面には木葉痕が認められる。現器高2.4cmを測る。胎土は若干砂質で，色調は内外面とも褐色を呈する。整形は，外面の体部はナデ，底部付近は横位のヘラ削りを施す。内面はナデが施されるが一部にヘラ痕が認められ，ヘラナデが施されたかとも考えられる。

5.は，甕もしくは壺形土器の底部である。現器高2.9cm，底径8.2cmを測る。胎土は若干砂質で色調は内外面とも褐色を呈する。

整形は，外面の胴部は縦位のヘラ削り，底部は横位のヘラ削りを施す。内面は，胴部が横位のナデ底部付近はヘラナデが施される。



第124図　11号墳周辺グリッド出土土器実測図（70－A・Jグリッド）

(6) グリッド出土遺物

Aグリッド出土遺物（第125図1・2）

(1)須恵器・横瓮であろう，表面には同心円状の整形が施される，これは叩目痕を消去している。裏面には，青海波状の叩目が施される。

(2)は(1)と同一個体の破片であるが，直接は接合しない。外面に縦位の叩目が，内面には青海波状の叩目が施される。

Bグリッド出土遺物（第126図1～4）

いずれも縄文式土器破片であり，中期・後期に属する。

(1)はヘラ状工具による沈線によって文様が構成される。

(2)は口縁部破片であり，無文である。

(3)はキャリパー状を呈する部分で，斜縄文と沈線によって文様が構成される。

(4)は口縁部破片で波状を呈するものである。太い沈線によって渦巻文が形成される。その両側には沈線で区画された内部に斜縄文が施される。

Cグリッド出土遺物（第126図5～10）

(5)～(7)は縄文式土器であり，中・後期に属するものである。

(5)は刺突による文様が施されている。

(6)は斜縄文と縦位の沈線文によって文様が構成される。

(7)は口縁部破片で，横位の突帯がめぐりその下方に沈線文が施される。

(8)～(10)は「寛永通宝」銭であるが，(8)の裏面には「文」の文字が鋳込まれている。

Dグリッド出土遺物（第126図11）

(11)縄文式土器である。上方に山形の沈線文と一条の突帯が，その下には横位の沈線文が下方には刻目文が施されている。

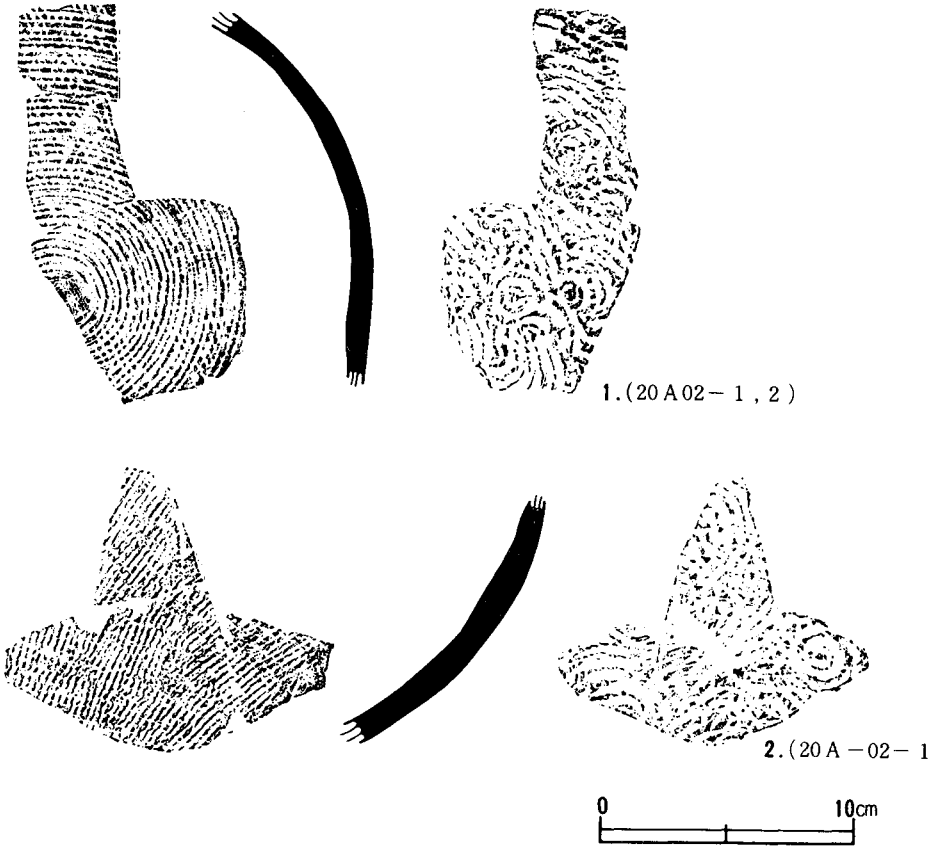
Eグリッド出土遺物（第126図12～14）

いずれも縄文式土器である。

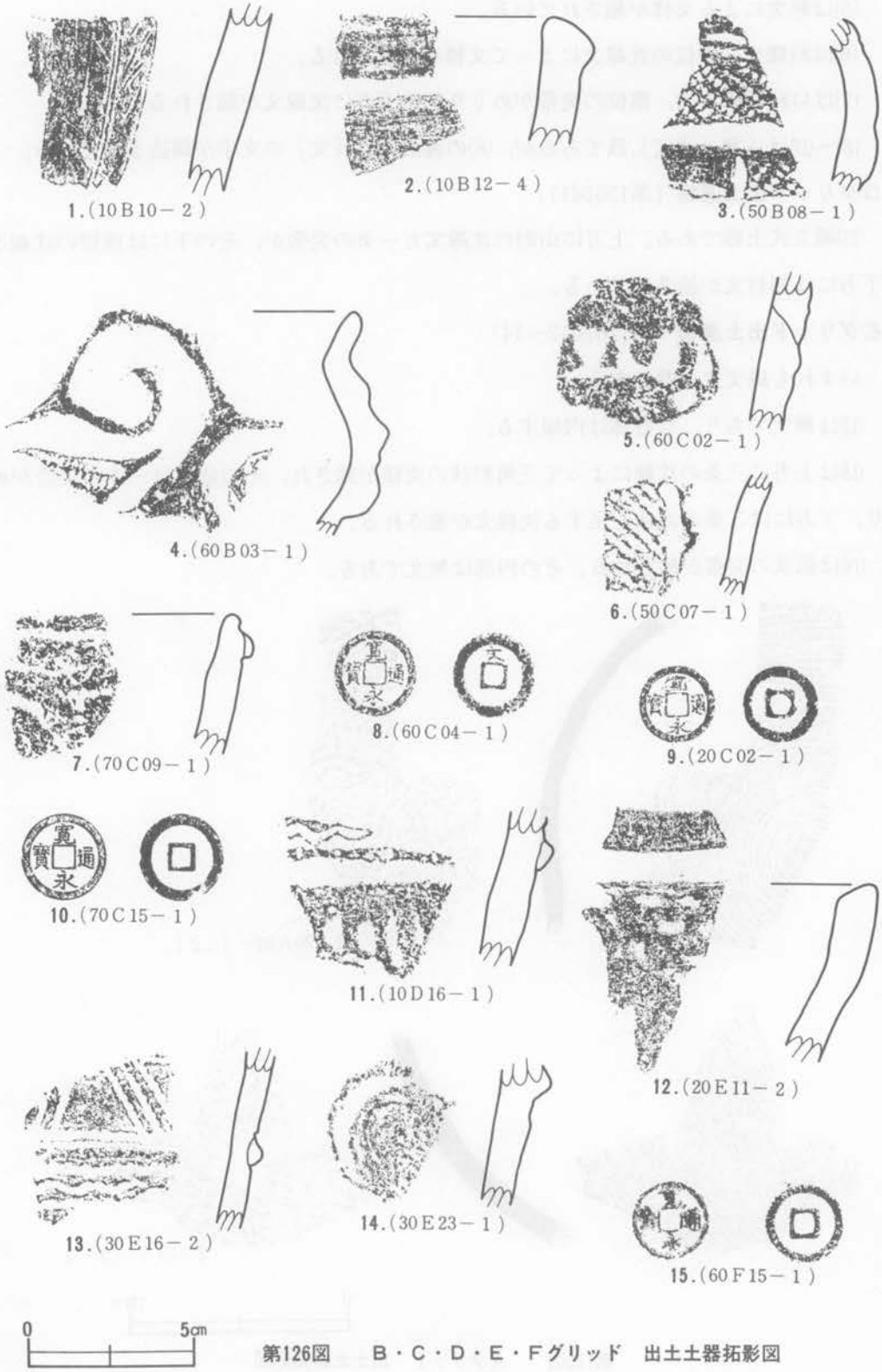
(12)は無文であり，口唇部は内傾する。

(13)は上方に三条の沈線によって三角形状の文様が施され，その底辺は一条の突帯がめぐり，下方には二条の波状を呈する沈線文が施される。

(14)は弧状の突帯が施される。その内部は無文である。



第125図　Aグリッド　出土土器拓影図



第126図　B・C・D・E・Fグリッド　出土土器拓影図

Fグリッド出土遺物（第126図15）

⒂磨耗が著しいが「寛永通宝」かと思われる。

Hグリッド出土遺物（第127図1）

(1)縄文式土器である。斜縄文と縦位の沈線文が施される。

Jグリッド出土遺物（第127図2・3）

いずれも縄文式土器である。

(2)は土錘かと思われる。三条の縦位の無文帯が，その間に斜縄文が施される。

(3)は縦位の沈線が施文される。

Kグリッド出土遺物（第127図4～9）

いずれも縄文式土器で中・後期に属する。

(4)は口縁部破片であり，突起を中心として左右に太い沈線が施される。

(5)・(7)はともに口縁部破片であり，同一個体であろう。二～三条の太い沈線によって文様が施される。

(6)は異方向の斜縄文が施される。

(8)は三条の縦位の沈線文とその左右に羽状を構成するかと思われる縄文が施される。

(9)はキャリパー状を呈する口縁部破片である。太い沈線と斜縄文によって文様が構成される。

Lグリッド出土遺物（第128図1～5）

いずれも縄文式土器である。

(1)は縦位の沈線文が施される。

(2)は口縁部破片で緩かな波状を呈するものである。口唇部は7条の刻目が施され，口縁部には二～三条の縦位の沈線の各々左右に二条の沈線文が施され，地文には斜縄文を用いている。(3)は(2)と同一個体と思われるが，直接接合しない。

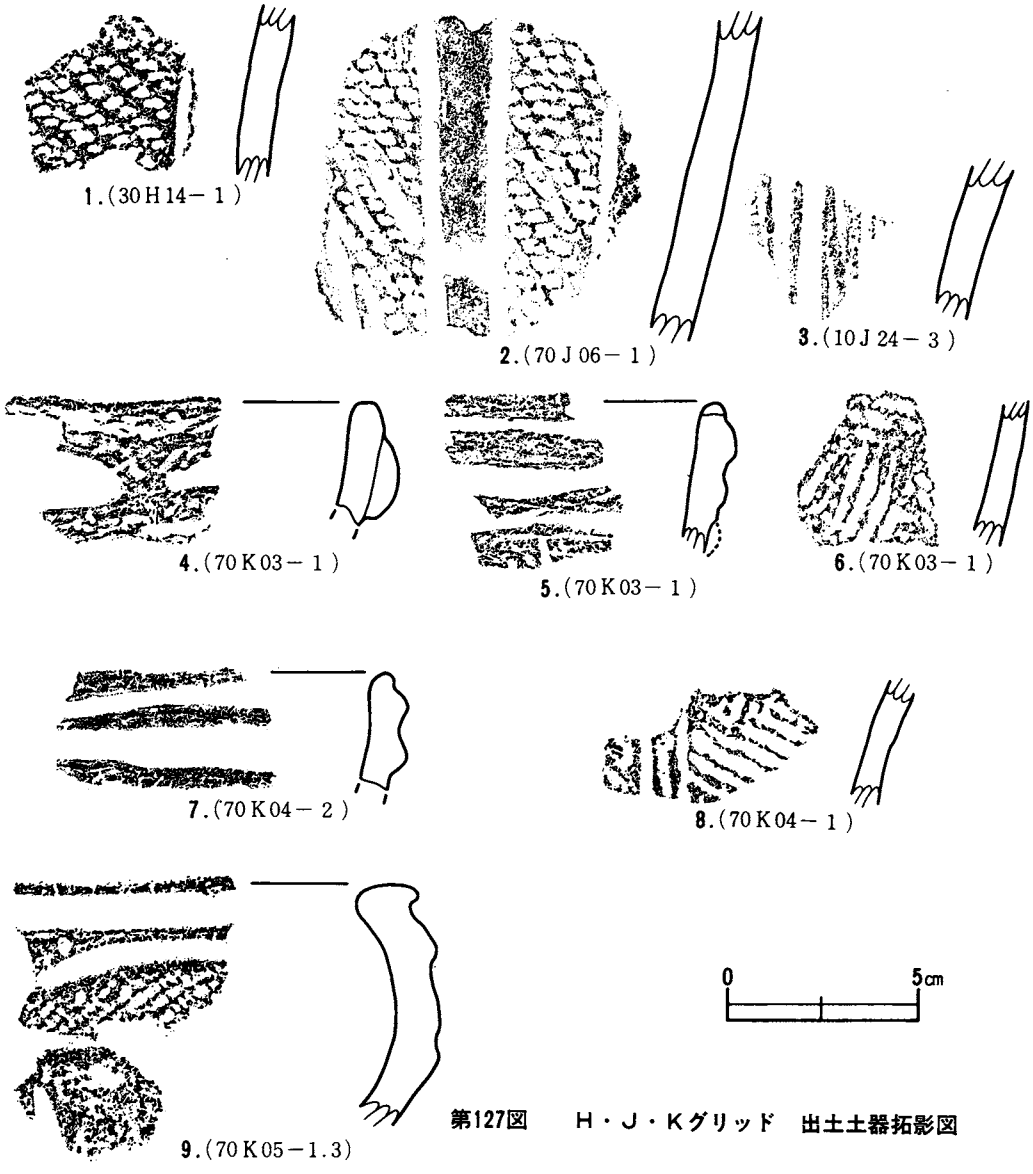
(4)は横位の二条の沈線が施文される。

(5)は口縁部破片である。緩かな波状を呈するかと思われる。口縁部に二条の太い沈線文が，その下方には櫛歯状工具による弧状文が施される。

Mグリッド出土遺物（第128図6～9）

(6)・(7)は縄文式土器であり，(6)は無文である。(7)は沈線文が施文される。

(8)は土師質のもので底面が若干はり出す筒状を呈するものである。底部は径4cmの孔が形成され，この孔は内側で広がり現最大径7.6cmを測る。この土製品の底径11.7cm・現存器



第127図　H・J・Kグリッド　出土土器拓影図

高3.1cmを測り，輪積み成形である。

(9)磨耗が著しいが「嘉祐通宝」かと思われる。

Nグリッド出土遺物（第129図10～12）

(10)・(11)は縄文式土器である。

(10)はヘラ状工具による縦位の二条の沈線文の間を斜格子状の沈線文が施される。

(11)は口縁部破片で，口唇部が丸く肥厚する。無文である。

(12)は「寛永通宝」で裏面に「文」の文字が鋳込まれている。

各グリッド出土土師式土器・鉄製品（第129図）

(1)口唇部と底部付近を欠損する壺形土器である。口縁部は大きく外反し，胴部は卵形状に強く張る。最大径は胴部にある。現存器高27.4cm・胴部最大径26.6cmを測る。口縁部は横ナデ，頸部は縦位のヘラ削り，頸部～胴部中位付近までは横位のヘラ削り，胴部中位以下は縦位のヘラ削りが施されるが，いずれもヘラ痕は明瞭ではない。

(2)胴部上方以下を欠損する甕形土器である。口縁部は短かく僅少に内傾ぎみに直立し，口唇部は丸く肥厚する。胴部は外方に直線的に少し開く。現存器高9.2cm・推定口径27.2cm・胴部最大径31.2cmを測る。口縁部は内外面とも横ナデ，胴部はヘラ削りが施される。

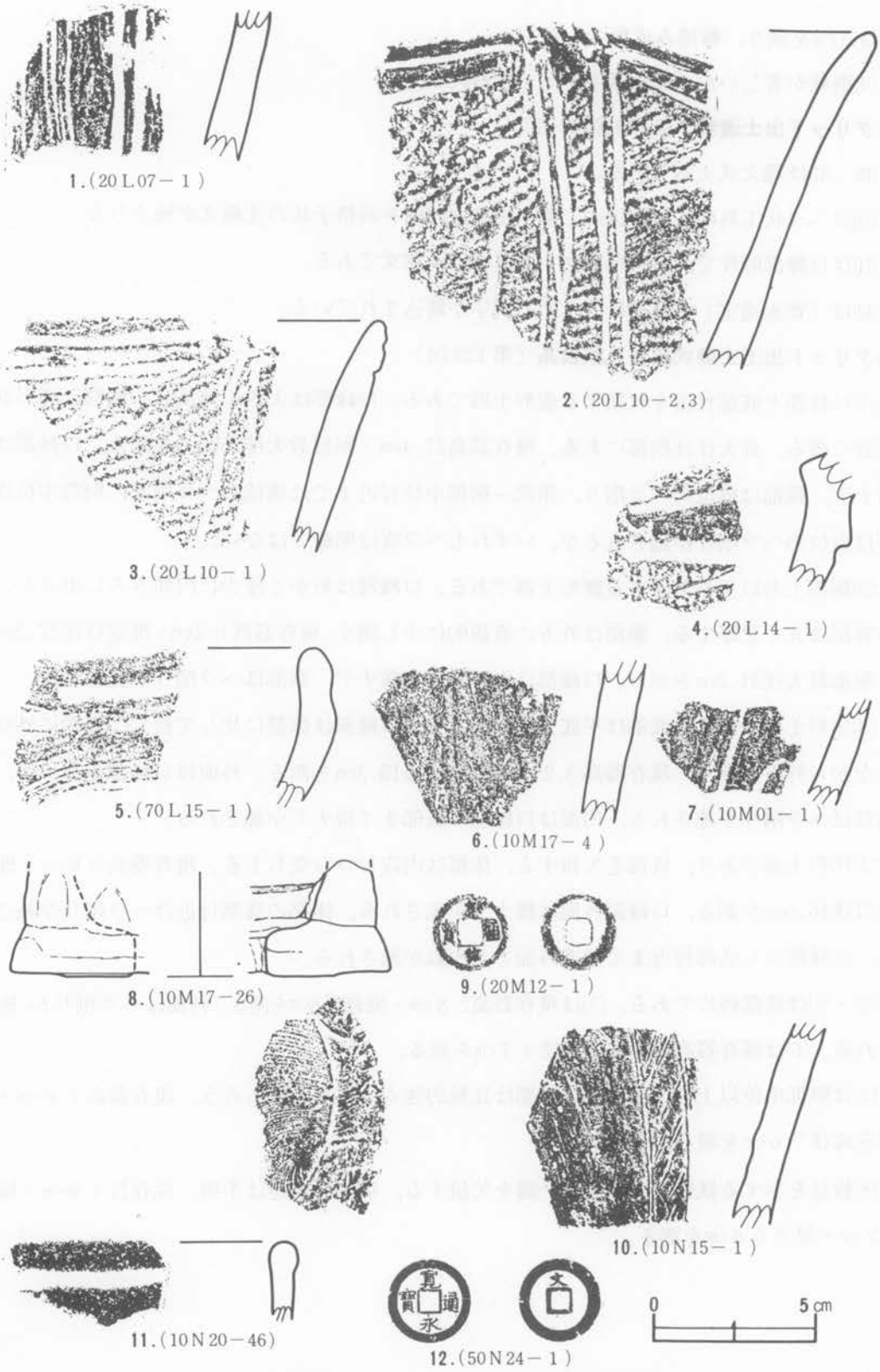
(3)坏形土器である。底部は平底気味を呈する。口縁部は体部に比して長く，僅少に外反しながら外方に開く，現存器高3.2cm・推定口径15.3cmを測る。外面は口縁部が横ナデ，体部はヘラ削りが施される，内面は口縁部～底部まで横ナデが施される。

(4)坏形土器であり，底部を欠損する，体部は内弯しつつ立ち上る。現存器高3.6cm・推定口径16.5cmを測る，口縁部外面は横ナデが施される。体部の底部付近はヘラ削りが施され，口縁部から底部付近までは内外面とも赤彩が施される。

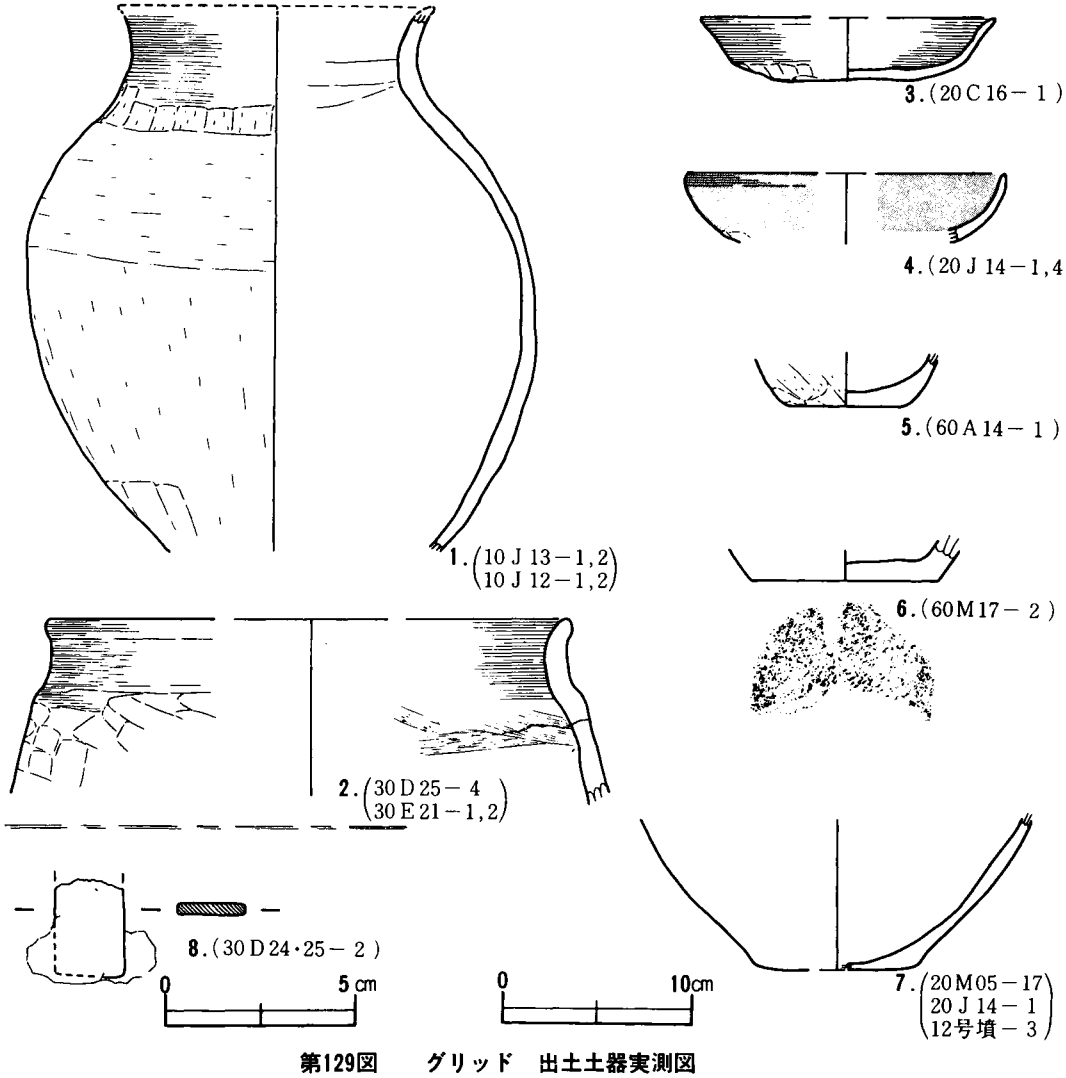
(5)・(6)は底部破片である。(5)は現存器高2.8cm・底径5.8cmを測る。外面はヘラ削りが施される。(6)は現存器高1.5cm・底径9.7cmを測る。

(7)は胴部中位以上を欠損する，胴部は比較的強くはるものであろう。現存器高7.8cm・推定底径7.6cmを測る。

(8)板状を呈する鉄製品である。一端を欠損する，用途・機能は不明，現存長4.9cm・幅3.7cm・厚さ0.6cmを測る。



第128図　L・M・Nグリッド出土土器拓影図



第129図　グリッド　出土土器実測図

(6)グリッド出土石器　(第130図，ＰＬ53)

14号墳ＮＷ区画

粘板岩製の石鏃である。長さ2.5cm，幅2.2cmで，基部の扶入はほとんどみられず，形態は二等辺三角形を呈する。重量は1.51ｇ

60Ａ12グリッド

玄武岩製の石鏃である。長さ2.8cm，幅2.1cmで，基部の扶入は深く，石鏃先端部から基部にかけての中心には自然面が残っている。重量は1.41ｇ

30Ｂ08グリッド

黒耀石製の石鏃である。現存長1.5cm，現存幅1.4cmである。石鏃先端部および左基部が欠損している。

10Ｊ12グリッド

細粒砂岩製の石鏃である。長さ2.5cm，幅1.7cmで，基部の扶入は浅く，形態は二等辺三角形を呈する。材質が砂岩系であるためかなり磨滅している。重量は1.27ｇ

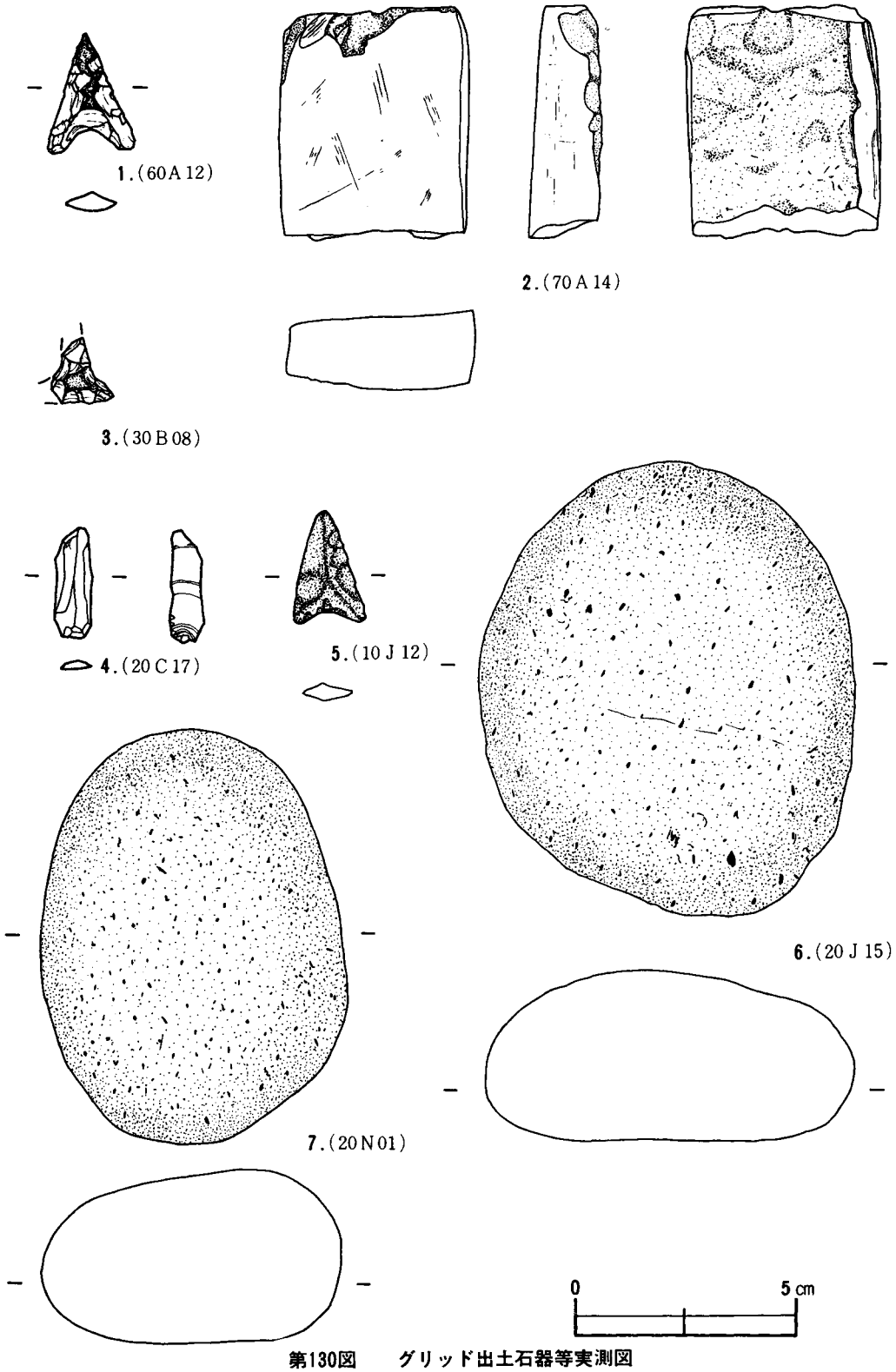
20Ｃ17グリッド

頁岩製のブレイドである。長さ2.5cm，幅８mm，厚さ２mmを測る。重量は0.51ｇ

10Ｍ06グリッド

チャート製の有舌ポイントである。現存長5.1cm，現存幅1.5cm，厚さ３mmを測る。先端部が欠損している。測縁から直線的に基部に至る。舌部は基部の両端が内弯して舌部に移行している。表裏とも縁辺からほぼ直角に入る押圧剥離を施している。重量5.01ｇ

(鈴木)



第130図　グリッド出土石器等実測図

第三章　小　結

第一節　塚について

本遺跡内に所在する塚は，調査の結果７基であった。そのうち６基（１～６号）は，径が4.5m前後，高さが１m前後の円墳状を呈する小規模な塚群である。塚の調査前の状態をみても，墳頂部が平坦であるとか供養塔などを建ててあったという痕跡はなく，単に土盛だけをした塚と思われる。また残り１基（７号）は,本遺跡内において最大の規模(径約5.8～7.6ｍ,高さ1.1m)を有する方墳状の塚である。調査前の状態は，墳頂部に平坦面があり中心部には凹状になっている個所もある。おそらくかつては供養塔など何らかの石造物が建っていた可能性が考えられる。

また塚の位置は，遺跡を北側部分で横断している道路際あるいはその付近に位置しており，台地の先端部には存在しない。遺跡付近を踏査した結果，遺跡西側の道路沿いの両側とその付近にやはり同様の小円墳状を呈する塚群と思われるものを確認した。（千葉市史によるとこれらの塚群と思われるものも含めて東寺山古墳群となっている）またこの道路は台地を西へ走行し，さらに京葉道路を横断し真直に行くと正善院という寺に至る。したがって，この道路も古くからあった可能性があり，塚と道路さらには寺との関係が考えられるのではあるまいか。

次に塚の構築状態について少しふれてみたい。各塚とも構築方法は，ほぼ同じと考えられる。まず旧表土である黒色土を基盤としてその上に２層ないし３層の土を積み上げている。しかも土盛をする際にあまり固く踏み固めている様子はなく全体に軟弱である。さらに土層セクションで観察すると，旧表土の上に焼土の混入した暗褐色土が各塚とも積まれている。これは，本遺跡の表土層下に共通して焼土層および焼土混入土層がみられることから，おそらくごく近接した地点から採土して，それを盛土したと思われる。

出土遺物については，遺物が検出された塚は，3,4,5号塚だけでありほとんどが表土層あるいは封土上面からの出土であるため，塚構築時のものかその後時間が経過した後のものか判然としない。また塚の構築年代は，決定的な出土遺物がないので何ともいえないが，３号塚表土中から「寛永通宝」が１枚出土しているので，少なくともこの古銭が使用されていた時代より新しくなることはないと思われる。したがって３号塚以外の塚も構築状態が以ていることから３号塚とそれほど時間的に隔りのない時期に構築されたのではないかと思われる。

最後に本遺跡内の１～６号のような小さな土盛だけの塚の性格は，どのように考えたらよいのであろうか。地元に塚の由来や伝承がある場合，手がかりとなる遺物が残ってる場合はさほど問題ではないが，それが皆無の場合は全く理解しにくく一応供養，信仰のためということで処理している場合が多い。そこでそれ以外の考え方の１つとして次のような話が残っている。これは印旛郡印西町在住の高橋良助氏から聞いた話であるが『昔，部落で力比べのために，一定時間内にどれだけの大きさの塚を築けるかという競争をやった。』という伝承とそれに該当する小塚群が今でも印西町に残っているとのことで，これなども塚の性格とくに小塚群の性格を考える場合参考になると思われる。つまり塚は，供養や信仰ということ以外の目的でも構築されているのである。

なお，塚に関する記述は，柳田国男集第12巻に詳しく書かれているので参照されたい。

（鈴木）

第二節　古墳について

調査によって明らかにされた古墳の概要を簡単に整理し，問題の所在を明らかにしてゆきたい。

〔墳丘の構造〕

まず墳丘各部の構造を順次みていくことにする。古墳は広域な台地上に位置していることから，各墳とも旧表土上の封土によって形づくられている。旧表土層は５～10cmの厚さの黒色腐植土層であり，墳丘下にほぼ連続して認められる。また全面露呈する時間はなかったが，９号墳中央ではろう化した立木状の木材が検出され，また８号墳後円部中央でも炭化物が検出されており，特に後円部端の旧表土が整地された部分では，土師高坏片が破砕されたような状態で出土していること等から，封土構築前の祭祀行為が考えられる。この旧表土層は墳丘裾部においては削平され周溝へと移行していく傾向があり，縄張等の平面企画が考えられるが，平坦面上に位置する古墳ではほぼ全周しており，斜面に位置する古墳では旧表土を直接穿ち周溝を築く部分もあり，後述する封土を築く段階での差異と関連している。なお，千葉市内の後期古墳群である「へたの台古墳群」[注(1)]ではより徹底した規則性が強調されている。

次に封土についてみると，８号墳後円部は腐植土層で基礎を固め，その上にロームブロックと褐色土を摺鉢状に積み上げ，裾部に腐植土，中央にロームブロックを多く使用する傾向が指摘される。９号墳も同様な工程により構築されていくが，８号墳に比べロームブ

ロックの使用が少なく，褐色土を主体としている。これは墳丘構築の土量が周溝開鑿に伴う土量で得られており，９号墳周溝が８号墳のそれに較べ浅く且つ広く掘られていることから説明される。

以上のように平坦面上の古墳は旧表土直上の基礎固めと，その後に施工される摺鉢状の積み上げで構築されるが，この構築方法が調査古墳の基本的なパターンとして捉えられる。これに対して斜面上の14号墳をみると旧表土上の基礎固めと摺鉢状の構築方法も若干認められるが，一貫せず，クビレ部側からロームブロックを主体に積み，後円部端に向い褐色土を一層づつ簡単に積んでいった様子が窺われる。このような簡略化の傾向は斜面に占地された古墳には少なからず認められ，墳丘を高く築くことの省力化と相俟って，その立地を利用した視覚的増大さを多少なりとも図っているものと思われる。しかしその結果，14号墳の横面からみた墳丘が８・９号墳ほど整っていないことを考えると，このことは，古墳構築に伴う意識の変容の現れとして捉えられるのではないだろうか。

次に埋葬施設との関連をみると，墳頂部封土内に埋葬施設を有する９・11号墳では，埋葬施設は９号墳では墳頂下0.8m，11号墳では1.0mと比較的浅い位置に築かれており，墳丘を摺鉢状に築き上げた後にロームブロックで水平面を築き墓壙の基盤面とし，墳丘の完成をもって被覆を終了している。封土内の埋葬施設は必ずしも明確に検出されたわけではないが，墳丘構築後新たに掘鑿されたものでははいことがこの基盤面の存在から確かである。また８・13号墳の前方後円墳では後円部に埋葬施設が検出されなかったが，これは封土の状態が斜方向の盛土のみで，９・11号墳のよう水平な墓壙の基盤面を構築していないことから説明され，墳丘構築当初に埋葬施設が計画された様子はなかった。

前方部の構造についてみると，８・13・14号墳ともに前方部から後円部端にかかる主軸上の地点に地下式の埋葬施設を有し，盛土は前方部全面を覆うことなく，埋葬施設の被葬を兼ねた程度のごく僅かなものであったことが窺われる。埋葬施設が前方部の形成過程に伴い構築されたことは，14号墳の概要においてすでに述べたとおりであるが，互いに類似している８・13号墳においても同様な傾向が指摘される。一方埋葬施設の構築位置が前方部長，前方部幅を決定し得る要因であることは，杉山氏の論文[(2)]により述べられているとおりである。

〔周　溝〕

周溝はトレンチで確認した後に全掘することを目的に調査を進めた。その結果いくつかの特徴・傾向が認められた。まず各古墳ともに大略墳丘構築に先だち墳丘裾部を整地し，

茶褐色土層から周溝を穿っていることが認められる。このことは前述したとおりであるが，さらに内壁の立ち上りをみると比較的急傾斜をもち溝底に達し，周溝開鑿時のひとつの基準としていたことが窺われる。これは周溝の外線が8号墳はしっかりしているほか，周溝外が大幅に削平されており明確でないことからも考えられる。

外縁をみると内縁からの幅は一定せず，墳丘に対して同心円状（墳丘相似形）に作る意識がうすく，また溝底は幅・掘り方ともに一定せず，13・14号墳ではクビレ部は摺鉢状に築かれており，意識的に一部を深く掘り込んでいることが特徴である。調査古墳では周溝のもつ墓域を画する施設としての意味は失なわれつつあり，むしろ墳丘を大きくみせることの意図のもとに開鑿されたものと思われる。

前方部周溝は内外縁とも一定して作られているが，後円部のそれに較べ浅く且つ狭い。これは13・14号墳では前方部が斜面の傾斜を利用して構築され，封土をさほど必要としなかったことに起因するが，14号墳では後円部を築いた後に埋葬施設の構築を兼ねて前方部が形づくられ，墳丘構築の最終段階に前方部周溝が穿たれたことが窺われ，クビレ部までのそれとは多少時間差があったものと思われる。

〔埋葬施設〕

埋葬施設はすべて木棺直葬である。構築位置は円墳の墳頂部封土内（破壊墳も地山下には埋葬施設は検出されていない。）と前方後円墳のクビレ部中軸線上の地山下とが中心となっている。それ以外のものに14号墳後円部墳頂の攪乱土中より直刀が検出され，封土内に木棺が存在していたものと思われ，11号墳においても鉄器類の出土状態等より，木棺2基が想定された。また木棺への追葬については，封土内のものは墳丘構築に伴い造られ，クビレ部のものも新ためて掘鑿された様子はなく，副葬品の配列をみても追葬の様子は認められなかった。木棺を内蔵する群集墳では，中原3号墳[(3)]において耳環5個の出土から3遺体埋葬が想定され，大厩2号墳[(4)]では第2埋葬施設は副葬品の配列より2遺体が考えられているが，破壊墳を除く5基の古墳においては7基の埋葬施設と7遺体が埋葬されていたにすぎない。11・14号墳のそれぞれ2基の埋葬施設は追葬の必要性から新らたに構築されたものであり，14号墳の両埋葬施設の前後関係は8・13号墳の例より考えて，クビレ部のものが先行していたと思われる。

埋葬施設の構造についてはすでに概要を述べたが，クビレ部中軸線上のものは隅丸長方形の墓壙（掘り方）を穿ち，その中央に埋置された木棺である。13号墳が墓壙の規模がもっとも大きく，掘り込みが2段で2段目を木棺の幅に合せている。8・14号墳は掘り込み

が１段である。棺の壁面は垂直に近く立ち上り箱形の組み合せ式木棺が想定される。鉄釘が検出されていないが，規模の大きい13号墳では木棺の長手を固定する嵌入遺構がみられ，裏込め土で固定した構造のものを考えることができる。また副葬品の状態は床面に木材が使用されていなかったことを示している。

一方調査古墳では石材の使用は全くないが，木棺の形態は箱式石棺を祖形とし，その簡略化された形態として捉えられる。石材が使用されていないことは東京湾北東岸の特色であり，石材の入手困難という地理的要因から設明されるが，同種古墳群中の中原４号墳[5]の埋葬施設には凝灰岩質の石棺が築かれており，諸要素から他の木棺直葬墳との階層差を認めることができるが，反対にこのことは調査された前方後円墳の均一性として捉えられる。

粘土の使用については埋葬施設検出の際のひとつの目安として捉えられたが，13号墳では裏込めの棺蓋にあたるレベル，同じく底面とに水平に敷かれ板状を呈しており，14号墳では裏込め土及び被覆土中に塊の状態で検出された。８号墳は13号墳の簡略化した構造のものである。すべて棺床に使用された様子はない。形態は若干の差違があるが構築上さほど重要でなく，使用量も多いとはいえない。円墳封土内の埋葬施設については粘土の使用は９号墳では全く認められず，11号墳ではロームブロック粒と混合した状態の粘土小塊が認められ，これは棺の被覆に使用したものと判断した。

次に前方後円墳における埋葬施設の位置についてみると，所謂「変則的古墳」の範疇に属し，杉山氏の分類[6]ではすべて「Ａ－Ⅰ－イ」にあてはまる。同様な型式のものは中原５号墳[7]，大厩４号墳[8]，宮本２号墳[9]，婆里古墳[10]，県外では堂目木１号墳[11]，一騎山４号墳[12]，石倉山５号墳[13]，が挙げられる。そのうち，木棺直葬墓で特に本古墳例に類似している構造のものは中原５号墳・大厩４号墳であり，千葉市を中心とした地域圏を形成している。

この両者の古墳群中での位置づけをみると，中原古墳群では木棺直葬のほか前述した箱式石棺を有し，埋葬施設構築位置はすべて地下式であるが撰択地点に厳密な共通性はみられず，大厩古墳群でも規則性は認められない。調査古墳では円墳の墳頂部封土内と前方後円墳のクビレ部中軸線上といった同一古墳群において２通りの流れが存在している。この埋葬施設構築の差異は営造主体者の察祀上の系譜が異なっていることによると考えられるが，副葬品の状況・出土土器等が両者においてきわめて類似した内容を有しており，また限られた地域に群集し方位が同じであること，各古墳の築造手法の類似性等の規制は同一共同体の共同墓地であり且つ技術者集団が一定していた結果として捉えられる。

〔埋葬施設内出土遺物〕

出土状態をみると追葬や攪乱による遺物の移動はみられず，埋葬時の原位置を保っているとともにその大部分が検出されたものと思われる。各古墳の組み合せは，８号墳は直刀，刀子・鏃，９号墳は直刀・刀子・玉類，13号墳は刀子・玉類，14号墳は直刀・刀子・鏃で構成される（表－　）。13号墳の玉類を中心とした在り方は調査古墳中特異な存在であるが，あるいは被葬者が女性であったことを示唆しているかもしれない。各古墳とも同程度の内容を有しており，後期古墳に一般に認められるものであるが，馬具・金銅品等を含まないことは，調査古墳群の階層の低さを物語っており，時間的に後出のものとして捉えられる。

個々の遺物の副葬時における特徴をみると，直刀は鍔を欠いた状態で検出されたものが多く，木質の残存状態から柄木，鞘木を着装しており，９号墳の直刀は二分された状態で出土地点がやや離れ，鋒部は繊維の附着により布に巻かれて副葬されたことが窺われる。鏃は細根式のもの，すなわち両丸造棘箆被式が大部分で，片刃箭式のもの２点を含め一括出土している。平根式のものはそれらとは別の地点から出土し特別な扱いを受けていたことが考えられる。

副葬品一覧表

				8号墳	9号墳	11号墳 北	11号墳 南	13号墳	14号墳 クビレ部	14号墳 後円部
鉄製品	直刀			3	1	2	1		1	1
	刀子			5	3	2		1	1	
	鏃	細根式	両丸造棘箆被柳葉式（鑿箭式）	2	1	4			29	
			棘箆被片刃箭式	1		1				
		平根式	箆被広鋒両丸造三角形式	1			2		1	
		残欠		6本前後	残欠あり					
玉類	管玉							5		
	臼玉							1		
	小玉				42			12		

〔出土土器〕

調査古墳は土師器・須恵器を出土しているが，出土状態は概してよく完形にちかいものが多い。出土地点は周溝底か，緩かな内外壁面の立ち上りからの出土が多く，その他11号墳の墳頂部に直立させていたものと思われる聰が口縁部を墳丘裾部，底部を溝底においてされていて，以上が墳丘構築後に供献されたものとして捉えられる。墳丘構築過程のものについては８号墳の旧表土面より土師器の高坏が破砕された状態で検出された１点と，13

号墳埋葬施設覆土中より須恵器の提瓶と思われる底部破片（図 59－6 ）が出土している。

周溝内の土器はつぎに述べるように周溝下位で検出され，移動は少ないものと思われる。土器出土数は各古墳で一定せず，11・13号墳では坏類を中心として多量に認められ，つぎに9号墳がつづくが，14号墳では短頸壺（図 69－1 ）のみで，8号墳では一点も検出されていない。被葬者数は各古墳とも1～2体であり，埋葬施設を2基内蔵する11号墳では多数の土器を出土するが，同じく14号墳では一点のみである。出土レベルをみていくと地山に接するものは殆んどなく，約5～10cm程上方で検出されたが，一定の時期を経て供献されたものと思われ，底部を下にし意識的に据え置かれた状態が観察された。単一で出土するものと2～3個体まとまって出土するものとがあるが，11号墳では同形態のものが出土地点を近くにしている。周溝内に均等に出土することなく，11号墳では摺鉢状に掘り窪められた地点，13号墳では前方部端の周溝内等に集中している。

今回注目されたことは周溝外側の立ち上りが緩かな地点（9・11号墳）で土師器の坏が検出されたことである。11号墳では周溝の外側が墳丘構築の際削平され，墳丘下の旧表土層よりも低く立ち上り不明瞭であったが，土師器の出土から墳丘周辺が広域な墓域としての意味をもっていたことが窺われる。

個々の土器についてはすでに述べたとおりであるが，土師器は坏形土器・埦形土器でしめられ器形は変化に富んでいる。11号墳の（図46－2・3・4）は体部外面に輪積み痕を残し重量感があり粗製の土器である。また9号墳の（図 30－6 ）は小形で浅く皿に近いがともに供献用に作製されたものとして捉えられ，日常品とは異なる。9号墳の（図－30－5）・13号墳の（図59－1）は須恵器坏身を模倣したものであり，11号墳の（図 45－11）・13号墳の（図 59 －2）は須恵器坏蓋の影響が認められる。全体上体部は浅く扁平さを呈しており，伝統的な土師器の形態をとるものもあるが，鬼高期の後半に比定して大過あるまい。

須恵器をみると坏身（図 30－12 ）・（図 59 －7）は受け部を有するものであるが，立ち上りは内傾度が強く倭小化している。13号墳の坏身は受け部の上面にヘラによる一条の凹線が施されている。底部はヘラケズリにより胴部との間に緩い稜を有し浅く扁平であることが特徴である。このことは陶邑編年[14]でＴＫ209・ＴＫ217の時期として捉えられ，7世紀中頃に比定される。11号墳の坏蓋（図 46 － 1）は口径13.7cmと広く体部がひらくことが特徴であり，同じく7世紀中頃の製品である。

註)

1,後藤和民「へたの台古墳群」,(『千葉市史』第1巻原始古代中世編　千葉市史編纂委員会)1975・3

2.杉山晋作「変則的古墳の解釈(その1)一前方後円墳の平面企画方法を通して一」(『古代』第57号　早稲田大学考古学会)1974・3

3,中村恵次・市毛　勲「千葉市中原古墳群調査報告(『古代』第37号)1962・12

4,沼沢　豊「大厩2号墳」(『市原大厩遺跡』千葉県都市公社)1774・2・9

5,3,に同じ

6,杉山晋作「所謂『変則的古墳』の分類について」(『茨城考古学』2,茨城考古学会)1969・3

7,3,に同じ

8,矢戸三男「大厩4号墳」以下4,に同じ

9,6,による。

10,杉山晋作「婆里古墳の調査」(『羽計古墳群』東庄町教育委員会)1972

11,茂木雅博「堂目木1号墳調査報告」(『茨城考古学』1茨城考古学会)1968

12,高根信和編『常陸一騎山』(大宮町教育委員会)1974・3

13,大森信英・小室　勉ほか「石倉山5号墳」(『土浦鳥山遺跡群』茨城県住宅供給公社)1975・3

14,田辺昭三『陶邑古窯址群』(平安学園考古学クラブ)1969

第三節　住居址及びグリッド出土遺物について

本遺跡において,検出された住居址は2址である。このうち10・20－Mグリッドにおいて検出されたもの(10・11号遺構)はそのプランを明確になし得ず不明瞭な点も残るが,カマドが遺存すること等から住居址として把えておく。また,これ等住居址出土遺物以外にも10・20－L～Nグリッド或いは他のグリッドより当該期のものとして把えられる遺物が出土しており,ここでは便宜的に1)遺構と2)遺物とにわけてまとめてみたい。

1)検出された住居址数が僅少2址であることは　注意され,しかもその占地が　台地平坦部ないしはその付近ではなく,台地縁辺の傾斜面に位置する点もまた注意すべきであろう。まず,住居址数が僅少2址である点については,調査区域が道路幅のみに限定され

たとはいえ，遺構の分布状態からみて集落を形成し得るものとは考えられないであろう。そして，遺構の占地が台地縁辺の傾斜面に位置している点をみても，台地上に平坦面が存在するにもかかわらず，また，大集落内での住居址群外縁を形成する住居ではないにもかかわらず，敢えてこのような地点に構築しているのである。

これ等の点から，２址の住居址は「離群住居址」とでもいうべきもので特殊な職業を営むが故のものであるのか，或いは何等かの「作業場」的な性格のものかと推測されよう。この２址の住居址内或いはグリッドからは量的には少ないが，鉄滓が出土していることから小鍛冶的な職業集団の,または作業場的なものとの関連で把えられるかもしれない。また，この２址が同時期に併存したかは，両者の距離が約30m程あり直接的な切合関係はないこと，出土遺物からの時間的な明瞭な差は見出し難いことから，ほぼ同一時期かないしは極めて短時間内での先後関係が推測される。そして，先後関係が存在したとすれば，10・11号遺構とした住居址が古く001号址が新しいものと考えられる。

このような，所謂「離群住居址」の類例は比較的少なく，千葉県下では柏市鴻之巣遺跡（注１）他10例が知られている(注２)。これ等の遺跡では，１～数址の住居址が検出されているにすぎず集落を形成する規模ではない。柏市・鴻之巣遺跡では，２址が検出され住居址内より鉄滓が出土しており，小鍛冶的性格のものとして把えられる。立地は，台地の中央付近に位置している点やや異なるものの，２址は比較的離れて存在する。出土遺物の様相からみて，本遺跡出土遺物と近似している。他の遺跡例では，本遺跡或いは鴻之巣遺跡例のように鉄滓が出土するものでもなくその性格を異にするようである(注３)。

時期的には，所謂国分期に集中しているが，今後その中での細分が検討されるべきであろう。またその初現例についても，例えば松戸市・金楠台遺跡（注４）のように真間期に比定される例があり，しかもこの住居址からは鉄滓が出土している等注意すべき点がある。ただ鴻之巣遺跡・金楠台遺跡等鉄滓が出土しているものの，製鉄・小鍛冶を証左すべき遺構が検出されていない点，直ちに製鉄址としての性格付けがなされることは問題であろうが，製鉄・小鍛冶が必ずしも住居址内で行なわれたものではないにしても，このような職業集団の居住・作業に関連する遺構であろうことは首肯できよう。そして，かかる性格的な遺構が比較的早い時期に集落から遊離していくであろうことは十分に考えられるところではなかろうか。

また，いわゆる「離群住居址」の全てが，この種の職業集団に関連する遺構であるとは思われず，他の性格のものが存在するものと思われる。今後，この種の住居址を考える場

合，さらに広範囲の遺跡踏査等により母体集団の追求がなされるべきであろう。ちなみに，本遺跡の場合，本台地上及び第三次調査地点には該期の住居址は検出されず，支谷を狭み対岸の石神遺跡（注５）においても検出されていない。本遺跡周辺において国分期の住居址が検出された遺跡は，本遺跡北側約200ｍに所在した東寺山遺跡（注６），稲城台遺跡　（注7）　等があるがいずれも時間差が認められるようである。したがってさらに広範囲の調査が必要とされる。また，石神遺跡西側約100ｍの地点からかつて多量の鉄滓が出土したとのことであり製鉄・小鍛冶に類する遺構の存在が考えられ，注目される。

本遺跡検出の住居址は，いずれも台地縁辺の斜面に位置しており，その特異的及立地とともに斜面に対する調査の必要性を示唆するものであろう。

出土遺物について

001号址或いは10・20－Ｌ～Ｎグリット出土遺物は，その殆どが土師器であり須恵器は数点にすぎない。10・20－Ｌ～Ｎグリット出土の土器は，量的にはやや多いものの接合復元の結果，完形となるものは少なく図示し得るものも少ない。

出土土器は，坏形土器と甕形土器の２種しか認められず，また両者の比率は坏形土器がはるかに多い点が特徴である。

甕形土器は，全器形を窺い得るものは殆どないが，001号址からは小形甕形土器が出土しており少なくとも２種の器形が存在していたものであろう。器形は大型・小型とも著しい差はなく口縁部が強く外反するもので，胴部は強く張らず胴部最大径は中位ないしはやや上位にあり視覚的には肩を有する感を受ける。底部は接合復元し得たものがなく不明であるが，比較的底径の大きなものと思われる。器形において差異があるのは口唇部形態についてである。口唇部は，Ⓐ平坦に整えられ中央が僅少に窪むもの，Ⓑ丸味をもつもの，ⒸⒶに近似するが内端が僅少に立ち上るもの，の３種が認められる。

001号址のものは，Ⓑ（小形甕形土器）とⒸが，10・20－Ｌ～Ｎグリット出土のものはⒶとⒷが認められ，グリット出土のそれは，Ⓑの形態を有するものはⒶの形態のものに比べ大きさがやや小さい点は注目される。

整形技法は，器形と同様大型，小型では著しい差異は見出せず，口縁部が横ナデ，胴部の上方～中位ないしやや下方までは縦位或いは斜位のヘラ削り，それ以下は横位のヘラ削りが施されるものである。胴部下に施された横位のヘラ削りは，回転力を利用したものと思われ，ヘラ状工具も鋭いものと考えられる。

坏形土器は，平底のものと高台を有するものがあるが，平底を呈するものより高台を有するものがはるかに多い点が特徴である。平底を呈するものは，２種にわけられる。Ⓐ坏部内面を黒色化処理或いはヘラ磨きが施されるもので，次のⒷより口径，器高等も概して大きい。ⒷはⒶよりも小さく坏部内面はロクロ整形をとどめる。底面には糸切痕が明瞭に残る。底径６cm内外・器高3.5～4.0cm前後である。

高台を有するものは，その全てが坏部内面に黒色化処理を施されているか，もしくはヘラ磨きが施される。器形の大きさには多少の差はある。

坏形土器における器形の差は，平底を呈するもののⒷと平底Ⓐ，高台付のものとの差が著しく，後者の中での差はそれほどではない。即ち，平底Ⓑは，体部がほぼ直線的に外方に開くものであるのに比べ後者の平底Ⓐ，高台付のものは，多少の差はあれ僅少ながら内弯しつつ開くものである。従って形態・整形枝法からみて，坏形土器は，３類にわかれるが，平底Ⓑと他の二類は大きな差異が見出される。平底Ⓐと高台付のものは，器形上の差はあれ技法的にはその差は少ないものである。そして平底Ⓐと高台付のものの特徴は坏部内面に黒色化処理が施される点であり，中には「ヘラ磨き」が施されているだけのものもあるが，黒色化処理が施された土器は全て「ヘラ磨き」されている点を重視するならば平底Ⓑ以外のものの殆どが同一技法で整形されたものと思われ，量的にも平底Ⓑよりもはるかに多い数量を示している点は注目すべきであろう。

坏形土器底部切離し技法については，実測図中或いは第127図，第128図の底部拓影図に示したとおりである。

平底のものについてみると，糸切りによるものが多いが中には外周を回転ヘラ削りするものもある。高台付のものについては，高台貼付整形の際切離し痕を消法していることから不明な例が多い。しかし，１例のみではあるが，高台剝落部分に糸切痕が認められ糸切によっていることが窺える。

この他，若干例であるがヘラ切りによるものかと思われる痕跡を残すものがあり，また手持のヘラ削りを施されたものも見出せる。このような例は，量的には極めて少なく，本遺跡出土土器については糸切りによる底部切離しが主流を占めていたものと考えられる。

以上本遺跡出土の遺構及び遺物について記したが，これ等の特徴よりすれば，平安時代（国分期）に比定できるものと思われるが，国分期のどの位置に比定されるかは今後検討されるところである。

註)

1.「柏市鴻之巣遺跡」1974年2月千葉県都市公社

2.「高根北遺跡」中山吉秀「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III」所収1976年4月

3.「木刈峠遺跡」鈴木道之助「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書III」所収1975年3月及び(2,)等がある。

4.「松戸市金楠台遺跡」千葉県都市公社昭和49年3月　調査区域が路線内という限定されたものではあるが，台地上に殆ど土師器の散布をみない点から，他に存在したとしても極く僅少であろうとの推察され，さらに国分期において単独で検出される住居址例の現象を真間期まで辻らせる考えを示されている。

5.1975年(財)千葉県文化財センターにより調査された報告書は近く刊行予定である。

6.「東寺山遺跡調査概報」玉口時雄他　1975年

7.「東寺山I地区発掘調査概報」丸子　亘他　1971年

第四節　土壙について

本遺跡において検出された土壙は，９址を数えるがその性格は一様ではなく，検出された範囲も一定箇所に集中するのではなく調査区域全域に散在している。各土壙の概要は前章において記述されているので，ここでは２，３のまとめを記しておきたい。

検出された第１～９号土壙は，形態・出土遺物等から，次のようにまとめられる。

1）隅丸長方形を呈し，底面はほぼ平坦となり，横位断面は逆梯形状乃至は箱形を呈するものである。第１・３・６号が，この形態の中に含まれる。いずれの土壙も時期を決定し得る遺物は皆無であり，構築された時期は不明である。これ等土壙は，古墳と重複せず，長軸は略東西を示す共通点を有し９号墳南側から東側にかけて存在し，土壙の埋土は上部にザラ目質の黒色土が堆積するという特色を示し人為的或いは自然的埋没過程を経過したとしても類似した環境乃至は近接した時期が推測されよう。土壙の性格としても不明とせざるを得ないが，土壙底面長約2.20～2.80m・同幅0.6～1.10mと近似した形態を示している点は共通した性格を示唆するものと思われる。

2）隅丸方形を呈するものである。第４号土壙が該当するが，西側を溝Aによって切断されており形態・規模に不明な点が残る。本土壙は，底面より土製小玉が出土しておりまた埋土上面には土師器・坏形土器が正位で出土する等墓壙としての性格が窺えるものである。また，本土壙は，９号墳北東側の周溝外側に近接して位置しているが切合関係は見出せない。

土壙埋土上面出土の土師器・坏形土器は，供献されたものと思われる。遺構構築時期は古墳時代後期の所産と考えられ，本遺跡に所在する８～14号墳第とさほど隔りのない時期の構築と思われる。

現状での規模は，土壙底面長約0.8m・幅約0.5mを測るが，恐らく本来は，長方形を呈する土壙と思われる。土壙の形態としては，第１・３・６号土壙と同様なものであろう。

3）隅丸方形を呈し掘込みは比較的浅く，土壙底面に多量の炭化物を有するもので，第２・９号土壙がある。両土壙は，細部においてやや異なる点はあるものの，底面に溝状の遺構が施されている点が特色である。また，土壙底面に密着して多量の炭化物が出土しており第２号土壙では炭化物の中には自然木のものが含まれていた。さらに，底面は一部分ながらも火熱による赤化現象が認められ，第９号土壙においては，少量ながら焼土の堆積

も認められた。このような状況からして，第２・９号土壙は，土壙内で焚火され，しかもそれは多量の炭化物を生じさせるものであったことを示す。この多量の炭化物は使用目的が存在したものか，或いは焚火の材料としてのものであるかは不明であるが，検出された炭化物はその殆どが細片となっていることは後者を示唆するものであろうか。

これ等土壙は，９号墳南西側に近接して位置しており，９号土壙は，９号墳周溝を切断して掘込まれている。土壙内出土遺物は，炭化物の他は土師器・須恵器の細片が若干出土したにすぎず，これ等遺物が遺構に伴うか否か疑わしく不明とせざるを得ない。また，両遺構の性格としては，焚火することに伴う施設として考えられ，底面に施された溝状の遺構もそのような意図のもとに構築されたものであろうが，どのような目的で焚火されたのかは不明である。また，これ等土壙に上部施設が伴なっていたか否かも不明である。

4）不整な円形を呈するもので，第５・８号土壙がある。第５号土壙は台地ほぼ中央に，第８号土壙は南東側斜面に位置している。両土壙は，埋土中に多量のローム土或いはローム・ブロックが堆積しており，人為的な埋土が推測される。土壙内からの出土遺物としては，第５号土壙より縄文土器，第８号土壙からは土師器が少量出土しているが，いずれも土壙構築時期を決定し得るとは考え難く，不明とせざるを得ない。形態としては，第５号土壙の底面は平坦であるが，第８号土壙は比較的凹凸が著しく，平面的形態も極めて不整である。遺構の性格としては，上記以外の遺物の他は何等出土していないため不明とせざるを得ないが，両者の覆土中にローム土・ローム・ブロックが堆積している点が注意されるところであろう。しかし，両者とも共通した性格を有するものかは疑問である。

5）やや不整な隅丸長方形を呈するが，他の土壙に比して掘込みが極めて深い。第７号土壙のみである。遺構は，台地南東側の斜面に位置し，掘込みは約1.9ｍ前後を測り，断面は僅少ながら袋状を呈する。遺構埋土は，底面～検出面まではローム粒子或いはローム・ブロックを混入する土層が堆積し，各層の著しい差異はない。土層は全体に軟弱である。土層の堆積は自然的というよりは，短時的な埋土が考えられる。土壙内からの出土遺物は皆無であり，構築時期は不明である。本遺構の性格・機能等も不明とせざるを得ないが，立地・深さ等が示唆しているかもしれない。

以上のように，本遺跡において検出された土壙は，形態・占地・埋土等から上述のようにわけられる。本遺跡における各時代の様相は，縄文時代・古墳時代・歴史時代等の遺物・遺構が認められるが，検出された土壙の中で縄文時代に属すると考えられるものは無く，少なくとも古墳時代或いはそれ以降のものと考えられる。古墳時代の本遺跡は，第三次調査

地点に住居址群が検出されている以外はなく，第二次調査地点では，古墳が構築され，所謂墓域としての性格である。そして，国分期に至って住居址が営まれ生活域が形成されるが，少なくとも集落を形成するまでには至っていない。その後，溝状遺構を伴う生活域(広範囲での）が形成されるのである。このような変遷過程にあって，検出された土壙は，第4号土壙のように明らかに墓壙として構築されたものがある等，その性格は墓壙的性格のものと生活的な性格のものに大別することが出来よう。とすれば，1)・2)・4)とした土壙は前者の性格が推測され，3)・5)とした土壙は後者の性格が推測されるのではなかろうか。

第五節　溝状遺構

第二次調査において検出された溝状遺構は，A～Eと呼称したものであるが，このうちDとEについては走行状態からみて同一の溝状遺構と把えられる。従って，本遺跡においては4条の溝状遺構を検出したこととなる。

A～Eの各溝状遺構については，既に前章で記されているので再述は避け，二・三の点について述べてみたい。まず，各溝状遺構の占地状態及び走行状態についてみると，溝状遺構A（以下溝Aと略す，B～Eについても同じ）は，台地ほぼ中央に位置し略北東－南西方向に走行する。これは台地を横位に走行するもので，調査区域南西側において溝Bと合流するがこれ以南は検出されていない点は注意される。また本遺構内底面にピットが検出されておりピット検出範囲は，C－60・50，C－10・20グリット内に限定されている点をも併せ他の溝状遺構とは特異なる点を有している。さらに，調査区域内における溝Aは，大部分が農道と重複している。

溝Bは，台地南側に位置し略北西－南東方向に縦位に走行する。この溝状遺構は巨視的にみれば，溝Aとの合流点を境として僅少ながら走行方向が異なっている点は注意すべきであろう。即ち，合流点より北西ではやや南側に片寄りを見せる。このことは，北西側部分が台地南西側に入込む支谷に落込むためと思われ，意図的に構築されたものと考えられる。また，この溝状遺構において特異な点は，溝Bとの合流点より南東側では2つの溝状遺構に分岐することである。しかも，この間には低平ながらも土塁状の盛土がなされることである。土塁状の盛土は合流点より北西においても認めることができ，溝Bに沿ってほぼ全域に土塁状の盛土がなされていたものである。なお，溝Aとの合流点の南西側には10号墳が位置しており，恐らく土塁或いは溝状遺構構築に際して長方形に変形したものと考

えられるが，土塁状の盛土とは一段高くされており特種な意図が窺える。溝Aと溝Bとは時期差は認められず同一時期における構築と考えられる。従って，溝状遺構A及びBによって台地は三区分されるが，溝Bの南西側は調査区域外であるため不明であるものの，この部分が溝Bにより画されており重要な位置を占めていたものと推測される。

溝Cは，台地南東端部の谷側斜面に位置しており略北北西－南南西方向に斜方向に走行する。50Nより谷側では不明であるが，50N北側では途中で消滅しており，谷側へ延びているものであろう。このことは台地上部に対するよりは谷側に対して何等かの意図があったものと思われる。

溝Dは，台地北西側に位置しており略北東－南西方向に横位に走行する。検出された範囲は70・60・50－Fグリット及び20Fグリットに亘っているものの連続したものではない。しかし，20Fグリットに検出された溝Eも同一の溝状遺構と思われる。本遺構は，9号墳墳丘北西側を通り8号墳墳丘南東側に延びており，古墳との間接的関係を考慮する必要があろう。つまり，溝D及び溝Eは，近接して構築されていた8号墳・9号墳墳丘裾付近を切断して築かれている。このことは，両古墳を避けたためとも考えられるが，逆に古墳を利用したと考えることも可能と思われる。本溝状遺構が8号墳南側において溝Bと合流(交差）するか否か確認出来得なかったが，恐らくは合流しないものと思われ8号墳墳丘内で消滅するものと考えられる。

以上の4条の溝状遺構について占地・走行状態を見てきたが各溝状遺構は相互に切り合うことなく構築されておりその配列も台地中央において「T」字状に築かれた溝A・Bを中心とし，その北西側にあって溝Aと併行するように溝D・Eが，台地南東側にあってやや斜位に築かれた溝Cがあり，時期的な問題が残されている。この点については，各溝状遺構からは構築時期を決定し得る遺物は皆無であった。しかし，溝Aは古墳時代後期と考えられる第4号土壙（墓）を切断していること，溝A・B・Cの埋土中に宝永期の火山砂と考えられる黒色砂が堆積していること，溝AとBは同一時のものと考えられること，溝Bは8号墳を切断していること，溝D・Eは8号墳或いは9号墳を切断していること等々の点を考えるならば，同一時期というには証左を欠くものの極めて近接した時期の所産と考えられよう。そして，その時期を古墳時代以降から宝永年間の間に求められよう。溝C・Dは，溝A・Bの補助的な機能を有していたかの如くである。また，溝Aには底面にピットがほぼ一列に並びかつ溝の南東側は北西側より高くしかも土塁状の盛土がなされていたものと考えられ，一部ながらもローム・ブロック混入土及び旧表土層と思われる黒色土が見出さ

れた。この土塁状の盛土は既記したように溝Aの南側にも認められるものであり，他の溝C・D・Eにはこれが認められないことからして重要な機能を果していたものと考えられよう。溝D・Eは土塁或いは溝幅・深さにおいて溝A・Bに劣るものの8号墳・9号墳を利用すべく築かれたものと考えられ，溝A・Bを意識した上での構築とみなされよう。溝Cはやや異質な感を受けるが，台地北東側に群集した11・13・14号墳を意識した上での構築と考えることも可能であろう。とすれば，やはり溝A或いはBの機能を補助する意図が強く窺えるものと思われる。

以上のような溝状遺構の構築はとりもなおさず溝Bの南側にあって南西側に突出した台地部分を防禦するものと思われる。本遺跡においては，中世城址と見做得る顕著な台地整形ないしは遺構は検出されていないが，本遺跡南西側の台地は「浅間館址」(注1)として把えられており，本遺跡で検出された溝状遺構は，或いは「浅間館址」との関連を考慮する必要があろう。 (矢戸)

註)

1,千葉県教育委員会「千葉県中近世遺跡調査目録」II　1971年
この中の補遺として「千葉市東寺山町浅間」—「浅間館址」として登録せれているが，規模その他詳細は記されておらず不明である。

東寺山戸張作遺跡

第３次調査

第一章　調　査　諸　説

第一節　遺跡の環境

立地　本遺跡は，房総半島の北西，千葉県下総台地の一隅，東京湾内を臨む小台地上に営まれた，先土器時代を始めとし，縄文時代，弥生時代，古墳時代，江戸時代まで断続する文化の地である。

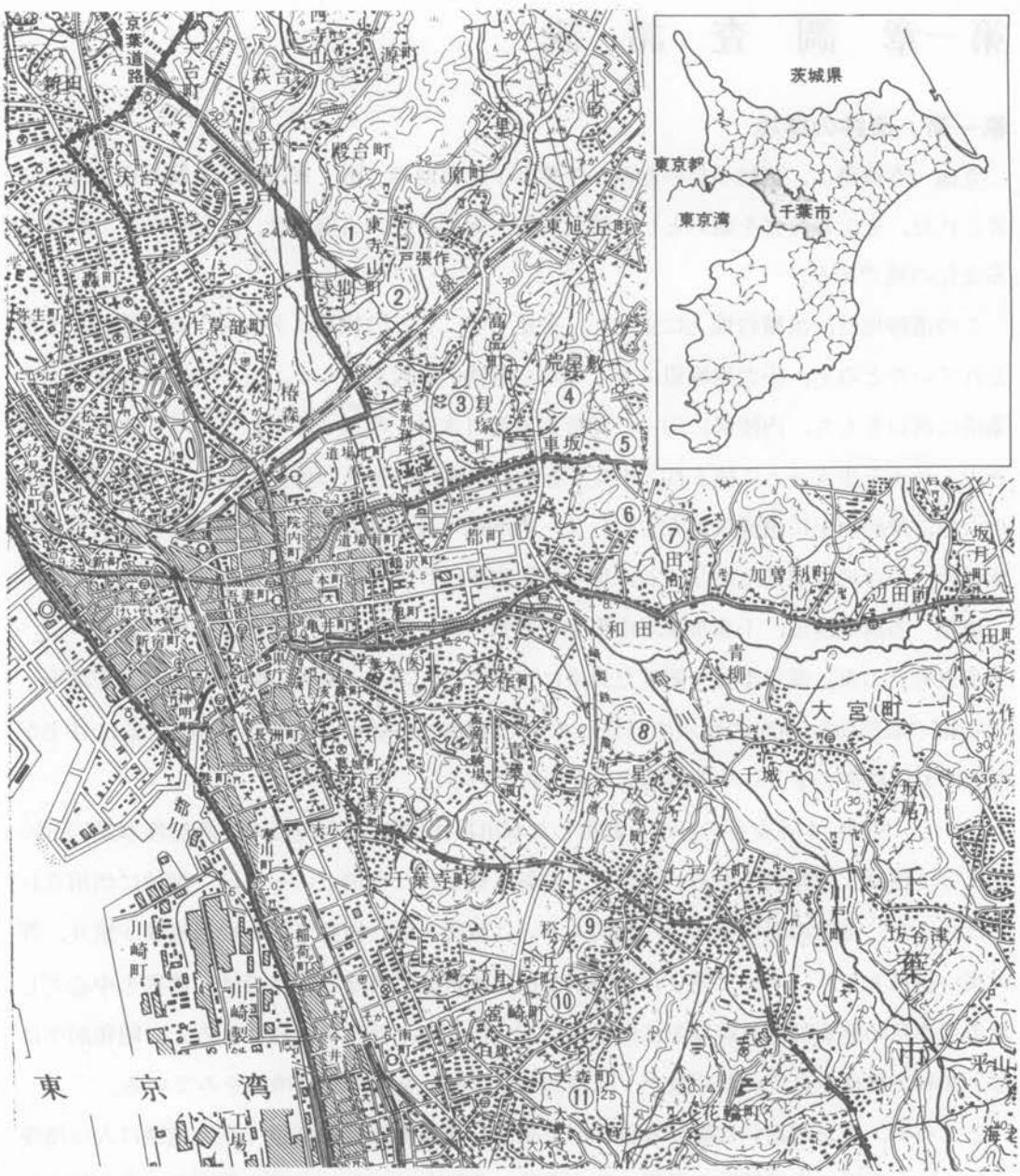
この遺跡地は，洪積台地上に立地し，後述する二谷との挾間にあって，自然環境にも恵まれていたとみえ，小台地縁辺にありながら遺構の重複が窺えた。谷の一方は，東京湾千葉港に河口をもち，内陸部に向って開折する都川水系，葭川（よしかわ）と呼ばれ広いこの本谷と，東寺山・廿十五里（つへいじ）支谷とに挾まれ，小支谷を刻む東寺山の舌状台地先端部で，西に突き出た小台地，緩斜面上に遺構は存在した。又，本遺跡で最も高い地点は，標高27ｍを測り一号塚附近，小台地の根部にあり，谷津田との比高差は17ｍを計る。

地理　当該遺跡地，千葉市東寺山町小字戸張作は，現今の京葉道路出口附近に在って，千葉市殿台の東，葭川本谷を隔てた対岸に位置するもので，東寺山町は，県都（千葉市）市街地の北部約2.5ｋｍの地点の郊外にあって，標高25～29ｍの台地谷側縁辺部に住宅が配置され，農業を主とした集落構成がなされている。

しかし，近年，本谷支谷の谷津を利用した水田耕作地は，組合組織の区画整理事業（宅造）によって消滅化の傾向にある。それ故，支谷に刻まれた台地上の一部は，畑地に活用されてはいるが，地味の悪いカ所は，戦前あるいは戦後を通じ植林された松杉椎欅が繁り，背の高い樹林となり，木々に囲まれた静閑な田園地帯を思わせる。今では，農業を中心とした生活集落の歴史的開村時期を江戸時代に求め得るが，部落の記録によると，昭和20年には，30軒で構成されていた戸数が，昭和50年では90軒を越す程に増加をみている。

ところが，東京湾沿いに延びる首都～千葉間を結ぶ幹線自動車道・京葉道路は人口増等に伴ない，市内の交通緩和を目標に流入交通の分散をはかり，京葉工業地帯とを直結するバイパスとして，殿台出口から東寺山を通じて延長することとなったので，昭和46年から京葉道路ならびに国道16号線，道路網整備事業にあわせ発掘調査が行われ，すでに「京葉」で報告されている7遺跡の他，昭和49年文化財センター発足，最初の事業として「東寺山戸張作」「東寺山石神」「荒屋敷確認調査」に続いて，戸張作第三次調査として，昭和51年度本調査を実施したのである。

今回実施した調査は，前述したごとく京葉道路及び国道16号線にかかわる建設に先き立

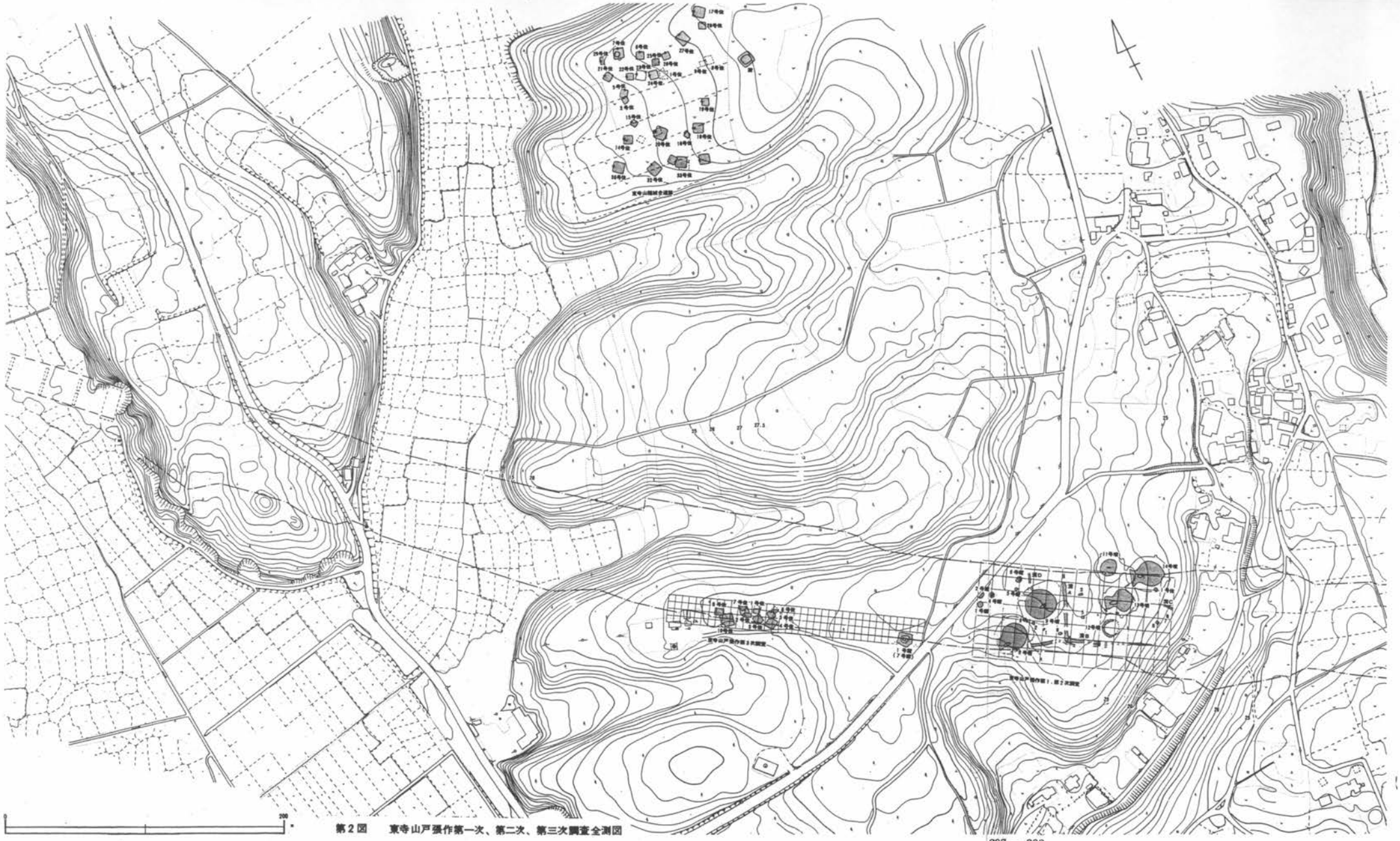


第1図　東寺山戸張作遺跡および周辺遺跡

すでに調査された京葉関係遺跡(京葉1参照)

①東寺山戸張作遺跡　⑥兼　坂遺跡
②東寺山石神遺跡　⑦聖人塚遺跡
③高　品遺跡　⑧星久喜遺跡
④荒屋敷貝塚遺跡　⑨宮　崎遺跡
⑤車　坂遺跡　⑩大　森遺跡

この地図は建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の(1/5万)地形図を複製したものである。(承認番号昭52総複・第172号)



第2図　東寺山戸張作第一次、第二次、第三次調査全測図

って，昭和51年４月から４ヵ月を要し実施した狭細な路巾の部分発掘で，この間に，先土器時代の石器，縄文時代，弥生時代の散布包含地，古墳時代の集落址，江戸時代に設けられた塚の調査，各期，各様の文化の遺構を調査したのであるが，なかでも古墳時代集落の研究に対し，貴重な資料を提供するとともに，緑色片岩を用いた石製模造品を造る工房址の検出をはじめ，学術的に注目される多くの資料を発掘することが出来た。

これら資料は，東寺山戸張作遺跡が位置する千葉市内には，先土器時代以後，縄文時代環状あるいは馬蹄形を呈す大型貝塚などの出現，多くの遺跡が知られるごとく，本遺跡と密接な関係が有ると考えられるので，周辺の各時代の遺跡地と歴史的環境についても紹介し現代との繋ぎとしたい。

先土器時代　房総半島では，いまだ化石人類の発見例は聞かない。必ずしも人間が生活するための自然環境に恵まれていたとはいえないが，近年関東ローム層軟質部から，細石器，ナイフ型石器，刃器片等の検出が有り，遺跡報告例も増している。

東寺山地域では，石神遺跡，戸張作第一次調査地に，頁岩を用いた細石刃等，木戸作遺跡では掻器，車坂，兼坂の尖頭器，刃器片等の出土があり，千葉市県立コロニー内遺跡でも検出報告されている。

石材は，チャート，黒耀石，硅質岩等が用いられる石器文化が遺存し，交易についても研究されているところでもあるが，当遺跡では，安山岩製尖頭器単独出土の他，調整痕をとどめる刃器状剝片，ナイフ状の剝片の他，小型の剝片のみが検出され，細石器文化を推わせる遺物を検出したが明確な住居の痕跡は認められない現状である。本遺跡もまた先土器時代の遺物は，房総のあけぼのとして注目に値する。

縄文時代　青森県五戸町出土土偶等によって示される縄文人（鈴木尚，日本人の骨1963）は，現代日本人と異なる顕著な特徴として，肢骨は太く扁平で，顔は眉間から鼻にかけて隆起し，歯列がそろい下顎も大きく鉗子状咬合（毛抜き合せ）で頭骨の大きさから顔面が広く見える特徴があり，この時代縄文時代人は，地形を利した狩猟生活から，漁撈生活へと環境適応を示したと云える遺跡が存在する。

千葉県の縄文時代の最盛期は，この時代中期から後期にかけて，台地全域あるいは環状ないし馬蹄形を呈する大型貝塚の発達を見る時代である。石器文化と呼ぶよりも，むしろ土器文化時代と呼称した方が妥当であり，既知の貝塚遺跡として，明治時代から多くの人骨発見記録のある千葉市加曾利貝塚をはじめ，学術的な見地から重要遺跡に選定された「荒屋敷貝塚」を中心に草刈場，大門貝塚，長谷部，蕨立貝塚，時代は下るが，東寺山遺

跡近隣には，園生，牡橋等があげられる。当時日常使用された土器にも変化が見られ，尖底の煮沸けい態をとっていた底部は平底に用途的にも類別され，貯蔵用の大型土器の出現を見る。紋様の多様化は，加曾利式を始め，阿玉台式の標準遺跡が存在するのもこの時代である。

この時代の終末晩期には，土器も薄手になり大きな取手や装飾，臨海性の貝塚も消滅している。次の時代への移行期で，稲作文化への黎明期として，生活環境の変化が窺える時代である。又貝塚においては，死者の埋葬が行なわれ，特殊遺跡として注目される。そして先に触れた土偶の出現もこの時代の文化である。

弥生時代　本遺跡周辺でも弥生前期の遺跡は発見されていないが，前期は人類学的には関東地方の縄文時代人の移行期と考えられている。この時代の特徴的弥生人は抜歯の風習を伴い黒潮文化と呼ばれ，海流と半島の関係が注目されている。大きな貝塚をもたない弥生時代が，縄文時代の時間的長さに比らべ非常に短いが，特殊遺跡として岩名天神前，洗骨葬文化がある。土器の焼成技法にも進歩発展がみられ，前時代より薄くなり，銅鏃，銅鏡等金属器が供伴する時代で，稲作農耕文化としてとらえられる。千葉では弥生中，後期にわたり遺跡数も多く城の腰遺跡，星久喜遺跡，大森遺跡等道路関係での調査がある。

古墳時代　宮崎遺跡，星久喜遺跡，大森，上の台等，東京湾沿岸に発見され，住居址内にカマドを持たない炉のもの，谷津田に面し台地上縁辺に住居を構え，幕張上の台をはじめ工房址の出現がある。この時代の伴出遺物には交易圏も広く，微細には地方差はあるが遺構，遺物は統一的である。

後期には，住居址の規模が平均化し，この時代の埋葬文化として代表される古墳群，古墳の数が増大し群集化している。本遺跡では，石神遺跡，戸張作遺跡，稲城台遺跡等があげられる。　（第２図参照）

中世の遺跡としては，館址，城址があげられるが中世以降の遺跡は，表土層の覚乱によって，調査例が少なく遺跡調査地が現在の村落に近づくためでもあると云われている。

東寺山遺跡周辺では，殿台，浅間台館址があり，千葉氏との関連の上に報告されている。

以上，本遺跡，戸張作と密接な関係を有すると考える周辺遺跡の文化等について，「千葉市史」をはじめ概報告書を参考に歴史的流れと環境を記述したものである。

第二節　第三次発掘調査の概要

当該調査地周辺及び京葉道路関係遺跡については，東寺山戸張作(第一次・第二次)，東寺山石神遺跡の他，先に昭和46年以来の発掘調査終了分については，1973年「京葉」と題して報告がなされている。

当時，昭和45年，路線一帯の遺跡分布調査は，千葉市教育委員会及び千葉県教育委員会により，工事が本格化する以前に，遺跡地分布調査が実施されており，報文あるいは略報という形で知らされている。

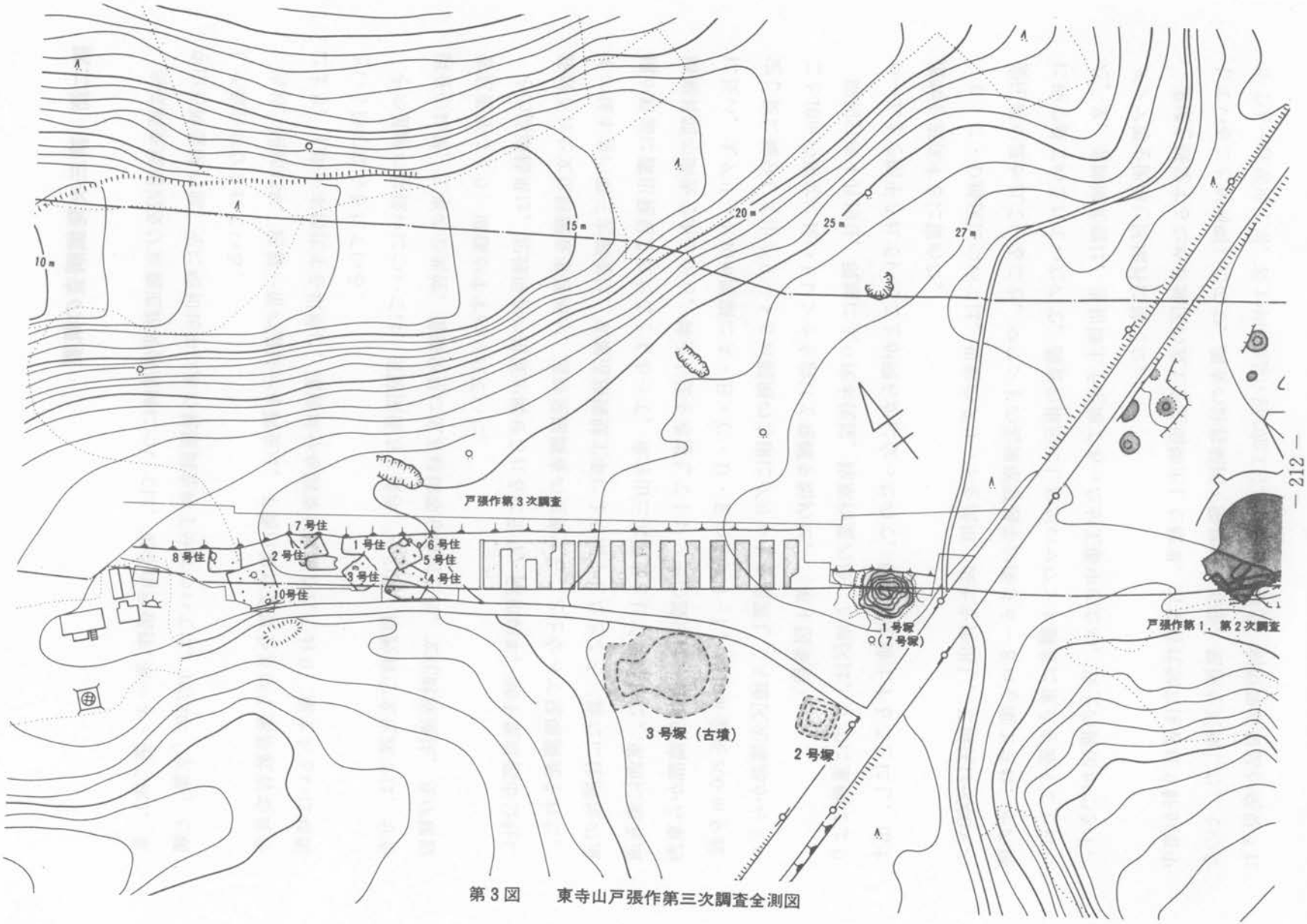
その遺跡の取扱いについては，道路関係方と接渉，その間，県教育庁文化課では，分布調査の結果，工事の公共性，遺跡発見に至る経緯等も検討され，文化財保護法，及び建設省覚書等により，協議がすすめられていた。

その協議結果は，記録保存の措置が構ぜられるに至り，昭和46年，㈶千葉県都市公社に新設された文化財調査事務所が，遺跡発掘調査の実施することとなって発掘調査された。その後本書の第三次調査は，京葉道路擁壁工事により削平したところ，新たに住居址の遺構が断面に露出発見されたこともあって，東寺山三次調査として実施した。東西に走る道路幅員間の調査であるから，排土方法を考慮してトレンチの設定は，台地先端部から東西に長い，大グリット40m間隔にA・B・C・D・Eの5グリット，幅10m全長200mを設定し更に細分して小グリット5m間隔の方眼にグリットを設置し，A地区先端部から5mごと10mの南北に長いトレンチを設けて発掘を始めた。（第4図参照）

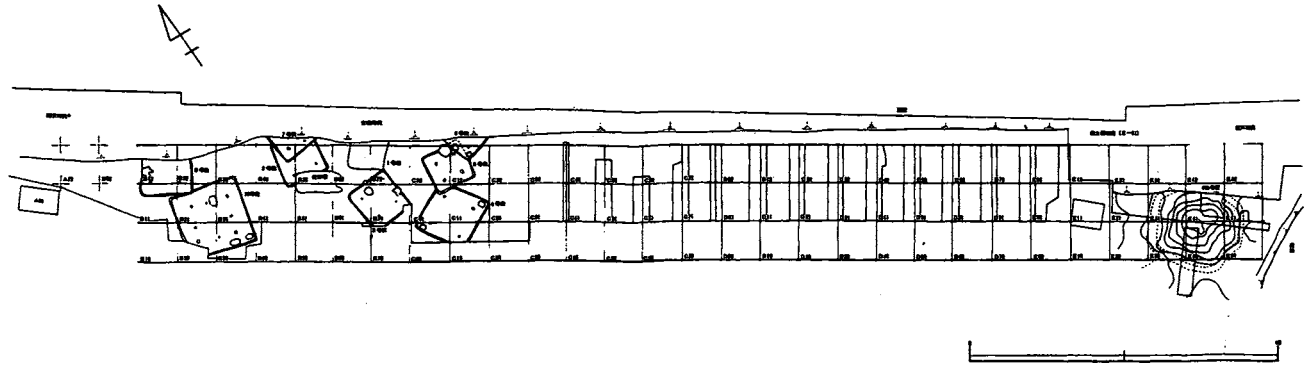
昭和51年4月19日，現地に入り伐木伐採，除草作業の後，A地区は，すでに重機によりロームまで削平されていたことが明らかになったので，移動層を排土することにし，出土遺物を表採するに留めた。

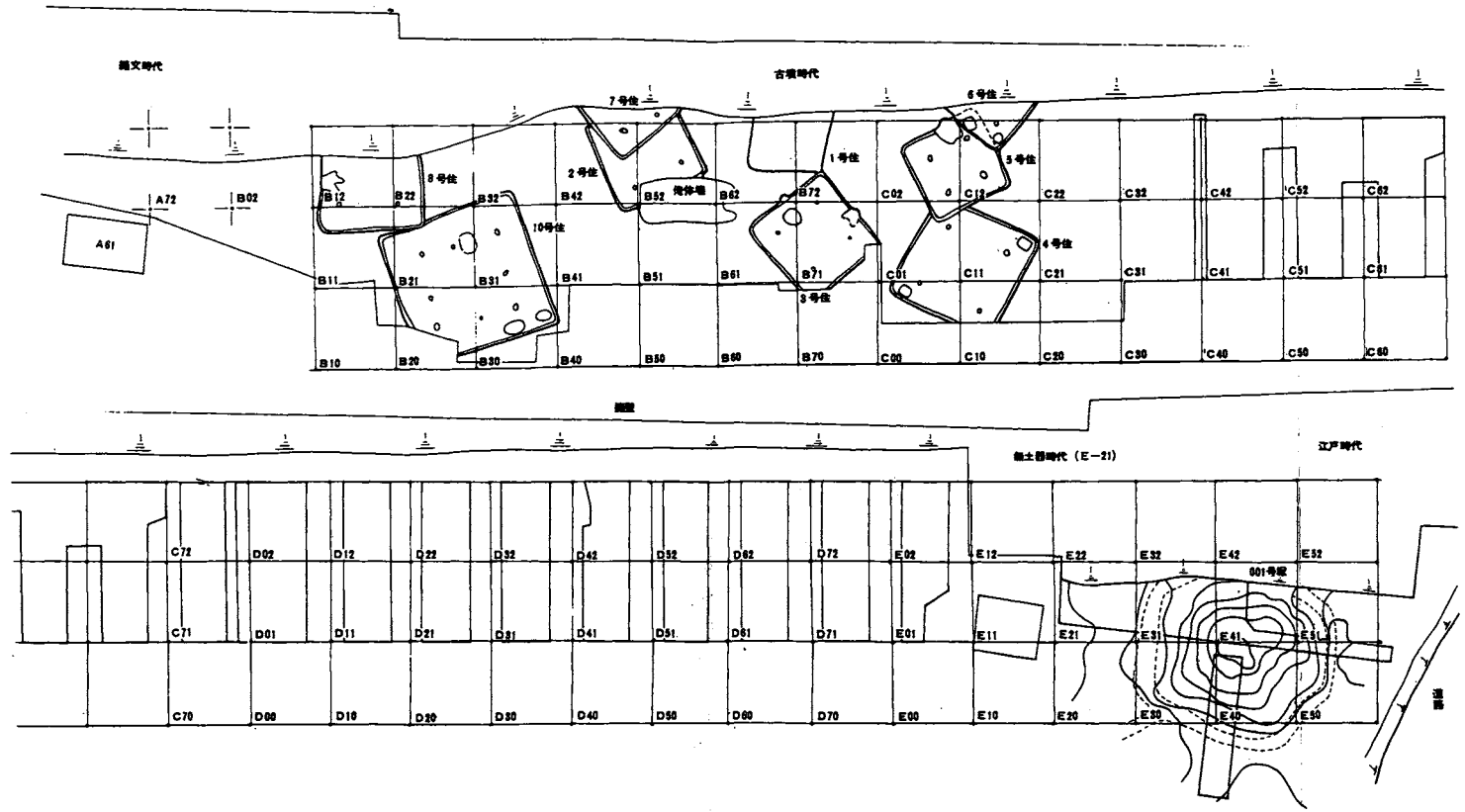
B・C・D地区については，規定のグリットを活用，表土を排出し，E地区は6000Vの変圧器が置かれていること，マウンドの北側裾部過半が深さ6～8mも削土され，その跡に砂で裏ごめされていたので，調査の指示にしたがいマウンド調査に重点を置くことにした。又，遺跡地北側は，当初排土予定地であったが工事中のため，表土の排出ができず，ダンプ等を使用し区域外に捨てた。

遺構を確認するためB地区の表土を全面排土した結果，古墳時代竪穴住居址9軒が集中していることが判明したので，調査の許容範囲で隣接地を拡張，発掘を実施した。そのなかでも一住居址上層，表土中に結晶片岩の加工片及び白玉，勾玉，剣型等石製品が発見され



第3図　東寺山戸張作第三次調査全測図





第４図　東寺山戸張作第３次調査グリッド配置図

たので，調査記録は１点１点最後まで平板に記録したので調査は長きに及んだ。

51年８月５日最後に空撮を行い詰所，発掘機械を撤収，現況写真記録をなし発掘を終了した。

調査の成果（第３図）

Ａグリット地区　除草後地層表面の移動土層の中に縄文時代，弥生時代の土器片・土師器片等の散布が確認された。この地区は，台地の先端であり，現地表は，ハードローム面まで削平されて，旧状はとどめていなかったが地形的には，その縁辺に，竪穴住居址等の遺構が設けられていた可能性が推定される所でもあった。

Ｂグリット地区　ＢからＣグリットにかけて古墳時代の集落址の一部が重複して確認されなかでも，緑色の結晶片岩を用いた工房址が注目される。発掘成果，古墳時代の土器を伴う住居址９軒，そのうち工房址１，俺体壕２等である。

なお隣接地であるが東寺山石神遺跡（昭和50年調査）では，同質材を用いた石枕の他，石製模造品が発見されているが，材質的には本址と同じ緑色片岩である。

Ｄグリット地区　当該地区は，本遺跡地の中央背棟部にあたる位置ではあるが，遺構の存在はなく，土器片の包含する文化層が確認されたのみである。

遺構はないが広場的に活用された部分と思われる。

その他，Ｄ－７２グリットからは，食用に供された哺乳類犬の骨を検出した。

Ｅグリット地区　東側道路までの25ｍの間に，古くから知られていたとみえ，踏み付け道をともない，変形してはいたが，マウンドの有る塚一基が確認された。この塚には伝承もなく出土遺物，構築方法及び盛土の計画性から考え，江戸時代の構築と解される。

更に塚マウンド北西側裾部，電柱設置場所Ｅ－21，標高26.20ｍ軟質ローム層中から石片18点が検出され，１点はナイフ型を呈するが，すべて剝片である。

第二章　遺構及び遺物

第一節　第１号塚（第一次調査第７号塚－ 第５・６・７図 ＰＬ５，）

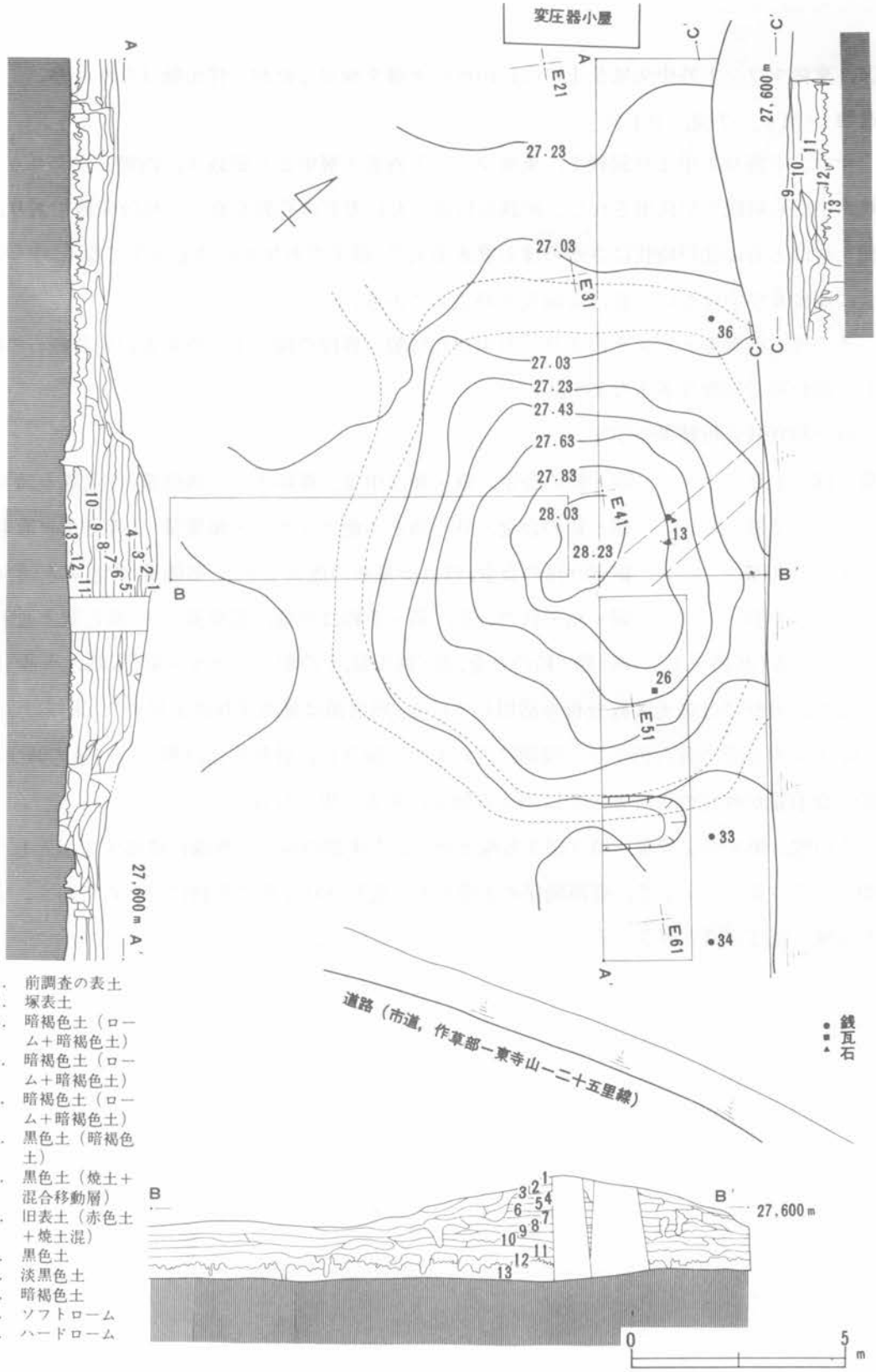
当該の塚については，昭和49年12月に調査され，本報告書に記載（第三章，第二節７号塚として，鈴木定明君により，前述されている塚と同一のものであるが，51年度に前者の申し送りを継ぎ，東寺山町に分布する群中では，規模が大きいこと，又，形態が少し異なる外観であることもあって，今回本調査を実施したので調査経過，及びその結果等を補足の意味で述べてみたい。

本塚は，東寺山町の本部落が営まれる集落の南西，住宅のない台地の山林地帯に所在しほぼ台地中央を通り，南北に延びる市道（作草部，東寺山，源町，廿十五里，四街道線）左側沿道にあり，標高27ｍの台地上に低平ではあるが，土でマウンドを構築した塚山で，現在の地籍，千葉市東寺山町409番地に位置する。

昭和51年４月19日マウンドの除草の結果，外観的には，本塚上は，松，ナラ等雑木が植えられ，成長して樹木となっていたものが，前回の調査及び道路工事によって伐採されたこともあって，マウンドが変形し，旧時の形態をとどめてはいないと判断された。

５月２日の測量にあたっては，詳細に旧時の形態をも考慮するとともにマウンドトップを決定し20cmごとにマウンドの測量を実施した。その測量結果は等高線より本塚のマウンドは埋め戻されてはいたが，かってはマウンド頂上は，平担面であり，裾部には，踏つけ道があり，ほぼ方形を呈していたと推定された。更に方形であったことを裏づけるものとしては，本塚南側30ｍ地点に遺存するマウンドとの対比により方形であったことが，決定的となった。現地表からの高さは1.25ｍを計る。（第８図参照）

そこで発掘調査は，方形の一辺に直角に交り，マウンドトップで十字に直交する幅２ｍのトレンチを設定し，サブトレンチはハードローム層まで深く掘り下げた，又，工事路線幅範囲内のマウンドの½を排土した。マウンドを東西南北側にトレンチで十字に切断した結果，第一次調査時の磁北にしたがって設定した幅１ｍのトレンチ跡が確認された。トレンチからは，埋戻された時混入した石片，木片，土台石等が出土した。構築時の表土と考えられる暗黒色土層に，焼土混りの一層が走行することも発見された。このマウンドには褐色土のブロック層はなく，ほぼ平行な土層セクションに分類でき，当時の表土，暗褐色土，暗黒色土，褐色土で盛土された混合土で，ハードロームは用いられていないことが判明した。東西側はマウンド裾部より西側裾部までの長さは10.55ｍ，暗黒色土層上1.25ｍを計る。



第５図　　１号塚平面、土層断面図、遺物出土状況図

又，東側マウンド外中央延長上に巾1.10mの土壙を検出したが，伴出物はなかった。

遺物（第6，7図，ＰＬ39）

マウンド盛り土中より銅銭１，東側マウンド外表土層中より銅銭３，西側Ｅ10グリット焼土中から銅銭１が検出された。銅銭五枚はともに方形の孔郭を有し一枚は宋銭であり，他４枚はともに江戸時代にさかのぼる寛永通宝で，細字でありユに造る大型でなく，中型の背に波紋及び字はない，質は青銅製の鋳造品である。

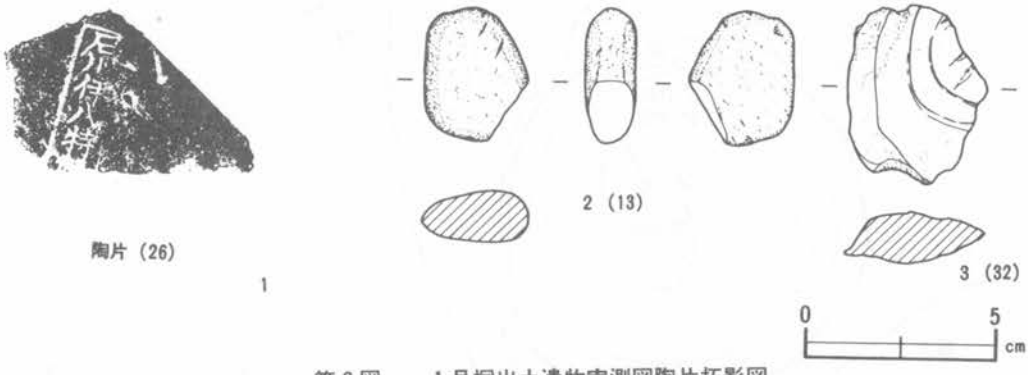
その他，前調査トレンチ内より「石川伊八特製」押印の陶片１，石英安山岩質軽石の砥石，細粒砂岩剝離片各１などが出土した。

以下銅貨銭分析結果を示す。

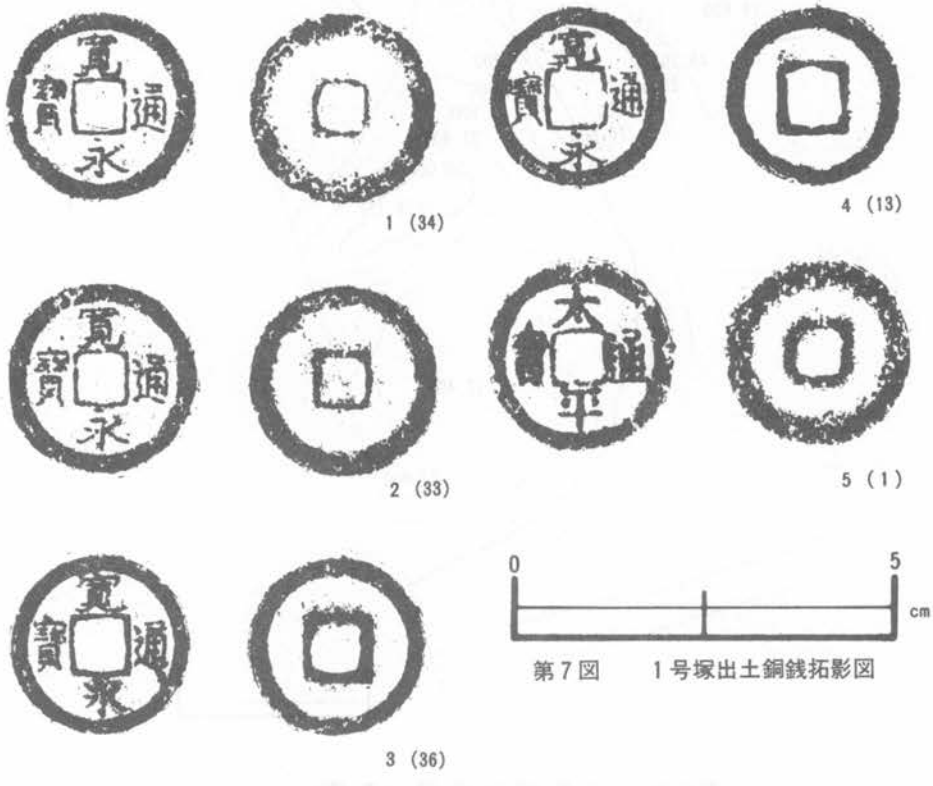
第７図—１(34)	銅・鉛の合金，鉄・錫は中量，亜鉛ナシ，銀微量	(青色寛永通宝)
７　—２(33)	銅・鉛の合金，鉄・錫その他ニッケル・銀微量	(青色寛永通宝)
７　—３(36)	銅・鉛・錫の合金，鉄は少量その他ニッケル 銀微量	(青色寛永通宝)
７　—４(13)	銅・鉛・鉄の合金，錫・亜鉛は少量，銀微量	(黒色寛永通宝)
７　—５(Ｅ10—１)	銅・錫・鉛の合金，銀・鉄少量，その他ニッケル少量	(宋銭太平通宝)

なお，分析には螢光Ｘ線分析を活用している。照射面は裏面平担面を用いた。宋銭はCu Pb，Sn の合金で黄白色を呈し鏡銅に近いものと解され，経年変化は錫(Ｓｎ)量の減少，鉛の含有量が時代の下降とともに増える傾向にあると思われる。

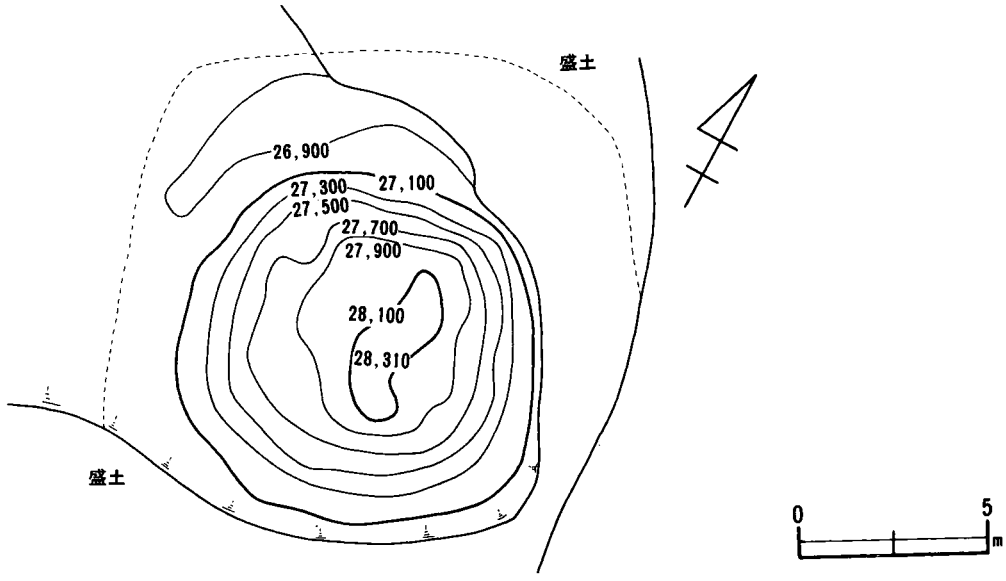
その他，第８図２号塚，第９図３号塚はマウンド実測のみ，１号塚に隣接する塚として知られているマウンドで，道路関係の土盛があり変形される前に記録にとどめておく。一方は塚，他は古墳と解される。



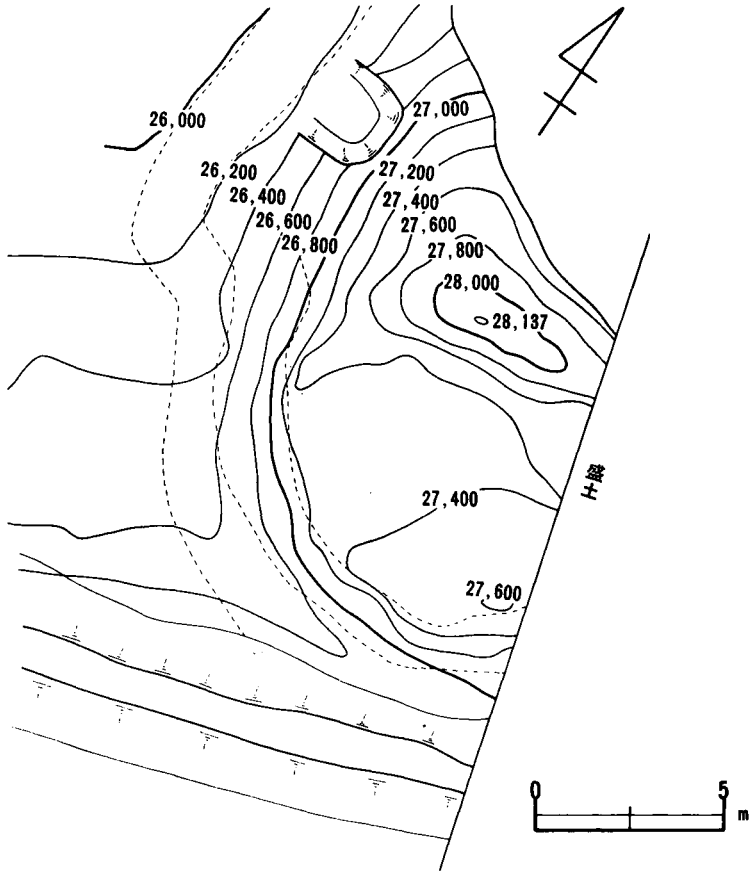
第６図　　１号塚出土遺物実測図陶片拓影図



第７図　　１号塚出土銅銭拓影図



第8図　2 号 塚 平 面 図



第9図　3 号 塚 平 面 図 （古 墳）

第二節　住居址遺構及び遺物

第三次調査区からは，先土器時代の石器及び石片，先端部に於ける，縄文・弥生時代の土器の散布包含地，古墳時代，土師器を伴なう住居址９軒と土壙1,俺体壕２，の計13遺構を検出した。すなわち出土遺物からは，土器を伴なわない石器時代をはじめとし，縄文・弥生・古墳時代，断続して江戸時代に至る土地利用が有ったことを示す調査結果となった。

以下，遺物遺構等については，別表，挿図図版を参照されたい。

(1)第１号住居址（第10・11・12図　ＰＬ６・16）

最初に着手した遺構である。調査区北側擁壁に切断され約$\frac{1}{3}$を欠く住居址である。

グリッド番号Ｂ－62・Ｂ－72との表土，暗褐色土を排出した結果，表土下20～35cm褐色土に落ち込む遺存面を認めたので精査した。

東西4.50ｍの方形プランの主軸方向N－42°－Eを計る小型の住居址であったが遺存面には炉址等の痕跡は発見されない。

壁は垂直に立ちあがり，調査区では一番浅い住居址である。ハード上面を平に削り床面を設けている。周溝はなく壁下に小柱穴らしいピットが並び，床面上の壁沿い及び，内に向かって焼土，炭化材が点在した。補助トレンチにより床面上を精査したが周溝，主柱穴は確認されなかった。東北壁，コーナの位置に貯蔵穴と思われる落込みが残存した。

出土遺物

完形品はなく破片のみである。挿図番号12－２は床面密着，他は覆土中より出土した土器片等である。

001－1(81)　甕形土器の口縁部破片である。複元口径15.2cm胎土に微細石を含む黄褐色・焼成普通・横ナデ手法が施されている。ヒモ状粘土の積上げである。

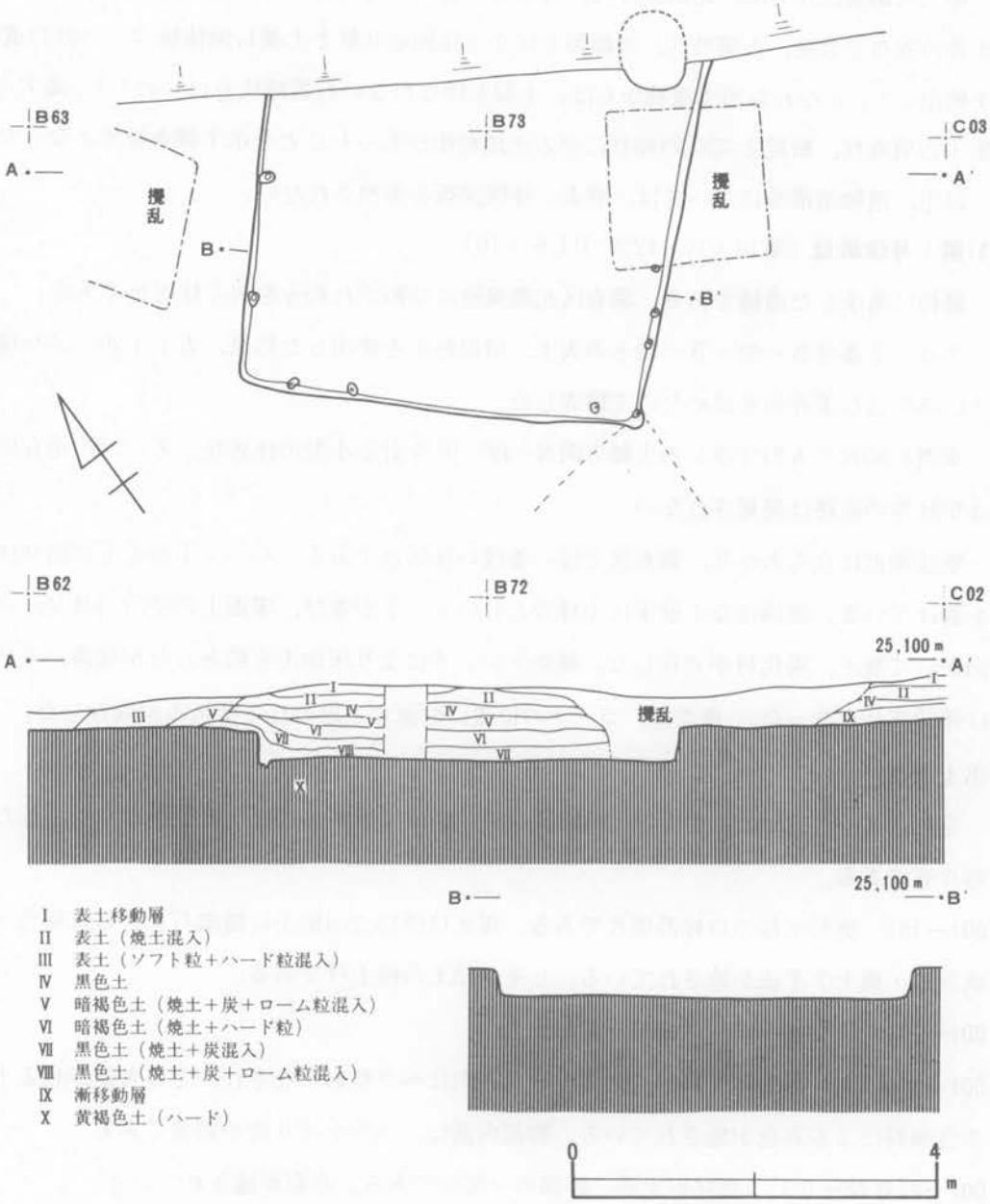
001－2(78)　平な底部破片，細石を含む褐色

001－3(36)　高坏形土器，脚部である・タテ方向にヘラ整形がなされ，ミガキ痕が残る上に赤色顔料による彩色が施されている。脚部内面は，ヘラケズリ痕が顕著である。

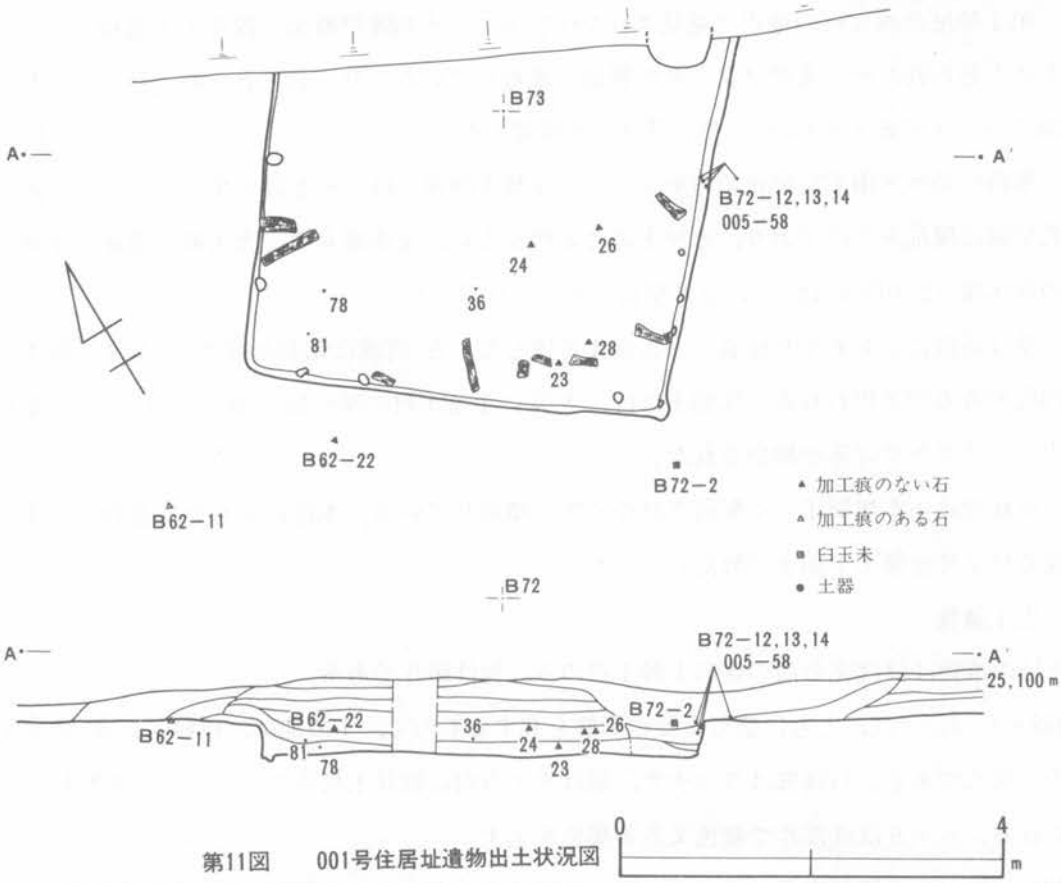
001－4(Ｂ72－０)　高坏形土器，脚部の一部分である。赤彩が施されている。

001－5　破片を接合したもので５ｍ隔てた５号住居址出土の土器片と接合した。後に掘込込まれた方形の攪乱部から出土の坏形土器・ヨコナデ整形，彩色がなされている。

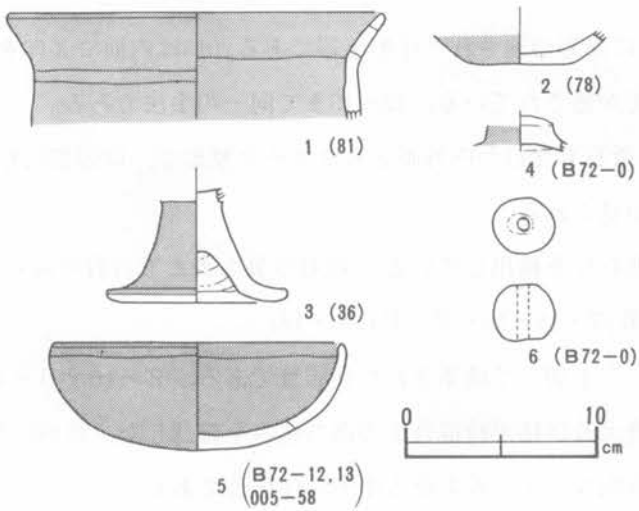
001－6　外観赤色，片側穿孔土玉（土垂）である。その他覆土中より，蓋物のつまみ片があり，粘土ヒモの巻手法が見られる。



第10図　001号住居址平面・断面図



第11図　001号住居址遺物出土状況図



第12図　001号住居址出土遺物実測図

(2)第２号住居址（第13・14 15図 ＰＬ７・17・46）

第１号址の西３ｍの地点で発見された住居址で，当初擁壁断面に露出する遺構と同一のものと思われたが，北壁は第７号住居址と重複していた。Ｂ－41・Ｂ－42・Ｂ－51・Ｂ－52グリットの表土下34cmの 排土落込みを確認した。

東西5.95ｍ×南北5.85ｍの方形プランの主軸方向Ｎ－14°－Ｅを計る中型の住居址である。北壁側は攪乱をうけており，カマドのこん跡がない，又南側も第二次大戦の遺産（車輛）の俺体壕（2.40×6.12ｍ）により壁面が失なわれていた。

壁は垂直に立ちあがり硬質ローム面まで達している,周溝は幅15cm深さ6cm程度で壁下を四周するものと思われる。床面上には，火災による木材の炭化物と焼土が見られ，覆土中よりイボキサゴ等が検出された。

主柱穴は４本規則正しく配列されやや内に傾斜している。本址にともなう遺物は，俺体壕及び７号址覆土上面まで散乱していた。

出土遺物

本址の遺物はほぼ完形品の甕形土器１点のみ，他は破片である。

002－1～7. は，ともに甕形土器の形態を有するもので，１の他は，口縁又は胴部分までの破片である。口縁部はヨコナデ，胴はタテ方向に刷状工具等のナデ・ミガキ整形が見られる，８・９は底部片で褐色又赤茶褐色を呈す.

002－10・11. 脚部内面ヘラケズリ痕，外面はタテ方向にヘラ整形ミガキ痕が残る,赤彩されている。

002－12～15 ともに赤彩の施された坏形土器である。13は内面にＸ印を赤彩されヨコナデ整形後，ヘラミガキが施されている。12～15まで同一の手法である。

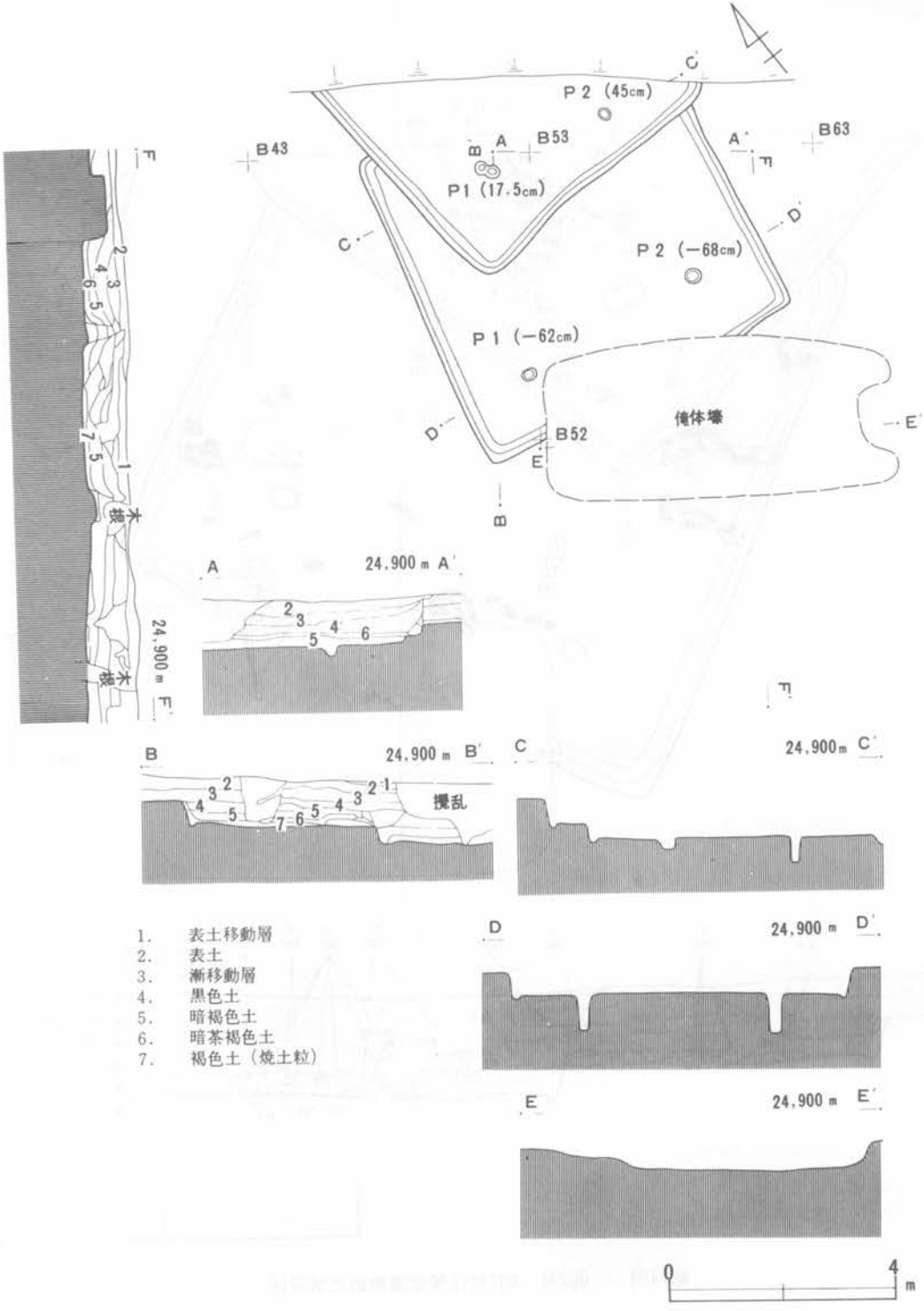
002－16～20 は，微石も含むが内外両ともヨコナデ整形で，口辺部にりょうを持たない，部分的にミガキ痕が見られる。

土玉４個，砥石他石片を検出している。砥石は裏と表とで石質の違いが見られる。

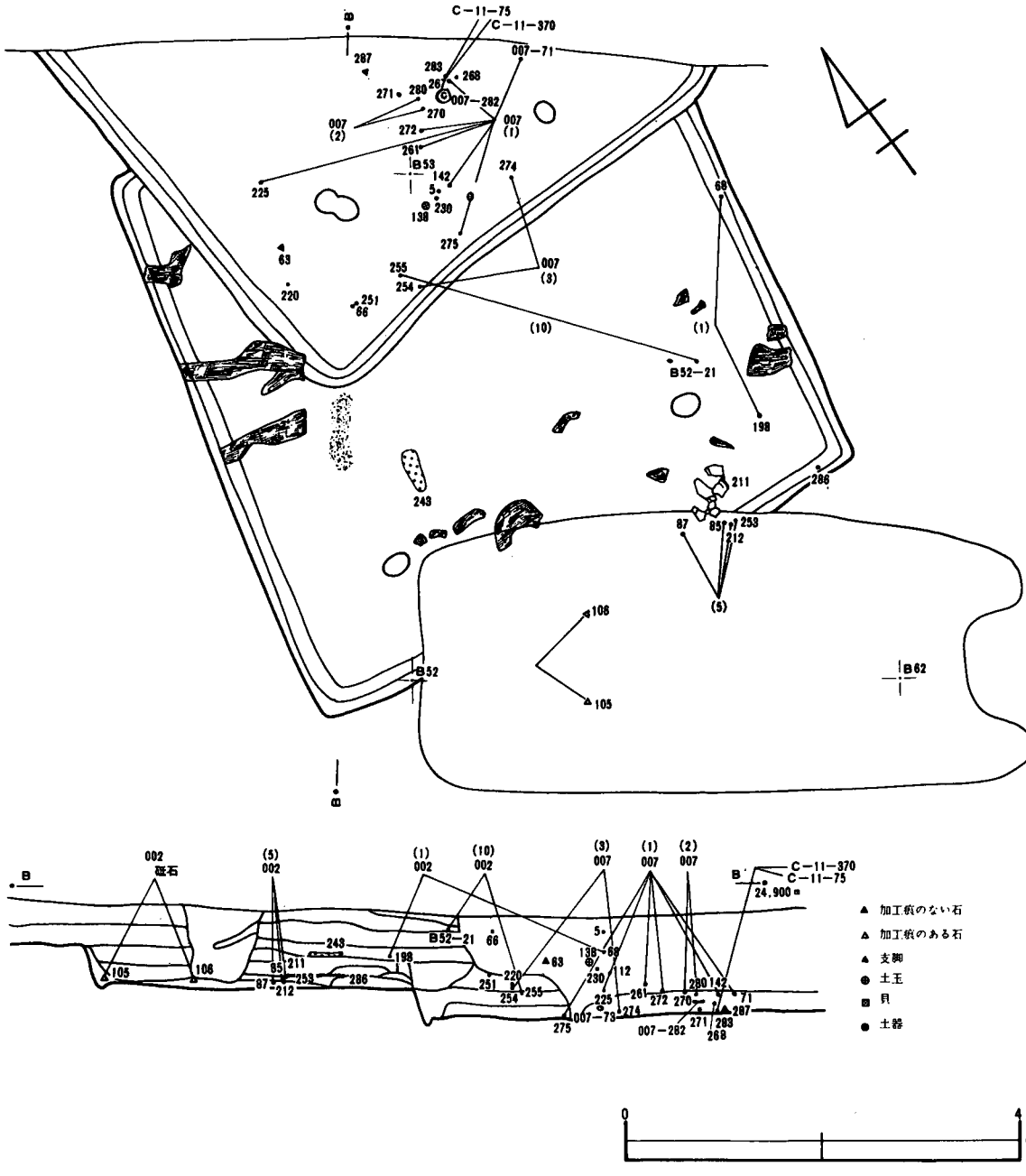
(3)第３号住居址（第17・18・19・図，ＰＬ８・18）

第１号址の南コーナを切って構築された住居址である。Ｂ－16・Ｂ－71. の表土下35cmを排土した結果，焼土及び粘土粒混合土の落ち込みを確認した。東西5.95ｍ南北5.65ｍの方形プランの主軸方向Ｎ－5°－Ｗを計る中型の住居址である。

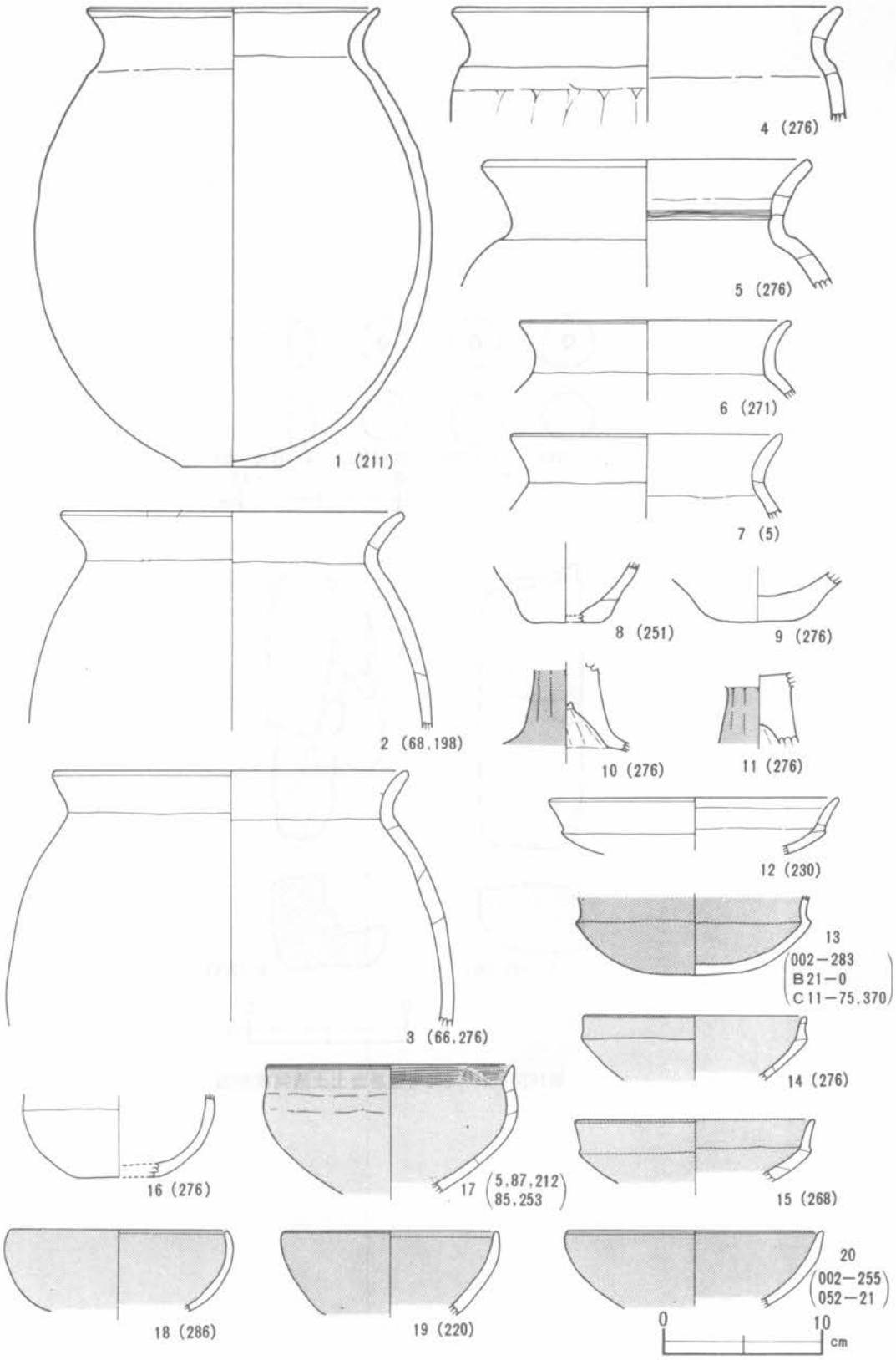
カマドは中型で，北壁及び東壁中央の２ヶ所に築かれた痕跡があり，床面全体にわたり粘土粒及び炭化物，焼土が散乱し一層序をなしていた。これらを排出したところ，垂直に



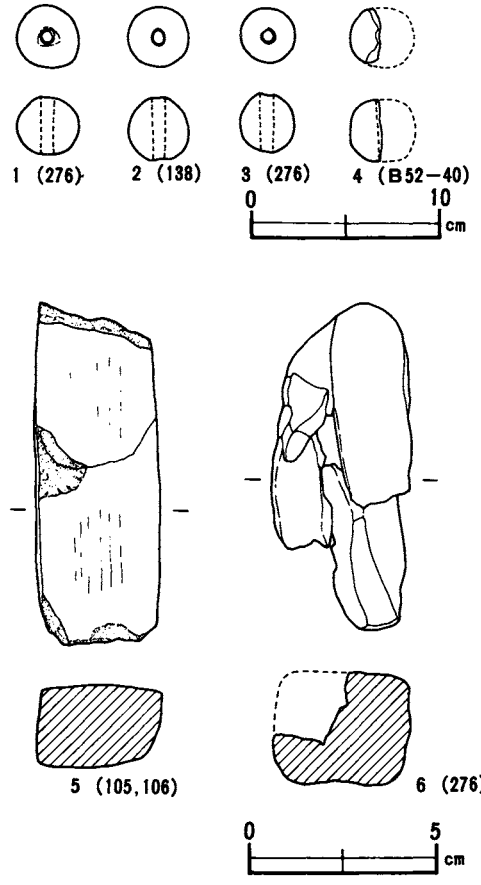
第13図　002号、007号住居址平面・断面図



第14図　　002号、007号住居址遺物出土状況図



第15図－Ⅰ　002号住居址出土遺物実測図



第16図－II　002号住居址出土遺物実測図

立ちあがる壁と，壁下に周溝が巡り，巾16cm深さ６cmを計る。主柱穴は４本確認され対角線上にあり内傾する。

床面は堅く壁側は，比較的軟かい，硬質ローム面まで深く掘り下げられており，又，北壁側に円形・直径1.20mの攪乱があり，床面を掘りぬいていた。(俺体壕と思われる。)

出土遺物

本住居址,円形攪乱覆土中及び接するその東側床面上より臼玉19個が検出された。この臼玉には，第４号址出土の臼玉製作技法との差が見うけられ，切離し，大きさの点は注目されるところである。輪切を思わせる。

003－１　南壁出土のヨコナデ整形の甕形土器，口縁部の破片である,微石を含み胴はナデ,ミガキを受けている。

003－２　コシキ形土器と思われる破片で，タテ方向に粗い刷状工具ナデ痕跡が残る。

003－３～11　ともに高坏形土器である。坏部内外面は。ヨコナデ脚部はタテ又は，ヨコのヘラミガキによる整形手法がなされ。底部に木ノ葉の圧痕をとどめる。内部はヘラケズリである。内外面赤彩が施されている。　法量一覧表参照。

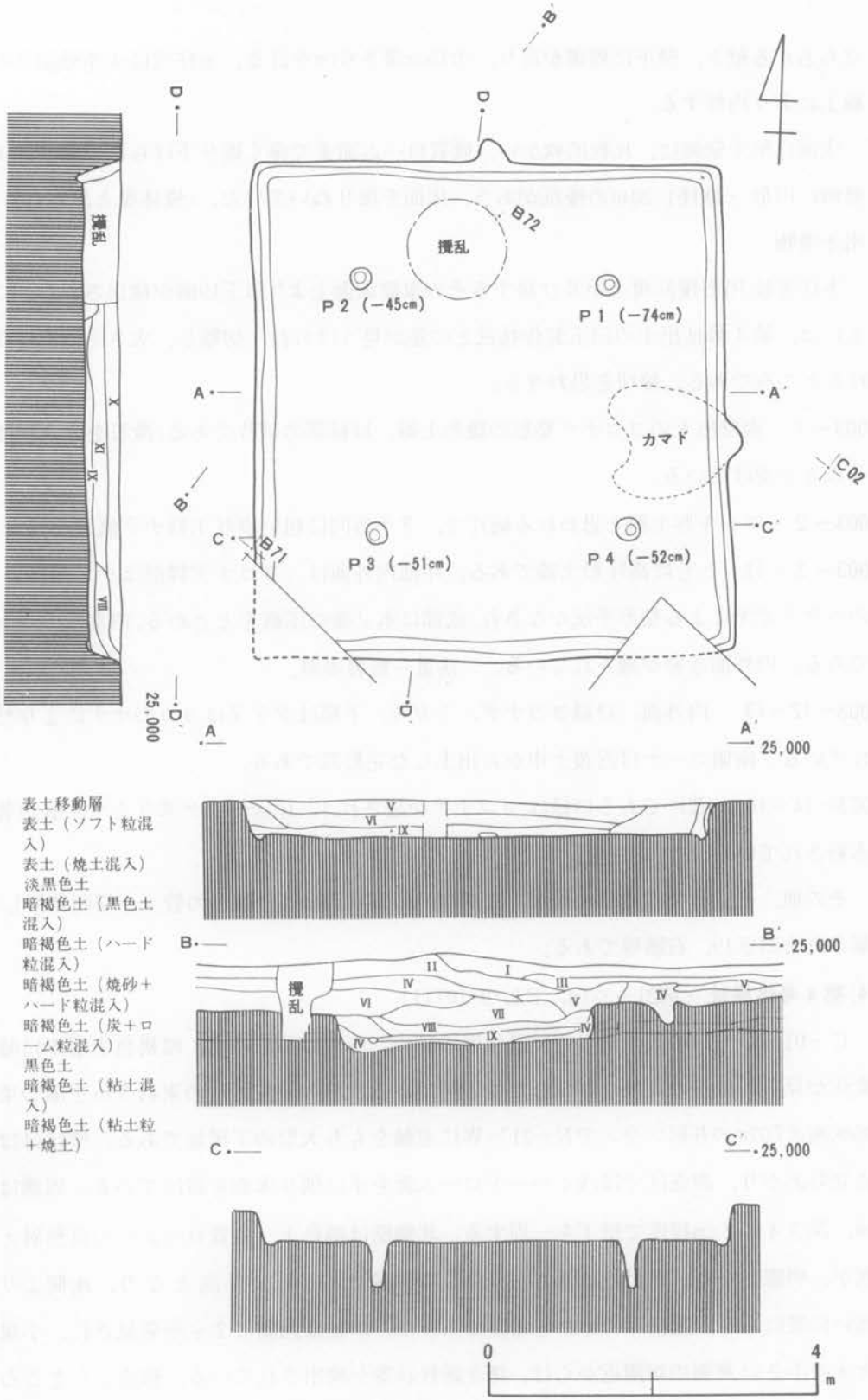
003－12～13．内外面，口縁ヨコナデ，ミガキ，下部はタテ又はヨコのナデにより整形されている。南側コーナ付近覆土中から出土した完形品である。

003－14～18．破片である口縁は,ヨコナデが施され,17･18はヘラケズリミガキ痕が著しい赤彩されている。

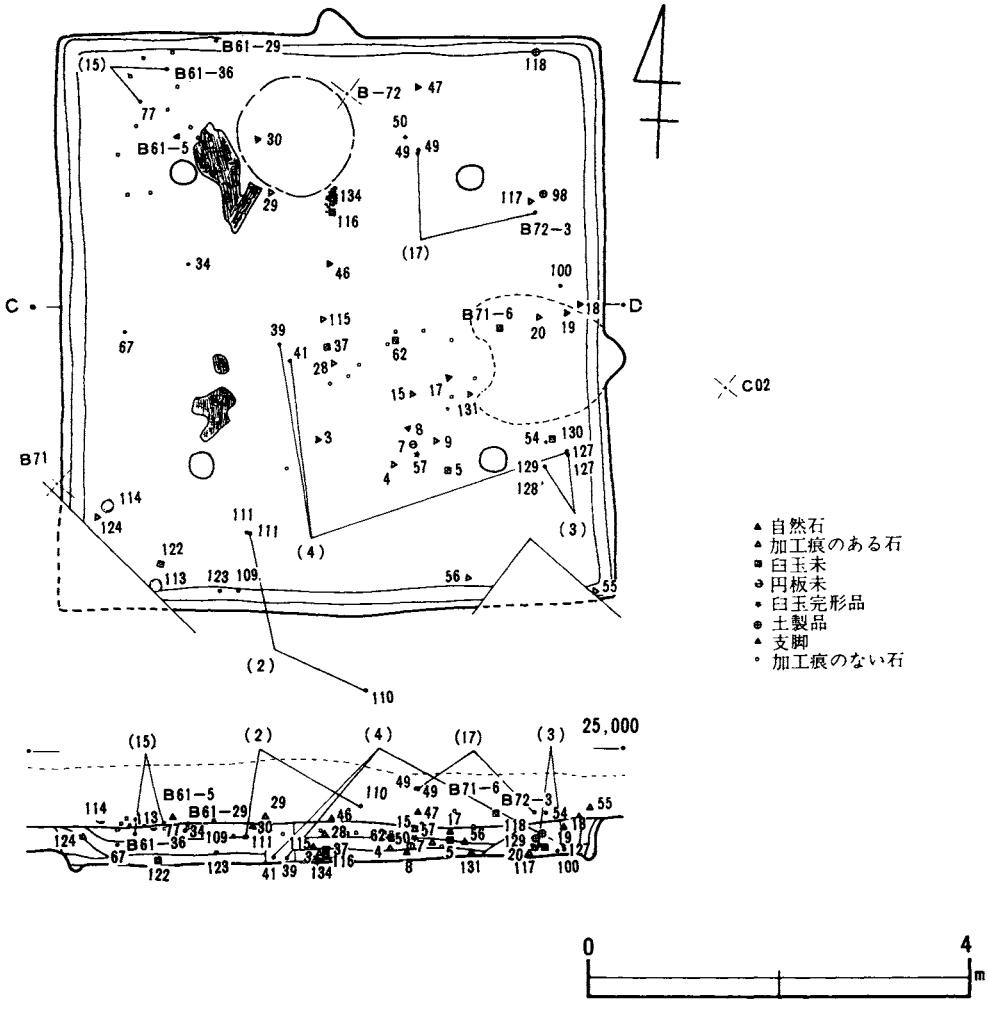
その他，土玉石製模造品の破片，片側穿孔の双孔円板１，細形の管玉を切断整形したと解される臼玉19，石鏃等である。

(4)第４号住居址（第21～32図，ＰＬ 9･10･11）

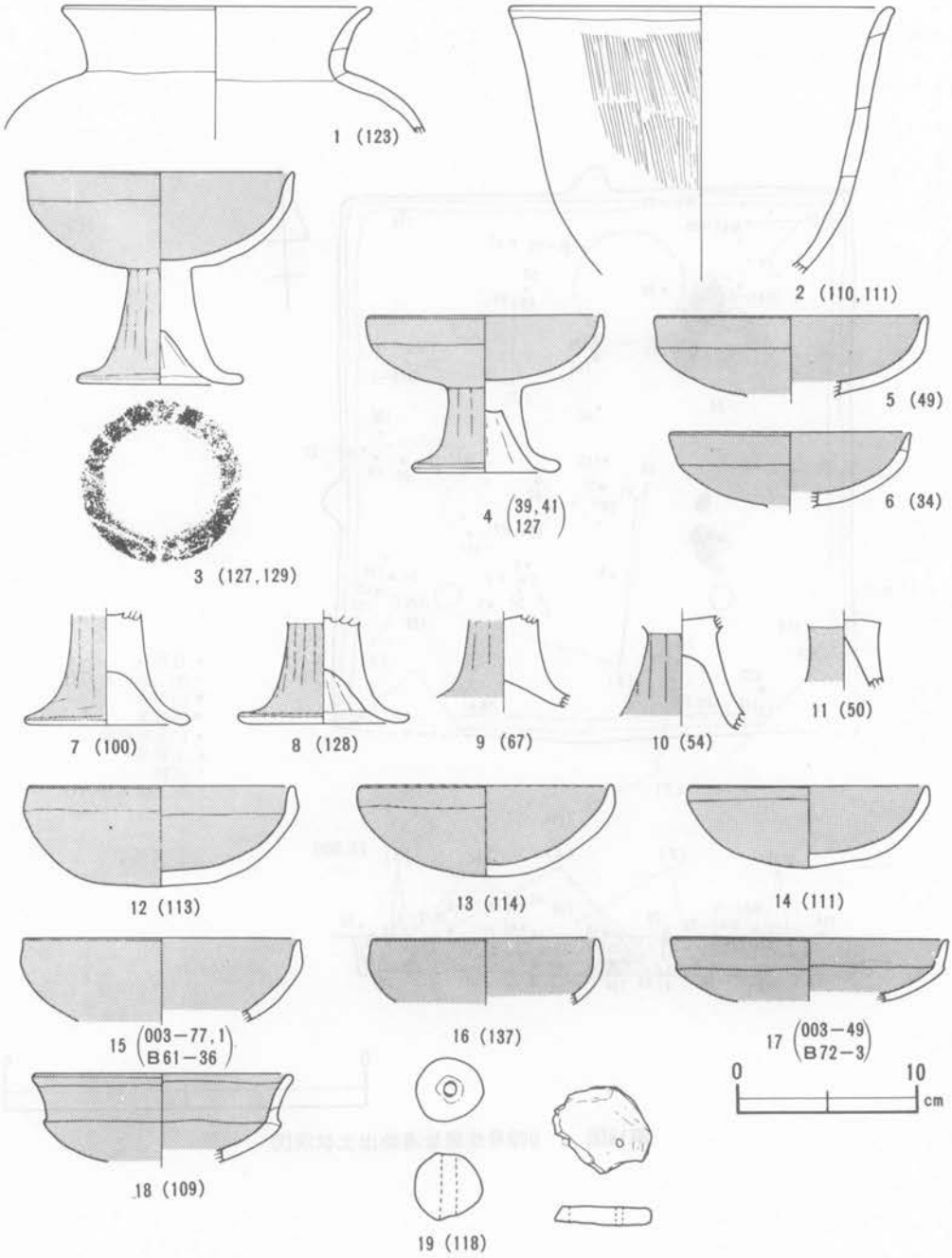
Ｃ－01・Ｃ－11の表土排土中結晶片岩の破片，石製品等を検出，暗褐色土層中に暗色の変化が見られ拡張の結果，確認した住居址である。第３号住居址の東約３ｍを隔つ東西7.05m,南北7.07mの方形プランでＮ－31°－Ｗに主軸をもち大型の工房址である。壁はほぼ垂直に立ちあがり，調査区では浅くハードローム面を平に削り床面を設けている。周溝は巾17cm，深さ４～５cm程度で壁下を一周する。北側壁は褐色土（軟質ローム）の自然層との区別が，明瞭でなく，壁付近は軟らかく，周溝が浅く，床面と同高となり，南側より少し高い位置にあり，遺物片の分布も希薄であった。炉址は西側に２ヶ所発見され，小規模で，火床の小さい東側の炉附近からは，鎌身鋸鉄鏃等が検出されている，精査したところ，内傾する主柱穴と思はれるピットの深い，径の大きいもの４本（Ｐ１～Ｐ４）の他，床面よ



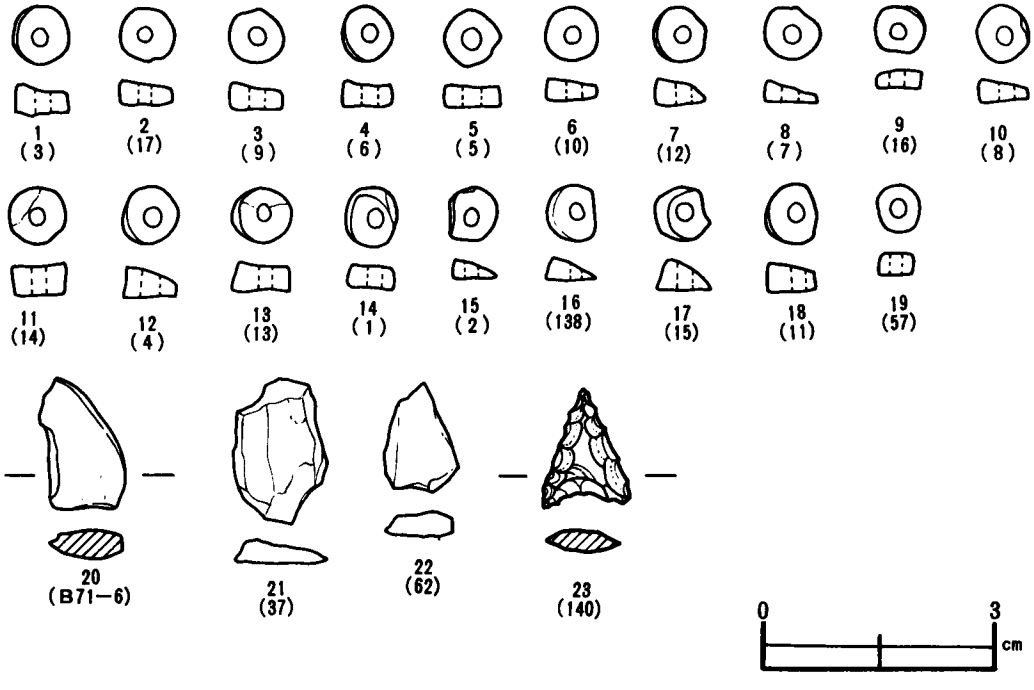
第17図　003号住居址平面・断面図



第18図　　003号住居址遺物出土状況図



第19図　003号住居址出土遺物実測図



第20図　003号住居址出土石製遺物実測図

り－13cm～20cm程度のピットは，東側コーナーに貯蔵穴１西側コーナーに1,その付近に集中する様である。あたかも作業所の仕切を意味するものか性格不明であるが,ピットの配置に注目したい。又北側コーナーは第５号住居址によって切断されていた。

出土遺物　本址の遺物については，一点ごとに記録してあるので，その分布は，第22図23・24・25図を参照されたい。 遺物実測図26～28～32，参照。

004－１　北側床面等に集中した破片である,口縁部内外面はヨコナデ，胴部はタテ・ヨコ方向にヘラナデ整形で，赤彩が施されている。

004－２　器高24.2cm最大径が胴部にある完成品で，ヘラによるヨコナデ,下部にはタテ方向ナデも見られ，茎部にかけて指圧痕が残っている部分もある。スス付着，－３ヨコナデ整形，ミガキ，ともに暗赤褐色を呈す。

004－４　コシキ形土器の破片，タテ方向に刷状痕が残る。その他５・６・７・８，は小形平底の甕形土器の底部である。

004－９・10・11　タテ方向に整形された脚部と11は八字に開く脚部片である。

004－12・13・14・15　ほぼ同型の比較的深い丸底の坏形土器で胎土に微石も含み赤褐色を呈しヨコナデ・ヘラミガキが施されている。その上に赤彩された椀形で，13・15は貯蔵穴より検出，16は，坏形土器の破片で，口縁外内面ともヘラ・ヨコナデで下部はヘラ整形

004－21　本址，上層覆土から検出した破片で外内面ともロクロ痕を残す須恵器である。

(石製模造品)　切離し，大割された原石の他,形割され，面取及び研磨，荒削りした結晶片岩が土器片と伴出した，総数　7,654個

(1)　臼玉の末製品

臼玉の作業中の破損したもの

臼玉の完成品

(2)　勾玉の半製品

勾玉の完成品

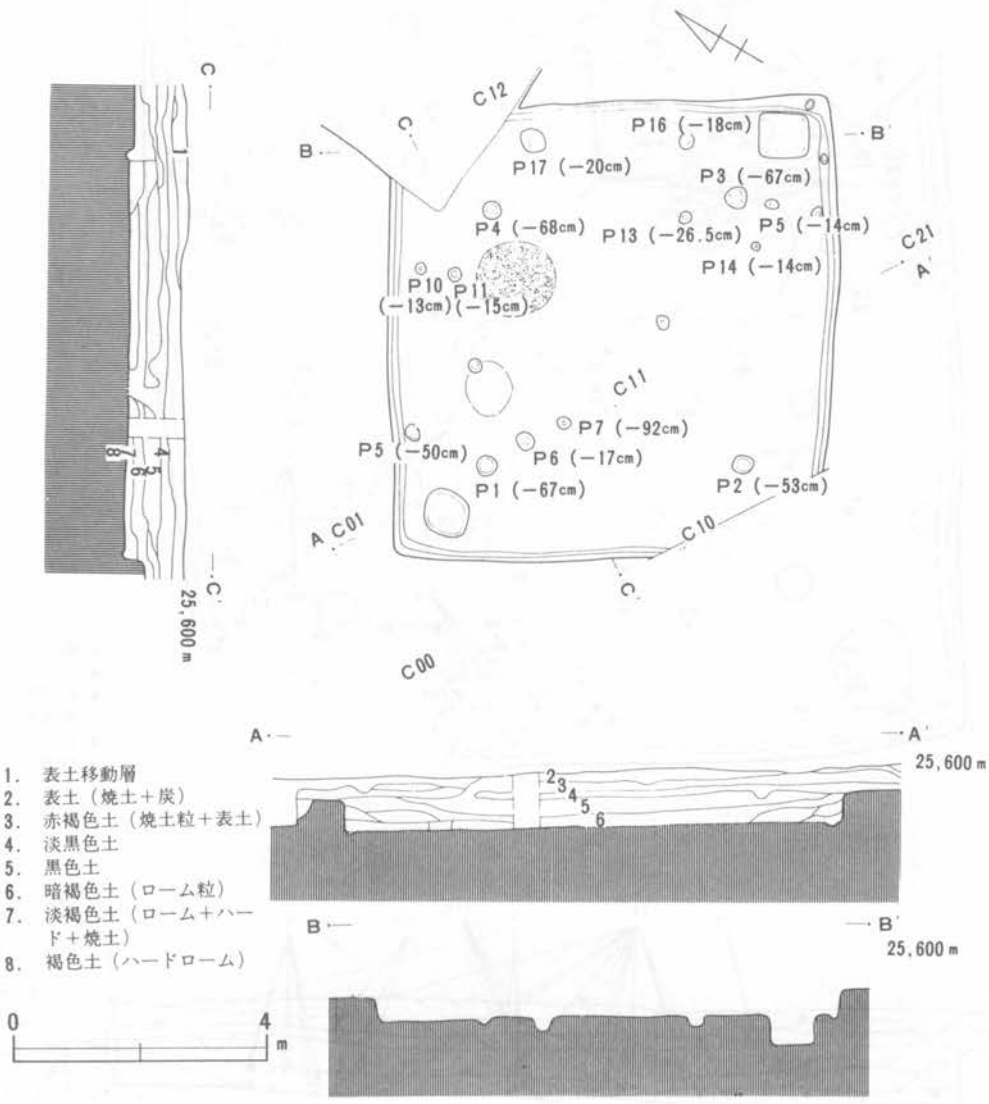
(3)　円板（双孔円板）の末製品

円板の完成品

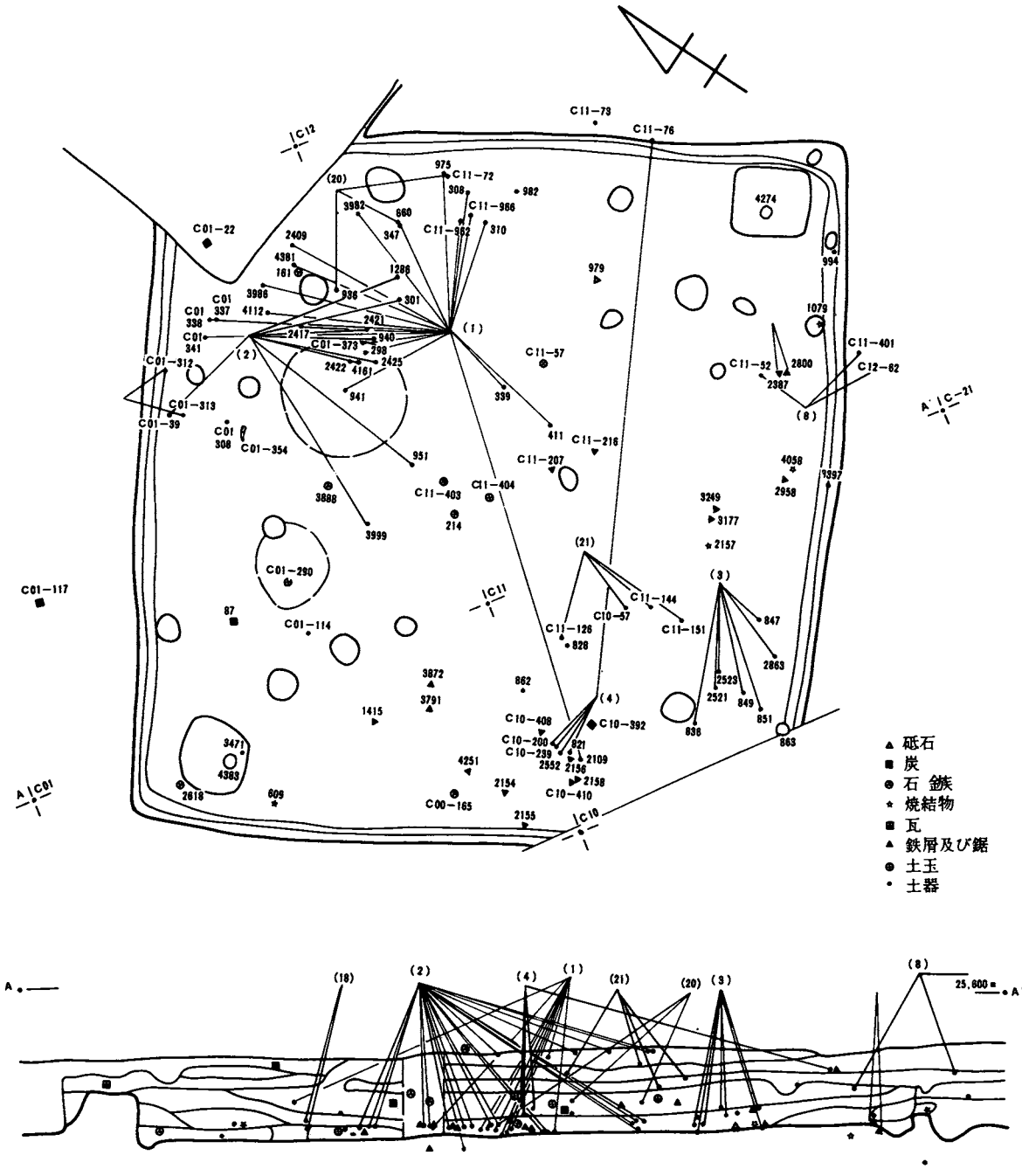
(4)　剣形品の末製品

剣形品の完成品

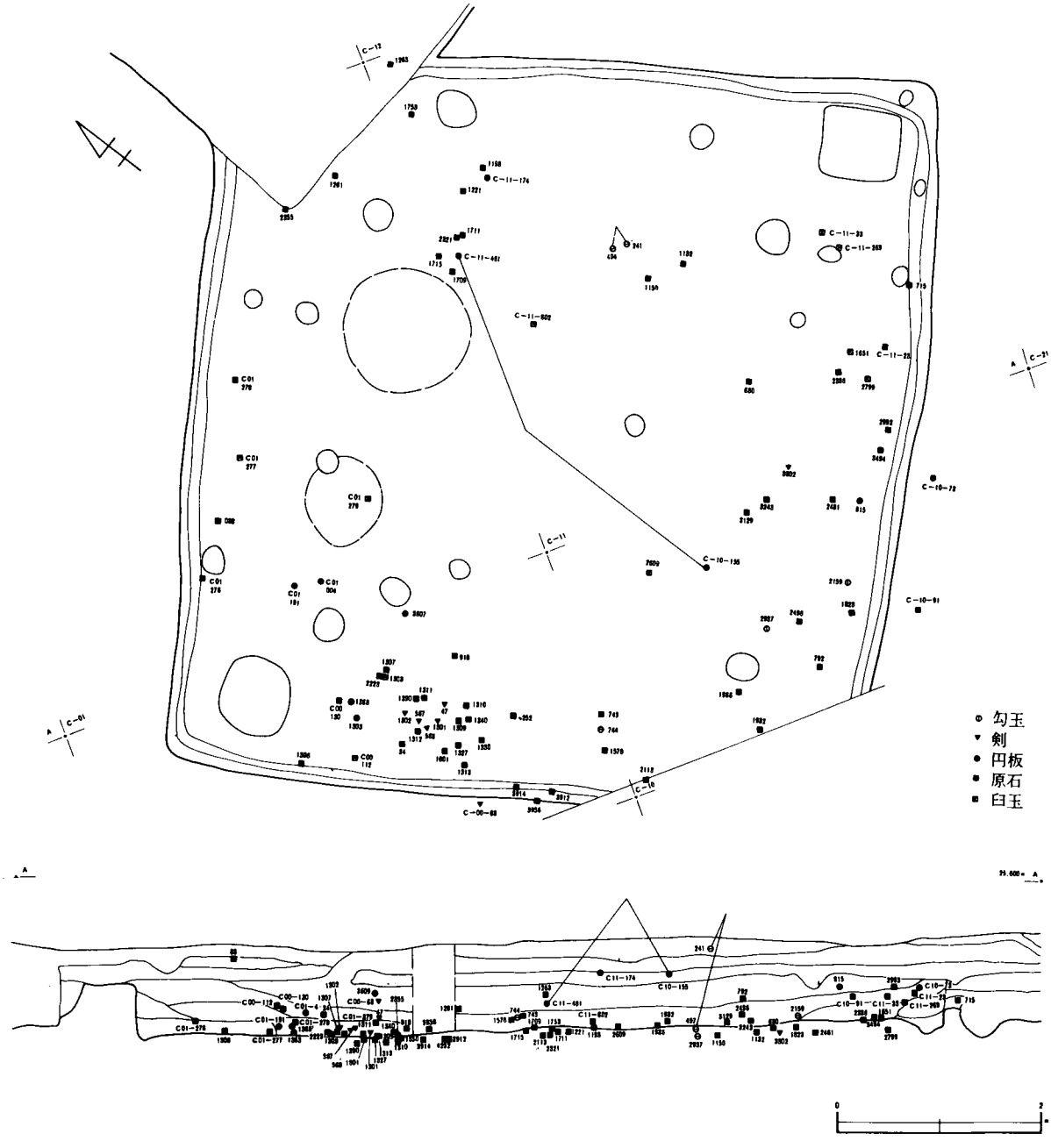
完成品については４種類に分類されるが，本址では管玉・刀子・鎌等の模造品は検出されていない。発見された結晶片岩（緑色片岩）は総計7,982である。工作具と思われる鋸



第21図　004号住居址平面・断面図

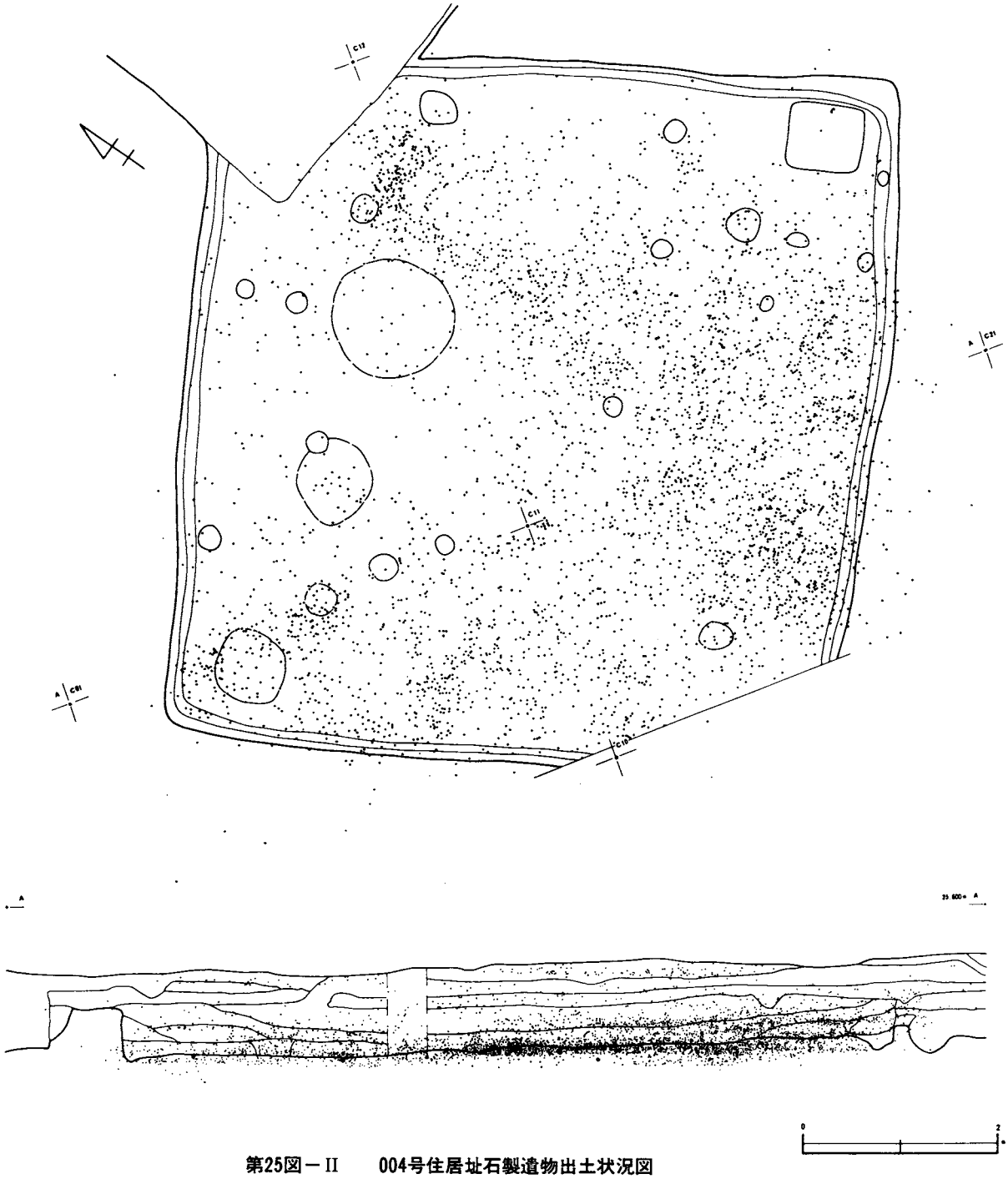


第22図　004号住居址遺物出土状況図

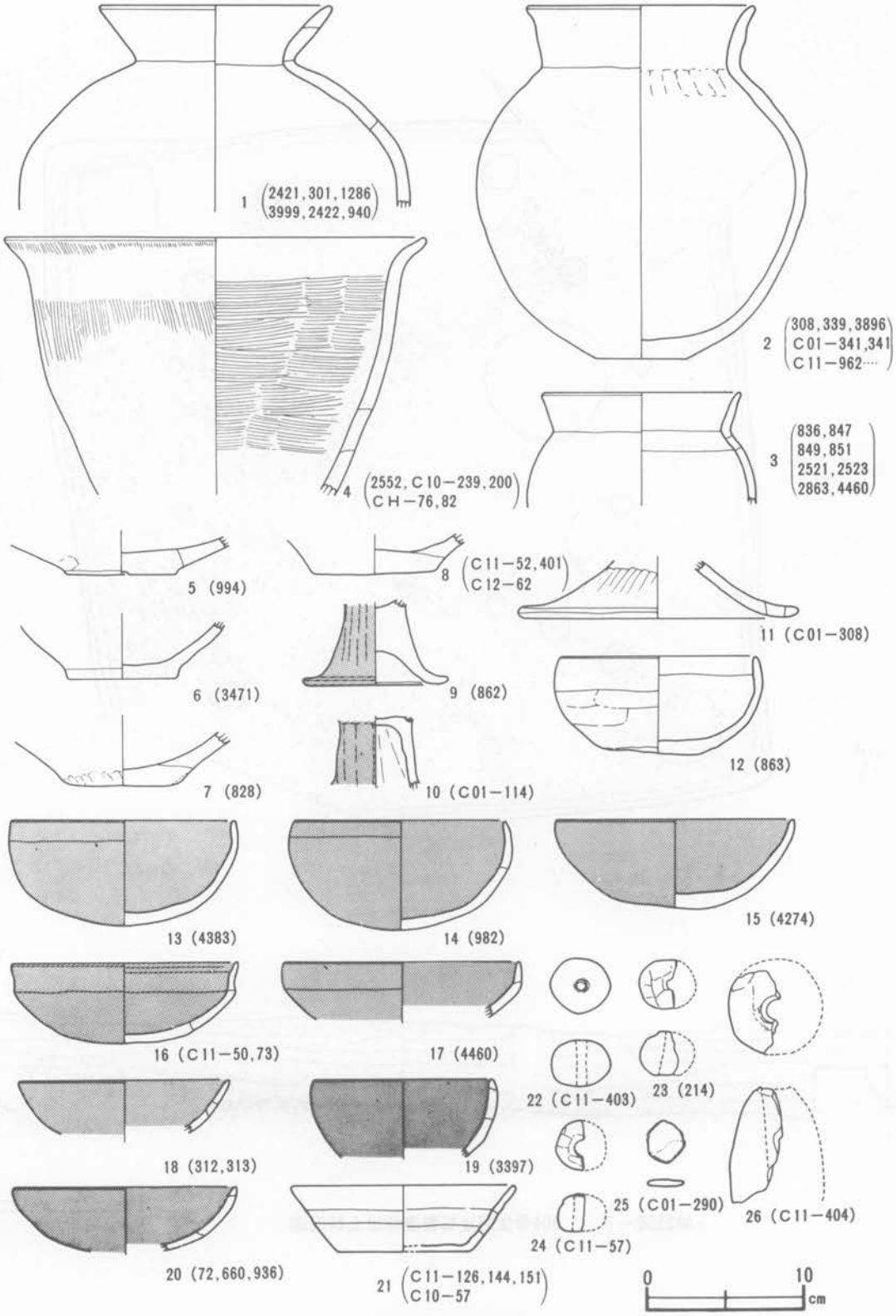


第23図　　004号住居址石製遺物出土状況図

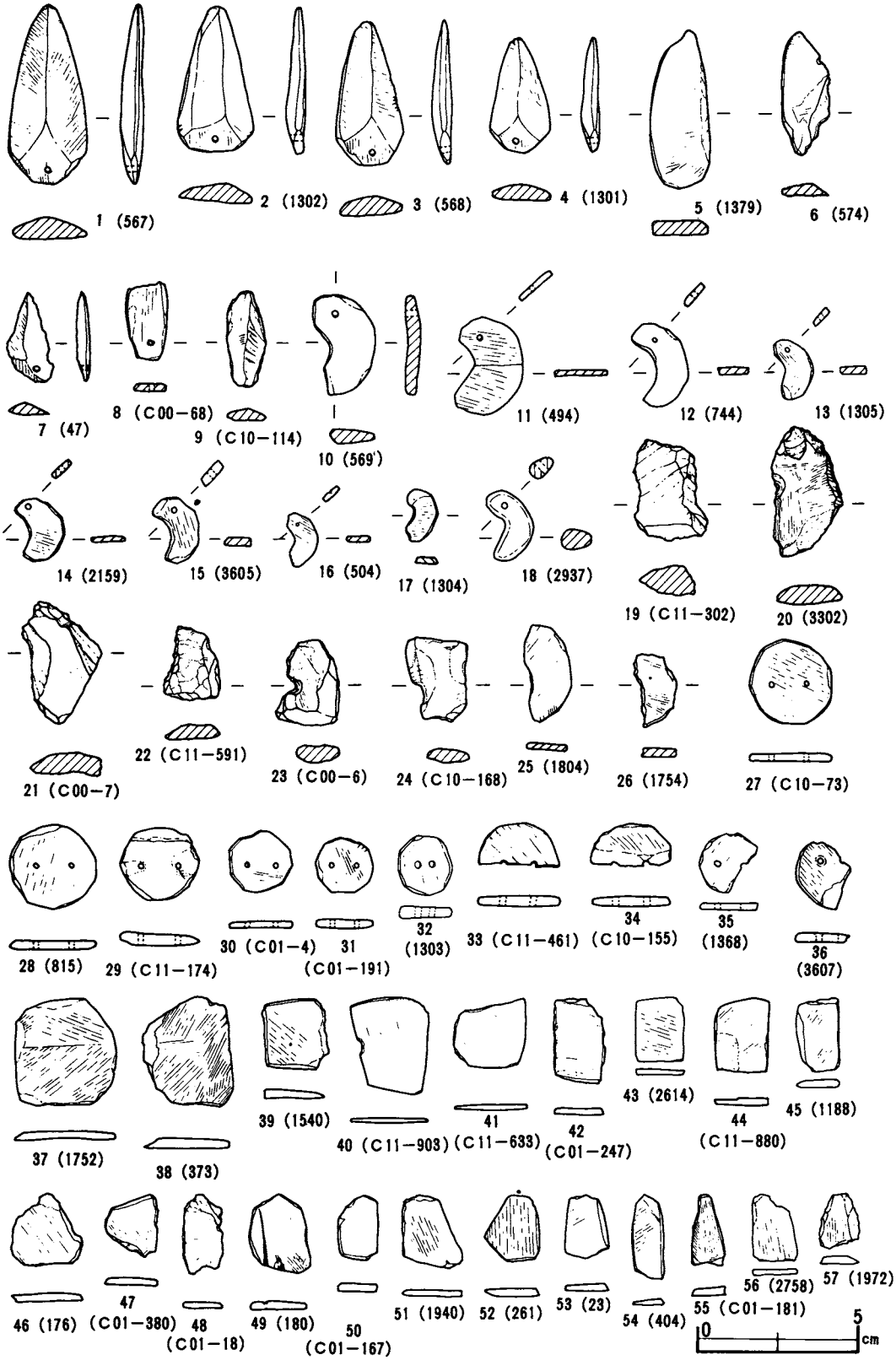
第24図－Ⅰ　004号住居址石製遺物出土状況図



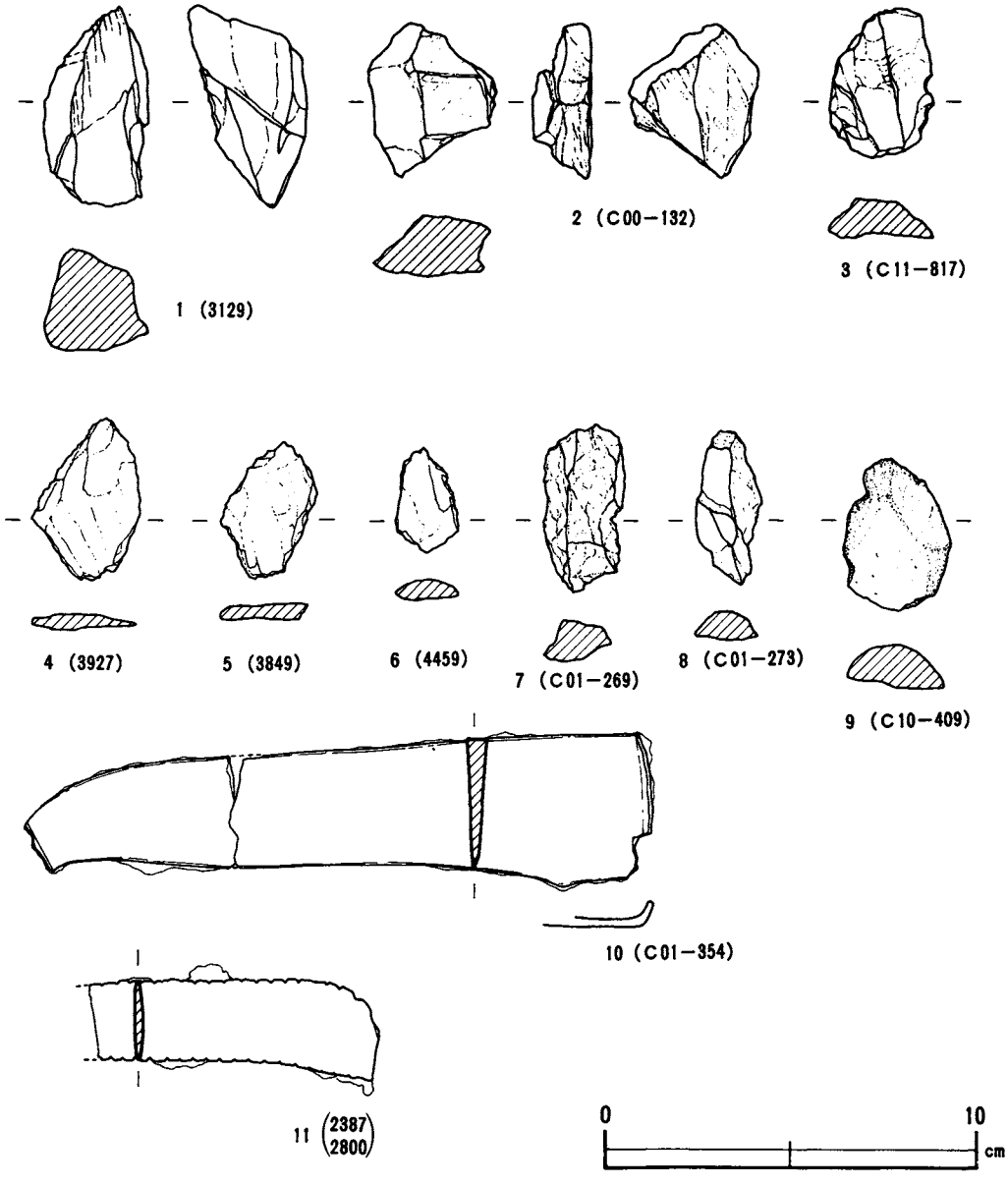
第25図－II　　004号住居址石製遺物出土状況図



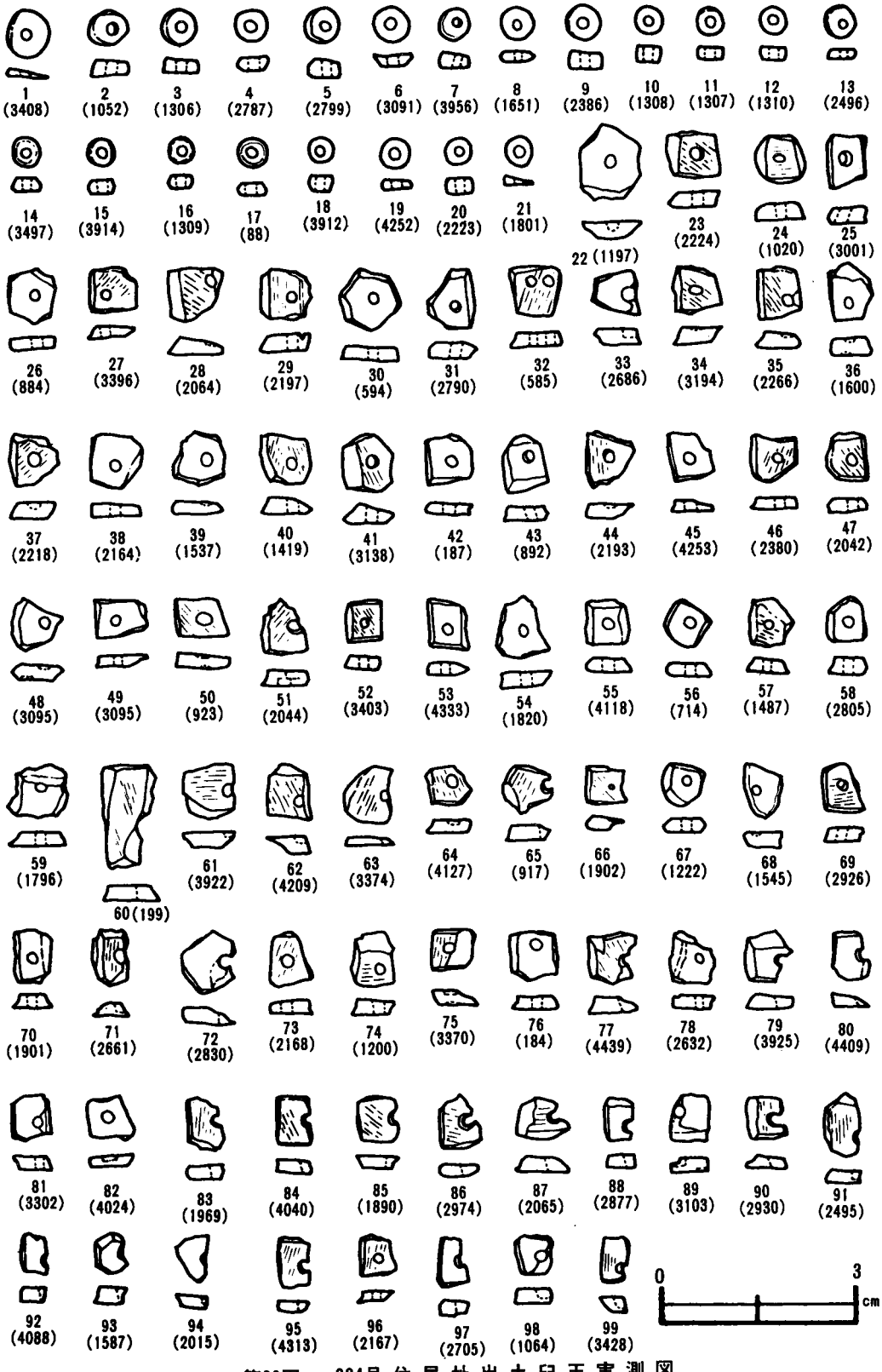
第26図−III　004号住居址出土遺物実測図



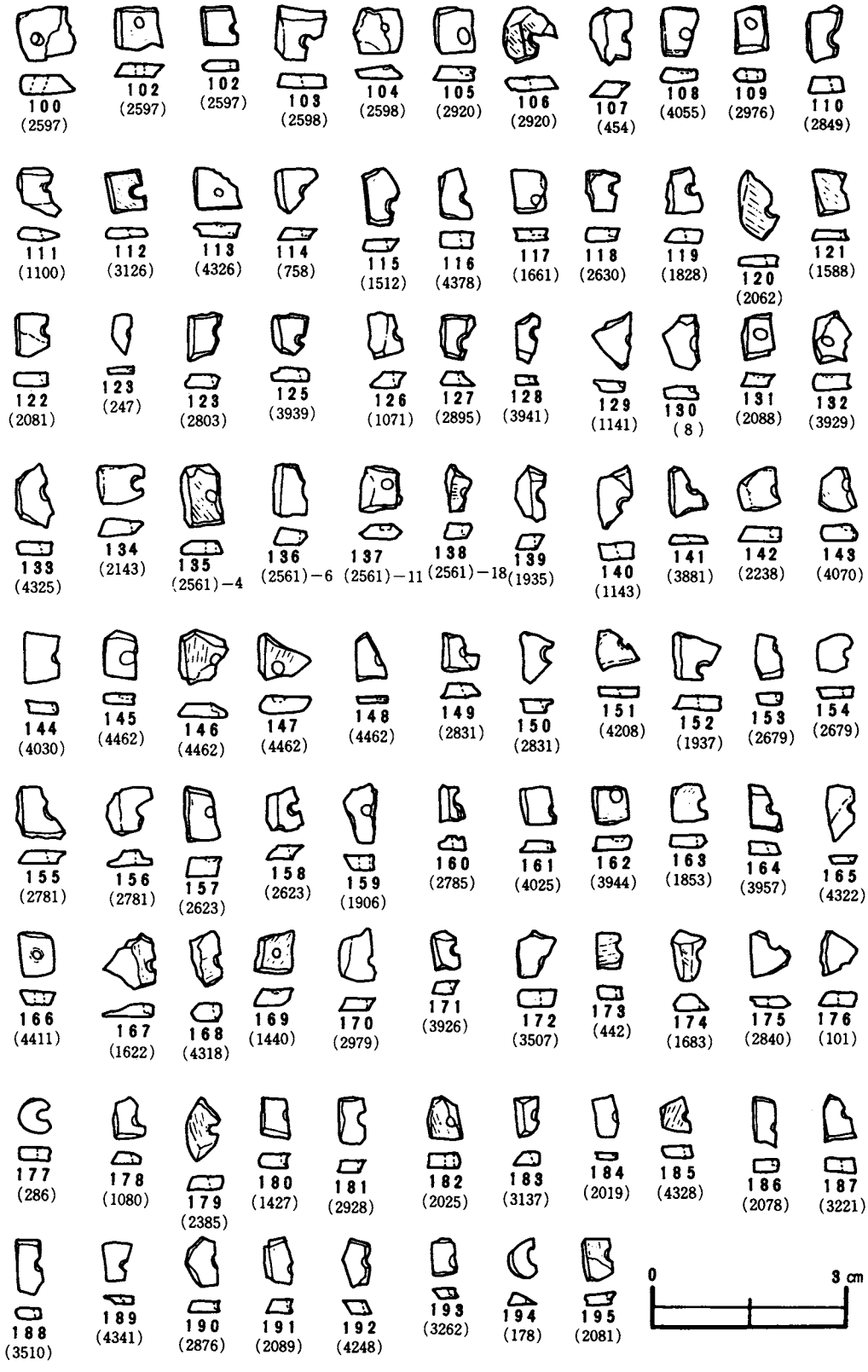
第27図　004号出土石製遺物実測図



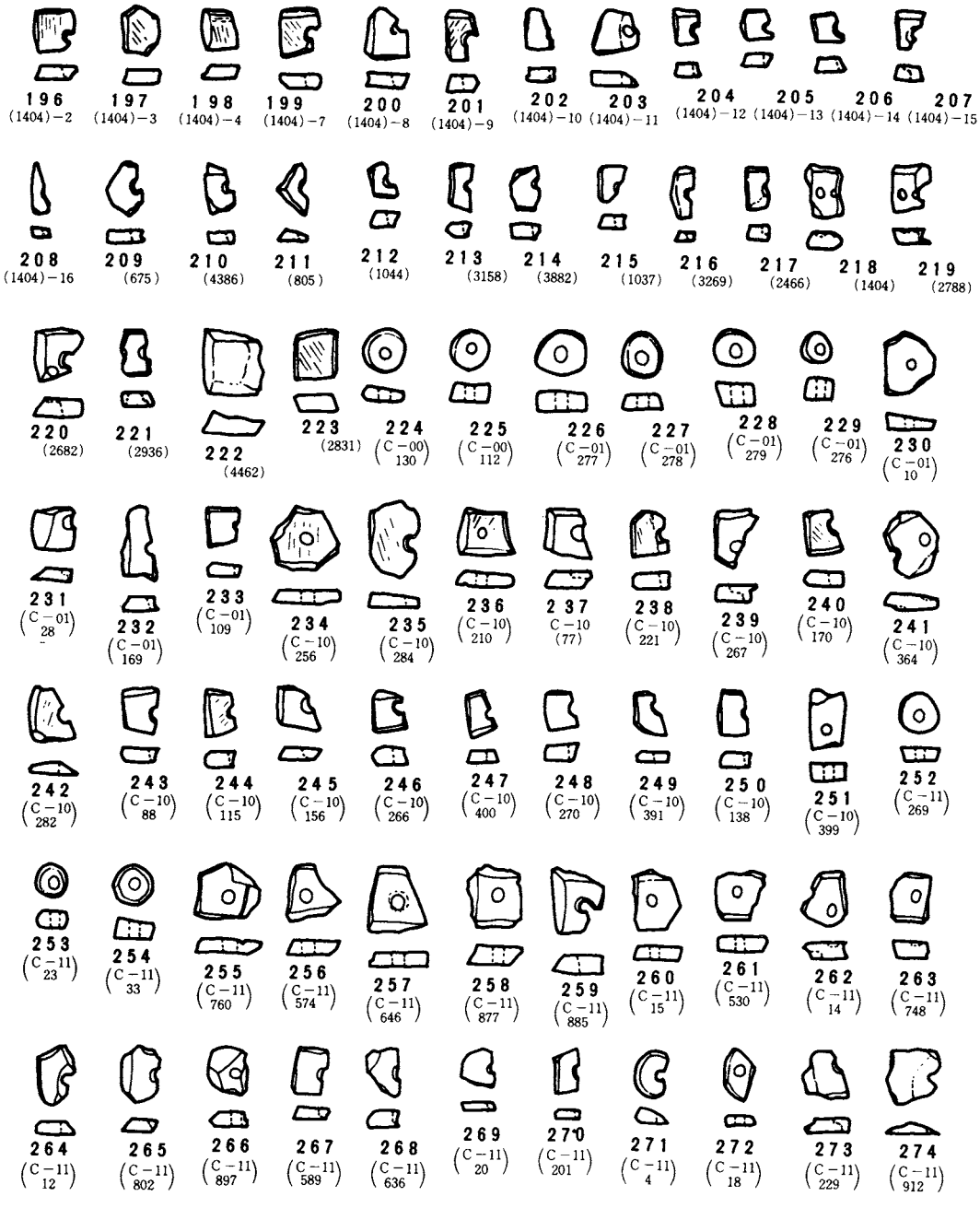
第28図　004号住居址出土石、鉄製品実測図



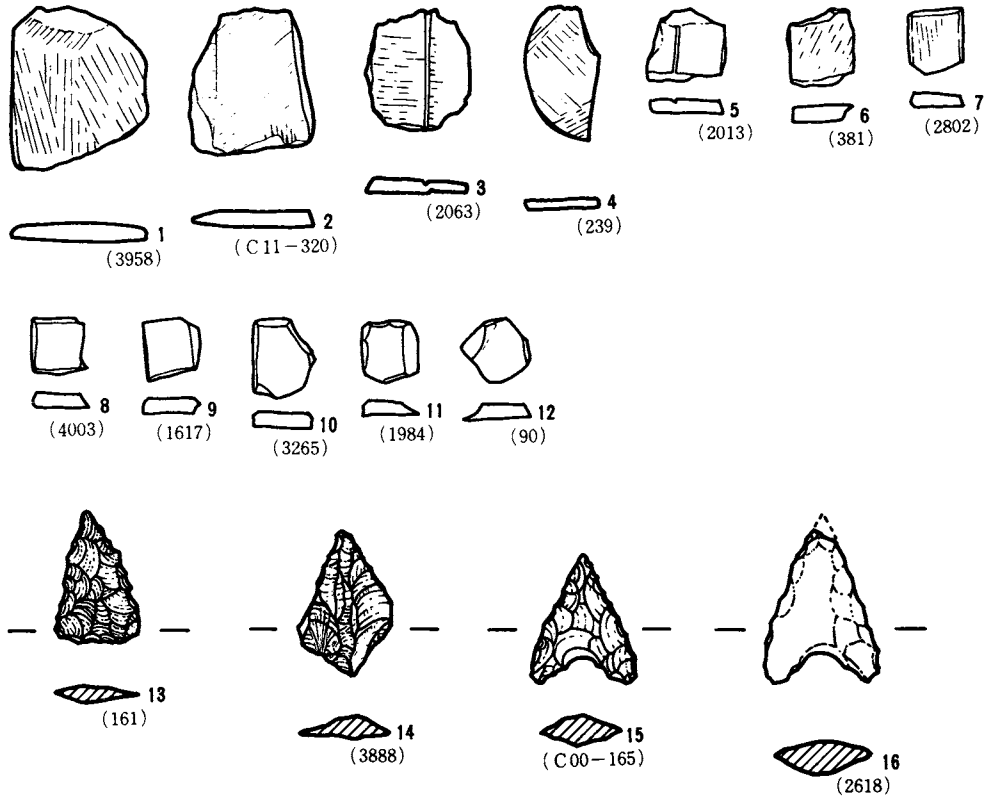
第29図　004号住居址出土臼玉実測図

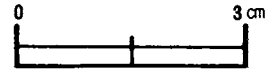


第30図－Ⅰ　004号住居址出土臼玉実測図



第31図　004号住居址出土臼玉実測図





第32図　004号住居址出土石製遺物、石鏃実測図

鎌の他，性格不明の鉄片の他は，穿孔具は検出できなかった。その他石鏃２・石錐２が検出されている。

(5)第５号住居址（第33・34・36・37・38図，ＰＬ12・13・15・20）

本址の南西コーナは，第４号住居址（工房址）の北コーナに延びて重復する，又，北東側は第６号住居址を切断する。

Ｃ02・Ｃ12の表土を排出した結果，暗黒色の落込みを確認した。東西5.15m，南北5.05mの方形プランの主軸方向Ｎ－11°－Ｗを計る，中型の住居址である。カマドは北壁中央に設けられており，粘土と砂で構築され天井はくずれ，火床内に落込んでいた。煙道は壁を張り出し，火床は焼土で厚く，カマド内部に甕形土器３点の他土器片が落込んでいた。壁は垂直に立ちあがり，周溝は壁下を一周する，床面は硬質ローム面まで深く掘り下げられ堅く，北東側は暗褐色土，粘土，焼土混りの土層を平担に使用，コーナに貯蔵穴を設けている。内傾する４本の支柱穴は，対角線上に配置されている，中型の住居址である。

出土遺物

005－１・３・４　カマド内出土のセットである，３点ともにスス付着，２次焼成され赤褐色胎土は微石を含むヨコナデ，タテ方向もナデ整形されており，１は刷目痕が顕著である，２は同様であるが貯蔵穴内出土である。４は火床に接しており，内外面ともに剥落し，３の下にあり，時には支脚として用いられたとも考えられる。５は覆土中から出土した甕形土器を接合した破片である。６は底部でカマド内出土である。外面は剥落している。

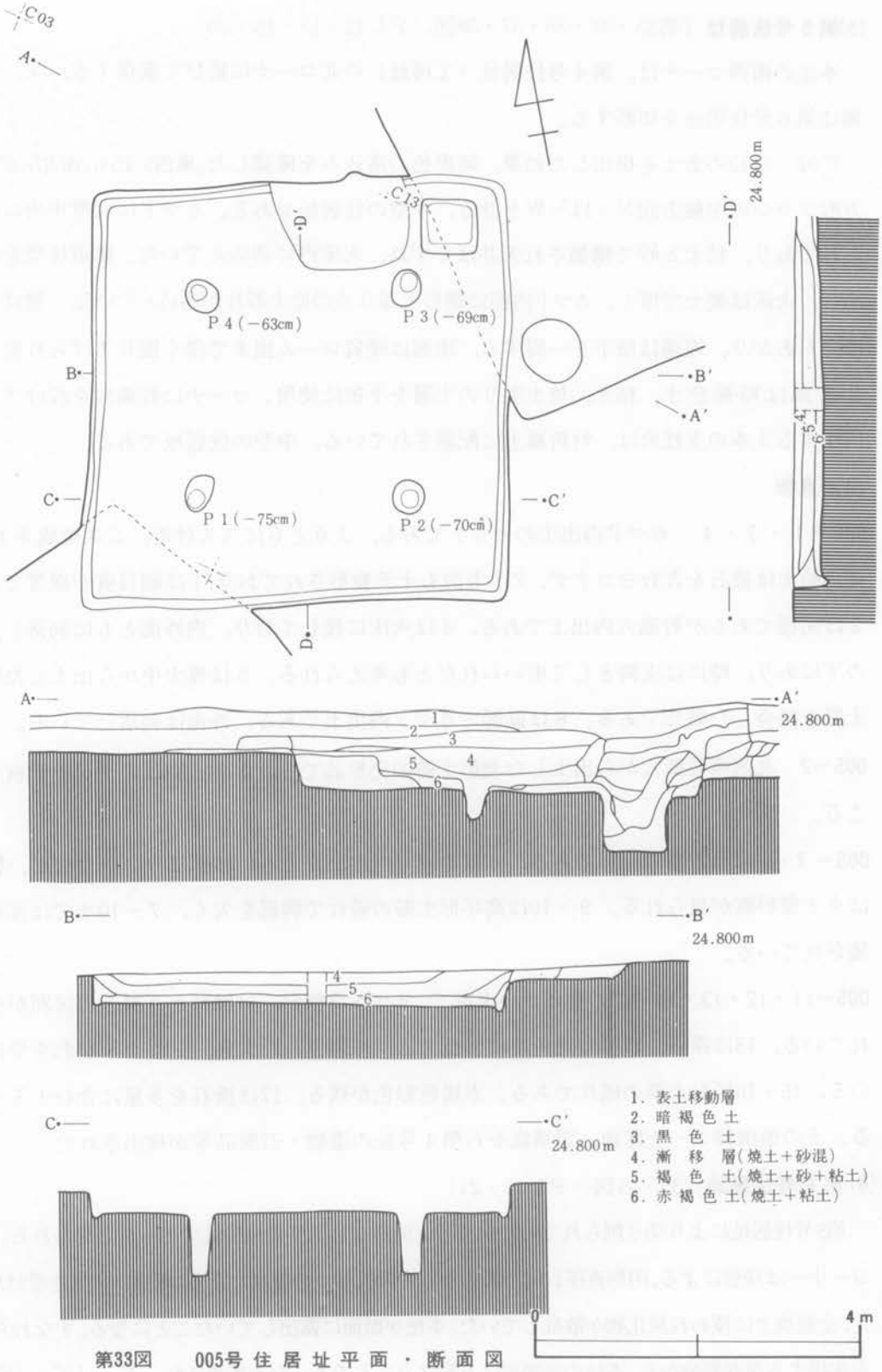
005－2　北西側貯蔵穴から出土した甕形土器の完形品でヨコナデ。胴は，タテナデ痕が残こる。

005－７～　床面密着の完形である，８はカマド内出土，ともに坏部はヨコヘラ整形，脚部はタテ整形痕が見られる。９・10は高坏形土器の破片で脚部を欠く，７～10までは赤彩が施されている。

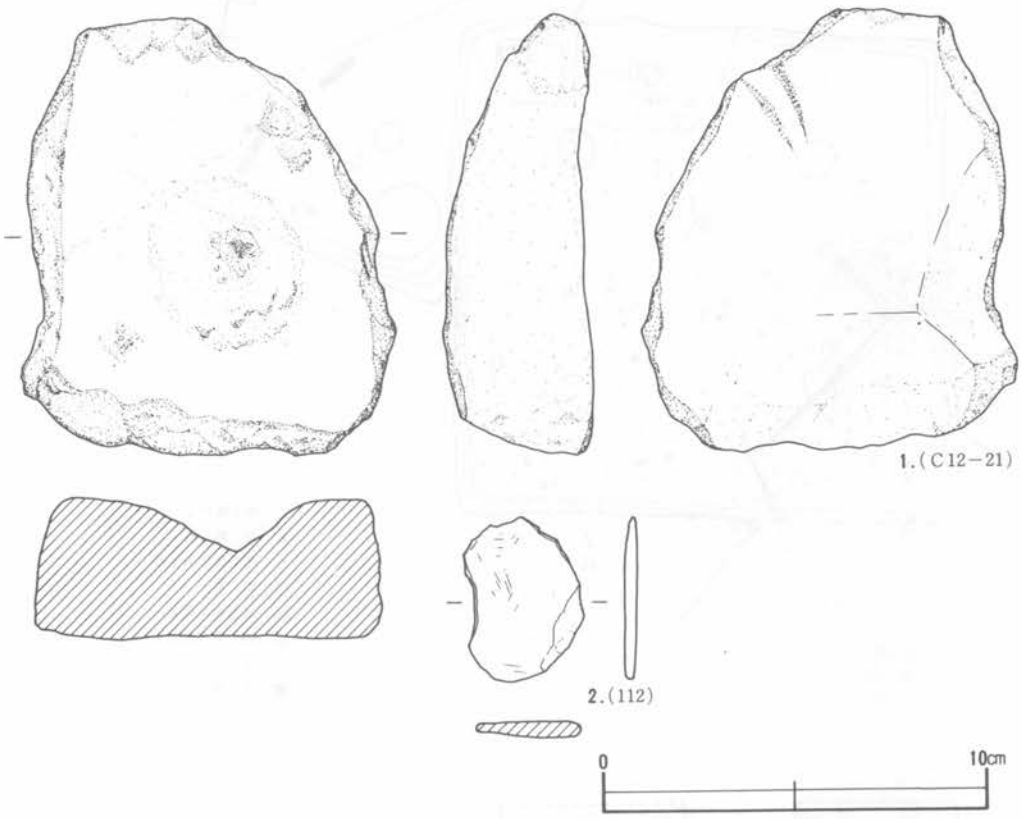
005－11・12・13・14　13の他は浅い丸底で，ヨコヘラ整形，口縁部と下部との区別がなされている，13は深い，口縁は急角度に外反する，赤彩された丸底，ヨコナデ整形を受けている，15・16坏形土器の破片である。赤褐色彩色が残る，17は微石を多量に含む土玉である。その他南側コーナ床面，周溝底から第４号址の遺物・石製品等が検出された。

(6)第６号住居址（35・39図　ＰＬ13・21）

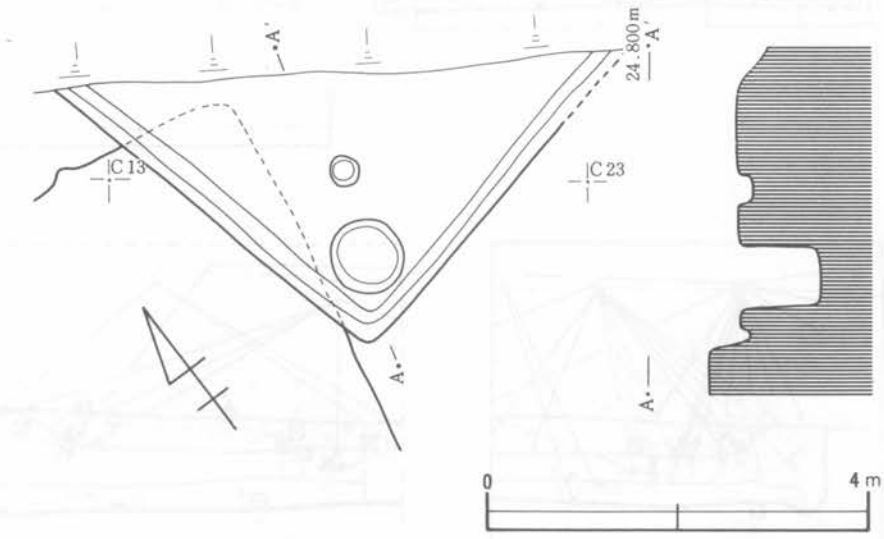
第5号住居址により切り削られていたが，7号と同様少し大型の住居址であったと思われる。南側コーナーは後世による，円形直径1.64m表土からの深0.80mの攪乱がある。床面は火災を受けたと見え，全面焼土に覆われ炭化物が散乱していた。本址が断面に露出していたことになる，すなわち約$\frac{2}{3}$を失損する遺存部分から，本址の平面形は方形プラントであったと推測され，Ｎ－13°－Ｗを計



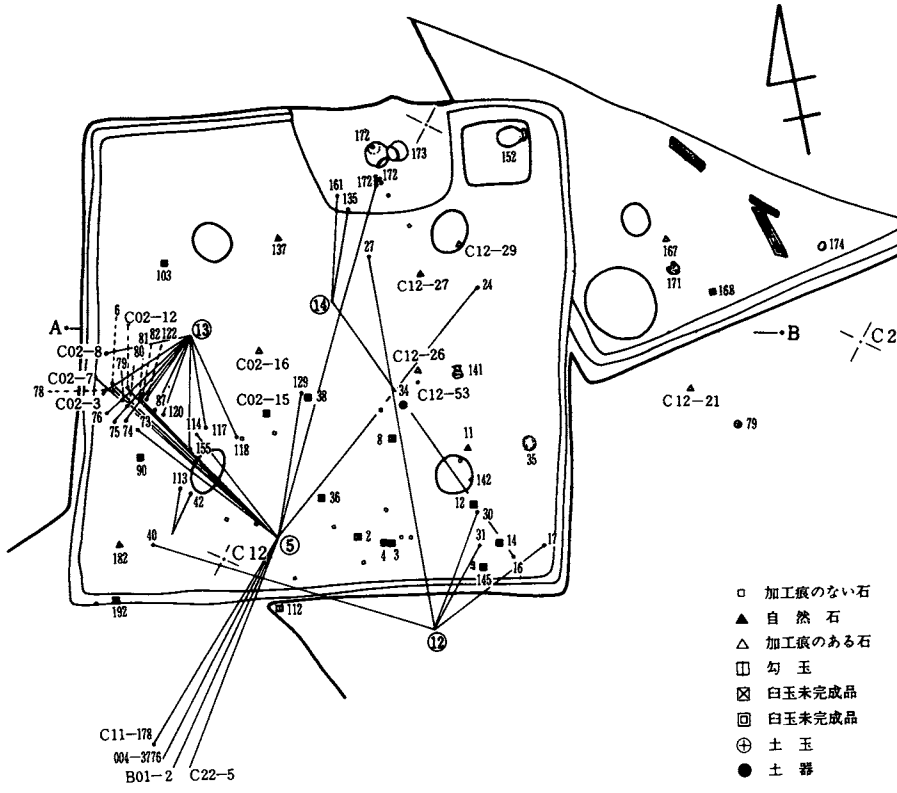
第33図　005号住居址平面・断面図

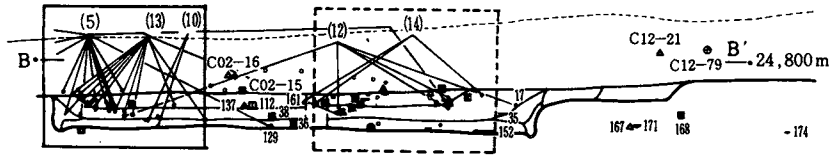


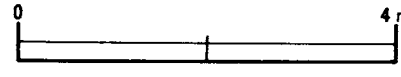
第34図　005号住居址出土石製遺物実測図

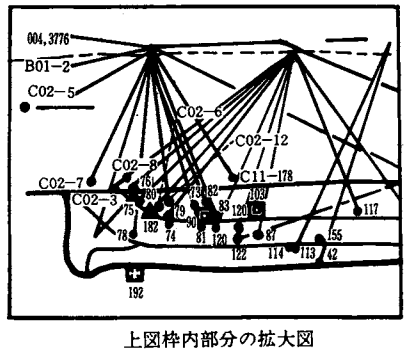


第35図　006号住居址平面・断面図

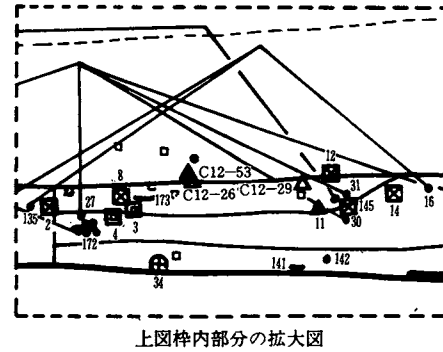






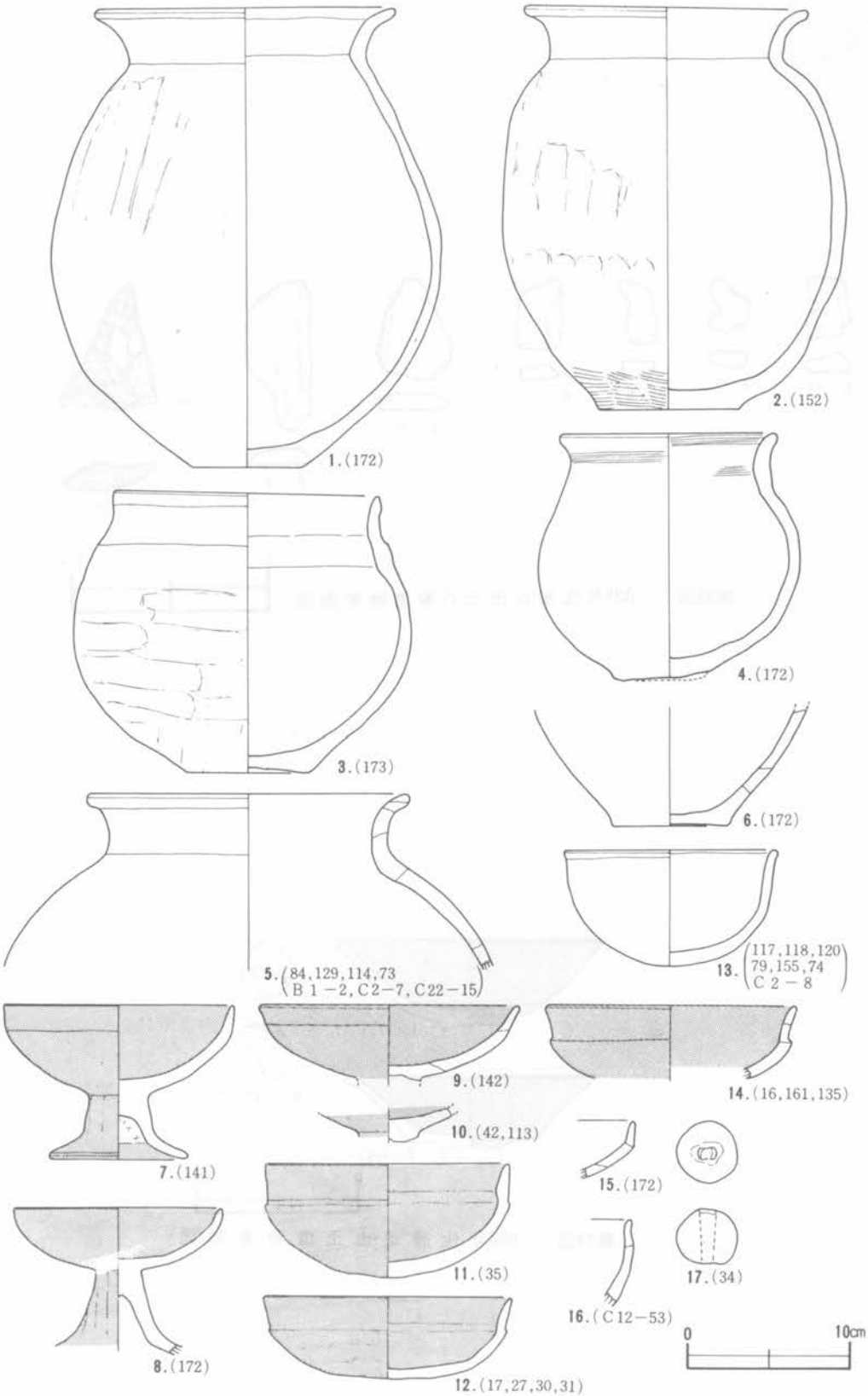


上図枠内部分の拡大図



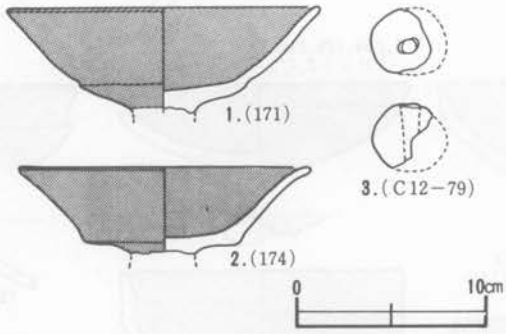
上図枠内部分の拡大図

第36図　005号、006号住居址遺物出土状況



第37図　005号住居址出土遺物実測図

第38図　005号住居址出土石製遺物実測図



第39図　006号住居址出土遺物実測図

る。大型の住居址と思われる。壁は垂直で床面は，踏みかためられてはいるが，５号址より多少低い程度の掘り下げであったことが，判明した。

出土遺物

実測，復元された土器は，２点でともにヘラ整形を受けた高坏形土器の坏部である。口辺部は大きく開き区別される稜を有す。上向き（正位）で出土，接合する脚部は検出されなかった。他に自然石，覆土中より土器片を検出した。

(7)第７号住居址（第11･12･40図ＰＬ７・22）

第２号址北側床面よりも深くロームを掘込んだ位置にある住居址である。本住居址が断面に露出していたことになる。すなわち削平され約$\frac{2}{3}$を失う。覆土中に２号址に伴う遺物が多量に発見され，床面が本址の上に延び重なっていた。表土及び覆土は後世の攪乱を受け，土器片が散乱しており，西側コーナーで主柱穴が重復する。本址の平面形は，方形プランであったと推測，Ｎ―6°―Ｗを計る。大形の住居址と思われる。壁は垂直に立ち上り床面は，よく踏みかためられ堅く，周溝も遺存する。遺物の一部は，表土中Ｃ―11グリット出土の土器片と接合した。

出土遺物

007―１　口径26.7cm底径10.4cm，胴ぶくれの甕形土器で，器高31.2cmをはかる暗黄褐色，微石を含み器面は剝落している。口縁に特徴があり，ヨコナデ及びタテ方向のナデ整形が窺える。床面上につぶれた状態で散乱した，土器片の接合で完成したものである。

007―２　底部はヘラ状工具で整形され，胴部はタテ方向に粗い整形痕が存在する。

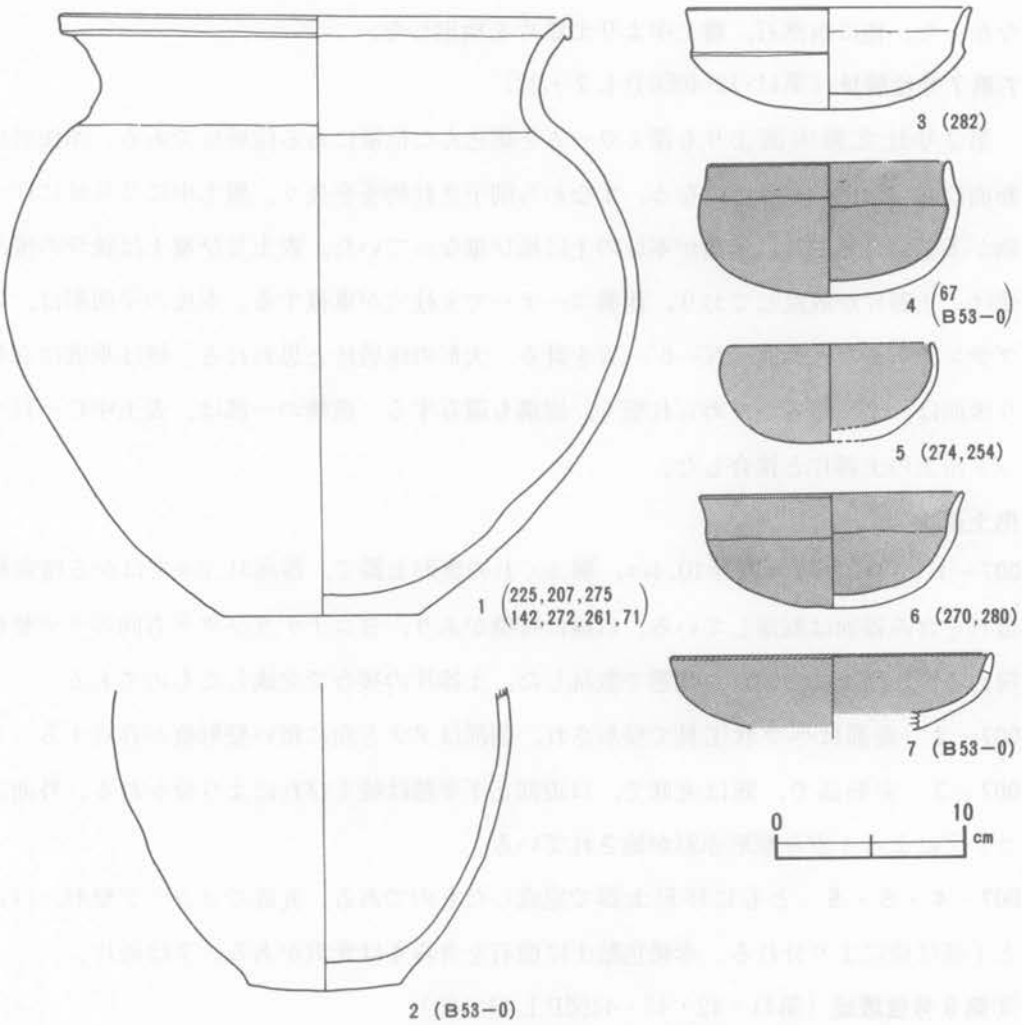
007―３　完形品で，底は丸底で，口辺部と下半部は稜くびれにより分かれる。外面はヨコナデによるミガキ整形赤彩が施されている。

007―４・５・６　ともに坏形土器で完成したものである。丸底でヨコナデ整形，口辺部と下部は稜により分れる。赤褐色胎土に微石を含み４は光沢がある。７は破片。

(8)第８号住居址（第41・42・43・44図ＰＬ14・23）

調査区を除草する以前，削平時には露出していた住居址で，本遺跡では中型に属する。第10号住居址を切って構築しており，B-11･B-12・B-21･B-22を排土した結果，平面プランを確認した。東西6.30m南北6.30mの方形であったと推定される。主軸方向Ｎ―48°―Ｗを計る。

壁は垂直に立ちあがり，周溝は南西側のみに残存し，粘土と砂が遺存，火床の位置に焼土部分があり，コシキ形土器等の検出により北側壁にはカマドが設けられていたと解され



第40図　007号住居址出土遺物実測図

る。主柱穴のピット２を検出した10号址の床面より深くハード面を掘り下げ床面となしており，本調査区では先端縁辺に位置する。伴出遺物は，ほとんど破片であった。

出土遺物

008—１　床面につぶれた状態で出土した破片の接合で，ヨコナデ整形がなされ，少し厚みのある口縁部から胴部にかけ遺存した。

008—２・３　甕形土器の少破片で胎土に微石を含み，暗黄褐色の土器である。内外面ナデ手法で整形している。３はコシキ形土器の口縁部である。

008—４　細砂を多量に含み積上げの圧痕が残る。黒褐色を呈し器面剝落している。底部には木葉２葉の圧痕が残る。６も甕形土器の底部である。

008—5　ヘラ整形，ミガキ痕のあるコシキ形土器の破片で薄い焼成良く胴部にタテ方向に刷状痕 一部が残存する。外面緻密である。

008—7　高址形土器の脚部タテ方向に整形されている。

008—8～14はともに坏型土器で，浅い丸底であるもの８，更に口縁部と下部に稜によって別れる内外面ヨコナデのもの９，10，11，12，13。深く椀形を呈し，やや底の平な粗い整形のもの14，他に土の焼結物，土製品，紡績車，土玉，黒色の土玉１とが，覆土中から出土している。石製品，勾玉，石片３，覆土から検出されている。

(9)第10号住居址（第45・46・47・48図ＰＬ14・15・24・25）

本住居址は，調査区西端に位置し，北壁の一部が先に記述した８号址により切り取られ掘り込みも浅い，大形の住居址であり，柱穴の配列に特徴がある。

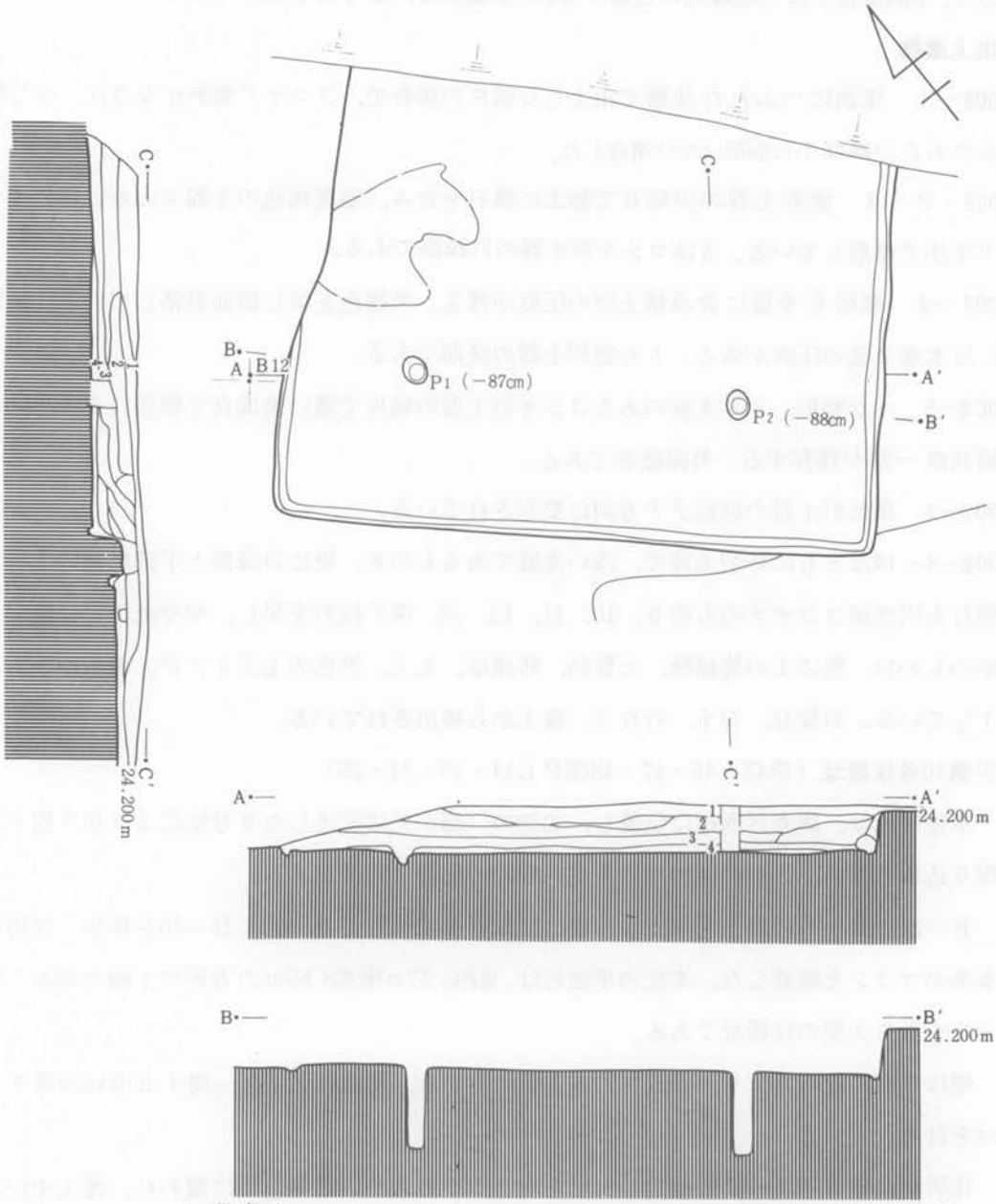
Ｂ—21，Ｂ—31の表土を排土し，更に区域外を拡張してＢ—20，Ｂ—30を排出，住居址本来のプランを確認した。本址の平面形は，東西8.57ｍ南北8.85ｍの方形で主軸方向Ｎ—14°—Ｅを計る大型の住居址である。

壁は垂直に立ちあがり，硬質ローム上面に達する。周溝は壁下を一周する巾16cm深さ５cmを計る。

住居址南壁コーナーに貯蔵穴２ヵ所を有し，やわらかい暗褐色土に覆われ，覆土中から土器片を検出している。

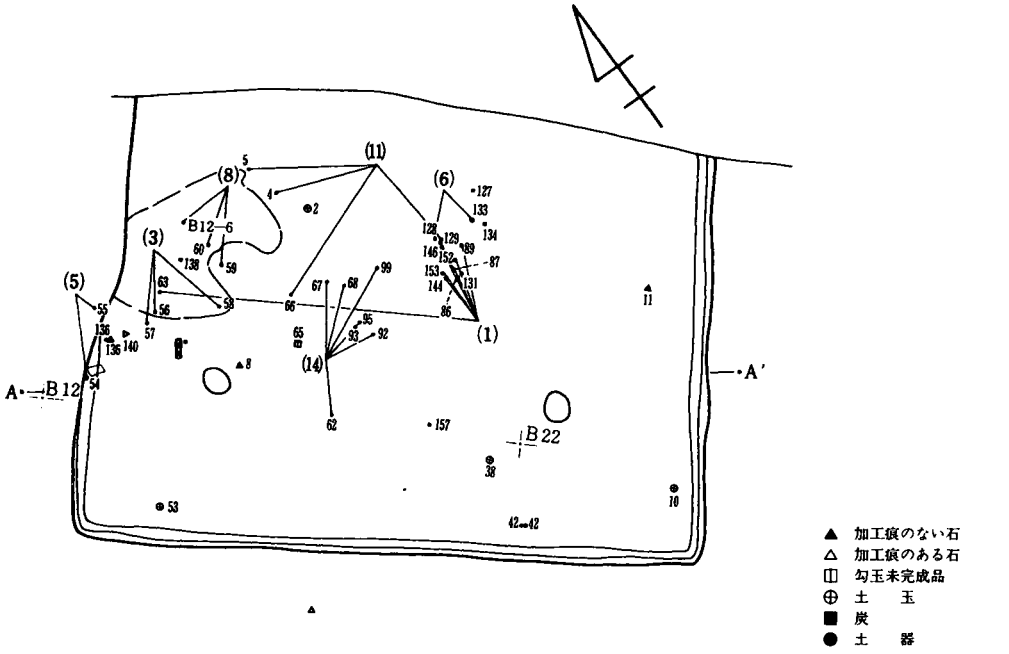
北側壁寄りにある炉は，よくやけ赤褐色を呈す。床面は堅くふみつけられてはいるが，壁よりは軟らかい，主柱穴４のピットはたがいに内傾し，その間に各々より浅い柱穴が存在し，ハリの支え柱と考えられるピットが配慮されていた。北側中央に炉が設けられている。

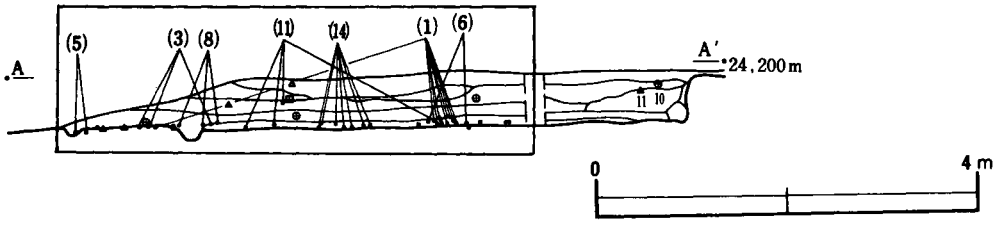
出土遺物

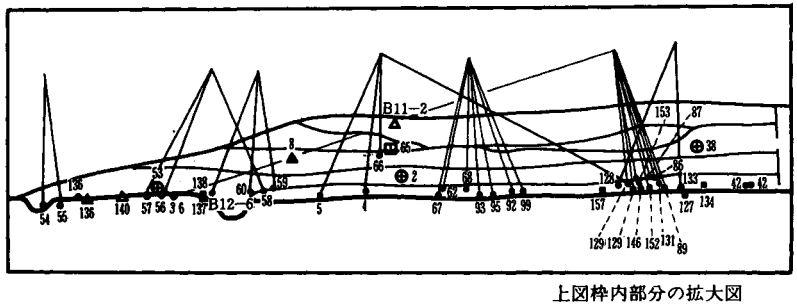


1．黒 色 土
2．暗褐色土（ローム＋漸移層）
3．淡黒色土（焼土粒＋炭）
4．褐 色 土（ローム＋焼土＋炭）

第41図　008号住居址平面・断面図

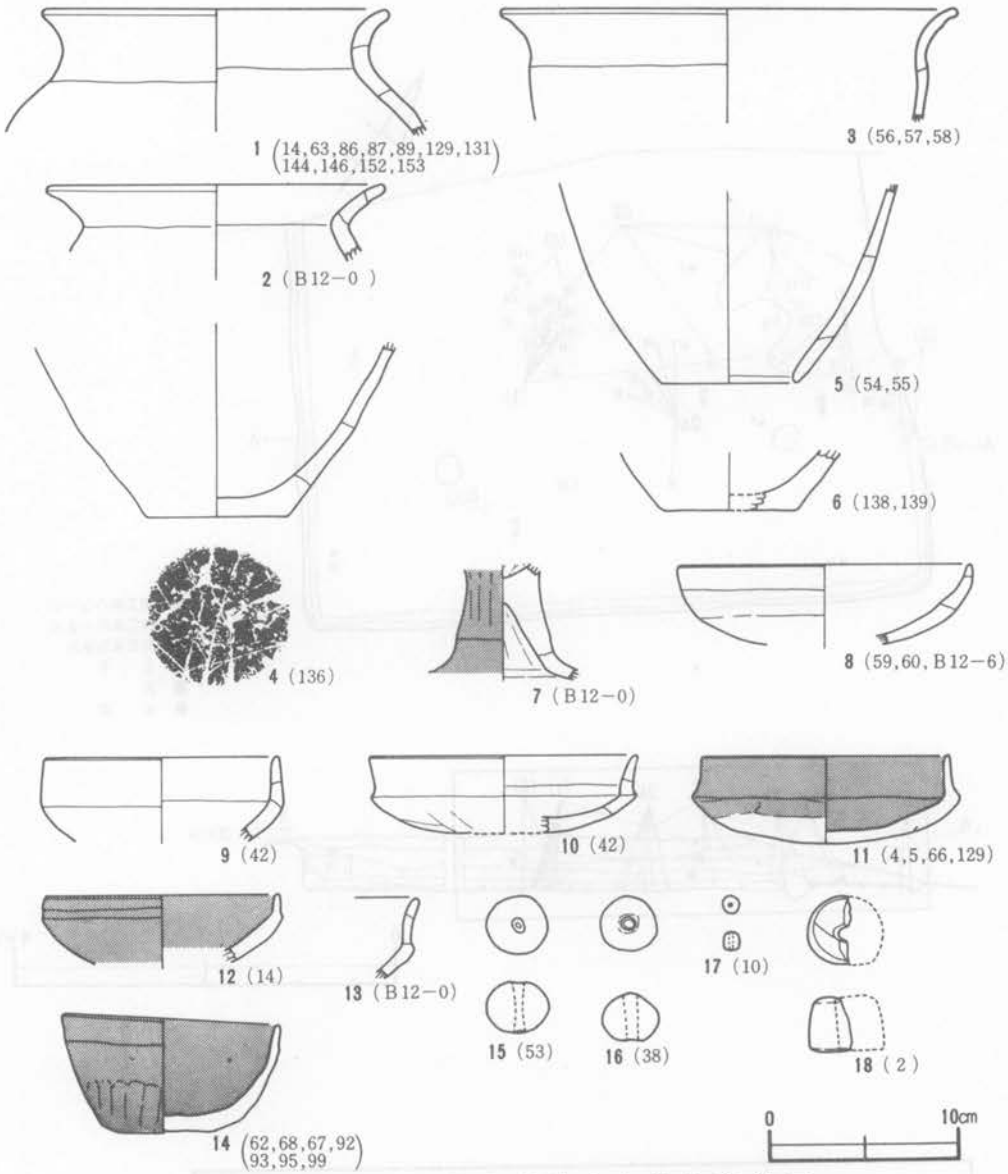




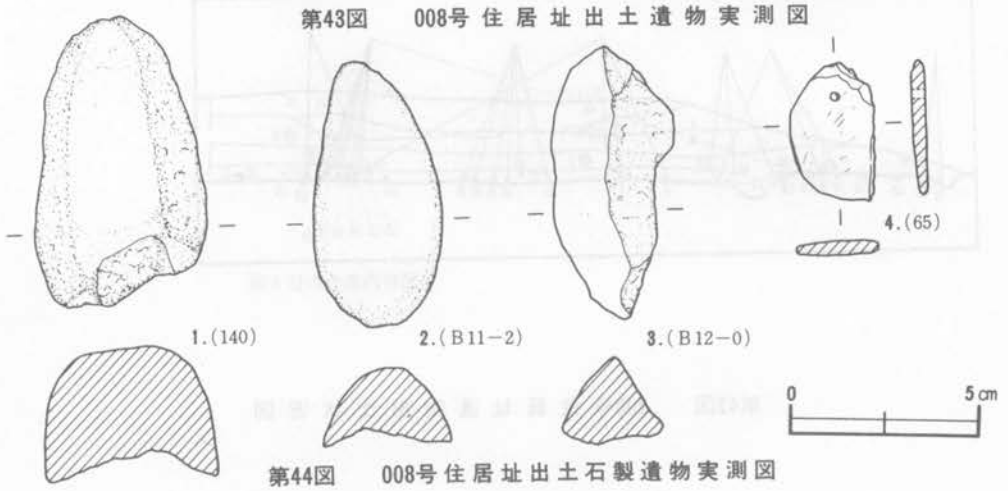


上図枠内部分の拡大図

第42図　008号住居址遺物出土状況図



第43図　008号住居址出土遺物実測図



第44図　008号住居址出土石製遺物実測図

010—1～6　口縁部ヨコナデ整形が施され，ヘラ整形又はナデミガキ痕が見られる。3は刷状工具による顕著な痕跡が残された甕形土器である。

010—7～12　いずれも底部で，7は粘土の積み上げ状態が断面に見られ，小平底である。12は木葉の圧痕をとどめる。

010—13～14　脚部にタテ方向のナデミガキ整形をなす高坏形土器の脚部片である。赤彩が施されている。

010—15～18　内外ともにナデ整形され，赤色顔料による彩る坏形土器で，16，17は丸底15，1815，18丸底に変化がみられ，ともにヨコナデ痕が見られる。

010—19・20・21　19は本調査区唯一の須恵器完形品である。ヘラによるヨコナデ，回転整形がなされている。口辺は，ほぼ直に立ち上り丸底である。20，21は，ともに破片である。青灰色19は口径11.4cm立上り1.9cm，器高4.7cmナデ整形されている。

その他土玉，砥石，石製品の破片を検出した。鉄製品は刀子片1点のみである。

本址は規模，砥石，石製品の破片，須恵器，鉄器等共通する遺物がみられるなど，004号址と関連する遺構と解される。

グリット出土遺物　（第49・52・53・54・55図）

（土製品）49－1・2・3は表土排出時に検出された甕形土器片で，胴部にはタテ方向刷状工具によるナデ整形痕が残る。口縁部はヨコナデされている。3はコシキ形土器片。

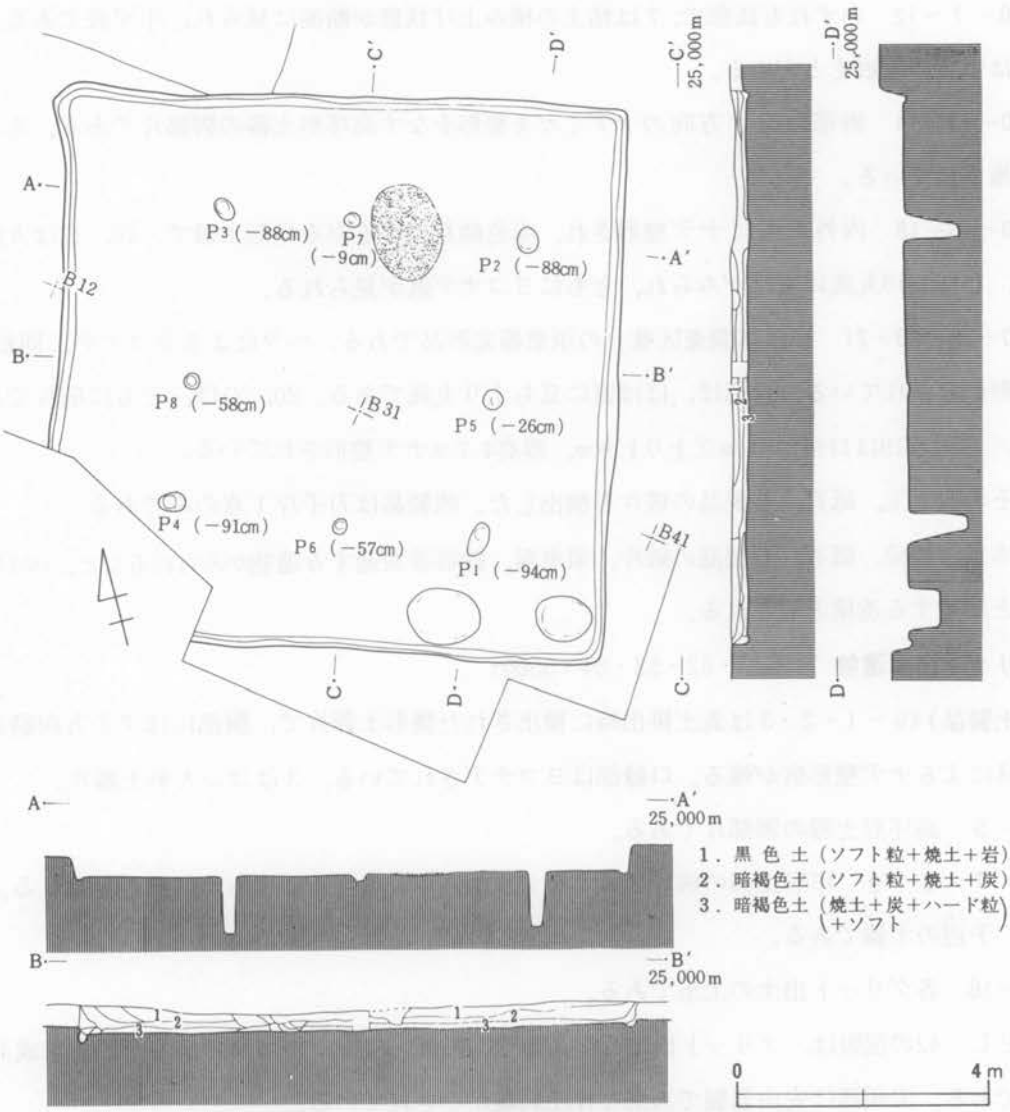
4・5　高坏形土器の脚部片である。

6・7・8・9　坏形土器の破片でヨコナデ痕が残される。下部にも整形痕が見られる。

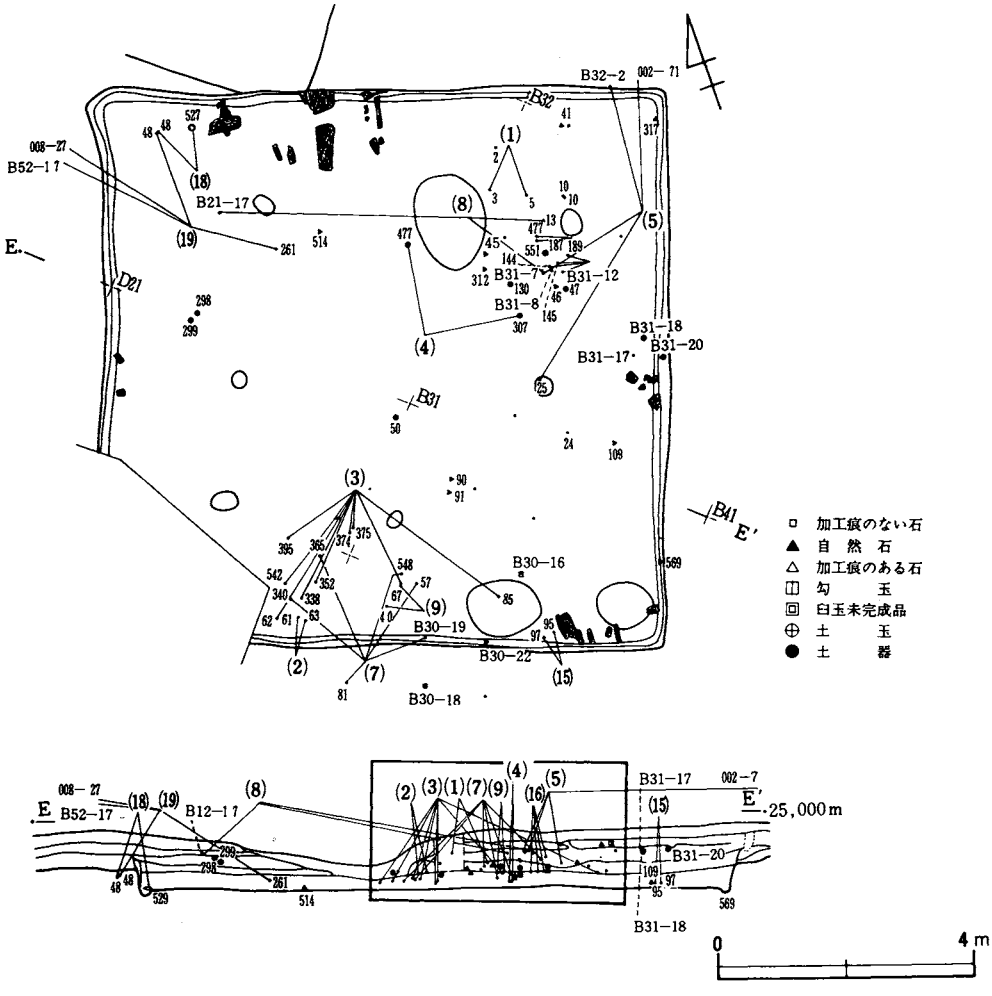
10　手捏（こね）の土器である。

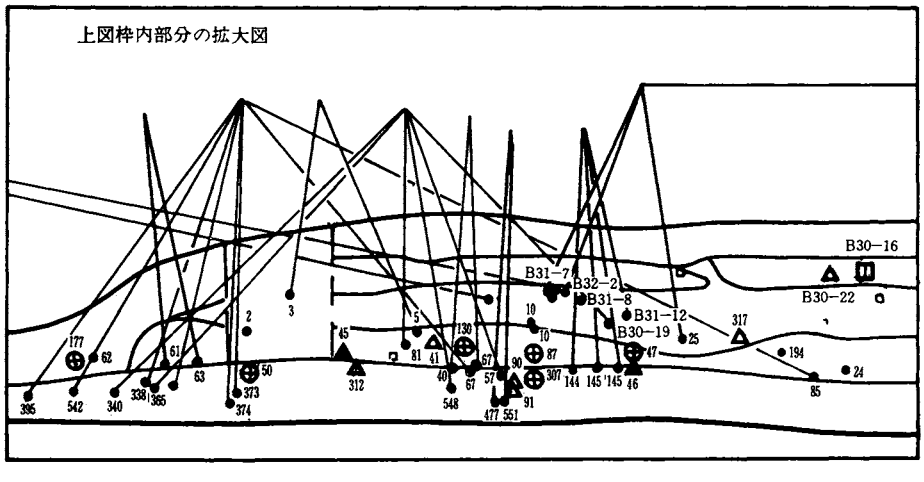
11～16　各グリット出土の土玉である。

ＰＬ—42の図版は，グリット出土石製品等で，円板，勾玉，剣形品の破片，臼玉未成品等である。尖頭器は安山岩製で入念な押圧剝離がなされている。

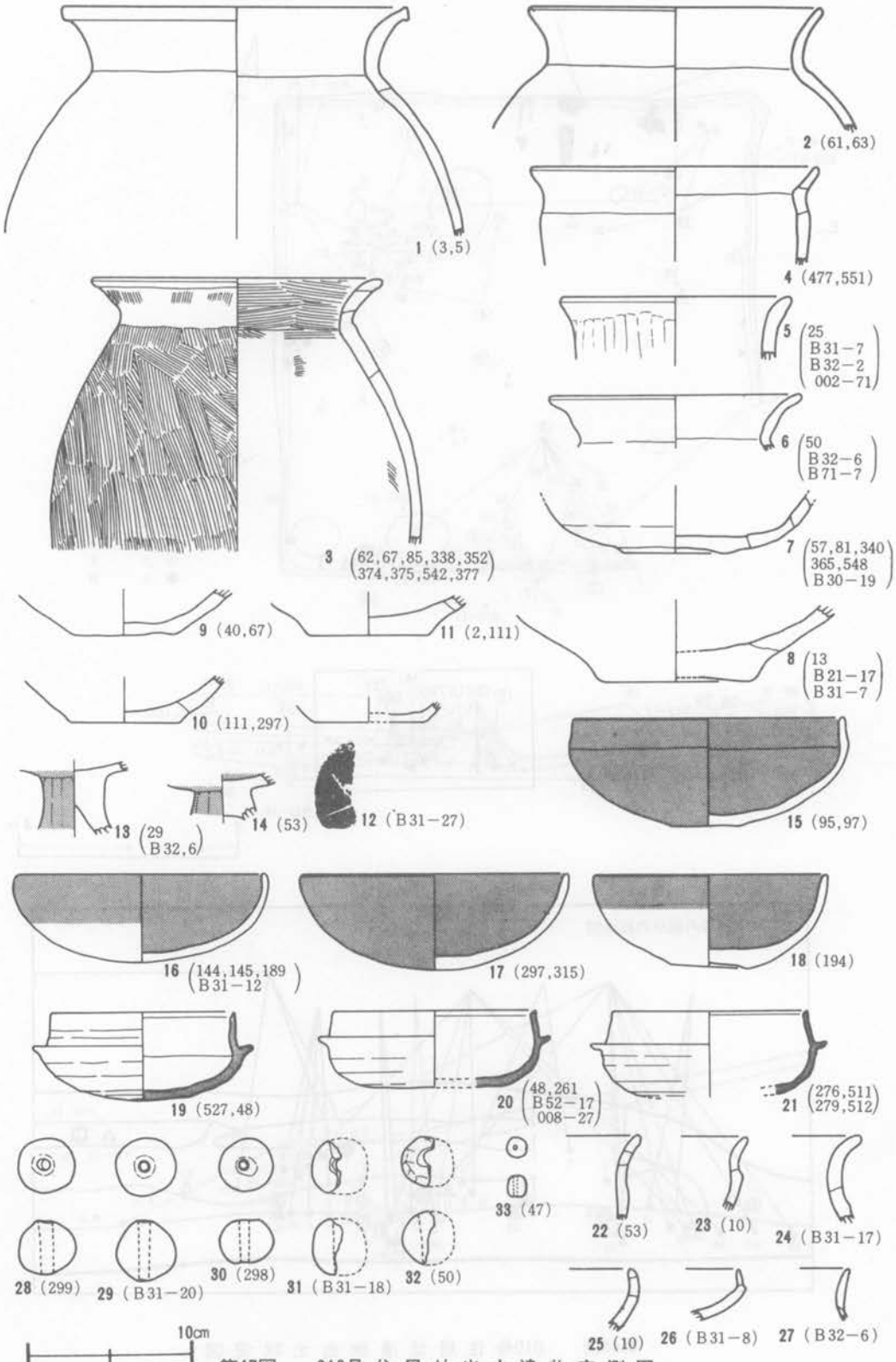


第45図　010号住居址平面・断面図

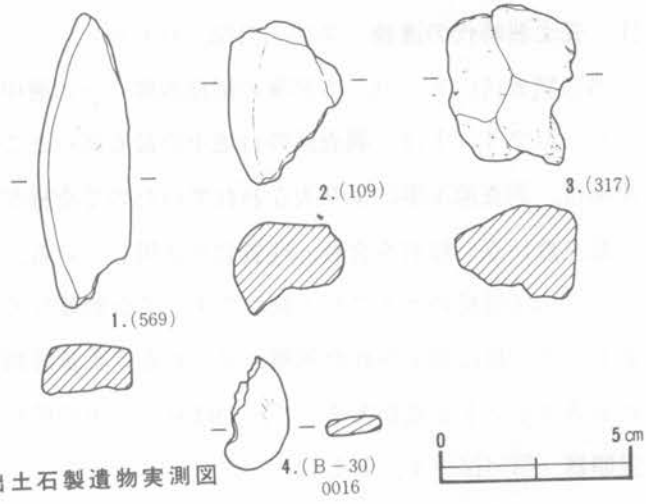




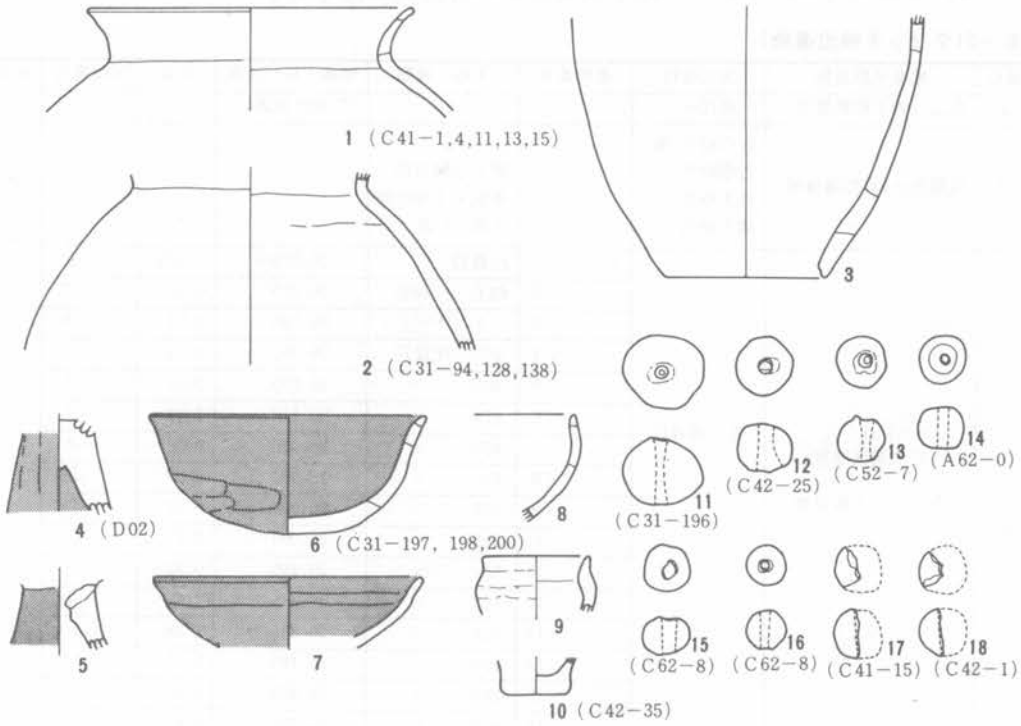
第46図　010号住居址遺物出土状況図



第47図　010号住居址出土遺物実測図



第48図　010号住居址出土石製遺物実測図



第49図　Cグリッド出土遺物実測図

第三節　グリット検出遺物

(1) 先土器時代の遺物（第50・51図，ＰＬ36）

当該調査区，Ｅ—21，方形塚の裾部西側ローム層中から検出された遺物である。

Ｅ—21グリットは，調査区の台地中の最も高いところにあたり，標高27ｍをはかる。塚裾部は，調査前工事により失なわれていたので全様がつかむことが出来ずおしまれる。

総点数18点，粒石を含む，珪質岩を活用している。出土状況，実測図第51図に示す。

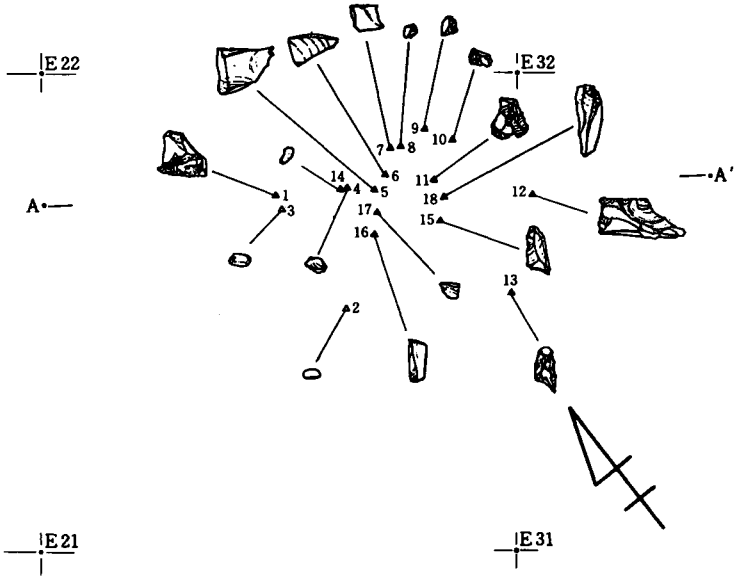
７～10は縦長のナイフ形の剝片ですべてが剝離片である。15と14，７と12は接合関係にある。タテ長に加工された剝離が見られる。重量計測値別紙の通り，他にＣ—41単独出土の有舌ポイント１点がある。17，18はローム中の粒石である。

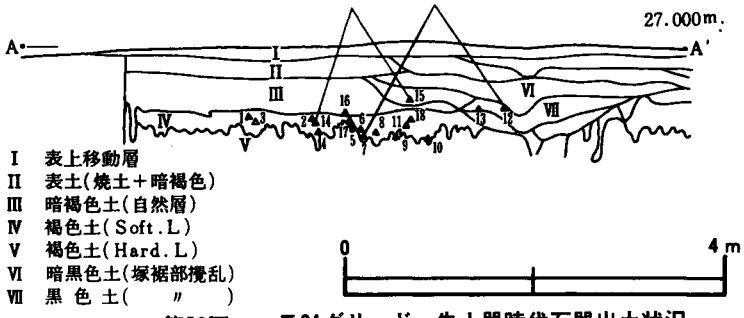
尖頭器（第54図－４．ＰＬ42）

Ｃ—41の表土（焼土混り）層中よりの単独出土である。安山岩製で風化しているが，表裏とも押圧剝離が施された完形品，弯曲する側縁は鋸歯状を示し舌部との比は（１：2.6）である。全長51.8mm，巾16.8mm銚子産噴出岩の有舌尖頭器である。

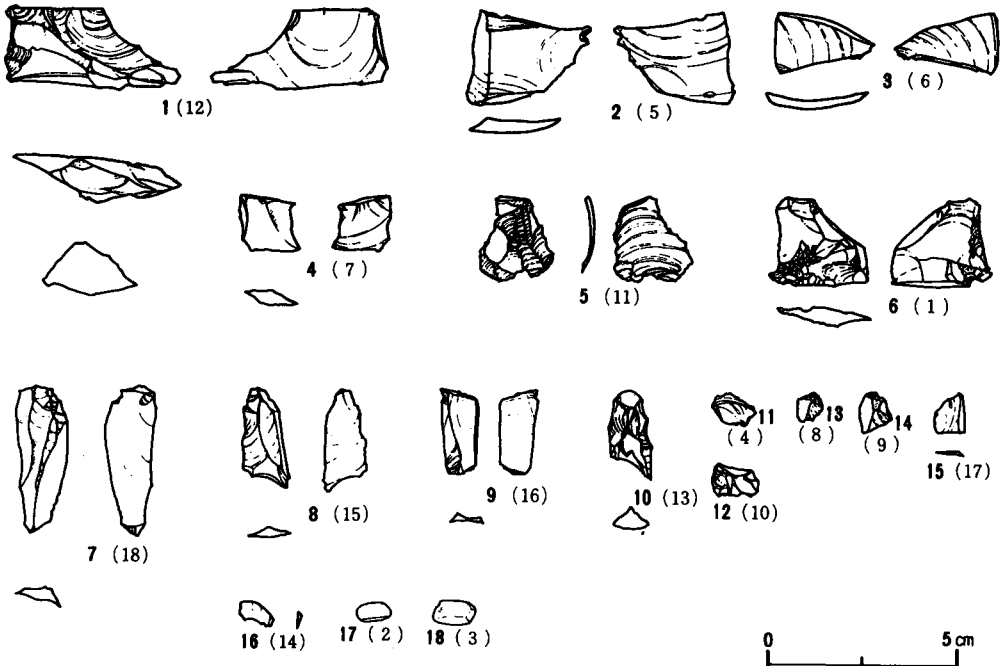
（Ｅ—21グリット検出遺物）

層位	地層分類名称	文化階程	遺物番号	名称・種類	標高・レベル高	法量	図版番号	地質年代
I	表土（表土移動層含）	現代～			27,000(地表)			
II	暗褐色土(自然層堆積)	江戸時代(塚) 古墳時代 弥生時代 縄文時代		第１号塚貨銭 本址・工房址他 土器・石器				新生代沖積世
III	ソフトローム (自然層堆積層) (立川ローム軟質部)	先土器時代	Ｅ—21～１	珪質岩	26.075m	3.47g	55—６	
			～２	粒石　砂岩	26.210	0.15	—17	
			～３	〃　チャート	26.185	0.57	—18	
			～４	剝片　珪質岩	26.050	0.18	—11	
			～５	剝片　〃	26.070	3.61	—２	
			～６	剝片　〃	26.110	1.37	—３	
			～７	剝片　〃	26.055	0.58	—４	
			～８	剝片　〃	26.080	0.07	—13	
			～９	剝片　〃	26.026	0.22	—14	
			～10	剝片　〃	26.005	0.26	—12	
			～11	剝片　〃	26.165	0.92	—５	
			～12	剝片　〃	26.345	11.62	—１	
			～13	剝片　〃	26.335	1.38	—10	
			～14	剝片　〃	26.185	0.05	—16	
			～15	剝片　〃	26.420	0.81	—８	
			～16	剝片　〃	26.280	0.45	—９	
			～17	剝片　〃	26.200	0.13	—15	
			～18	剝片　〃	26.205	2.15	—７	
	（クラック）							
IV	ハード・ローム (ローム硬質部)							第四紀洪積世

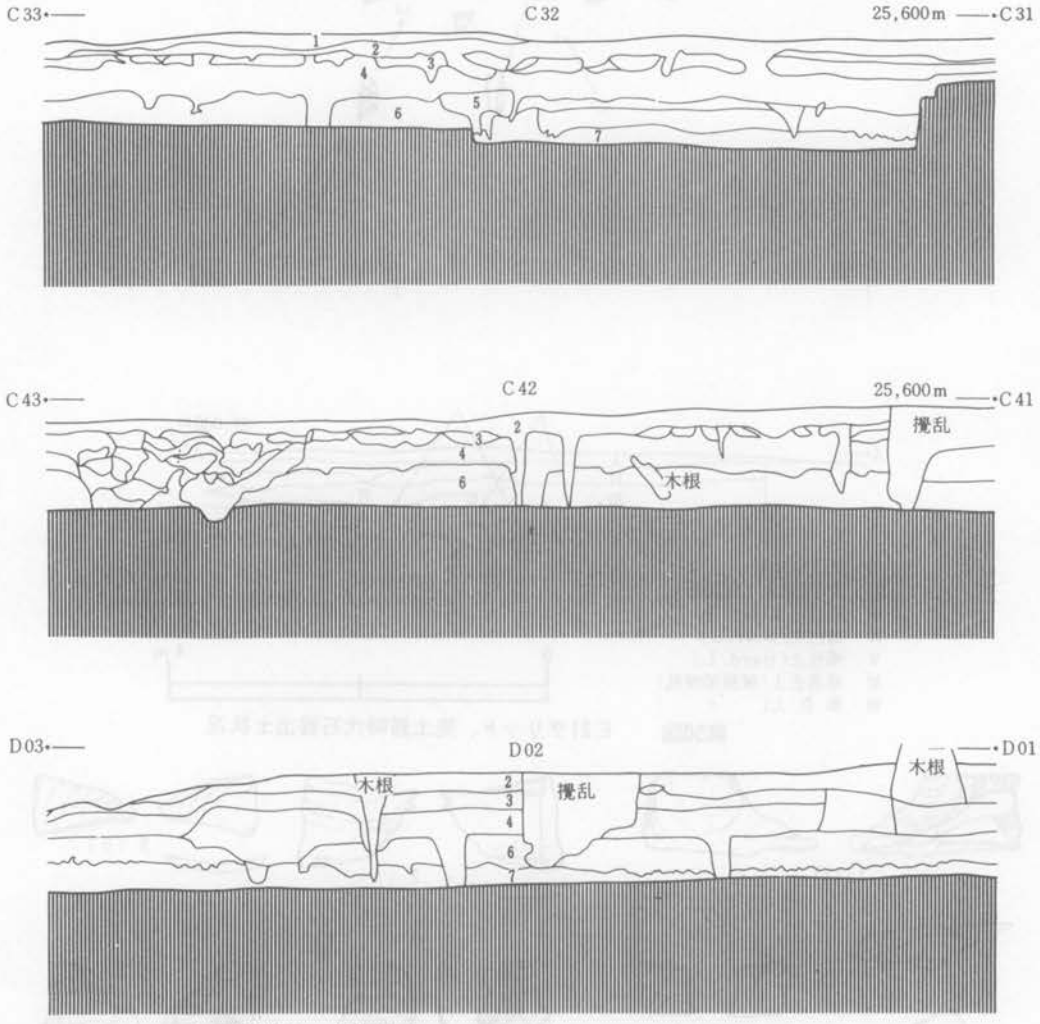




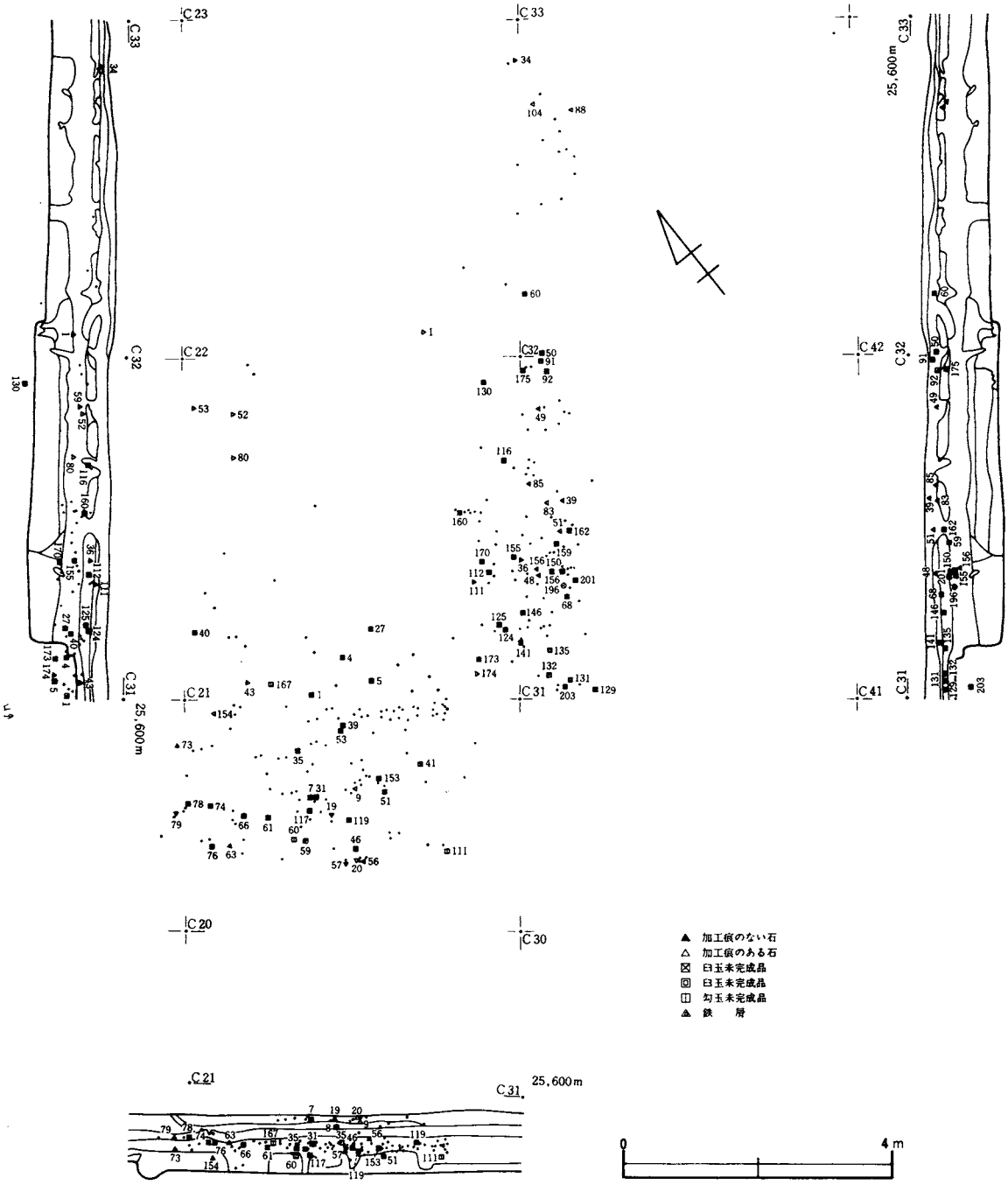
第50図　E21グリッド、先土器時代石器出土状況



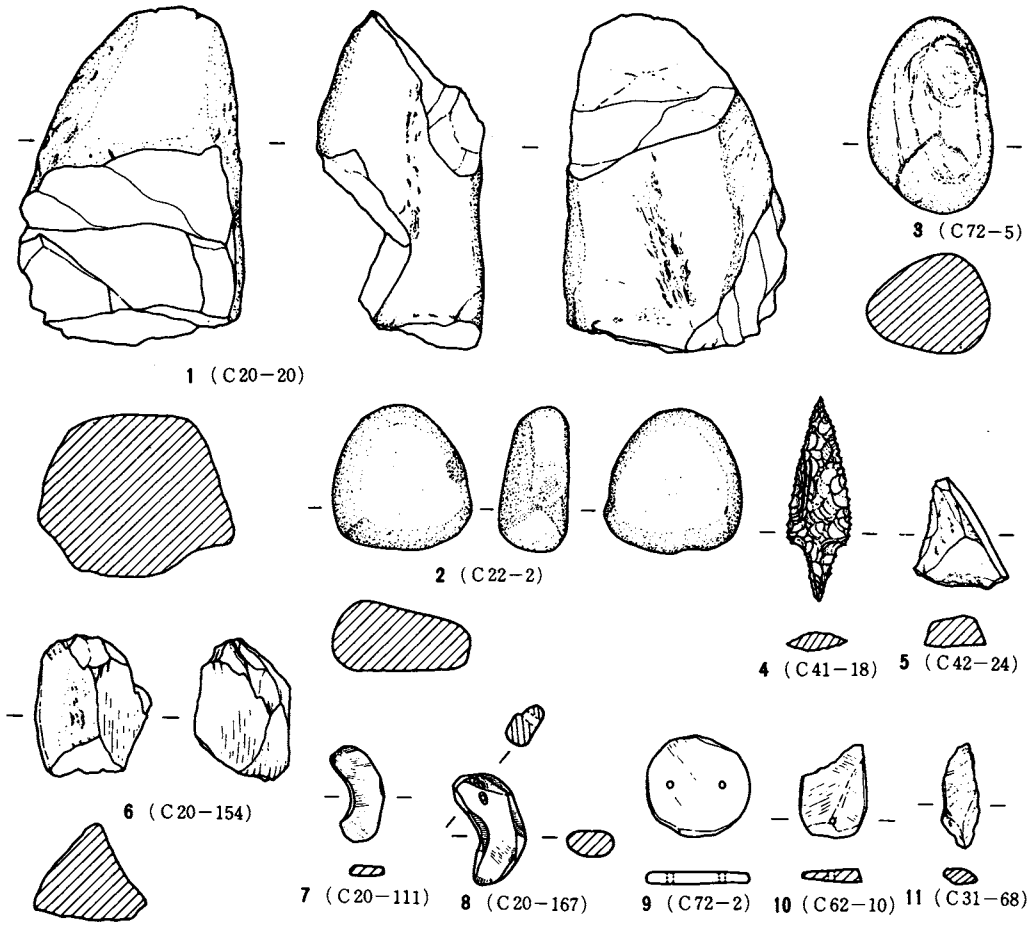
第51図　E21グリッド、先土器時代石器実測図



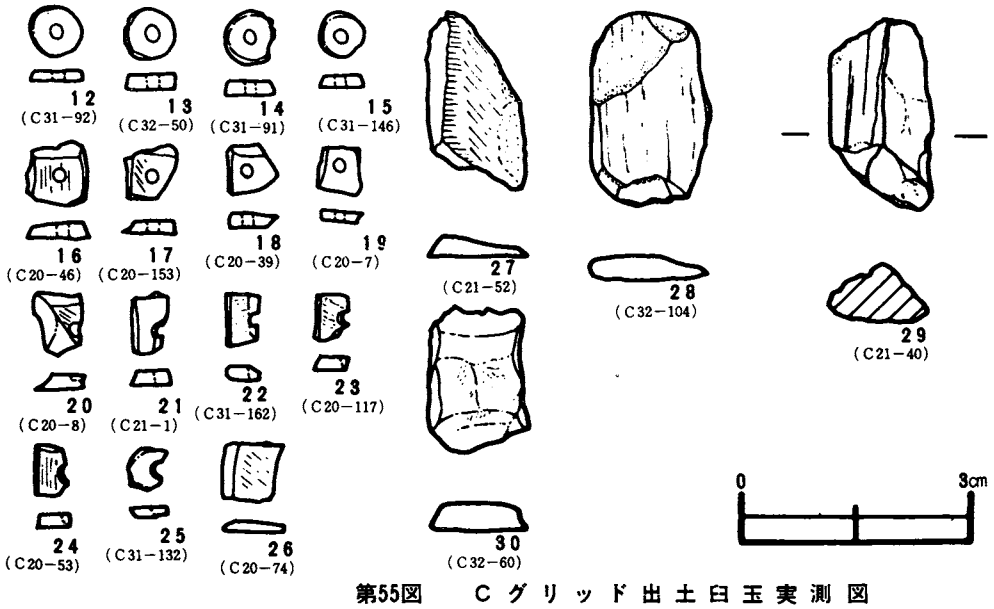
第52図　グ リ ッ ド 土 層 断 面 図



第53図　　Cグリッド遺物出土状況図



第54図　Cグリッド出土石製遺物実測図



第55図　Cグリッド出土臼玉実測図

(2) 縄文時代・弥生時代の遺構及び遺物（第32・34・37・38・56・57図，ＰＬ37･38･）

発掘調査の結果，当該遺跡地内の縄文時代・弥生時代の出土遺物には，完形品はなく全て破片である。

第三次の調査区内は，小台地上の狭細な範囲に限られ，又北側，谷縁辺部はすでに削平されていたこともあって，縄文・弥生両時代の散布地ではあったが，遺構は存在しない。

当該出土遺物には，土器片，土製品及び石製品・石鏃・凹石等がある。これらの遺物は，各々のグリットから出土しているが，Ａ地区では，先に述べた工事移動層中，又は第二層（暗褐色土層）中より検出され。Ｂ地区は住居址，覆土中より検出された遺物もある。Ｃ・Ｄ地区は，全て第三層（暗褐色土）中に遺存したものであり出土量は少い。

弥生時代の遺物は，土器片及び木葉痕をとどめる底部破片（ＰＬ38，第57図）のみで，主として，Ｂ地区・10号址附近土層に遺存した散片である。量的には，縄文時代の出土量と比して，こと更に遺物量は希薄であったが，グリットを異にする土器片と接合する破片もある。（第34図－８・９・10）参照

本遺跡出土の土器については，東寺山貝塚廿五里貝塚・殿台貝塚遺跡をはじめ・明治以来，人類学会に知られ，その後，大正，昭和にわたり，発掘が行なわれた加曾利貝塚調査による加曾利Ｅ式土器・阿玉台式土器等，縄文時代中期の土器片が多いことは，上記近隣遺跡との関係，台地の地理的位置その景観から，狭細の散布地調査ではあったが，第三次調査の出土遺物は，臨海性の文化遺産，その生活を示す基いとはなろう。

なお，個々の検出遺物については，特に当センター中山吉秀氏に協力をたまわった。

縄文式土器（第56図・ＰＬ56）

遺跡内の各グリッドより散片的に縄文式土器の出土がある。これらは，縄文時代前期末から中期末に至る型式に属し，その内訳は口縁部は15片，胴部81片，底部４片である。その型式別個別数は，浮島Ⅲ式１片，下小野式２片，阿玉台式52片，加曾利Ｅ式44片の各土器がある。以下，型式別に第１類土器から第４類土器に分類した。

第１類土器(1)

縄文前期末の浮島Ⅲ式土器である。アナダラ属の貝殻腹縁文の施文された胴部破片で僅か１片の出土である。

第２類土器（２・３）

縄文中期初頭に位置する下小野式土器と思われる。結束のある撚りの細かい縄文が施文

されている。

第3類土器（4～8～15）

阿玉台式土器を一括したが，文様を異にするところからa～c種に分けた。

a種（4～8・12）

連続爪形文や連続結節沈線文（角押文）を主文様とする。器形は，やや内湾気味の口縁部から頸部でくびれ，胴部から府部にかけてすぼまる深鉢形土器である。文様は，半載した竹管工具による異った手法の連続爪形文を横方向に施文したもの（4・7），爪形文と沈線文の組み合せたもの（8），連続結節沈続文を縦横に配し，更にジグザグ状に施文した沈線の組み合せたもの（5～6）がある。中でも，（6）は口唇部に刻みをもち，口縁部内側にも同種の文種が施文されている。また，（12）は，この種の土器の小把手である。

b種（9～11）

本種は，口縁部に楕円状に区画された隆帯のめぐるグループである。隆帯の内側には，半載された竹管工具による刺突文，爪形文が連続して施文される。中でも（11）は，嘴状の貼付文がありこれを境にして沈線の区画内に連続して刺突文が施文されている。更に胴部では，輪積みを消すためにその上に横方向の刻目文が施されている。この土器は，他の土器に比較して胎土中に金雲母の混入が多い。

c種（13～15）

本種は，無文土器と断面三角形貼付けによる隆帯をもつ。（13）は，浅鉢形土器で口唇部に刻みが施されている。(14～15)は，深鉢形土器の胴部破片で，沈線文間に断面三角形の貼付けがみられる。

以上，3種に分けたこれらの土器の色調は，茶褐色ないし褐色で利根川下流域出土の阿玉台式土器のように灰褐色，黒褐色のものは少ない。胎土中には，石英・砂粒の混入が著しいものは多いが，金雲母の含有するものは少ない。焼成は，全体的に普通である。時期的には阿玉台式土器の中で，さ程新しいものは見られず早稲田大学西村正衛教授の説く古式的様相の残るⅡb期と考えたい。

第4類土器（16～28）

縄文中期の加曾利E式土器を一括した。型式及び文様の異るところから口縁部破片と胴部破片に分けた。

（16～18）は，口縁部破片で加曾利E式土器のキャリパー型のもので，口縁部に渦巻文のみられるものから沈線による楕円状区画の内側に縄文の施文されるものがある。中でも，

(17) は，口唇部にも太沈線が一周するようである。

胴部破片には，撚糸文のみの加曾利ＥＩ式のもの（20），縄文に太い沈線文のめぐるもの（19・22），縄文のみのも(21・23・24)や所謂磨消し手法のある胴部（25・26）もみられる。この他，櫛状ないし櫛歯状工具による条線文のもの（27・28）がある。色調は，褐色から明褐色のものが多く，胎土中には砂粒の混入が著しい他は密である。焼成は比較的良好といえる。

底部

縄文中期の阿玉台式土器か加曾利Ｅ式土器の底部破片が４点出土している。底面には，アンペラとかアジロ痕と呼ばれている圧痕のみられるものはない。ほとんどが，深鉢形土器のもので，（37）は浅鉢形土器と思われる。

土製品（第 56 図29～34）

土器破片を再利用した土器片錘が，他の土器片に混じって５点出土している。完形品は１点のみで，他は欠損品である。この土器片錘のうち，土器片の周囲を磨って丸く再調整のみられるものは，（29・30・32・33）で，土器の欠けたものにほとんど手を入れていないもの（31・34）がある。この中で最も重いものは欠損品ではあるが(32・33)で，41ｇ～43ｇを計る。また，最も軽いものは欠損品の為不明である。これらは，阿玉台式土器（29）以外全て加曾利Ｅ式土器である。おそらく，その当時の台地付近まで浸入していた海水か小河川を利用して漁網による漁労活動が行われていたと考えられる。

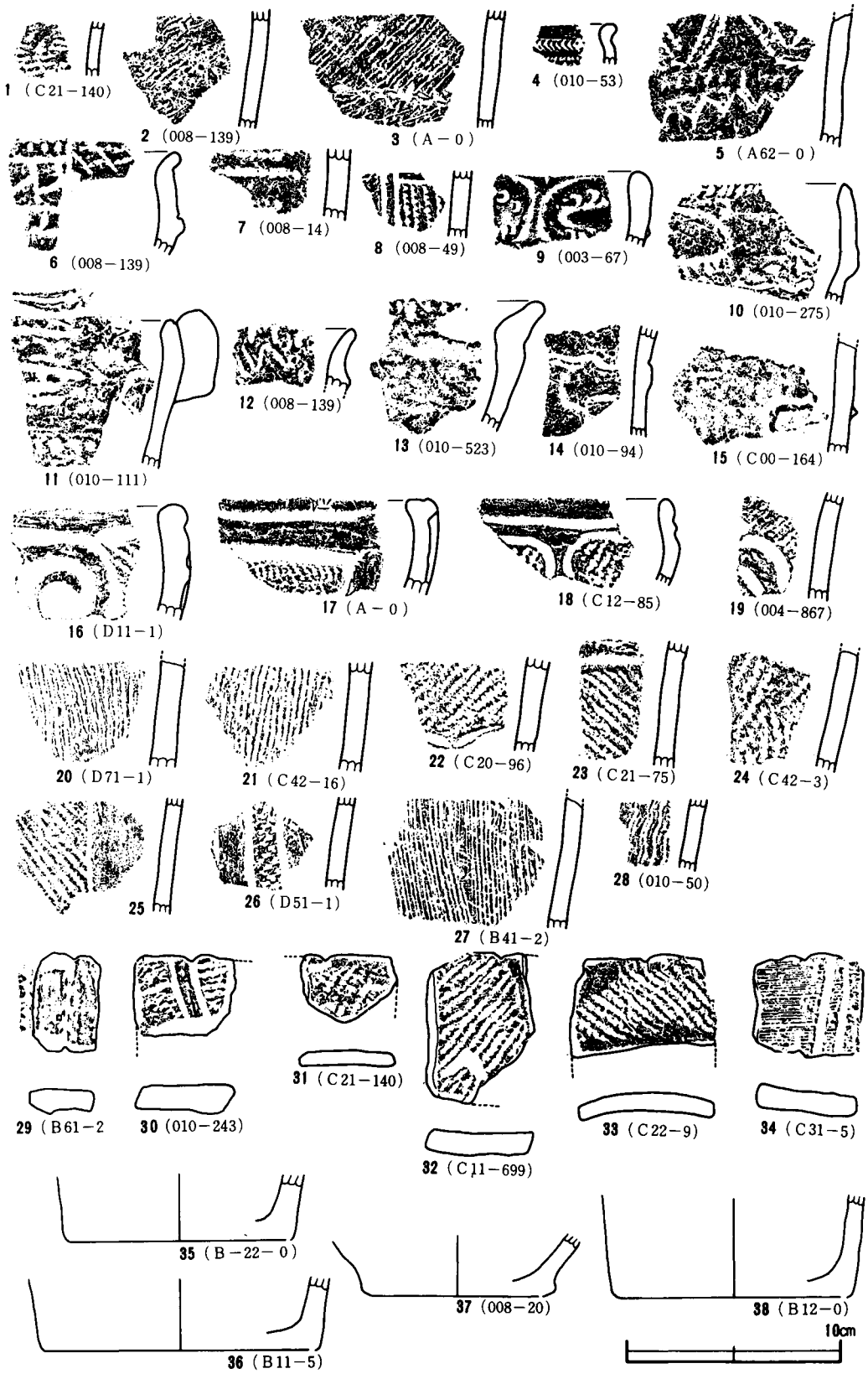
（中山吉秀）

弥生式土器（第34図　ＰＬ57）

縄文式土器に混じって弥生式土器も若干出土している。その内訳は口縁部５片，胴部25片，底部７片を数える。口縁部破片の内，２点は口縁部に指頭圧痕が連続して施文されている薄手の台付甕形土器で（１～２），弥生後期初頭の久ヶ原式土器であろう。

この他，口縁部を折り返した壺形土器の口縁部破片がある。(3～5)胴部破片はいずれもこの壺形土器のもので（６～10），中でも(6)は頸部から胴部にかけての破片で，胴部の縄文は原体の末端を結んだものを回転施文している。また，胴部に施文された縄文は，４本撚りの異条斜縄文である。

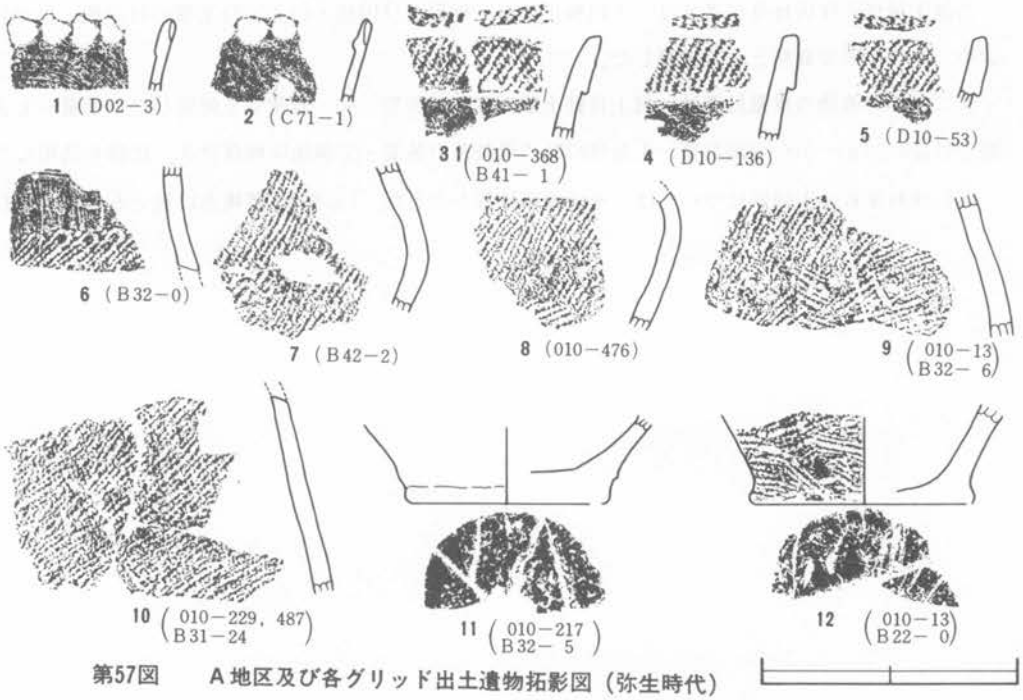
底部は，７片のうち２片を図示した。(11～12)このうち(12)は，壺形土器の底部で，施文された縄文が底部近くまでみられる他，底面には木葉痕がみられる。この壺形土器は，茨城県，千葉県北部に広く分布している，所謂北関東系弥生式土器と呼ばれ，本遺跡では



第56図　A地区及び各グリッド出土遺物拓影図（縄文時代）

弥生後期の久ヶ原期に伴出している。また，この一群の土器は，長岡式と呼ばれている型式のもので，本台地でも，東寺山石神遺跡，東寺山古墳下遺跡からも検出されている。

（中山吉秀）



第57図　A地区及び各グリッド出土遺物拓影図（弥生時代）

（3） 東寺山戸張作（海老）出土遺物一覧表

本表は，出土遺物を各住居址ごとに整理した第三次調査の成果である。この表には，遺跡地検出の岩石鑑定結果と重量，土器の計測値，形態等も記載し，重量数値は(g)で示してある。

第三次発見遺物中で，大多数をしめる攻玉材等の委託鑑定結果と・印は類推したものであり肉眼鑑定法による。また螢光X線分析等により産地の同定がなされたので付記してある。（後稿参照）

当該工房址・住居址及び各グリッド内検出の石・剣形及び円板・臼玉・勾玉等の材の他，出土岩石を含め，今後の研究資料として網羅した。

表に示した遺物の重量計測は，村上自動上皿天秤・ＵＳ型－60・直読型を使用した・秤量60ｇまで，最小目盛0.05ｇ・100分割目盛・上皿径83㎜の風袋差引装置・分銅加除機構付き，仕様を活用した。

赤色顔料塗彩の土師器については，その塗彩位置を示した。（赤褐色･黄褐色に視えるものも含む）

戸張作遺跡（海老）出土遺物一覧

001号住居址（古墳時代）

▲印は計測不能

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
平面形 方形	第12図 1	甕形土器	複元口径 15.2cm	81	○	○	口縁部
規模 450cm× ▲	2	甕形土器		78			底部
面積 約¼が削除	3	高坏形土器	5.63cm	36	○	○	脚部
					○	○	破片
主軸方位 N－42°－E	4	高坏形土器	5.1cm	B72-0	○	○	破片
炉，カマド，柱穴等 主柱穴ナシ 小ピット壁沿い 貯蔵穴½残存	5	坏形土品	5.1cm	B72-12 B72-13 B72-14 005-58	○	○	底部 スス炭化

002号住居址（古墳時代）

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
平面形 方形	第15図 1	甕形土器	口径18.1cm 高さ28.7cm 底径 6.0cm	211 (191 192 193 194 190 189 213)		○	完形
規模 595cm×585cm	2	甕形土器		198 68			口縁部
面積 34.80m²	3	甕形土器		66 276			口縁部
主軸方位 N－14°－E	4	甕形土器		276	○	○	口縁部
坏，カマド，柱穴等 主柱穴アリ 007ときり合い	5	甕形土器	対角線上 4	276	○	○	口縁部
貯蔵穴ナシ	6	甕形土器		271			口縁部
貝類出土	7	甕形土器		5			口縁部
	8	甕形土器		251			底部
	9	甕形土器	底径 7.1cm	276			底部
	10	高坏形土器		276	○	○	脚部
	11	高坏形土器		276	○	○	脚部
	12	坏形土器		230	○	○	口縁部
	13	坏形土器		283 C-11 75 C-11 370 B-21 0	○	○	内部×印
	14	坏形土器		276	○	○	口縁部
	15	坏形土器		276 268	○	○	口縁部

H高さ　S直径

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
	第15図16	坏形土器		276	○	○	椀
	17	坏形土器		87 85 212 253	○	○	口縁部
	18	坏形土器		286	○	○	口縁部
	19	坏形土器		220 276	○	○	口縁部
	20	坏形土器		255 B-52 21	○	○	口縁部
	第16図 1 3	土玉	孔径 7.5mm H29mm S32.5mm	276 2ヶ		○	酸化焼成の赤
	2	土玉	孔径 7.0mm H29.5mm S28.0mm	138		○	酸化焼成の赤
	4	土玉	破片	B-52 40		○	酸化焼成の赤
		支脚		287			粘土
	5	砥石		105 接合			流紋岩質凝灰石
	5	砥石		106 接合			流紋岩質石英安山岩質凝灰石
	6	石英脈		276 ……5個接合			
		自然石		63			チャート

003号住居址（古墳時代）

平面形 方形	第2図1	甕形土器		123	○	○	口縁部
規模 595cm×565cm	2	コシキ形土器		111 136 110	○	○	口縁部
面積 33.61m²	3	高坏形器	底径 9.2cm 器高11.5cm	127 129	○	○	完成
主軸方位 N－5°－W	4	高坏形器	底径 8.4cm 器高 8.5cm	39 41 127	○	○	完成
圷，カマド，柱穴等 主柱穴アリ カマド2	5	高坏形器	対角線上4 北・東壁	49	○	○	坏部
貯蔵穴	6	高坏形器		34	○	○	坏部
	7	高坏形器	底径 9.2cm	100	?	○	脚部
	8	高坏形器		128	○	○	脚部
	9	高坏形器		67	○	○	脚部
	10	高坏形器		54	○	○	脚部
	11	高坏形器		50	?	○	脚部

遺物概構	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
	第19図 12	坏形土器	口径14.5cm 器高 5.5cm	113	○	○	完形
	13	坏形土器	口径14.0cm 器高 5.1cm	114	○	○	完形
	14	坏形土器	口径13.1cm 器高 4.5cm	111	○	○	完成
	15	坏形土器		77 B-61 36	○	○	口縁部
	16	坏形土器		137	○	○	口縁部
	17	坏形土器		49 B-72 3	○	○	口縁部
	18	坏形土器		109	○	○	口縁部
	19	土玉	孔径 7.5mm H36.0S38.5	118		○	酸化焼成の赤
	003～	支脚		131 141			粘土
	003～	自然石	3.4 g	139			砂岩
	003～	石鏃	0.25 g	140			チャート
	003～	花崗岩	0.75 g	124			
	003～	自然石	0.75 g	46			黒耀石
	003～	自然石	0.75 g	B-61-5			チャート
			0.6 g	47			
	第20図 1	臼玉	0.3 g	134			緑泥片岩系（濃緑色）出上地点同じ一括（床面密着）
	2	臼玉	0.2 g	134			
	3	臼玉	0.25 g	134			
	4	臼玉	0.2 g	134			
	5	臼玉	0.2 g	134			
	6	臼玉	0.15 g	134			
	7	臼玉	0.2 g	134			
	8	臼玉	0.15 g	134			
	9	臼玉	0.1 g	134			
	10	臼玉	0.15 g	134			
	11	臼玉	0.35 g	134			
	12	臼玉	0.25 g	134			
	13	臼玉	0.2 g	134			
	14	臼玉	0.23 g	134			
	15	臼玉	0.15 g	134			
	16	臼玉	0.15 g	138			

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
	第20図17	臼玉	0.2 g	134			
	18	臼玉	0.2 g	134			
	003 ～ 19	臼玉	0.15g	57			
	003 ～	円板	4.4 g	7			
	003 ～	臼玉(未)	0.75 g	5			
	003 ～	臼玉(未)	0.2 g	116			
	003 ～	臼玉(未)	0.6 g	122			
	003 ～	臼玉(未)	0.95 g	130			
	003 ～ 21	臼玉(未)	0.55 g	37			
	003 ～ 22	臼玉(未)	0.45 g	62			

004号住居址（古墳時代）

平面形 方形	第26図1	甕形土器		940 301 951 2422 1286 2421 3999 2425 4161 C-01 39	○	○	口縁部
規模 705cm×707cm	2	甕形土器	底径 5.6cm 器高14.2cm	C-11 C-11 962 966 308 339 3986 2109 411 4381 941 3982 347 2417 C-01 C-01 C-01 C-01 373 341 338 337 4112 2409 975 298 310	○	○	完成品
面積 49.84m²	3	甕形土器		2863 849 2521 836 2523 851 847	○	○	口縁部
主軸方位 N－31°－W	4	コシキ形土器		C-10 C-10 C-11 239 200 76 821 2552	○	○	口縁部
炉，カマド，柱穴等 炉址115cm×125cm 主柱穴アリ	5	甕形土器	底径 68 cm	994		○	底部
貯蔵穴 2 （工房址）	6	甕形土器		3471			底部
	7	甕形土器	底径 67 cm	828			底部
	8	甕形土器		C-12 C-11 C-11 62 401 52	○	○	底部
	9	高坏形土器	底径 9.2cm	862		○	脚部
	10	高坏形土器		C-01 114		○	脚部
	11	高坏形土器		C-01 308		○	脚部
	12	坏形土器(椀)	口径12.2cm 器高 6.1cm	863	○	○	完形

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
	第26図13	坏形土器	口径14.0cm 器高 6.5cm	4383	○	○	完形
	14	坏形土器	口径13.3cm 器高 6.7cm	982	○	○	完成
	15	坏形土器	口径15.0cm 器高 5.5cm	4274	○	○	完形
	16	坏形土器		C-11 C-11 50 73	○	○	口縁部
	17	坏形土器		4460	○	○	口縁部
	18	坏形土器		C-01 C-01 312 311	○	○	口縁部
	19	坏形土器		3397	○	○	口縁部
	20	坏形土器		936 660 C-11 72	○	○	口縁部
	21	坏形土器		C-11 C-10 C-11 C-11 144 57 126 151			須恵器
	22	土玉	孔径 8.0mm H29.0 S38.0	C-11 403			底部
	23	土玉	破片	214		○	酸化焼成の赤
	24	土玉	破片	C-11 57		○	
	25	土製品	径 3.2cm	C-01 290			面子
	26	フイゴ羽口	破片	C-11 404			
	004～	甕形土器		C-01 117			須恵器
	004～10	鎌		C-01 354			鉄 ハガネ
	004～11	鋸		2387 2800			鉄 ハガネ
	遺物番号			図版番号			
	004～8	臼玉未完	0.1 g	第30図 130	緑泥片岩		
	004～23	臼玉未完	1.05 g	第27図 53	緑泥片岩		
	004～47	剣形	1.1 g	第27図 7	緑泥片岩		
	004～88	臼玉完	0.05 g	第29図 17	緑泥片岩		
	004～90	臼玉未完	0.22 g	第32図 12	緑泥片岩		
	004～101	臼玉未完	0.05 g	第30図 176			
	004～161	石鏃	1.25 g	第32図 13	黒耀石		
	004～176	臼玉未完	1.55 g	第27図 46	緑泥片岩		
	004～178	臼玉未完	0.02 g	第30図 194	緑泥石 白雲母片岩		
	004～180	臼玉未完	1.65 g	第27図 49	緑泥片岩		
	004～184	臼玉未完	0.15 g	第29図 76	緑泥片岩		
	004～187	臼玉未完	0.08 g	第29図 42	緑泥片岩		

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～199	臼玉未	0.35 g	第29図 60	緑泥片岩
	004～239	臼玉未	0.36 g	第32図 4	緑泥片岩
	004～241	勾玉	0.85 g	第27図 11	緑泥石 白雲母片岩
	004～247	臼玉未完	0.01 g	第30図 123	緑泥石 石英片岩
	004～261	臼玉未完	1.35 g	第27図 52	緑泥片岩
	004～286	臼玉未完	0.09 g	第30図 177	緑泥石 石英片岩
	004～373	臼玉未完	4.45 g	第27図 38	緑泥片岩
	004～381	臼玉未完	0.25 g	第32図 6	緑泥片岩
	004～442	臼玉未完	0.04 g	第30図 173	緑泥片岩
	004～454	臼玉未完	0.15 g	第30図 107	緑泥石 石英片岩
	004～494	勾玉	0.9. g	第27図 11	緑泥片岩
	004～504	勾玉未完	0.5 g	第27図 16	緑泥片岩 （含緑閃石？）
	004～567	剣形	19.20 g	第27図 1	緑泥片岩
	004～568	剣形	6.45 g	第27図 3	緑泥片岩
	004～569	勾玉未完	3.8 g	第27図 10	緑泥石 白雲母石英片岩
	004～574	剣形未完	2.15 g	第27図 6	緑泥片岩
	004～585	臼玉未完	0.2 g	第29図 32	緑泥片岩
	004～594	臼玉未完	0.25 g	第29図 30	緑泥片岩
	004～675	臼玉未完	0.1 g	第31図 209	緑泥石 石英片岩
	004～714	臼玉未完	0.15 g	第29図 56	緑泥片岩
	004～744	勾玉	1.35 g	第27図 12	緑泥片岩 白雲母石英片岩
	004～758	臼玉未	0.05 g	第30図 114	緑泥片岩
	004～805	臼玉未完	0.03 g	第31図 211	緑泥石 石英片岩
	004～815	双孔円板	3.7 g	第27図 28	石英片岩 白雲母石墨片岩
	004～884	臼玉未完	0.15 g	第29図 26	緑泥片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～892	臼玉未完	0.15 g	第29図 43	緑泥片岩
	004～917	臼玉未完	0.15 g	第29図 65	緑泥片岩
	004～923	臼玉未完	0.2 g	第29図 50	緑泥片岩
	004～1020	臼玉未完	0.25 g	第29図 24	緑泥片岩
	1037	臼玉未完	0.05 g	第31図 215	緑泥石 白雲母石英片岩
	1044	臼玉未	0.05 g	第31図 212	緑泥片岩
	1052	臼玉未完	0.1 g	第29図 2	緑泥片岩
	1064	臼玉未完	0.1 g	第29図 98	緑泥石 石英片岩
	1071	臼玉未完	0.1 g	第30図 126	緑泥片岩
	1080	臼玉未完	0.1 g	第30図 178	緑泥片岩
	1100	臼玉未完	0.05 g	第30図 111	緑泥片岩
	1141	臼玉未完	0.1 g	第30図 129	緑泥石 白雲母石英片岩
	1143	臼玉未完	0.15 g	第30図 140	緑泥石 白雲母石英片岩
	1188	臼玉未完	1.4 g	第27図 45	緑泥片岩
	1197	臼玉未完	0.35 g	第29図 25	緑泥石 白雲母石英片岩
	1200	臼玉未完	0.2 g	第29図 74	緑泥石 白雲母石英片岩
	1222	臼玉未完	0.9 g	第29図 67	緑泥岩 白雲母石英片岩
	1301	剣形	4.5 g	第27図 4	緑泥片岩
	1302	剣形	6.45 g	第27図 2	緑泥片岩
	1303	双孔円板	1.99 g	第27図 32	緑泥石 白雲母石英片岩
	1304	勾玉未完	0.55 g	第27図 17	白雲母石英片岩
	1305	勾玉未完	0.9 g	第27図 13	緑泥石 白雲母石英片岩
	1306	臼玉	0.14 g	第29図 3	緑泥片岩
	1307	臼玉	0.02 g	第29図 11	白雲母石英片岩
	1308	臼玉	0.05 g	第29図 10	白雲母石英片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～1309	白玉	0.03g	第29図 16	白雲母石英片岩
	1310	白玉	0.04g	第30図 12	白雲母石英片岩
	1368	双孔円板	0.94g	第27図 35	緑泥片岩
	1379	剣形	6.24g	第27図 5	白雲母緑泥石 石英片岩
	1404	白玉未完	0.16g	第31図 218	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.1 g	第31図 198	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.1 g	第31図 196	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.19g	第31図 197	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.14g	第31図 200	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.09g	第31図 199	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.09g	第31図 201	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.05g	第31図 202	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.05g	第31図 207	緑泥石 白雲母石英片岩
	1404	白玉未完	0.05g	第31図 204	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.04g	第31図 205	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.09g	第31図 203	緑泥片岩
	1404	白玉未完	0.04g	第31図 206	緑泥石 白雲母石英片岩
	1404	白玉未完	0.02g	第31図 208	緑泥片岩
	1419	白玉未完	0.21g	第29図 40	緑泥片岩
	1427	白玉未完	0.06g	第30図 180	緑泥片岩
	1440	白玉未完	0.1 g	第30図 169	緑泥石 白雲母石英片岩
	1487	白玉未完	0.11g	第29図 57	緑泥片岩
	1512	白玉未完	0.1 g	第30図 115	緑泥片岩
	1537	白玉未完	0.2 g	第29図 39	緑泥石 白雲母石英片岩
	1540	円板未	2.95g	第27図 39	緑泥片岩 含パンペリー石
	1545	白玉未完	0.16g	第29図 68	
	1587	白玉未完	0.09g	第29図 93	緑泥片岩
	1588	白玉未完	0.1 g	第30図 121	緑泥片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～1600	臼玉未完	0.2 g	第29図 36	緑泥片岩
	1617	臼玉未完	0.22 g	第32図 9	緑泥片岩
	1622	臼玉未完	0.14 g	第30図 167	緑泥片岩
	1651	臼玉	0.05 g	第29図 8	緑泥片岩
	1661	臼玉未完	0.1 g	第30図 117	緑泥片岩
	1683	臼玉未完	0.1 g	第30図 174	緑泥片岩
	1752	円板未	5.34 g	第27図 37	白雲母石英片岩
	1754	勾玉未	0.8 g	第27図 26	緑泥片岩
	1784	臼玉未完	0.22 g	第32図 11	緑泥石
	1796	臼玉未完	0.24 g	第29図 59	緑泥石 石英片岩
	1801	臼玉	0.02 g	第29図 21	緑泥石 白雲母石英片岩
	1804	臼玉未完	1.58 g	第27図 25	緑泥石 白雲母石英片岩
	1820	臼玉未完	0.22 g	第29図 54	緑泥片岩
	1828	臼玉未完	0.13 g	第30図 119	緑泥石 白雲母石英片岩
	1853	臼玉未完	0.1 g	第30図 163	緑泥片岩
	1890	臼玉未完	0.14 g	第29図 85	緑泥片岩
	1901	臼玉未完	0.12 g	第29図 70	緑泥片岩
	1902	臼玉未	0.08 g	第29図 66	緑泥片岩
	1906	臼玉未完	0.15 g	第30図 159	緑泥片岩
	1935	臼玉未完	0.07 g	第30図 139	緑泥片岩
	1937	臼玉未完	0.13 g	第30図 152	緑泥片岩
	1940	臼玉未完	1.4 g	第27図 51	緑泥片岩
	1969	臼玉未完	0.14 g	第29図 83	緑泥石 白雲母石英片岩
	1972	臼玉未完	0.7 g	第27図 57	緑泥片岩
	2013	臼玉未完	0.26 g	第32図 5	緑泥石 白雲母石英片岩
	2015	臼玉未完	0.05 g	第29図 94	緑泥石 白雲母石英片岩
	2019	臼玉未完	0.05 g	第30図 184	緑泥石 白雲母石英片岩

遺構構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～2025	白玉未完	0.1 g	第30図 182	緑泥石 白雲母石英片岩
	2042	白玉未完	0.18 g	第29図 47	緑泥石 白雲母石英片岩
	2044	白玉未定	0.15 g	第29図 51	緑泥石 白雲母石英片岩
	2062	白玉未完	0.1 g	第30図 120	緑泥片岩
	2063	白玉未完	0.69 g	第32図 3	緑泥石 白雲母石英片岩
	2064	白玉未完	0.23 g	第29図 28	緑泥片岩
	2065	白玉未完	0.12 g	第29図 87	緑泥片岩
	2078	白玉未完	0.05 g	第30図 186	緑泥石 白雲母石英片岩
	2081	白玉未完	0.09 g	第30図 122	緑泥石 石英片岩
	2088	白玉未完	0.09 g	第30図 131	緑泥片岩
	2089	白玉未完	0.09 g	第30図 191	緑泥片岩
	2143	白玉未完	0.14 g	第30図 134	緑泥片岩
	2159	勾玉完	0.96 g	第27図 14	緑泥石 白雲母片岩
	2164	白玉未完	0.16 g	第29図 38	緑泥片岩
	2167	白玉未完	0.08 g	第29図 96	緑泥片岩
	2168	白玉未完	0.15 g	第29図 73	緑泥石 白雲母片岩
	2193	白玉未完	0.15 g	第29図 44	緑泥片岩
	2197	白玉未完	0.23 g	第29図 29	緑泥片岩
	2218	白玉未	0.2 g	第29図 37	緑泥片岩
	2223	白玉	0.05 g	第29図 20	緑泥石 白雲母片岩
	2224	白玉未完	0.19 g	第29図 23	緑泥片岩
	2238	白玉未完	0.1 g	第30図 142	緑泥石 石英片岩
	2380	白玉未完	0.1 g	第29図 46	緑泥石 石英片岩
	2385	白玉未完	0.05 g	第30図 179	緑泥石 石英片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～2386	臼玉	1.5 g	第29図 9	緑泥片岩
	2466	臼玉未完	0.02 g	第31図 217	緑泥石 白雲母片岩
	2495	臼玉未完	0.1 g	第29図 91	緑泥石 白雲母片岩
	2496	臼玉	0.04 g	第29図 13	緑泥片岩
	2561	臼玉未完	0.15 g	第29図 135	緑泥片岩
	2561	臼玉未完	0.15 g	第30図 136	緑泥片岩
	2561	臼玉未完	0.12 g	第30図 137	緑泥石 白雲母石英片岩
	2561	臼玉未完	0.07 g	第30図 138	緑泥片岩
	2597	臼玉未完	0.22 g	第30図 100	緑泥石 白雲母石英片岩
	2597	臼玉未完	0.11 g	第30図 100	白雲母緑泥片岩
	2597	臼玉未完	0.05 g	第30図 102	緑泥片岩
	2598	臼玉未完	0.13 g	第30図 103	緑泥片岩
	2598	臼玉未完	0.15 g	第30図 104	緑泥片岩
	2614	円板	1.1 g	第27図 43	緑泥片岩
	2618	石鏃	0.8 g	第32図 16	安山岩
	2623	臼玉未完	0.2 g	第30図 157	緑泥片岩
	2623	臼玉未完	0.09 g	第30図 158	緑泥片岩
	2630	臼玉未完	0.05 g	第30図 118	緑泥片岩
	2632	臼玉未完	0.11 g	第29図 78	緑泥片岩
	2661	臼玉未完	0.15 g	第29図 71	緑泥石 石英片岩
	2679	臼玉未完	0.05 g	第30図 153	緑泥片岩
	2679	臼玉未完	0.04 g	第30図 154	緑泥片岩
	2682	臼玉未完	0.15 g	第31図 220	緑泥片岩
	2686	臼玉未	0.15 g	第29図 33	緑泥片岩
	2705	臼玉未完	0.1 g	第29図 97	緑泥石 白雲母石英片岩
	2758	臼玉未完	0.74 g	第27図 56	緑泥石 白雲母石英片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～2781	白玉未完	0.11 g	第30図 156	緑泥石 白雲母石英片岩
	2781	白玉未完	0.12 g	第30図 155	緑泥片岩
	2785	白玉未完	0.03 g	第30図 160	緑泥片岩
	2787	白玉未完	0.08 g	第30図 4	緑泥片岩
	2788	白玉未完	0.1 g	第31図 219	緑泥片岩
	2790	白玉未完	0.24 g	第29図 31	白雲母緑泥片岩
	2799	白玉	0.1 g	第29図 5	緑泥片岩
	2802	白玉未完	0.22 g	第32図 7	緑泥片岩
	2803	白玉未完	0.11 g	第30図 124	緑泥片岩
	2805	白玉未完	0.16	第29図 58	緑泥片岩
	2830	白玉未完	0.16 g	第29図 72	緑泥石 石英片岩
	2831	白玉未完	0.21 g	第31図 223	緑泥片岩
	2831	白玉未完	0.15 g	第30図 150	緑泥石 白雲母石英片岩
	2831	白玉未完	0.1 g	第30図 149	緑泥石 白雲母石英片岩
	2840	白玉未完	0.06 g	第30図 175	緑泥石 白雲母石英片岩
	2849	白玉未完	0.15 g	第30図 110	緑泥片岩
	2876	白玉未完	0.1 g	第30図 190	緑泥片岩
	2877	白玉未完	0.09 g	第29図 88	緑泥片岩
	2895	白玉未完	0.05 g	第30図 127	緑泥片岩
	2920	白玉未完	0.14 g	第30図 106	緑泥片岩
	2920	白玉未完	0.11 g	第30図 105	緑泥片岩
	2926	白玉未完	0.11 g	第29図 69	緑泥片岩
	2928	白玉未完	0.06 g	第30図 181	緑泥片岩
	2930	白玉未完	0.1 g	第29図 90	緑泥片岩
	2936	白玉未完	0.05 g	第31図 221	緑泥片岩
	2937	勾玉	2.0 g	第27図 18	緑泥片岩
	2974	白玉未完	0.13 g	第29図 86	白雲母緑泥片岩
	2976	白玉未定	0.12 g	第30図 109	緑泥片岩
	2979	白玉未完	0.14 g	第30図 170	緑泥石 白雲母石英片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～3001	白玉未完	0.19g	第29図 25	緑泥片岩
	3091	白玉未完	0.06g	第29図 ›6	緑泥片岩
	3095	白玉未完	0.1 g	第29図 49	緑泥片岩
	3095	白玉未完	0.15g	第29図 48	緑泥片岩
	3103	白玉未完	1.0 g	第29図 89	白雲母緑泥片岩
	3126	白玉未完	0.1 g	第30図 112	緑泥片岩
	3129	原材	49.0 g 1.0 g	第28図 1	白雲母曹長石 石英片岩
	3137	白玉未完	0.07g	第30図 183	白雲母 緑泥片岩
	3138	白玉未完	0.25g	第29図 41	緑泥片岩
	3158	白玉未完	0.04g	第31図 213	緑泥片岩
	3194	白玉未完	0.16g	第29図 34	緑泥片岩
	3221	白玉未完	0.1 g	第30図 187	白雲母 緑泥片岩
	3262	白玉未完	0.05g	第30図 193	緑泥片岩
	3265	白玉未完	0.25g	第32図 10	
	3269	白玉未完	0.05g	第31図 216	緑泥片岩
	3302	剣形	5.9 g	第27図 20	緑泥片岩
	3302	白玉未完	0.15g	第29図 81	緑泥石 白雲母片岩
	3370	白玉未完	0.13g	第29図 75	白雲母緑泥石 石英片岩
	3374	白玉未完	0.12g	第29図 63	白雲母緑泥片岩
	3396	白玉未定	0.2 g	第29図 27	白雲母緑泥片岩
	3403	白玉未完	0.15g	第29図 52	緑泥石 白雲母石英片岩
	3408	白玉未完	0.1 g	第29図 1	緑泥石 白雲母石英片岩
	3428	白玉未完	0.1 g	第29図 999	緑泥石 白雲母石英片岩
	3497	白玉未完	0.05g	第29図 14	緑泥片岩
	3507	白玉未完	0.11g	第30図 172	緑泥片岩
	3510	白玉未完	0.09g	第30図 188	緑泥石 白雲母石英片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～3605	勾玉未完	1.35g	第27図 36	緑泥片岩
	3607	双孔円板	0.92g	第27図 36	白雲母片岩 あるいは 千枚岩
	3849	剣形未完	4.55g	第28図 2	白雲母緑泥石 石英片岩
	3881	臼玉未完	0.1 g	第30図 141	白雲母 緑泥片岩
	3882	臼玉未完	0.1 g	第31図 214	緑泥片岩
	3888	石鏃	0.44g	第32図 14	黒耀石
	3912	臼玉	0.05g	第29図 18	緑泥片岩
	3914	臼玉	0.09g	第29図 15	白雲母 石英片岩
	3922	臼玉未完	0.2 g	第29図 61	緑泥石 白雲母石英片岩
	3925	臼玉未完	0.16g	第29図 79	緑泥片岩
	3926	臼玉未完	0.06g	第30図 171	白雲母 緑泥片岩
	3927	剣形未完	5.0 g	第28図 4	白雲母緑泥石 石英片岩
	3929	臼玉未完	0.16g	第30図 132	緑泥片岩
	3939	臼玉未完	0.07g	第30図 125	緑泥片岩
	3941	臼玉未完	0.29g	第30図 126	緑泥片岩
	3944	臼玉未完	0.11g	第30図 162	緑泥片岩
	3956	臼玉	0.09g	第29図 7	白雲母 緑泥片岩
	3957	臼玉未完	0.09g	第30図 162	白雲母緑泥石 石英片岩
	3958	円板未完	1.54g	第32図 1	緑泥片岩
	4003	臼玉未完	0.19g	第32図 8	緑泥石 白雲母石英片岩
	4024	臼玉未完	0.12g	第29図 82	緑泥石 白雲母石英片岩
	4025	臼玉未完	0.06g	第30図 161	白雲母石英片岩
	4030	臼玉未完	0.1 g	第30図 144	白雲母石英片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～4040	白玉未完	0.14 g	第29図 84	緑泥片岩
	4055	白玉未完	0.14 g	第30図 108	白雲母石英片岩
	4070	白玉未完	0.13 g	第30図 143	緑泥石 白雲母石英片岩
	4088	白玉未完	0.09 g	第29図 92	緑泥石 白雲母石英片岩
	4118	白玉未完	0.15 g	第29図 55	緑泥片岩
	4127	白玉未完	0.2 g	第29図 64	白雲母緑泥片岩
	4208	白玉未完	0.09 g	第30図 151	緑泥石 白雲母石英片岩
	4209	白玉未完	0.2 g	第29図 62	白雲母 緑泥石石英片岩
	4248	白玉未完	0.09 g	第30図 192	緑泥片岩
	4252	白玉未完	0.04 g	第29図 19	白雲母 緑泥石石英片岩
	4253	白玉未完	0.11 g	第29図 45	白雲母 緑泥石石英片岩
	4313	白玉未完	0.11 g	第29図 95	緑泥石 白雲母石英片岩
	4318	白玉未完	0.13 g	第30図 168	白雲母緑泥石 石英片岩
	4322	白玉未完	0.06 g	第30図 165	緑泥石 白雲母石英片岩
	4325	白玉未完	0.14 g	第30図 133	白雲母緑泥片岩
	4326	白玉未完	0.11 g	第30図 113	白雲母緑泥片岩
	4328	白玉未完	0.06 g	第30図 185	緑泥片岩
	4333	白玉未完	0.14 g	第29図 53	白雲母緑泥片岩
	4341	白玉未完	0.04 g	第30図 189	緑泥石 白雲母石英片岩
	4378	白玉未完	0.15 g	第30図 116	白雲母石英片岩
	4386	白玉未完	0.08 g	第31図 210	緑泥片岩
	4404	白玉未完	0.76 g	第27図 54	白雲母石英片岩
	4409	白玉未完	0.1 g	第29図 80	緑泥片岩
	4411	白玉未完	0.15 g	第30図 116	緑泥片岩
	4439	白玉未完	0.2 g	第29図 77	白雲母緑泥片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～4459	白玉未	2.54 g	第28図 6	緑泥石 白雲母石英片岩
	4462	白玉未完	0.35 g	第30図 147	緑泥片岩
	4462	白玉未完	0.16 g	第30図 146	緑泥片岩
	4462	白玉未完	0.1 g	第30図 145	緑泥片岩
	4462	白玉未完	0.11 g	第31図 222	緑泥片岩
	4462	白玉未完	0.04 g	第30図 148	緑泥石 白雲母石英片岩
C－01	C-01 4	双孔円板	1.5 g	第27図 30	白雲母石墨片岩
	10	白玉未完	0.2 g	第31図 230	
	18	白玉未	0.8 g	第27図 48	緑泥片岩
	28	白玉未完	0.1 g	第31図 231	
	109	白玉未完	0.05 g	第31図 233	
	167	勾玉未	1.15 g	第27図 50	白雲母石英片岩
	169	白玉未完	0.1 g	第31図 232	
	181	白玉未完	0.95 g	第27図 55	緑泥片岩
	191	双孔円板	1.65 g	第27図 31	緑泥片岩(表) 白雲母石墨片岩(裏)
	247	勾玉未	1.05 g	第27図 42	緑泥石 石英片岩
	269	大割片	11.2 g	第28図 7	緑泥片岩
	273	大割片	4.85 g	第28図 8	緑泥片岩
	276	白玉	0.05 g	第31図 229	緑泥片岩 石墨片岩
	277	白玉	0.15 g	第31図 226	緑泥片岩
	278	白玉	0.1 g	第31図 227	緑泥片岩
	279	白玉	0.12 g	第31図 228	緑泥片岩
	380	円板未	0.08 g	第27図 47	緑泥片岩
C－10	C-10 73	双孔円板	3.55 g	第27図 27	緑泥片岩
	77	白玉未	0.18 g	第31図 237	緑泥片岩
	88	白玉未完	0.1 g	第31図 243	緑泥石 石英片岩
	115	白玉未完	0.1 g	第31図 244	緑泥片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	C-10 138	臼玉未完	0.1 g	第31図 250	
	155	双孔円板	1.8 g	第27図 34	緑泥石 緑閃石片岩
	156	臼玉未完	0.1 g	第31図 245	
	168	勾玉未	3.55 g	第27図 24	緑泥片岩
	170	臼玉未完	0.1 g	第31図 240	緑泥片岩
	210	臼玉未完	0.2 g	第31図 236	緑泥片岩
	221	臼玉未	0.15 g	第31図 238	緑泥片岩
	256	臼玉未完	0.2 g	第31図 234	緑泥片岩
	266	臼玉未完	0.1 g	第31図 246	緑泥片岩
	267	臼玉未完	0.15 g	第31図 239	緑泥片岩
	270	臼玉未完	0.1 g	第31図 248	緑泥石 石英片岩
	282	臼玉未完	0.1 g	第31図 242	緑泥石 石英片岩
	284	臼玉未	0.2 g	第31図 235	緑泥石 石英片岩
	364	臼玉未完	0.15 g	第31図 241	緑泥片岩
	391	臼玉未完	0.05 g	第31図 249	緑泥片岩
	399	臼玉未完	0.2 g	第31図 251	緑泥片岩
	400	臼玉未完	0.05 g	第31図 247	緑泥片岩
	409	自然石	12.8 g	第28図 9	砂岩
C－11	C-11 4	臼玉未完	0.1 g	第31図 271	緑泥片岩
	12	臼玉未完	0.1 g	第31図 264	緑泥片岩
	14	臼玉未完	0.15 g	第31図 262	緑泥片岩
	15	臼玉未完	0.18 g	第31図 260	緑泥石 石英片岩
	18	臼玉未完	0.05 g	第31図 272	緑泥片岩
	20	臼玉未完	0.05 g	第31図 269	緑泥片岩
	23	臼玉	0.05 g	第31図 253	緑泥片岩
	33	臼玉	0.13 g	第31図 254	緑泥片岩
	174	双孔円板	3.15 g	第27図 29	白雲母緑泥片岩
	201	臼玉未完	0.05 g	第31図 270	緑泥片岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	C-11 229	臼玉未完	0.1 g	第31図 270	緑泥片岩
	269	臼玉	0.1 g	第31図 252	緑泥片岩
	302	臼玉未	8.6 g	第27図 19	緑泥石 石英片岩
	320	勾玉未	0.65 g	第32図 2	緑泥片岩
	461	臼玉未	0.9 g	第27図 33	緑泥片岩
	530	臼玉未完	0.15 g	第31図 261	白雲母緑泥石 石英片岩
	574	臼玉未完	0.15 g	第31図 256	緑泥片岩
	589	臼玉未完	0.1 g	第31図 267	緑泥石 石英片岩
	591	勾玉未	0.25 g	第27図 22	緑泥片岩
	633	勾玉未	1.45 g	第27図 41	緑泥石 石英片岩
	634	勾玉未	0.8 g	第27図	石英片岩
	636	臼玉未完	0.15 g	第31図 268	緑泥片岩
	646	割片	0.85 g	第31図 257	緑泥片岩
	748	臼玉未完	0.15 g	第31図 263	緑泥片岩
	760	臼玉未完	0.25 g	第31図 255	緑泥片岩
	802	臼玉未完	0.1 g	第31図 265	緑泥片岩
	817	割片	14.2 g	第28図 3	緑泥石 石英片岩
	877	臼玉未完	0.25 g	第31図 258	緑泥石 石英片岩
	880	円板未完	1.8 g	第27図 44	緑泥石 白雲母石英片岩
	885	臼玉未完	0.15 g	第31図 259	緑泥石 石英片岩
	897	臼玉未完	0.3 g	第31図 266	緑泥片岩
	903	勾玉未	2.25 g	第27図 40	緑泥石 石英片岩
	912	臼玉未完	0.1 g	第31図 274	緑泥石 石英片岩
	C-01 354	鎌身先	遺存長 3.6×16.5cm	第28図 10	鉄製

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	004～ 2387 2800	鋸身	遺存長 2.2×7.5cm	第28図 第28図 } 11	鉄製

005号住居址（古墳時代）

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
平面形 方形	第37図 1	甕形土器	口径18.4cm 器高28.0cm 底径 6.6cm	172	○	○	完形
規模 515cm×505cm	2	甕形土器	口径17.1cm 器高24.8cm 底径 8.5cm	152			完形
面積 26.00m₂	3	甕形土器	口径16.2cm 器高17.0cm 底径 7.6cm	173			完形
主軸方位 N－11°－E	4	甕形土器	口径13.0cm 器高14.9cm	172	○	○	完形
炉，カマド，柱穴等 カマドアリ 主柱穴アリ	5	甕形土器	C-22 B-11 対角線上4 北壁側	C-22 5 B-11 2 3776 C-11 178 C-02 6 C-02 7 C-02 12 24 172 129 114 73 87 83 82 81 78			口縁部
貯蔵穴アリ	6	甕形土器		172	○	○	底部
	7	高坏	口径14.0cm 器高 9.3cm 底径 8.5cm	141	○	○	完形
	8	高坏	口径12.8cm 現高 8.9cm	172	○	○	完成
	9	高坏形土器		142	○	○	口縁部
	10	高坏形土器		42 113	○	○	坏部
	11	坏形土器	口径15.0cm 器高 6.9cm	35	○	○	完形
	12	坏形土器	口径15.2cm 器高 5.0cm	31 17 40 30 27	○	○	完成
	13	坏形土器	口径12.8cm 器高 7.1cm	117 75 C-02 3 C-02 8 120 76 79 74 1221 55 80 87 111		○	完成

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
	第40図14	坏形土器		16 161 135	○	○	口縁部
	15	坏形土器		172	○	○	口縁部
	16	坏形土器		C-12 53	○	○	口縁部
	17	土玉	10.0mm H33.0 S37.5mm	34		○	酸化焼成の赤
	遺物番号			図版番号			
	005～2	臼玉未完	0.15g	第39図 5	緑泥片岩		
	005～4	臼玉未	0.65g	第39図 8	緑泥石 石英片岩		・
	005～12	臼玉未完	0.1 g	第39図 4	緑泥片岩		・
	005～14	臼玉未完	0.15g	第39図 3	緑泥石 石英片岩		・
	005～36	臼玉未	0. 5g	第39図7	緑泥石 石英片岩		・
	112	勾玉未完	5.57g	第38図 2	緑泥石 白雲母片岩		
	192	臼玉未完	0.2 g	第39図 6	緑泥石 石英片岩		・
	C-12 21	凹石	422.5 g	第38図 1	安山岩		
	167	石鏃	1.35g	第39図 9	黒耀石		

006号住居址（古墳時代）

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
平面形 方形	第39図1	高坏	口径16.6cm	171	○	○	坏部
規模 cm× cm	2	高坏	口径15.4cm 高径 4.4cm	174	○	○	坏部
面積 約½が削除	3	土玉	破片	C-12-79			
主軸方位 N－13°－W							
炉，カマド，柱穴等 主柱穴アリ							
貯蔵穴アリ							南西コーナ

007号住居址（古墳時代）

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
平面形 方形	第40図 1	甕形土器	口径26.7cm 器高31.2cm 底径10.4cm	227 207 275 1 B-53 0 142 272 261 71			完成
規模 ▲ ×（▲）	2	甕形土器	底径 8.0cm	B-53 0			胴下半部
面積 約½が削除	3	坏形土器	口径14.8cm 高さ5.25cm	282			完形
主軸方位 N－6°－W	4	坏形土器	口径12.7cm 高さ 6.9cm	B-53 0 002 67	○	○	完成
炉，カマド，柱穴等 主柱穴アリ 002ときり合い	5	坏形土器	口径10.8cm 器高 5.0cm	002 274 002 254	○	○	完成
	6	坏形土器	口径13.7cm 高さ 5.9cm	002 270 002 276 002 280	○	○	完成
	7	坏形土器		B-53 0	○	○	口縁部

008号住居址（古墳時代）

平面形 方形	第43図 1	甕形土器		63 86 87 89 129 131 144 146 152 153			口縁部
規模 630cm×（▲）	2	甕形土器		B-12-0			口縁部
面積 約¼が削除	3	コシキ形土器		56 57 58	○	○	口縁部
主軸方位 N－48°－W	4	甕形土器	底径 7.4cm	136			底部
炉，カマド，柱穴等 カマドアリ 主柱穴アリ	5	コシキ形土器		54 55 136	○	○	下半部
貯蔵穴アリ	6	甕形土器		138 139			底部
	7	高坏		B-12 0		○	脚部
	8	坏形土器		60 59 B-12 6			口縁部
	9	坏形土器		42			口縁部
	10	坏形土器		42	○	○	口縁部
	11	坏形土器	口径13.2cm 器高4.28cm	4 5 66 129 139	○	○	完成
	12	坏形土器		14	○	○	口縁部

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
	第43図13	坏形土器		B-12 0	○	○	口縁部
	14	坏	口径10.3cm 器高 5.8cm 底径 4.7cm	95 62 67 93 68 92 99	○	○	完成
	15	土玉	孔径 6. mm H26.5 S33.0	53			
	16	土玉	7.5mm H28.8 S32.5	38		○	酸化焼成の赤
	17	土玉	2.5mm H 9.5 S 9.0	10		黒	小玉
	18	紡錘車	高さ30mm 径 36mm	2		○	酸化焼成の赤 磨き
	遺物番号			図版番号			
	008～65	勾玉未完	4.5 g	第44図 4	粘板岩		
	140	磨石	129.0 g	第44図 1	石英斑岩		
	B-11 2	磨石	40.0 g	第44図 2	砂岩		
	B-12 0 (2)	磨石	49.0 g	第44図3 1	砂岩		

010号住居址（古墳時代）

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
平面形 方形	第47図1	甕形土器		3 5			口縁部
規模 858cm×885cm	2	甕形土器		61 63		○	口縁部
面積 75.93m²	3	甕形土器		374 67 352 395 85 338 375 62 542			口縁部
主軸方位 N－14°－E	4	甕形土器		551 477		○	口縁部
炉，カマド，柱穴等 炉址アリ 主柱穴アリ	5	甕形土器	北側 対角線上4 補助 2	25 B-31 7 B-32 2 002 71			口縁部
貯蔵穴AB	6	甕形土器		B-71 7 50 B-32 6			口縁部
	7	甕形土器	底径 6.5cm	B-30 19 81 548 340 365 57		○	底部
	8	甕形土器	底径 9.0cm	13 B-31 7 B-21 17			底部
	9	甕形土器		40 67		○	底部

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
	第47図10	甕形土器	底径 6.7cm	111 297		○	底部
	11	甕形土器	底径 7.4cm	111 2		○	底部
	12	坏形土器		B-31 27			窯印底部
	13	高坏形土器		29 B-32 6		○	脚部
	14	高坏形土器		53	○	○	脚部
	15	坏形土器	高径 6.5cm	95 97	○	○	完成
	16	坏形土器	口径15.0cm 高径 5.4cm	144 145 147 189 B-31 12	○	○	完成
	17	坏形土器	口径16.4cm 高径 5.8cm	315 297	○	○	完成
	18	坏形土器	口径11.2cm 高径 5.3cm	527 48			完形 須恵器
	19	坏形土器		48 49 008 32 008 27 B-22 0 B-52 17 261			底部 須恵器
	20	坏形土器	口径14.4cm 高径 5.6cm	194	○	○	完成
	21	坏形土器		276 511 279 512			身破片 須恵器
	22	甕形土器		53			口縁部
	23	坏形土器		10		○	口縁部
	24	甕形土器		B-31-17		○	口縁部
	25	坏形土器		10 50 B-32-6	○	○	口縁部
	26	坏形土器		B-31-8	○	○	口縁部
	27	坏形土器		B-32-6	○	○	口縁部
	28	土玉	孔径 6.0mm H26.5S33.0	298		○	酸化焼成の赤
	29	土玉	孔径 7.5mm H36.0S36.0	B-31-20		○	
	30	土玉	8.0mm H32.0S34.5	298		○	
	31	土玉	破片	B-31-18			
	32	土玉	孔径 2.5mm	50		○	
	33	土玉	H13.5S12.5	47		黒	スス付着
	遺物番号			図版番号			
	569	砥石		第48図 1			
	109			第48図 2			

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	010～317			第48図 3	6個接合
	B-30 16			第39図 4	

グリッド

遺構概要	図版番号	種類名称	法量	接合遺物番号	赤彩部位 内面	赤彩部位 外面	備考
	第49図 1	甕形土器		C-41 11 13 4 (1 15 1括)		○	口縁部
	2	甕形土器		C-31 128 C-31 94 C-31 138			上部
	3	瓶		表採			下部
	4	高坏		D-02 1括		○ 剝離	脚部
	5	高坏		B-32-6	○	○	脚部
	6	坏形土器	口径14.4cm 器高 6.2cm	C-31 200 C-31 197 C-31 198	○	○	完成
	7	坏形土器		一括表採	○	○	口縁部
	8	坏形土器		一括表採	○	○	口縁部
	9	手摺(壺)		一括表採	○	○	
	10	手摺(壺)	底径 3.0cm	C-42-35			底部
	11	土玉	孔径 6.5mm H35.0S42.5	C-31-196		○	酸化焼成の赤
	12	土玉	～7.5mm H20.0S29.5	C-42-25		○	
	13	土玉	～7.5mm H25.0S25.5	C-52-7			
	14	土玉	～5.5mm H21.0S24.5	A-62-0		○	
	15	土玉	～5.0mm H20.5S22.0	C-62-8		○	
	16	土玉	～8.0mm H20.0S24.0	C-62-8		○	
	17	土玉	破片	C-41-15		○	
	18	土玉	破片	C-42-1		○	
	遺物番号			図版番号			
C-20グリット	C-20 7	臼玉未完	0.06g	第55図 19		緑泥片岩	
	8	臼玉未完	0.12g	第55図 20		緑泥片岩	
	20	磨石	239.3g	第54図 1		砂岩	
	39	臼玉未完	0.1g	第55図 18		緑泥片岩	

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
C-20グリット	C-20 46	臼玉未完	0.18 g	第55図 16	緑泥石 石英片岩
	53	臼玉未完	0.1 g	第55図 24	緑泥石 石英片岩
	74	臼玉未	0.13 g	第55図 26	緑泥石 石英片岩
	111	勾玉未完	1.25 g	第54図 7	緑泥石 石墨片岩碧玉
	117	臼玉未完	0.1 g	第55図 23	緑泥片岩
	153	臼玉未完	0.1 g	第55図 17	緑泥片岩
	154	打割片	28.35 g	第54図 6	緑泥片岩 含パンペリー石
	167	勾玉未完	4.95 g	第54図 8	緑泥片岩
C-21グリット	C-21 1	臼玉未完	0.15 g	第55図 21	緑泥片岩
	40	臼玉未完	0.95 g	第55図 27	含パンペリー石 緑泥片岩
	52	剝離痕のアル石	1.55 g	第55図 28	砂質粘板岩
C-22グリット	C-22 2	磨石	44.5 g	第54図 2	砂岩 (アルコース砂岩)
C-31グリット	C-31 68	臼玉未	1.3 g	第54図 11	緑泥片岩
	91	臼玉未完	0.05 g	第55図 14	粘板岩
	92	臼玉未完	0.05 g	第55図 12	粘板岩
	132	臼玉未完	0.03 g	第55図 25	緑泥石 石英片岩
	146	臼玉未完	0.1 g	第55図 15	緑泥片岩
	162	臼玉未完	0.1 g	第55図 222	緑泥片岩
C-72グリット	C-72 2	双孔円板未完	4.25 g	第54図 9	緑泥片岩
	5	磨石	57.36 g	第54図 3	砂岩 アルコース砂岩
C-62グリット	C-62 10	剣形未	2.5 g	第54図 10	含アルカリ角閃石 緑泥片岩
C-42グリット	C-42 24	割片	3.9 g	第54図 5	安山岩

遺構概要	遺物番号	種類名称	法量	図版番号	備考
	C-41 18	有舌ポイント	3.45 g	第54図 4	銚子産 安山岩
	C-32 50	臼玉未完	0.1 g	第55図 13	緑泥片岩
	60	臼玉未	1.15 g	第55図 30	緑泥石 石英片岩
	104	割片	2.6 g	第55図 29	緑泥石 白雲母片岩

第1号塚関連出土遺物

	13	磨石	15.71 g	第6図 1	安山岩
	13	銭貨	2.4 g	第7図 4	寛永通寶
	32	剥片	14.27 g	第6図 2	細粒砂岩
	33	銭貨	3.0 g	第7図 2	寛永通寶
	34	銭貨	2.75 g	第7図 1	寛永通寶
	36	銭貨	1.98 g	第7図 3	寛永通寶
	E-20-1	銭貨	2.55 g	第7図 5	太平通寶

※赤彩上器……X線蛍光分析結果より類推(肉顔鑑定)による。顔料成分は酸化鉄である。
※臼玉勾玉剣形品等……緑泥片岩系の石産地は埼玉県比企丘陵産。有舌ポイントは千葉県銚子産。
※緑色片岩……緑泥石、緑泥片岩としてある。

各住居址及びグリット石製遺物等岩石一覧

住居址、グリット

番号、記号	名称種類	点数	備考
001	自然石	5	安山岩、軟玉、流紋岩質白、チャート
	緑色片岩系	2	臼玉片
	黒耀石	1	剝片、加工痕のナイ石
	砥石	1	流紋岩質凝灰岩
	樹脂	1	松の木の根
	計	10	
002	自然石	6	石英脈
	緑色片岩系	1	臼玉片
	砥石	2	流紋岩質石英安山岩質凝灰岩
	計	9	
003	自然石	10	石英斑岩、砂岩、花崗岩
	緑色片岩系	66	臼玉片、円板、割片
	チャート	1	石鏃
	計	77	
004	自然石	15	チャート、鉄石英、粒状大のもの
	緑色片岩系	7,654	臼玉片、勾玉、剣形、円板、鉱滓(緑泥石含)、破片、割片
	黒耀石	3	石鏃
	砥石	4	砂岩
	軽石	2	石英安山岩質
	安山岩	2	割片　石鏃（チャート）
	焼結物	6	鉱滓（緑泥石含）
	加工具	1	輝石、石英安山岩質軽石
	鉄屑	3	
	計	7,690	

番号、記号	名称種類	点数	備考
C－20	自然石	5	石英片岩、チャート
	緑色片岩系	122	
	計	127	
C－21	自然石	3	チャート、石英安山岩
	緑色片岩系	72	臼玉片
	黒耀石	1	剝片
	計	76	
C－22	自然石	1	珪質粘板岩
	緑色片岩系	4	片
	黒耀石	1	剝片
	砥石	1	砂岩（アルコース砂岩）
	計	7	
C－31	自然石	6	チャートか石英脈、砂岩
	緑色片岩系	80	臼玉片
	安山岩	1	剝片
	計	87	
C－32	緑色片岩系	15	臼玉片、割片
	黒耀石	1	剝片（チップ）
	計	16	
C－41	緑色片岩系	7	臼玉片、片
	安山岩	1	鏃（有舌ポイント）
	計	8	

番号、記号	名称種類	点数	備考
C－42	自然石	2	チャート、砂岩
	緑色片岩系	2	片
	安山岩	1	割片
	計	5	
C－62	緑色片岩系	1	剣形
	計	1	
C－72	自然石	1	砂岩（アルコース砂岩）
	緑色片岩系	1	円板
	計	2	
B－1	緑色片岩系	1	円板
	計	1	
D－1	緑色片岩系	1	割片
	計	1	
塚	自然石	11	チャート、砂岩、流紋岩質凝灰岩、泥岩
	焼結物	1	鉱滓
	砥石	2	安山岩、石英安山岩質軽石
	セメント	1	コンクリート
	細粒砂岩	1	剝片
	人工石	1	鉱滓
	瓦片	1	石川伊八　押印（製作者）
	銭貨	4	寛永通寶
	計	22	
E－20	銭貨	1	太平通寶
	計	1	

グリット分総合計　354

第三章　小　　結

第一節　出土遺物について

本(海老)遺跡内,ローム層中から検出された遺物は，土製品・石製品・金属製品・自然遺物・動物遺存体等である。

土製品には，日常生活具のカメ坏等用器の他，漁労具であり，一次調査では，土の焼結物土玉の副葬品がある。縄文時代土器，弥生時代の土器，古墳時代の土師式土器が発掘された。阪南・陶邑に比定の須恵器坏，紡績具の出土もある。

石製品には，先土器時代の台形の石核にあたるもの･細タテ長の剝片，縄文時代の石鏃･磨石凹石の他，古墳時代の砥石，特に工房址（第4号址）内からは，石製模造品・勾玉・臼玉の玉類とが検出されている。分類された石材質は，先土器時代が硅質岩・縄文時代は安山岩・黒耀石砂岩が活用されており，古墳時代中期には，流文岩質凝灰炭の砥石他，製玉材として，埼玉県長瀞玉淀を形成する母岩の一つである，緑色片岩系が用いられている，科学博物館，加藤昭室長の鉱物鑑定によれば，県立長瀞玉淀自然公園内朝日根産のパンペリ岩を含み，北吉見丘陵の結晶片岩であったことからも，本遺跡は，古墳時代6世紀頃の「石」を通じた文化交易をしのぶことができる。

金属製品は,刀子･鎌鋸身の工具と生産具とであるが，鉱石を鍛錬した鉄製品の他，中国伝来銅銭一枚・江戸時代邦銭・寛永銭4枚とである。銭貨は塚に伴なうものであるが，鎌鋸・刀子等金属器は工房址から出土したものである。

動物遺存体は，貝の他，哺乳類食肉目犬の骨体で，ともに食用に供されている。犬は出土状況，風化度から昭和の遺産であると判断される，

土製品は，カメ形，壺形，高杯コシキ形の土器の他，土器片錘，土錘（土玉）紡績具と思われる破片である。出土土器について各々の章で前述されているが，成形手法について補足すると

①カメの下部から順次粘土紐を巻き上げて成形し表面に粘土の継目を残こすもの，

②弥生式土器の底部の圧痕・土師器の高坏底部には木葉を整形時の補足として利用したもの

③技法として切離した際に器の底部に箆を差込んで切離したもの，底部に渦状の箆切り痕跡をとどめるもの，

④器面に赤色顔料を塗彩するもの。指圧による器内外面に撫で，箆削り，箆磨き，刷毛目（くしめ）などの手法を用いて器面調整されている。平滑つやのあるもの，更に整

形された器に顔料を塗付し赤彩を呈するもの

⑤粘土塊をそのまま成形した手捏ねの土器等に分けられる。

本遺跡出土の甕形土器等の成形技法　本跡出土甕形土器等の継目について。完成品については，推定するのみであるが，断面を，窺い得なかった破片を用いて，高炉で再焼成したところ，継目が暗褐色となり，積み上げ手法を証明する変化が観られた。この方法は継目の酸化焼成の微変化による判別の例として示唆したい。

赤彩土器片を用いて，螢光X線分析の結果胎土を構成する原素の外，表面のみを照射したものについては，鉄Fe_2O_3の存在が分析チャートから示され顔料としてのFeの性質を活用している。本址では，古墳時代，土師器を伴う遺跡の坏形土器のほとんどが赤彩されており，日常茶飯器具においても赤色文化であったことも窺える。

自然遺物　本調査出土の自然遺物には，動物遺存体，哺乳類，食肉目「犬」と軟体動物門「貝」類の二種である。

貝殻は，第2号址の発掘調査中，南側コーナーにかかる南北セクション堤に沿って，集堆していたもので，住居址覆土中（ハード・ローム混入土）の土に混り，一地点に塊となって発見された。

2㎜・3㎜目のフルイ通しをした結果，総数923点を数え，堆積ブロック全てが海産のマキ貝で，中にただ一枚のみが斧足綱（ハマグリ）が混入していたが魚骨等は見られなかった。

前者のマキ貝は，高さの低い小形の円錐形の小螺で，長径18㎜，高さ12㎜を計る程度のものが多く，殻の内面は真珠光沢が残っており，右巻きで藍黒色点が殻表に遺存している。小突起が見うけられるので「イボキサゴ」である。又俗に千葉では「ナガラミ」とも呼ばれている。

混入の「ハマグリ」は，長径21㎜，高さ6㎜の小さな卵形に近い，二枚貝の片側で，白色の地に栗褐色が薄く残こる。両者とも土中で風化してもろい。

学名　(1)軟体動物門，腹足綱，にしきうずがい科,「イボキサゴ」　(2)軟体動物門，斧足綱，まるすだれがい科「ハマグリ」

発掘された動物の遺存体は，食肉目「犬」である。D—72グリット第二層，攪乱層芥中で発見された骨で,水洗い時荒いセンイが付着していたので，布袋に入れられ捨てたものと解された。

頭蓋骨　下顎は2片に破れており，腰骨，肩甲骨，肢骨6を検出した。

頭蓋骨は完形で，歯牙５本前切歯が欠損し歯頭は消耗しているところから老犬ではないかと思われる。

肢骨及び下顎の筋肉の付着面に切り離し痕の切創が残こされるので，食用に供されたものである。（切創○印）ＰＬ45参照。

須恵器　第10号址出土遺物中に，３点ではあるが青灰色を呈する坏形土器完形の他同質の部分片２等が検出された。

完形品は，内傾する口縁端部と受部の端部を円形に整形し，やや平らな底部外面はヘラケズリ，ナデにより仕上げられており硬質である。器の内面は指圧痕をとどめるがナデによって整形され長石粒を押えている。

陶邑古窯址群ＴＫ23・47形式に類似する。ロクロ回転のナデ整形である。口径11.4cm，立上り1.9高4.7を計る。他は破片であるが復元したところ同様型式を示すと思われる。

（田辺昭三　陶邑古窯址群Ｉ，1966参照）

住居址の時期

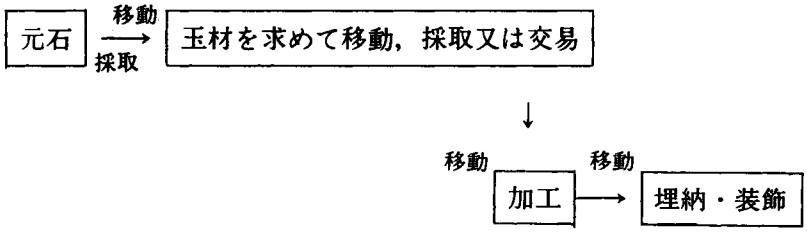
本調査区で発掘された住居址は，９軒である。そのうち，規模の計測不能のもの，すなわち削り取られたもの２軒，削り取られてはいるが，推測可能なもの２を含む，これらの住居址は，いづれも鬼高期に存するものであるが，炉を設けたもの２（確認数）カマドを有するもの３，切断され不明のもの等ある。又これらの住居址群の中には，遺構の規模が，時期的に均一化する傾向が見られるとともに，切合い関係から，３っに分けられた。５号住居址の床面の延長下の住居，６号址，と同じく５号址により，壁が切り取られ，床面及び遺物が攪乱をうけた，住居址，４号址をもとに，主軸方向，切り合い関係，伴出遺物と同類のものを，時期決定とし，すなわち鬼高期でも，比較的古いと思われるもの，７号址，６号址，これらの住居址の遺物と同類のものをもち，新しい様相の加わるもの，１と４・須恵器・坏・ＴＫ23・及び47に比較しえる，６Ｃ前半の住居址10と，遺物番号21・27，甕形土器・坏形土器の形態変化と多様化する傾向により，2･3･5･8がある。（高坏形土器には，古い形態が残る），「すなわち，本遺跡ではおよそ，６Ｃから百年間の古墳時代文化を示す，人間の生活史を物語ると云える。

攻玉技法について

004号址出土の石製模造品は，小型の三角形に近い剣形品，一点を除くほか扁平な勾玉，双孔円板と，多量の未成品・作業中の破片等である。

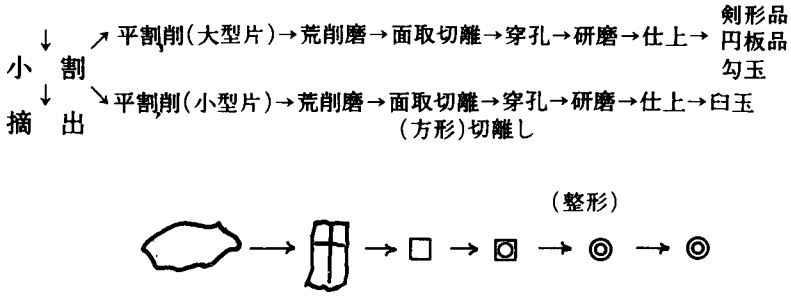
原石には大きなものは見られず，小割にした縦長の剥離片が多くこの石の特徴からきている。

本址検出の結晶片岩等総数7869について分類を試みたところ製作工程に特徴があることが判明したので，和洋女子大教授寺村先生の指導を経て単純な図式で示す。



玉材の産地が特定されたことにより，古墳時代後期における石製品を作る工房の技術者の移動，または元石の交易や採取とを考えなければならない。

原石の打割作業工程



緑色片岩を用いた004号址の工房については，臼玉片未成品はほぼ方形に面取されていることに注目される。

第二節　古墳時代における石製模造品の石質について

本稿は本遺跡出土の石製模造品の石材について，御指導をいただいた記録である。

過去で発掘調査された玉造り石製品については，すでに滑石と報告されている多くの報文があるが，たまたま，岩石の色が類似することから，千葉県内，嶺岡山系に産する「蛇文岩」の活用があってもよいのではと想定し発掘調査終了後，国立科学博物館，地学室長加藤昭氏に，肉眼鑑定並びに，試料の分析を依頼し，産地同定の労を執っていただいた。

肉眼鑑定法による調査結果，当該試料は，緑色鉱物を主成分として構成する石で，緑色をしている結晶片岩である。そのうち多くのものは，緑泥石のようにFe，Mg を含有する石が，石製模造品の材に該当する。個々については，多少成分が異なり，緑泥石に白雲母，角閃石，緑簾石，曹長石が岩相として結合している結晶片岩で，元石は玄武安山岩質，凝灰質のものが低温，低圧を受け変化，分解したもので，緑色片岩の岩石が異った集合体に変ったものである。

緑色片岩（ＧＳ）は普通，温度300度を上限とされ，圧力の上限9000気圧である。緑色の結晶片岩については，すでに報告があり関東山地では，鬼石，長瀞一帯に出現し，関陽太郎（1958）報文がある。他に丹沢，福島県阿弥隈にも産す。

産地について

緑色の結晶片岩を構成する岩相鉱物中に，微細にpunpellgire（パンペリ石）を含むことからも限定され，関東山地に分布する岩石である。荒川の上流埼玉県長瀞西の一部に元石を求めることができる。

構成式は　$Ca_2(Mg \cdot Fe^{2+}AI)(AI \cdot Fe^{3+})_2[(OH \cdot H_2O)_2 lsio_4 lSi_2O_7] =$

$Ca_2(Mg \cdot Fe \cdot AI)(AI \cdot Fe^{3+})_2SiO_{11} \cdot (OH \cdot H_2O)_2$

注）　緑色片岩は，緑色の結晶片岩であり，たいてい緑泥石を含むので緑泥片岩としても通用する可能性はある。（Ｘ線回析チャート参照）

カルシウムのほか鉄，マグネシュウム，アルミニュウムと硅石とが相互に結合した岩石。

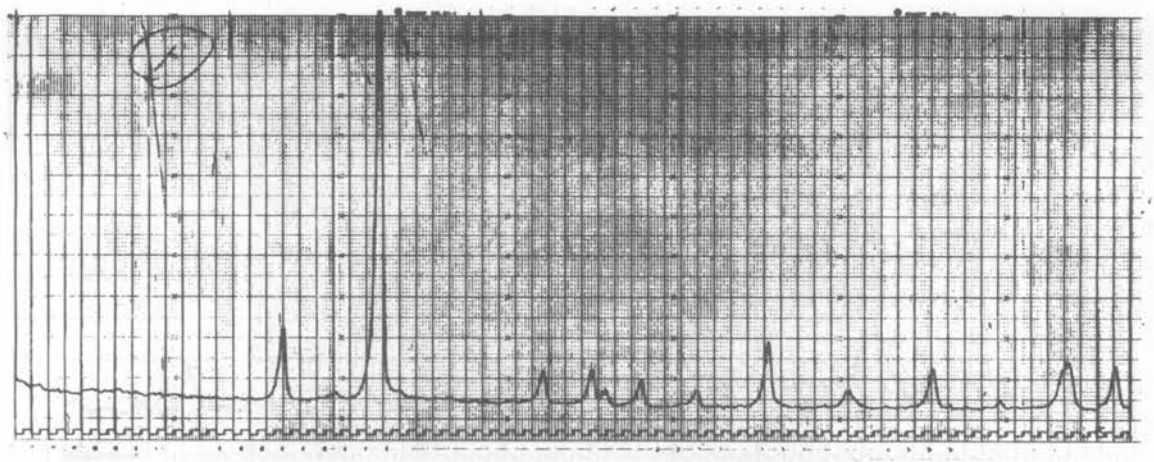


チャート１．　先土器時代ナイフ形石器（珪質岩）

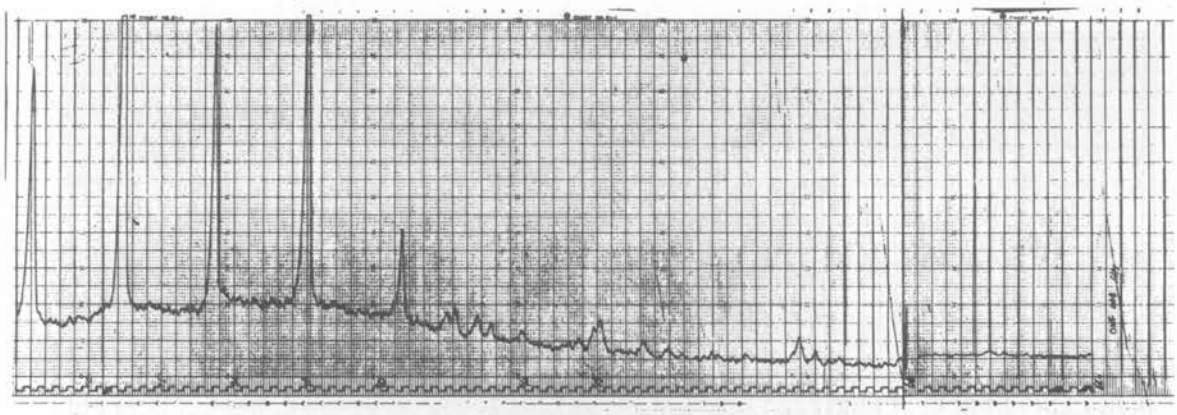


チャート２．第４号址（工房址）出土．緑色片岩（結晶）

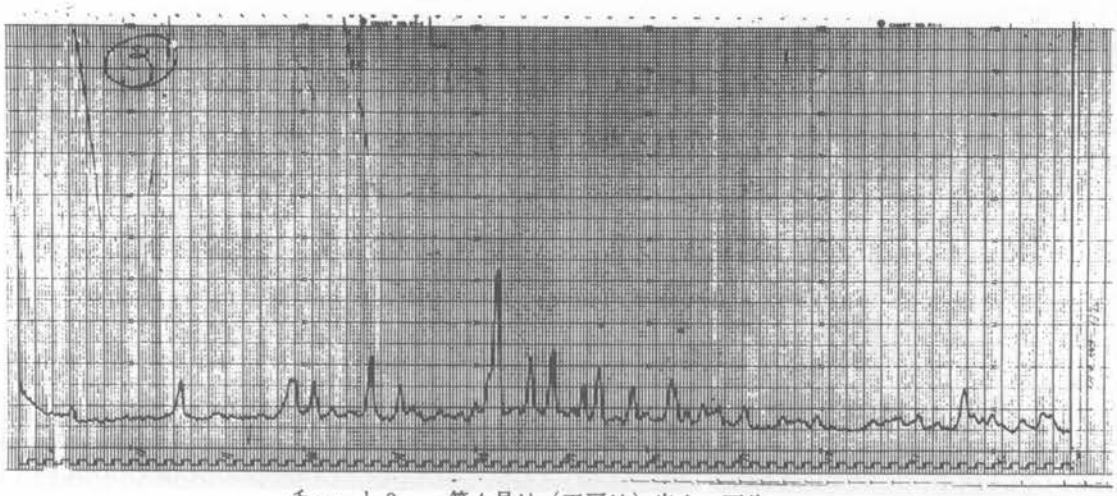


チャート３．　第４号址（工房址）出土．石片

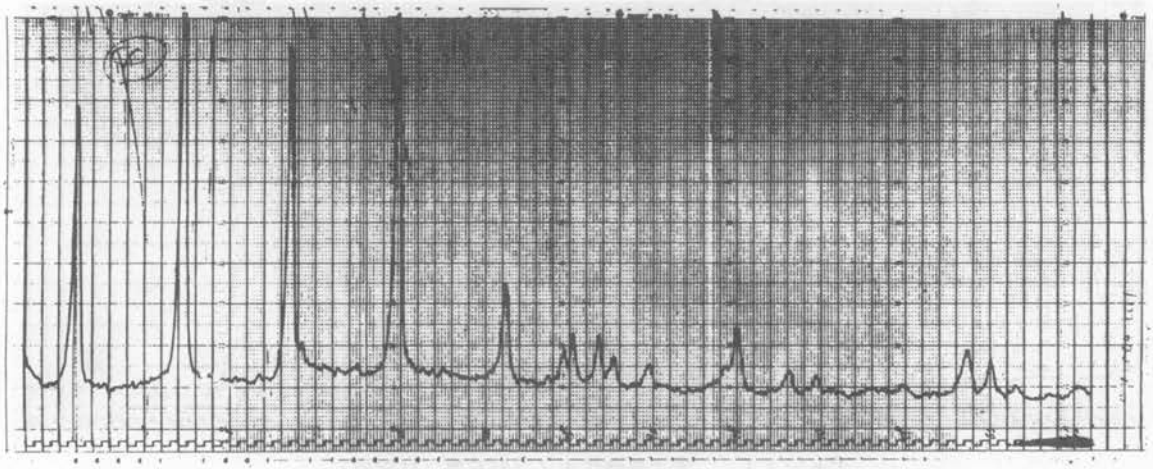


チャート４．　第４号址出土臼玉．結晶片岩 1222（緑泥片岩）

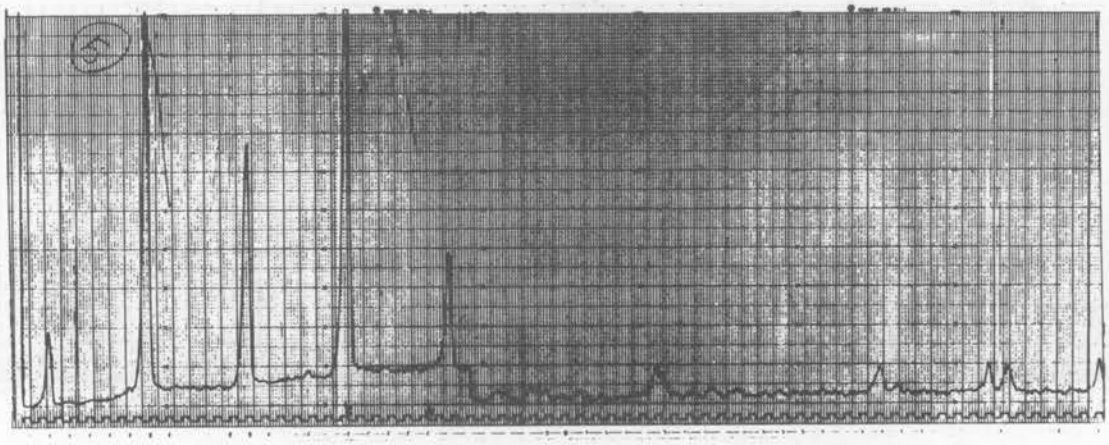


チャート５．　第４号出土剣形品 1302．結晶片岩（緑泥片岩）

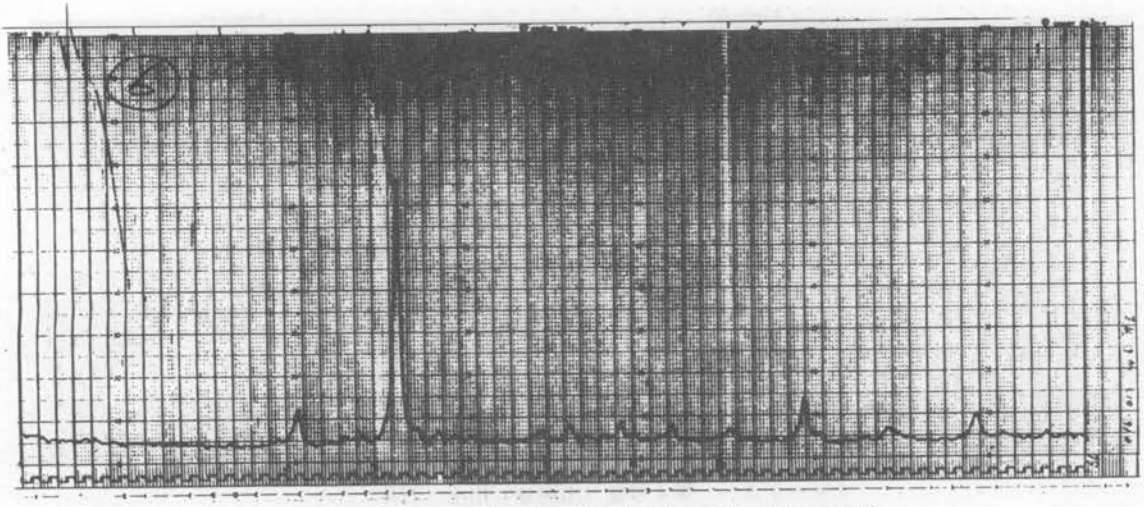


チャート６．　第一次古墳出土 016－013 管玉（碧玉）

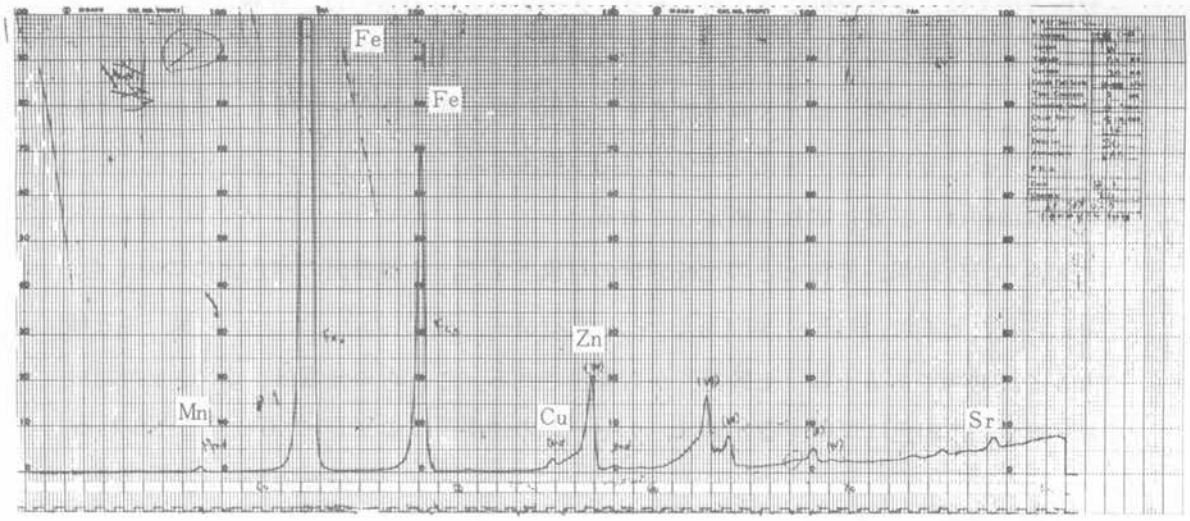


チャート７．　戸張作遺跡 C－12－1 赤彩土器

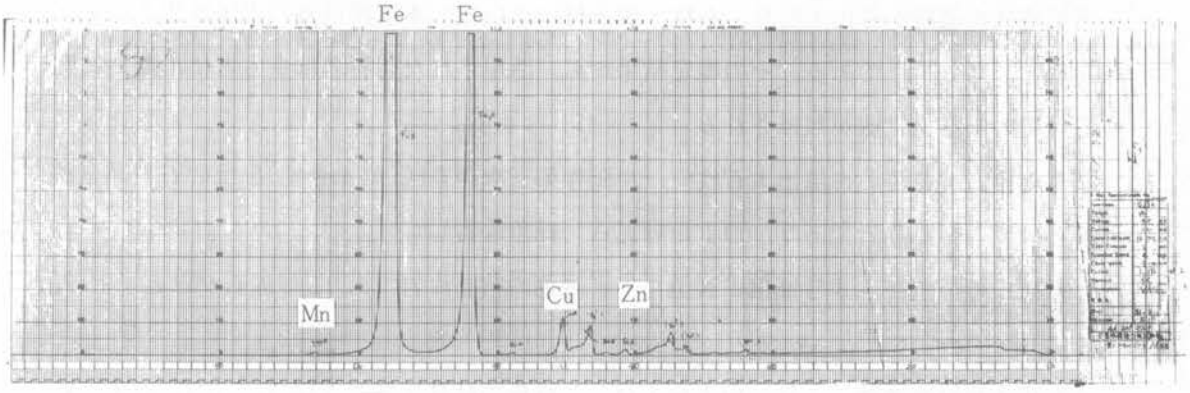


チャート８．　第４号址（工房址）出土 鎌

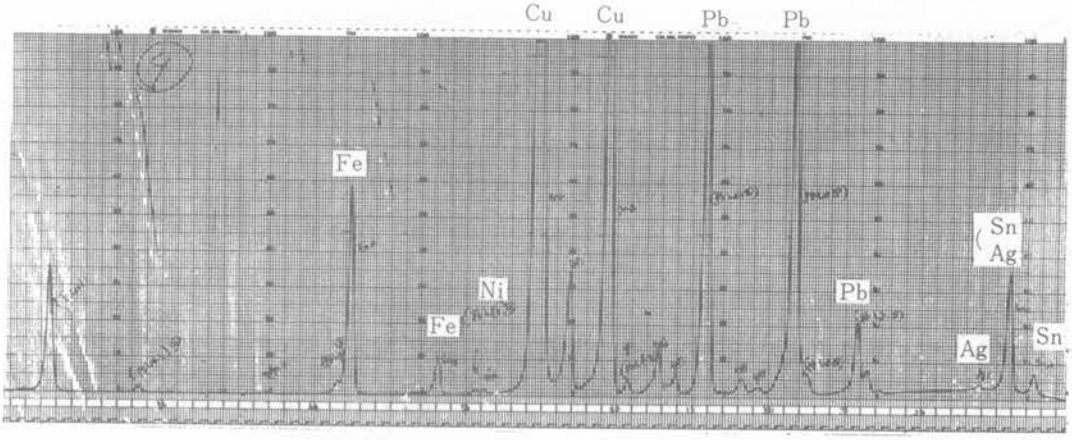


チャート９．　第一号塚出土銅銭（34）

第三節　遺物の分析結果について

分析方法では，定性分析にとどめてある。ターゲット(Target)は，W線(タングステン)を用い，螢光X線分析を採用，材，及び土師器表面に照射，分析を行った。

装置は，理学電機製，螢光X線分析装置を活用した。W線管球を使用し，印加電圧40KW印加電流30mA，分光結晶・弗化リチウム(LiF)検出器は「シンチレーション・カウンター」試料照射面積は，必要に応じて測定してある。

土師器の分析結果，赤色土との比較分析の対象として，土器表面の赤色面についても，とらえられた元素は，鉄(Fe)，銅(Cu)，マンガン(Mn)，亜鉛(Zn)，ニッケル(Ni)の五種である。焼結物である土器（土師器）から検出される。これらの元素は，全て，土の組成であり肉眼で，赤色に反射する元素は，チャートの強度差によりＦｅであったことが解る。

（分光回折チャート参照）

(2)比較した石製模造品の石質

古墳時代の遺跡から出土した，石枕・製玉材について，本遺跡以外の工房址出土品を比較対象として分析してある。その鑑定結果から，活用された岩石名称をもとに，産地に関する当時の交易文化圏が類推される。

(イ)東寺山石神遺跡，古墳出土石枕――戸張作第三次調査区(第４号址)出土の石製模造品石材と同質の結晶片岩であり，白雲母緑泥石（緑色片岩）

(ロ)船橋市外原遺跡～３号址出土製玉材――緑色の結晶片岩であり，緑泥石がほとんど(緑色片岩)

(ハ)船橋市夏見台遺跡～７号址出土製玉材――緑色の結晶片岩で，緑泥石曹長石(緑色片岩)

以上３資料も変成岩，緑泥石を主成分とする濃緑板状の緑色片岩（緑泥片岩）＝Green-schist（Chlorite）であったことが判明した。

（ロ・ハは船橋市郷土資料館提供の資料を分析）

(3)，金属製品の分析結果

製品は，いづれも腐蝕が著しい水酸化物で現状はとどめるが，大きくふくらみ銹化が進んでいる。砂鉄精錬ではないかと想定し，分析したが，決定し得る根拠はなく，介在物に硫黄があり，カーボンが多く鋼であった。

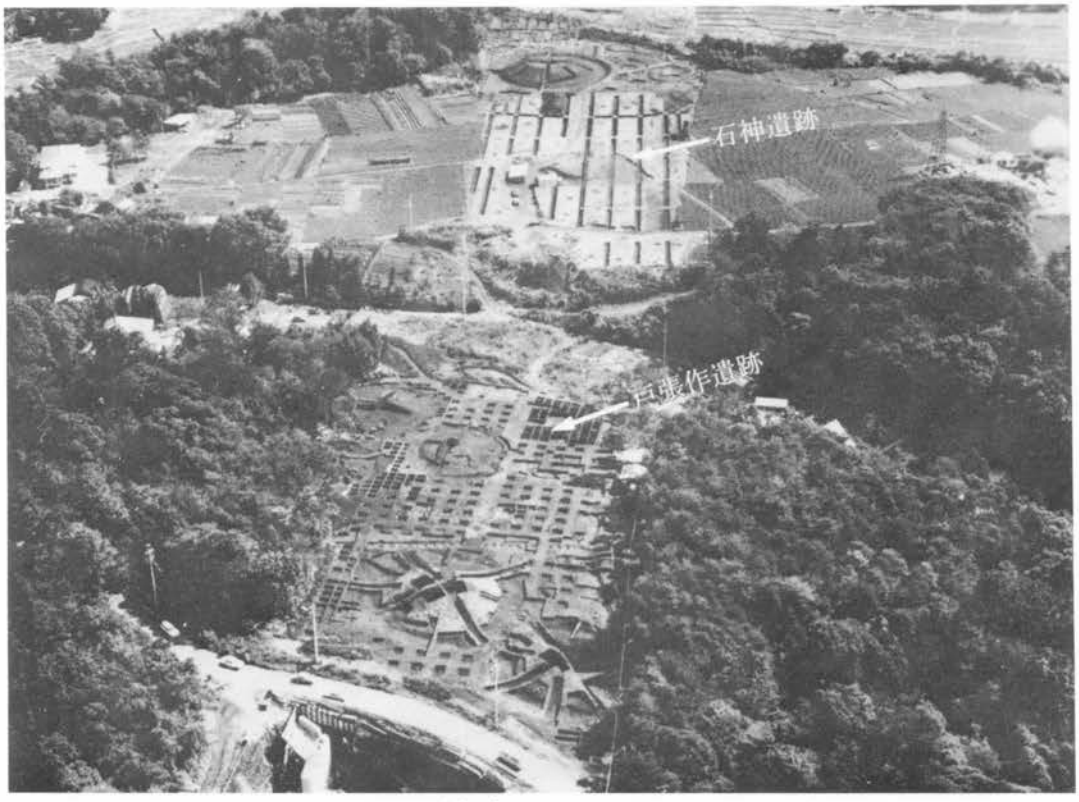
(イ)鎌身（第４号址出土）――鉄・銅（少量）が主体でニッケル・亜鉛・マンガンは微少であるが存在する。チタンは折出されない。鉱物の顕微鏡による組織から鍛造品である。

(ロ)鏃（第一次調査14号出土）――鉄・銅・亜鉛は検出されない。鉱物が抽出されず銹のみで現形遺存したものである。

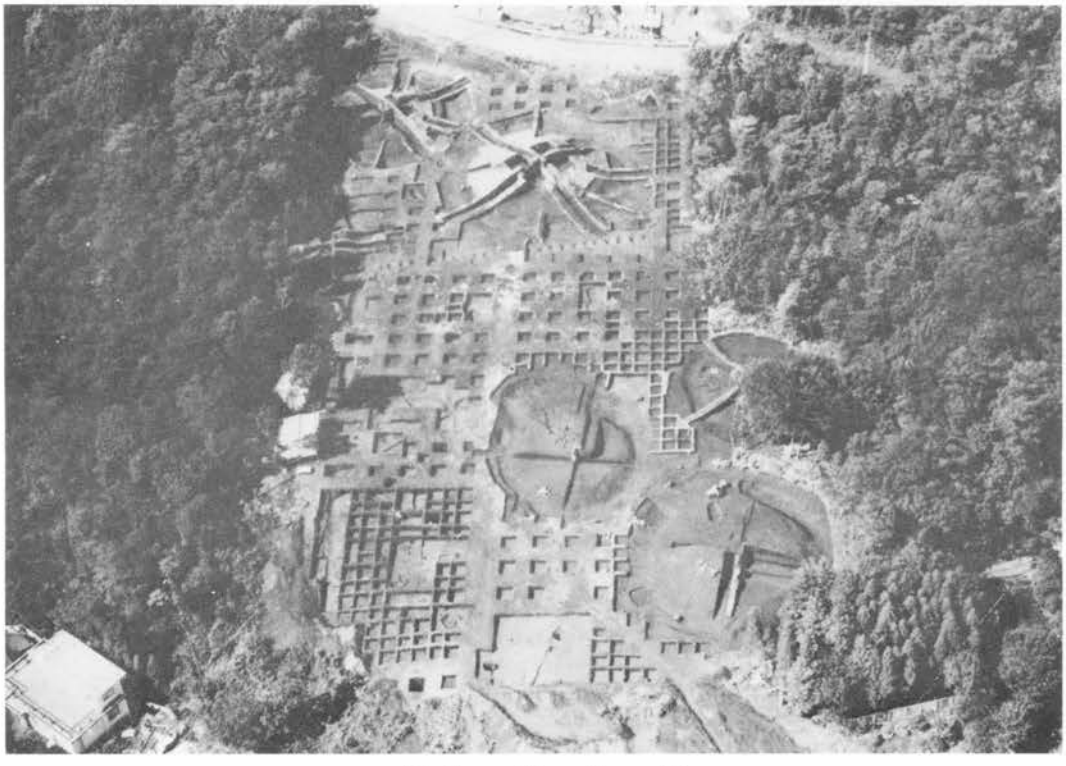
(ハ)銅銭（第１号塚伴出）――本文第二章遺物の項参照。

東寺山・戸張作遺跡
（第１次・第２次調査）

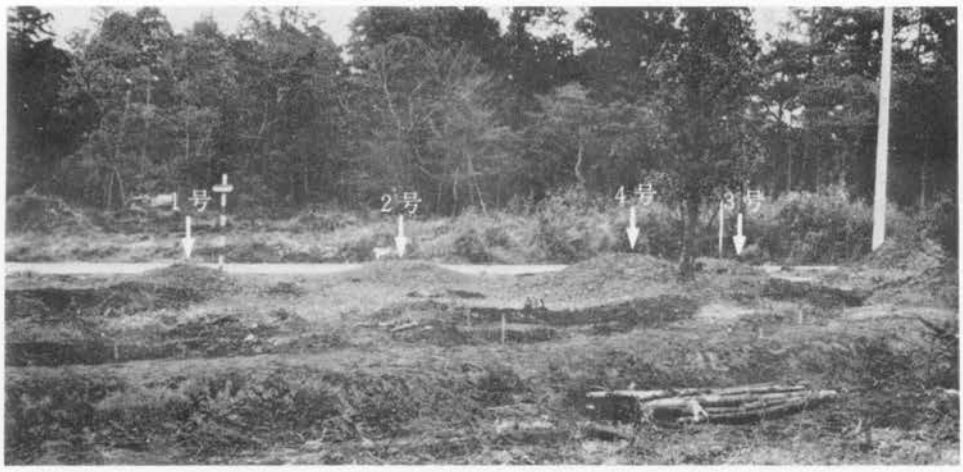
写　真　図　版



(1) 遺　跡　付　近



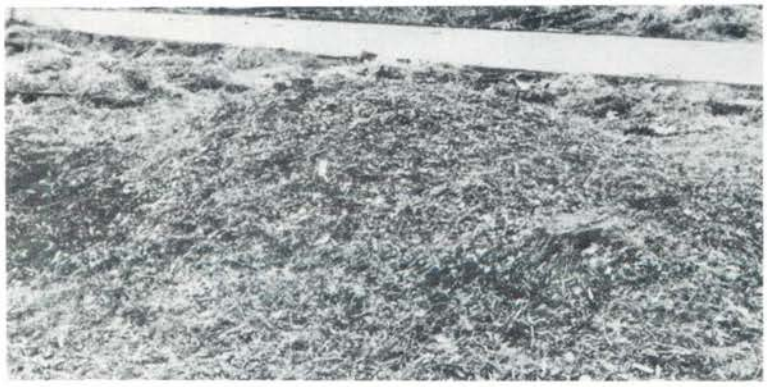
(2) 遺　跡　全　景



(1) 塚　　群 (1,2,3,4号)

(2) 塚　　群 (5,6号)

(3) 古 墳 群 (8,9号)



(1) 1号塚全景
（調査前）

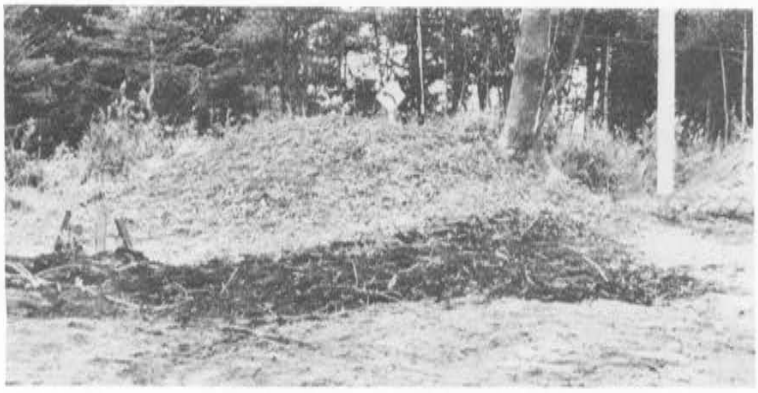
(2) 1号塚全景
（調査後）

(3) 2号塚全景
（調査前）

(4) 2号塚全景
（調査後）

(1) 3号塚全景
（調査前）

(2) 3号塚全景
（調査後）



(3) 4号塚全景
（調査前）

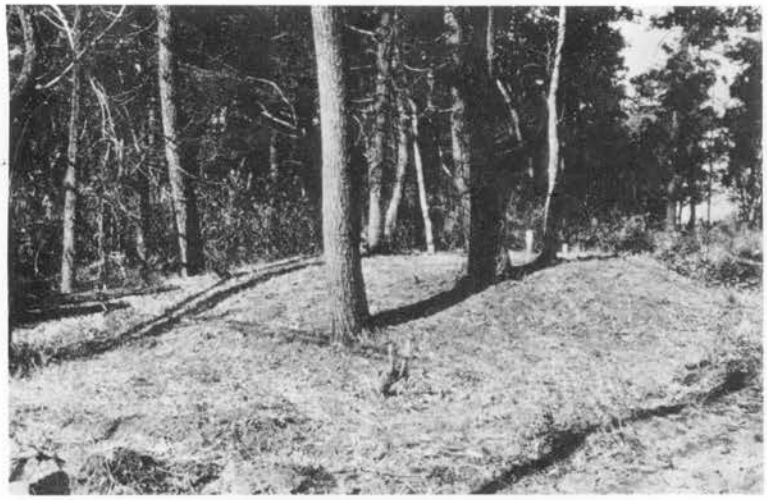
(4) 4号塚全景
（調査後）

(1) 5号塚全景
（調査前）

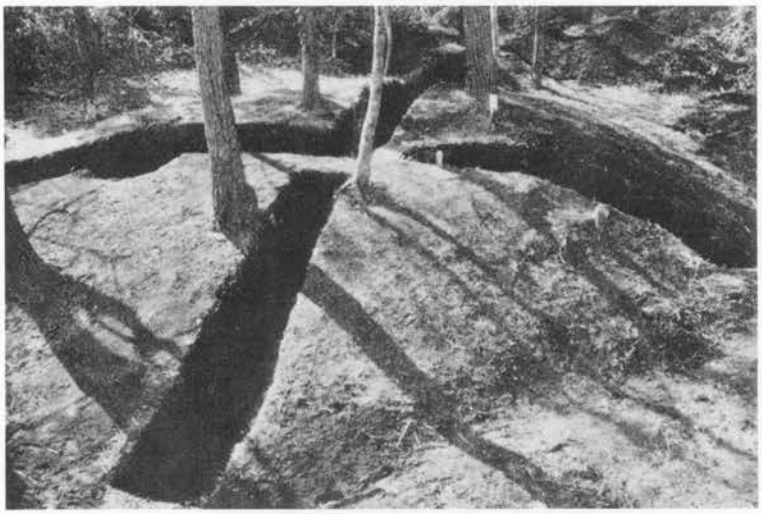
(2) 5号塚全景
（調査後）

(3) 6号墳全景
（調査前）

(4) 6号塚全景
（調査　後）



(1) 7号塚全景
（調査前）

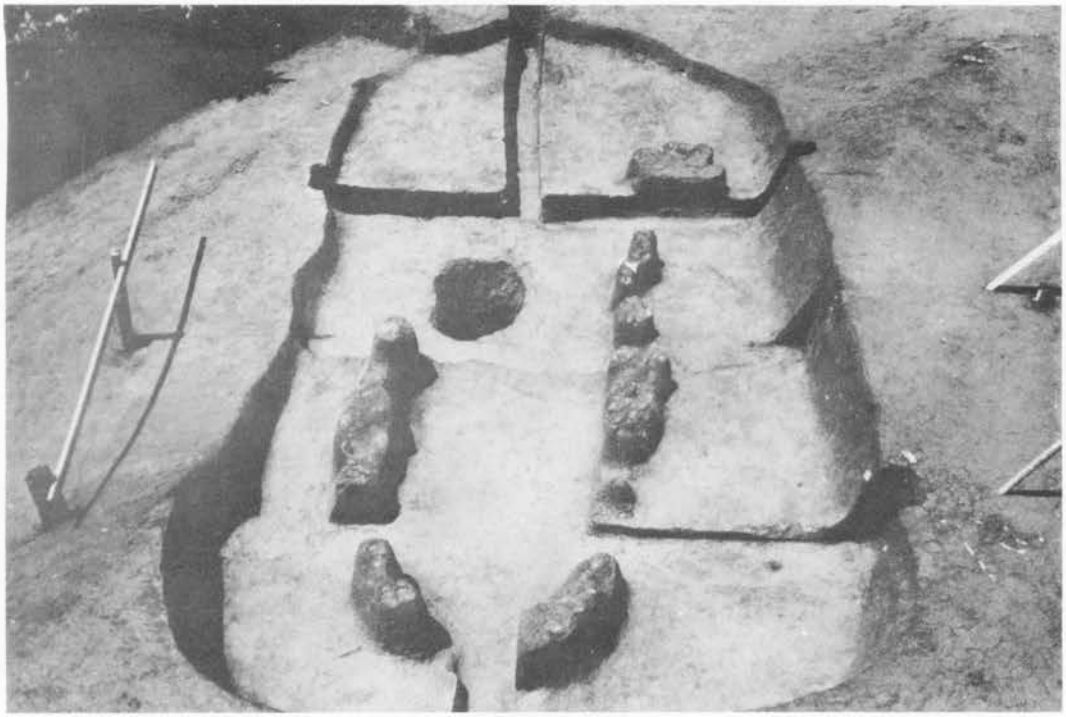


(2) 7号塚全景
（調査後）

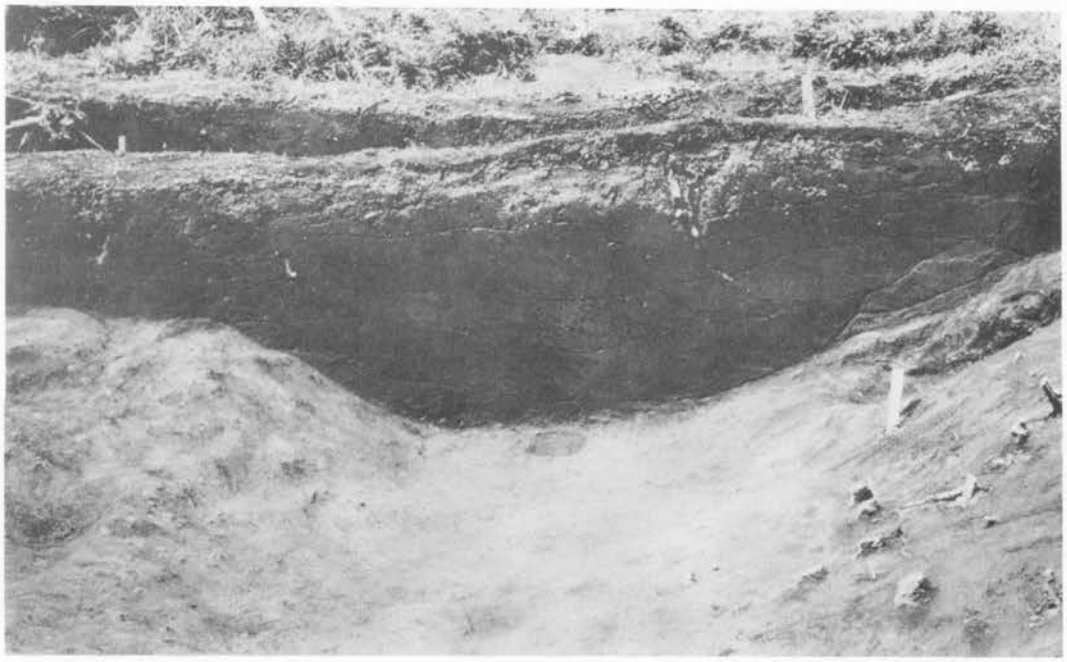
(3) 8号墳全景（調査前）

(1) 8号墳主体部確認状況

(2) 8号墳主体部遺物出土状況



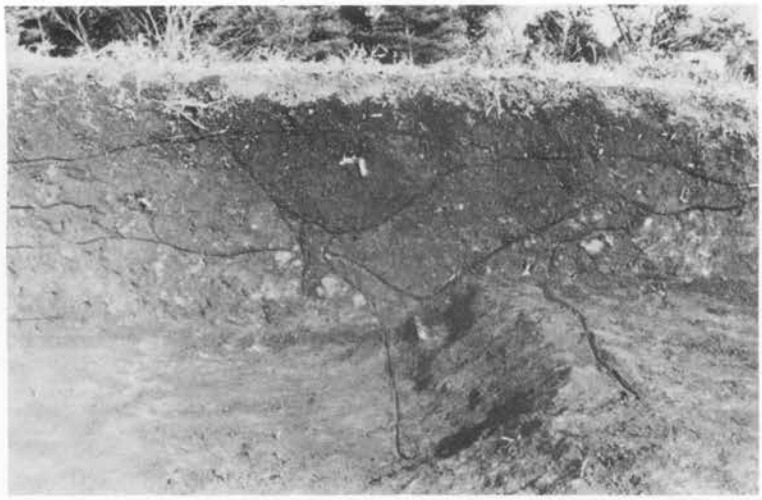
(1) 8号墳主体部粘土出土状況



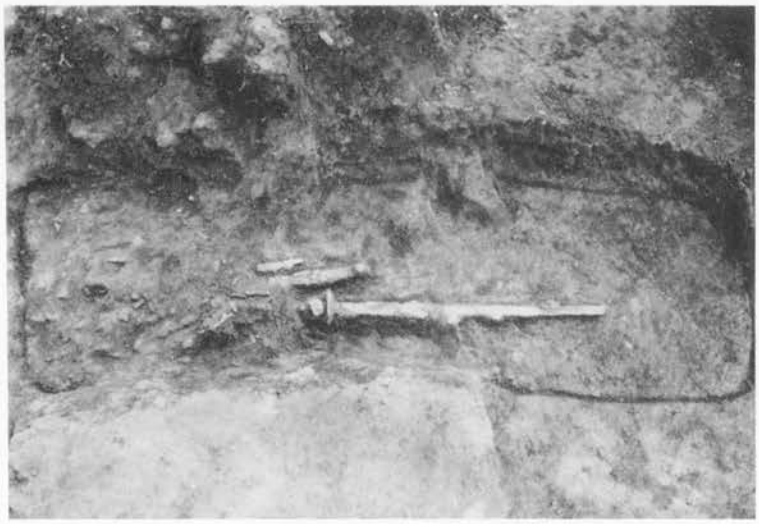
(2) 8号墳周溝土層断面

(1) 9号墳全景（調査前）

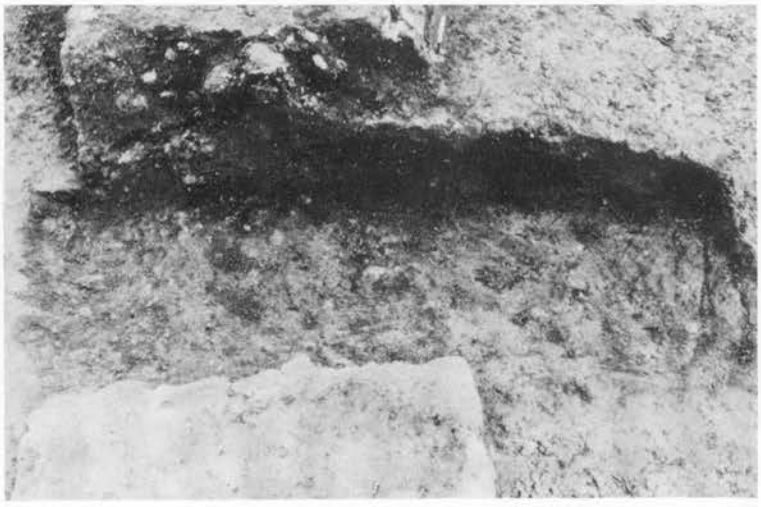
(2) 9号墳、墳丘断面状況（西側Dトレンチ）



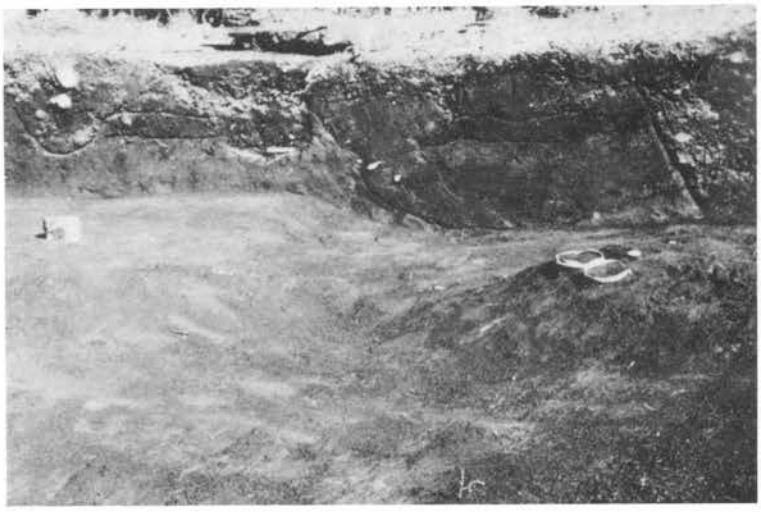
(1) 9号墳主体部
確認状況



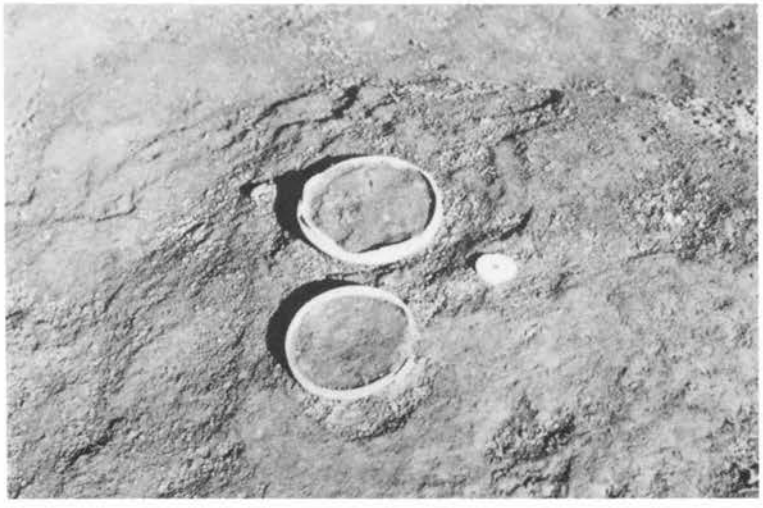
(2) 9号墳主体部
遺物出土状況



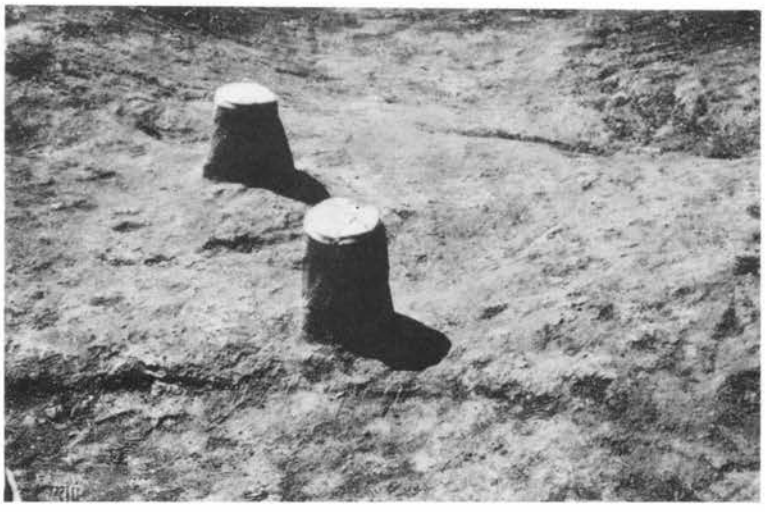
(3) 9号墳主体部
（調査後）



(1) 9号墳周溝内
遺物出土状況



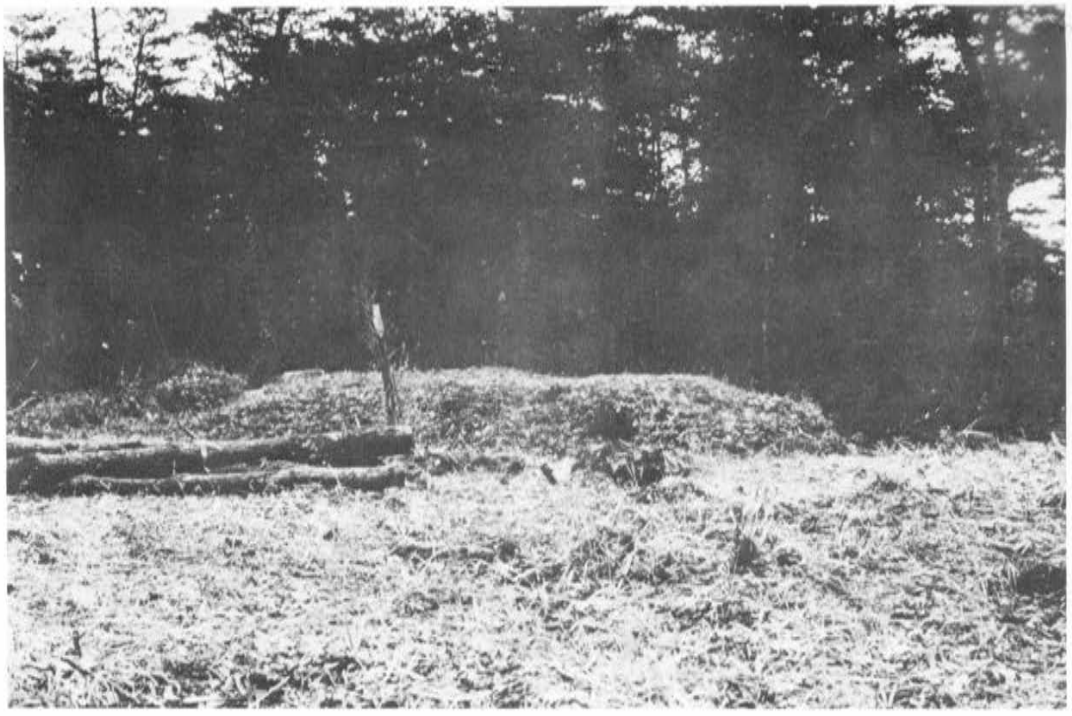
(2) 9号墳周溝内
遺物出土状況



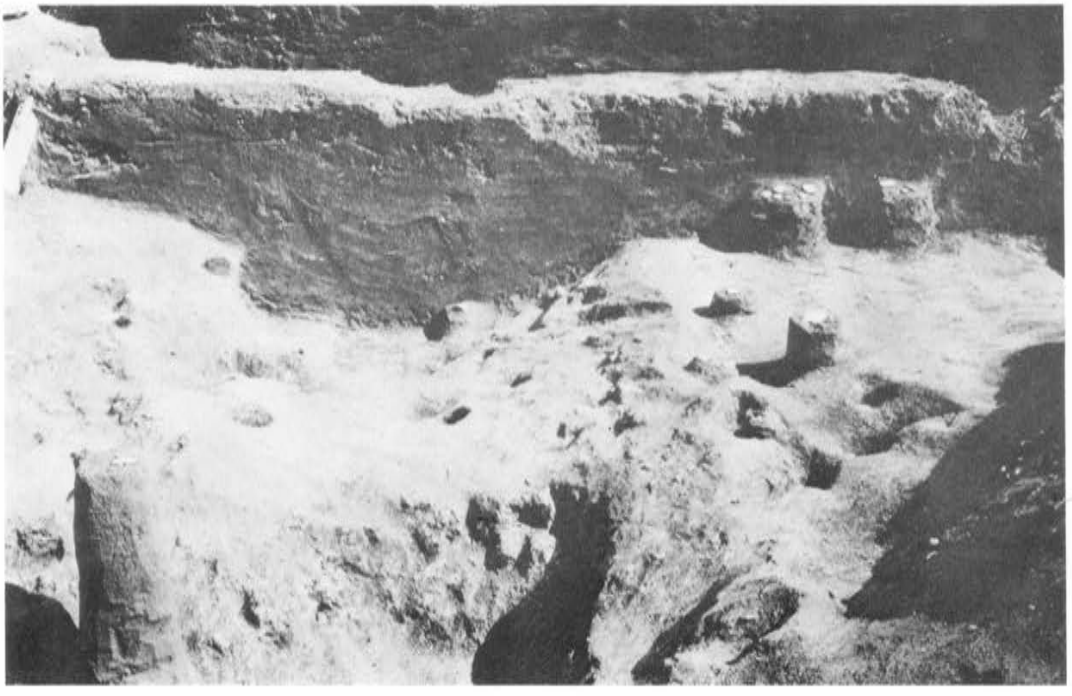
(3) 9号墳周溝内
遺物出土状況

(1) 9号墳周溝土層断面

(2) 9号墳全景（調査後）



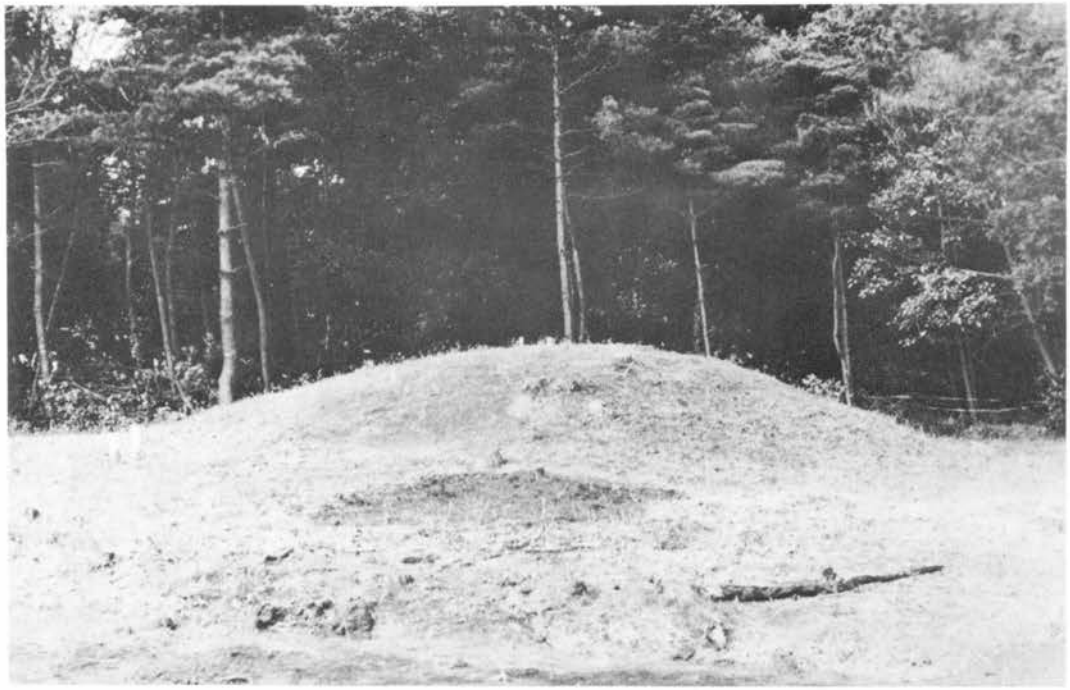
(1) 10号墳全景（調査前）



(2) 10号墳前遺物出土状況

(1) 10号墳遺物出土状況

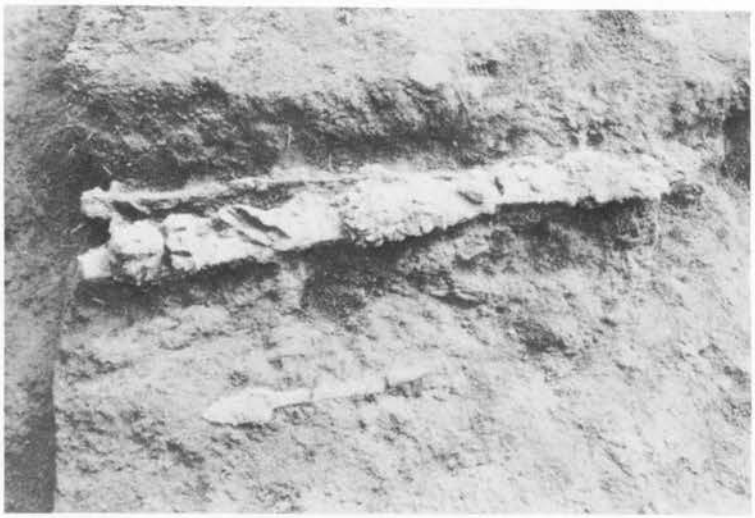
(2) 10号墳全景と溝A・溝Bの切り合い状況



(1) 11号墳全景（調査前）

(2) 11号墳主体部確認状況

(1) 11号墳主体部
遺物出土状況（南側）

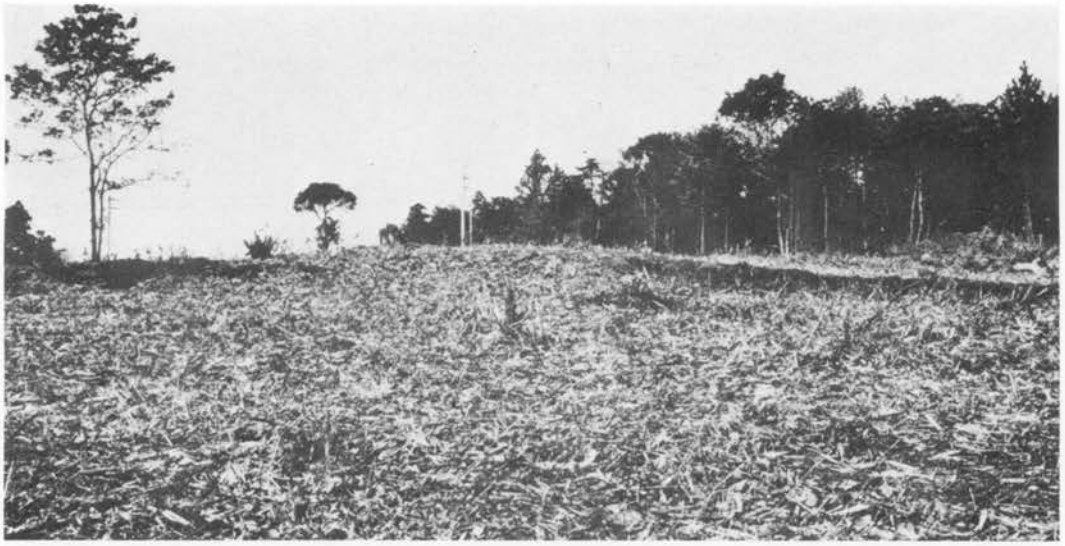


(2) 11号墳主体部
遺物出土状況（北側）

(3) 11号墳周溝内
遺物出土状況

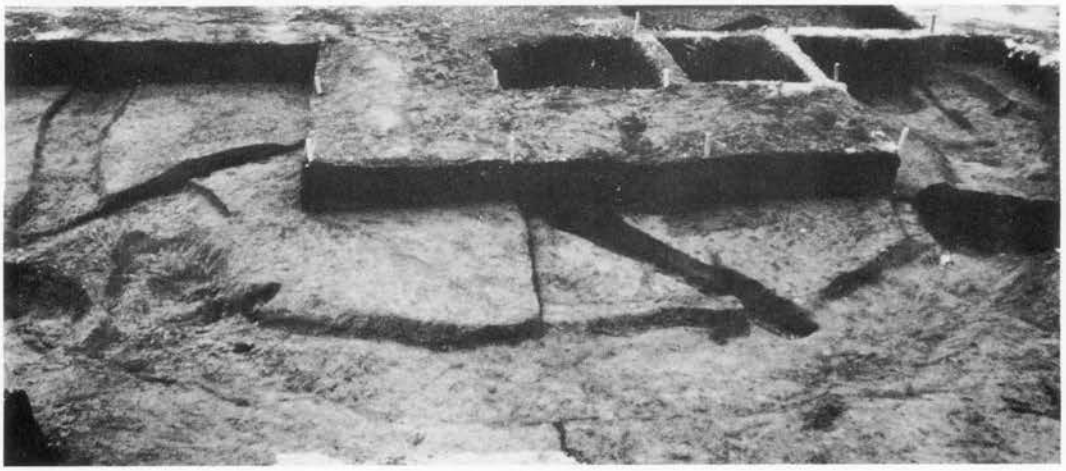
(1) 11号墳周溝内遺物出土状況

(2) 11号墳全景（調査後）



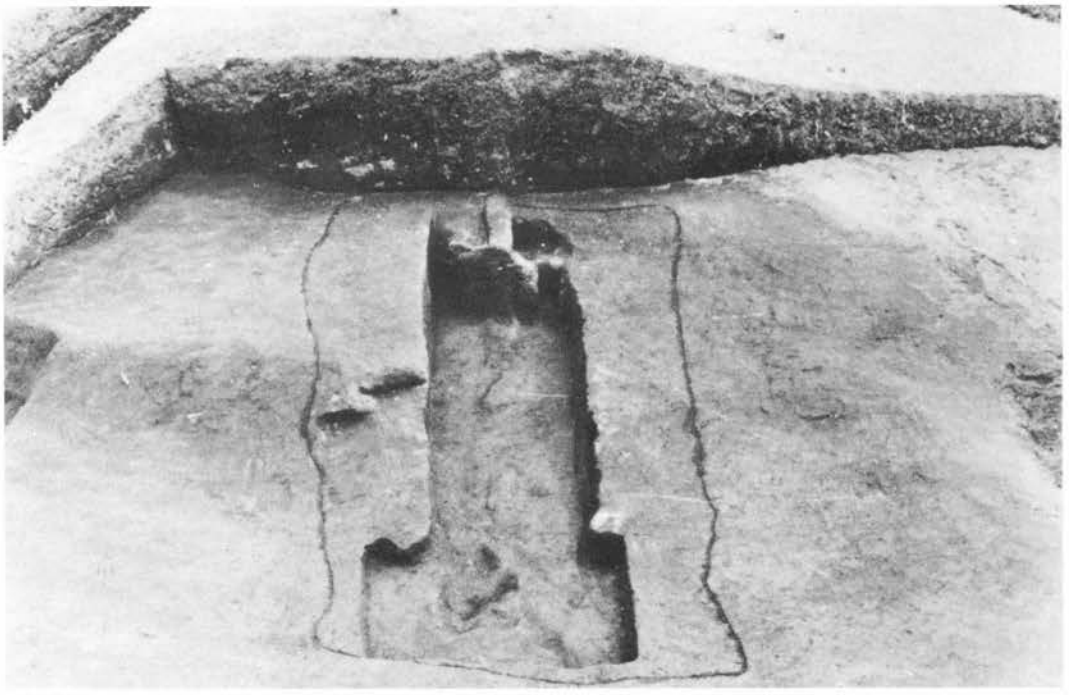
(1) 12号墳全景（調査前）

(2) 12号墳周溝内
遺物出土状況



(3) 12号墳全景（調査後）

(1) 13号墳全景（調査前）



(2) 13号墳主体部（外側プランは掘り方）

(1) 13号墳主体部
遺物出土状況

(2) 13号墳周溝内
遺物出土状況

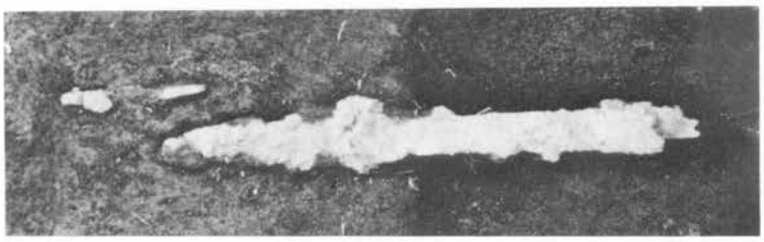
(3) 13号墳周溝内
遺物出土状況

(1) 13号墳周溝内遺物出土状況と土層断面

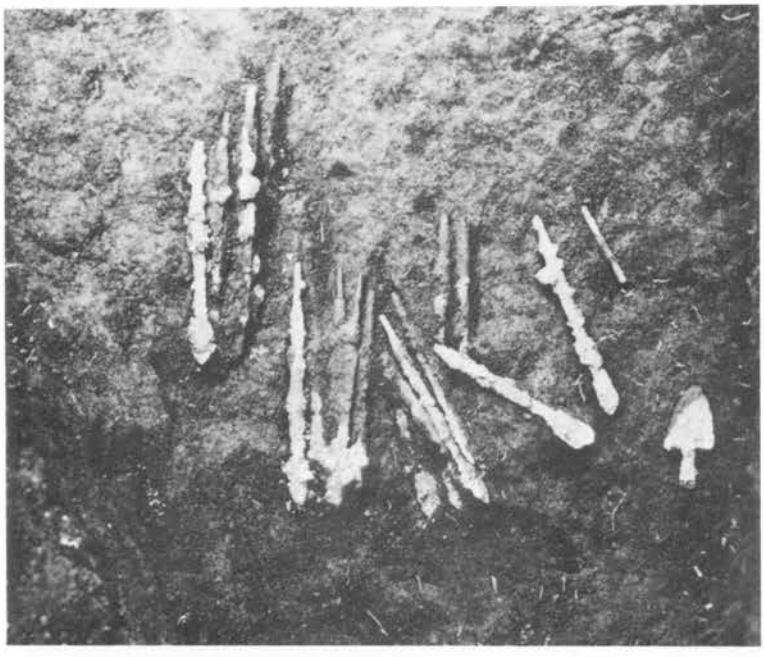
(2) 13号墳全景（調査後）

(1) 14号墳全景（調査前）

(2) 14号墳全景（調査後）

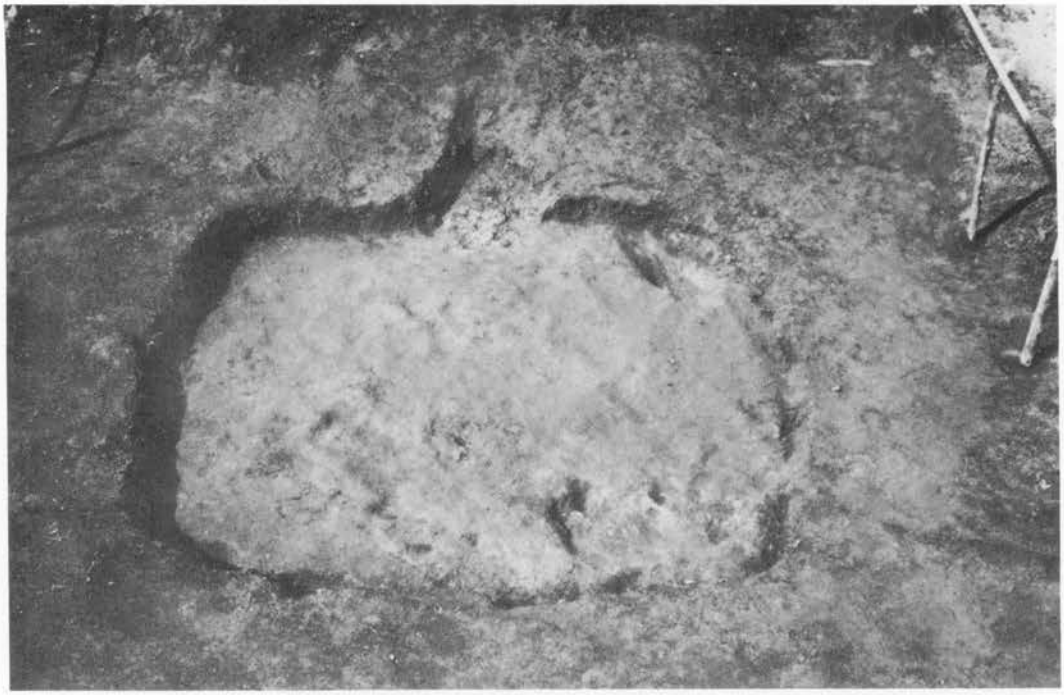


(1) 14号墳主体部
遺物出土状況

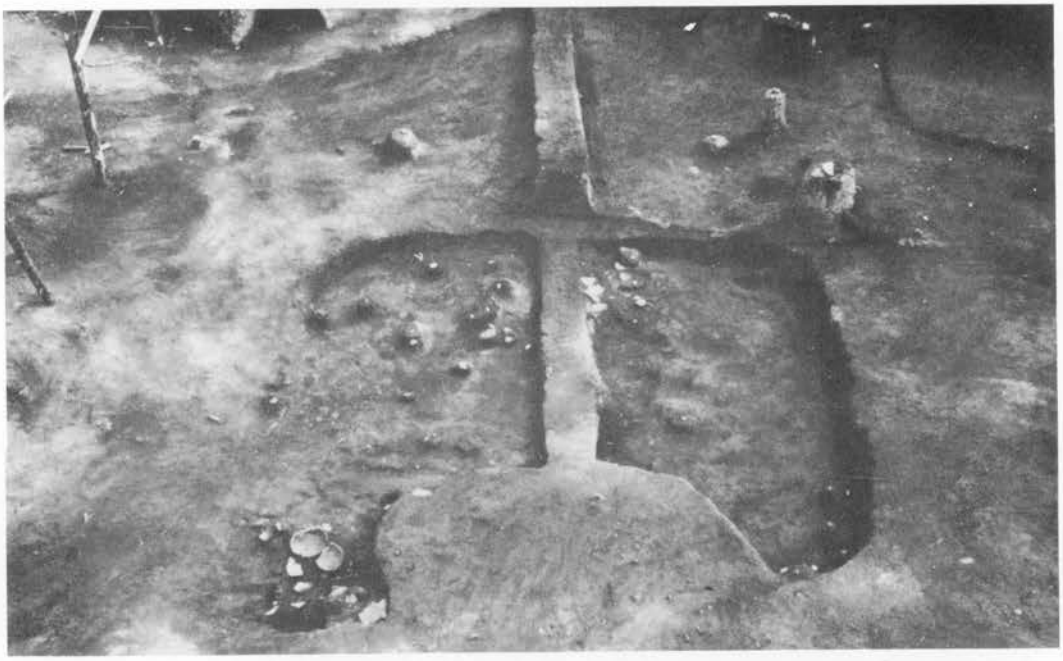


(2) 14号墳主体部
遺物出土状況

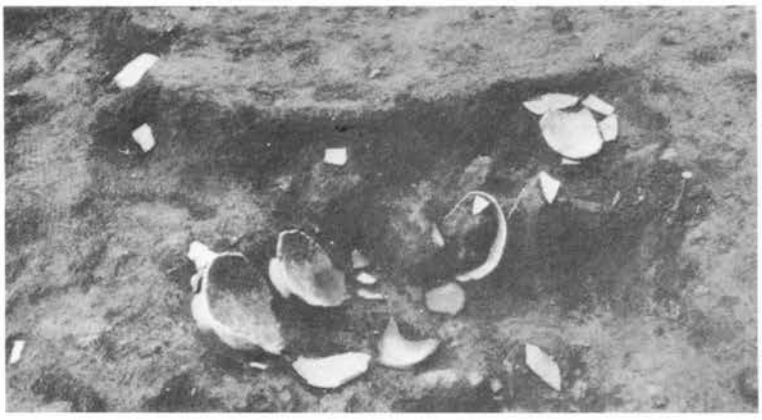
(3) 14号墳主体部
（調査後）



(1) 001号住居址全景(調査後)



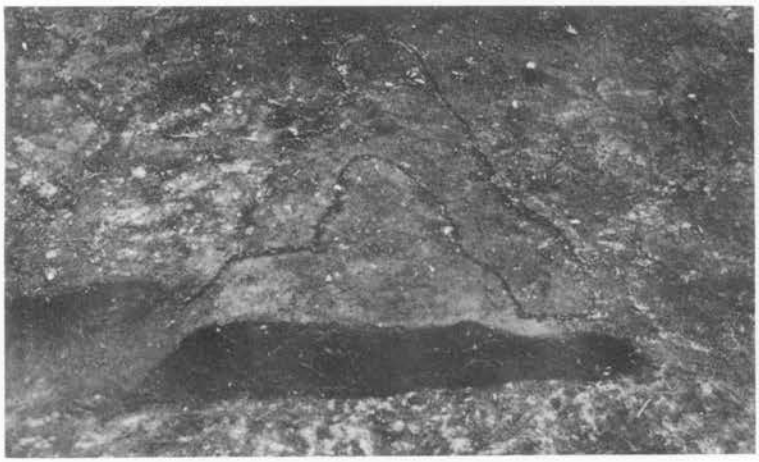
(2) 001号住居址遺物出土状況



(1) 001号住居址
遺物出土状況

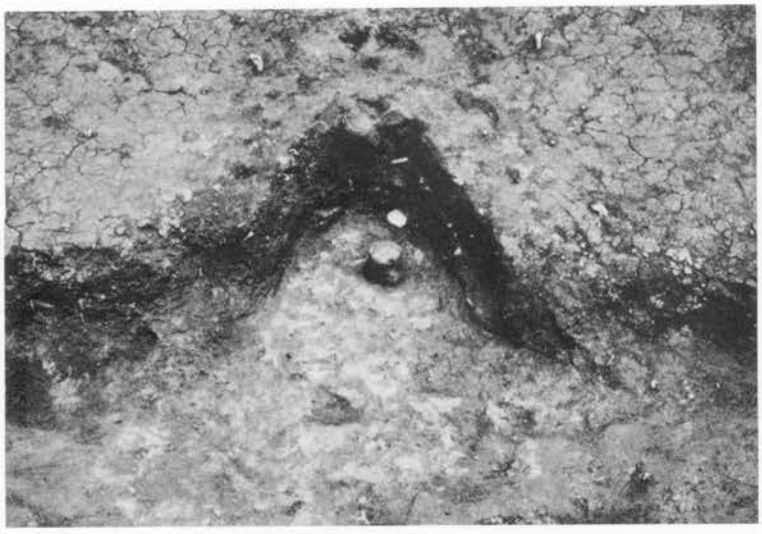
(2) 001号住居址
遺物出土状況

(3) 001号住居址カマド前
遺物出土状況

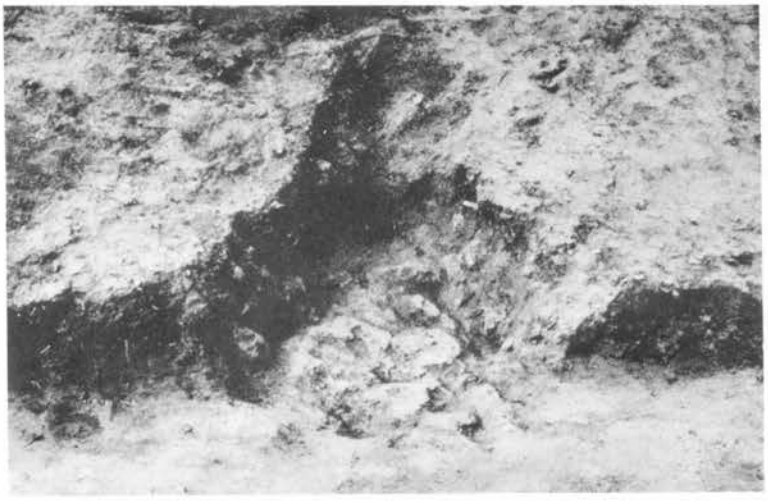


(1) 001号住居址
カマド

(2) 001号住居址
カマド内遺物出土状況



(3) 001号住居址
カマド内支脚出土状況



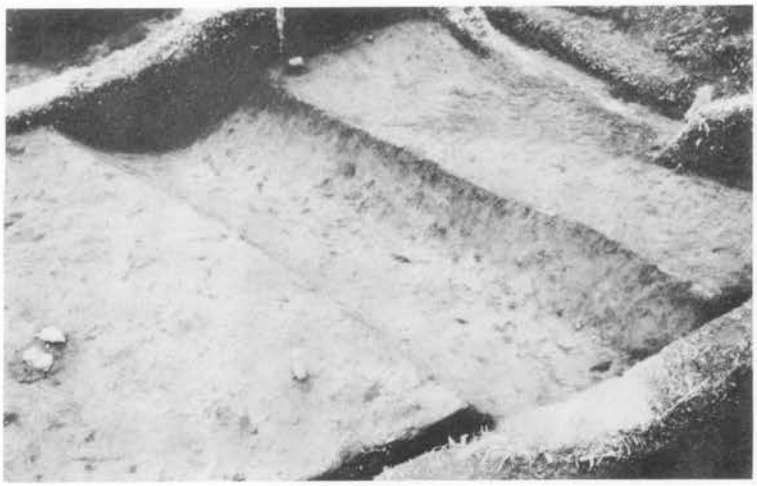
(1) 001号址カマド
（調査後）

(2) 溝状遺構A
（70C区）

(3) 溝状遺構A
（60C区）

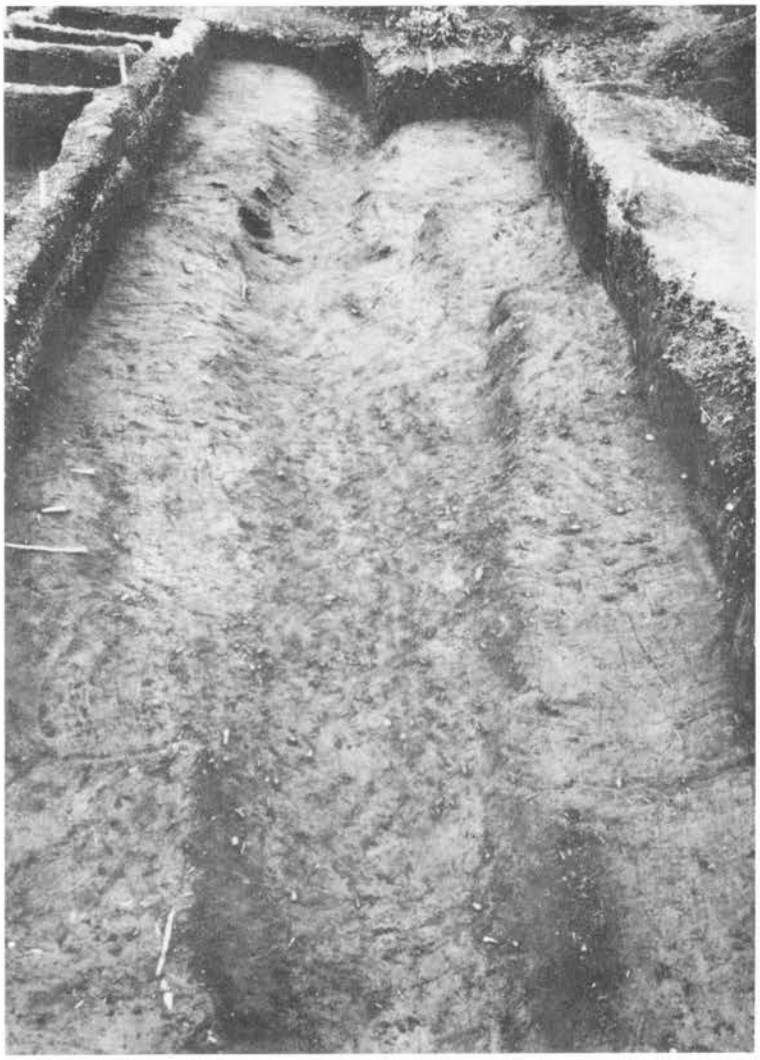
(1) 溝状遺構A
(50,10,20,C区)

(2) 溝状遺構B
(30E,D区)

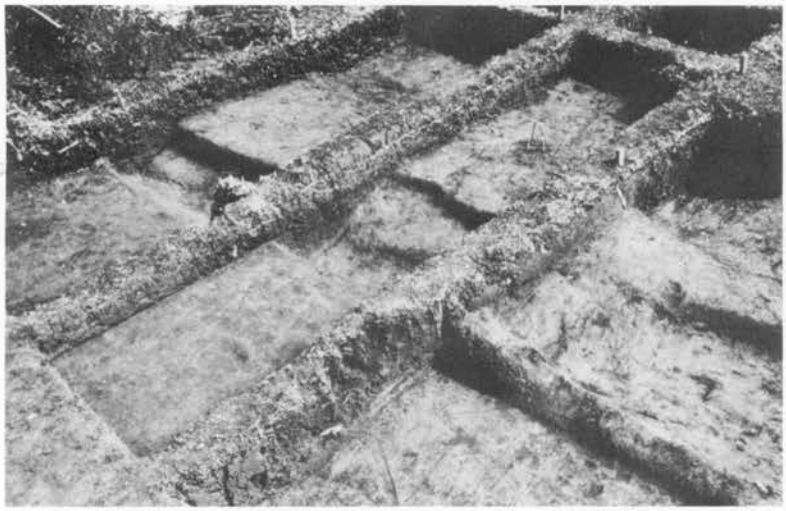


(3) 溝状遺構B
(30E,D区)

(1) 溝状遺構B
(30 B 区)



(2) 溝状遺構B
(30L, M区)

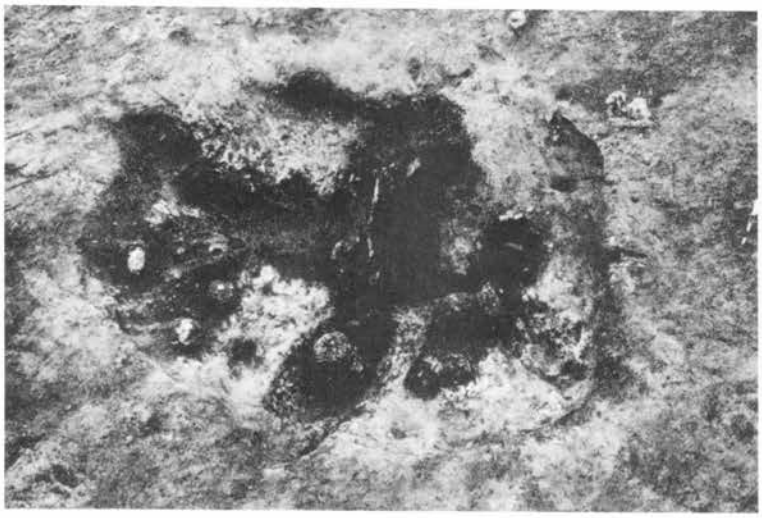


(1) 溝状遺構D
(70, 60F区)

(2) 溝状遺構D
(60, 50F区)

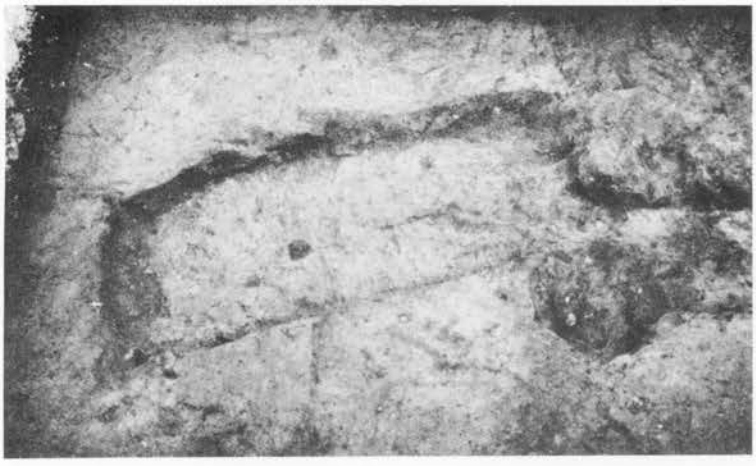
(3) 溝状遺構C
(50M, N区)

(1) 土　坑 1.
（調査後）

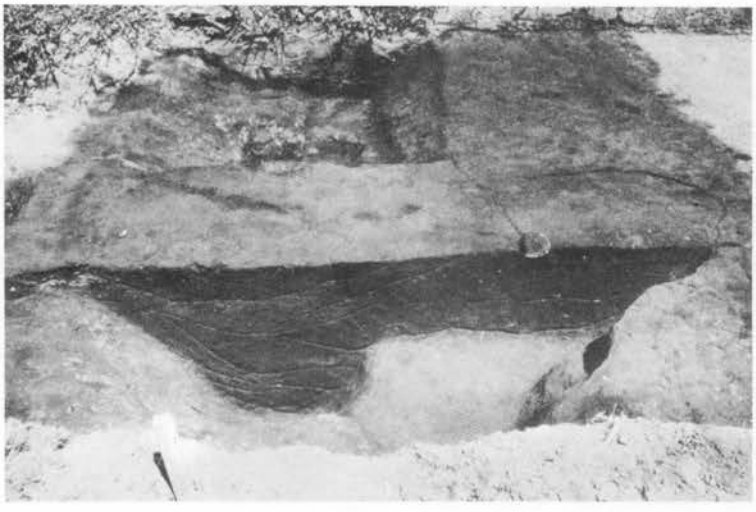


(2) 土　坑 2.
炭化物出土状況

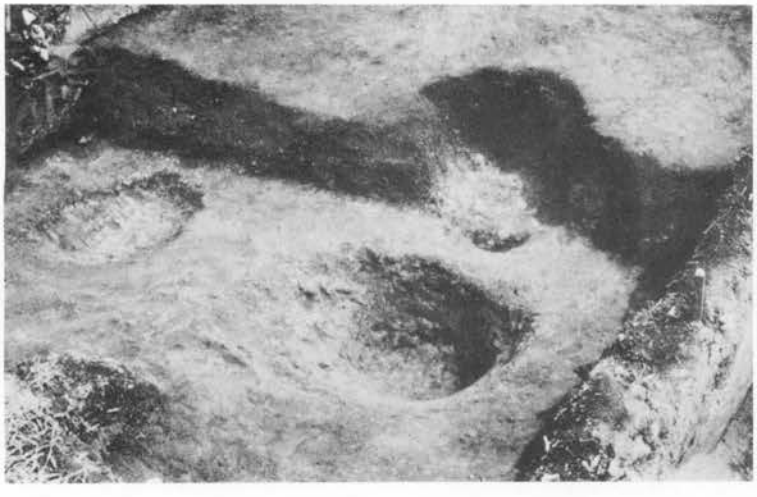
(3) 土　坑 2.
（調査後）



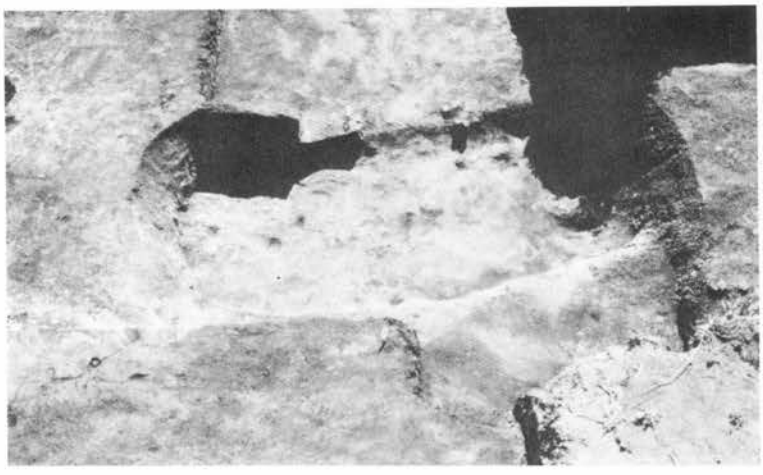
(1) 土　坑 3.
（調査後）



(2) 土　　坑4.
（溝状遺構Aとの関係
及び遺物出土状況）

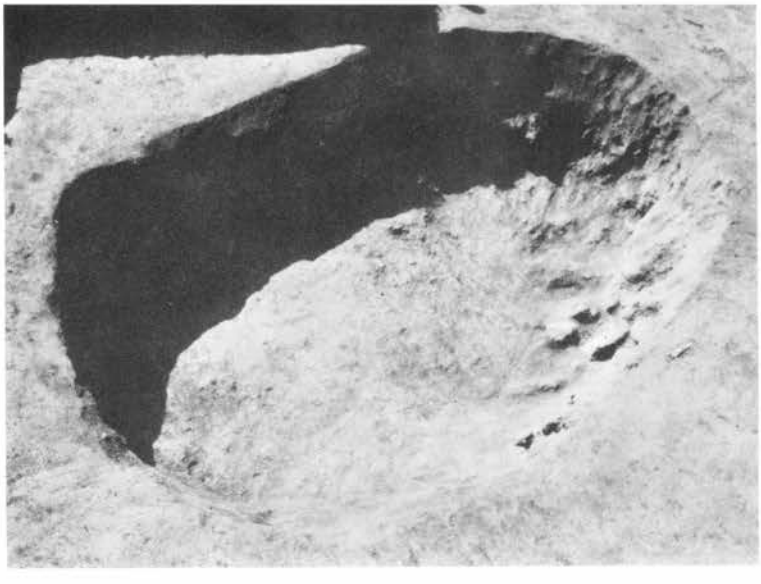


(3) 土　　坑 4.
（調査後）

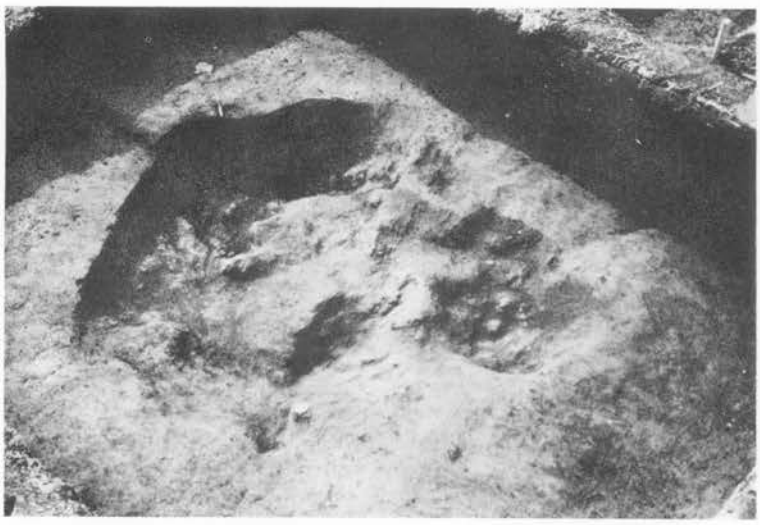


(1) 土　坑 5.
（調査後）

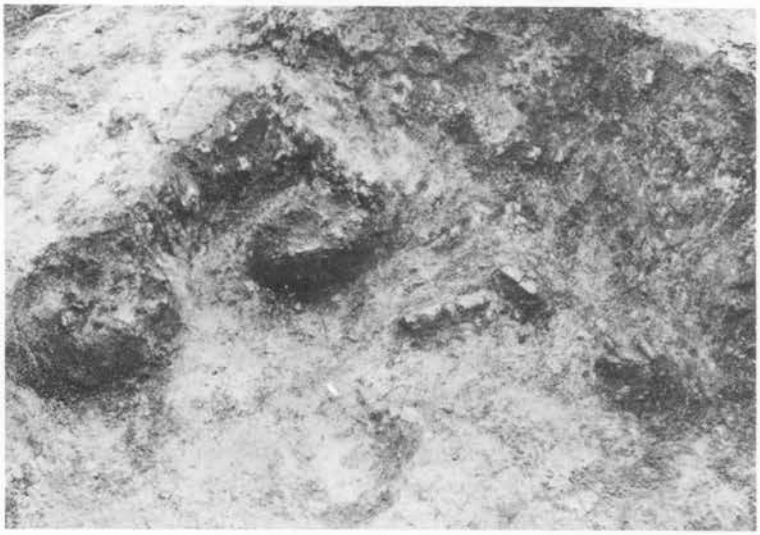
(2) 土　坑 6.
（調査後）



(3) 土　坑 7.
（調査後）

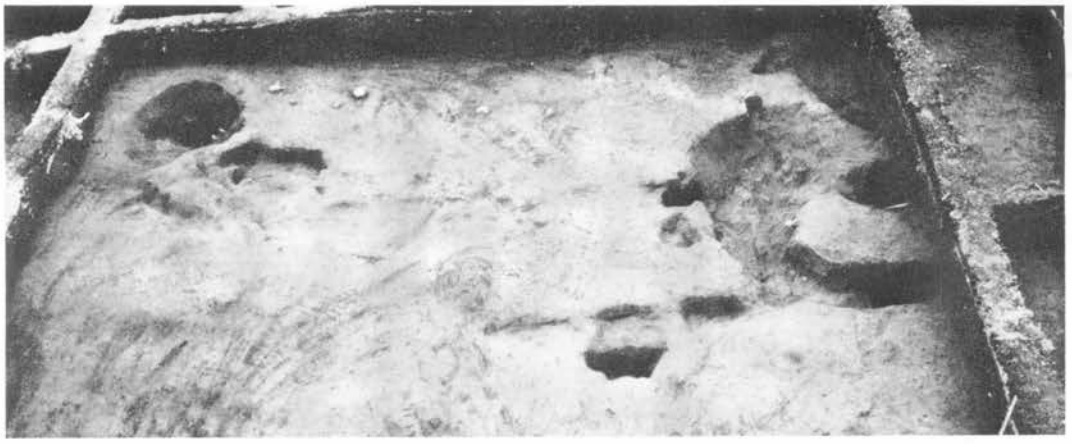


(1) 土　　坑 8.
（調査後）



(2) 土　　坑 9.
（調査後）

(3) 土　　坑 9.
炭化物出土状況



(1) 010, 011
遺構全景

(2) 010,遺構支脚
出土状況

(3) 011遺構

(1) 直刀(5,7)

(2) 刀子(3)

(3) 刀子(9,11)

(4) 刀子(10)

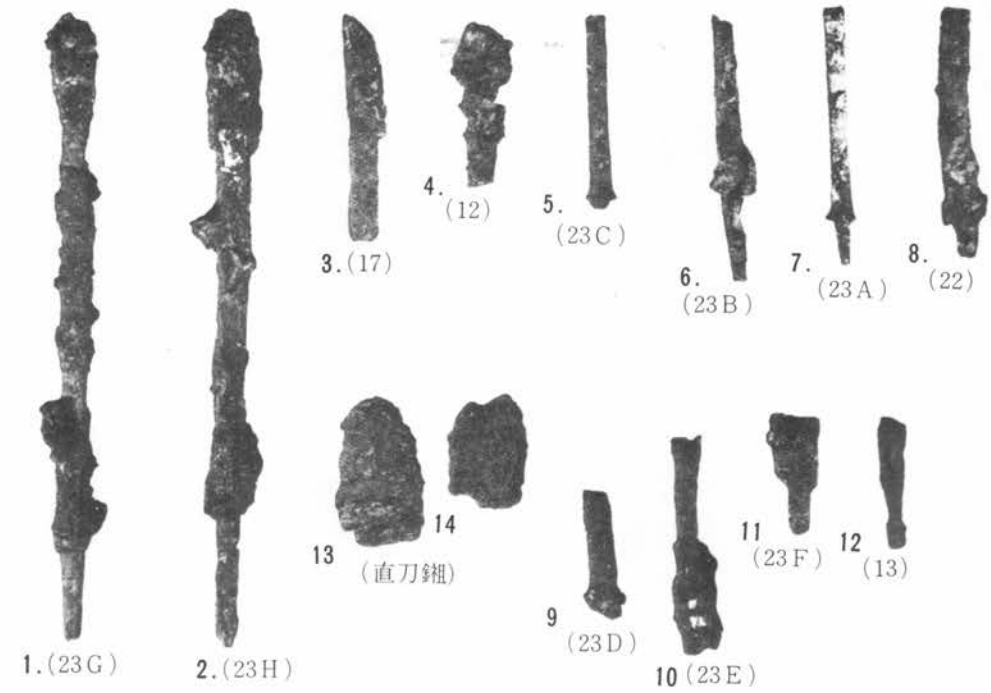
(7) (2)

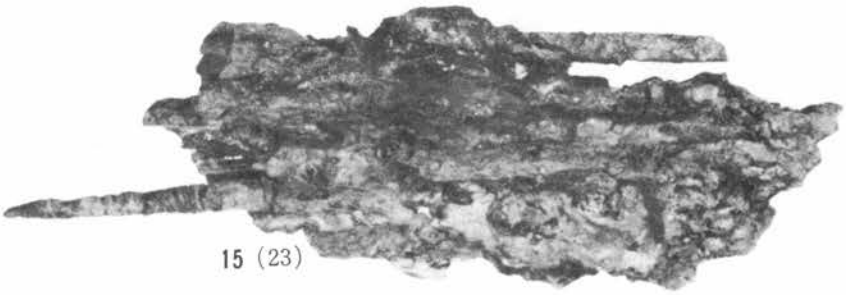
(5) 刀子片(21)

(6) 刀子(4)

(8) (21)

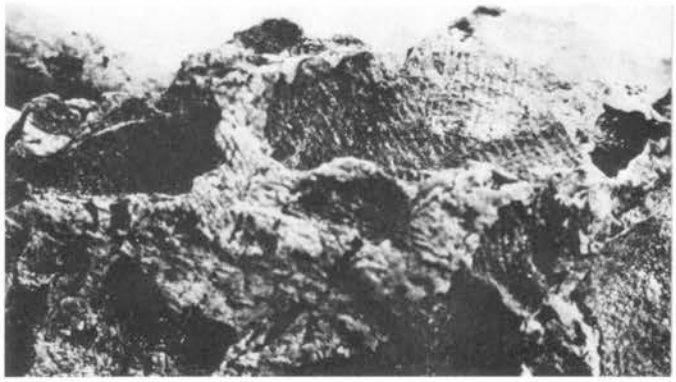
8 号墳主体部出土遺物—①





1～12.15（鉄鏃）

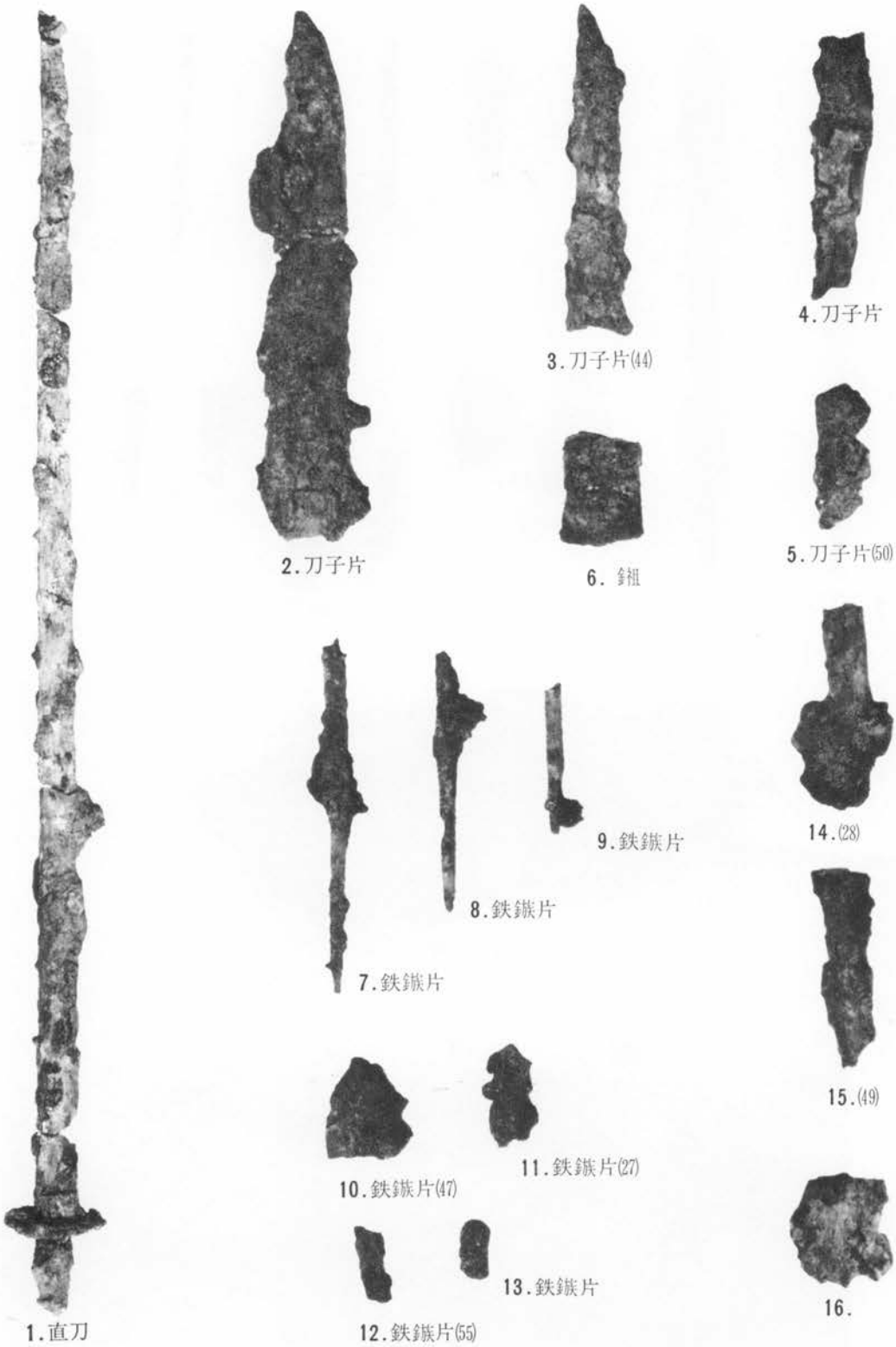
16.17（鉄鏃付着布目痕）



16

17

8号墳主体部出土遺物―②



9 号墳主体部出土遺物

14～16 鉄製品破片

1.直刀(a)

2 直刀(b)

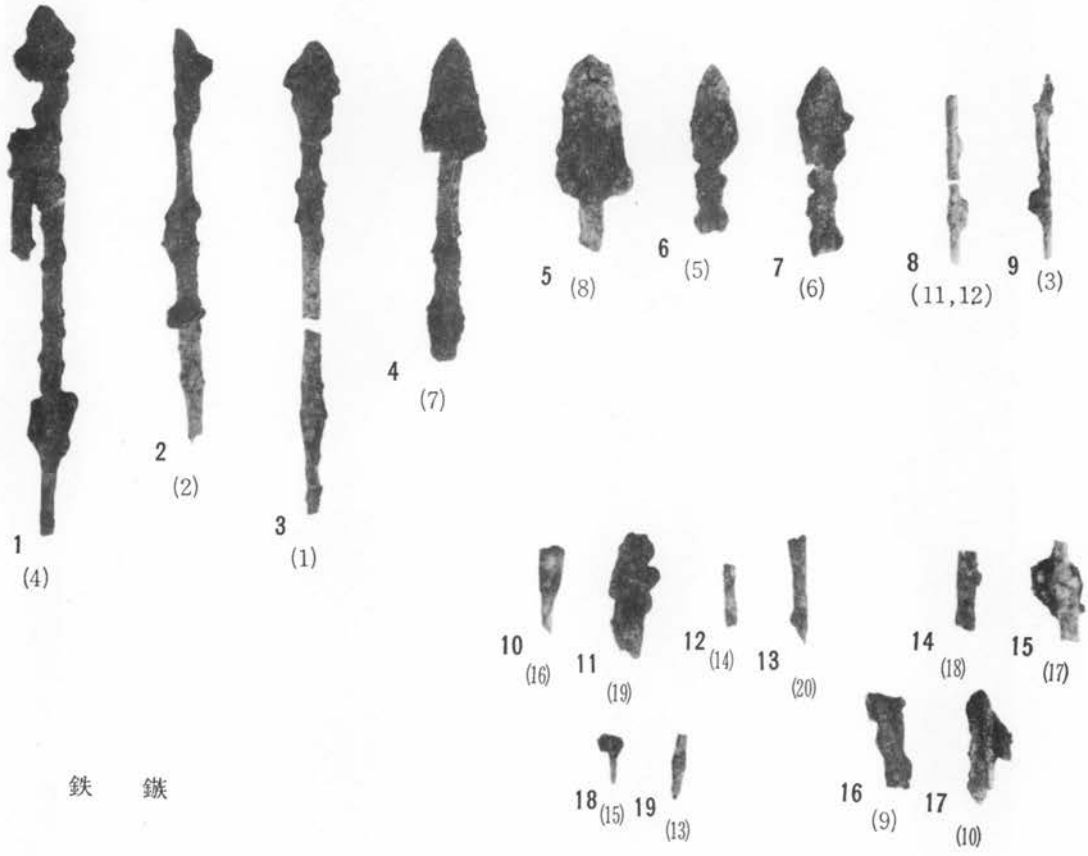
3.直刀(c)

4.刀子

(ツ バ)

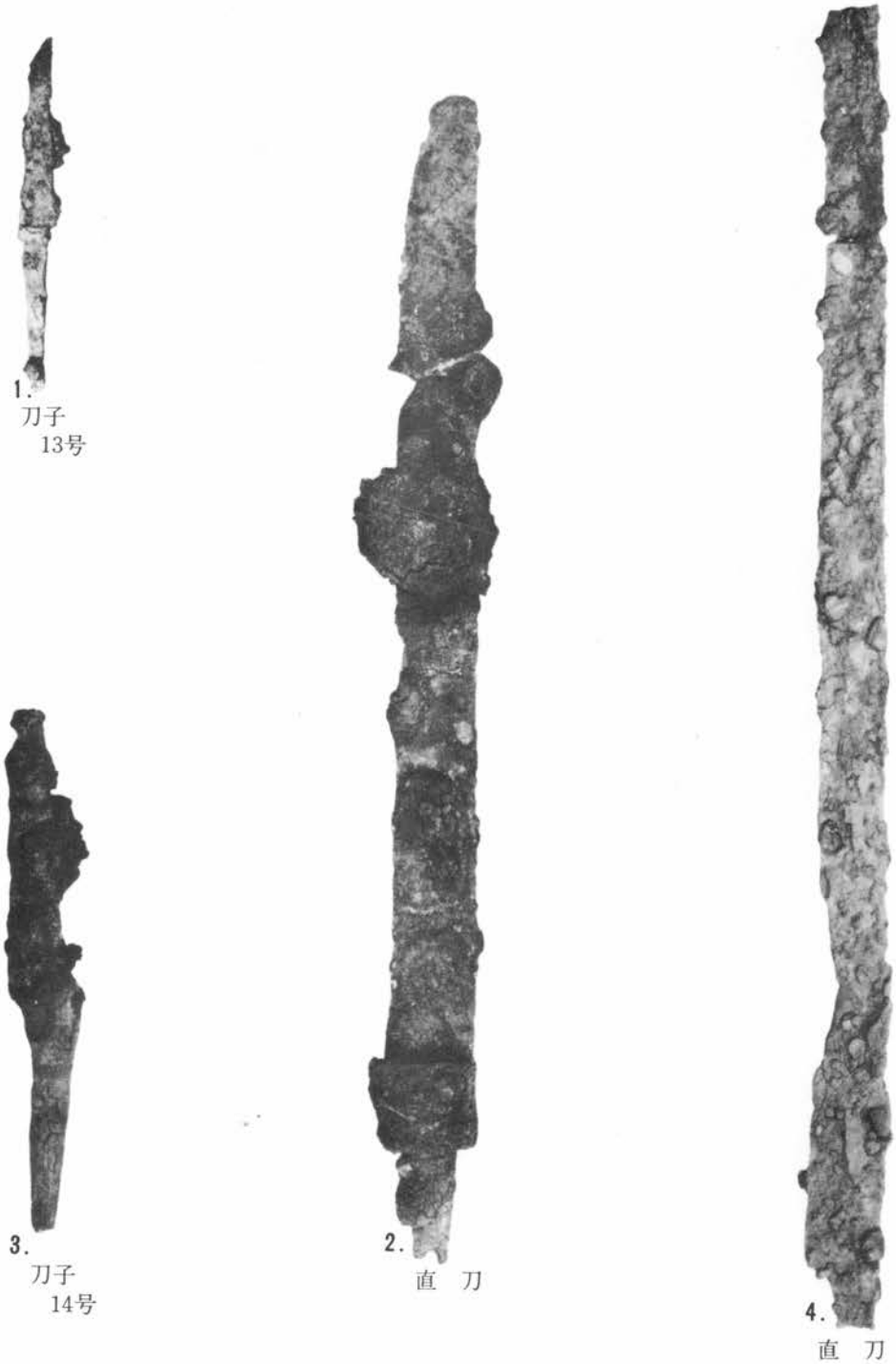
5.刀子

11号墳主体部出土遺物—①

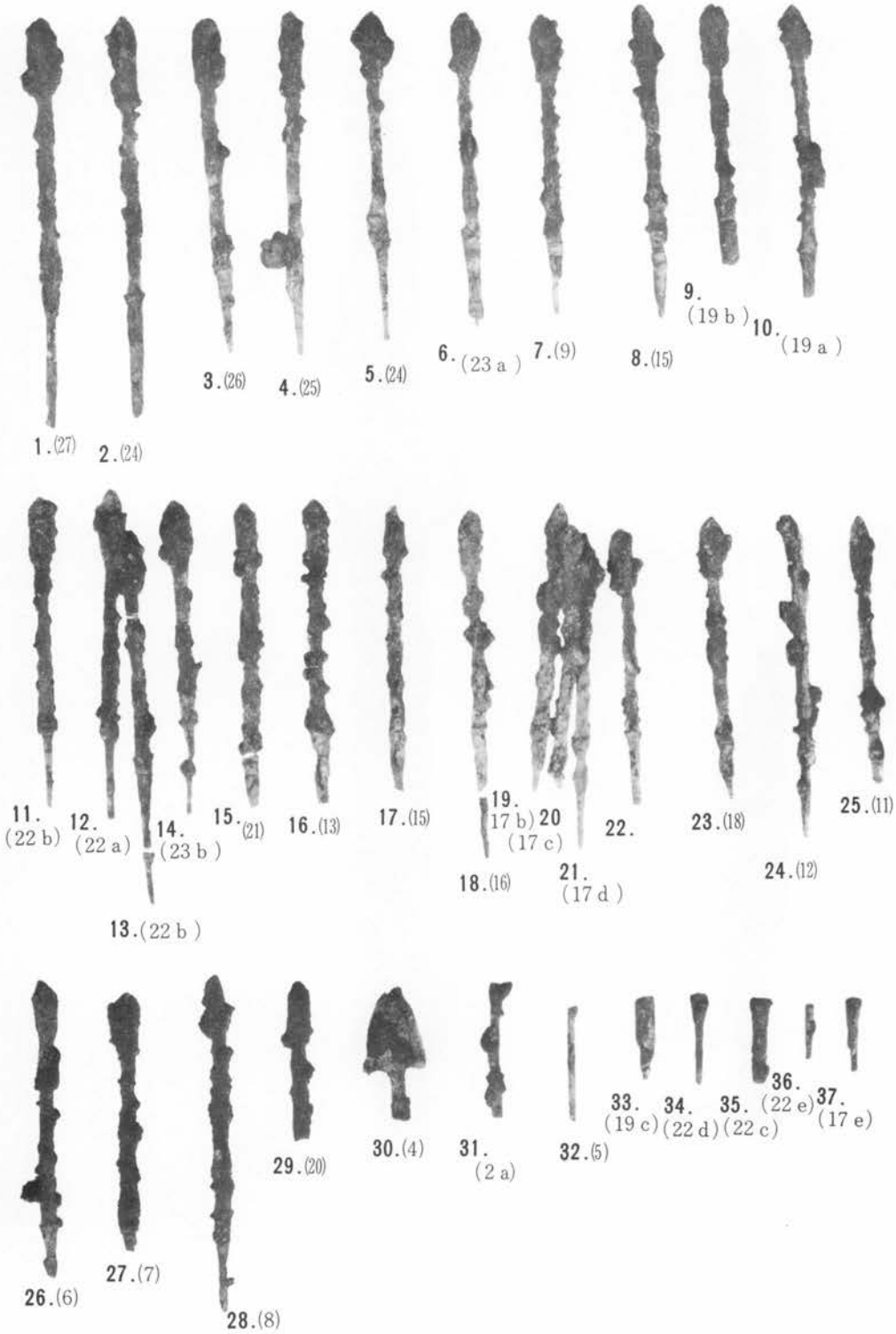


鉄　鏃

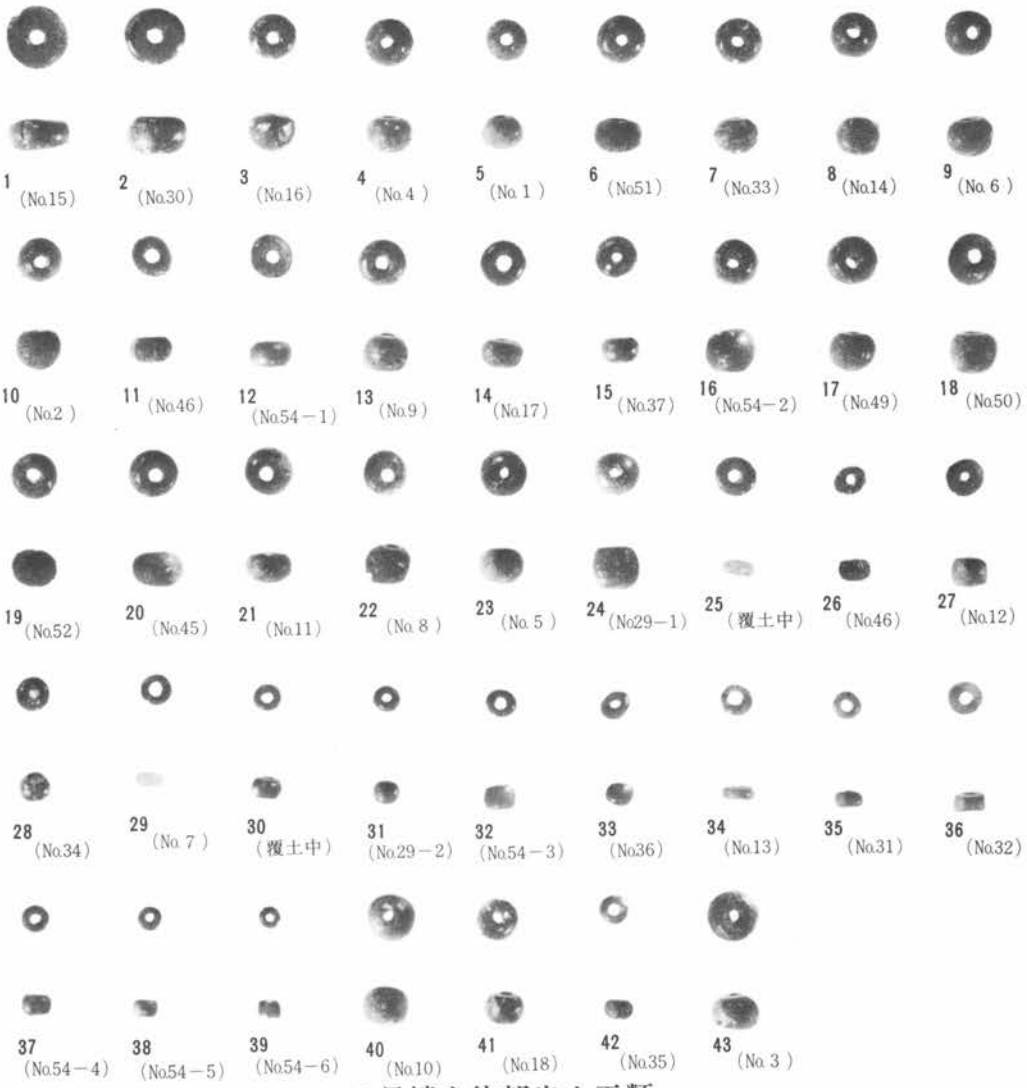
11号墳主体部出土遺物—②



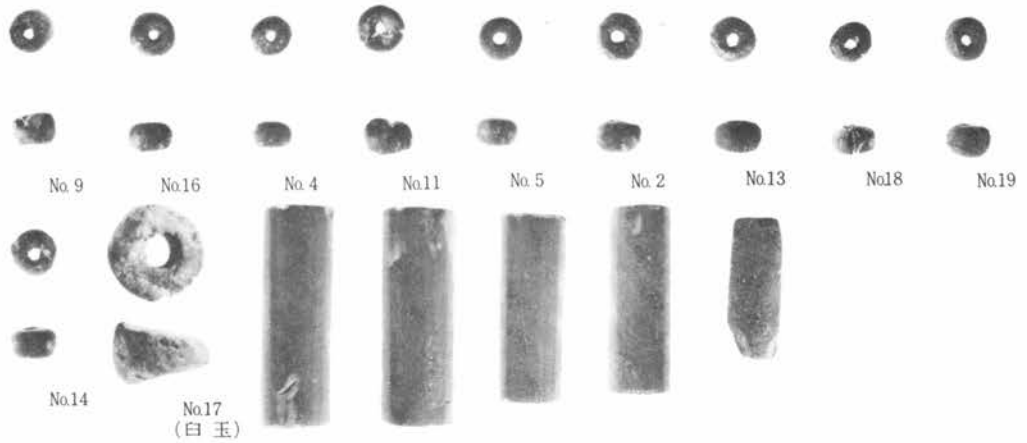
13号墳(1), 14号墳(2 ～ 4)主体部出土遺物



14号墳 主体部出土遺物 (鉄鏃)

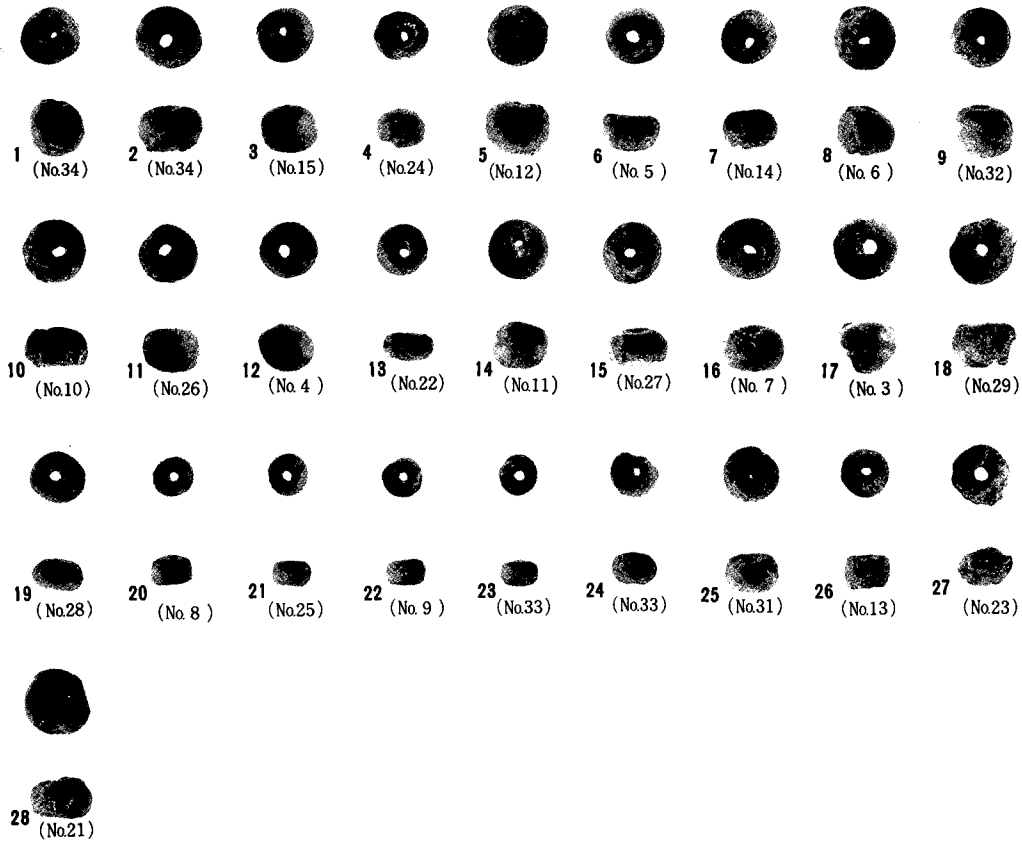


9号墳主体部出土玉類



13号墳主体部出土玉類

(原寸)



土坑－4 出土遺物(土製小玉)

1.(60F06－1)

4.(M58)

2.(60F06－2)

5.(M59)

3.(BTM)

6.(M50)

6′

7.(12BCM2)

8.(M15)

9.(6)

10.(M3)

11.(5) 12号

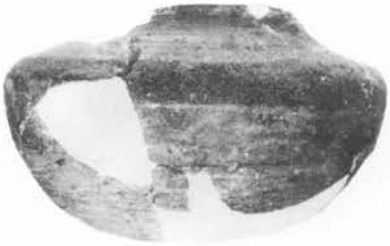
9号墳(1～6),11号墳(7～10),12号墳(11),周溝内出土遺物

1.(6)

2.(1)

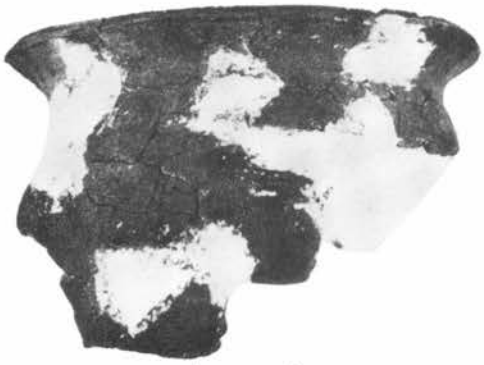
3.(2)

4.(7)



5.14号(M)

13号墳(1～4),14号墳(6), 周溝内出土遺物及び各遺構出土遺物



1.(158,193)

2.(42,44,43,45,68,110)

4.(5,9,79,82,83,102,131)

5.(190)

6.(1,6,7,12)

7.(158,159,161,162 / 148,145,160,171)

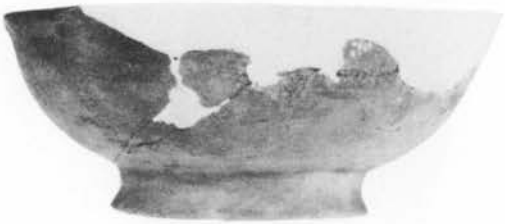
8.(66,22)

9.(179,197)

10.(191)

11.(191)

001号住居址出土遺物—①



1.(No.2,105)

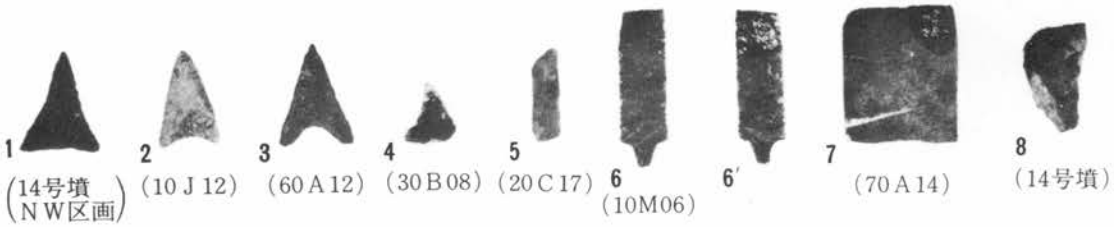
2.(No.153,154)

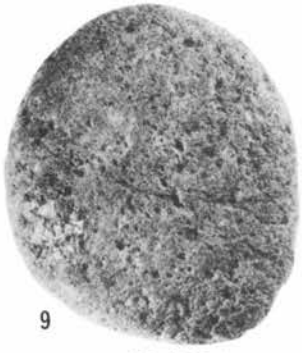
3.(No.4,133,134,52 118,86,14,16)

4.(183,167, 8,157,158 164,159,163,176,197)

5.(支 脚)

001号住居址出土遺物—②




9
20 J 15

10
20 N 10

11
8 号墳墳丘内

12
土 坑 5

13
010 遺 構

1. 11号(14)

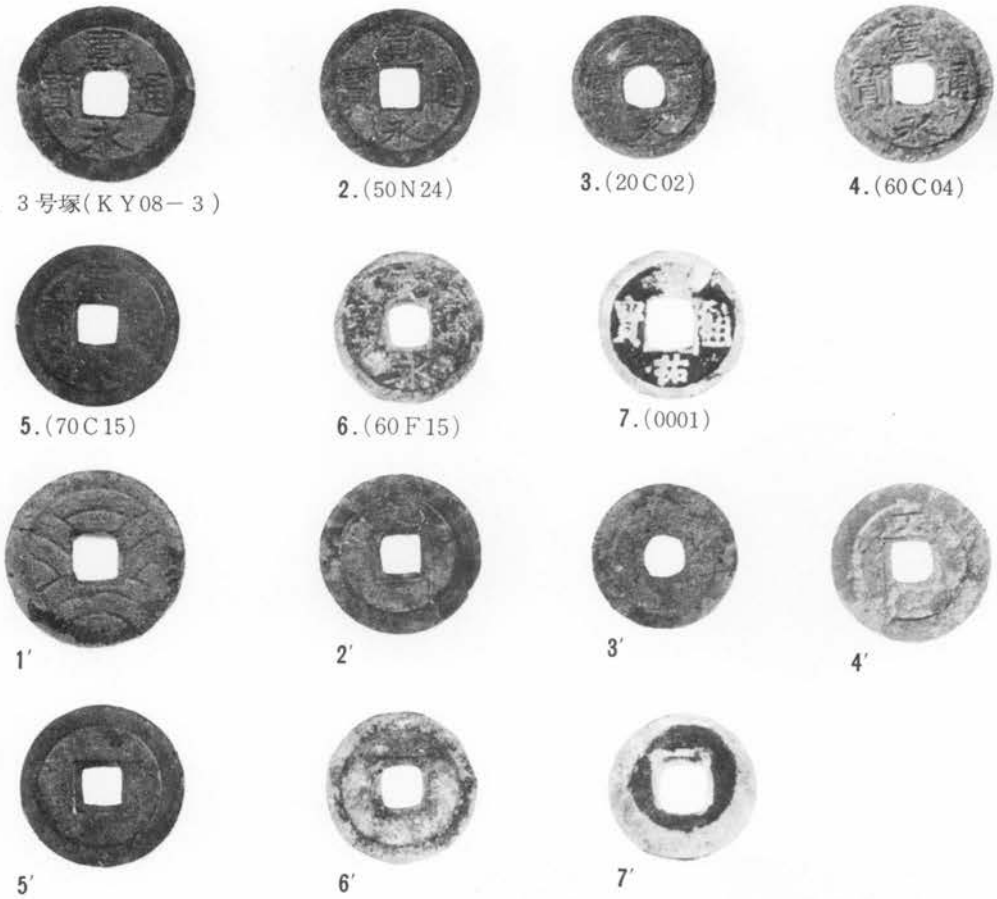
1′

1″

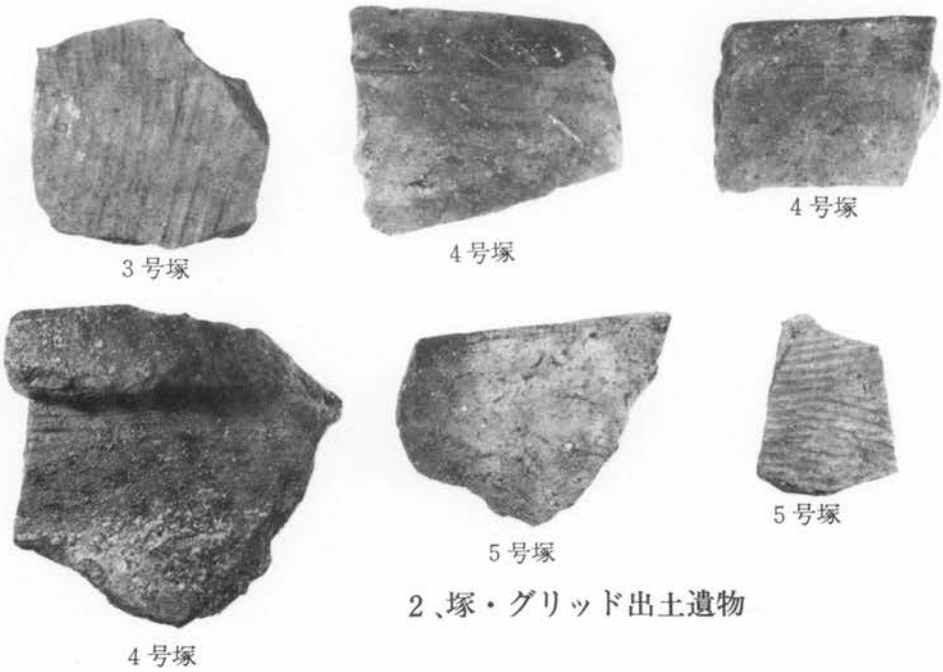
15
11 号 墳

16
土坑4(1,2)

各遺構グリッド出土遺物（石器、砥石、滑石製品、軽石、石類）



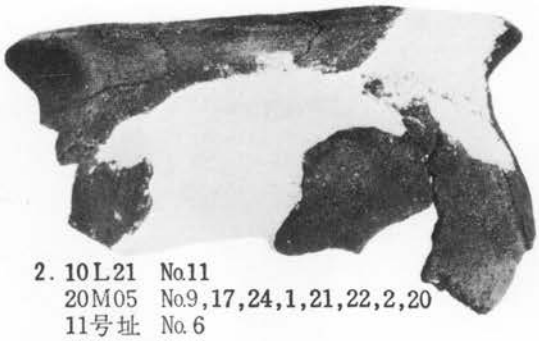
1 塚・グリッド出土遺物（古銭）



2、塚・グリッド出土遺物

10号墳出土遺物（須恵器片）

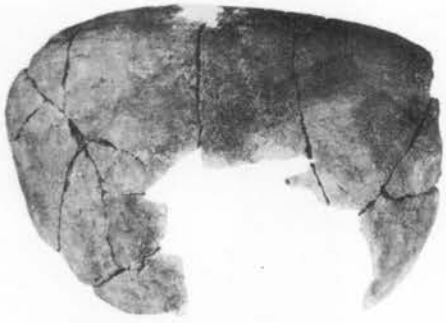
1. 10 J 13−1,2
10 J 12−1,2



2. 10 L 21 No.11
20 M 05 No.9,17,24,1,21,22,2,20
11号址 No. 6
10 N 25 No. 7
10 M 24 No.18
20 M 04 No.18

3. 20 M 05 No.17
20 J 14 No. 1
12号坑周構 No. 3

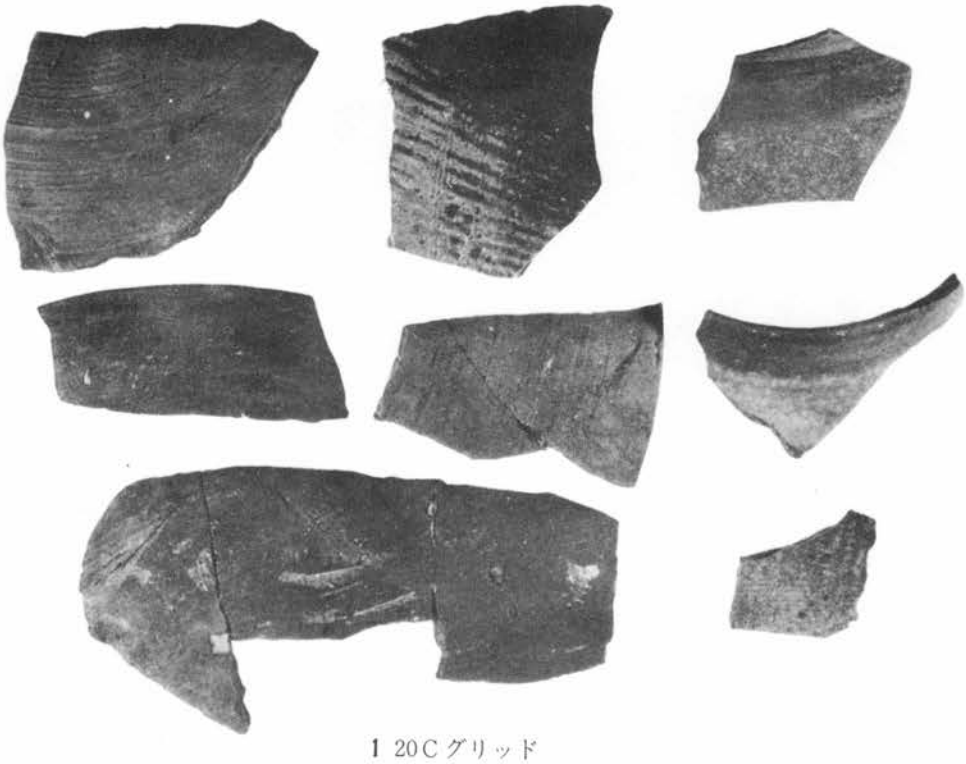
4. 10 B 12−1,2,3
D O −05− 3



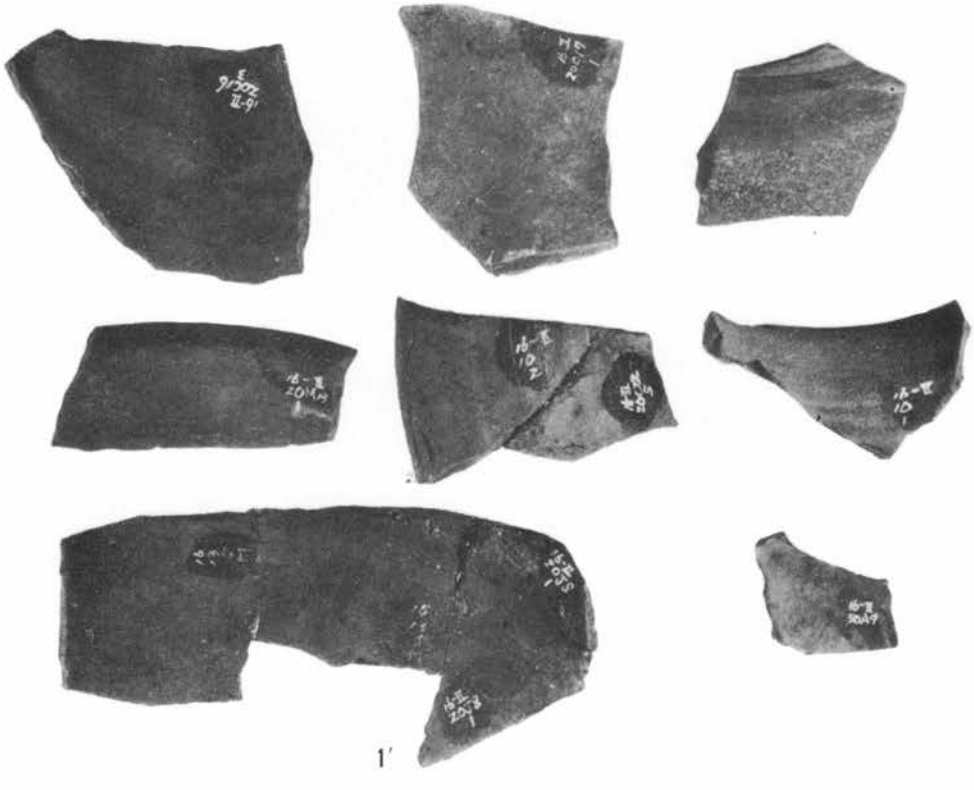
5. 10 B 12−1,2
D O −05− 2

6. 70 A 70 No. 3

グリッド出土遺物



1 20Cグリッド



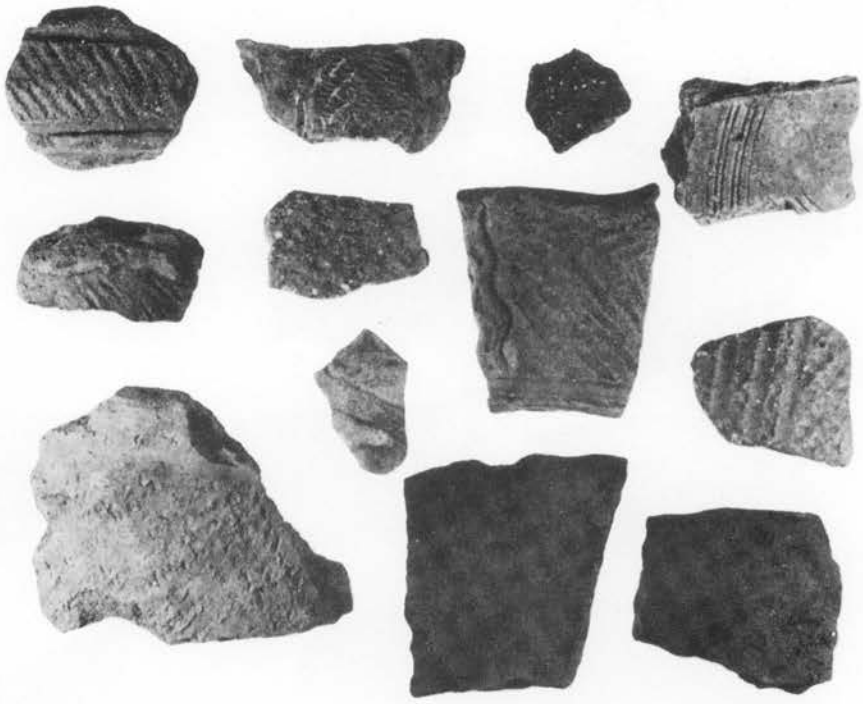
1′

グリッド出土遺物（須恵器片）

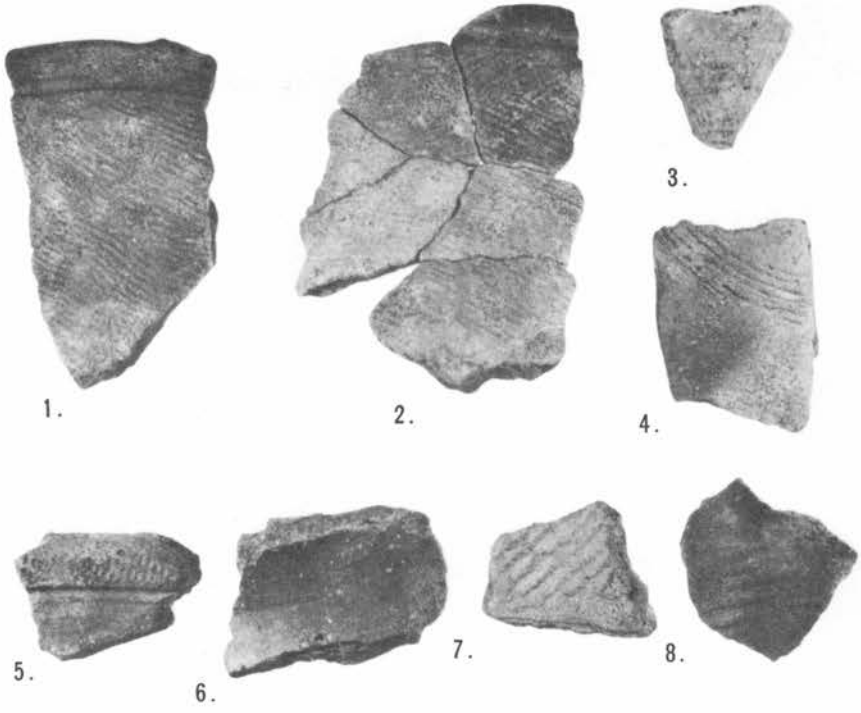
1

2

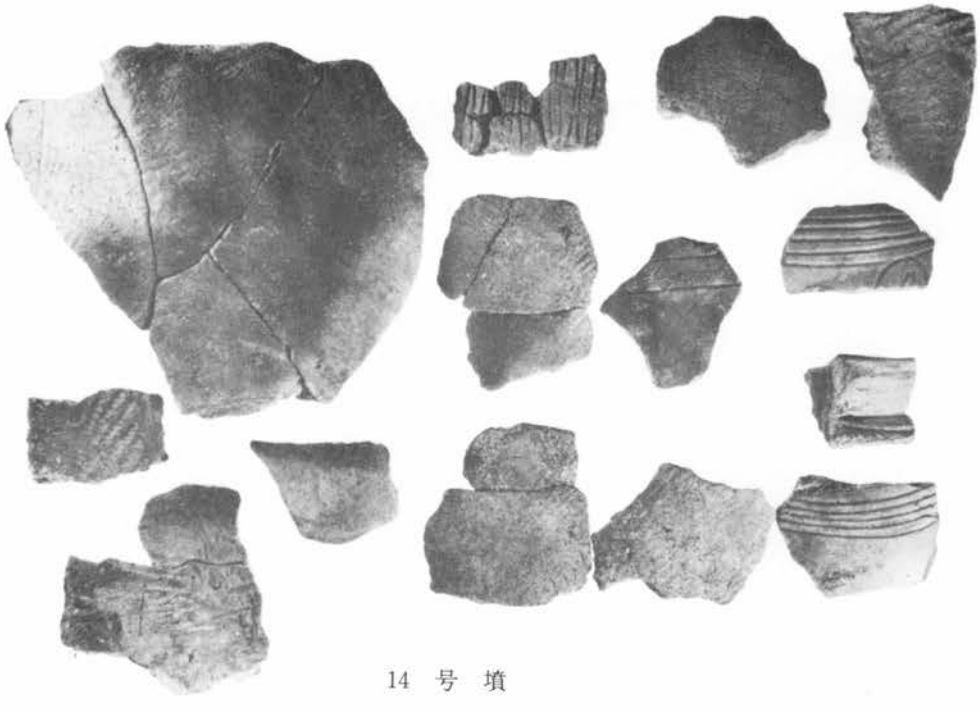
2′



9号墳出土遺物（縄文土器）

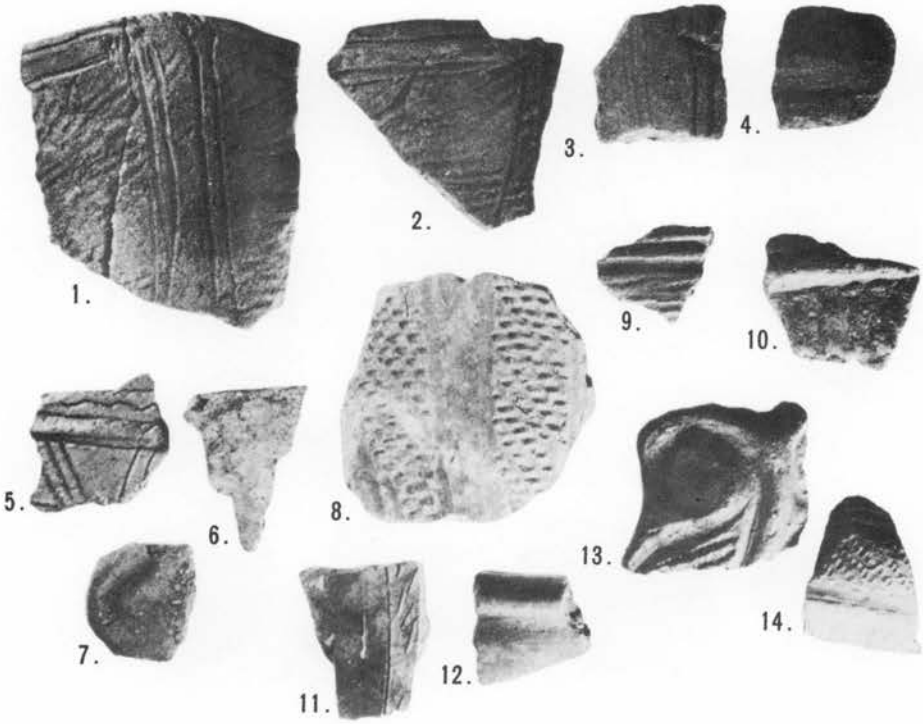


11号墳(1～3).12号墳(4～6).13号墳(7,8)

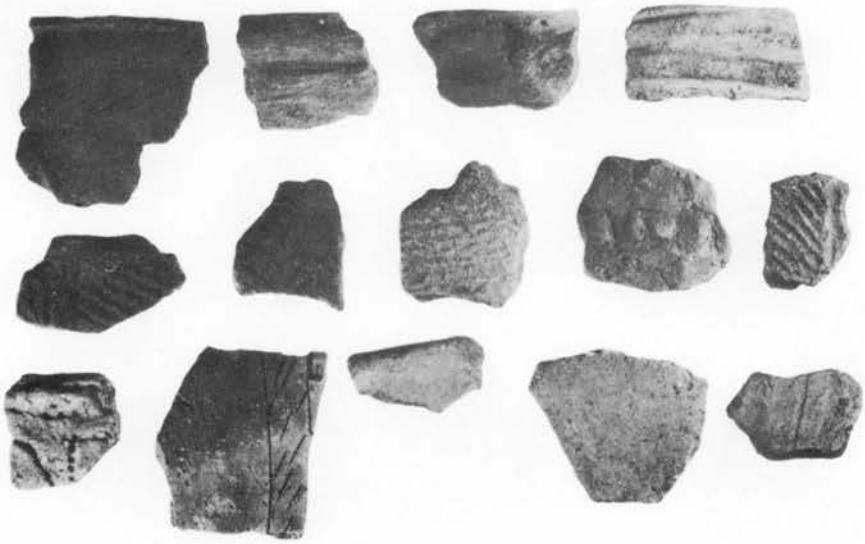


14 号 墳

11号墳・12号墳・13号墳・14号墳出土遺物（縄文土器）



各グリッド出土土器(縄文土器) Lグリッド(1～4). Jグリッド(8,9). Bグリッド(11～14). Dグリッド(10). Eグリッド(5～7).



Bグリッド出土土器

グリッド出土遺物（縄文土器）

1. ヘラ削り　　001号　－10

001号－③

2. 糸切り　　001号－⑩

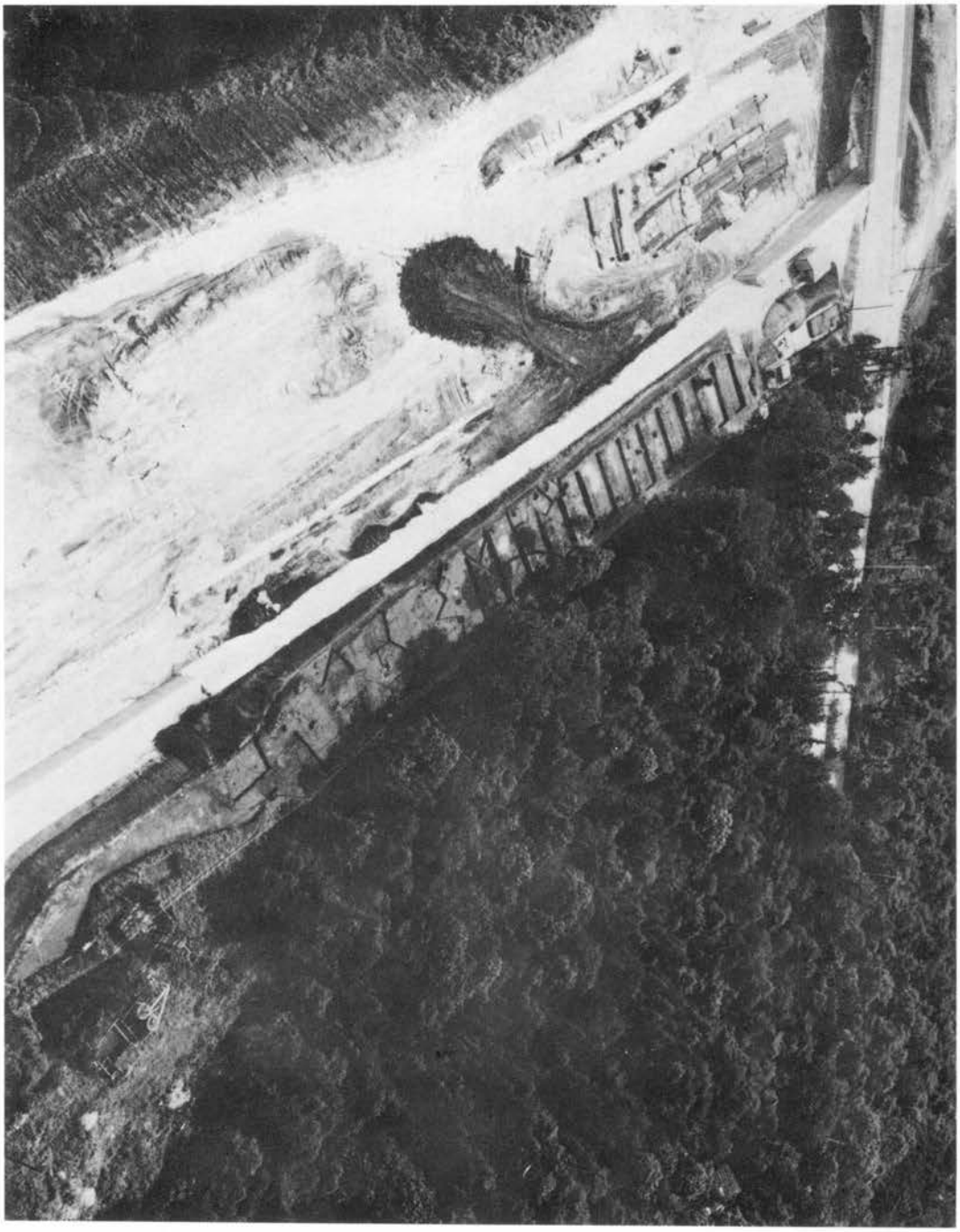
001号－⑥－①

11号－⑥

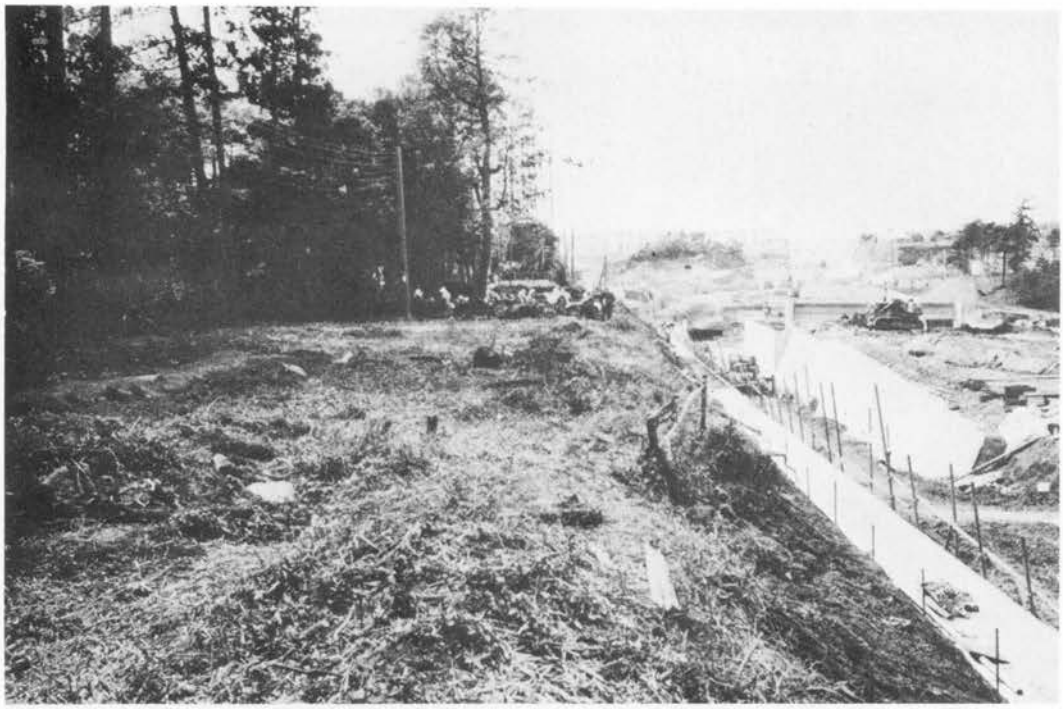
土器底部

東寺山・戸張作遺跡(海老)
(第3次調査)

写　真　図　版



東寺山戸張作遺跡（海老）全影



1. 遺 跡 地 近 影

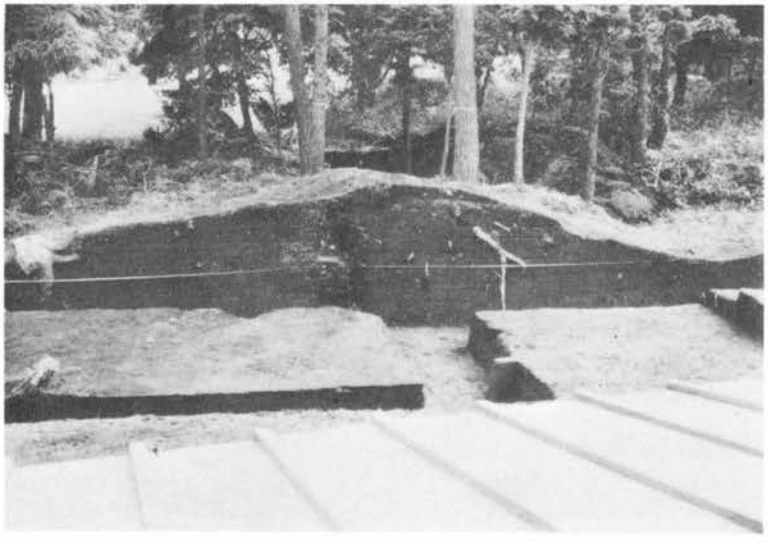
2. 遺跡地全影と工事

東側調査区域（C, D, Eグリッド）

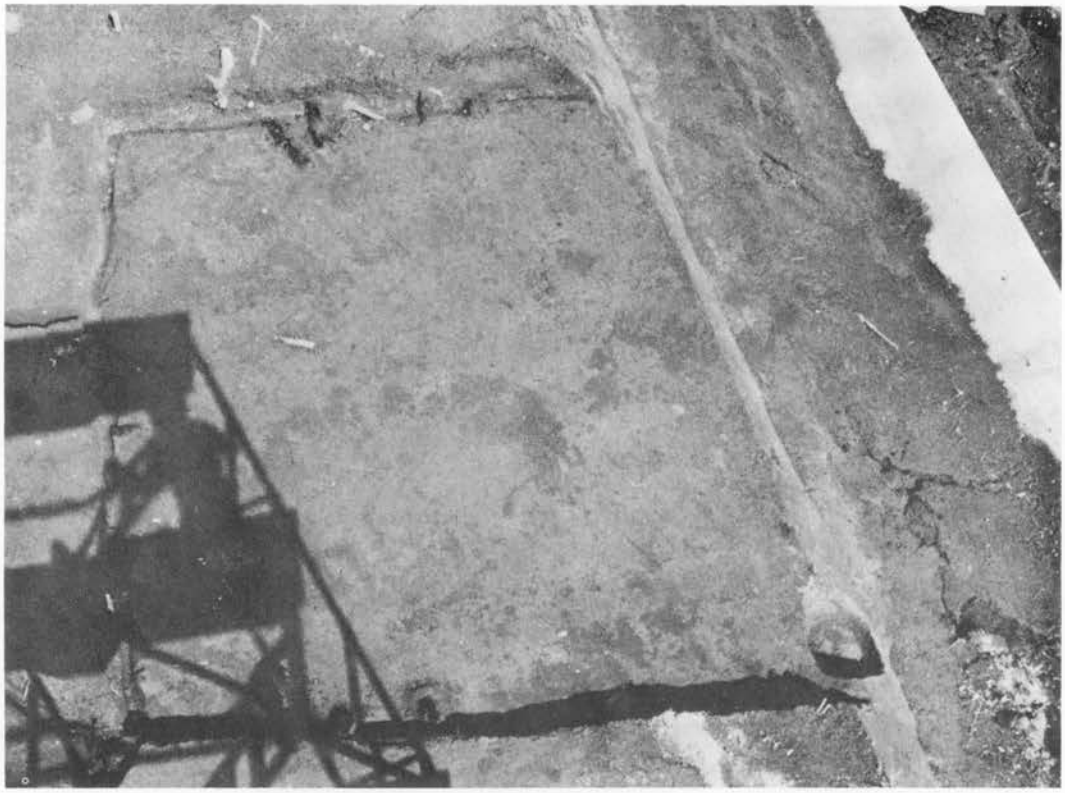
西側調査区域（竪穴住居址・俺体壕全影）

1. 第1号塚調査前影

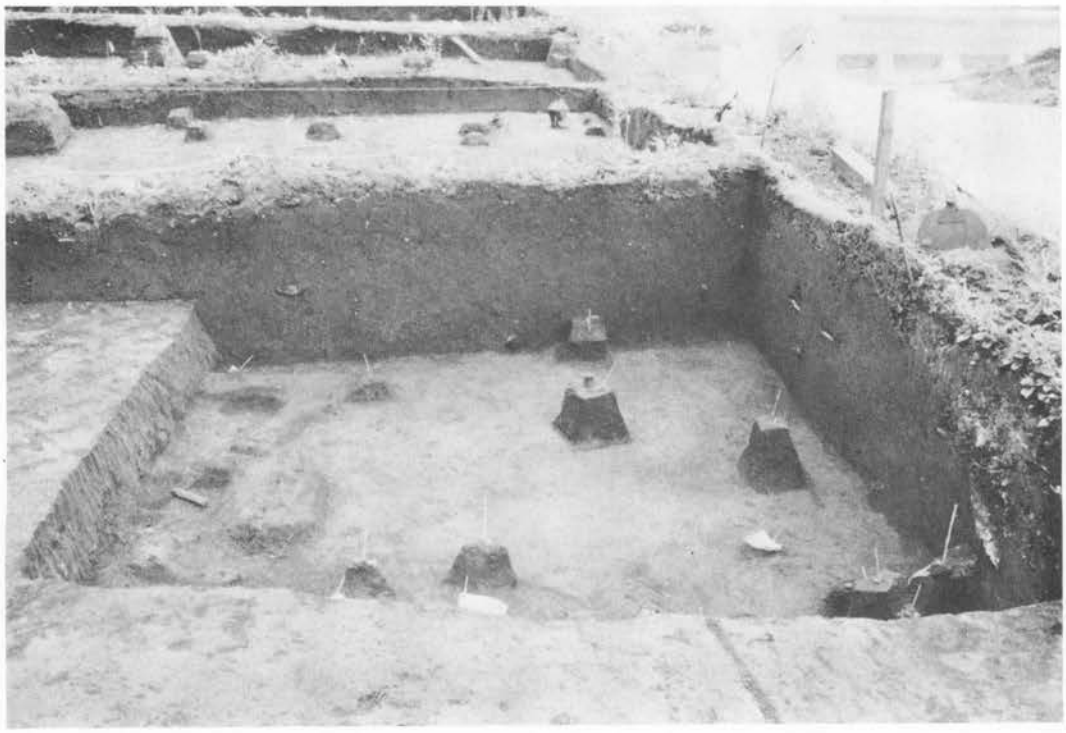
2. 第1号塚土層断面影
(北向)



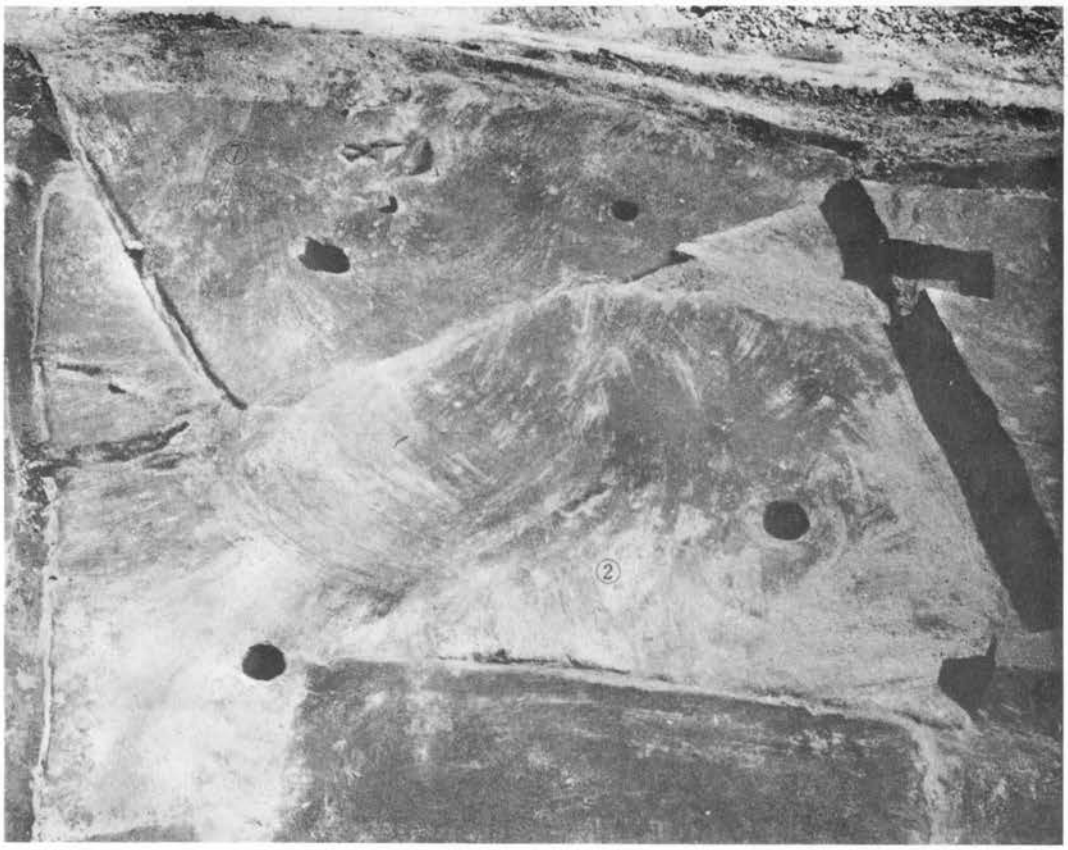
3. 第1号塚マウンド切断影(前調査のトレンチ痕が見える)



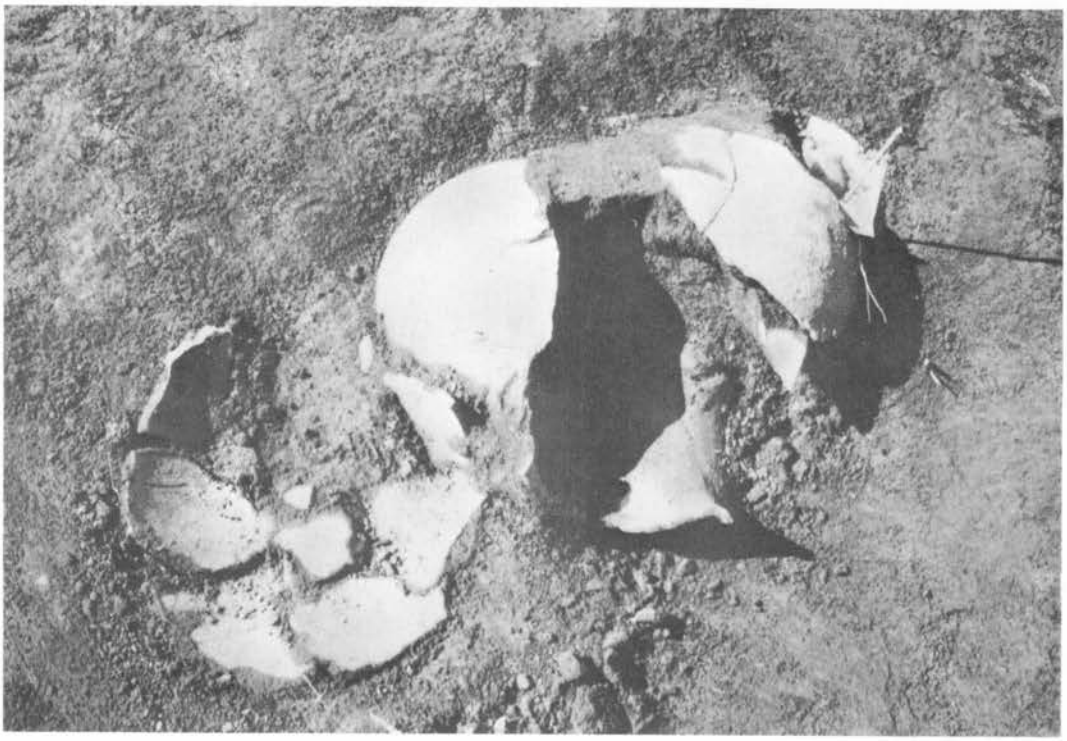
1．第１号住居址全影



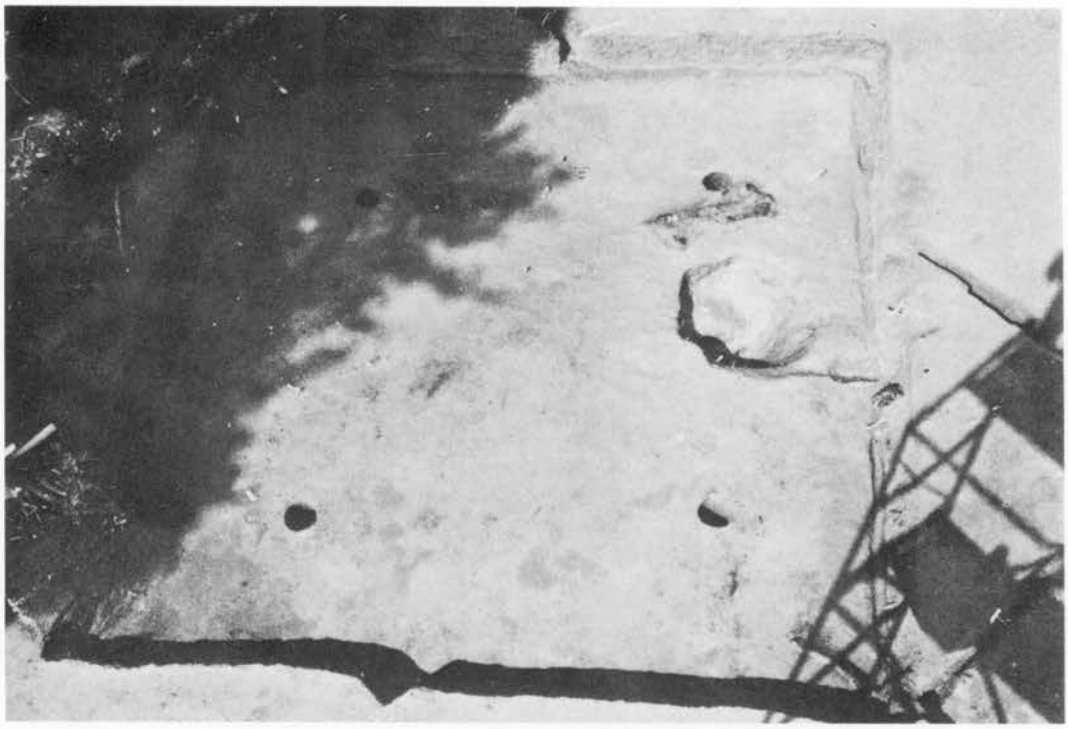
2．第１号住居址覆土断面影



1．第２号・７号住居址全影

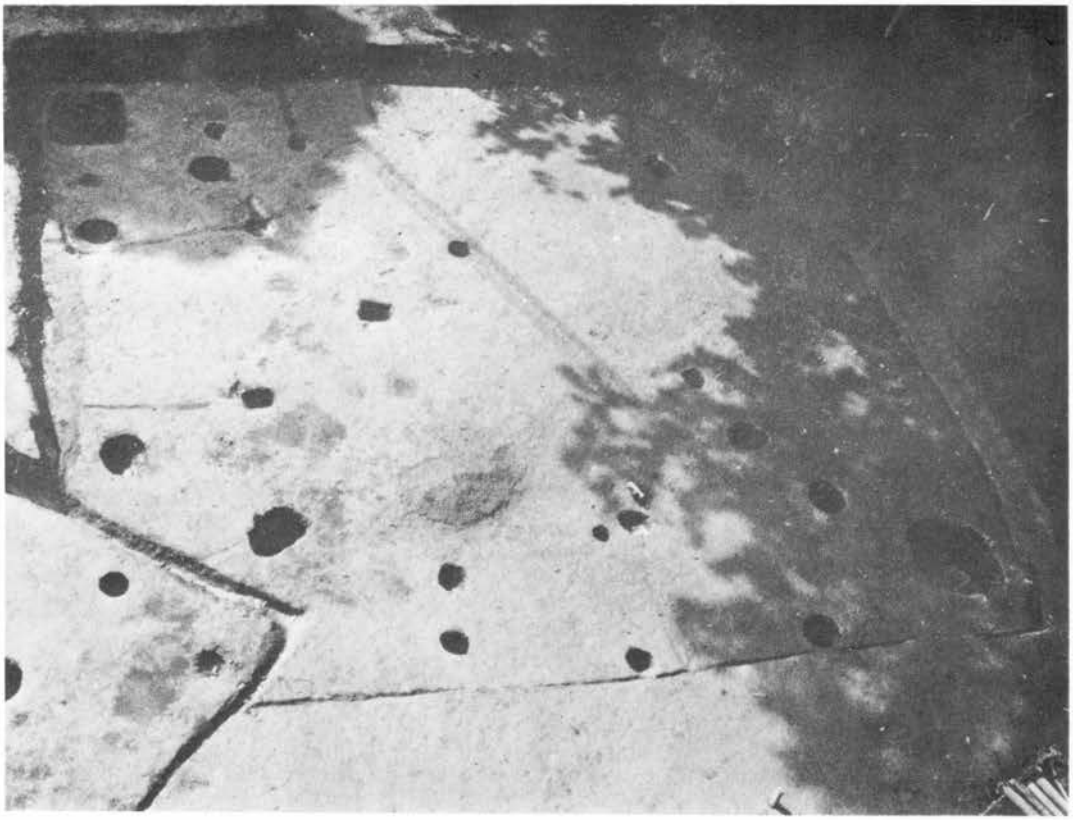


2．第２号址遺物出土状況影

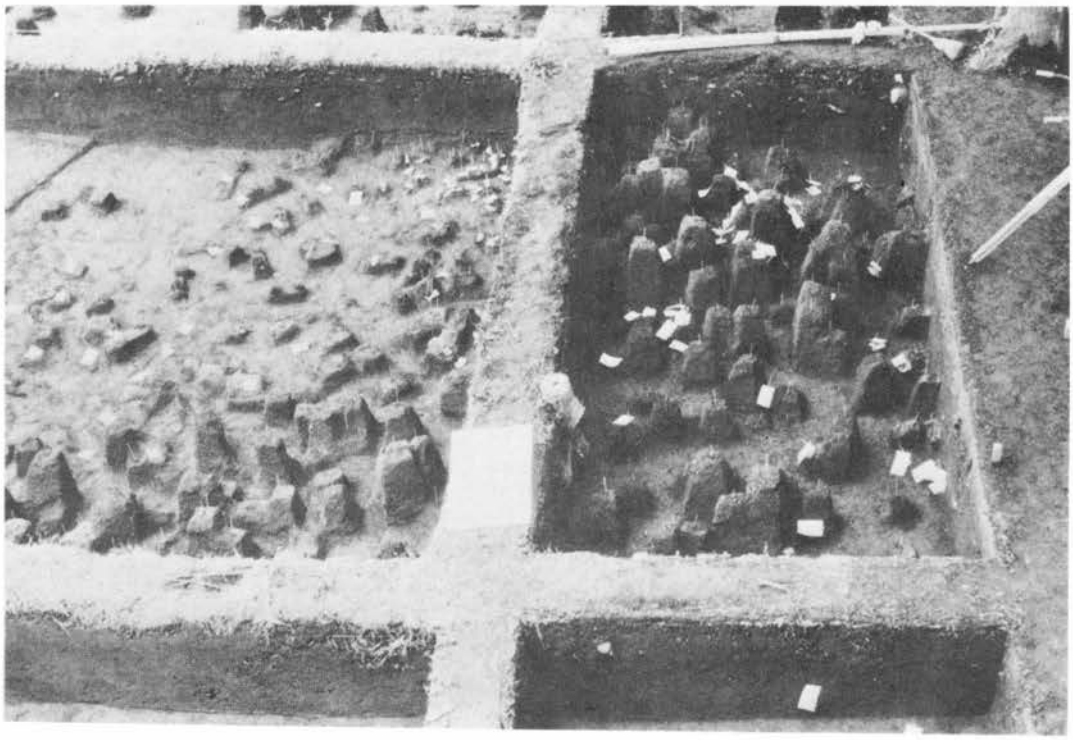


1．第3号住居址全影

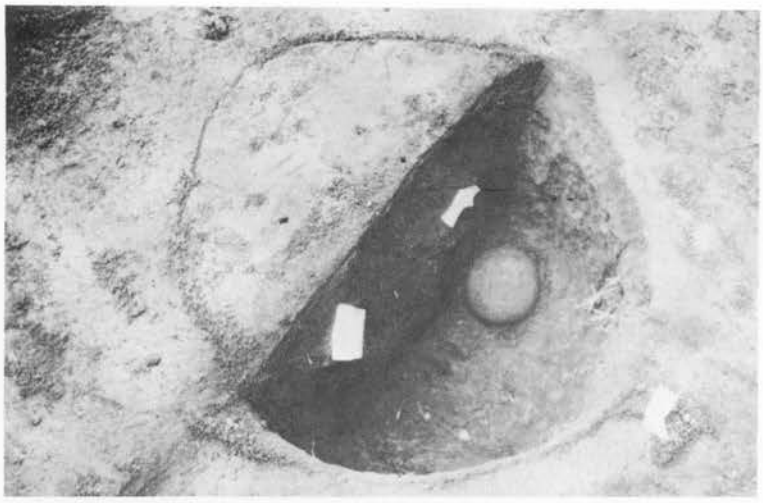
2．第2号址切断俺体壕影



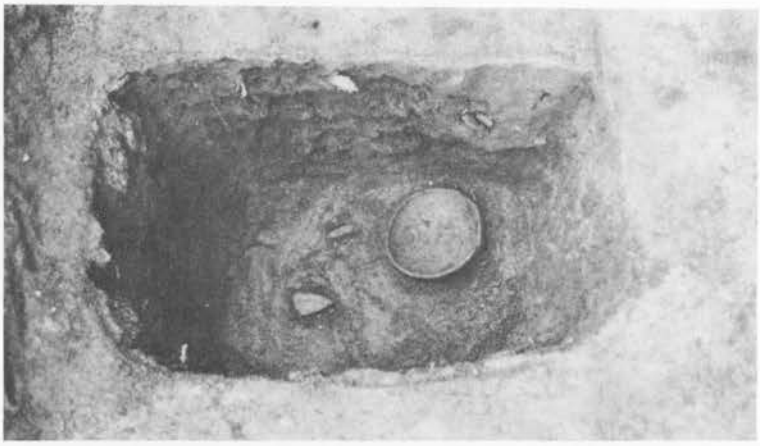
1．第4号址全影（工房址）



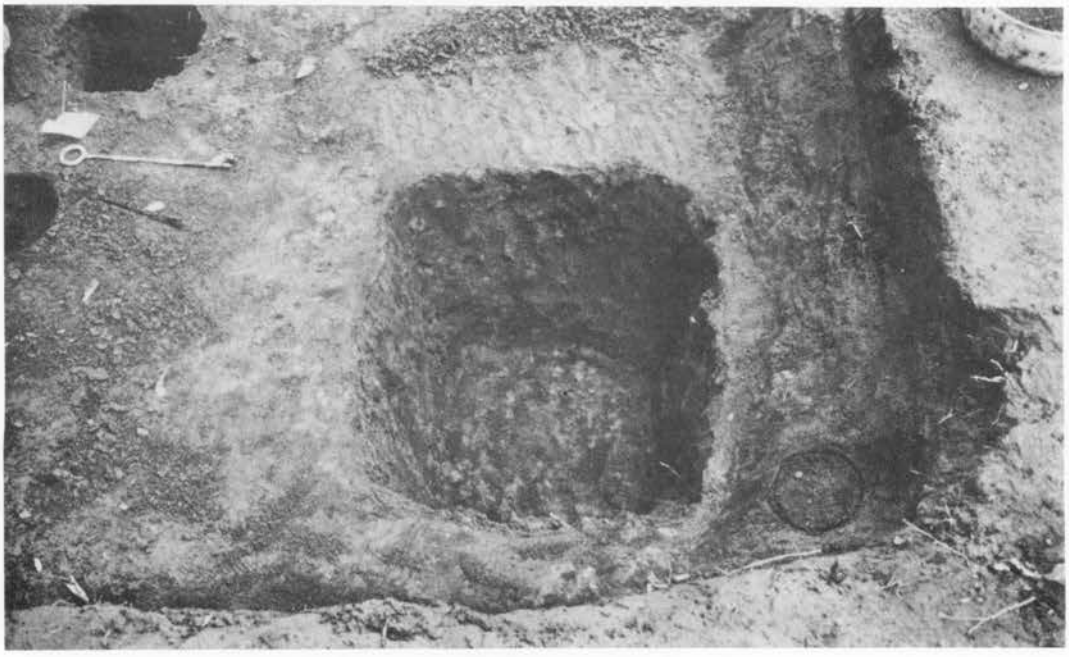
2．石片分布状況影（石製品他）



1. 第4号址貯蔵穴
（工作用ピット）—A影



2. 第4号址貯蔵穴
（工作用ピット）—B影



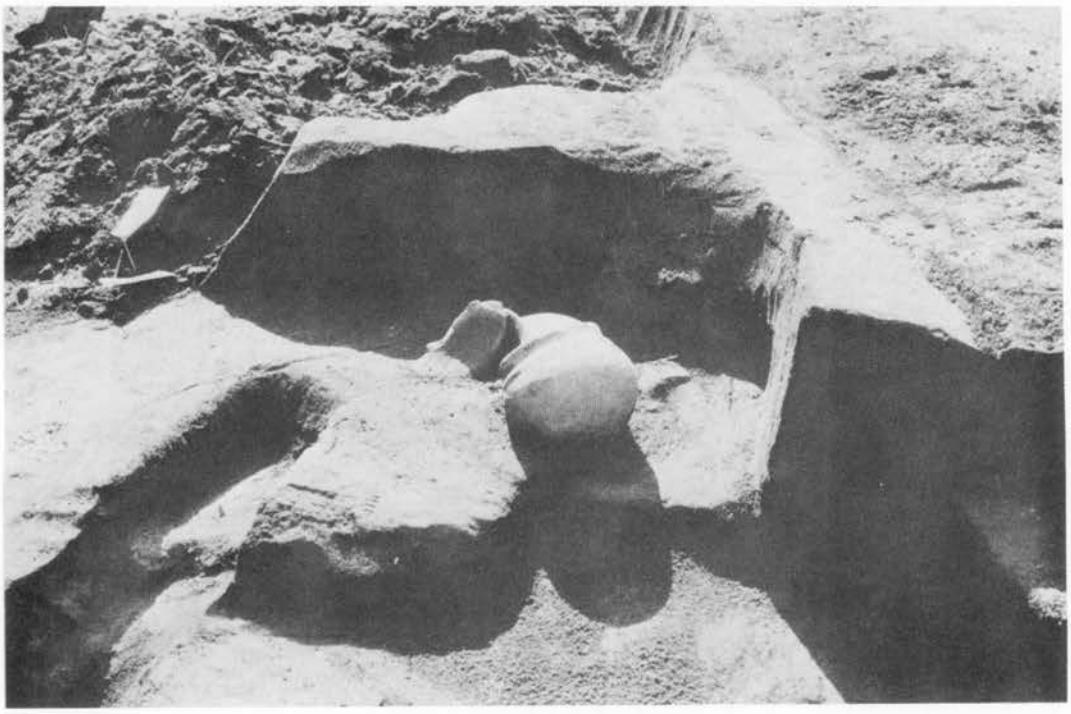
3. 第4号址貯蔵穴—B影

1. 第4号址石製品等
出土状況影(原石材他)

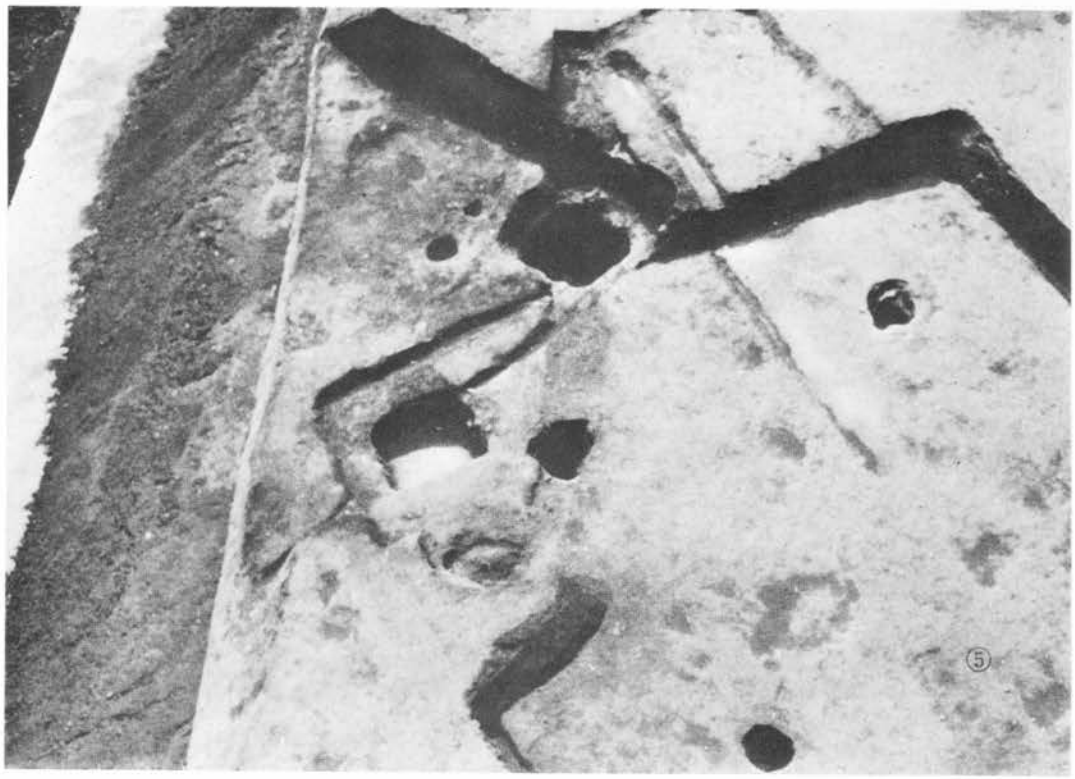
2. 第4号址鎌身・高坏脚部
出土状況影

3. 第4号址勾玉・石製模造品等
出土状況影

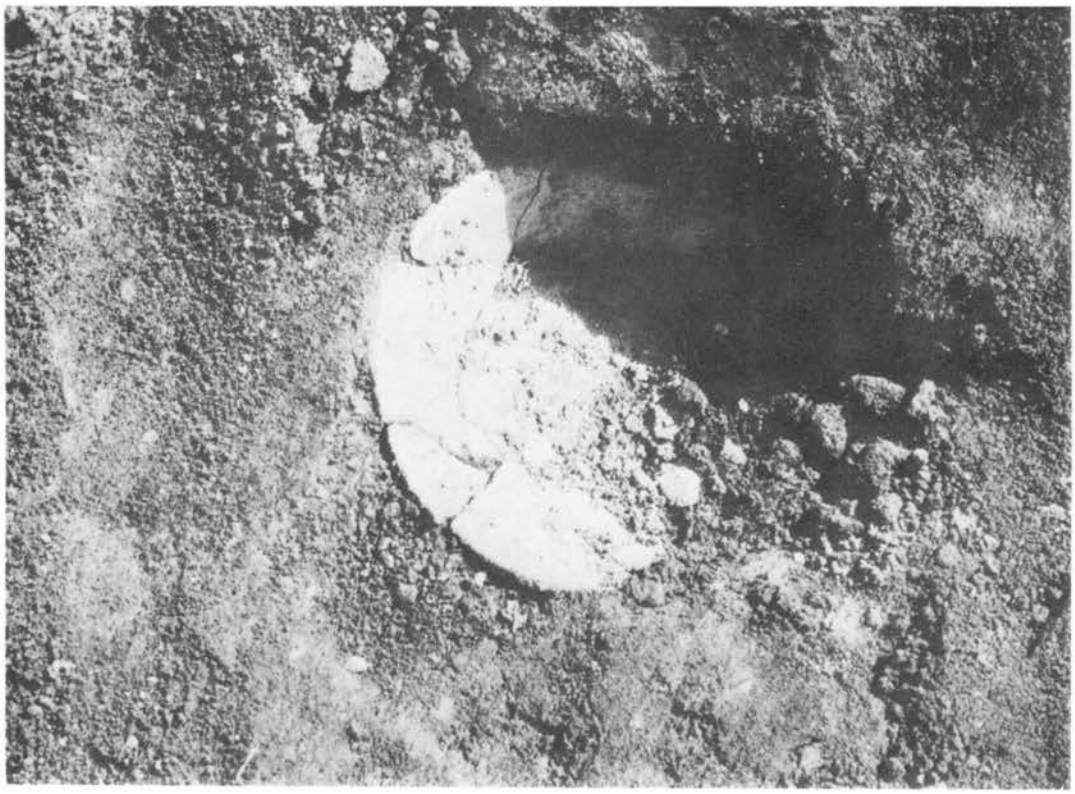
1．第5号住居址全影



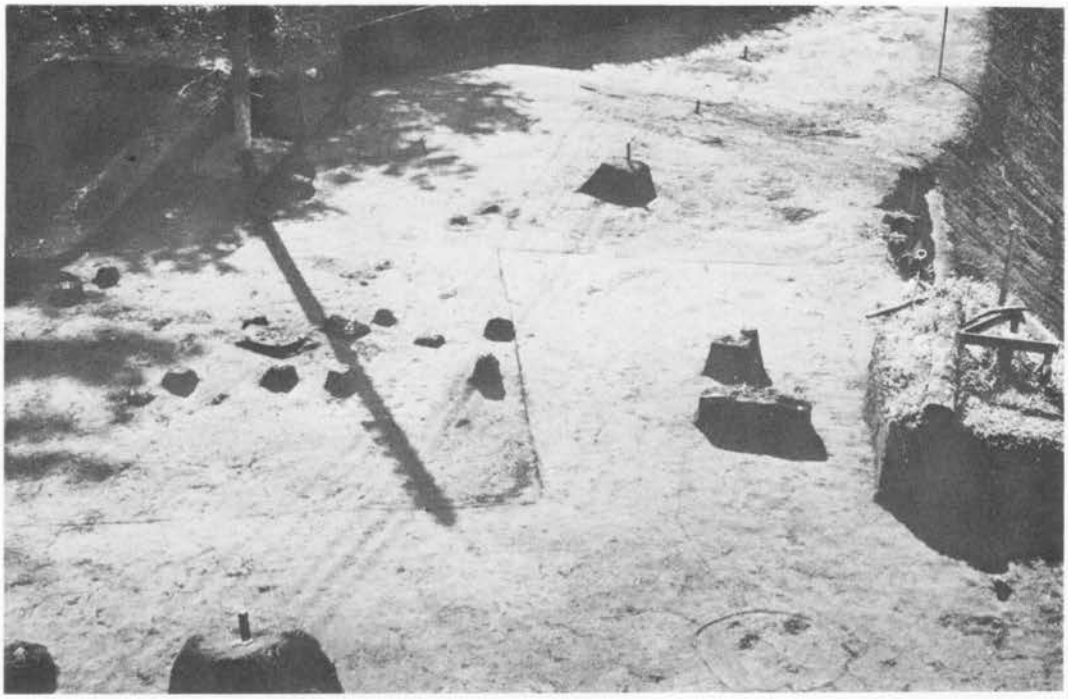
2．第5号住居址カマド内遺物出土状況影



1．第６号住居址全影（５号住居址による切断）⑤



2．第6号住居址遺物出土状況影

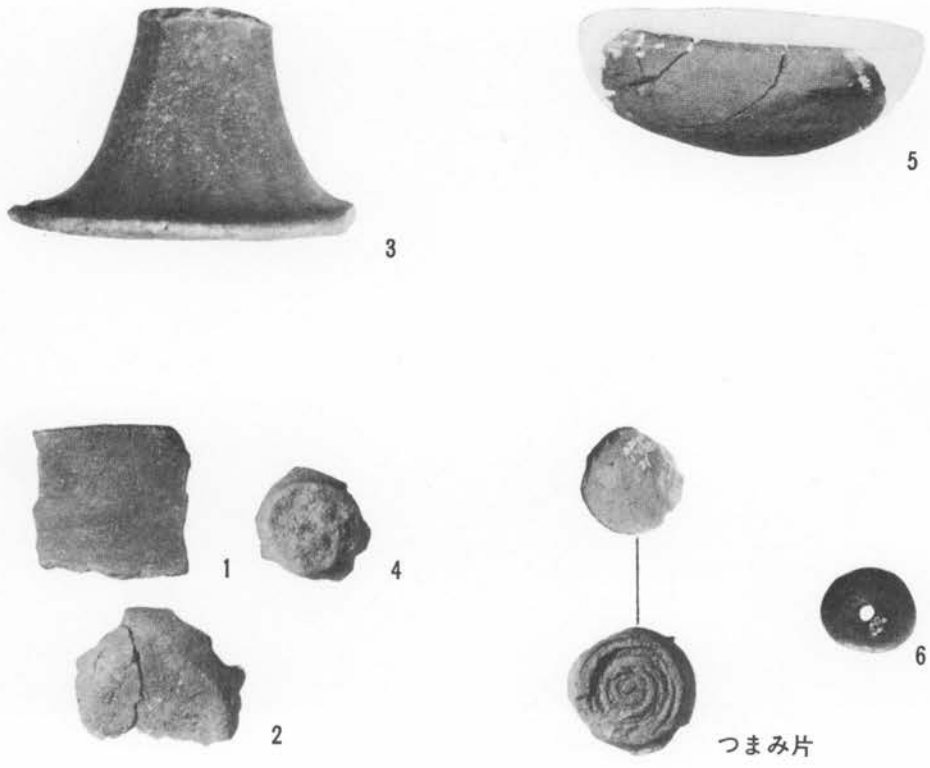


1．第８号・第10号住居址全影（住居址確認面影）

2．第８号・10号住居址全影

1．第５号住居址貯蔵穴、カメ出土状況影

2．第10号住居址　須恵器杯出土状況



第１号住居址出土遺物（挿図12図）

土製品

1

2

3

4

5

6

7

8

9

11

10

19

20

14

18

13

⊕印赤彩土器

17

12

15

16

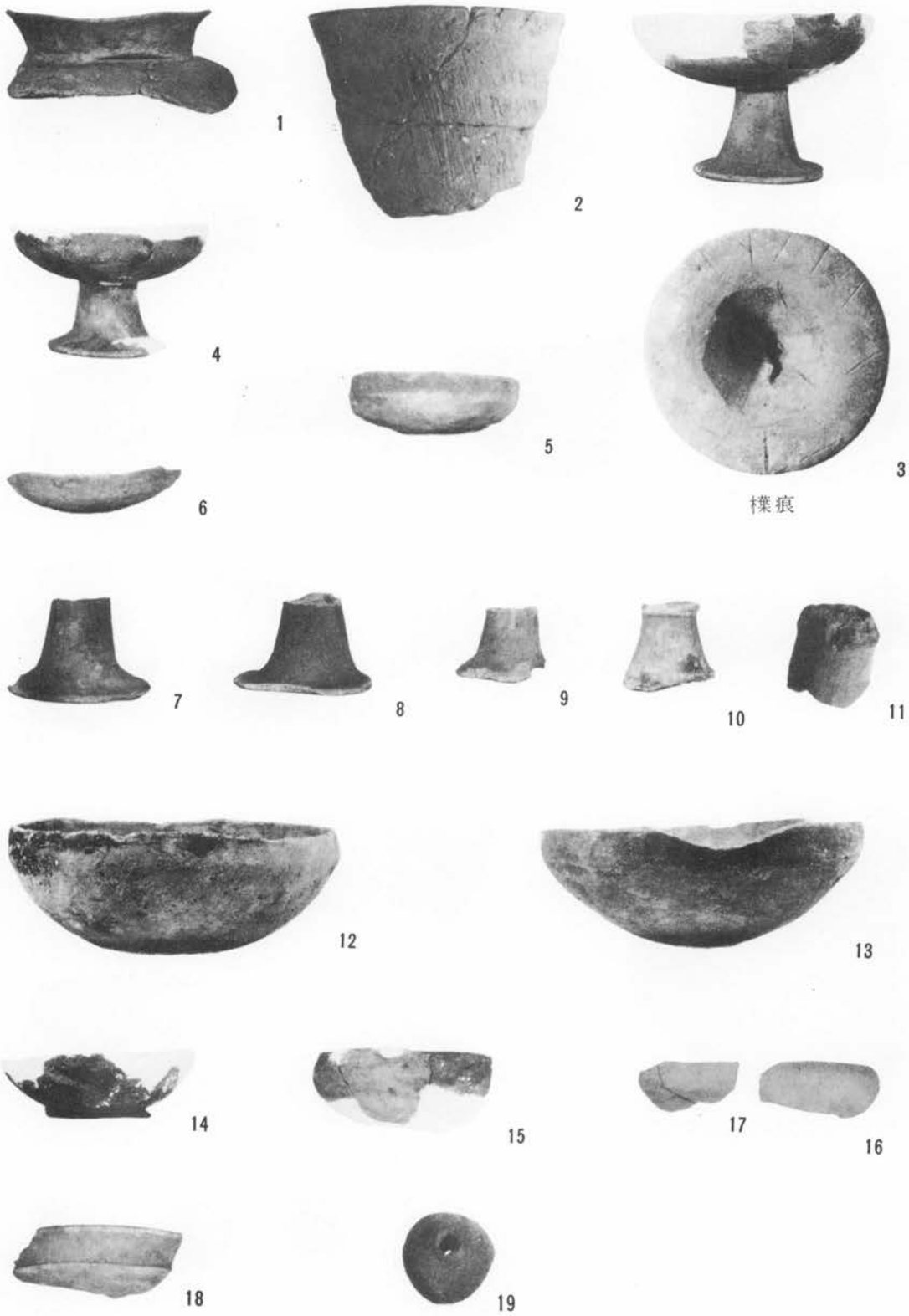
1

2

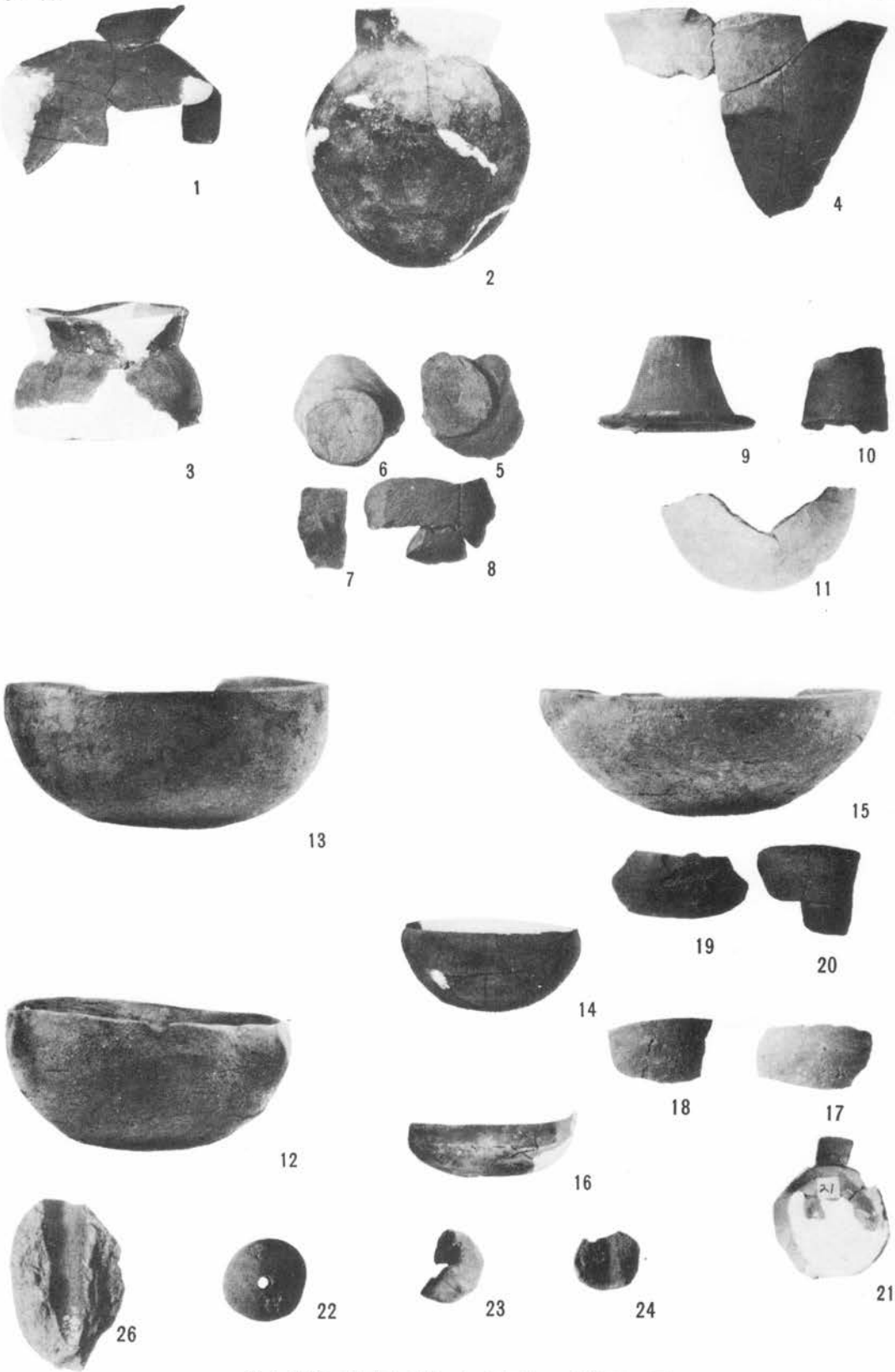
3

4

第２号住居址出土遺物（挿図15･16図）



第３号住居址出土遺物（挿図20図）



第４号住居址出土遺物（工房址）…（挿図27図）

1

2

3

4

5

6

7

8

11

12

9

10

13

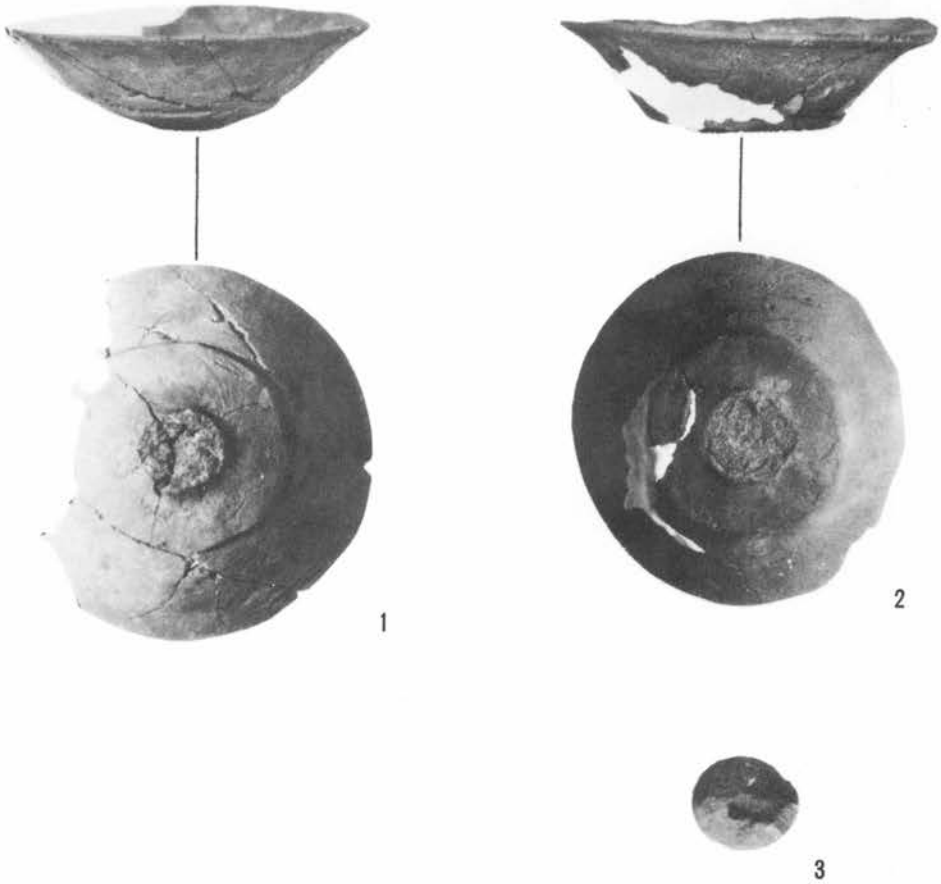
14

15

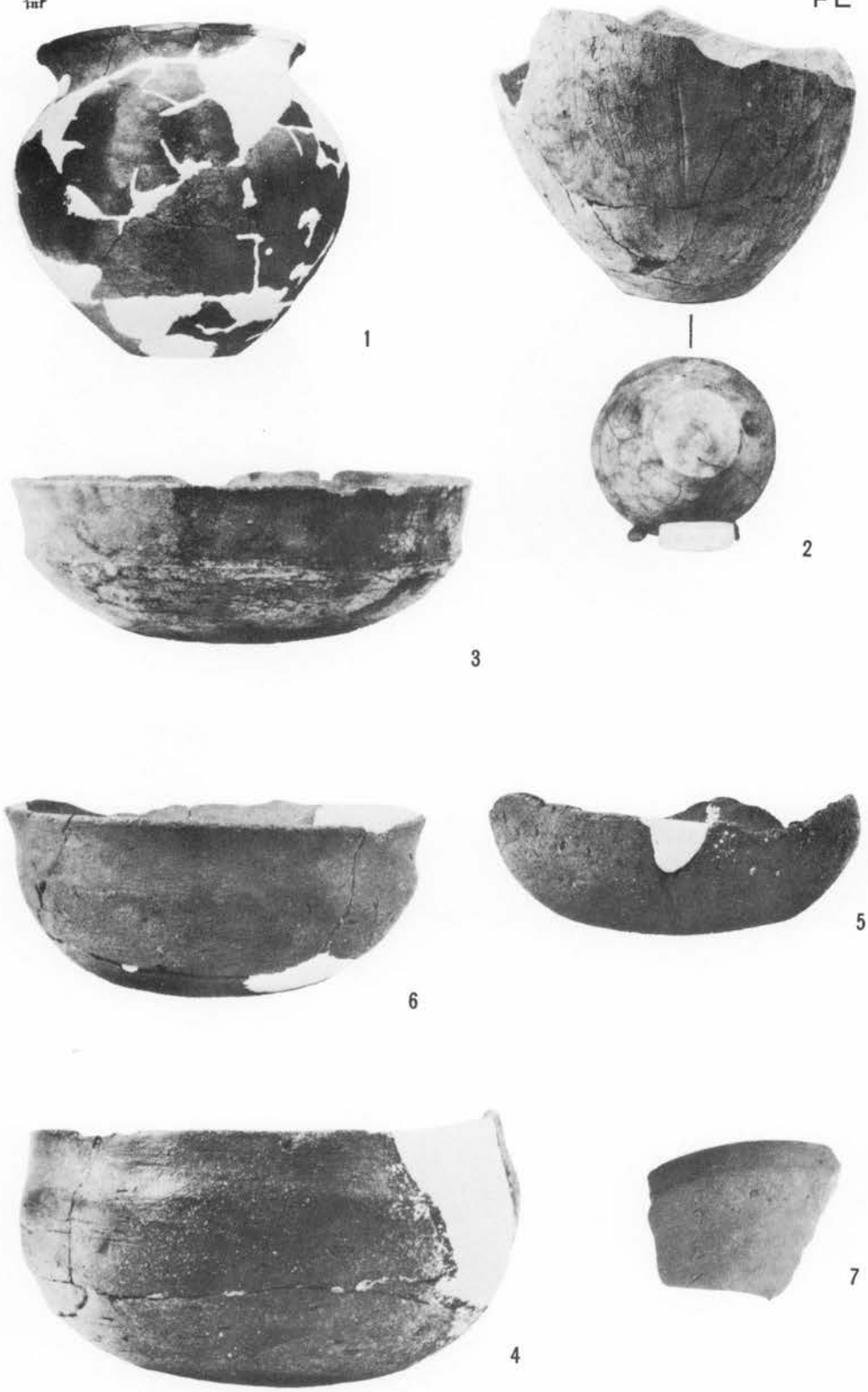
16

17

第５号住居址出土遺物（挿図37図）

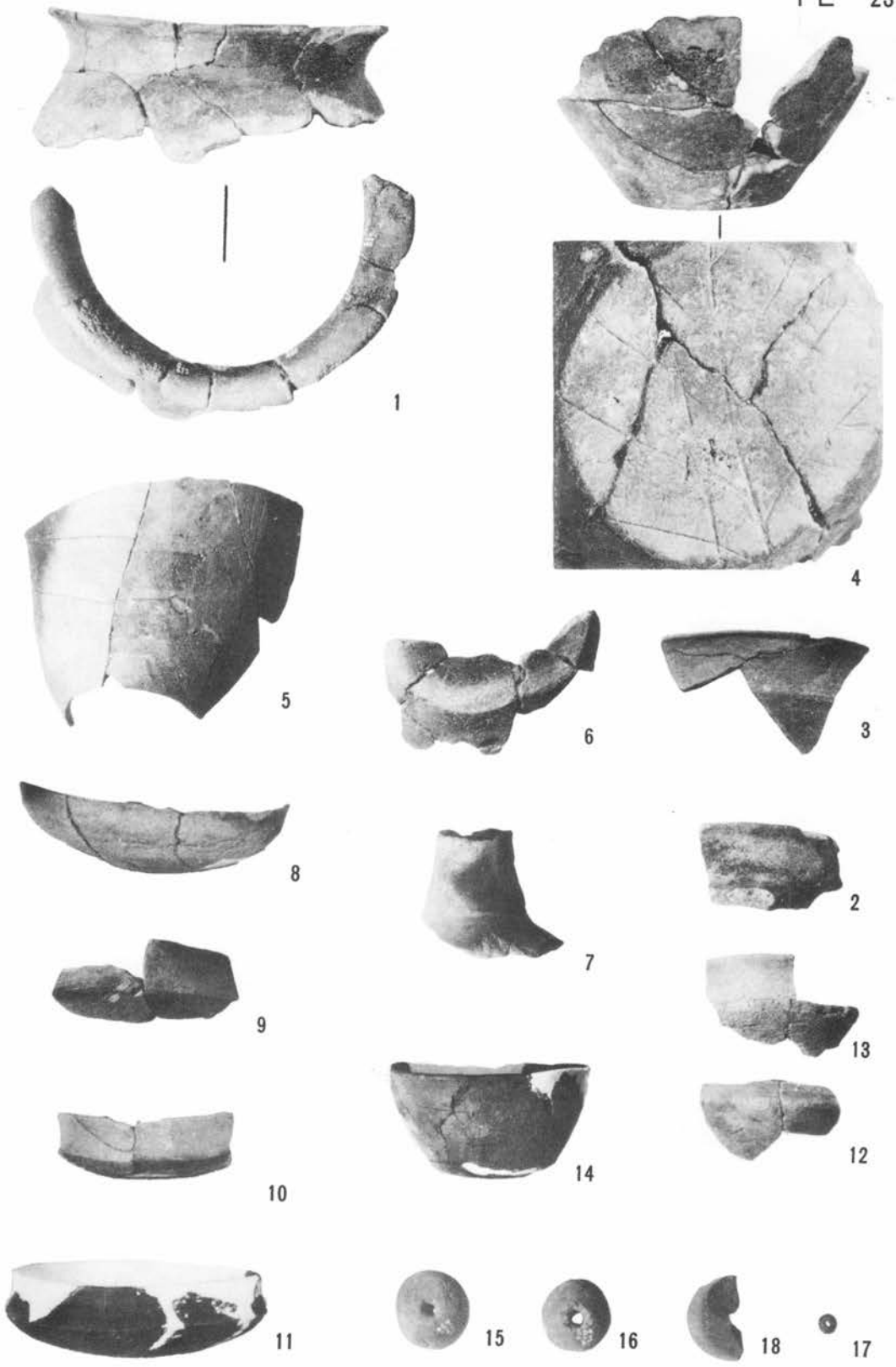


第６号住居址出土遺物（挿図40図）

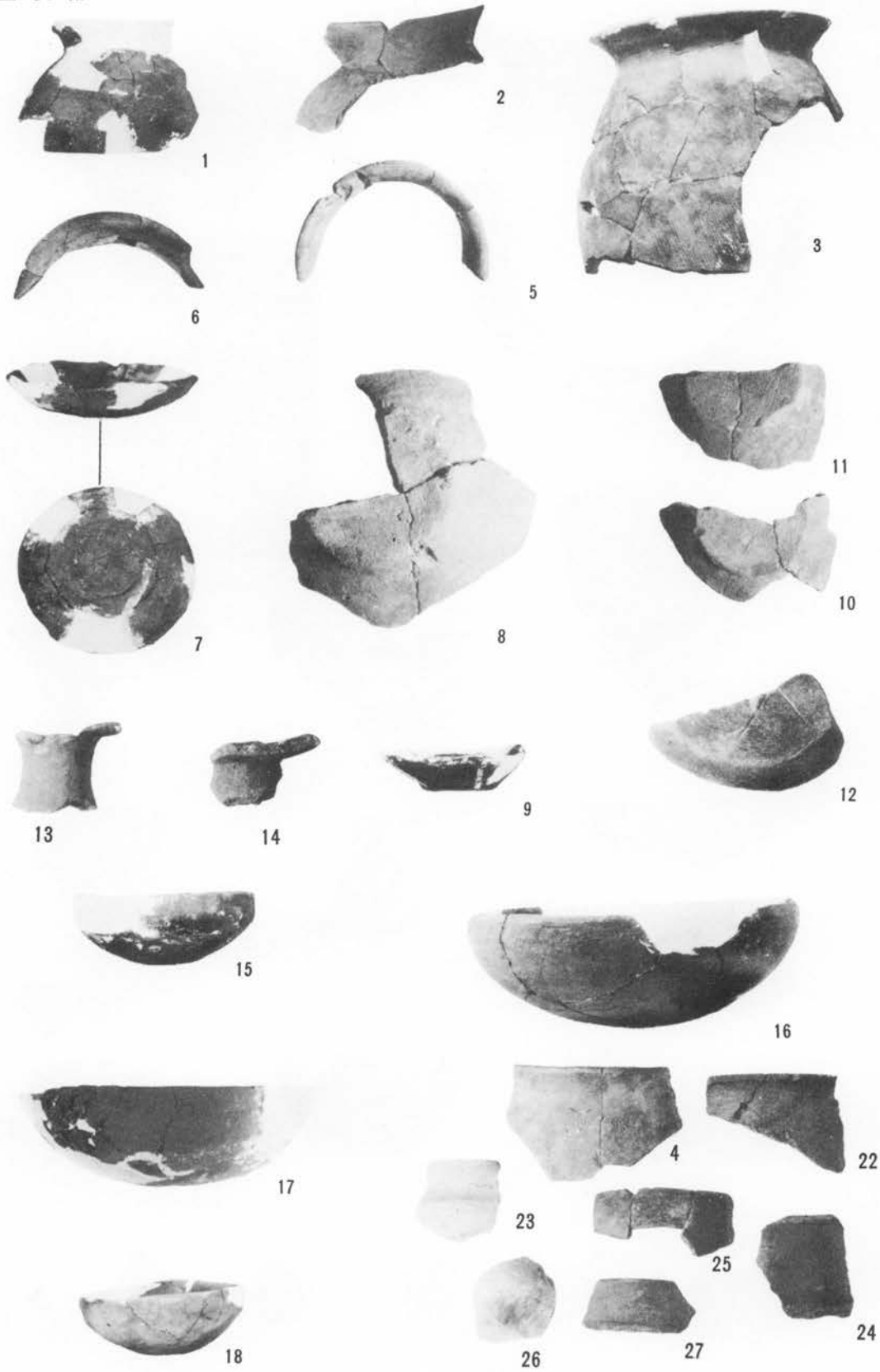


第７号住居址出土遺物（挿図17図）

土 製 品



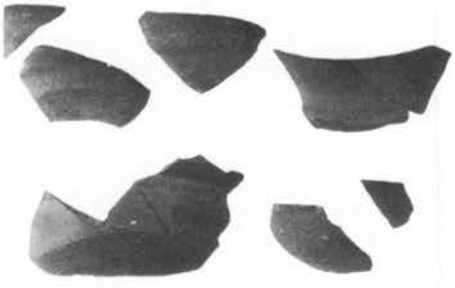
第８号住居址出土遺物（挿図43図）



第10号住居址出土遺物（挿図47図）

20

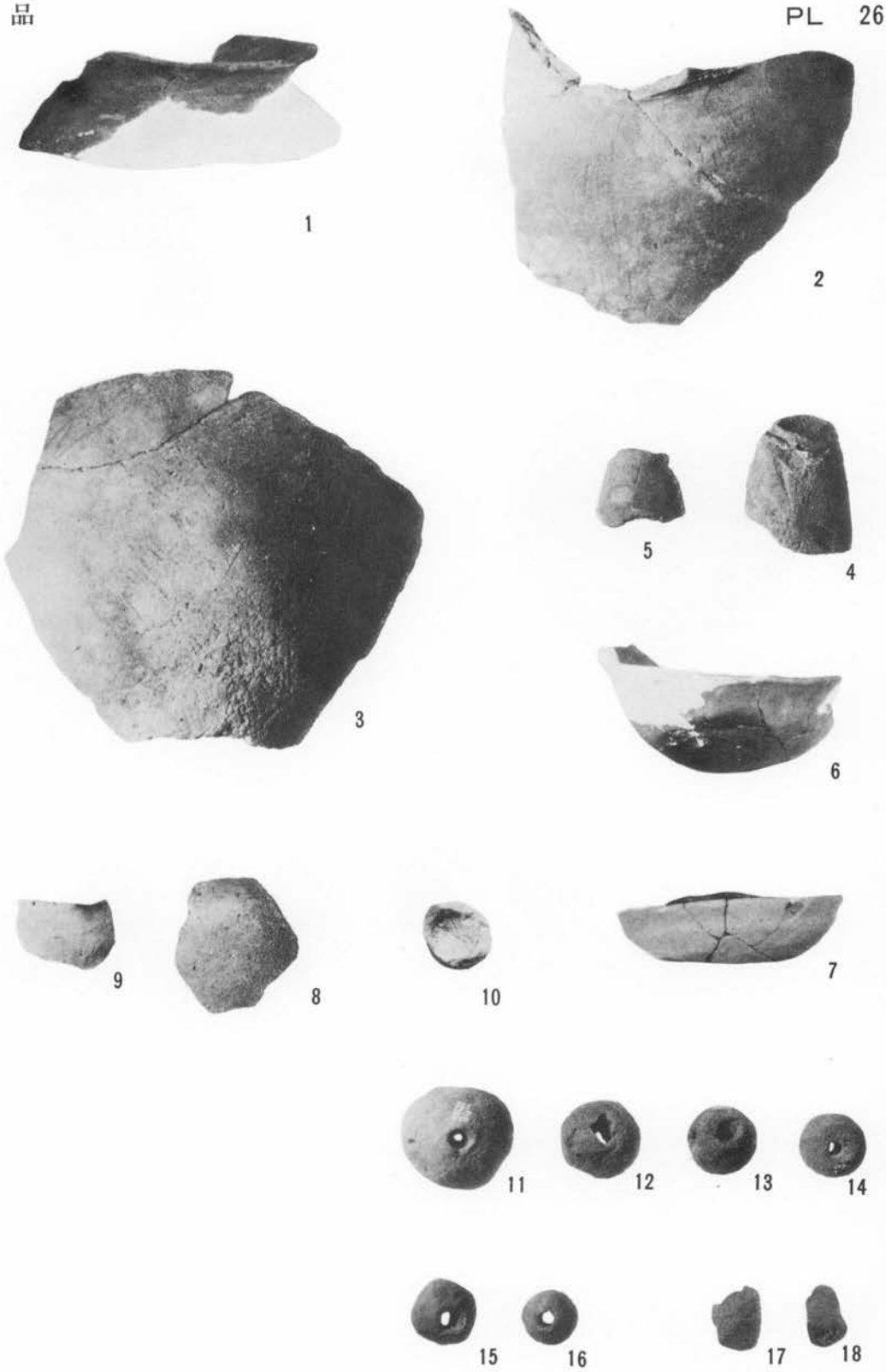
19



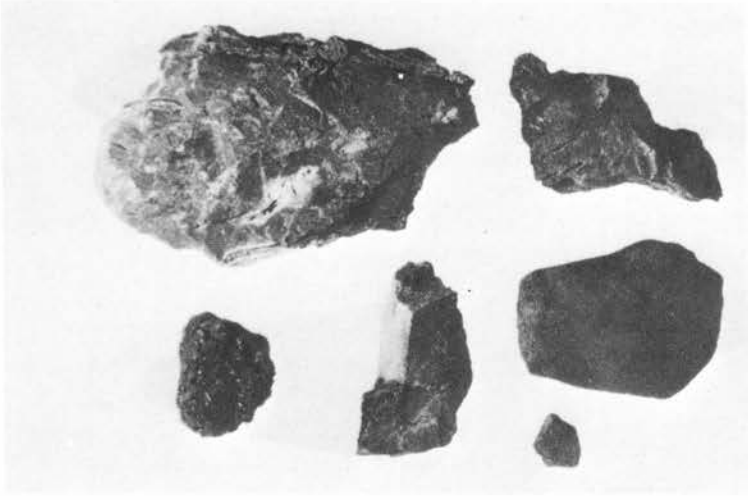
21

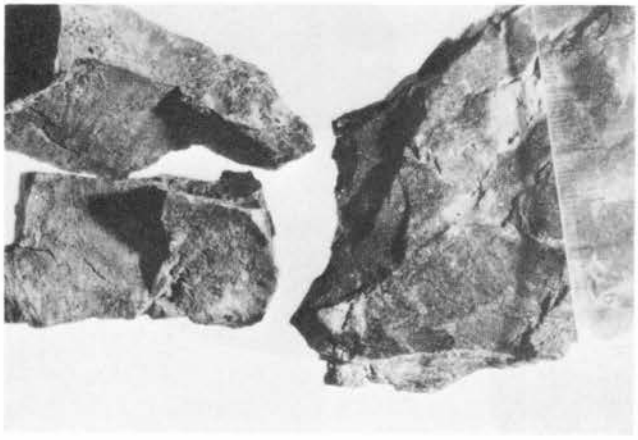
28　29　30　31　32　33

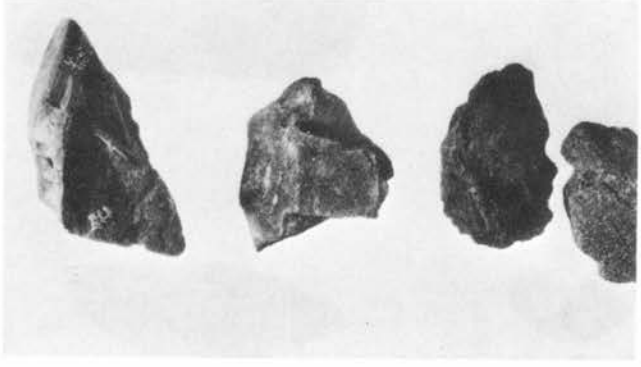
第10号住居址出土遺物（須恵器他）…（挿図47図）



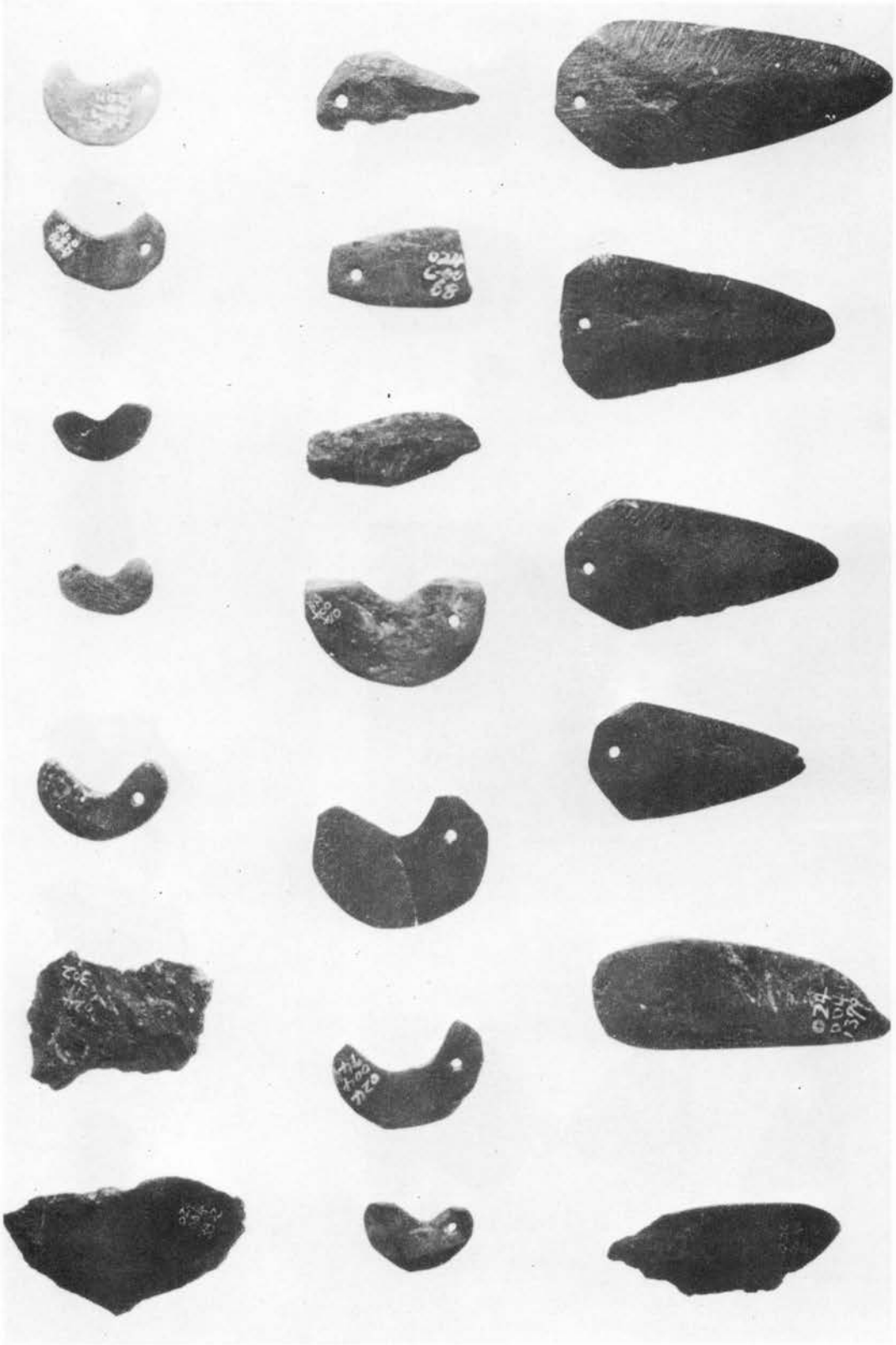
グリッド出土遺物（挿図50図）



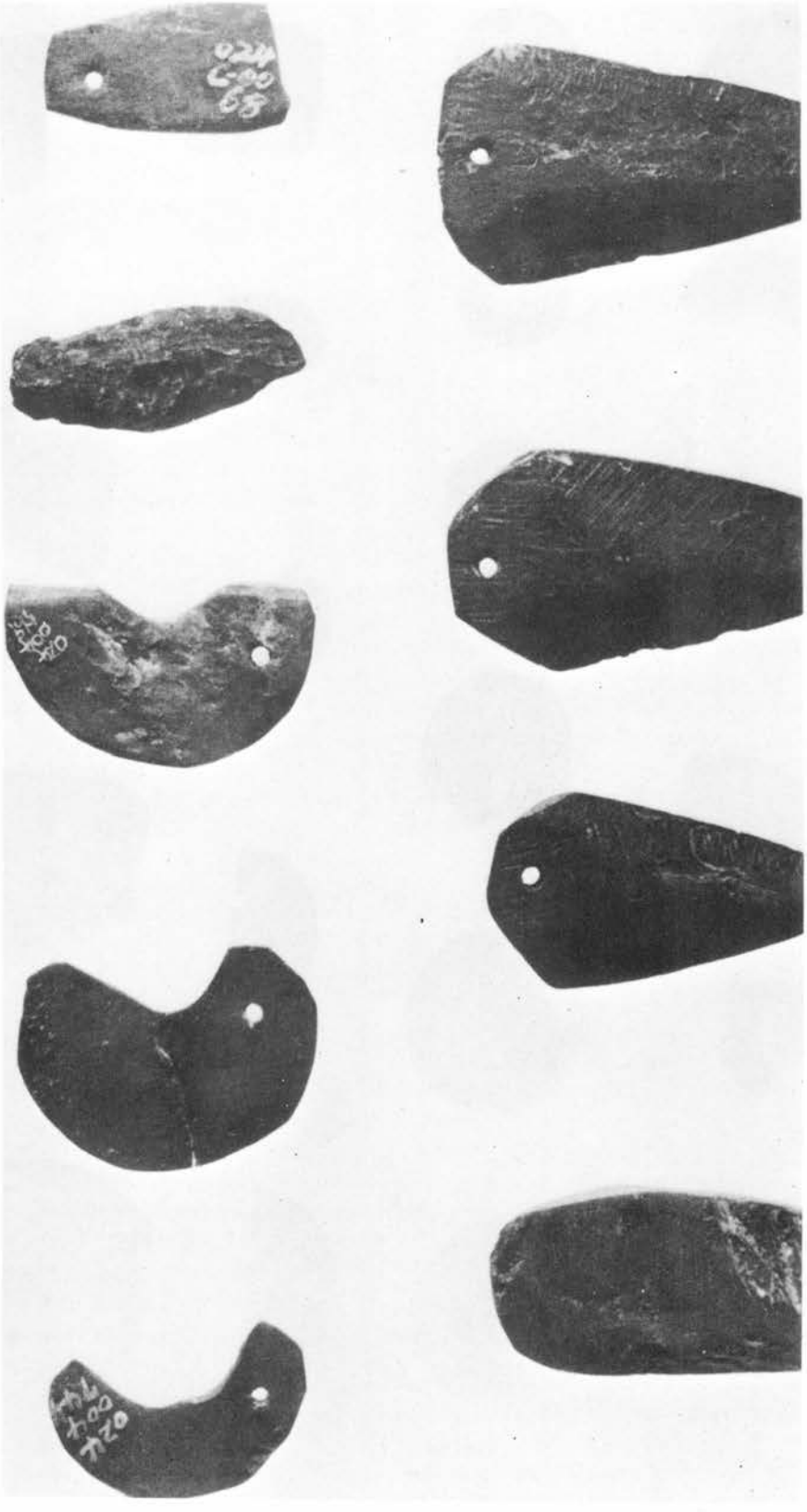




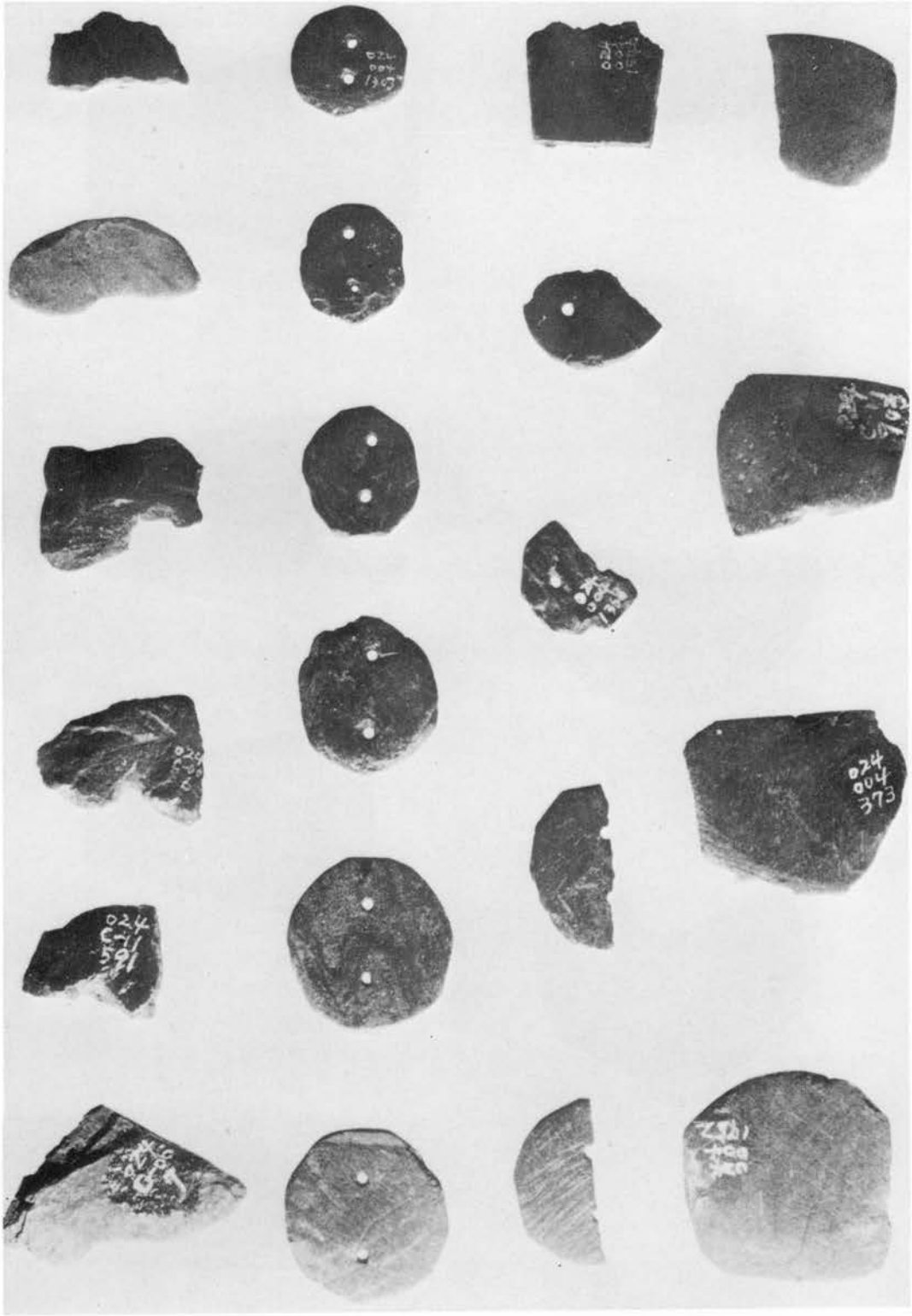
第４号址出土石材（緑泥石）…（挿図28図）



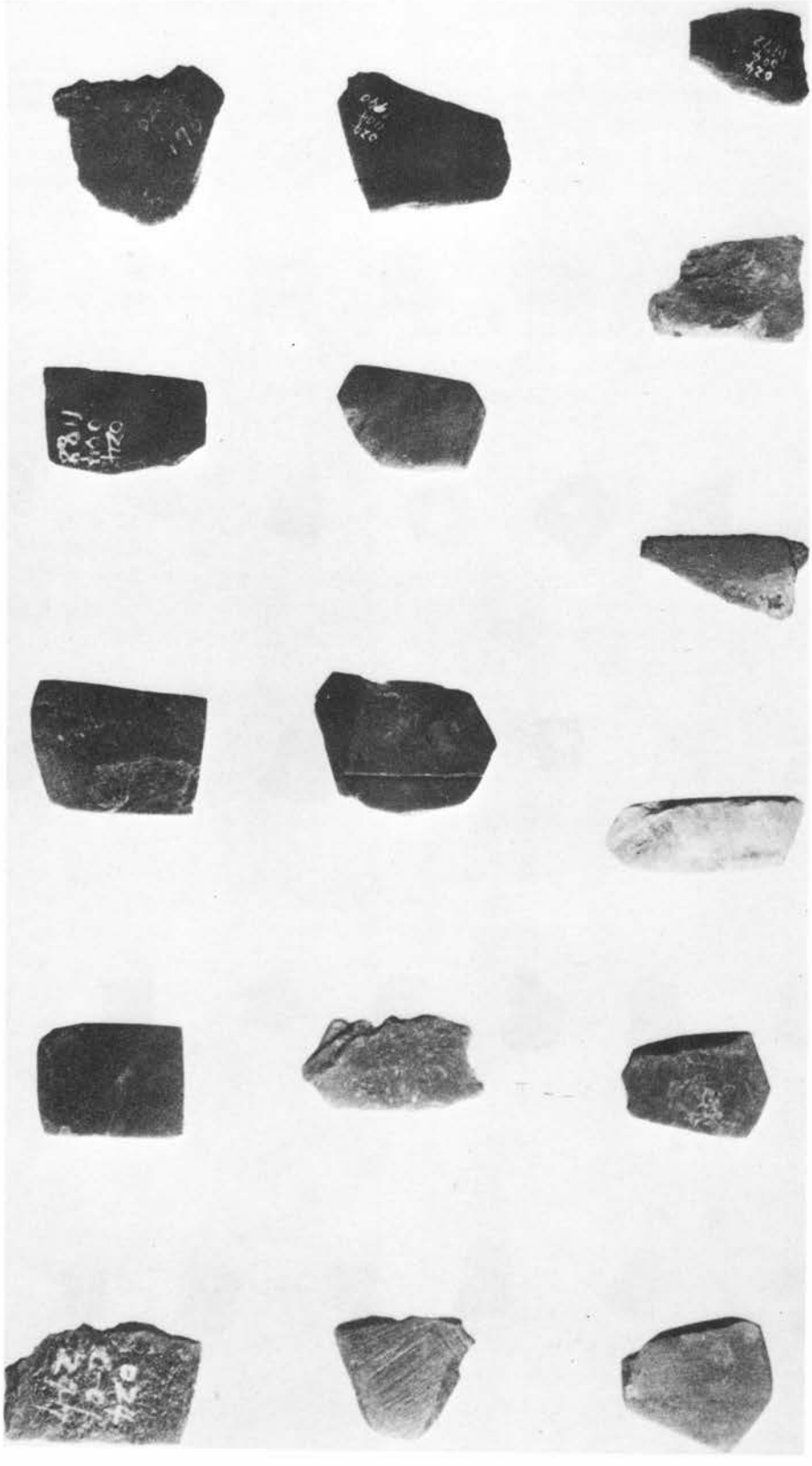
第 4 号址出土石製模造品・勾玉他（挿図28図）



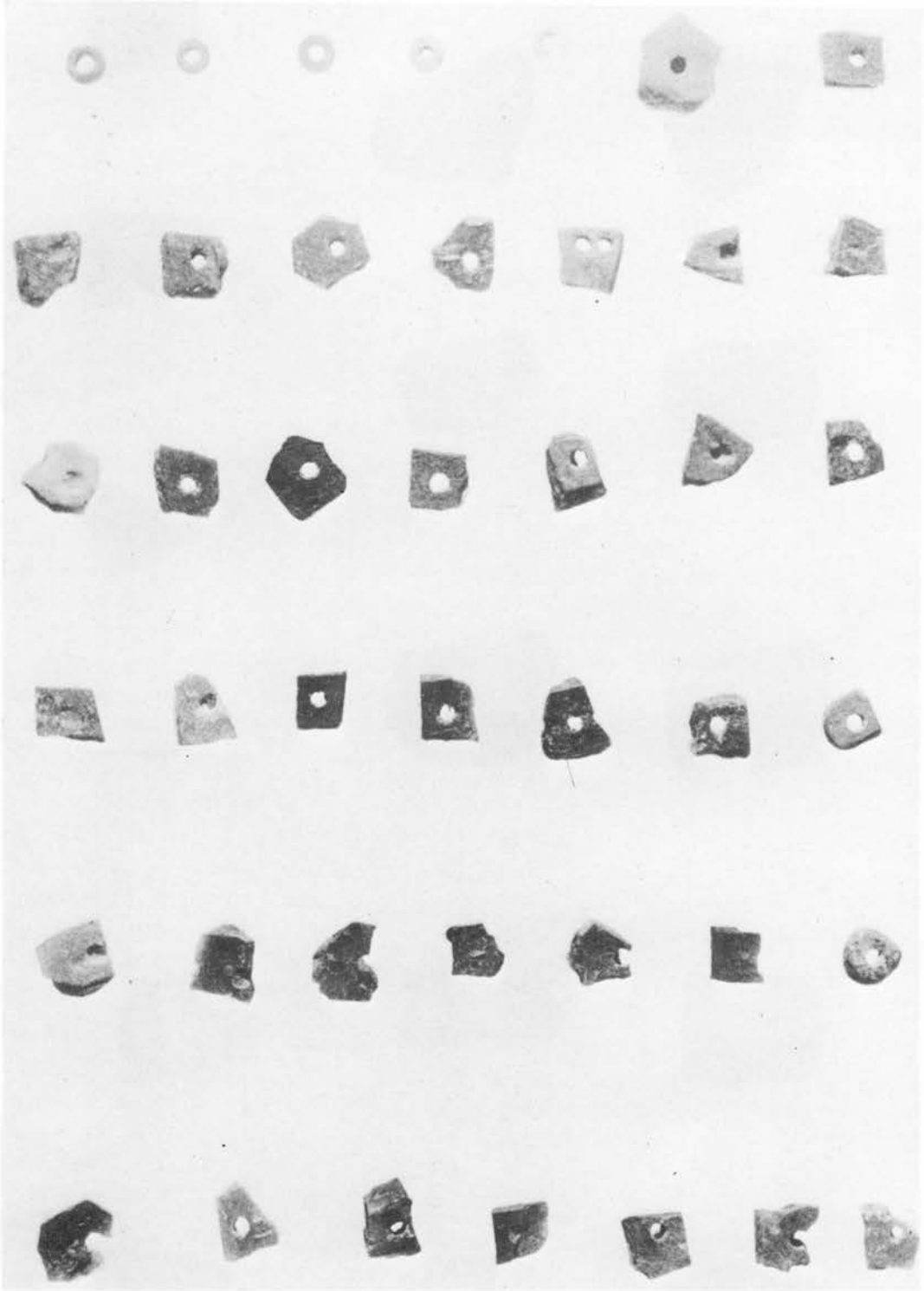
第４号址出土石製品拡大（挿図28図）



第 4 号址出土石製模造品（双孔円板他）…（挿図28図）

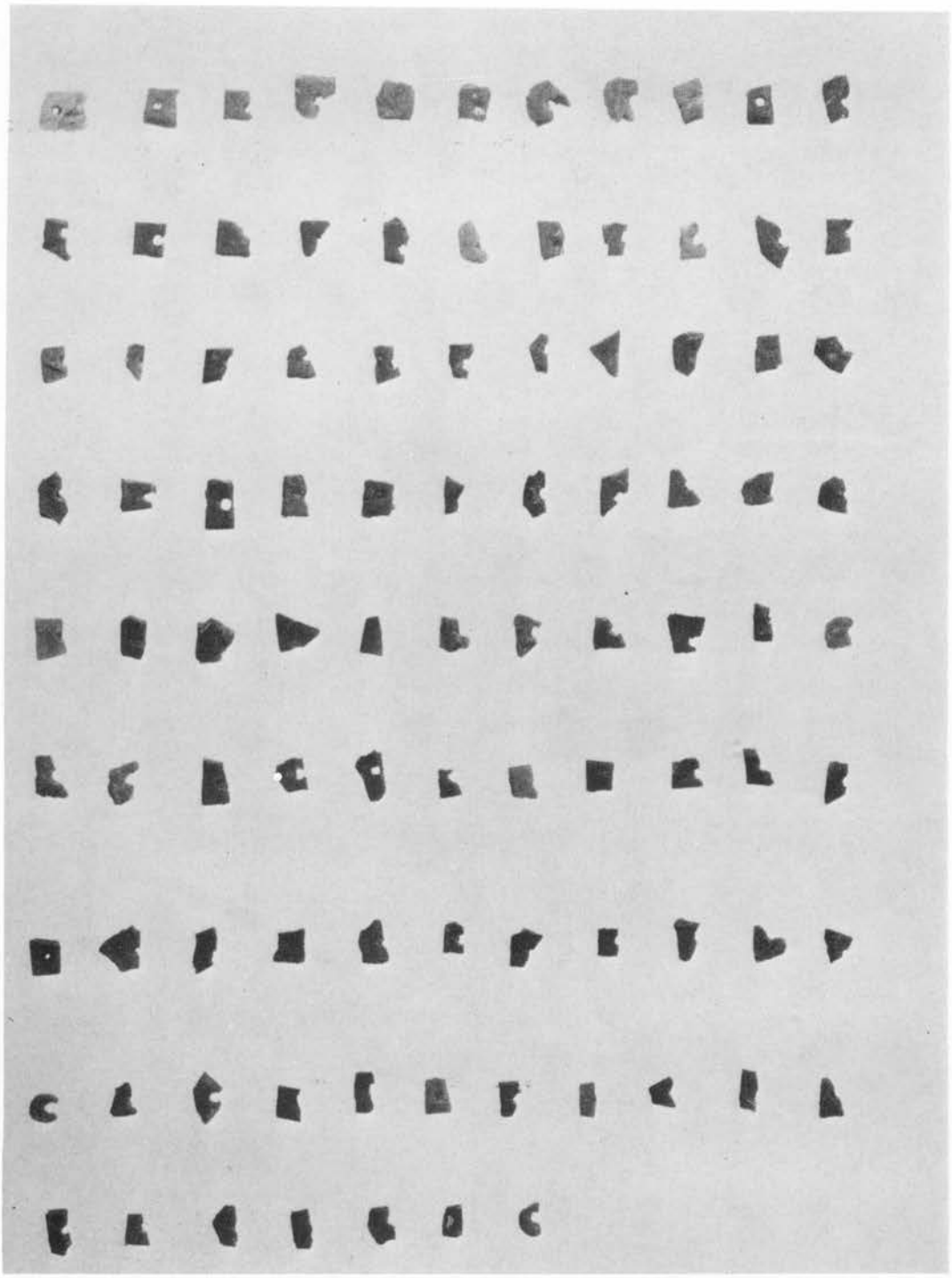


第４号址出土石製品（未成品）…（挿図28図）

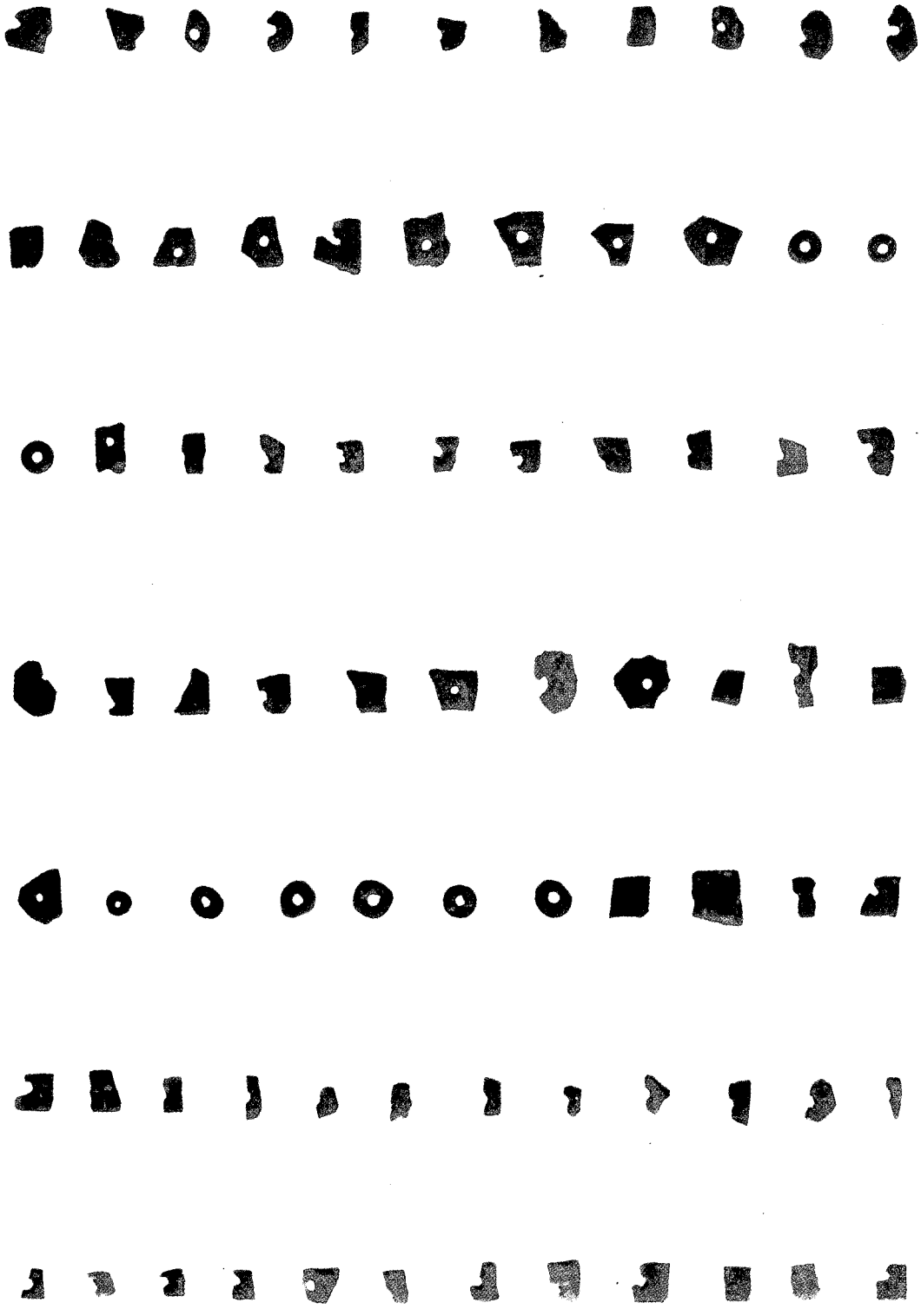


第４号址出土臼玉（完・未成品）（挿図30図）

第４号址出土臼玉（完・未成品）…（挿図30図）



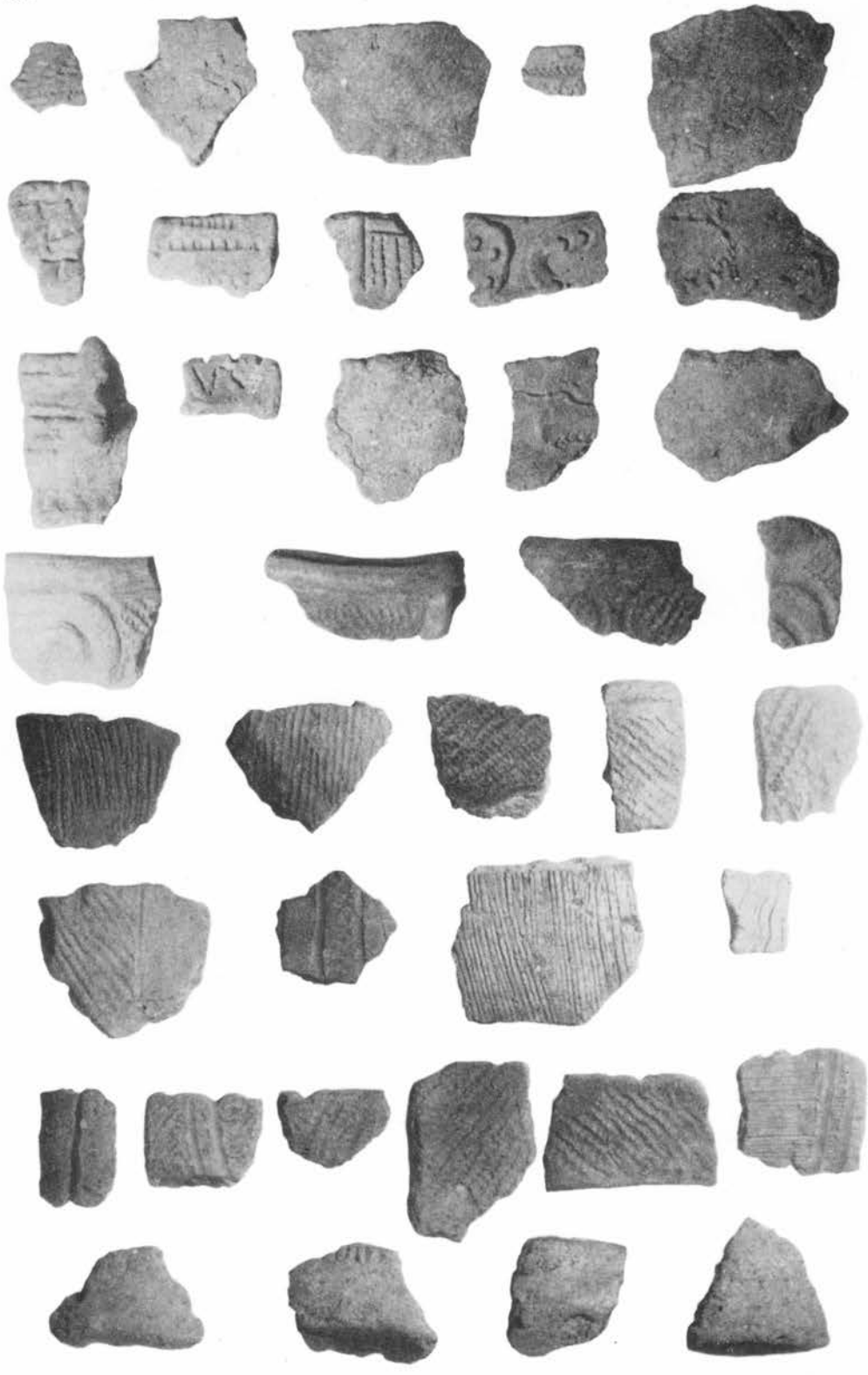
第４号址出土白玉（未成品）…（挿図31図）



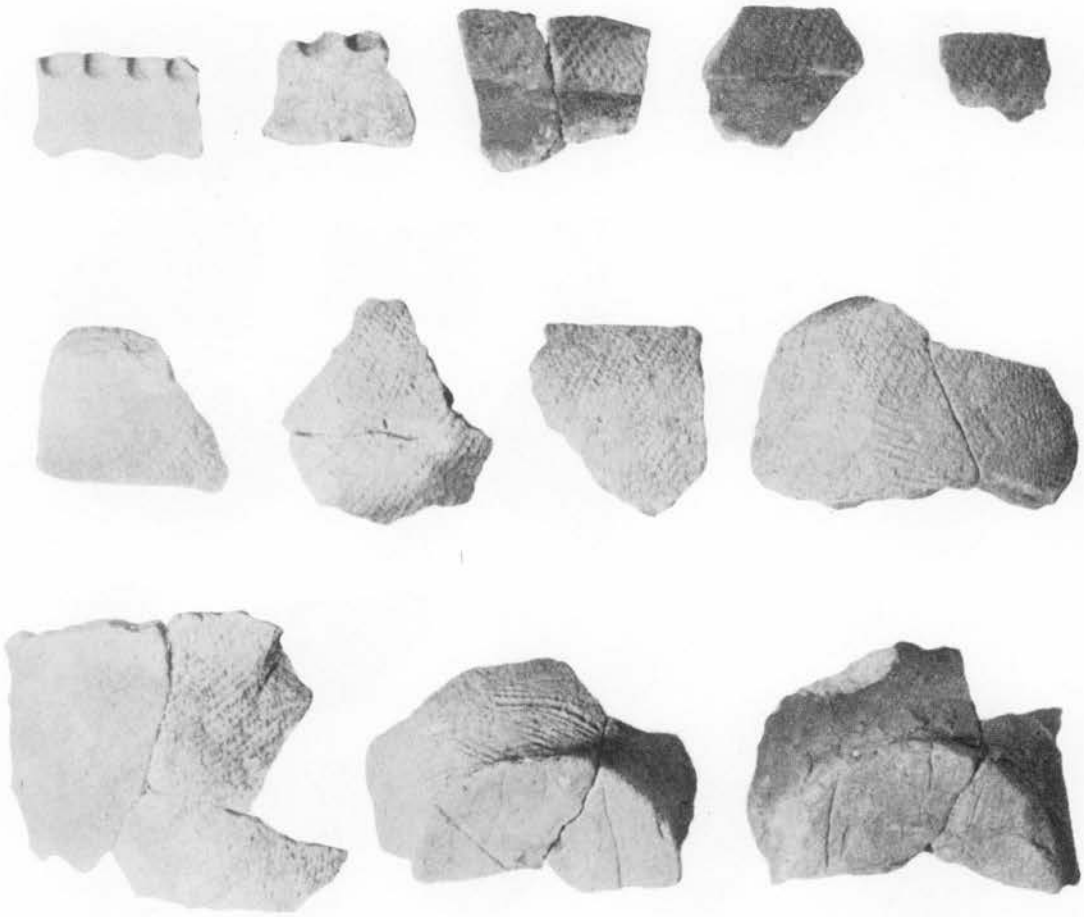
第４号址出土臼玉（完・未成品）…（挿図32図）

先土器時代石器他
E—21グリッド出土遺物（挿図55図）

土製品



グリッド出土縄文時代土器片
及び土器片錘（挿図56図）



（木葉痕のある底部）

グリッド出土弥生時代土器片（挿図57図）

寛永通宝

太平通宝（E—20出土）
（宋太宗AD976年初鋳）

（瓦　片）

1

2

（挿図6図）

第1号塚（007号塚）出土銅銭他（挿図6・7図）

(1)の裏面

(1)

嵌入のある残滓

（鋸）

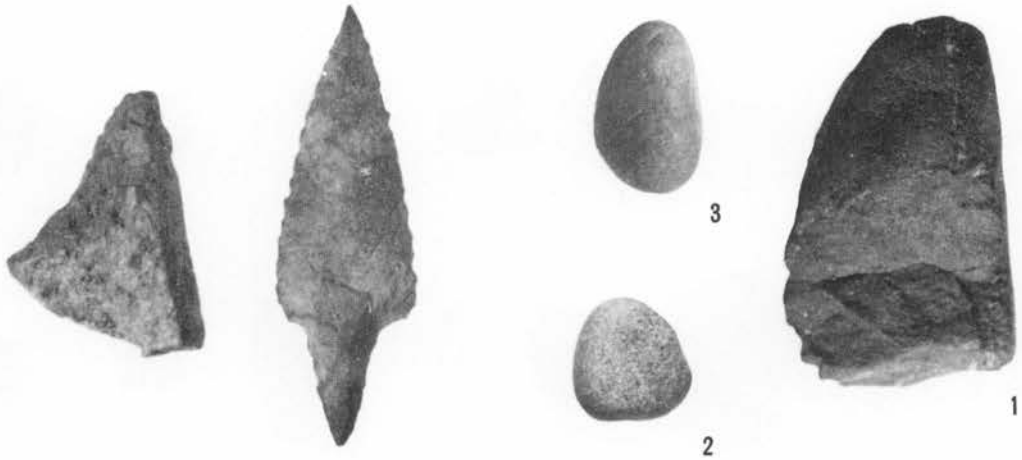
（鎌）

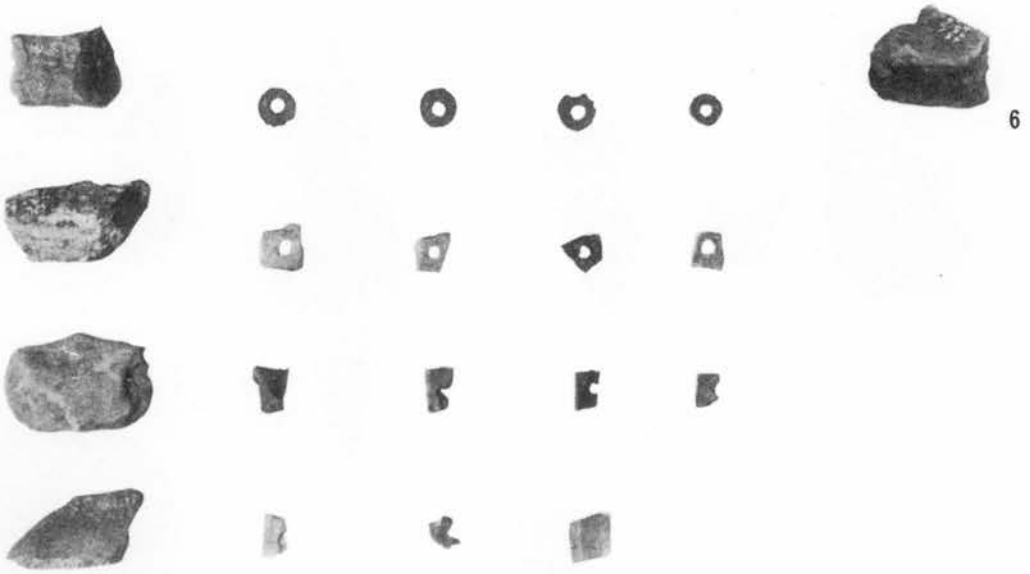
第４号址出土鉄製品（鎌・鋸他）…（挿図29図）

C 41－18
安山岩（銚子）

（緑泥石）

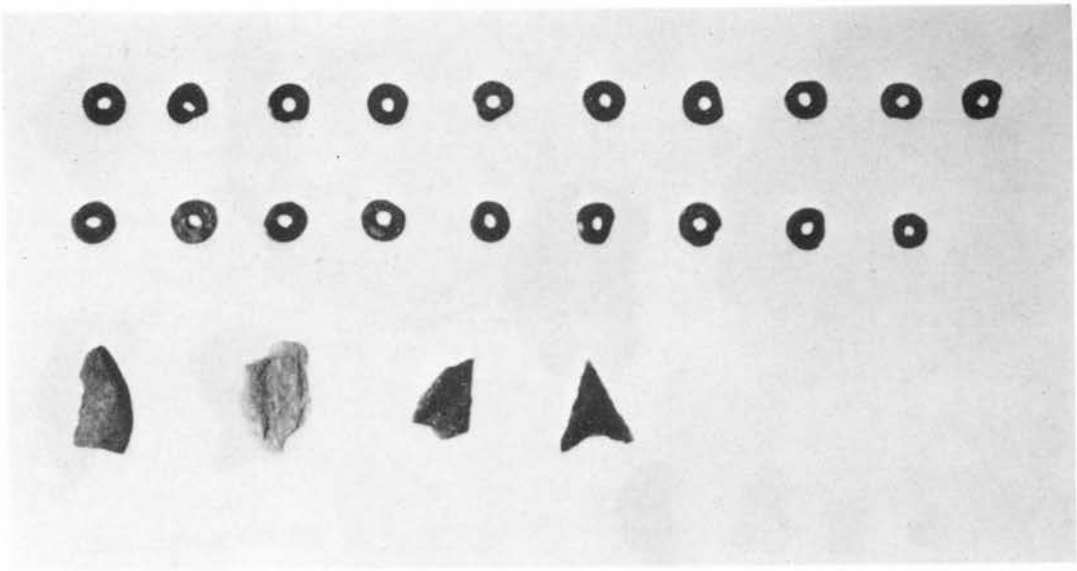
各グリッド出土遺物（双孔円板他）…（挿図51図）



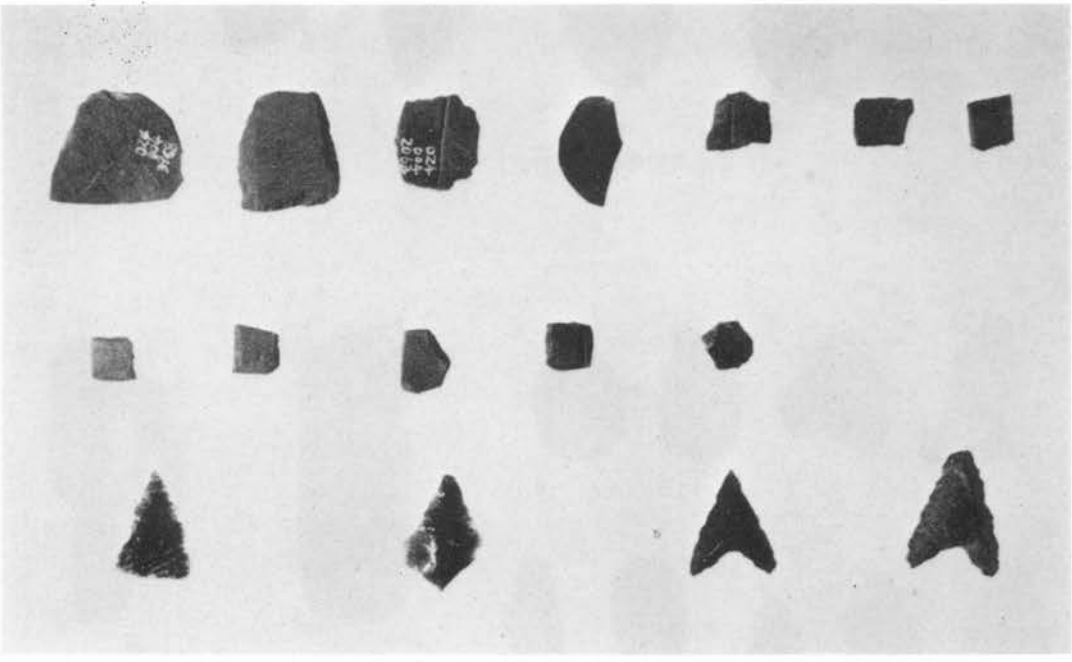


·(挿図51図)

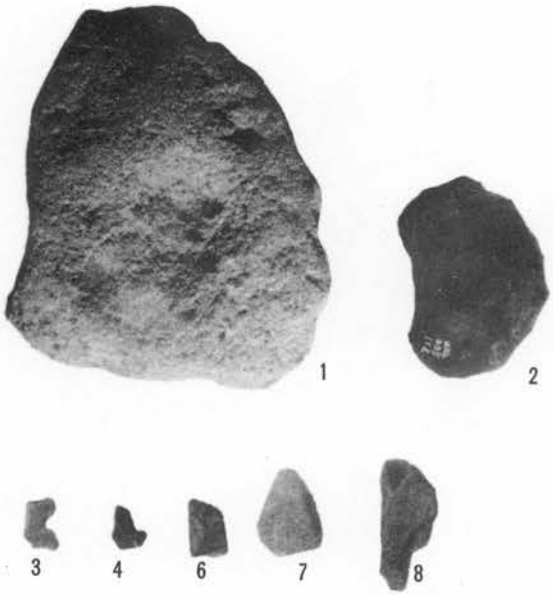
グリッド出土石製品（臼玉他）··



3号址出土臼玉他（挿図21図）



4号址出土臼玉未成品・石鏃他（挿図33図）

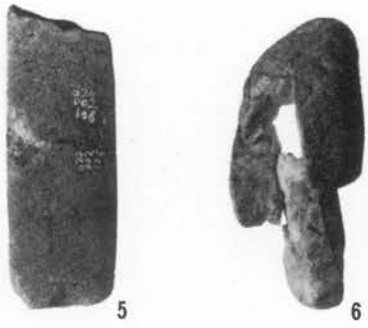


第 5 号住居址出土石製品（38図）

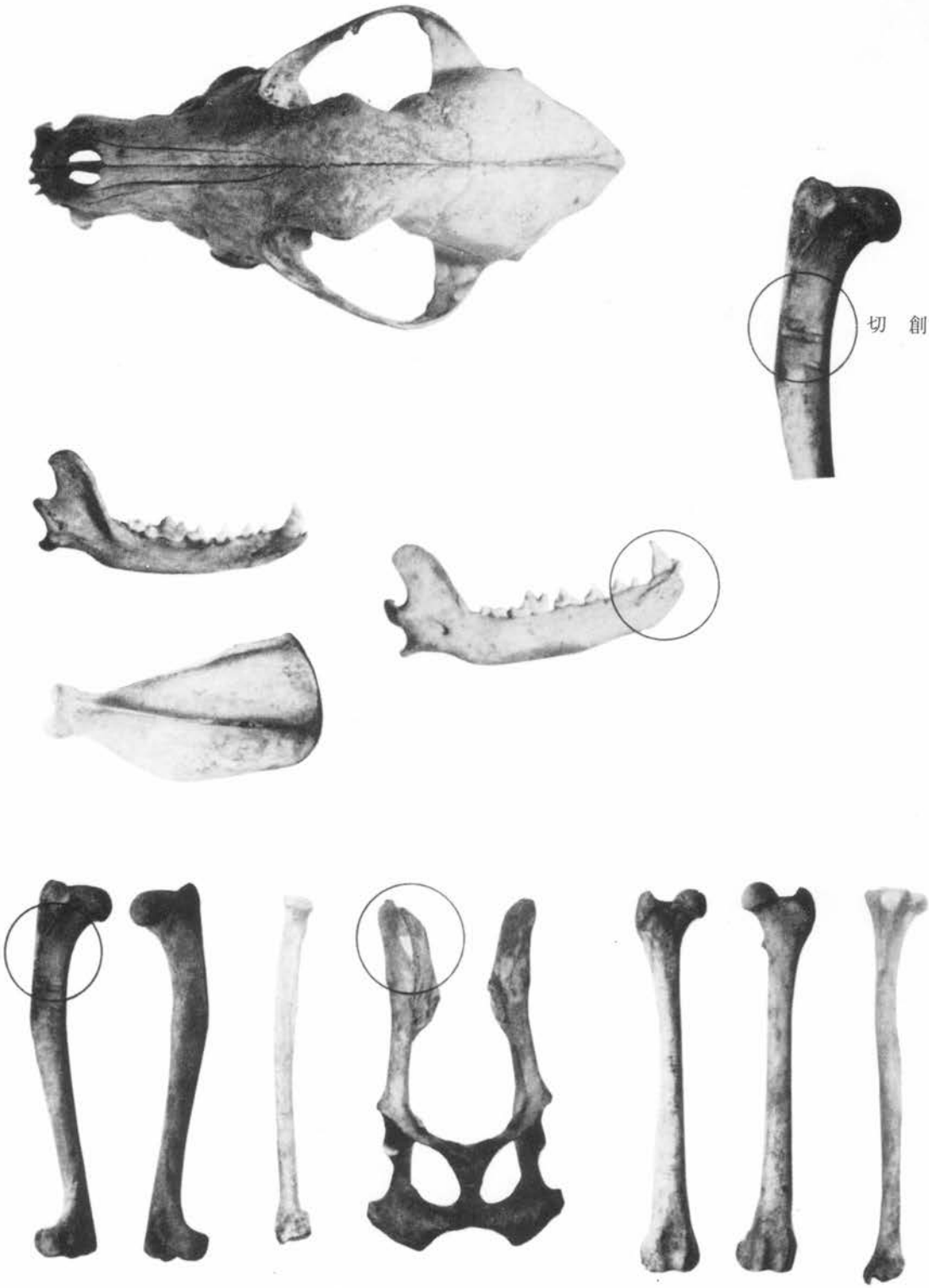
第10号住居址出土石製品
砥石他（48図）

第 8 号住居址出土石製品（44図）

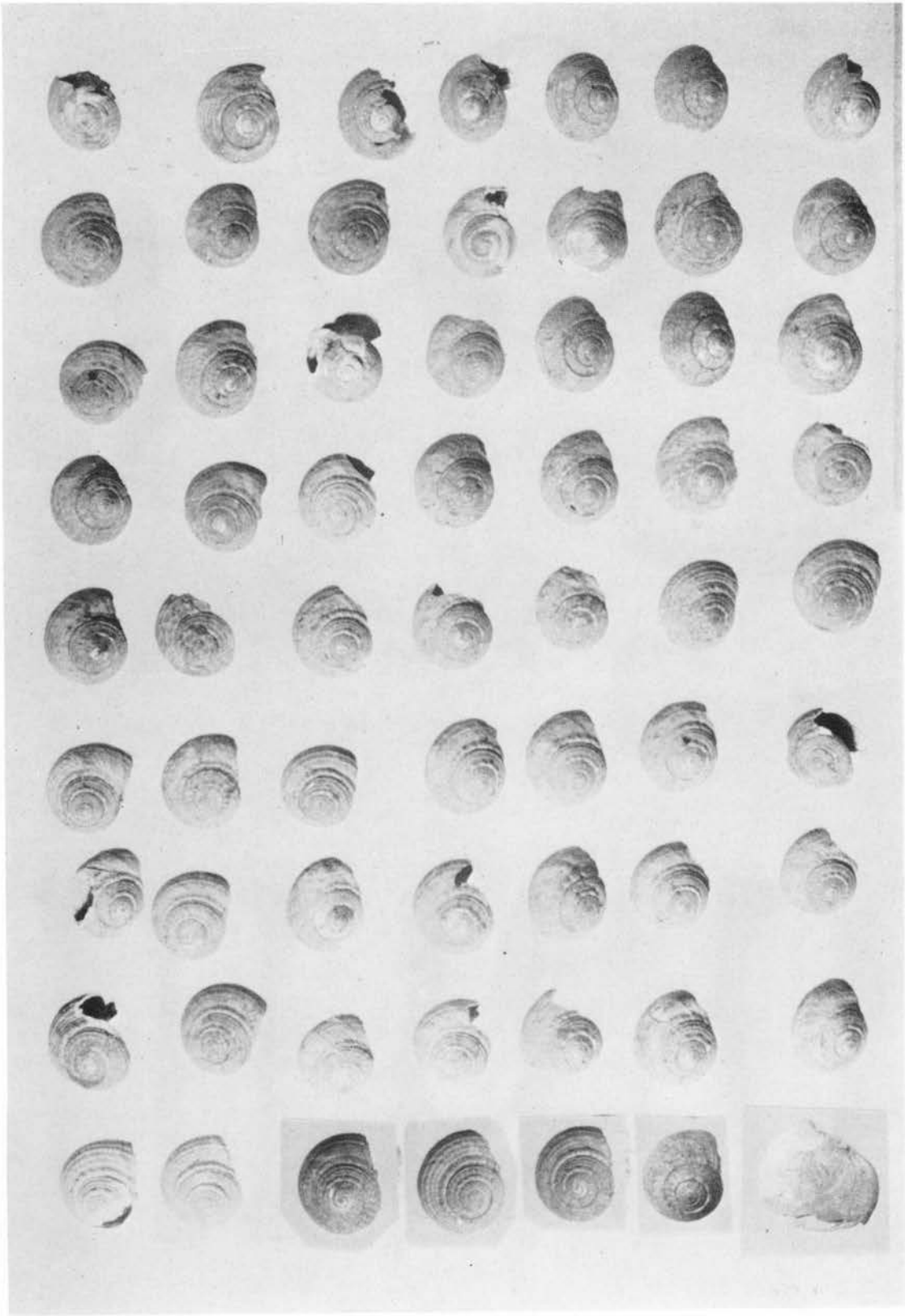
第 4 号住居址出土石製品（29図）



第 2 号住居址出土石製品
（16 図）



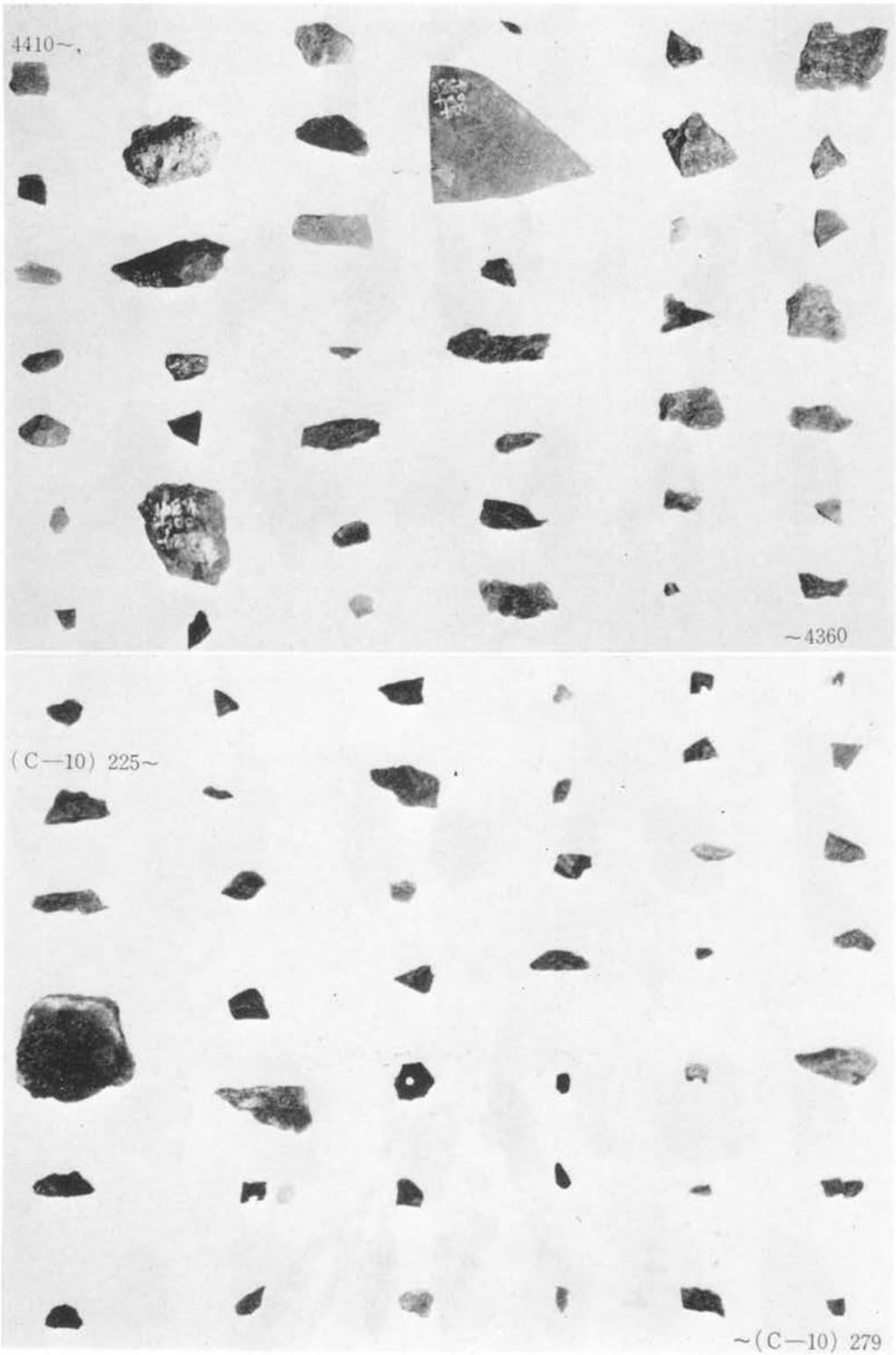
D－72グリッド出土犬骨



第２号・７号住居址検出貝類

（工房址）4号址出土遺物（緑泥片岩他）

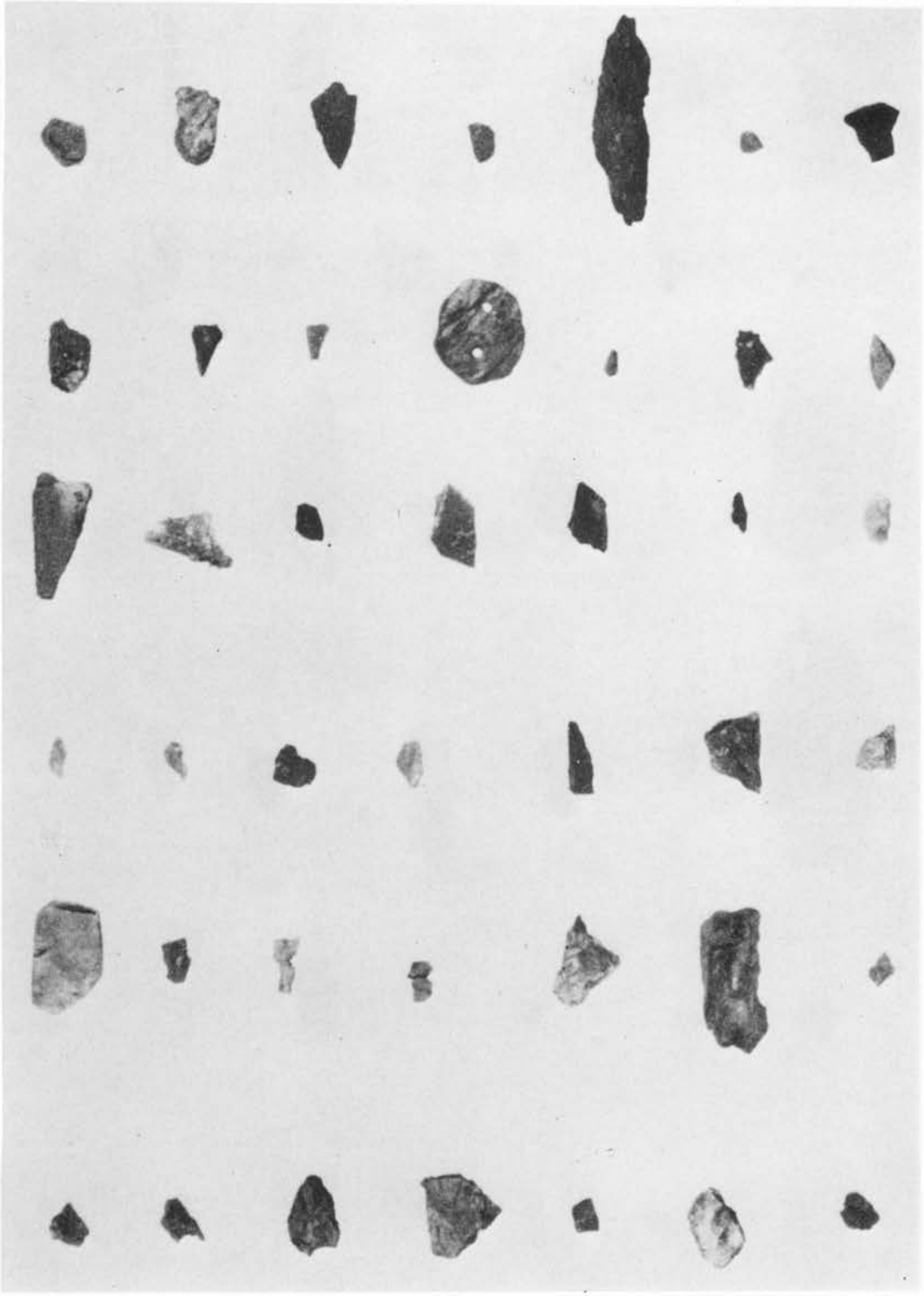
（工房址）4号址出土遺物（緑泥片岩他）



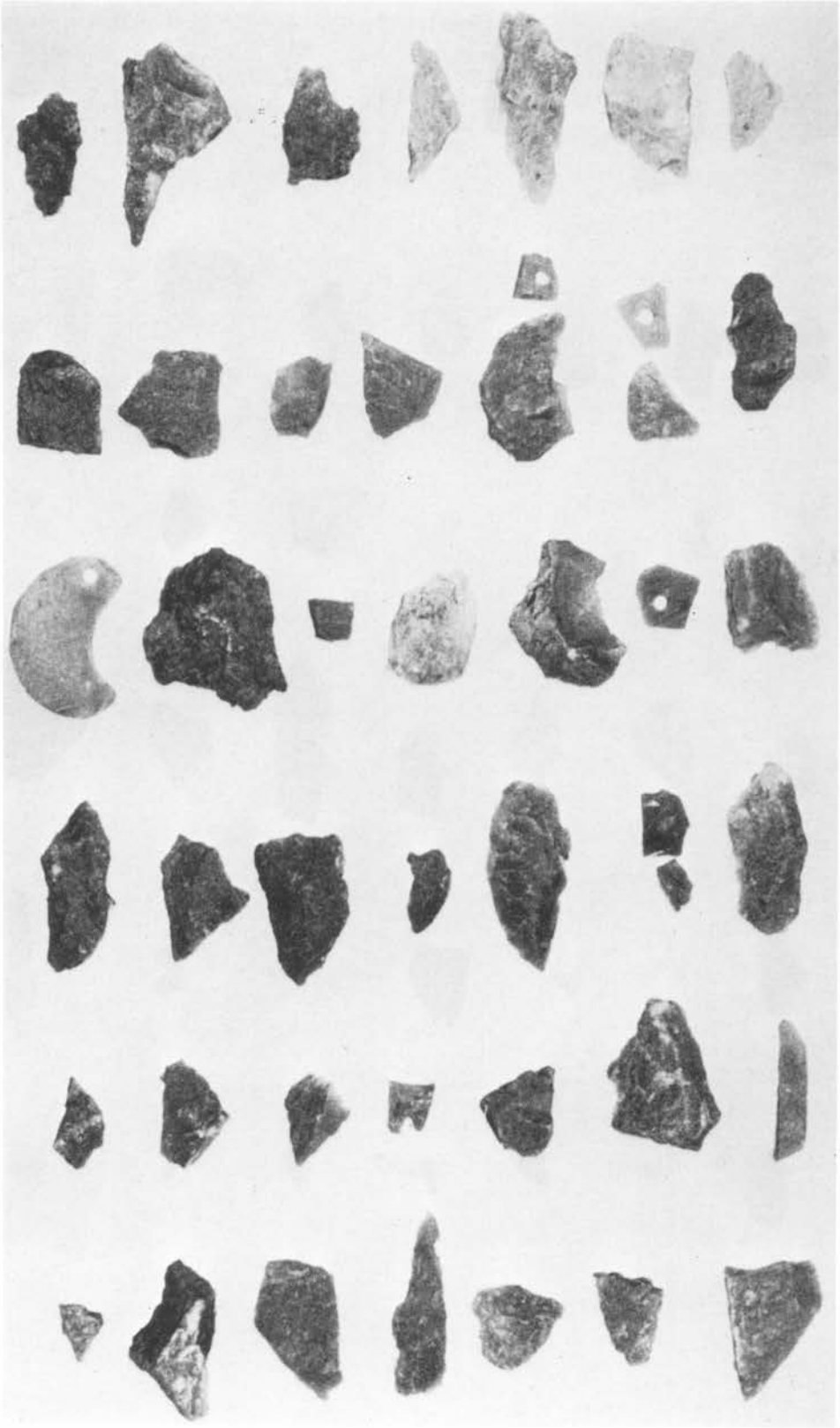
（工房址）4号址出土遺物

（工房址）4号址出土遺物（緑泥片岩）

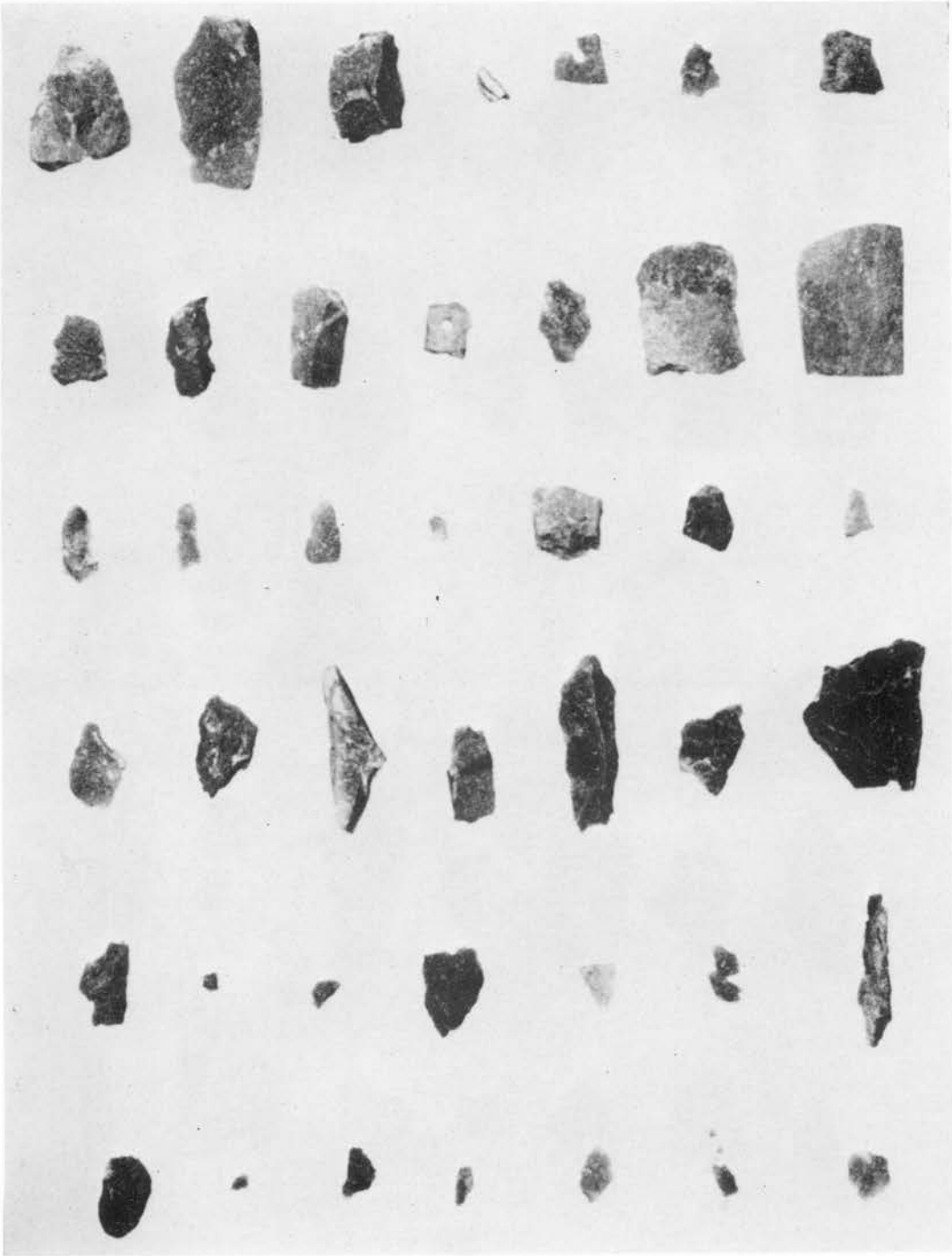
（工房址）4号址出土遺物（緑泥片石）



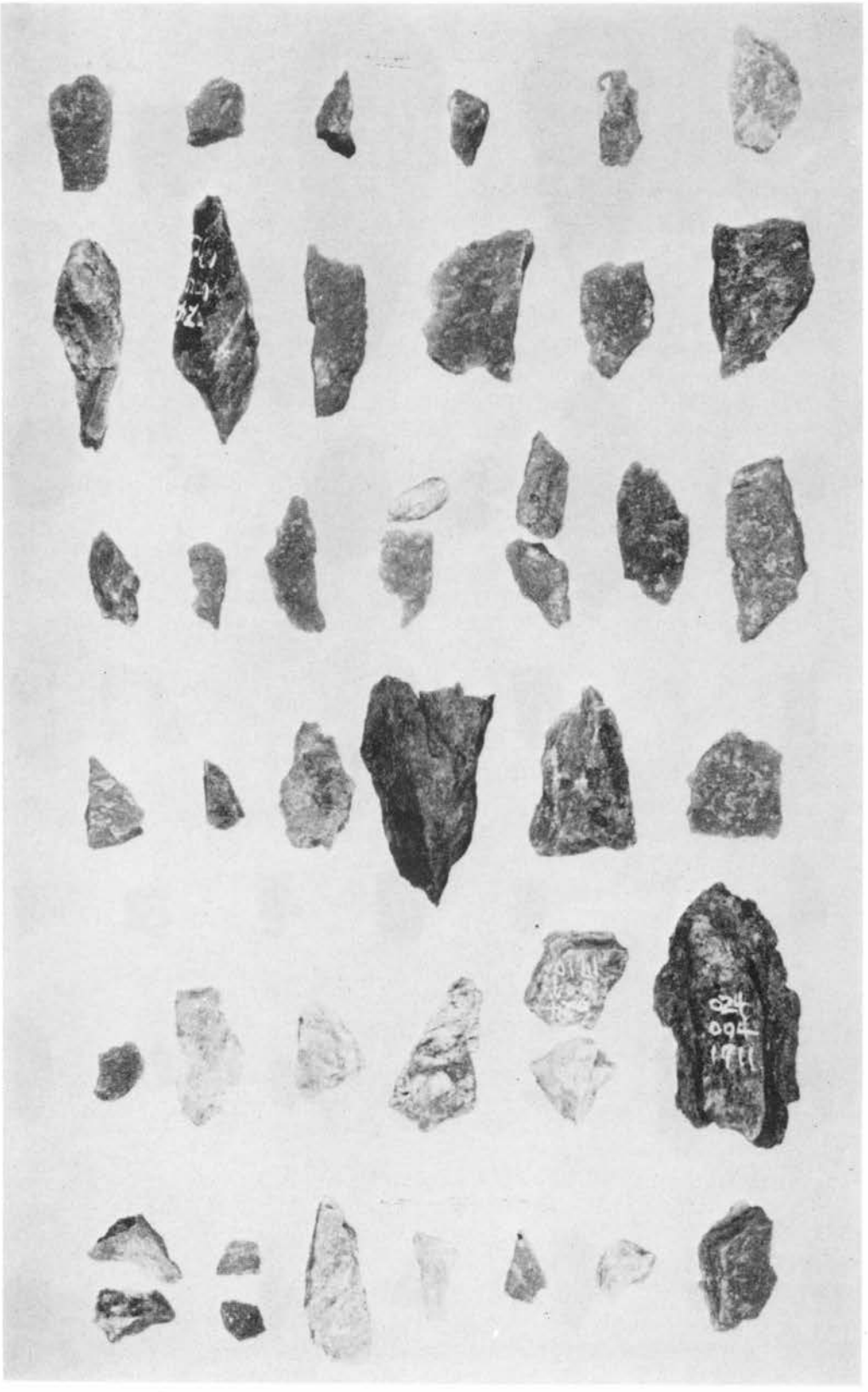
（工房址）4号址出土遺物（緑泥片岩）



（工房址）4号址出土遺物（緑泥片岩）

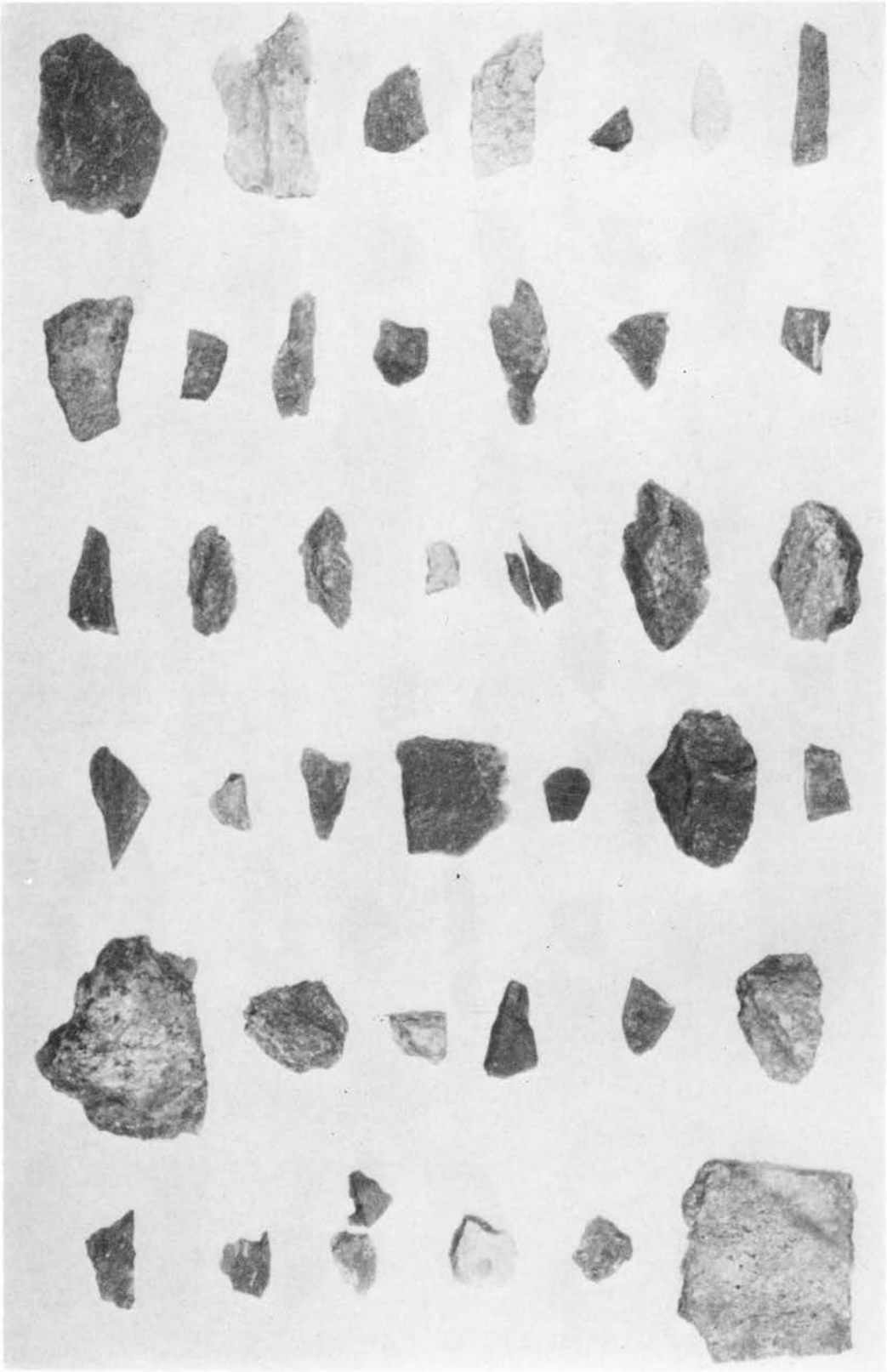


（工房址）4号址出土遺物



（工房址）4号址出土遺物（緑泥石）

（工房址）4号址出土遺物（石墨片岩他）



（工房址）4号址出土遺物（緑泥片岩）

（工房址）4号址出土遺物（緑泥石）

（工房址）4号址出土遺物（緑泥石）

（工房址）4号址出土遺物（緑泥片石）

千葉市東寺山戸張作遺跡

昭和52年３月31日　初版発行
昭和57年３月31日　２刷発行

発　行　者　財団法人　千葉県文化財センター
千葉市亥鼻１丁目３番13号
電話　千葉（0472)25－6478

印　刷　所　株式会社　文明堂印刷所
東京都北区中十条２-14-12